
対決！！天本博士対クラウン

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

対決！！天本博士対クラウン

【Nコード】

N6035B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

天本博士をどうかしてくれるようお願いされたクラウンの六人ところが狂気の人材博士は彼女達にも容赦なくその科学と狂気で対抗するのだった。華奈子達と博士の死闘篇です。

第一話

対決！！天本博士対クラウン

第一話 最初に

「皆さん」

コンサートを終えたクラウンの面々が塾に來ると早速今田先生が彼女達に明るい声をかけてきた。見ればその笑顔も実に明るい。

「コンサートお疲れ様でした」

「はい」

六人はそれに笑顔で応える。笑顔だが何気に事情はわかっていた。「それでお疲れだとは思いますが」

（来たわね）

六人は先生のその言葉を聞いて來た、と思った。だがそれはあえて口には出さない。あくまで黙って聞いている。

「先生はあることを皆さんにお願いしたいです」

「それは何ですか？」

予定調和である。梨花が手を挙げて尋ねてきた。

「はい、実はですね」

先生はにこにことしたまま述べる。

「最近街に困った人が出ています」

「困った人！？」

「そうです。天本破天荒という人ですが」

（やっぱり）

（その博士となのね）

六人は心の中で思った。しかしやはりと言うべきかそれは決して口には出さない。心で思うだけであった。

「その人を止めて欲しいのです」

「その人ってどんな人ですか？」

「科学者です」

先生は今度は華奈子の質問に答えてきた。

「科学者!？」

「そうですね、街の科学者です。博士と呼ばれています」

それだけで随分怪しい印象を受ける。実際に怪しいどころか危険極まりない人物なのでこの言葉は当たっていた。世の中悪いこと程よく当たるのである。

「その人を止めて欲しいのですが」

「任せて下さい」

赤音が名乗り出てきた。

「どんな人かはまだわからないですけどね」

「私達六人いればね」

美樹がそれに続く。

「誰だつて」

「そうですね。ですから先生」

美奈子が先生に対して言う。

「任せて下さい」

「やってみせます」

いつもは大人しい春奈も名乗り出る。六人が揃った。

「いいのですね？」

「勿論！」

華奈子が言う。

「やりますから」

そしてリーダーの梨花が。彼女達はやる気であった。

「わかりました」

先生はそれを聞いて満足そうに頷いた。

「では今度は先生も見守りますね。頑張ってください」

「えっ」

「先生まで」

ここで先生がフォローに回ると言ってきたのは六人は予想していなかった。若しかすると相手は。彼女達の心の中に一抹の不安がよ

ぎるのであった。

第一話 完

2007・1・15

第二話

第二話 マッドサイエンティスト

再び

博士は毎日相変わらず滅茶苦茶な研究を続けている。今度は得体の知れないマシンを作っている。

「今度はな」

「今度は何ですか？」

「車椅子をな」

「ええ」

話を聞くのは小田切君である。彼も実に付き合いがいい。

「変形できるようにしてみたぞ」

「変形、ですか」

「左様、巨大な歩行兵器にな。どうじゃ」

「それで何をするんですか？」

「何をもって決まっておるじやろう」

博士はしれっとして述べる。

「世界にわしの偉大さを教えてやるのじゃ」

「そうですね」

何か話を聞くだけで頭が痛くなる。うんざりするのではなく辟易してくる。本当に滅茶苦茶な話だと思いがそれで彼の助手をしているのである。

「他にもな」

「ええ」

「人型になって空を飛んだり巨大バイクになったりするぞ」

「どうやってなるんですか？それ」

「だから変形してじゃ」

「いえ、変形でも」

小田切君にはどういいう原理なのかわかりかねてきた。それでつい

問う。

「あの車椅子ですよね」

「左様」

小田切君が指差したのは博士がいつも乗っている車椅子である。

それはもう言うまでもなかった。

「見てわかるじゃろう」

「わかるじゃろうっていうより」

小田切君は言う。

「あれがどうやってそんなふうに変形するんですか？唯でさえ訳のわからない武装になっていますし」

「わしは天才じゃぞ」

またしても言う。

「天才の開発したものだじゃ。何とでもなるわ」

「そうなんですか」

「そうじゃ」

思いきり言い切ってきた。有無を言わせない。

「まあそれで今度来る連中を退けてやるわ。カードもあるしな」

「何かそれで自衛隊でもやっつけるんですか？」

「つついそう言いたくなつた。実際に言つた。」

「いや、今度の相手の為のものじゃ」

「そうなんですか。てつきりオル ノでも相手にするののかと思
いましたよ」

「馬鹿を言え」

博士はそれを否定する。

「そんなのはあっさり全滅させてやれるわい」

「ですか」

「さて、来るがいい」

そこまで言つてまた宣言する。

「誰が来ようとも。一人残らずわしの偉大な発明の前にひれ伏させ
てやる」

「やれやれ」

博士は相変わらずであった。「ついでにクラウンと博士の戦いの幕が開くのであった。」

第二話 完

2007・1・15

第三話

第三話 打ち合わせ

華奈子と美奈子は自宅で打ち合わせをしていた。テーマは当然その博士のことである。

二人は彼女達の部屋にいた。そこでお菓子とジュースを飲みながら話をしていた。

「それでさ」

最初に口を開いたのは華奈子であった。彼女はクッキーをぽりぽりと食べている。

「まずはその博士が何者かよね」

「それならもうある程度は調べてあるわ」

「そうなの」

「といっても私じゃないけれど」

美奈子はこう断ってきた。

「あんたじゃないの」

「そう。美樹ちゃんがね」

「ああ、ビルガーとファルケンでね」

「そうということ」

美樹の使い魔のジユウシマツとインコである。二羽は空を飛べる為こういうことにはおあつらえ向きなのである。

「まあ詳しいことは美樹ちゃんの方がよく知ってるけれど」

「ええ」

そのうえで話をさらに進める。

「天本破天荒博士ね。経歴は滅茶苦茶ね」

「滅茶苦茶なの」

「そう、滅茶苦茶」

美奈子はそのをやけに強調する。

「お医者さんでもできるらしいし科学者でもあるんだって」

「ふうん。それだったら普通じゃないの？」

とりあえずここまでではありそうな話である。だがここからが全然ありそうにない話になってしまう。

「あと錬金術に魔術もやってて他にもロボット工学とか電子力学とか物理学とかも専門家だそうよ」

「あまり普通じゃなくなってきたわね」

「それでモンスターを改造したり動物を巨大化させたり自衛隊真っ青の兵器を開発するのが趣味らしいわ」

「……何でそんな人が野放しなの？」

華奈子もここまで聞いて言葉を失った。まともどころか取締りの対象にならない方がおかしいからだ。

「滅茶苦茶じゃない」

「だからよ」

美奈子も言う。

「警察も自衛隊もいい加減手を焼いてね。私達にとって」

「どっかの科学戦隊が相手にした方がいい人ね」

「だから私達に話が回ってきたのよ」

美奈子はそう答える。

「わかったかしら」

「わかりたくないわね」

珍しく華奈子は強気ではない言葉を述べる。というよりは苦笑いを浮かべていた。

「それでね」

美奈子はその華奈子にさらに話を続ける。

「魔法で対抗するわけなの」

「何か無茶苦茶な話ね」

「けれど受けるんですよ」

「それはね」

最初から断るつもりはなかった。だから今こうして打ち合わせをしているのだ。

「絶対にやるわ」

「そう言っと思ったわ。それでね」

美奈子は華奈子のその言葉を聞いて話をさらに進める。

「その博士の写真」

「ふうん」

「あれっ」

「これって」

横にいたタロとライゾウが写真を見る。彼等はその写真を見て声をあげたのであった。それは何故なのか。

第三話 完

2007・1・24

第四話

第四話 兄弟

「どうしたのよ」

華奈子と美奈子は二匹の言葉に顔を向けてきた。見れば二匹も写真を覗き込んでいる。

「いや、写真のここ」

「ここを見て」

「そこ？」

「うん。ほら」

二匹に言われて写真のある部分を見る。するとそこにはタロとライゾウがいた。

「あれっ、何であんた達がそこにいるの？」

「それ僕の弟だよ」

「おいらの兄貴なんだ」

二匹はそれぞれ述べてきた。

「嘘っ」

「嘘じゃないよ」

タロが華奈子に答える。

「実際に会ってもいいし」

「そうなんだ」

「うん」

二匹は華奈子に対して頷く。

「わかってくれたみたいだね」

「世の中って本当に狭いわね」

「けれど」

美奈子はそれを聞いて何かを閃いたようであった。目が輝いていた。

「これ使えるわね」

「あつ、そうね」

勘のいい華奈子もそれに頷く。

「上手くやればね。情報聞き出せるかも」

「ねえタロ、ライゾウ」

美奈子が彼等に声をかけてきた。

「ああ、美奈子ちゃんは僕達の御主人じゃないから」

「命令はできないよ」

タロとライゾウはこう述べてきた。美奈子もそれをつっかり忘れてしまっていた。

「そうだったわね」

「じゃああたしが。情報聞き出せる？」

「どうかね」

「難しいんじゃないかな」

しかし二匹は華奈子の言葉にもどうにも頼りない返事を返してきた。首を傾げてさえいた。

「そうなの」

「まあやってみるよ」

「けれど弟も近くににいるなら言えばいいのに」

「兄貴も。何やってたんだよ」

二匹は写真を見て言っていた。

「そういえば」

美奈子は彼等の話を聞いてふと思いついた。

「タロってもらわれた甲斐犬の雑種だったわよね」

「そうよ。ライゾウはペットショップで売れ残っていたスコティッシュ・ホールド」

「本当に世の中狭いわね」

「全く」

近くにいた二匹の兄弟に宿敵となる博士。二人はそのことにあらためて思いを馳せる。だが博士のとんでもなさはこの時はどれだけ

のものであるか考えてはいなかったのであった。

「どんなのでもやっつけてやるわよ」

華奈子の言葉がそれを何よりも雄弁に物語っていた。

第四話 完

2007・1・24

第五話

第五話 二匹の考え

華奈子は博士との対決姿勢を強める。だがタロとライゾウは少し事情が違っていた。

「なあ旦那」

二匹は昼間留守番をしながらテレビを観ていた。その最中ライゾウがタロに声をかけてきた。

「どうしたんだい？」

「いやさ、おいら達の兄弟のことだけれど」

ライゾウは言う。

「困ったことになったな」

「確かにね」

タロもライゾウのその言葉に頷く。

「聞いたところあの天本博士というのはとんでもない人らしいけれどね」

「とんでもないどころじゃないぜ、ありゃ」

ライゾウは天本博士を評してこう言う。

「完全なマッドサイエンティストじゃないか。警察はどうしてあんなの放っておくんだよ」

「警察どころか自衛隊も各国のSPも出たことがあるらしいね」

「けれど駄目だったのか」

「それどころか南極に幽閉したのに」

「出て来たと」

「うん、そんな人」

タロはそう説明する。

「どうする？」

「あの博士がどうなるかと構わないんだ」

ライゾウはまずこう前置きした。

「しかしさ、やっぱり」

「そうだね、僕達の兄弟だよね」
「タロも言う。」

「どうしようか」

「そうだなあ。あまり頼みたくはないけれど」

ライゾウは前足を組んで言ってきた。深刻な顔を見せている。

「御主人の二人の大叔母さんに頼んでみる？」

「あの人に？」

「そう。どうか、それで」

「そうだね」

タロはテレビを見ながらそれに応える。顔が暗くなってきていた。

「悪くはないと思うよ」

「そう。じゃあ」

「ただし」

ここでタロは付け加えてきた。

「わかってるよね」

「ああ」

ライゾウはそれに頷いてきた。

「あの人達だからな」

「手強いし厳しいよ」

タロはそう前置きしてきた。

「それを覚悟しないといけないけれど」

「けれど仕方がないや」

ライゾウは意を決して言う。

「事態が事態だからな」

「そうだね」

タロもそれに頷く。これで決まりであった。

二匹は華奈子と美奈子の大叔母の家に向かう。それにはかなり意を決していた。今自分達の兄弟と話をする為に彼等も動いたのであった。

第五話

完

2
0
7
・
1
・
3
1

第六話

第六話 おばちゃんとおぼちゃん

二匹は華奈子と美奈子の大叔母、おばちゃんとおぼちゃんの家に来て来た。まずはおぼちゃんがにこやかに出迎えて来た。小柄でおっとりとした顔のお婆さんであった。

「おお、タロとライゾウやな」

おばちゃんは二匹を見てまずは目を細めてきた。

「よお来たな」

「おばちゃん、元気そうだな」

ライゾウは二本足で立っておばちゃんに挨拶をする。

「ああ、元気やで」

「それで今日は何の用で来たんや？」

痩せた顔のお婆さんが出て来た。これがおぼちゃんである。

「はい、実は」

タロは礼儀正しく二人に言う。

「今度うちの御主人様が天本破天荒って博士と戦うことになりました」

「何や、あの人まだ生きとったんかいな」

おぼちゃんはその話を聞いてこう言ってきた。

「長生きやな、ほんまに」

「そつやな。かなん話や」

「ってあの博士って幾つなんですか？」

「うち等が子供の頃にもう海軍さん相手に大暴れしとったわ」

おばちゃんがタロに言う。

「すつごい強さでな」

「陸軍さんも海軍さんも困ってたんや」

「そついや日露戦争の時にはもう悪名高かったそうだけ」

ライゾウがタロに囁いてきた。

「その頃から爺さんでさ」

「一体幾つなんだろうね」

「さあ」

「それでその博士と華奈ちゃんや美奈ちゃんが戦うんやな」

おばちゃんが二匹に問うてきた。

「うん、それでさ」

ライゾウが言う。

「向こうにおいら達の兄弟がいて」

「何とかしたいんだ」

タロも言う。

「兄弟とはやり合いたくないし」

「そういうわけやな」

「うん、何かお願いできるかな」

「お安い御用やで」

ぼぼちゃんが言うてきた。

「じゃああんた等の兄弟にここに来るように言っわ」

「明日また来や」

おばちゃんがそう声をかける。

「ええな」

「明日来るだけでいいんですか？」

タロはそれを聞いて何か不安を覚えた。

「それだけで」

「充分や」

「明日今の時間に来たらええわ」

「じゃあわかったよ」

ライゾウも何か半信半疑だがそれに頷くことにした。

「また明日ね」

「ほなまた来や」

「サイダー用意しとくから」

そんなこんなで二匹が思いも寄らない程簡単に話は進んだ。しか

しまだ二匹は狐に摘まれた顔であった。

第六話 完

2007・1・31

第七話

第七話 懐かしい顔が

タロとライゾウはおばちゃんとおぼちゃんと言葉に従い次の日にまた二人の家にやって来た。するともうおばちゃんが待っていた。

「来たな」

「ああ」

タロがそれに応える。

「来たよ」

「それで僕達の兄弟は？」

「ああ、もう来てるで」

おばちゃんがそれに応える。

「奥におるわ。そこにぼぼちゃんもおるから」

「そうか。それじゃあ」

ライゾウはそれを聞いて言う。

「奥へ行くね」

「有り難う、おばちゃん」

「ええで、そんなは」

おばちゃんは笑って二人に返す。

「そやけどな」

「何かあるのかい？」

「あんた等にホンマそっくりやわ」

そうライゾウに言う。

「あんた等が来たかと思っただぜ」

「そんなに似てるんだ」

タロはそれを聞いて呟く。

「僕の弟」

「ああ、あれあんたの弟やったな」

「はい」

おばちゃんに答える。

「そうなんです」

「で、おいらの場合は兄貴で」

「性格もあなたにそっくりやで」

「そうなのか」

ライゾウはそれを言われると微妙な気持ちになった。

「兄貴、そんなにおいら」

「もう来てるんか？」

家の奥からぽぼちゃんの声が出た。

「タロにライゾウ」

「ああ、もう来てるで」

おばちゃんがそれに返す。

「今ここにおるわ」

「そうか？そやったらな」

ぽぼちゃんの声は二匹にかかっていた。彼等にもそれがわかる。

「早よ来や。ええか」

「わかったよ」

「今行きます」

二匹はそれに応える。そのまま二本足で家の中を進む。

「じゃあおばちゃん」

「これから兄弟で仲良く」

「水入らずやな」

おばちゃんは笑ってそう述べた。何かとわかっている人だった。

二匹はぽぼちゃんに案内され奥の部屋に向かう。そこで感動の再会となるのであった。

2
0
0
7
·
2
·
7

第八話

第八話 能天気な博士

「はて」

博士は昼食のパエリアを食べている時にふと気付いた。

「あの二匹がおらんの」

「タロとライゾウですか？」

博士と一緒に食事を探っている小田切君がそれに応えた。内心何でこんな博士と昼間から二人で食事なんぞと思っていたりもする。

「そうじゃ。何処へ行ったのじゃ？」

「何でも兄弟に会いに行くそうで」

小田切君はそう答えた。

「兄弟？おつたのか」

「そりゃいるでしょう」

小田切君はそう返す。

「だって普通にペットショップで買ったんですから」

「そうじゃったな」

博士は小田切君の言葉に頷く。

「そういえば」

「そうですね」

「うむ」

「夕方までには帰るそうです」

ワインを飲みながら説明する。

「だから安心していいと」

「別に不安なぞしてはおらんが」

博士は平然と言う。

「普通の犬と猫じゃろうが」

「何処がですか」

例によって突込みが入る。

「二本足で歩いて言葉喋るんですよ」
「大したことはない」

博士にとつては、である。この博士の常識はそもそも存在しない。
「何なら地下から怪獣出そうか？」

「大阪城壊すんですか？」

「暇潰しにな」

ここでパエリアの鶏肉を食べる。

「どうじゃ？」

「駄目に決まってるじゃないですか」

「では大阪城の天守閣をロケットに改造してな」

「何処のマフィアですか、それ」

「さてな」

「全く。極 一家じゃあるまいし」

「寂しいのう」

そうは言っても全然嘆いている様子はない。

「全く」

「大体魔女に狙われてるのに」

「ああ、そうじゃったか」

何と忘れていた。

「今思い出したわい」

「そんなんで大丈夫ですか？」

「車椅子があるからな。それにカイザージョーも」

「やれやれ」

博士達は意外と平和であった。だがその平和も博士が動けば終わるのであった。

2
0
7
·
2
·
7

第九話

第九話 会談

タロとライゾウはそれぞれの兄弟との会談に入った。見れば同じ姿をしている。

「久し振りだな、兄貴」

ライゾウが兄弟に挨拶する。

「つつても何かはじめて会った気分だな」

「気分じゃなくてそうだよ」

ライゾウ兄はそう弟に返す。

「実際に初対面だろ」

「それもそっか」

「兄さん」

タロ弟がタロに声をかける。

「母さん元気？」

「まあね」

タロはそう弟に返す。

「今でも元気になっているよ」

「それはよかつたよ」

タロ弟はそれを聞いて顔を綻ばせる。

「ずっと心配していたんだよ」

「母さんも御前を心配していたよ」

「そうなの」

「そうさ」

そう弟に返す。

「一度顔見せた方がいいぞ」

「うん、時間を見てそうするよ」

「ああ、絶対にそうした方がいい」

「うん」

「それでだ」

ここまで挨拶をしたうえで四匹は話に入った。ちゃぶ台を囲んで座布団の上にそれぞれ座っている。座ってはいるが胡坐ではなく動物の感じであった。

「こつちの御主人達がそつちの御主人の相手をする事になったんだよ」

ライゾウがまず述べてきた。

「それでな。おいら達はここへ来たんだ」

「幾ら何でも兄弟とはやり合いたくないからね」

タロも言う。

「それでさ。僕達だけでも」

「休戦協定といかないか？」

タロとライゾウはそう兄弟達に提案してきた。そのうえで兄弟達を見る。

「どうだい？」

「ああ、別にいいぜ」

ライゾウ兄がそう答えてきた。

「こつちも願ったり適ったりだ」

「何だ、あつさりとしてるな」

ライゾウはその言葉を聞いてかえって驚いた。

「もっと揉めるかと思つたのにな」

「だってさ」

タロ弟が述べる。

「あの博士は」

「酷いぜ」

ライゾウ兄も言う。

「どう酷いんだよ」

「聞きたいか？」

「ああ」

ライゾウがそれに応える。

「教えてくれよ、兄弟」
「わかったよ。それじゃあ」
彼等は話をはじめた。こうして博士について話を聞くのであった。

第九話 完

2007・2・13

第十話

第十話 狂氣の天才

二匹はタロとライゾウに話をはじめる。その内容は。

「まずは趣味はね」

「うん。何なんだい？」

タロは弟の言葉に問う。

「生体実験」

「いきなりそれが」

「そうなんだ」

タロ弟は兄にそう述べる。

「他にもあるしね」

「何だよ、他には」

ライゾウが兄に問う。

「兵器の開発に怪しい薬の研究だろ」

「ふん、それで」

「人体実験もするしあと錬金術に」

得体の知れないこともしているのがあの博士だ。タブーはない。

「魔術もやっているよ」

「何か滅茶苦茶なんだな。本当に」

「だからそつちの御主人達は用心しとけ」

ライゾウ兄が忠告する。

「わかったな」

「ああ」

「よくわかったよ」

ライゾウとタロはライゾウ兄の言葉に頷いた。

「まあそれでもだ」

ライゾウはその話を聞いたうえで述べる。

「兄貴とは何もなくな。楽しくいこうぜ」

「そつちは大丈夫だな」
ライゾウ兄は弟にそう述べた。
「休戦協定できたしな。それに」
「それに？」
「おいら達はあの博士の研究所のペットなだけだしな。特に何もし
ないんだ」
「そうなのか」
「ああ、そうさ。だから安心してくれよ」
「そう弟に語る。」
「兄さんもな」
「タロ弟も兄に対して言う。」
「安心していいからさ」
「御前も何も無いのか」
「あの博士だけだから」
「そうか」
「しかし問題だよな」
ライゾウはタロ兄弟の話が終わってあらためて述べた。
「それだけのマッドサイエンティストだと」
「御主人様達大丈夫かな」
「タロも言う。」
「それだよな。御主人達でもな」
「やばいよね」
「ああ」
「二匹はそう言い合う。」
「それでさ」
「タロ弟が声をかける。二匹はそれに乗る。こうしてまた話を進め
るのであった。」

2
0
0
7
·
2
·
1
3

第十一話

第十一話 密約成立

「僕達としてはあの博士に関しては全然心配していないんだ」

「その通り」

タロ弟もライゾウ兄も実に冷たい。

「何があっても死なないから」

「安心してくれていいぜ」

「そうなのかよ」

ライゾウはそれを聞いてかなり驚いていた。てつきり何かあったら容赦はしないと言われると思っていたからだ。思いも寄らぬことではあった。

「そうさ。こつちも兄さんとはやりたくないよ」

「おいらもだ」

タロ弟とライゾウ兄はまた述べる。

「どうせあの博士が暴れるだけだから僕達殆ど関係ないし」

「むしろドカンとでかい薬やってくれよ」

「でかい、ねえ」

タロはそこまで言われるとかえって困った。彼等は結局は使い魔だからだ。使い魔でやることもできることも限られているものなのだ。

「そういうことさ。まあ御前とは何もなしでな」

「有り難いぜ、兄貴」

「またこうしてお話しようよ、兄さん」

「ああ」

四匹はにこやかにになった。そのうえで言葉を交えさせる。

「少なくともおいら達は不戦だ」

「密約だね」

ライゾウ兄とタロ弟はそう述べてきた。

「それでいいよね」

「ああ、勿論な」

「こつちもそれでいいよ」

二匹はまた言葉を返す。

「それじゃあそういうことで」

「僕達だけは仲良く」

ライゾウもタロも笑っていた。話が終わったところでおばちゃんが部屋にやって来た。

「終わったか？」

「あつ、おばちゃん」

「ええ、今」

ライゾウとタロがおばちゃんに伝える。

「終わったぜ、今」

「ほな羊羹でも食べるか？華奈ちゃんから貰ってきたやつや」

「御主人様から」

タロはそれを聞いて目を少ししばたかせる。

「美奈ちゃんの御饅頭もあるで」

「じゃあ皆で食べようぜ」

ライゾウはそう言ってきた。

「それでいいよな、皆」

「ああ」

「それじゃあ」

「たんと食べや」

今度はおぼちゃんがやって来て言う。

「一杯あるからな」

「よし」

話が終わって四匹は仲良くお菓子を食べた。少なくとも彼等の間では何もなかったのであった。だからといってそれを気にする博士ではないが。

第十一話

完

2
0
7
・
2
・
2
2
2

第十二話

第十二話 すれ違い

博士は夕方まで不気味な研究を続けていた。ふと思いついたように隣にいる小田切君に声をかけてきた。

「食事の用意をしてくれんかの」

「あつ、もうそんな時間ですか」

小田切君も言われてそれに気付く。

「そうじゃ。だからな」

「わかりました。それじゃあ」

彼はそれに応えて言う。

「買い物言つてきますね」

「君が行くのか」

「当たり前ですよ」

そう博士に返す。

「あの車椅子で行けるわけじゃないじゃないですか」

「いいんじゃないよ。それが面白いんじゃないからな」

「誰の言葉の真似ですか、それ」

「まあ気にするな。それでじゃ」

「ええ」

話は続く。

「今夜は野菜といかぬか」

「野菜ですか」

「水菜に揚げを入れてな」

そう注文をつける。

「どつじゃ、それで」

「悪くないですね」

小田切君の好きな料理でもある。話を聞いてもまんざらでもない。

「それじゃあそれで」

「うむ、後は魚を煮てな」

「カレイでいいですか？」

「そこは任せる」

話が次第に所帯めいてきた。しかし話は続く。

「それに今日は飯にも凝ってくれ」

「どうします？」

「五穀飯がいいのう」

博士の好物である。これでも案外健康食というものが好きなのである。

「いいか？」

「わかりました。じゃあそれで行きますんで」

「頼むぞ」

「わかりました」

こつした軽いやり取りの後で小田切君はスーパーに向かう。歩いてスーパーに向かう。

暫くしてそのスーパーに辿り着く。夕暮れ時のいい時間であった。

「ねえ美奈子」

横から女の子の声がしてきた。

「これなんてどうかな」

「悪くないわね」

見れば二人の少女が玉葱を見ながらあれこれと話をしている。小田切君もそれに気付く。

「何を作るつもりかな」

「マッシュルームはこれね」

「そうね」

「それでお肉は」

「ハヤシライスかな」

果たしてそうなのか。二人の少女が作るうとしているものは何か。小田切君はそれが何なのかまだ完全には知らなかったのであった。

第十二話

完

2
0
7
・
2
・
2
2

第十三話

第十三話 狂気のマシン

「魔女なぞな」

博士は研究室で何かを開発しながら小田切君に語る。

「どうということはないのじゃ」

「いつも同じですか」

「そうじゃ、どうということはないわい」

平気な顔をしたままであった。

「どれだけおつてもな、わしの偉大な発明の前にじゃ」

「今度は何を開発するつもりですか？」

「車椅子を改良しておる」

「そう小田切君に述べる。」

「ほんのちよつとな」

「ちよつとですか」

「どうということはない」

本当に相変わらずの態度だった。全く変わらない。

「魔女でも魔法使いでもな。わしの偉大な発明に勝てるものか」

「あの、博士」

小田切君は無意味に上機嫌な博士に対して述べる。

「何じゃ？」

「多分そう思っているのは博士だけですよ」

「天才の発明は何時でも理解されぬもの」

「またしても勝手なことを言う。」

「それだけじゃ。わかつたらもう」

「何ですか？」

「夕食を頼む」

「そう言ってきた。」

「今日は肉じゃががいいな」

「肉じゃがですか」

「そうじゃ。あれはいい」

博士は楽しそうに笑って述べる。その間も手は動いている。何か色々と機械を動かしている。

「健康にもいいし味にもいい」

彼はそう語る。

「わかつたらほれ」

いきなり横を指し示してきた。

「出すのじゃ」

「出すのじゃって」

いきなり訳のわからないことを言われて顔を白黒させる。

「何処からですか」

「ここからじゃ」

いきなり博士の右手に土鍋が姿を現わしてきた。

「ほれ」

「ほれってきなりまた何処から」

「物質転送機じゃ」

見事なまでに何の脈絡もない発言を続ける。

「昨日発明した」

「昨日ですか」

「これをな。車椅子に搭載させてな」

「車椅子に」

またしても碌でもないことをしようとしていた。どうなるのか見当もつかずふう、と溜息を吐き出すだけであった。

「その魔女達を倒してやるわい」

「やれやれ」

けたたましい狂気の高笑いが部屋に響き渡る。戦いが目前にまで迫っていた。

第十二話

完

2007.3.1

第十四話

第十四話 六人の決意

一方六人もまた戦いを前にして特訓と打ち合わせに余韻がない。彼女達もあれこれと工夫にコンビネーションを考えていつて戦いに赴こうとしていた。

「春奈ちゃん、そこ！」

学校のグラウンドで特訓をしている。華奈子はそこで春奈に叫んでいた。

「そこでシャボン放って！」

「ええ」

春奈はそれに応えてシャボンを放つ。そこに今度は赤音が来る。そして彼女は光玉を乱射させる。一点に攻撃を集中させていた。

美樹が風を飛ばすとそこに華奈子と梨花が火と岩を放ってそれで攻撃を派手にさせている。美奈子は音を派手に飛ばしそこに魔王も出す。これまでの彼女達とは全く違う派手で無駄のない動きになっていた。

「いい調子ね」

梨花が皆の動きを見て述べる。

「けれどこのままじゃ」

「そうね」

美奈子が美樹の言葉に応える。

「まだまだね」

「そうかなあ」

しかし赤音はその言葉に首を傾げる。

「ここまでできたら大丈夫じゃないの？」

「普通はね」

美奈子は今度は赤音に応える。

「けれど相手が」

「天本博士よね」

華奈子が言ってきた。

「相手は」

「そうなのよ。だからね」

美樹が言う。

「これ位では駄目なのね」

「そういうことなのよ」

美奈子が春奈に述べる。

「だからね」

「ええ、この程度じゃまだ駄目」

華奈子が言う。

「まだまだ」

「けれど華奈子」

美奈子は彼女に対しても言ってきた。

「華奈子は頑張り過ぎよ。身体痛めるわよ」

「大丈夫よ」

しかし華奈子はそう双子の姉妹に返す。

「これ位じゃね」

「いえ、もう止めましょう」

しかし美奈子はこう言った。

「身体を休めるのも大事よ」

「そうなの」

「ええ。じゃあこれでね」

「わかったわ」

皆梨花の言葉に頷く。それでこの日は解散となった。華奈子は美奈子と共に歩いていた。そこでのことである。

「ちよつといいかしら」

「何？」

「ええ、ちよつとね」

美奈子は真顔になっていた。その顔で華奈子に語りはじめるので

あつた。

第十四話

完

2
0
7
・
3
・
1

第十五話

第十五話 双子だから

「いい？」

華奈子に顔を向けて問う。

「私達だけねどね」

「ええ。どうかしたの？」

華奈子はその美奈子の言葉に顔を向ける。そのうえでじっと双子の姉妹の顔を見ていた。

「何かありそうだけれど」

「ええ、あるわ」

美奈子もその言葉に答える。

「いい？」

じっと華奈子の顔を見ていた。その顔が真剣そのものになっていく。

「あの博士は手強いから」

「どうするの？」

「考えがあるわ」

その綺麗な眉を顰めさせてきていた。

「私達二人だけだね」

「二人だけで」

それに応える。

「いいわね」

「わかったわ」

華奈子はその言葉に頷いてきた。

「じゃあそれでね。二人で」

「使いたくはないけれど」

美奈子は言う。

「考えてるのはかなり大掛かりで難しい技だから」

「難しい技なのね」

「それでもいい？」

じつと華奈子の顔を見詰めて問う。

「一歩間違えれば大怪我だけれど」

「何言ってるのよ」

そう美奈子に返す。

「今更。そうでしょ？」

「そう言うと思ったわ」

華奈子のその言葉にすつと笑みを返してみせてきた。

「華奈子だからね」

「有り難う。けれどあれね」

華奈子もそれに応えて言う。

「何？」

「美奈子らしいじゃない」

それが華奈子の言葉であった。

「そんなこと提案してくるなんてさ。けれど乗るわ」

「ふふふ。じゃあお互い行くわよ」

美奈子はそう華奈子に返す。

「それをやる為にね」

「了解。じゃあ行きましょう」

「って私が今言ったじゃない」

美奈子の手を掴んで言ってきた華奈子につい笑みを浮かべた。

「いつも。強引なんだから」

「けれど。それでもいいでしょ？」

「ええ。華奈子だからね」

「うふふ」

二人はそのまま何処かへと向かった。その場所こそが問題であった。

第十五話

完

2007.3.7

第十六話

第十六話 二人だけの特訓

二人の辿り着いた場所は裏山だった。美奈子はそこに辿り着くと華奈子に顔を向けてきた、

「ここでいいわね」

「場所は何処でもいいのよ」

華奈子は余裕の笑みで美奈子に返してきた。

「あれでしょ？あの博士をやっつける位の技を」

「ええ」

怖い顔になっている。その顔で言う。

「凄いことになるだろうけれど」

「あたしは体力があるけれど」

華奈子は言う。

「あんたは大丈夫なの？」

「そのあんたの妹よ」

すつと笑って述べてきた。

「合わせてみせるわ」

「言うわね。そうじゃなくちゃ」

「そうよ。行くわよ」

早速フルートを出してきた。それと同時に普段着が法衣に変わる。

華奈子も同じだった。完全に魔法を使う状態になっていた。

フルートを奏でる。すると何かが姿を現わしてきた。

虚空に何かが浮かび上がる。それは無数の鎌であった。

「あの曲ね」

「そうよ、ギロチン台への行進」

美奈子は答える。

「この曲に魔法を合わせて、あんたの魔法」

「わかったわ」

その言葉に頷いてすぐに炎を放つ。それはすぐに鎌に合わさった。

「これでいいのね？」

「そうよ」

美奈子は華奈子に答える。

「それでね。次は」

「どうするの？」

「一緒に動かして」

「一緒に!？」

「そうよ」

美奈子は答える。

「二人の力を同時に合わせた魔法だから」

「それで動かすのね」

「力も二倍よ」

美奈子は告げる。

「普通の力の使い方ではないけれど。いいわね」

「わかるわ」

華奈子は不敵に笑っていた。その笑みは楽しむ笑みであった。

「この力ならね。けれど」

「そうね。これって」

美奈子も同じものを感じていた。今二人が感じている魔力は普段一人で使っているものよりの倍、いや自乗した程の強さを感じていたのだ。その力を受けながらも笑っていたのである。

「やれるかも」

「これからが大変なただけれど」

美奈子は言う。

「やるわよ」

「ええ」

二人はそこから激しい特訓に入った。それを何日も続けた。それがやがて大きな力になる。その力を今身に着けようとしていた。

第十六話

完

2
0
7
・
3
・
7

第十七話

第十七話 戦場へ

猛訓練を終えた六人は早速博士の研究所に向かう。ここで彼等の前に白いタキシードにマントを羽織って立っていた。如何にもいっただ怪しい人物であった。

「あれ、よね」

華奈子はその怪しいことこの上ない人物を見て言う。

「天本破天荒博士って」

「間違いないわね」

それに美奈子が答える。

「話に聞いている姿通りね」

「そうね」

華奈子はあらためて美奈子の言葉に頷く。

「本当にあんな格好しているなんて」

「私もまさかと思ったわよ」

美奈子もかなり呆れていた。見れば他の四人でもある。

「あのね」

そこで白衣の普通の男の人が六人の前にやって来た。

「貴方は？」

「ああ、博士の助手の小田切っていうんだ」

そう梨花に答える。

「一応忠告にね」

「博士の前から現われるなっただことですか？」

それに美樹が問う。

「そう。だから」

「と言われましても」

春奈が困った顔を見せる。

「ねえ。私達だって仕事だし」

赤音も述べる。

「そういうことなんで。宜しく願いします」

華奈子が言葉を返す。

「いいんだね、本当に」

「そういうことです。あそこの人に聞いて下さい」

美奈子も言う。小田切君はそんな彼等のやり取りを聞いてはああ、と溜息をつく。

「やれやれ。どうなっても知らないよ」

「さて、小田切君」

後ろから博士の声がする。

「わしの輝かしい伝説がまた一ページだぞ」

「ああいう人だから。宜しくね」

そう六人に言うとその場から姿を消す。後にはその博士がいるだけであつた。

「さあ行くぞ、諸君」

「早速やるつもりね」

華奈子は博士が高らかに宣言するのを聞いている。聞きながら呆れた声を出す。

「人の話聞きそうにないわね」

「見ればわかるじゃない」

美奈子も呆れ顔であつた。

「人の話を聞く人があんな格好してる？」

「そうね。それじゃあ」

「ではまずは挨拶じゃ。わしの名は天本破天荒！」
自ら名乗った。

「天の本にして破滅により天を荒らす者だ！では来るのじゃ！」
今度は何処からか出した鞭を振り回して叫ぶ。

「我が僕よ！」

天から何かがやって来た。こうして六人と博士の最初の戦いが幕を開けたのであつた。

第十七話

完

2
0
7
・
3
・
1
3

第十八話

第十八話 車椅子の悪夢

飛んで来たのは車椅子であった。博士はそれを見て誇らしげに笑う。

「ふふふ、どうじゃ」

「車椅子……よね」

華奈子は空を飛んで来た車椅子を見て美奈子に問う。

「あれって」

「そうね」

美奈子もそれに頷く。六人は空を飛ぶ車椅子を呆然と見上げていた。

「見たところは」

「何で車椅子が飛んでるんだらう」

「わからないわ」

「はははははははははは！これこそわしの偉大な発明の一つ！」

博士は腕を組み高笑いをしていた。

「ハイパー車椅子よ！」

「一体何なんだか」

華奈子はまた言った。

「ハイパー車椅子って」

「見ればわかる」

車椅子はホバリングをして博士の前に降り立った。博士はその車椅子を前に悠然と笑みをたたえている。

「わしの天才さがな、見よ！」

「チエンジ」

電子音が聞こえるといきなり車椅子が変形した。訳のわからない巨大ロボットに変形したのであった。

「へっ!？」

華奈子は突然巨大ロボットになった車椅子を見てまた声をあげた。

「何なのよ、大きさが全然違うじゃない！」

「何処をどうやったら車椅子が五十メートルのロボットになるのよ」

「ふはははははははははははははははは！これこそわしの天才の証明なのだ！」

博士は六人に対して言う。

「不可能を可能にする！それがわしなのだ！」

「……………どうする？」

華奈子が他のメンバーに問う。

「こんな訳のわからないの」

「やるしかないでしょ」

美奈子が双子の姉妹に答える。

「さもないと怪我だけでは済まないわよ」

「安心するがいい」

博士は六人に対して言う。

「君達は負けたならば栄光が待っている」

「栄光って」

「改造人間への道がな」

「……………改造人間って」

美奈子が呆れた声を出す。

「何でこんなのが野放しになってるのよ」

「博士の趣味は人体実験と改造手術なんだ」

小田切君が横から言う。

「だから捕まらないようにね」

「やれやれね」

六人はその言葉を聞いてまた溜息をつく。

「けれど改造なんて御免だから」

「ええ」

訳のわからない巨大ロボットと対峙する。ロボットは六人の前に
聳え立っていた。

第十八話

完

2
0
7
・
3
・
1
3

第十九話

第十九話 巨大ロボット

訳のわからない変形により姿を現わした巨大ロボット。六人はそれを見上げてどうしたものかと考えていた。

それでも結論は出ない。幾ら何でもいきなりこれだったからだ。

「どうしようかしら」

「春奈ちゃん、お水」

「ええ」

春奈が華奈子に伝えて水柱で攻撃を浴びせる。しかしそれは何の効果もなかった。

「無駄じゃ」

博士が平然としている六人を見て述べた。

「このロボットは水中でも移動できる。そんなものは意味がないわ」
「なっ」

「何てしづとい」

「さて、どうするのじゃ」

六人を見て自信満々で言葉を続ける。

「水では倒せぬぞ。これはな」

「どうするったって」

「いきなり巨大ロボット出されても」

「ふははははははは、わしは相手が誰であろうと全く容赦はせぬ！」
最初から全力宣言であった。

「わかったか！わかったらこの天才科学者天本破天荒を認めるのじゃ！」

「認めるって初対面の女の子にいきなり」

赤音は博士の狂気じみた戦いを見て言う。

「巨大ロボット仕掛けるし狂気じみた高笑い」

「滅茶苦茶よね」

いつもは冷静な梨花も呆れた顔であった。

「こんなのって」

「どうする？」

美樹もどうしていいかわからず考えあぐねていた。

「このロボット」

「そうね」

美奈子はロボットを見て思案に入る。暫くして作戦案を出してきた。

「とりあえずはね」

「どうするの？」

華奈子が彼女に問うてきた。

「何かいい考えがあるの？」

「一応はね」

そう述べる。述べながらその案を述べるのであった。

「まずは総員散開よ」

美奈子が言う。

「皆で取り囲んで。ロボットの正面は私と華奈子で」

「わかったわ」

華奈子はそれに頷く。

「それじゃあそれでね」

「ええ。そうして周りから皆の攻撃で」

「やるってわけね」

美樹が問う。

「そうよ。攻撃を続けていけば絶対に穴が開くわ。そこに」

「皆で攻撃を仕掛けるのね」

「そういうこと、いいわね」

「了解」

五人は美奈子の言葉に頷く。そのうえでそれぞれの使い魔達と共に散ってロボットを取り囲む。戦いは本格的にはじまるうとしていた。

第十九話

完

2
0
7
・
3
・
2
0

第二十話

第二十話 攻撃

六人は華奈子と美奈子を軸にしてそれぞれの方角に散る。まずは各方向からそれぞれの魔法を放つ。だがそれは全く効いてはいなかった。

「無駄じゃ」

博士はびくともしない自分のロボットを見て高笑いを続けていた。

「わしのロボットはその程度ではびくともしない」

「多分テポドンに核弾頭つけても破壊できないから」

小田切君がそう六人に説明する。

「君達の魔法じゃ無理だから。まあここはね」

「待て、小田切君」

博士がここで小田切君に声をかけてきた。

「その発言はあの国に核があるような言葉じゃな」

「自分で言ってるじゃないですか」

小田切君は博士にこう返す。

「自分達が核保有国だって。無法なことに」

これ程無法な国家が実在するのも恐ろしい。特撮ものの悪役のようである。

「今あの国に核はないぞ」

「嘘でしょ、それは」

「本当じゃ。だが知っておるのはわしとあのデブの將軍様だけじゃ」

「どういうことですか、それって」

何かやたら物騒な方向に話がいつているのがわかる。聞きたくはないが聞かざるを得なかった。

「簡単じゃ、わしが頂戴した」

実に答えは簡単であった。無法どころの騒ぎではない。

「わしの常温核融合の開発にな。使わせてもらった」

「使わせてもらったって博士」

小田切君は今回も呆れた。

「あの国は洒落になりませんよ」

「安心せい、核がなくなつて一番困るのはあの国じゃ」

「まあそうです」

言われてみればその通りだ。あの国の切り札はそれしかないのだ。考えてみれば実に貧相な切り札である。それがなくなれば何にもならないからだ。

「黙っておれば問題はない」

「拉致されても知りませんよ」

「工作人員は全員わしの崇高なる生体実験と愛すべきモンスターの餌じゃ」

「はあ」

「………何かさあ」

華奈子は博士と小田切君の会話を聞いて開いた口が塞がらなかった。

「何で今まであの人野放しになつてたんだろ」

「そうね」

美奈子も博士の今の言葉には驚きを隠せない。

「北朝鮮からの核兵器を盗んだって」

「そんなのは幾ら何でも」

「誰もしないわよね」

「ふん、甘いわ」

博士はそんな彼女達の言葉を聞いても誇らしげに笑っていた。

「その程度は朝飯前よ、わしの偉大な実験の前にはな」

「警察も何してるんだらうね」

「どうしようもないから私達に、でしょ」

「国家権力だろ何が何だろつがわしは止められぬ!」

悪の科学者そのままの言葉を吐き出す。

「何人たりとも!」

「実際に言つとまんま悪の組織の大ボスね」

「同感」

やけに醒めた華奈子と美奈子の声と表情が戦場に響く。戦いは
応は続いていた。

第二十話 完

2007・3・20

第二十一話

第二十一話

わしの考えた最強ロボ

「このロボットは凄いぞ！」

博士は相変わらず言っている。

「核ミサイルの直撃も怖くはない！」

「ちょっと待ってよ！」

華奈子がそれに突っ込みを入れる。

「何でそんなに頑丈なのよ！」

「知れたこと！」

博士はまた叫ぶ。

「この巨大ロボ名付けてエンペライザー！」

「また凄い名前ね」

美奈子はその名前に空いた口が塞がらない。

「要するにあれでしょ。あのイペライ」

「美奈子、伏字になってないわよ」

「とにかくじゃ！無敵、無敵！」

ロボットを横に高笑いを続ける。

「何があるとも！」

「………どうする、皆」

華奈子は皆に問うた。

「あれ」

「どうするって言われても」

梨花もどうしたらいいかわからない。まずは攻撃を仕掛けているがそれでも攻撃をする側から回復しているのだ。

「これはちよつと」

「回復力が半端じゃないわ」

「その通り！」

美樹の言葉にも答える。

「だからこそわしのエンペライザーは無敵なのじゃ！覚悟せよ！」
「困りましたね」

「困るところじゃないわよ」
春奈に赤音が突っ込みを入れる。

「これはねえ」
「どうしようかしら」

美奈子も流石にいい案は出ない。

「このままめいめいで攻撃しても。これは」
「何にもなりそうにないわ」

華奈子も同じ考えだった。

「こんなの相手だと」
「無駄！無駄！無駄なのじゃ！」

博士はそんな彼女達をよそに笑い続ける。

「このエンペライザーは世界を征服できるのだからな！やがてこれを作って宇宙にわしの名を轟かせてやるわ！」

「……………どっちにしろさ」

華奈子は高笑いを続ける。博士を見て皆に言う。

「あの博士は放っておけないわね」
「ええ」

美奈子がそれに頷く。
「絶対にね」

「世界征服どころじゃないわね」
「何っ、世界征服!？」

博士はその言葉に眉を顰めさせてきた。
「下らん」

そしてこう言う。何か考えがあるようであった。

2
0
7
·
3
·
2
8

第二十二話

第二十二話 博士の野望

「ああ、君達」

小田切君が六人に声をかけてきた。

「はい」

「ええと」

「小田切っていうんだ」

彼は六人にそう名乗った。

「よかつたら覚えておいて」

「わかりました」

「そういうことで。じゃあ博士の話聞いてあげてね」

「はあ」

「聞くがいい！」

博士は高らかに叫ぶ。

「わしは世界征服などという下らんことに興味はない！小さい！小

さいぞお！」

「そうなんだ」

華奈子はそれを聞いて咳く。

「とりあえずは」

「宇宙もだ！わしにとっては征服なぞ笑止！わしが求めるのは！」

「何かしら」

「全宇宙にわしという偉大な天才のことを知らしめることよ！」

つまり名声であった。かなりハチャメチャではあるが名声を求め

ているのだ。

「わかったか！だからこそ！」

「はあ。そうだったの」

六人はそれを聞いてやっと博士の目的がわかった。

「何かぶっ飛んでるわね」

「だからマッドサイエンティストなのね」

「博士の知能指数は二十万なんだ」

「ってちよっと」

華奈子は小田切君のその言葉に思わず目が飛び出た。

「何それ。ウルト　ンの宇宙人!？」

「漫画の頭脳派どころじゃないわよ」

流石に美奈子も言葉がない。

「何て話……」

「この宇宙一の頭脳により！」

博士は驚く六人をよそにさらに言葉を続ける。

「わしの名は全宇宙に鳴り響くのじゃ！」

「そういうことだから」

小田切君はまた言葉を告げてきた。

「聞いてくれて有り難う」

「はあ」

「どうも」

「では行くぞ小さき魔女達よ！」

また六人に声をかけてきた。

「さあエンペライザーの攻撃を受けよ！」

「受けよってこんなのどうするのよ！」

「参ったわね」

華奈子も美奈子も流石に今回は言葉もない。

「何とかしないと」

「けれど」

言っているその側から攻撃が来る。ビームにミサイルに怪音波に

足と攻撃も豊富だ。

「どうしよう」

「とにかく避けながら考えるわよ！」

攻撃を避けるだけでも必死だ。話は洒落にならないようになってきていた。

第二十二話

完

2
0
7
・
3
・
2
8

第二十三話

第二十三話 エンペライザーの

恐怖

エンペライザーの攻撃はこの世の終わりのようであった。まるで自衛隊の基地に総攻撃を仕掛けるかのようであった。その攻撃で六人に囲まれながらも圧倒していた。

「これ、強過ぎるでしょ」

華奈子も流石に言葉がない。

「何なのよ、ミサイルにビームって」

「しかも怪音波まで」

美奈子もミサイルの嵐を何とか避けながら啞然としていた。

「有り得ないでしょ」

「有り得ないけれどこれが事実よ」

梨花が悔しさに満ちた声で彼女に答える。

「洒落にならないけれど」

「けれどどうしよう」

美樹はそれでもエンペライザーの隙を窺っていた。

「こんなの。どうやったら」

「水だとうかしら」

その水を使う春奈が言ってきた。

「機械は水に弱いし」

「それしかないんじゃない」

赤音は光だ。水ではないがそれは何かわかった。

「それじゃあやる？」

「ふははははははははは！何をしようとしてるかわからんが！」

博士は作戦を練る六人に対してまたしても高笑いで応えてきた。

「無駄じゃ！このエンペライザーはそう易々とは倒せん！」

「あんなこと言ってるし」

華奈子は博士のその全く無駄なハイテンションに辟易しながら言葉返してきた。

「どうしたものかしらね」

「洒落にならない相手だけれどヒントは出たわ」

美奈子はその華奈子に応える。

「水よ」

今の春奈の言葉に頷いてきた。

「ここはそれで行くわ。いいわね」

「水はいいけれどさ」

華奈子はエンペライザーを見上げて攻めあぐねていた。こちらから何を仕掛けてもどうにもならなかった。まるで要塞のようであった。

「まずは装甲を破ることね」

「そんなことは絶対に不可能だ！」

こうしたことは聞いている博士であった。またしても誇らしげに叫ぶ。

「このエンペライザーの装甲は光の巨用に開発したもの！ちょっとやそつとの魔法で打ち破れるようなものではないぞ！」

「あの博士に常識あるの？」

華奈子はまずそれを突っ込みたかった。

「やること為すこと言うこと破茶滅茶じゃない」

「博士にとってはそれが一番ないものなんだ」

小田切君が言葉を入れてきた。

「実はね」

「やっぱり」

華奈子はそれを聞いてうんざりとした顔で応えた。そこにエンペライザーの足が来たので慌てて後ろに跳んでかわす。一瞬遅れていれば死んでいた。

「惜しいのう、活きのいい実験材料が手に入るところだったのにな」
「やっぱり洒落にならない危険人物ね」

「国家権力もどうしようもないのね」

華奈子と美奈子は博士の今の言葉にあらためて啞然とする。そこに指からのロケット弾が来たのでそれも右に左にかわす。

「今宵は生体実験パーティーじゃ！おなご達を使つてな！」

「本当にあんたの常識はどうなってるのよ！」

華奈子の突っ込みも虚しい。エンペライザーは相変わらず派手に暴れ回るままであった。

第二十三話

完

2007・4・4

第二十四話

第二十四話 弱点!?

エンペライザーの猛攻は続く。何処にこれだけのものが内臓されているのかわからない程破天荒な攻撃を六人に浴びせ続ける。

六人の攻撃は全く効かない。まさに無敵であった。しかも六人は生身の人間である。次第に疲れが溜まってきたのである。それが次第に目に見えてきた。

「まずいわね」

美奈子が仲間達の疲れを見て危惧を覚えだした。

「このままだと」

「そうね」

華奈子が美奈子のその言葉に頷く。

「あたしも。動きがちよつと」

「体力は温存した方がいいわよ」

真顔で双子の相棒に対して述べる。

「さもないと生体実験よ」

「わかつてるわ」

強張った顔でそれに応える。

「下手をすればね」

「ええ。けれど」

といつても美奈子にもどうしていいかわからない。正直攻めあぐねていた。そこへまたしてもエンペライザーの足が来た。それは何とか前に出てかわした。

かわしたところで足の踵の方に来た。そこでふと気付いた。

「踵!？」

美奈子はふと気付いた。踵である。

「若しかしたら」

「どうしたの、美奈子」

華奈子が双子の姉妹に顔を向けて問う。

「急に顔が強張ったけれど」

「その理由はあるわ」

美奈子はその強張った顔で華奈子に伝える。

「いい？皆」

今度は華奈子だけでなく皆に声をかけた。

「若しかしたら勝てるかも知れないわ」

「若しかしたら!？」

「ええ」

仲間達に対してこくりと頷く。

「物凄く難しいだろうけれど」

「それでもできるのね」

だが華奈子はその言葉に顔を向けてきた。

「それで」

「僅かな可能性だけれど」

そう断りはする。しかし。

「それでなきゃ他には可能性はないわ」

「わかったわ」

華奈子だけでなく他の仲間達もそれに頷いてきた。

「じゃあそれでね」

「有り難う」

美奈子は仲間達のその言葉に礼を述べる。メンバーが彼女のところに集まる。

「それじゃあね」

五人に声をかける。

「いいわね」

「了解」

「任せて」

五人は美奈子の言葉に伝える。一か八かの勝負に出るつもりであった。

第二十四話

完

2
0
7
・
4
・
4

第二十五話

第二十五話 アキレス腱

六人は動きを合わせる。そうしてエンペライザーのある場所を狙っていた。

「あれ、博士」

最初にそれに気付いたのは小田切君であった。

「彼女達何かしようとしていますよ」

「何をじゃ？」

気付けば博士は昼食を摂っていた。わざわざイタリア料理店からスパゲティやピザとワインを頼んでテーブルに座って食べている。

「何処から出したんですか？それ」

「異次元ポケットから出した」

博士は平気な顔でそう答える。

「大したことはない。ついでに言えば食べ物も自由に出来るテーブルかけとかも発明はしておるぞ」

「そんなものまでですか」

「うむ、じゃがこの店のものがかなり美味くてな」

食べながら述べる。見ればイカ墨のスパゲティである。

「それで特別に頼んだのじゃ」

「そうだったんですか」

「どうじゃ？君も」

小田切君にも勧めてきた。

「一緒に」

「一緒にですか」

「遠慮はいらんど。何ならすぐに頼むしな」

決して吝嗇な博士ではない。実際に小田切君への給料はかなりのものである。それに騙されて就職したのが彼の運の尽きでもあるが、月に手取り五十万、特別ボーナスありという破格の条件である。も

つとも金の入所はヤクザ屋さんよりも余程やばいのであるが。

「いえ、私はそのテーブルかけを」

小田切君はそう述べてきた。

「それでいいですか？」

「うむ、それではほれ」

博士はタキシードのポケットからそのテーブルかけを出してきた。

「使うがよいぞ。何でも出せる」

「何でもですか」

「うむ、あの娘御達も呼ぶがいい」

必死にエンペライザーと戦う華奈子達に顔を向けて言う。

「腹が減っては戦ができぬであろう」

「いいんですか？」

テーブルかけを一緒に出してらってテーブルの上に置いて問う。

「戦ってるのに」

「何、構わん」

優雅にワインを飲みながらそれに応える。

「わしの勝利は確実じゃからな。今更何をしたところで」

「そうですね。ねえ君達」

小田切君が六人に声をかける。

「一緒に食べないかな」

「えっ!?!」

流石にこの言葉には目を丸くさせる。

「今何て!?!」

「一緒につて」

「だから一緒に昼食でもどうかな」

話は大きく変わった。こうしてとんでもない方向へと向かうことになるのであった。全くもってこの博士の頭の中だけは予測がつかない。

第二十五話

完

2
0
7
・
4
・
1
0

第二十六話

第二十六話 意外な展開

「あのさ」

華奈子は呆れながら小田切君に言う。

「あたし達戦ってるんだけど」

「だから一時停戦でね」

そう六人に述べる。

「まあ食事位は」

「安心せい」

博士はイタリア料理を食べながら六人に言う。

「今は毒の研究はしておらぬ」

「してるんだ」

「許可とか得ていないわね」

「許可!？」

またとんでもない返事が返ってくる。

「何じゃそれは。聞いたことのない日本語じゃな」

「博士、それ警察に聞かれたらまた問題ですよ」

「全く。俗物共が」

そもそも警察が手に負えなくて六人を頼んでいる。こんな人物であるから困りものなのである。

「わしの崇高な研究にいちいち介入しおって」

「まあそうでしょうね」

美奈子が珍しく呆れた声で言う。

「こんなのも作るし」

「まあいいんじゃない？休戦らしいし」

華奈子が言う。

「ここは」

「そうね。毒がないんなら」

何とか納得することにした。

「御願いできるかしら」

六人を代表して華奈子が尋ねてきた。

「それで」

「ああ、どうぞ」

小田切君はにこやかな顔で彼女に応える。

「このテーブルかけから何でも出せるし」

「了解」

「それじゃあ」

にこりと頷き合い席につく。そうして食べはじめる。

六人はそれぞれ自分の好きなものを注文する。するとテーブルの上に自然とその料理が出て来るのであった。まるで何処かのネコ型ロボットの秘密道具である。

「うわあ、凄い」

「まさか本当に」

「博士は天才は天才だから」

小田切君は五穀飯に椎茸と豆腐の味噌汁、めざしを食べながら六人に応える。

「発明は凄いよ」

「ふふふ、わしは天才じゃ」

博士はその言葉を聞いて高らかに笑う。

「味もよいぞ」

「あつ、本当」

「これは中々」

「わしの発明に抜かりはない」

自分で自分を誉める。

「そもそも……うっ!？」

ところがここで異変が起こった。その異変とは。

第二十六話

完

2
0
7
・
4
・
1
0

第二十七話

第二十七話 弱点発覚

異変の元は博士であった。急に動きがおかしくなりだしたのだ。「一体どうしたのよ」

華奈子はそれを聞いて目を瞠る。そのうえで小田切君に問う。

「頭がおかしくなったの!？」

「ちよつと華奈子」

あまりにもぶしつけな問いに美奈子が思わず突っ込みを入れる。

「幾ら何でもストレート過ぎるわよ」

「だけれどねえ。やっぱり」

「やっぱりも何もないわよ」

美奈子はまた突っ込みを入れる。他の四人も今の華奈子の言葉には少し凍っていた。

「とにかく。どうしたんですか？」

あらためて春奈が小田切君に問う。

「急に様子が変になりましたけれど」

「ああ、ワインのせいだね」

小田切君はそう春奈に答える。それでも六人には首を傾げるものがあつた。ワインでこうなるとは思わなかつたからである。

「ワインでこうなるの？」

「さあ」

赤音の言葉に美樹が首を傾げさせる。どうにもわからないといった顔であつた。見れば博士は急に訳のわからないことを喚き出していたのである。

「偉大なるシヨツ　ー首領に乾杯」

畏まって言い出す。ワインを掲げてポーズまで取っている。

「そして世界を我等が首領のものに」

「首領つて」

「一体何が」

「ああ、これ寝言だから」

小田切君は呆然とする六人に対して述べる。

「気にしなくていいよ」

「気にしなくていいって」

「あの、博士って寝ながら目が開いてるんですか？」

「そうなんだよ」

さりげなくとんでもない習性を持つ博士であった。実際に目を開けて堂々と寝言を言ってきている。

「世界を破滅させる！！」

「言ってることは変わらないよね」

「だから華奈子、そんなに率直に言わないの」

また美奈子が突っ込みを入れる。

「変な風になるから」

「だけれどこれは」

それでも華奈子は言う。言わずにはいられなかったのだ。

「起きても寝てもこんなのじゃやってられないんじゃない」

「ああ、大丈夫」

しかし小田切君はあくまで落ち着いていた。慣れた顔であった。

「すぐ完全に寝るから。すぐに目を開けたまま寝てる状態になるけれど」

「何てややこしいのよ」

華奈子も他の面々もこれには呆れる。

「迷惑っていうか」

「何ていうか」

「まあその間にね」

小田切君はすぐに博士の手からリモコンを取ってスイッチを押す。そうしてエンペライザーをすぐに元の車椅子に戻したのであった。相変わらず信じられない小ささになる。

「こうすればいいから」

「いいからって」

「何か凄い簡単に終わったような」

ところが博士はまだいる。エンペライザーがなくとも歩く核弾頭がそこに残っていたのであった。

第二十七話

完

2007・4・18

第二十八話

第二十八話 戦いは終わったけれど

博士は一応は寝ている。しかし起きているのと変わりが無い。

「いいか、小田切君」

小田切君に対して声をかける。

「今度の発明は実験があるテロ支援団体のビルでやるぞ」

「待ってよ、そこって」

こればかりは美奈子も眉を顰めさせる。

「何処なのよ、まさかあの国の」

「美奈子、それ以上はまずいわよ」

今度は華奈子が出っ込みを入れる。役が逆になっていた。

「それ以上言ったら」

「けれどねえ」

それでも美奈子は言わずにはいられなかった。あまりにも洒落にならない話だったからだ。

「危ないなんてものじゃないでしょ、これって」

「まあそうだけれどね」

華奈子に答えはするがそれでも危険なものを感じずにはいられないのであった。

「それでもちよっと」

「それか自衛隊の演習場を無断で借りてだな。何、わしの偉大な発

明の為じゃ。法律の十や二十は」

「言っておくけれどこれ実際にやってるから」

小田切君はそう解説を入れる。事実だから仕方がない。

「だからこの博士は問題なんだよ」

「それにしても。お酒に弱いよね」

「いや、強いことは強いんだ」

小田切君は華奈子にそう述べる。

「寝ながら飲むし二日酔いも全然しないし」

「どんな飲み方なのよ」

「非常識よね」

「この博士に常識はないよ」

小田切君はまたしてもとんでもないことを言う。しかもその通りなのだから始末が悪い。

「まあこれで戦闘はできなくなるから。安心してね」

「そうなんですか」

「それでも全然変わらないって」

春奈と赤音はそれを聞いてもまだ違和感を抱いていた。今も実際に博士は目の前でとんでもない寝言を目を開けながら立って言っているのである。

「とにかくこれで今回は終わり？」

美樹は今更ながらエンペライザーがいなくなったことに言及してきた。

「相手もないし」

「そうだね。ああ、博士は敗北って言葉は知らないから」

何処までも始末の悪い博士であった。始末の悪さでは某新聞社の主筆や某国家の将軍様と同じレベルであった。これもかなりとんでもないことであった。

「今回は引き分けてことになるよ」

「引き分けですか」

「また気が向いたら戦い挑んでくるから」

「あれ、博士からですか!？」

梨花がそれに問う。逆の立場ではないかと思ったのだ。

「何でまた」

「博士は相手が誰であれ楽しめたらそれでいいから。敵がいると燃えるんだ」

「まんま悪の科学者なのね」

華奈子はそれを聞いて呟く。

「またとんでもないってどうか」

「だから一応何時戦いになるかわからないってことだけは頭に入れておいてね。それじゃあまた」

「決めた！竹島で実験をするぞ！」

去り際にも爆弾発言を置く。何はともあれ六人は今回の危機を凌いだのであった。

第二十八話

完

2007・4・18

第二十九話

第二十九話 戦い終わって

戦いが終わって六人は去って行った。しかし博士はそうはいかなかった。

「さあ博士」

小田切君は必死に博士を連れて行くこととする。しかし酔っている博士の耳には届かない。もっともこの博士は人の忠告などは最初から入らない耳を持っているのだが。

「帰りましょう」

「待て、小田切君」

その小田切君に言う。

「わしは閃いたのだ」

「何をですか？」

「名付けてチタデレ作戦だ！！」

「ドイツ軍の作戦ですか？」

第二次世界大戦中にドイツ軍がソ連軍への攻勢として計画した作戦である。これが有名なクルスク大戦車戦へとなっていくのである。

「それって」

「違うな、大規模な実験だ」

「実験に作戦ですか」

「まあ聞くがいい」

何時の間にか元の車椅子に戻っているエンペライザーの上にマントを羽織ったまま座りながら小田切君に声をかける。

「よいか、実験もまた芸術だ」

「初耳ですが」

小田切君はそう博士に言い返す。

「誰の言葉ですか、それって」

「この世で最も偉大な科学者の言葉じゃ」

「ハ　―教授はそんなこと言っていないですよ」
「フン、戯言を」

スラ　教授という名に対して冷笑を向けて応える。
「あんなコンピュータに顎で使われる三流の教授と一緒にするな」
「じゃあ誰なんですか」
「君の目の前におる」

こう豪語してきた。
「その天才科学者が言うのじゃ。知能指数二十万のな」
「はあ、そうですか」

返事に力がこもっていない。心の底からどうでもいいといった感じだった。

「それでじゃ。実験をな、派手にやる」
「今までも随分派手じゃないですか」
「だからじゃ。もつと派手にやるのじゃ」

何かよからぬことを考えているのは間違いなかった。そもそも単なる実験に作戦とまで名付けるのは宇宙でもこの博士位であろう。あらゆる意味で困った人物であった。

「よいか」
「悪いって言って聞きます?」
「さてな」

これが返事だった。
「そんなことはどうでもいいのじゃ。それでじゃ」

無茶苦茶な話は続く。
「予定通り竹島で実験をやる」
「だから博士、それは」
「流石に止めようとする。」

「外交問題になりますよ」
「気にするな。些細なことじゃ」

こうしてチタデレ作戦を翌日発動させた。新聞やネットどころか世界中がまたしても大騒ぎになったのは言うまでもない。つくづく

滅茶苦茶な博士だった。

第二十九話 完

2007・4・25

第三十話

第三十話 暫し休戦

「ということだから」

「またしても世界を大騒ぎにさせる騒動を引き起こしてしまった博士は遂に人工衛星に乗せて宇宙に隔離されることになった。小田切君はわざわざ塾まで来て六人に説明する。

「博士暫く戻って来ないんで。休戦になったから」

「宇宙空間ねえ」

「それを聞いた時点で六人は空いた口が塞がらなかった。

「何か極端ね」

「まあ仕方ないって言えば仕方ないわね」

「梨花に美樹が言う。

「いきなり竹島で巨大怪獣上陸させて大きくさせて怪獣の島にしちやったら」

「そうね」

「そういえばあの島どうなるのかしら」

「春奈はここでふと思った。

「怪獣さん達がいたら誰も近寄れないわね」

「そうよね」

「赤音はその言葉に頷く。

「どっかの映画とか特撮番組で出て来た怪獣もかなりいるし」

「ああ、博士の知り合いの悪質な宇宙人も一杯来ているから」

「小田切君はさりげなくとんでもないことを言う。

「近寄ったら本当に命の危険どころじゃないよ」

「悪質な宇宙人ねえ」

「華奈子はそれを聞いて腕を組んで眉を顰めさせる。

「そのうち何処から光の巨人でも来るんじゃないかしら」

「まあそうなったら完全に私達の問題じゃないわね」

美奈子も言う。そのうえで小田切君は彼女達に語る。

「だから博士は宇宙に隔離されたから。暫く会えないよ」

「暫くなの？」

華奈子がそれに問う。

「宇宙だったら普通絶対に帰られないんじゃない？」

「ああ、それは大丈夫」

小田切君は首を横に振ってコメントする。それについては完全に安心しているようであった。

「博士は宇宙空間でも何処でも平気で帰って来る人だからね」

「何か滅茶苦茶ですね」

美奈子はそれを聞いて華奈子と同じ顔になった。その顔つきもよく見れば華奈子のそれとよく似ている。やはり双子であった。

「それって」

「まあねえ。とにかく帰って来るまでは停戦ね」

「はい」

「ところで小田切さん」

華奈子がここで小田切君に問うてきた。

「何かな」

「何でここにあたし達がいるってわかったんですか？」

「ああ、それは簡単だよ」

小田切君はその質問に答える。

「この先生も博士と戦ったことがあるから。それで知り合いだったんだ」

「そうだったんですか」

「うん。だからまた何かあったら宜しくね」

「はあ」

何気に多くの人と戦った経験のある博士なのであった。何はともあれ一時は街と地球に平穏が戻りそうであった。本当に一時だけなのであるが。

第三十話

完

2
0
7
・
4
・
2
5

第三十一話

第三十一話 静かになって

博士がいなくなると街は急に静かになった。華奈子達もそれにより暇を急に持て余すようになってしまった。これは六人にとっては意外であった。

「本当ならここであれよ」

美奈子が二人の部屋で華奈子に言う。

「新しい技の勉強とか修行とか」

「するところだけけどね」

華奈子も言葉を返す。二人は私服で話をしている。

「本人が宇宙に隔離されちゃったからね」

「流石にこれは考えていなかったわよ」

美奈子は困った顔でまた言う。

「あの島を怪獣ランドにしちゃうし」

「そうよね。洒落にならない位やばい宇宙人まで一杯入り込んでいるし」

「ええ。まああの部屋は置いておいてね」

美奈子はそこから話を移しかかった。

「私達じゃどうにもならないし」

「光の巨人さん達よね」

「そういうこと。別に巨人があそこでキャンプしても心からどうでもいいけれど」

美奈子も華奈子も巨人が大嫌いだ。二人は実は横浜ファンなのである。なお他の四人もそれぞれ巨人が嫌いだった。あの博士に至ってはドームを実験場にしようとしたことすらある。これに関しては彼女達の心は同じであった。博士に関してはそれが物騒になるが。

「とにかくね。相手がいないから」

「どうしよう、暫く」

「そうね。何でもすぐに帰って来るそうだけれど」

小田切君の言葉では、である。あの博士には常識は通用しないのでこれに関しては疑ってはいない。信じられなくてもだ。

「それまで。どうしようかしら」

「そうよね」

華奈子もそれには首を傾げさせる。

「遊園地で遊ぶ？」

「遊園地で」

「ええ。それはどうかしら」

こう美奈子に提案してきた。

「平和にね」

「そうね。それいいかも」

美奈子もそれに同意して頷いてきた。

「最近あの変態博士に気を取られてばかりだったしね。ここは楽しく」

「それじゃあ決まりね。じゃあ」

「ええ」

こうしておおよその話が決まった。しかしここで華奈子はふと気付いた。

「けれど」

「何かあるの？」

「六人で行くにしてもね」

彼女は言う。

「保護者同伴じゃなきゃやっぱり危ないかな。最近そついうの五月蠅いし」

「そうね。それじゃあ先生も誘ってみる？」

今田先生のことである。

「駄目だったら駄目でまた誰かに頼めばいいし。お母さんにも」
「ええ。それじゃあ」

「遊びましょう」

こうして彼女達は遊園地に向かうことになった。久し振りに彼女達も楽しい日々を迎えることになったのであった。話は順調に進んだ。

第三十一話 完

2007・5・2

第三十二話

第三十二話 主のいない研究所

見事宇宙に隔離された人類史上初の罪人となった博士であったが小田切君達には何のお咎めもなかった。小田切君もこれにはまずは安心していった。

「とりあえずよかったね」
「うん」

彼は自分のアパートと研究所を行き来する生活をしていった。主がいなくても掃除等はちゃんとしていたのである。給料は自動的に振り込まれているから生活には困ってはいない。むしろトラブルフリーエイターがいなくなつて平穏な日々が来た程である。

そこでタロ弟、ライゾウ兄と一緒にいた。一人と二匹で穏やかな日常を過ごしていた。彼はその中でタロ弟と話をしていたので。当然ライゾウ兄も一緒にいる。

「しかし。裁判中に宇宙に抑留なんて政府も滅茶苦茶やるよな」
「まあ仕方ないね」

小田切君はそのライゾウ兄に伝える。
「幾ら何でもあんなことしたら。本当にウルトラ ンの映画版になりそうだし」

「そうだよな」
「何するかと思つたらあんなことしたからなあ」

二匹もその言葉に同意して頷く。どうやっても弁護の余地がないものだった。

「政府としてはそのまま宇宙に隔離したいみたいだね」

「日本政府だけかね」

「国連かも」

「まあどっちでもいいよ」

とりあえずそれは置いた。

「とにかく。暫くはいないからな」

「またとんでもないことやって帰って来るんだろっけれどな」
「それまではね」

二匹はまた言う絶対には抜け出てくると確信していた。そうさせるものがあの博士にはあるからこれも疑う余地がなかった。何処までも変な意味で信頼のある博士であった。

「暇になつていいか」

「そうだね」

「それでさ、小田切君」

「夕口弟がここで言う」

「暫く遊ばないか？」

「遊ぶ？」

「映画とか観たりさ」

「お酒飲んだり」

「夕口弟も言ってきた」

「そうして骨休めするといいいんじゃないかな」

「そうだな。あの博士が戻って来るまでは」

「そうだね。それじゃあ」

「小田切君もそれに頷く。そうしてまた言う」

「お酒たっぷり買って」

「今日は飲み明かそうぜ」

「焼肉でね」

「うん、そうだね」

「二匹の言葉に笑顔で頷く」

「じゃあビールとかチューハイとか一杯買って」

「肉に」

「冷麺に」

「話はどんどん進んでいく。彼等も鬼のいぬ間にといつやつだった」

「とにかく楽しくおかしく」

「過ぎそうか」

「よし！」

彼等は彼等で楽しい日々に入る。どうせすぐに消え去る平和な日常だからこそ。思いきり楽しむもりだった。刹那的だがそれでいてかけがえのない楽しみであった。

第三十二話

完

2007・5・2

第三十三話

第三十三話 隔離されている人

ここで渦中の人物である。天本博士は見事に宇宙に隔離されていた。その管理は日本政府が行っていたがこの世界史上最悪のトラブルクリエイターを管理するにあたって日本政府は国連及び各国政府から様々なものを得ていた。

まず常任理事国の椅子に尖閣諸島、北方領土の日本領への正式決定等であった。各国との通商条約も日本に有利なものにあらためられていた。しかも誰もこのことに不平は言わないのもまた凄い話であった。

「あんな厄介者を抱え込む位なら」

「この程度安いものだ」

「日本にくれてやれ」

これを堂々と日本は公の場で言われたのだ。あまりと言えばあまりだったが博士の国籍が日本なので拒むこともできなかったのだ。何処までも日本にとって不利な話であった。しかも竹島の問題はなかったことになっていた。

「あそこどの国の領土だ？」

「エン ラー星人じゃないのか？」

「ゴジ だろ？」

どちらにしろ誰も手出し不可能な怪獣ランドになっていたのだ。これでどうして領土問題の解決ができようか。島では毎日光の巨人達が戦っていた。

そんな大騒ぎを引き起こした博士は人工衛星の中でくつろいでいた。至って平気である。

「今夜の夕食は何じゃ？」

「ラムノステーキデス」

そうロボットから言われた。内装は一軒家の衛星の中で平気で暮

らしていた。

「ふむ。そしてワインは」

「トカイデス」

何気にかなりいい暮らしをしている。そんな中で博士はやはり平気な顔であった。

「さてと」

「何デシヨウカ」

「御主はそんな姿のまままでよいのか？」

そうロボットに尋ねてきた。

「どうじゃ？格好よく性能アップしてやるぞ」

「トイッテモ機会八何モ」

「それはある」

またポケットから不意に様々な機械を出してきた。そのうえで言う。

「だから。安心せい」

「ワカリマシタ。ソレデハ」

「そろそろここの生活にも飽きたしもう」

やはり何の反省もしていない。そもそも日本政府も博士が反省するわけがないのがわかっていいるからこそ宇宙空間に送り込んだのだ。しかし甘かった。

「帰るとするか」

「ソレデ部品ハドウスルノデスカ？」

「そんなものは何処にでもある」

博士はやはり平気な顔で答えてきた。

「この人工衛星を使ってな。無駄にはせんわ」
「成程」

「地球に帰ったらパエリアじゃ」

大好物のことを想う。

「そうしてスペインの赤ワインとでな」

「ソレデハ博士」

何時の間にか博士に寝返っているロボットが応える。

「早く地球へ」

「まあ焦るな」

博士は笑顔でそう返す。

「その前に余興として」

またよからぬことを考えていた。結局この博士を何とかしようと思えばブラックホールの中に放り込むしかないようであった。

第三十三話

完

2007・5・9

第三十四話

第三十四話 遊園地へ行く前に

「さてと」

博士がいなくなり暇になった華奈子達は遊園地で遊ぶことにした。華奈子は美奈子と二人で遊園地を持って行くお弁当のことを考えていた。

「何作る？」

「そうね」

美奈子がそれに応える。彼女は彼女で考えていた。

「お握りなんてどうかしら」

「悪くないわね」

華奈子はそれに頷いてきた。こうした場合の定番であり確かに悪くはない。

「それじゃあそれにする？」

「そうね。けれど」

しかしここで美奈子はあることを考えていた。

「ただ普通のお握りじゃ面白くないわね」

「普通のじゃ？」

「ほら、おかかとか昆布とか梅干とか」

やはり中身も定番であった。

「普通にやっても。あれでしょ」

「面白くないと」

「折角だから面白くいきましょうよ」

美奈子は言う。

「こつ派手にね」

「それじゃあさ」

華奈子はそれに応えて言ってきた。

「馬鹿でかい爆弾みたいなお握りどう？」

「爆弾みたいなの？」

「そう。とんでもなく大きなボールみたいなお握りを作ってそれを海苔で巻いて」

「具は？」

「何でも」

また提案してきた。

「梅干でもタラコでも海老天でも何でも入れて。どう？」

「そうね」

美奈子もそれに乗り気な顔を見せてきた。言われてみれば悪くはない。

「若布とか大豆とか麦入れたのとかでもいいし」

「それもいいわね」

何か考えれば考える程いい。美奈子もそれに乗ってきた。

「それじゃあそれで行く？」

「ええ。それじゃあ決まりね」

こうしてお握りを作ることになった。しかし問題はまだあった。

「けれど華奈子」

美奈子はふと思いついたように華奈子に言ってきた。

「何？」

「持ち運び結構大変そうね」

「まあそれはね」

少し苦笑いを述べて双子の相方に応える。

「食べれば楽になるわよ。きっと」

「あっきた」

美奈子はそれを聞いて本当に呆れたような顔を見せてきた。

「それまでは辛いわよ」

「まあまあ。いいじゃない」

しかし美奈子も何だかんだで納得した。何はともあれお握りが決まったのであった。

第三十四話

完

2
0
7
・
5
・
9

第三十五話

第三十五話 ホットパンツ

いざ遊園地へ。六人はまず駅に集まった。見れば皆かなりお洒落をしている。

「何かいい感じね」

華奈子は自分も含めて皆のその姿を見てわらってきた。

「決まってるわよ」

「ありがとう」

梨花が華奈子のその言葉に応えて笑う。

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

「私もね」

美樹も言ってきた。

「何かお洒落したかいがあるわ」

「けれど二人って」

「赤音ちゃんもね」

ここで春奈と美奈子が言う。

「ズボンばかりよね」

「ねえ」

「まあこれはね」

「好きだから」

梨花と美樹は笑って二人に答える。見れば梨花は黒いズボン、美樹は青のジーンズだ。それで赤音は膝までの赤いキュロット。それそれかなり似合っている。

「私も」

赤音もにこりと笑って述べる。

「動きやすいじゃない」

「確かにね」

華奈子が三人の言葉に頷いて微笑む。

「そういえばあたしもズボン多いしね」

「今日だってそうじゃない」

美奈子が華奈子に顔を向ける。見れば華奈子は黄色いホットパンツだ。白い素足が実に健康的で華奈子の個性をよく現わしていた。なお春奈は膝までの子供服のスカートで美奈子は清楚な白いロングスカートである。こちらそれぞれ個性が出ている。

「あんたも」

「まあね」

華奈この方でもそれを否定しない。

「だって動きやすいし」

「確かにそうだけれど」

「何かかなり派手よね」

春奈と美奈子は華奈子の素足を見て言う。しかも上着はタンクトップで露出多めである。

「危ないわよ」

美奈子は怪訝な目で注意した。

「痴漢とかは」

「大丈夫でしょ」

しかし華奈子は根拠のない言葉で返した。

「子供なのに」

「子供でも危ないのよ」

美奈子は能天気な華奈子にまた言う。

「変な人って多いわよ」

「そうならあれよ」

相変わらず能天気に戻す。

「魔法だね。やっつけちゃうから」

「やれやれ。本当にお気楽なんだから」

そんな双子の姉妹に対して呆れた声を送る。けれども美奈子の顔は微笑んでいた。

第三十五話

完

2007・5・16

第三十六話

第三十六話

引率者

「困った時は魔法でね」

華奈子はまた美奈子に対して言う。

「やっつけちゃおうよ」

「いざって時はね。けれど」

美奈子は真面目な顔で華奈子に念を押ししてきた。

「いざっていう時だけよ、いいわね」

「わかってるって」

何ともわかっていない返事が返ってきた。

「だからお気楽に行きましょう」

「そうです。遊園地ですから」

ここで誰かの声がした。

「誰!？」

「皆さん」

出て来たのは今田先生であった。ふわふわせ清楚な白のワンピースを着ている。如何にも良家のお嬢様といった感じである。右手のバスケットボックスが完璧であった。

「私も一緒に」

「先生もですか」

「はい」

にこりと笑って六人に述べる。

「引率者ということ。駄目ですか？」

「いえ、全然」

「まさか先生までなんて」

皆先生のごことが大好きだ。断る筈もない。しかし謎があった。どうして先生がここにいいのかという問題である。それが謎だったのだ。

「どうしてここに」

華奈子が皆を代表して尋ねた。

「あたし達が遊園地に行くってわかったんですか？」

「御聞きしていました」

それに対する先生の答えは実にシンプルなものであった。

「聞いていたって」

「それじゃあ」

「はい、塾で」

何と塾での打ち合わせを聞いていたのであった。そうとわかれば実に簡単な種明かしである。何事もえてしてそうしたものであるが。

「申し訳ありませんが小耳に挟みました」

「そうだったんですか」

「それで」

これで納得した。そうとわかれば何ということはないことであった。

「それですね」

先生はまた六人に尋ねてきた。

「先生も一緒に。いいでしょうか」

「勿論ですよ」

返事は変わらなかった。

「じゃあ先生も一緒に」

「七人で」

「はい」

先生もにこりと笑って答えてきた。

「じゃあ皆さん、今日は特別課外授業です。いいですね」

「わかりました！」

先生と一緒にになった六人はそのまま笑顔で電車に乗り込む。こうして遊園地での話が始まったのであった。

第三十六話

完

2
0
0
7
・
5
・
1
6

第三十七話

第三十七話　メリーゴーランド

六人と先生が最初にやって来たのはメリーゴーランドだった。まずはオーソドックスなメリーゴーランドであった。

「とりあえずさ」

華奈子が五人に声をかける。

「最初はここだね」

「ええ」

五人は華奈子のその言葉に頷く。しかしここで先生が言うのだった。

「普通に回ってもあれですね」

「先生」

「それだけでは面白くないような気がしませんか？」

「言われてみれば」

何となく先生の言葉に応える。

「そうかも」

「けれど先生」

美奈子はその先生に尋ねる。

「それはいいですけどね。どうやるんですか？」

「やっぱりここはあれです」

先生は美奈子ににこりと笑って答える。

「あれ？」

「そうですね、魔法です」

そういうことであった。やはり先生は魔女であった。だからここで考えるのもそれであった。

「それを使って楽しくしませんか？」

「けれど先生」

しかし華奈子が首を傾げて先生に言ってきた。

「あたし達の魔法じゃかえって危ないかも」
「そうよね」

美奈子が双子の言葉に頷く。

「火とかそうというのは。下手をすると」

「大丈夫です」

だが先生の顔はいつもと変わらないにこやかなものであった。その顔で六人に言うのだ。

「先生が魔法を使います」

「先生が!？」

「はい」

驚く六人にまた答える。

「ですから。御安心下さい」

「先生がですか」

実は六人は先生の魔法を見たことがあまりないのだ。噂では凄いと聞いていても。

「そうです。では皆さん」

「は、はい」

また先生に応える。

「早くメリーゴーランドへ」

「わかりました」

「それじゃあ」

六人はそのままメリーゴーランドに向かう。ところが。

「えっ」

「まさか」

「はい」

何と先生もだ。にこやかに機械の馬に乗っている。

「それでは。いいですね」

その笑みのまま魔法を使い始める。するとめくるめく魔法の世界が広がった。

第三十七話

完

2
0
7
・
5
・
2
3

第三十八話

第三十八話　　メリーゴーランドは華や

かに

六人が驚いたのは他でもない。先生もいるからだ。

「いいんですか」

「あの、先生もって」

「それが何か？」

しかし先生はにこやかな笑みのままである。その笑みで六人に言うのだ。

「いえ、だって」

「先生は外で魔法を使うものとはかり」

「それが違うのです」

しかし先生はまた述べる。

「違うんですか!？」

「はい。この場合の魔法はですね」

「ええ」

「中に入って使うのもいいんですよ」

「中で、ですか」

「そう、例えば」

そうして先生は六人に説明する。既にメリーゴーランドは動きはじめ華やかな曲が聴こえている。先生はその中で六人に対して言うのである。

「強い相手がいますよね」

「ええ。それは」

言つまでもなくこの前博士が出してきたあのエンペライザーである。

「そうした相手も中に入って」

「中に入って」

「魔法を使うと全然違うのですよ」

何と先生は六人にそれを教えてきたのだ。意外な場面での教育であつた。

「外は幾ら堅固でも中は違いますから」

「はあ」

「それも半端なことではいけないのです」

先生はこつも付け加えてきた。

「半端じゃ、ですか」

「やるなら全力です」

先生の持論であつた。生徒達にはいつも力一杯魔法を使うよう教えているのである。

「そうすればどんな相手でも」

「ダメージを与えられる」

「はい、わかりましたね」

そこまで言つたうえで六人に問う。

「今日の授業は」

「今日って授業だつたんですか」

華奈子はその言葉に少しきよんとした。言われてみれば課外授業になつている。

「そつえば」

「そつですよ」

また華奈子に答える。

「では。今度は先生が」

「先生が」

「皆さんに魔法を披露します。それでは」

一瞬で法衣になる。虹色の法衣、それは魔女として最高位にある証だ。実は法衣の色はランクになつていて一面もある。普通の色は華奈子達それぞれが使つていて、ことからわかるように誰でも自由に決められる。しかし一ランク上になると自由な色からそこに黒いラインが一本は入る。もう一つ上は白、それから胴、銀、金となつ

ていくのだ。そうして銀色の法衣から金色の法衣になり金と銀、金銀銅三色、そこに虹色のラインが入って最後が虹色の華やかな法衣だ。先生の着ているのはその最高位のものだったのだ。

「では」
杖が煌く。今先生の魔法が放たれた。

第三十八話 完

2007・5・23

第三十九話

第三十九話 星の魔法

先生の魔法は星の魔法だった。それは。

「うわ……………」

「凄い……………」

六人はまずは我が目を疑った。そこにあるのはメリーゴーランドに舞う星達だったのだ。まばゆいばかりの光が華やかさを映し出していたのだ。

「これが先生の魔法ですか」

「お星様の」

「お星様は一つでは輝かないのですよ」

先生は六人のにこりと笑って述べる。

「一つでは？」

「そうです」

華奈子に対して述べる。

「華奈子さんは火ですね」

「はい」

先生の言葉に頷く。彼女の得意な魔法は当然ながら知っている。

「そうですけれど」

「お星様は火だけではできないのです」

「火だけじゃ」

「水も必要です」

春奈に顔を向けての言葉だった。

「お水も」

「光も風も」

赤音と美樹も見る。そうして。

「土もです」

「土も」

梨花もまた。最後に見たのは。

「音もですよ」

「私達のもの全てを」

「そうなのです。全てが合わされば」

「合わされば？」

「外に何があるうと問題ではなくなるのです」

メリーゴーランドの中で六人に語る。幻想的なメリーゴーランドがさらに現実離れたものになる。それはまるで夢幻の世界のようであった。

「どんな護りも」

「あつ、じゃあ」

華奈子も他の五人もようやく気付いた。それは顔に出ていた。

「あの博士にも」

「はい。対抗できますよ」

にこりと笑って述べる。六人に自信を与えるかのように。

「絶対に」

「じゃあさ」

赤音は先生の今の言葉に喜びの声をあげた。

「そうね。前みたいなのは」

「ええ。これであの博士にも」

「ただ」

美樹と美奈子も声をあげたところで先生はまた言った。

「ただ？」

「一つでは駄目です」

それが先生の言葉だった。にこやかだがしつかりとした声だった。その声は六人の心の奥底にまで静かに染み渡るものであった。

2
0
0
7
·
8
·
2
9

第四十話

第四十話

六人の力

「いいでしょうか」

「は、はい」

六人は先生の言葉に耳を澄ます。その言葉を待つ。

「貴女達は一つになって」

「一つになって？」

「そう、魔法を一つにするのです」

六人に対して言葉を続ける。

「そうすればお星様になります」

「お星様が。あたし達の魔法が」

華奈子は先生の言葉を聞いて呟いた。

「お星様になるのね」

「そうね」

それに美奈子が応えて頷く。

「皆の力を合わせると。そうすれば」

「あの博士にだって」

「天本さんですよ」

何と先生も博士の名前を知っていた。

「あの人は。素晴らしい人です」

「素晴らしいのかな」

「さあ」

幾ら先生の言葉とはいえ流石に素晴らしいというのには懐疑的だった。博士の破天荒さと滅茶苦茶さは六人も知ってしまったからだ。

「異常っていうか」

「そうよね」

「何度かお手合わせしたことがあります」

澄んだ笑みで何気にとんでもない発言を出してきた。

「今度は貴女達が。けれど一人では」

「はい」

美奈子が強い言葉で頷く。六人を代表するかのように。

「あの博士には対抗できません。ですから」

「そうよね」

華奈子も言う。そうして美奈子の言葉に頷く。

「じゃあ決まりね。これからは」

「六人で」

「おわかりですね」

先生は意を決した六人の顔を見てまた言う。その優しい笑みで。

「そうしてきつと」

「やりますっ」

「絶対に」

華奈子と美奈子だけではない。六人の言葉が完全に重なった。

「きつと。ですから」

「明日から。忙しくなりますね」

「けれど。それがいいんです」

華奈子は受け入れる。それが彼女達の望みだからこそ。

「あの博士を止めますよ」

「絶対に」

「頑張つて下さい」

こうして六人の特訓がはじまることになった。意を決した彼女達に恐れるものはなかった。しかし彼女達だけのことではないのだ。

相手もいるのだ。

災厄は着々と復活の用意をしていた。それに気付く者はまだ誰もいなかった。

2
0
0
7
·
8
·
2
9

第四十一話

第四十一話 宇宙で

大騒動を起こした末に今度は宇宙空間に隔離された天本博士。しかしやはりと言うべきか予定事項と言うべきか全然懲りても反省し
てもいなかった。

「全く以ってけしからん」

携帯で小田切君に電話をする。

「わしのような天才をこのような場所に置くとは。そう思うだろう」
「そうですか」

小田切君は携帯に出ながら博士に対応する。

「そうじゃ。この前は南極だったしな」

「それで今度は宇宙空間ですよね」

「わしは怒っておるのじゃ」

「わかりました。けれど」

「けれど。何じゃ？」

小田切君の問いに顔を向けてきた。

「言いたいことがあるのなら申してみよ」

「博士今宇宙空間にいるんですよね」

「正確には人工衛星の中じゃ」

正直に答えてきた。

「それがどうしたのじゃ？」

「何で携帯が通じるんですか？」

それを尋ねてきた。

「すごい不思議なんですけれど。どうして電波が」

「わしが開発した携帯じゃ」

博士はその問いに誇らしげに答えてきた。

「博士がですか」

「そうじゃ。このわしが開発したのじゃ。例え冥王星からでも電波

が届くぞ」

「はあ」

小田切君も驚きであった。何だかんだでこの博士の開発はやはり凄いものがある。問題はその使い道なのであるが。こればかりはど
うしようもない。

「けしからんが。わしは決めたぞ」

「何をですか？」

「地球に帰る」

いきなり言い出してきた。

「わかったな。わしは今から帰るぞ」

「どうやってですか？」

博士に対して問い返す。

「どうやってとは？」

「ですから。今博士宇宙ですよね」

「如何にも」

何の迷いもない言葉であった。

「星がやけに綺麗じゃ。一度見てみたいと思っておった」

「それでどうやって帰るんですか？無理でしょ」

「安心せい」

ところが博士はそんなことは意に介してはいなかった。相変わら
ず平気な顔である。

「大したことはないわ」

「宇宙空間ですか」

「うむ。その証拠にじゃ」

懐から何かを出してきた。

「今からわしが乗っている人工衛星を改造する」

「えっ!？」

博士が何を言っているのか咄嗟にはわからなかった。

「今何て」

「だから人工衛星を改造すると言っておるのじゃ」

またそう言う。

「まあ見ておれ」

また災厄が動きはじめた。恐ろしい災厄が。

第四十一話 完

2007・9・6

第四十二話

第四十二話 改造

「さてと、じゃ」

取り出してきたのは一つではなかった。色々ある。

「この人工衛星を宇宙船に改造してやるぞ」

「幾ら何でもそれは無理ですよ」

小田切君はそう博士に告げる。

「人工衛星を宇宙船にだなんて。しかもそれで帰るんですよ」

「そうじゃ」

また平気な顔で答える。

「その為に改造するんじゃないからな」

「あの、無理をせずに普通に帰られてはどうですか？」

小田切君は博士にそう勧めた。もっともこの博士の辞書に普通とか常識とかそうした言葉は一切存在しないのであるが。ついでに言えば不可能という言葉もない。

「ここはやっぱり」

「普通にやっても面白くも何ともないわ」

やはり博士はこう言うのだった。

「そうじゃろう？やはりここはわしらしくな」

「博士らしくですか」

「壮大に行く」

またしても無茶苦茶を言う。

「見ておれ。この宇宙船はヤトにしておこう」

「今度はそれですか」

「何ならまほばにしておくが？」

「いえ、そこまではいいです」

正直そこまで興味はなかった。

「とにかく。帰られても大変ですよ」

「何かあるのか？」

「だって。警察や自衛隊が」

相変わらず国家権力に徹底的にマークされている彼であった。それを気にするところが全くないのも彼なのであるが。困ったことに。

「マークしていますし」

「今更怖くとも何ともないのう」

やはり博士はこう答えた。

「今更のう」

「やっぱりそうですか」

「あの小娘達もおるんじゃない？」

今度は華奈子達に関して尋ねてきた。

「相も変わらず」

「今遊園地にいますけれど」

実は遊園地から電話の対応をしているのだ。何故か私服の怪しげな男達が周りに寄ってきている。実は小田切君は常に重要参考人扱いの身分だったりする。

「魔法の先生と楽しく遊んでいますよ」

「結構結構」

博士はその言葉を聞いて大いに笑う。

「子供も大人も遊ばなくてはな。わしも」

「遊ばれるんですか」

「その通りじゃ」

また小田切君に答える。

「じゃから。待っておれよ」

「帰られるのは何時ですか？」

「三日後じゃ」

それを聞いた周りの私服の人達の顔が一変する。

「わかったな」

「わかりました。それじゃあ」

電話を切る。それと同時に重要参考人として警察に呼ばれる小田

切君であつた。彼も何かと大変な御身分であつた。

第四十二話 完

2007・9・6

第四十三話

第四十三話 悪夢のはじまり

「さて、と」

博士は早速よからぬことをはじめた。

「まずは、じゃ」

いきなり宇宙服を取り出すと着込む。そうして外に出る。そこから作業に入る。すぐに人工衛星は宇宙船となった。それを見届けると電話した。相手は勿論小田切君である。

「わしじゃが」

「博士ですか」

返ってきた声は不機嫌そのものであった。

「一体何の用ですか？」

「何じゃ、不機嫌そうじゃな」

「当たり前です」

電話の向こうの小田切君は慥然として答える。

「今から重要参考人で警察ですから」

「むっ、今からか」

「そうですよ」

やはり慥然として答える。

「博士が電話してくれたおかげで」

「些細なことではないか」

「電話した人が博士なんで」

結局はこういうことであった。

「それで今からですか」

「うむ、帰るぞ」

周りの警官達がそれを聞いて騒然となった。すぐにあちこちに電話をかける。

「今からな。待っておれ」

「そうですね。あの」
「うむ。今度は何じゃ？」
「今からそっちにですね」
小田切君は言う。
「ミサイル向かいますから」
「ミサイルだと？」
「はい。ですから御気をつけて」
「ああ、小田切君」
博士はミサイルと聞いても驚かずまだ小田切君に声をかける。
「何ですか？これからパトカーに乗るのに」
「夕食はハヤシライスを頼むぞ」
「勝手に作っておいて下さい」
小田切君の返事は素っ気無い。博士はそれにクレームをつける。
「ちと冷たいのではないのか？」
「だから今晚は僕留置所なんですよっ」
声が激昂した。
「だから駄目なんですよ」
「何だ、それでは」
博士はそれを聞いて言う。
「自分で何か作るとするか」
「それが嫌なら食べて来て下さい」
「うむ、わかった」
「それじゃあ」
電話が切られる。こうしていよいよ博士の地球への帰還がはじまったのであった。恐るべき悪夢がいよいよ戻ろうとしていたのである。

2
0
0
7
·
9
·
1
3

第四十四話

第四十四話 ミサイル

宇宙船を作り地球に戻ることにした天本博士。だがそんな彼に対して地球の人達の反応は冷ややかというものではなかった。

ミサイルが本当に来たのだ。それも無数に。
「本当に来るとはのう」

博士はそのミサイルを見ても平気な顔である。宇宙船は何か得体の知れない不気味な構造になっていた。しかも元の人工衛星より遙かに大きい。何故そんなふうになってしまったのかは博士だけが知っている怪奇現象である。

「ふむ。しかし」

目を光らせて言う。

「この程度でわしを倒せるものかのう」

ニヤリと不敵に笑った。すると。

いきなり宇宙船からブラックホールを発射した。それでミサイルを全て消し去ってしまったのであった。それも一瞬で、である。

「見たか。この程度ではわしは倒せぬは」

彼にとっては造作もないことであつた。しかしそれはミサイルを発射した方にとってはたまつたものではなかつた。

「何っ！ミサイルが一瞬で！」

「あの博士は健在か！」

「そのまま地上に向かつています！」

NA Aではもう宇宙怪獣が来たような騒ぎであつた。あげくにはとんでもないことまで言い出す研究員まで出て来ていた。

「ウルトラ 呼べ！」

「皆帰ってます！ペラー 人いなくなつて！」

「じゃあ飯 イーだ！誰がいるだろう！」

「今電車に乗って過去に皆行っています！」

「全員か！」

「はい、全員です！」

最早絶望的な状況であった。打つ手がない。

「誰もいません！」

「じゃあこのままあの博士を地球に戻すのか！」

「クラウンに任せるしか」

「ううむ」

皆そう決断せざるを得ない状況に腕を組んだ。

「参ったな」

「ミサイルもうないですね。それにあっても」

「下手をしたら地球にブラックホールを撃つな」

「ええ」

そういう博士である。常識は一切通用しないのだ。

「もう諦めましょう。後は日本に任せて」

「そうだな」

皆やけに軽く賛成した。実は今ここにいるのはあの五大国の人間だけで日本人は一人もいないのである。もっともいても同じであるが。

「あの博士は日本人だしな」

「そうですよ。ここは日本の主権を尊重して」

普段はそんなもの一切尊重しないがこの場合は別であった。とにかく身勝手な五大国の面々であった。

「任せましょう」

「よしっ、それじゃあ」

彼等は急に明るい顔になって言い合う。

「寝るか」

「はい」

「日本に期待して」

無責任に寝てしまった。なおその話を聞いた日本は。

「大変だ！折角宇宙に追い出したのに！」

「くそっ！あいつ等またこっちに厄介ごとを！」
火宅になっていた。不幸とはえてして帰って来るものである。

第四十四話 完

2007・9・13

第四十五話

第四十五話 短い春

悪夢の帰還を何とかしてかわしたい日本政府。上から下まで大騒ぎであった。

「とにかくだ！」

首相官邸は最早非常態勢であった。地震が起こってもこうなるのか。

「今はあの博士を止めることを考える！」

「無論です！」

閣僚達が首相の決死の言葉に応える。皆命をかけるつもりだった。

「あの博士が帰ってきたら何をするかわからん！下手をすれば」

「下手をすれば」

「平気で日本全土を実験材料にする！竹島を忘れるな！」

「ええ！」

「では自衛隊を！」

「全軍デフコンエーだ！」

よりによってこれである。

「陸空海全てを動員して博士の帰還を許すな！」

「若し帰還した場合は！」

「北朝鮮に誘導しろ！」

さりげなく無責任なことを言う首相であった。

「毒を以って毒を制すだ！」

「毒ですか」

「では聞くがあの博士は何だ？」

見事なまでに答えが一つしかない質問であった。

「何に見える？」

「猛毒です」

防衛大臣が答えた。

「それ以外の何者でもありません」

「そうだな。あの博士はまさに猛毒だ。というよりは爆弾だ」
「全くです」

「それも核爆弾です」

「我が国は核兵器は持たない」

勝手に居座っている核兵器もこの際不要だというのだ。そもそも何の解決法もないのであるが今までいなくなっただけでほっと一息ついていた頃だったのだ。

「そういうことだ。だからこそ」

「今ここで」

「何としても止めるんだ」

首相は念を押す。

「我が国の為にも」

「しかしですね」

ここで閣僚の一人が根本的な疑問を述べる。

「何だ？」

「何でまた戻って来たんでしょう、あの博士は」

「宇宙での暮らしに飽きたんだろう」

首相はぶしつけにそう答えた。

「南極の時と同じでな」

「それだけですか？」

「あの博士のやることに理由があるか？」

首相はまた問い返した。

「あるのかないのか」

「そんなことは考えたくもありません」

またしてもとんでもない返答だった。だがそれで充分なのだから物凄い。

「あの博士のことは」

「私も同感だ。そういうことだ」

「はあ」

「しかし」

首相は「ここであらためて溜息をつく。

「短い春だったな」

「残念です」

これはそこにいる全ての者に共通する考えだった。博士のいない日本の春は実に短い一時であった。

第四十五話

完

2007・9・19

第四十六話

第四十六話 迎撃

遂に大気圏を越えた博士。その瞬間にまたしてもミサイルの先例を受けた。

「ふむ」

宇宙船に迫るミサイルの嵐を見ても冷静であった。

「このミサイルは自衛隊じゃな」

至って落ち着いている。その落ち着きのまま宇宙船の中のボタンを一つ軽く押すのだった。やったことはそれだけであった。

「これでよい」

後は寝転がった。そのまま寝るつもりにも見えた。

見れば宇宙船から無数のミサイルが発射された。それで自衛隊のミサイルを全て撃墜してしまったのだった。

「この程度か。面白くないのう」

あっという間にミサイルがなくなったのを見て欠伸さえ浮かべた。

「自衛隊というのは。どうしてこんなに気合が入っておらんのか」

「馬鹿な！今のミサイルを！」

「全て迎撃しただと！」

「言ってやるわ」

驚く自衛隊の面々に放送を入れる。携帯で軽い調子で。

「げっ、この声は！」

「何故我が自衛隊の極秘通信網を！」

「何が極秘じゃ」

驚く彼等に対して言うのだった。

「ずっと知っておったわ。ハッキングでな」

「くっ、凶悪犯め」

「何と恐ろしいことを」

「凶悪犯じゃと？聞き捨ての悪いことを」

悪事とかそうしたこととは博士にとってはどうでもよかった。ついでに言えばそもそもハッキング自体が博士にとっては鼻をかむよりも些細なことであったりする。

「ハッキング位で。既に全部のデータは内緒で収集させてもらって
おるわ」

「何という……」

「恐ろしい博士だ」

「それでじゃ」

驚いたままの自衛隊の上層部に対して言った。

「何じゃ今のミサイルは」

「何じゃ!？」

「えらい物言いだな」

「当たり前じゃ。かつての日本軍を見習え」

かなり無茶を言う。

「あの程度でわしを倒そうなどは片腹痛いわ」

「くっ!」

「言わせておけば」

「さあ今度は何じゃ？」

あからさまに自衛隊を挑発する。北朝鮮以上に。

「わしを倒すには核ミサイルでもな」

「面白い!その言葉乗った!」

「その声は」

博士も聞き覚えのある声であった。

「今の首相か」

「博士!戦場を指定する!」

専用の通信で博士に対して言うのだった。

「朝鮮半島の北部だ!いいな!」

「面白いのう」

博士はその言葉を不敵な笑みと共に受けた。

「ではそこに行こうぞ」

「よし！」

さりげなく誘導される博士であった。こうして半島に恐怖の大王が上陸したのだった。

第四十六話 完

2007・9・19

第四十七話

第四十七話 予兆!?

博士という悪夢が戻ろうとしているその頃。六人と先生はまだ遊園地で遊んでいた。

「あれっ!?!」

最初に気付いたのは華奈子だった。

「小田切さんいないんじゃない?」

「そういえばそうね」

それに美奈子が頷く。

「おトイレかしら」

「お食事じゃないの?」

実に平和な予想だった。現実に反して。

「多分」

「そうかな、やっぱり」

「きつとね。だから気にすることないわ」

「そうね。ところでお食事で思い出したけれど」

華奈子がふとした感じで言う。

「もうそろそろいい時間じゃない?」

「時間って?」

「だからお昼の」

「楽しそうに言うのだった。」

「時間じゃない。どう?」

「ああ、そうね」

美奈子もそれにやっとといった感じで気付くのだった。

「もういい頃ね」

「先生に言ってみようよ」

まずは先生だった。保護者だから当然である。

「先生」

「はい、お昼ですね」

もう先生にはそれがわかっていて

「そうですね」

「はい、それです」

「いいですか？」

「勿論です」

にこりと笑って華奈子達六人に答えるのだった。

「では皆さん集まって下さい」

「わかりました」

「それじゃあ」

「サンドイッチにお握りを」

こうした場所でのお弁当の定番である。定番であるがだからこそのいいとも言える。少なくとも美味しい。これがかなり重要であると言えた。

皆でお弁当を食べだす。その時だった。

「あらっ!?!」

先生もあることに気付いたのだった。

「どうしたんですか、先生」

「何か感じました」

「何をですか!?!」

「といつてもそれは随分後のことです」

かなりはぐらかした感じだったがそのにこりとした笑みで全てが無効化されたのだった。

「ですから御気になさらずに」

「そうですね」

「はい、ですから」

話が戻る。

「皆さん、お弁当を」

「わかりました」

皆で食べだす。まずはこの時は何もなかったのであった。遊園地

は。

第四十七話

完

2007・9・26

第四十八話

第四十八話 取調べ

一方拘束された小田切君は警察の取り調べに遭っていた。周りをグルリと囲まれて。

「さて」

その中で刑事が彼に対して言うのだった。

「聞きたいことはわかっているな」

「ええ」

無然としてその問いに答えるのだった。

「博士のことですね」

「その通り」
「ええ」

それしかない。有り得なかった。

「今度は何をするつもりなんだ？」

「何なら本人に聞いてみます？」

取調べでは有り得ない言葉であった。

「よかつたら」

「本人つておい」

これに別の刑事が突っ込みを入れた。

「それができたら苦労は」

「できますけれど」

小田切君はそれに応えて携帯を出してきたのだった。

「これで」

「しかしだ」

前にいる刑事がその携帯を見て言う。

「今博士は宇宙にいるのだな」

「そうですよ」

平然とした様子で言葉を返した。

「正直に申し上げますとその通りで」

「それでどうして」

電波が通る、どんな携帯なんだと言いたかったのだ。

「まあ博士の作ったものですから」

「そうか」

それだけで充分であった。

「そこんとは御心配なく」

「わかった。それでは」

おもむろに携帯を取り出す。そして。

「博士か？」

そのまま直接容疑者に話を聞くのだった。凄い取り調べになっていた。

「何じゃ？」

しかも容疑者が堂々と電話に出る。これまた有り得ない。

「これから平壤に行つて暴れてくる。待っておれ」

「……だそうです」

横から小田切君が言う。これで終わりであった。

「もう取り調べは終わりですか？」

「ああ」

「警察の仕事は終わった」

無責任にも強引に終わらせた。後であの独裁国家がどうなるうとそんなことは日本の警察の知ったことではないからだ。マッドサイエンティストのやることだ。

「では」

「はい」

小田切君は刑事の声に応える。

「これで終わりだ」

「わかりました」

こうして小田切君は解放された。彼はそのまますぐに遊園地に戻るのだった。驚く程早い取調べであった。

第四十八話

完

2
0
7
・
9
・
2
6

第四十九話

第四十九話 何気なく戻って

小田切君が戻ってきた。ところがその戻って来たということにすら気付かないクラウンの面々であった。それも無理のないことではあった。

「あれ、小田切さん」

「今まで何処に」

「ああ、ちよつとね」

穏やかな笑みを浮かべて彼女達に応える。

「他のところに行っていたんだ」

「観覧車ですか？」

華奈子が何も考えずに問うた。

「ひよつとして」

「まあね」

とりあえずこの場はこう答えることにした。

「結構面白かったよ。よかったらどうかな」

「面白いみたいよ」

華奈子はそれを聞いて皆に観覧車を勧めたのであった。

「どうかしら」

「そうね」

「いいかも」

皆もそれに頷く。これでおおよそのことは決まりであった。

「じゃあ行くつよ」

華奈子が言う。

「観覧車に」

「六人でいけるかな」

「大丈夫でしょ」

観覧車のところに向かいながら話をする。

「そこんところは」

「じゃあ六人ね」

「ええ」

こうして彼女達は六人で観覧車に乗った。後には小田切君と今田先生が残る形になった。ここでその今田先生が小田切君に声をかけるのであった。

「あのですね」

「はい」

小田切君はそれに応える。

「何でしょうか」

「宜しければ御一緒にどうですか」

にこりと笑ってそう声をかけてきたのだ。

「御一緒には？」

「ですから」

にこりとした笑みのまま観覧車のところを手で指し示すのであった。

「観覧車に」

「あのですね」

その誘いに少し顔を赤らめさせる小田切君であった。

「私、まだ独身です」

「私もです」

かなり答えになっっていなかった。

「むしろどちらかが相手がおられた方が問題ではないでしょうか」

「まあそうですね」

言われてみればその通りである。この場合は先生が正しかった。

「では。どうぞ」

「わかりました。それでは」

二人も一緒に観覧車に乗ることになった。小田切君にとっては何か不思議な感觸のする会合となるのであった。

第四十九話

完

2007・10・3

第五十話

第五十話 観覧車で

小田切君と先生は観覧車で話をする事になった。二人は中に入ると向かい合つて座つた。先生の清楚な服装が小田切君の目にも入る。

「よくお似合いですね」

まずは服を褒めるのであつた。

「有り難うございます」

「僕なんかいつもこれですからね」

ここで苦笑いを浮かべて自分の白衣を差し示すのであつた。

「何か無愛想で」

「いえ、よくお似合いですよ」

「そうでしょうか」

何かお世辞に聞こえて仕方がなかつた。

「あまりそうは」

「いえ、本当に」

先生のその笑みはお世辞とは思わせないものがあつた。天性の笑みであつた。

「よくお似合いです」

「だといいですけれど」

そこまで聞いて何とか納得する小田切君であつた。それでも話を続ける。

「それですね」

「はい」

「ここに僕をお招きした理由は」

「さて」

ところがその返事は実に天然ものであつた。先生らしいと言えばそれまでだが。

「何でしたっけ」

「あの、何もなしですか？」

これには小田切君もその目を丸くさせた。

「ひょっとして」

「ええ、忘れてしまいました」

というこらしい。

「申し訳ありませんが」

「そうですか。はあ」

「それでもですね」

それでも話をする先生であつた。やはり只者ではない。

「気になることがあります」

「気になることですか」

「どうして今のお仕事を」

何気にかなり重要な話であつた。おつとりしているが見ているところは見ている、小田切君は心の中でそう思った。もっとも他には実はタイプだと思つたりもしているがこれは内緒である。結構顔と目に出てしまつてゐるが本人は気付いてはいない。

「今のですか」

「はい、どういった成り行きで」

「お給料がよかつたからです」

実はそれだけだつたのだ。

「待遇もよかつたですし」

「それだけですか」

「ええ、まあ」

素直に答える。そもそもあんな異常な人間がいるとは誰も考えはしない。

「それだけだつたんで」

「そうですか。楽しいですよね」

何故か楽しいことを認めさせる問いであつた。

「どうでしょうか」

「!？」

先生の質問に妙なものを感じました。

だがそれははじまりに過ぎなかった。これから本番であったのだ。

第五十話 完

2007・10・3

第五十一話

第五十一話 小田切君の苦勞

「あの博士ですよ」

小田切君は言う。

「それでまともに話がいくと思えますか？」

「はい」

「はいって」

今田先生も大物だった。小田切君も啞然とした。

「あの、正気じゃなかった本気ですか？」

「完全に本気です」

先生も真面目に告げる。

「非常に愉快な方ではないですか」

「あまりにも愉快でこっちは何度も死にかけたんですよ」

これもまた事実であった。小田切君は過去何度も博士のしでかした大騒動に巻き込まれて死に掛けているのだ。そのことを忘れる筈もない。

「南極に隔離されたこともありますし」

「まあ、南極に」

先生は南極と聞いて楽しそうな声をあげた。

「凄いですね。滅多に行けませんよ」

「行きたくもありませんでしたよ」

これが本音であった。

「ペンギンどころかアザラシの咆哮まで聞こえたし」

「アザラシ？」

「ヒョウアザラシっていいましてね」

小田切君はそう説明する。

「とんでもなく凶暴なアザラシがいるんですよ」

「まあ、それは意外ですね」

だがそれは本当の話だ。アザラシと言っても色々いる。中には殆ど猛獣のようなまでいるのだ。小田切君はそのアザラシについて言っているのである。

「そんなのとか。ラストバタリオンはいませんでしたけれどね」

「そうでしたか」

「そつから帰るまでがまた大変でして」

また言う。

「巨大ロボットに乗って。オーストラリア海軍やら自衛隊やらと戦つて」

「ようやく日本まで戻ったのです」

「色々あったのですね」

「色々というものじゃなかったですよ。それからも」

忌まわしい記憶が次々と蘇ってくる。

「異次元人と揉めたり鏡の世界に入ったりと」

「魔法みたいですね」

「そんな甘いものじゃないです」

それは事実であつた。

「本当に」

「けれど辞められないんですね」

「待遇はいいですから」

それをまた言う。

「それに何かあの博士は」

ここでふと言葉が出た。

「放っておけないし」

「それですね」

「それだとは？」

先生はここでにこりと笑ってみせた。話が大きく動くのであつた。

2
0
7
·
1
0
·
1
0

第五十二話

第五十二話 小田切君の本音

「博士は嫌な方ですか？」

「それはないですね」

小田切君はそれについても正直に答える。

「無茶苦茶で破天荒な人ですけどね」

「そうですね。あの人は悪い方ではありません」

ただ単にとんでもない人間というだけである。ついでに言えば常識が完全になく理屈も法律もルールも一切無視するだけである。たったそれだけのことだ。

「ですから」

「性格に闇はないんですよ」

「ですね」

先生はその言葉ににこりと笑う。

「それは全く」

「あれで性格が悪かったらどうしようもないですよ
かなりの酷評であった。

「いつも何をしてくすかわからないのに」

「一緒にいないと何をするか心配だと」

「一緒にいても何するかわかりませんけれどね」

「そういう博士なのだ。」

「迷惑千万で」

「ですか」

「そもそも何歳かわかりませんし」

少なくとも日露戦争の時に大日本帝国海軍と渡り合ったのはわかっている。他にも豊臣秀吉と真つ向から激突したとか阿部清明と死闘を繰り広げたとか聖徳太子に封印されそうになったとかスサノオノミコトに成敗されそうになったとかいう話がある。実は素性が滅

茶苦茶不明な博士なのだ。大学も何回、幾つの大学でどれだけ博士号を持っているのか不明である。何処までも非常識な博士なのだ。

「訳わからない人です」

「私もあの方のことはよく知らないところがあります」

「あれっ、そういえば」

小田切君は今の先生の言葉に気付いた。

「先生はうちの博士御存知みたいですね」

「少しだけです」

そう前置きして述べる。

「御会いましたこともあります」

「そうなんですか」

「これまたわかる衝撃の事実であった。」

「はい。楽しい方です」

「うっむ、博士は」

「博士は紳士ですよ」

先生はこうも述べる。

「それも御存知だとは思いますが」

「あれで服装にも気を使っていますしね」

白いタキシードに白エナメルの靴、黒いマントと服装はかなり異常であるが。それでもお洒落なのはお洒落なのだ。

「独特の価値観もありますし」

「ええ。それですね」

「はい？」

「もう戻って来られますね」

「えっ!？」

秘密にしていたのに。何故か見破られた。

「何故それを」

「すぐにわかりました」

どうしてそれがわかったのか。小田切君の謎がまた増えた。

第五十二話

完

2
0
0
7
・
1
0
・
1
0

第五十三話

第五十三話 今田先生という

人は

「何故わかつたんですか!？」

小田切君はすぐに先生に尋ねた。

「秘密にしていたのに」

「今仰つていますけれど」

「いや、それでも」

言つてしまつたがそれでも聞かすにはいられなかつた。どうしてわかつたのかそれそのもの自体が聞きたいのである。思えば実に不思議なことである。

「わかつたことが」

「あの方はよく御存知ですので」

「といたしますと」

にこりと笑つて答える先生の言葉でわかつてきた。

「博士と以前戦われたことが」

「そこまではいきませんが」

それは否定するが甚だ怪しいものである。

「お知り合いですから」

「そうでしたね」

言われてみれば何かがあるのかわからないのがあの博士だ。今田先生と知り合いでも不思議ではない。しかしそれでも実に驚くべき話である。

「そもそもお知り合いになられたのは」

「私が学生の頃ですけれど。あれは何時頃でしたでしょうか」

そういえばこの先生も一切が謎である。思えば謎まみれの人間の多い街である。小田切君も今そのことに気付くのであった。

「その頃からです。博士も御存知だと思いますよ」

「はあ」

「あの頃は恐山に封印されておられました」
「恐山に」

また随分な場所に封印されたものである。しかし封印とはいよいよ人間離れしている。

「三日で出て来られましたか」

「そうですね」

これはすぐに予想がついた。

「宇宙空間からでも出て来る人ですから」

「そうですね」

「まあ博士と先生のこととはほんの少しはわかりました」

これで話をとりあえずではあるが終わらせることにした。

「それでですね」

「はい」

「これからどうされるのですか？」

不意にという感じで先生に尋ねた。

「博士がまた帰って来られますけれど」

「私は何も」

何もしないと云う。

「何もですか」

「それはあの娘達がしてくれます」

穏やかな笑みで六人を見るのだった。観覧車の中ではしゃいである。

「ですから私は何も」

「あの娘達が」

「きっと博士と楽しくやってくれますよ」

「楽しくですか」

「はい」

何となくだが話は終わった。その頃日本にアンゴルモアどころではない恐怖の大王が降り立ったのであった。

第五十三話

完

2
0
7
・
1
0
・
1
7

第五十四話

第五十四話 恐怖の大王

よりによつて一番帰つて来て欲しくない人物であつた。多くの者がそう思つた。

「来たか」

「遂に」

博士の研究所を監視する自衛官達が苦渋に満ちた声を漏らしていた。

「話を聞いた時はまさかと思つたが」

「どうします?」

若い兵士が幹部に尋ねた。

「狙撃しますか? 相手が相手ですし」

「狙撃して死ぬような相手ならな」

その程度で死ぬような博士なのはもうわかつていることであつた。

「どうせならバズーカで吹き飛ばさないとな」

「バズーカですか」

「ああ、それでもピンピンしているかもな」

そもそもその程度でどうにかなる相手を宇宙空間で隔離したりはしない。その狂気の頭脳だけでなくしぶとさまでも異常な博士であつた。

「どうしたものやら」

「放置しますか」

先任下士官がそう提案する。

「我々の任務は監視だけですし」

「それしかないかな」

幹部は苦々しい顔でその言葉に頷くのだった。

「あの博士には」

「それでは」

かった。

街の暴走族が一人残らずミサイルとその巨大車椅子ロボットにより黒焦げにされたとのニュースが入ったのはすぐであった。日本中がまた大騒ぎになった。

「あの博士が」

「遂にか」

顔入りでニュースが伝えられる。しかも事件現場でロボットの上に立ちマントをたなびかせ高笑いする博士であった。

第五十四話

完

2007・10・17

第五十五話

第五十五話 嫌な予感

ひとしきり遊んだ一同。ようやく遊園地を後にするその時であった。

「!？」

六人同時であった。悪寒が彼女達の全身を襲ったのであった。

「何これ」

「まさか」

六人は顔を見合わせる。そうしてその原因について考えるのであった。

「これってまさか」

「そうかもね」

美奈子が華奈子に答える。

「この雰囲気は」

「けれどさ」

赤音は自分の悪寒を必死に否定しながら言うのであった。

「宇宙空間に隔離されたんじゃないやなかったっけ、あの人」

「そうだったよね」

美樹もその言葉に頷く。

「確かね」

「じゃあ普通は安全なのじゃないかしら」

春奈の言葉はあくまで常識に沿ったものである。

「どうやっても帰られないわよ」

「普通はそうよね」

梨花も今回ばかりはそう考えたかった。

「あの博士でも」

「あたしだってそう思いたいわ」

華奈子もまた自分の悪寒を必死に否定していた。

「あんな滅茶苦茶な博士がまた戻って来るなんて」
「けれどこの悪寒は」

美奈子はそれを否定できなかった。

「間違いないかも」

「否定したいなあ」

華奈子の言葉は六人の本音であった。

「またあの博士が戻って来るなんてさ」

「今度は何をしてくるのかしら」

「だから普通は戻って来ないわよ」

華奈子は双子の相方の言葉を必死に否定するのだった。

「宇宙空間よ、やっぱりそれはないわよ」

「あの博士でも、かしら」

それでも美奈子は自分の疑念と戦っている。どうしてもそれを否定できないのだ。

「どうなのかしら」

「そつに決まってるわよ」

華奈子は殆どムキになって否定する。

「絶対にね」

「だといけれど」

「とにかく今日も終わりよ」

華奈子はそう述べて話を強引に終わらせてきた。

「楽しかったけれどそれでもね」

「そうね」

美奈子はその言葉には穏やかに頷いた。

「じゃあ帰りましょう」

「ええ」

何はともあれ帰る六人であった。しかしその日の夕陽は嫌になる程赤いのであった。まるで赤い血のように。真っ赤に染まっていたのであった。

第五十五話

完

2007・10・24

第五十六話

第五十六話 鳥か飛行機か

その頃陸上自衛隊の市ヶ谷基地が謎の襲撃を受けていた。正体不明のゴキブリに似た人型の無数の異形の化け物達によつてだ。

「何だこれは！」

「ゴツキローチよ」

必死に彼等を倒す自衛官達に老人の声が答えた。それは彼等が嫌でも知っている声であつた。

「その声は」

「やっぱり帰つて来たのか」

「はっはっはっはっはっはっはっは」

悪役そのものの高笑いが司令部のある建物の一番上から聞こえてきた。見ればそこには白い満月を背にしてマントを風にたなびかせたあの博士がいた。

「天本博士………」

「やはり貴様か！」

「わしは不滅だ！」

彼は自衛官達を前に高らかに復活を宣言したのであつた。

「見事宇宙空間から帰還したわ！」

「報告通りだったのか」

司令はそのことをあらためて齒噛みした。

「今までで一番聞きたくはない報告だった」

「ですが司令」

その司令に対して幕僚の一人が述べる。

「実際に今あそこにいるという現実が」

「認めるしかないか」

「絶対に認めたくはないがな」

彼は齒噛みして述べるのであつた。

「北朝鮮のスパイが来たよりもタチが悪いぞ」

「それは同意です」

彼等は周りのゴキブリモドキ達を倒しながら博士を見上げていた。

「やはりブラックホールに放り込むべきだったか」

「そうですね」

「ははは、無駄よ無駄なことよ！」

博士は彼等の言葉にも高笑いで応える。

「わしを永遠に封じ込めたければ未来にでも投げ込むがいいわ！」

「異次元とでも言うと思ったのだがな」

「あの博士異次元人も戦っていますよ」

「つくづく始末に負えない人物だな」

そのことをあらためて、忌々しさと共に認識する。

「今日はほんの再会の挨拶よ」

博士はゴキブリ達を自分の持つている鏡の中に召還して話を勝手に終わらせてきた。

「それではな。諸君」

「今度は何をやる気だ？」

「さて」

自衛官達が呆気にとられている中であの車椅子を呼んだ。するとそれに乗ってそのまま何処かへと飛び去っていくのであった。

「また会おう諸君！」

「また来るって言っていますよ」

「もう来るなと研究所に電話しておけ」

「わかりました」

「全く迷惑な」

司令は忌々しげに呟いた。そのうえでは博士が車椅子に乗って飛んでいた。その姿はまるで魔女が空を舞っているようであった。自衛官達はその後で博士が滅茶苦茶にしていた基地の修繕に徹夜であたるのであった。全く以っていい迷惑であった。

第五十六話

完

2
0
7
・
1
0
・
2
4

第五十七話

第五十七話 帰ってみると

久し振りに楽しい一日を過ごした小田切君。だがその家への帰り道は非常に暗鬱な気分にあつた。

「やれやれ」

その理由は自分でもわかっている。わかりたくもないがわかつていた。

博士が戻つて来たからだ。そのことを思うとどうしようもないのだ。

それでも家に帰ると。タロとライゾウが出迎える。二匹も非常に暗い顔をしている。

「もう知ってるんだ」

「当然だよ」

「帰つて来たんだな、遂に」

タロとライゾウはそれぞれ不機嫌そのものの顔で小田切君に述べた。

「ニュースになつてるのかな」

「それどころじゃないよ」

「何なら見るかい？」

ライゾウが小田切君にテレビを見るように勧めてきた。

「あの博士が何をしたのか」

「平壤破壊したんだっけ」

「それだけじゃないんだよな、これが」

ライゾウはそう言葉を返す。

「そんな甘いものじゃ」

「他に何かしたんだ」

嫌な予感が胸に満ちる。またそれをどうしても否定できないのだつた。

「このゴツキローチ軍団が皆と遊んでくれる！遠慮はいらんぞ！」
「早くこの博士を何とかしないと！さもないと我々は……」
「うわーーーーーっ！！！」

放送が中断した。画面が壊れてしまった。

「……………何がどうなったんだろっ」

「考えると怖いっというか」

「考えたくないぞ、そんなの」

小田切君と二匹はザーザーと鳴るテレビ画面を見て言う。だがそのテレビ画面はすぐに復活するのだった。そうして博士がアップになっっていた。

第五十七話

完

2007・10・31

第五十八話

第五十八話 帝都の悪魔

「諸君！！」

博士はまたしても高らかに叫ぶ。

「安心せよ、このゴツキローチ達は人を殺さぬ！」

「殺さないってただけだろ」

「何されるかわかったものじゃないぞ、あれ」

「毒を移すだけだ！」

二匹に応えるかのように宣言する博士だった。

「その毒で一週間苦しみ抜く！たった一週間だ！」

「それって大変じゃないのかな」

「大変どころじゃないぜ、そんなの」

タロとライゾウはテレビの博士の言葉を聞いて話をする。その通りである。

「わしとしては些細な贈り物だが受け取ってくれ！それでは！」

何かボタンを押すとあの巨大ロボットが国会議事堂を破壊したうえで降り立ってきた。それだけで恐ろしい破壊活動であった。

「本当に壊したよ、あの人」

小田切君も国会議事堂破壊には驚くしかなかった。

「幾ら何でもこれは」

「皇居じゃないだけましなんじゃないの？」

「それは洒落にならないから」

タロとライゾウがここで最悪のケースを想定する。確かにそれは洒落にならないことである。国会議事堂も相当なものであるにしろ、だ。

「さらばだ！また会おう！」

「ああ！今日は危機に瀕しています！」

何とか復活したキャスターがゴツキローチ達に襲われながらも叫

ぶ。

「この危機からどうやって乗り切れば……ぐわー……」

また嘔まれるのであった。それから一週間彼は毒の苦しみにのたうち回ることになるのであった。恐ろしい痛みであったという。

「酷いな、これは」

テレビを見終わった小田切君は思わず呟いた。

「どうしようか」

「だからどうしようもないって」

「放置しておくしかないよ」

「そうなんだよなあ」

小田切君も二匹の言葉にこう返すしかなかった。

「結局のところは」

「暫くここに居るしかないよ」

「隠れてな」

「そうだね」

小田切君は二匹のその言葉に頷いた。

「じゃあ暫くここに引き籠もるか」

「研究所に行かず」

「やり過ぎすんだな？」

「うん、そうさせてもらおうよ」

小田切君は言った。

「お給料は自然に口座に振り込まれるし」

「金払いはやたらいい博士であった。」

「そうさせてもらうか」

「食べ物とかは今のうちに買い込んで」

「やり過ぎそうぜ」

「うん」

こうして小田切君と二匹は難を避けるつもりであったが。それは虚しい努力に終わることを彼等はこの時まだ知らなかった。不幸な

こと。

第五十八話

完

2007・10・31

第五十九話

第五十九話 博士の帰宅

研究所。既にそこには自衛隊が集結していた。彼等も必死であった。

「しかし司令官」

ここで指揮官の一人が司令官に問う。見れば陸自の人達だ。陸自も大変だ。

「ここに来ますかね」

「絶対に来るな」

司令官は残念な顔でその指揮官に答えた。

「ここを根城にしている限りは」

「根城ですか」

「悪の本拠地と呼ぶか？」

「それかアジトですよね」

「そういうところだ」

完全に東映の特撮の悪役だがこれがまた全然違和感がない。

「相手が相手だからな」

「どうしたものでしょう」

「どうにかする為に我々が今ここに来ているのだが？」

「これも任務ですか」

「そう言うな」

嫌々なのがすぐにわかる。気持ちはいくわかるものだった。

「博士を止めないと大変なことになるからな」

「それはわかっていますけれど」

それでも不満が丸見えだ。

「あの博士だけは正義の味方が必要なのでは？ほら、その為に魔女つ子に頼んでいるんだし」

「だが自衛隊も必要だ」

第五十九話

完

2
0
7
・
1
1
・
9

第六十話

第六十話 博士の帰宅

ゴツキローチを率いる博士と自衛隊の戦いはテレビで放送されていた。生放送であるのはその迫力は絶大なものであった。

「凄いななんてものじゃないわね」

「そうね」

華奈子が美奈子の言葉に頷く。二人もその戦いを見ているのだ。

「戻って来たらいきなりこれなのね」

「相変わらずとんでもない博士ね」

もう言わなくてもわかっていることであるが。それでもそれを再認識するのだった。

「あれゴキブリよね」

「ゴツキローチよ」

美奈子が華奈子に説明する。

「今度発明した生物兵器らしいわよ」

「生物兵器ねえ」

言うまでもなく国際法違反である。博士が守るつもりが最初から全くないだけだ。

「それで世の中を大混乱に陥れるつもりらしいわ」

「とんでもない話ね」

とんでもないどころではないが。華奈子はかなり冷静であった。

「そのまま放っておくわけにはいかないわね」

「ええ。そろそろ私達にも声がかかるわ」

美奈子は真剣な顔で言った。

「準備はいいわね」

「何なら今からでも」

華奈子の顔が真剣なものになる。美奈子に比べて好戦的な彼女はもうやる気であった。

「何時でもいけるわよ、あたしは」

「ところがそうはいかないのよ」

しかし美奈子はここでこう言うのだった。

「残念だけれどね」

「何で？」

「先生からいって言葉がないと」

「あっ、そうか」

そうなのだ。六人は先生から頼まれて博士と戦っているという形になっている。だから勝手に博士と戦うことはできないのである。そういうことなのだ。

「だからなのね」

「そういうこと。できるなら私も動きたいけれど」

「そうだったわね。じゃあ今は」

「とりあえず。見ていきましょう」

華奈子に対して言った。

「今はね」

「ええ。それにしても」

華奈子はテレビを見て述べる。そこでは自衛隊と博士の死闘が行われていた。

「自衛隊の人達も大変ね」

「そうね。あのゴツキローチ」

真夜中に真っ黒のゴツキローチが暴れ回っている。洒落にならない数だ。

「何匹いるのかしら」

「千はいるわよね」

確実にそれだけはいた。空から陸から次々に湧いて出て来ている。

「あれって」

「何か自衛隊の人達が次々に」

「そうね」

負けていつている。数と凶悪さに押し切られていた。

「くっ、総員撤退！」

「はははははははははは！！天才は必ず勝つ！」

テレビから博士の勝ち誇った声が響き渡る。

「では諸君！わしの帰宅を笑顔で迎え入れるのだ！」

「勝手なこと言ってるわね」

「相変わらずね」

二人はそんな博士をテレビでクールに見ていた。博士の騒動がまた大きくなるうとしていた。

第六十話 完

2007・11・9

第六十一話

第六十一話 また集合

程なくして次の塾の時間になった。六人の前に先生が来た。そして早速。

「皆さん」

「先生、あれですよね」

「そう、あれです」

華奈子の問いに対してスムーズに答えが返って来た。

「博士が帰って来られました。皆さん御存知でしょうか」

「はい」

「知りたくなかったです」

梨花と赤音がそれぞれ答える。赤音の顔は慚然としている。

「あれですよね、ゴキブリが」

「あれ。ゴキブリさんなんですか」

美樹と春奈も言う。彼女達はもうわかっていたのだ。

「それで皆さんに御願いがあります」

「あれですよね」

美奈子が先生に問う。

「あの博士を何とかしないと」

「それです。いいでしょうか」

「いいも悪いもあんなの放置しておいたら大変じゃない」

華奈子の言葉は実に正論であった。確かにその通りなのだ。

「だからやっぱり」

「博士は今御自身の研究所におられます」

そこに無理矢理帰ったことも皆知っている。知りたくなかったが。

「そこからあのゴキブリさん達をあちこちに放っています」

「じゃあわかりました」

華奈子が答えた。

「研究所まで行ってあの博士を」

「御願いできますね」

「そうしないと大変ですから」

美奈子が述べる。嫌になる程わかっていることである。

「今回も是非」

「はい、それでは皆さん」

先生は笑顔だった。笑顔で六人に告げる。

「宜しく御願いしますね」

「それにしても」

それでも六人にはまだ言いたいことがあった。だが言いたい本人はここにはいない。

「あの博士って何をやってもトラブルになるのね」

「それがあの人の趣味なのです」

トラブルを起こすことが博士の趣味なのだ。他には大量破壊兵器の開発や無差別攻撃、じ生体実験等を趣味としている。なおその際他人の犠牲は意に介さない主義である。

「ですから。気にはいけません」

「わかりました」

「もうわかっていましたけれど」

華奈子と美奈子はそれぞれ呆れた調子で言う。

「とんでもない御爺ちゃんですね」

「そもそも何歳かわからないし」

「お元気なのです」

先生の言葉はかなりずれていた。

「御身体も御心も」

「自重して欲しいわね」

「全く」

だがそんなことを言っても結局は何にもならず六人と博士の戦いがまたはじまるのであった。

第六十一話

完

2
0
7
・
1
1
・
1
4

第六十二話

第六十二話 おばちゃん達の知恵

とりあえずまたしても博士と戦うことになった六人。だが戦う前に先生は彼女達に告げるのであった。

「皆さんに一つ御願いたいことがあります」

「御願いたいこと？」

「そうです」

そう六人に言うのだった。

「華奈子さんと美奈子さんの大叔母さん達のところに行つて欲しいのです」

「おばちゃんとおぼちゃんのところ？」

「何なのかしら」

二人はそれを聞いて首を傾げさせる。

「先生、おばちゃん達のところですよね」

「そうです」

華奈子にまた笑顔で答える。

「今から御願いますね」

「わかりました」

「けれど」

二人はそれを聞いても釈然としないのであった。何故おばちゃんと歩歩ちゃんのところなのかどうしてもわからない。どうしてもわからないがそれでも先生の言うことなのでおばちゃんとおぼちゃんの家に向かう。他の四人も一緒に行くのであった。

二人の家に行く。するともう二人が笑顔で待っているのだった。

「よお来たな」

「待ってたで」

「待ってる!？」

「先生から聞いてたの？」

「そや」

二人はやはり笑顔で華奈子と美奈子の問いに答えるのだった。これで二人が先生と知り合いなのもわかった。意外なことに。

「あの博士と戦うんやな」

「うん」

華奈子がおばちゃんに答えた。

「そうだけれど」

「何か知ってるの？」

「ここに行きや」

今度はぼぼちゃんが何かを美奈子に出してきた。それは一枚の地図であった。見ればそれは今まで六人が見たことのない場所であった。

「ここは？」

「行ってみたらわかるで」

「すぐに」

六人にそう答えるのだった。 36

「すぐにねえ」

「何なのかしら」

六人は首を捻る。誰にもそこに行けば何かがあるのか全くわからないのだった。

だがそれでもそこに行ってみることにした。それしかないからだ。

「とりあえず行ってみるわ」

「それでいいのよね」

「楽しんで来や」

「安生な」

おばちゃんとぼぼちゃんはそう言って六人を送り出すのだった。

何故か二人が穏やかな顔であったのがさらにわからなくなっていた。

「一体全体」

「何かあるのか」

「わからないわね」

そつは言いながらも電車で向かう六人。そこにあったものは。

第六十二話 完

2007・11・14

第六十三話

第六十三話 博士の余裕

小田切君達は今回の騒動に頭を悩ませている。しかし当の博士はいつもいつも通り悠々自適な有様であった。

「ふむ、美味しいのう」

周囲にゴツキローチがたむろし住民を襲っている中で優雅に外の食事を楽しんでいる。異様に大きなステーキをフォークとナイフで食べている。

「やはりステーキは外じゃ」

「あのですね」

向かいに座る小田切君が博士に言う。彼も同じものを食べている。

「博士、あまりにも」

「ステーキがまずいのか？」

博士はこれがステーキへのクレームかと思った。

「このスペイン風のステーキが」

「ステーキはいいです」

分厚いレアのステーキはガーリックを利かしている。それと赤ワインまである。最高の組み合わせの一つであると言えるものであった。

「それ自体は」

「では何じゃ」

博士はステーキを口に入れながら問う。

「言ってくれ、是非」

「今の状況です」

小田切君が言うのはそれであった。

「目の前で人々がゴツキローチに襲われているのに。暢気にステーキなんて」

「んっ！？何かあるか？」

博士にとってはどうでもいいことであった。

「今何か」

「どうでもいいんですね、本当に」

「何ならあと百匹程作るが」

博士は実はわかっているのであった。

「それでどうじゃ」

「百匹もどうやって作るんですか」

「何、簡単なことじゃ」

博士はしれつとして小田切君に言葉を返す。

「ゴツキローチ培養液を人にかけてな」

「・・・そんなのを発明していたんですか」

ゴツキローチをそうして増やしているのであった。今回も実にとんでもない話である。

「それで簡単に増やせるぞ」

「そうやって罪のない人を」

「罪？あるぞ」

しかし博士は言葉を返してきた。

「ちやんとな」

「ちやんとですか」

「わしとて実験に使う人間は決めておる」

決める問題ではないのであるが。

「それは安心せい」

「どうやって選んでいるんですか、それって」

「あとで見せてやろう」

ステーキを食べ終えワインを飲みながら優雅に述べる。

「まあゆっくりとな。今は」

「そうですか。何か不安ですけれど」

「大したことはないから安心せい」

実に信用できない言葉であった。この博士に安全というものは何の関係もないからだ。

「それではな」

「はあ」

程なく食事を終える。そうして博士に連れられてある場所に向かうのだった。

第六十三話

完

2007・11・21

第六十四話

第六十四話　ゴツキローチ生産

博士が小田切君を連れて来たのは暴走族の集会場であった。博士のことなぞ知らない彼等は忽ちのうちに博士と小田切君を取り囲むのであった。

「何だ、この爺さん」

「俺達に何か用かよ」

「この連中を使うんですね」

「左様」

博士は小田切君に対して答えた。

「これでわかったじゃろう」

「何かいつものパターンですね」

「どうせこの世の塵じゃ」

博士は平然と言い放つ。

「わしの実験材料に使えば偉大な科学の貢献になる。それをさせてやるだけじゃ」

「ですか」

「うむ。それではやるぞ」

「この爺」

暴走族達は博士の言葉に怒りを感じた。そうして思いきり攻撃姿勢を見せてきたのであった。

「俺達が塵だと!?!」

「甘い顔してりゃあよくも」

「どうせ知能も低い暴れるだけが脳の奴等じゃ」

博士は相変わらず平然として言葉を続ける。

「このままわしの科学の礎となれ」

そう言って手に持っていたプラスチックから不気味な黒い液体をばら撒く。それは何やらシュウシュウという音と恐ろしげな湯気を立て

ていたがそれを暴走族達にかけるのであった。

「うわっ!？」

「これ………何だ!？」

「これでよし」

博士は彼等に薬をかけ終えて満足気に笑うのだった。

「百匹はいるな」

「百匹だと!？」

「俺達は………ううっ」

彼等は忽ちのうちにゴツキローチになっていく。これで百匹できたのであった。

「どうじゃ。簡単にできたぞ」

「こういうわけだったんですか」

小田切君は完全にゴツキローチになった彼等を見て呟いた。

「何かまあ」

「さてと、これでよしじゃ」

平然として家に帰ろうとする。

「帰って新たな開発じゃ」

「はあ。今度は何なんだか」

それも気になるがそれよりも。新たなゴツキローチ達が早速暴れ出しているのが気になった。

「ここにもいたか!」

「容赦するな!」

「ピキピキキキーーーーーッ!」

「アブブブブブーーーーッ!」

暴走族だったゴツキローチと自衛官達の間で死闘がはじまる。そのゴツキローチ達は一匹残らず退治されてしまったのであるがもう博士にはそんなことはどうでもよいことであった。

「さてと、次はじゃ」

また何時の間にか発明していた携帯暴走族発見器のモニターを見ながら呟く。

「どの暴走族にしようかのう」

「何時までこの騒ぎが続くんだろう」

小田切君は思った。こうしてとりあえずゴツキローチは増え暴走族は減っていく。どちらがいいのかはわからないが。

第六十四話

完

2007・11・21

第六十五話

第六十五話 いざ修行の場へ

六人は先生に言われて修行の場に向かう。電車でゴトゴトと揺られるのはさながらピクニックであった。彼女達は電車の中であれこれと話をしていた。

「一体何処に行くんだらうね？」

「ええと」

梨花が華奈子の問いに答える。

「確か八条町ね」

「八条町っていつたら」

ここで華奈子はその町について気付いた。

「神戸だったわよね」

「ええ。あそこに何があるのかしら」

今度は美樹が言う。

「おばちゃんとポポちゃんの知り合いよね」

「みたいね」

美奈子の言葉に華奈子が頷いた。

「話だと」

「何かよくわからないわ」

美奈子にも今回のことはわかりかねていた。

「誰がいるのか。何があるのか」

「それよね。何があるのかもわからないのよね」

赤音はそこを指摘する。

「変なことじゃなきゃいいけれど」

「それはないと思うわ」

春奈はそう予想していた。

「華奈子ちゃんと美奈子ちゃんの大叔母さん達の紹介よね」

「ええ」

「そうよ」

二人は春奈に対して答える。

「そうだけれど」

「だったら変な人でも変なことでもないと思うわ。凄くいい人達だし」

「確かにね」

「それはね」

二人もおばちゃんとポポちゃんに対してはそうだと言う。

「おばちゃん達の紹介なら」

「間違いはないかしら」

「それにしてもあれね」

美樹は別のところを指摘してきた。

「わざわざ神戸まで電車で行くのもねえ」

「そうね、案外」

梨花がその言葉に頷く。

「大変ね、どうにも」

「そうよね。それで待ち合わせの場所は」

赤音が地図を取り出してきた。言うまでもなく神戸の地図である。

「ここね」

「そう、ここ」

そんな話をしながら神戸に向かう。そうしてようやくといった感じで神戸に到着したのであった。丁度夕刻になっていてもう空が赤くなっていた。

「憧れの神戸だけれど」

「遊ぶのは我慢して」

「行きますか」

「ええ」

「じゃあそういうことで」

「こっちな」

六人はこう言い合って待ち合わせ場所に向かった。はじめての神

戸だだが遊ぶのはまずはおああずけであった。

第六十五話 完

2007・11・28

第六十六話

第六十六話 教会の前で

六人は地図を見ながら夕方の八条町を進む。ここはごく普通の住宅街であった。

「ここにその人がいるのね」

「そうみたい」

華奈子は隣にいて地図を持っている赤音に答えた。

「それでその人との待ち合わせ場所の教会だけね」

「ここね」

赤音は既に赤丸を押しした場所を指で指し示した。

「ええと、八条分教会の前ね」

「教会!？」

皆それを聞いて目をしばたかせた。

「教会だったらすぐ目立つわね」

「そうよね」

赤音は皆の言葉に頷く。

「それだったらね。待ち合わせ場所には都合がいいわよね」

「そろそろだけれど」

美樹がここで辺りを見回す。

「何処にも教会なんてないわよ」

「そうよね。確かこの地図だと」

梨花が赤音の持っている地図を眺めながら辺りを見回して述べる。

「あそこよね」

「そうね」

春奈が彼女の言葉に頷いた。

「けれどあれって」

「教会じゃないんじゃない?」

華奈子はこう言って首を傾げさせた、見ればそこにあるのは瓦の

屋根の大きな建物である。とても教会やそうしたものには見えない。

「道場じゃないの、あれって」

「そうよね、あれは」

美奈子も言う。

「どう見ても教会じゃないわね」

「けれど地図だとあそこよ」

それでも赤音は地図を見ながら皆に言うのだった。

「絶対に。間違いないわ」

「おかしいわね」

華奈子は腕を組んで言いだした。

「教会じゃないとしか思えないけれど」

「けれど見て」

美奈子はその教会の前を指差して皆に言う。

「もう誰か待っているし。あの人ひよつとして」

「あの人かしら」

皆何となくその人らしいと思った。

「おばちゃんとポポちゃんが紹介してくれた人って」

「多分そうね」

美奈子が華奈子に答えた。

「間違いないみたい」

「やっぱりあそこ？」

皆どうしても納得できず首を捻る。

「よくわからないけれど」

「そうみたいね。まあとにかく」

行くことにした。とにかく地図では間違っではないのだ。だとしたら行くしかなかった。こうして六人はそこに行くのであった。

2
0
0
7
·
1
1
·
2
8

第六十七話

第六十七話 カイザージョー復活

博士のゴツキローチ増殖は止まらなかつた。日本から暴走族や暴力団は消えたがもつと恐ろしいものが街を徘徊し国際的にも問題視されていた。

「この度国連では」

ニュースキャスターがテレビで話している。

「日本に対して治安回復の為の特別部隊の派遣を決定し」

「何じゃ、その程度か」

博士はそのテレビを見ても平気な顔をしていた。

「軍隊なんぞ怖くとも何ともないわい」

「じゃあ何が怖いんですか」

「全くないのう」

小田切君の言葉に平然と答えるだけであつた。

「それこそ正義の味方でも連れて来るのじゃな」

「だから今度特殊部隊が大勢来るんじゃないですか、ここに」

「甘い甘い」

それを聞いても全く動じてはいない。好物のパエリアと赤ワインを堪能するだけである。

「そんなものでわしを倒せると思うてか。わしはな」

「十字軍と戦つたんですか？」

「あんなのはヒョッコじゃつたな」

本当に戦つたことがあるらしい。

「野蛮なだけの雑魚共じゃつたわい。他愛のない」

「そうだつたんですか」

「モンゴル帝国軍や日本軍は強かつた」

腕を組んで唸ってみせていた。

「立派じゃつたのう。あとローマ帝国軍やイエニチエリもな」

「色々な軍隊と戦ってるんですね」

「サン＝ジェルマン伯爵ともやり合ったことがあるぞ」
話がホラを突き抜けてファンタジーになってきていた。

「それこそ何百年もやり合ってたまだ決着がついておらん。他にはリトルグレイや太上老君とも戦ったことがあってのう。ダイダラボツチはいい奴じゃった」

「どんな経歴なんですか、そもそも」

「経歴なんぞ人には何の関係もないものじゃ」

端だけ取れば正論と聞こえなくもない。端だけであるが。

「特にわしのような偉大な天才にはな」

「そうですか」

「左様。それで特殊部隊に対しては」

「また何かしでかすんですね」

「少し遊んでやろう」

そう言うのと携帯電話を取り出ししてきた。すると。

不意にあの巨大ロボットが来た。カイザージョーであった。研究所を壊してその場に現われたのであった。

「これでな」

「あの、博士」

小田切君はカイザージョーはどうでもよかった。この場合の問題点は。

「研究所破壊しましたけれど」

「大した問題ではない」

それでも博士にとっては些細なことであった。

「自動修復機能をつけておいた。一時間経てば元通りになっておる」
「そうですか」

「では来るがいい特殊部隊よ」

国連が相手でも動じない。

「完膚なきまで粉碎してくれるわ」

カイザージョーを前に宣言する。またしても博士のとてつもない

暴走がはじまるうとしていた。

第六十七話

完

2007・12・5

第六十八話

第六十八話 国連敗北

博士の研究所に奇襲を仕掛ける国連の集めた特殊部隊。だが彼等の前には。

「な、何だあれは！」

「ロボットだと！」

「その通り！」

驚く彼等の前にカイザージョーと博士が立っていた。

「よくぞ来た国連の戦士達よ！」

博士が彼等に告げる。

「今日出会えたのを光栄に思うのだ！」

「黙れテロリスト！」

「地球の平和を乱す責様を許すわけにはいかない！」

大方の者にとっての博士の評価はこんなところであった。

「わしがテロリストだと」

「当たり前ですよ」

その横にいる小田切君がそれに答える。

「どう見たってそうじゃないですか」

「そんな詰まらんものと一緒にするな」

だが博士はそれに不満であった。

「わしは天才じゃぞ」

「だから何なんですか」

「天才科学者であり医学者であり薬学者であり物理学者であり工学者なのじゃぞ」

他にも色々と博士号は持っている。余計なものではないが。

「そのわしがテロリストじゃと。心外じゃ」

「それはわかりましたけれど」

小田切君は半ばそんなことはどうでもいいといった感じでまた博

士に言った。

「それで今回はどうされるんですか？」

「決まっておるではないか」

博士は平然としてまた述べた。

「このカイザージョーでな」

「これで蹴散らすっていうんですか？」

「左様」

誇らしげに笑って答えてみせてきた。

「わしの偉大なる発明で退けてくれる。生涯の勲章にするがいい」

世界各国の特殊部隊の精鋭達を前にして宣言する。だが彼等の博

士への評価はそれでも変わらないのであった。変わる筈もなかった。

「総攻撃だ！」

「よし！」

一斉に特別な武器で攻撃にかかる。それは明らかに何処かの科学チームが開発したものであった。それでまずはカイザージョーを狙ってきていた。

しかし。博士はそれを見ても動じてはいなかった。

「小賢しいのう」

その一言だけであった。カイザージョーが全身から光を発するとそれで終わりであった。

特殊部隊の面々は倒れ武器は全て無効化されていた。攻撃もである。そうして何もかもがなくなってしまっていたのであった。小田切君はその有様を見て博士に問う。

「今度は何ですか？」

「光の攻撃じゃ」

博士は素っ気無く答えた。

「それで敵を気絶させて攻撃を打ち消したのじゃ」

「意外と大人しいですね」

「わしに立ち向かう勇氣に敬意を表してじゃ」

意外とそうしたところは人間味のある博士であった。

「あとは自衛隊の基地の前にも全員置いておこうかのう」

「私がですか？」

「いやいや、小田切君には迷惑はかけん」

笑って言うてきた。

「そういうのはな。ほれ」

「彼等ですか」

「そういうことじゃ」

ゴツキローチに気絶した特殊部隊の面々を自衛隊の基地の前まで運ばせる。こうして国連もまた博士の退治に失敗してしまったのであった。

第六十八話

完

2007・12・5

第六十九話

第六十九話 教会の前の人

六人がその人の前に行く。何と今田先生にそっくりの女の人だった。違うのは今田先生はいつも銀色の魔女の服なのに対してこの人が金色の魔女の服ということだけであった。他はそっくりであった。

「貴女達ね」

「あたし達っていうと」

「やっぱり」

六人はその人が自分達に顔を向けてにこりと笑うのを見て顔を見合わせあった。

「あれですか？おばちゃんとおぼちゃんがあたし達に紹介してくれる人って」

「ええ、そうよ」

華奈子の問いににこりと笑って答える。

「私なの。名前は今田小百合」

「今田さんっていうと」

「ひよっとして」

「そうよ、従妹なのよ」

「こつ華奈子達に答える。

「貴女達の先生とはね」

「そうだったんですか」

「やっぱり」

六人はそこまで聞いて納得した。道理でそっくりだと思ったのである。

「私はこつちに実家があつてね。魔法の先生をしているのよ」

「じゃあ先生とそこも一緒ですね」

「何だか」

「昔からそっくりだって言われてきたわ」

本当にそうである。だから六人もそれに頷くのであった。

「やっぱりそうなんですか」

「確かにそうですね。最初びっくりしました」

「驚いたみたいね。まあ先生と同じだと思っただいいわよ」

そして今度はこう言ってきたのであった。

「性格もそっくりだって言われるし」

「先生とですか」

「そうなの。子供の頃から双子みたいって言われてきているのよ」

「そうでしょうね」

「それは」

六人は小百合先生のその言葉に納得して頷くのであった。本当に何から何までそっくりであるからだ。

「まるで鏡に映したみたいですよ」

「本当に」

「ところでよくここが教会ってわかったわね」

小百合先生が次に言ったのはそこであった。

「危ないかしらって思っていたけれど」

「教会ですよね」

「ええ」

小百合先生は美奈子の言葉に頷いてみせた。

「これがですか。瓦の屋根の道場みたいなのが」

「天理教の教会なのよ」

「天理教の！？」

「知らないかしら。天理教の教会ってこんななのよ」

「そっいえば」

「街にも幾つか」

言われてみれば心当たりがないわけでもなかった。六人のいる街にもこうした教会が幾つかある。それに気付いたのである。

「まあ実はここには直接用事はないし」

「待ち合わせ場所なだけなんですね」

「ええ、行きましょう」

こう言って六人を誘う。

「魔法を勉強する場所にね」

「わかりました」

こうして六人は小百合先生について魔法の修行に向かうのであった。教会から何か日本の楽器の音が聞こえているのがわかった。

第六十九話

完

2007・12・12

第七十話

第七十話 八条学園

「ここよ」

先生が案内してくれたのはやたら大きな学校であった。下手な街よりもずっと巨大な学校である。

「ここで明日から暫く博士を懲らしめる為の魔法を勉強してもらおうわ」

「ここですか」

「ええ、そうよ」

学校を見て驚きを隠せない六人に対して言うのであった。

「こんな大きな学校で」

「ここが八条学園よ」

小百合先生は六人に教えた。

「この大学で講師をしているの。魔法部の顧問もね」

「そうだったんですか」

「ここですか」

「何かあるの？」

「いえ」

「大きな学校だなんて」

六人が驚いているのはそこであった。六人の通っている学校など何十個入るかわからない。そこまで大きな学校であったから驚いているのであった。

「そうね。世界一大きな学校だし」

「世界一ですか」

「歩き回るのが大変だから。道に迷わないようにね」

小百合先生はこつも注意する。

「動物園とか水族館もあるから」

「そんなのまであるんですか」

「博物館や美術館もあるわよ」
とにかく何でもある学校らしい。
「だから。一旦迷ったら大変なことになるからね」
「わかりました」
「気をつけます」
「学校の中は先生が車で案内するから」
先生はこう言ってきた。
「電車も通っているけれどね」
「学校の中に電車って」
「何か凄いわね」
六人にとつてはこれもまた驚くべきことであつた。
「それだけ広いからなのよ」
「やっぱりそれですか」
「ええ。けれど今日は遅いからこれで終わりよ」
そう言つて学校の前を後にする。
「泊まるところは先生のお家よ」
「先生のですか」
「ええ、狭いところだけれど」
一応こう断るのであつた。
「我慢してね、そこは」
「我慢つてそんな」
「私達でしたらテントでも張つて」
「女の子が外で寝たら駄目よ」
しかしそれはやんわりと注意するのであつた。
「外に何がいるかわからないから。いいわね」
「はあ」
「じゃあお言葉に甘えて」
六人はこうして小百合先生の家に案内された。そしてそこでも驚くことになるのであつた。

第七十話

完

2
0
7
・
1
2
・
1
2

第七十一話

第七十一話 小百合先生のお家

小百合先生のお家、そこは何とお城だった。

「ねえ美奈子」

華奈子は神戸市にあるそのお城を見て美奈子に問うた。しかもそのお城は西洋のお城であり尚且つピンク色であったのだ。あまりにも異様なお城であった。

「あたし目が悪くなったのかしら」

「どうしたのよ、急に」

「ピンク色のお城が見えるんだけれど」

そう美奈子に対して言うのであった。

「気のせいかしら」

「気のせいでも何でもないわよ」

美奈子はそう華奈子に答えた。

「私も見えるから」

「そう。じゃあ見間違いないわね」

「ええ。それにしても」

夕方の赤い世界の中に浮かび上がるピンク色の城。それは何とも言えない、幻想的とかそうした言葉ではとても言い表せないものがあった。六人もこれには絶句していた。

「何なのかしらねえ」

「あの、先生」

リーダーの梨花が先生に対して問うた。

「あのお城は」

「はい、あれが先生のお家です」

先生はにこりと笑って六人に答えるのであった。

「ここにずっと住んでいるんですよ」

「ここにですか」

「何とまあ」

春奈と美樹も言葉がなかった。

「ピンクのお城なんてはじめて見たわ」

赤音も流石に言葉がない。

「そつよねえ。幾ら何でも」

「それで先生」

華奈子がばやいた後で美奈子が先生に問うた。

「何でしょうか」

「ここに泊めて下さるんですね」

「はい」

先生はまたにこりと笑ってその問いに答える。

「そうですよ」

「そつなんですか、やっぱり」

「うっん」

六人は言葉を失った。何と云っていいかわからないのだ。流石にピンク色のお城までは想像がつかなかったのだ。まさかこんなものがあるのかとさえ思っている。

「さあ、皆さん」

小百合先生は六人の困惑をよそにお城の中に入るように勧める。

「どうぞ。我が家へ」

「わかりました」

「それじゃあ」

何はともあれ六人は先生の言葉に頷く。そうしてお城の門をくぐった。門も言うまでもなく鮮やかなピンクである。造り自体は見事であった。

「奇麗ね」

「そつね」

華奈子は美奈子の言葉に頷いた。

「形はね、少なくともね」

何はともあれ中に入る。六人の驚きは外観だけではなかったのだ。

あつた。

第七十一話

完

2007・12・19

第七十二話

第七十二話 中までもが

外は一面のピンクであつた。そして庭も。

「お花まで」

「流石に草はそうではないけれど」

お城の庭は草花に満ちている。その花達までもがピンクであつたのだ。何と他の色の花は一色たりともないという見事な有様であつた。

「全部ピンクね」

「そうね」

六人はそれに驚きながら小百合先生に案内されつつさらに先に進む。そしてお城の入り口に辿り着いたのであつた。見ればそこも一面のピンクであつた。

「やっぱりここもなのね」

「予想していたけれど」

「はい、開いて下さい」

先生がピンク色に塗られた木造の扉にこう言つて触れると扉は開いた。そうして遂にお城の中に入るのだった。その中もやはり。

「ここもなのね」

「やっぱり」

「さあ、中に」

小百合先生はここでも六人の驚きを見もしないでまた中に入るように勧める。そのうえで彼女達に対して穏やかな声で述べた。

「まずは夕食を」

「夕食ですか」

「ホワイトシチューですよ」

小百合先生はそう六人に教えた。

「それとキーウィサラダとニジマスのムニエル」

「何か凄く美味しそう?」

「そうね」

少なくとも悪いメニューではないのは感じていた。

「先生のお家は大体洋食なんですよ」

「魔女だからですか?」

「先生が好きだからです」

理由はそれであつた。

「それだけですけれど」

「そうなんですか」

「ささ、それじゃあ」

ここまで話してまた六人にピンクの廊下と絨毯の先を進むように勧める。何とピンクの大理石で造られている。有り得ない色彩であつた。

「どうぞ中に」

「ホワイトシチューならね」

「華奈子好きだからね」

美奈子は笑顔になる華奈子に対して言う。実はホワイトシチューは華奈子の好物なのである。基本的に好き嫌いはないがその中でもお気に入りなのである。

「そうなのよ。まさかホワイトシチューまでね」

「それだったらホワイトシチューじゃないわよ」

美奈子はそう双子の相方に突っ込みを入れた。

「そうでしょ」

「それもそうね。それじゃあ」

「はい、どうぞ」

こうして城の奥のやはりピンク一色の食堂に案内される。テーブルもイスも壁の絵画も何もかもがピンクの中であつた。そこでピンクの皿に入れて出されたのはとりあえず普通のメニューであつた。

「よかつた」

華奈子はその普通のメニューを見てまずは安心した。

「味もいいし」

「そうね」

美奈子もそれを味わって笑顔になる。まずはその料理を堪能した。それからお風呂に六人で入ることになった。しかも先生と一緒にである。

「小百合先生もですか」

「はい、皆さんで仲良く」

ここでも先生は笑顔であった。笑顔が今田先生とここでもそっくりであった。その笑顔に進められてお風呂に入る六人であった。

第七十二話

完

2007・12・19

第七十三話

第七十三話 お風呂

お風呂に入る六人。まずは入ってみて驚きであった。

「何、これ」

「お風呂よね」

何とそこはあまりにも巨大な浴槽があったのだ。しかもそれが何個もあってサウナまである。あげくには野外風呂まであった。

「そうらしいけれど」

美奈子もこれには啞然としていた。

「何かこれがお家のお風呂って」

「信じられないわよ」

華奈子の驚きを隠せない声が聞こえていた。六人はもう裸になってシャンプーやボディソープをそれぞれのプラスチックの籠に入れていた。

「スーパー銭湯じゃない、そのまま」

「スーパー銭湯か」

「そういえばそうね」

梨花と赤音が華奈子のその言葉に頷くのであった。

「じゃあ考えればいいわね」

「じゃあそれぞれ入れればいいわね」

美樹と春奈もそれで納得することにした。見れば春奈は今は眼鏡を外している。綺麗な澄んだ垂れ目がそこにあった。

「それなら」

「それぞれ好きなのところに」

といっても六人がまず身体を洗って入ったのはミルク風呂であった。白く淡い色のミルクがそのまま浴槽を満たしているのであった。皆で入る形となった。その中で華奈子が皆に対して問う。

「どつしてここなの？」

「どうしてついでに」と

「やっぱりね」

それに対する皆の答えはもう決まっていた。

「ミルクのお風呂ってあれなんですよ？」

「入っていたら綺麗になるって」

クレオパトラの伝説である。皆それを知っているからこそ入るのであった。

「だからよ、やっぱり」

「私達だってやっぱり」

「皆考えることは同じなのね」

華奈子は赤音、美樹、春奈、梨花のそれぞれの言葉を聞いて納得して頷くのであった。

「あたしもそうだし」

「華奈子もそうなのね」

「ええ」

そして美奈子の言葉にも頷いた。二人は長い髪を上で束ねている。見れば春奈や美樹といった髪の長い面々も同じである。まだ幼さの残る身体つきや顔立ちなのにそれがかえって艶かしく見えるのだから不思議であった。

「やっぱり綺麗になりたいから」

「そうよね。折角の機会だし」

華奈子も当然ながら同じだ。ならば反論はなかった。

「楽しく入りましょう」

「そうね」

「皆でね」

こうして六人でお風呂を楽しむ。暫くミルク風呂や他の様々なお風呂に入って楽しんでいたがそこに新たな客がやって来た。

「誰かしら」

「先生かしら」

入り口の方を見ると。そこには女神がいた。

第七十三話

完

2
0
7
・
1
2
・
2
4

第七十四話

第七十四話 小百合先生のお風呂

お風呂に入って来たのは小百合先生であった。見れば真っ白の肌
にギリシア彫刻の様な見事なプロポーションである。その長くふわ
ふわとした髪を上でまとめている。

「皆さん」

先生はその見事な肢体を六人に見せながら声をかけてきた。

「楽しんでおられますか？」

「え、ええ」

「楽しませてもらってます」

六人は先生の言葉に答えた。先生を見ながら呆然とした顔を見せ
ている。

「けれど、どうされたんですか」

「どうされたっていいですか」

「その」

先生その言葉に呆然とした顔のまま答えた。

「先生があんまりにも凄いで」

「凄く大きなおっぱいですよね」

「そうですね」

しかし当の小百合先生には自覚がないのであった。

「私はあまりそうは思わないですけど」

「いえ、全然」

「ウエストだってお尻だって」

「ねえ」

六人は顔を見合わせ言い合う。見る部分は同じであった。

「完璧じゃないですか」

「まるでモデルさんですよ。しかもスーパーモデル」

「オーバーですよ」

「ここでもにこりと笑う先生であった。

「それは」

「何かさ」

華奈子はそんな先生を見て美奈子にヒソヒソと話をした。

「先生は自覚ないみたいね」

「そうみたいね」

美奈子もそれに同意して頷いた。

「どういうわけかね」

「不思議だけれど」

「そう言い合う二人であった。

「では皆さん」

「はい」

先生は二人の会話には気付くことなくまた皆に声をかけてきた。

「お風呂の後はベッドで休んで下さいね。明日からは」

「修行ですよね」

「そうです」

そのにこりとした笑みで皆に答えてきた。

「それで宜しいですね」

「勿論です」

「それである博士を今度こそ」

最初からそのつもりであった。それを誓い合ってまたお風呂に入る。そこでまたしても先生の見事な胸を見るのであった。

「何ていうか本当に」

「これって」

先生の胸は何と水面に浮かぼうとさえしている。肌の張りも見事なものであった。

「あたしも先生みたいになれるかな」

「さあ」

美奈子も今回ばかりは華奈子に答えることができなかった。
「なるうと思えばなれるかも」

「一応努力はしてみるわ」

「わかったわ」

かなり自信はなかった。それでもこちらにも努力しようかと決意する六人であった。

第七十四話

完

2007・12・24

第七十五話

第七十五話 学校へ

翌日小百合先生に案内されて八条学園に向かう。先生の車である巨大なピンクのリムジンの後部座席に六人であるがここで助手席の先生に華奈子が尋ねてきた。

「それで先生」

「はい」

先生は華奈子の言葉ににこやかに応える。

「修行はどんな感じでしょうか」

「時間的にはすぐですよ」

「すぐなんですか」

「ええ。貴女達も学校がありますよね」

「つつい忘れてしまいがちなことであった。

「それで時間的にはすぐなんですよ」

「そうなんですか」

「けれどそれだと」

それを聞いて美奈子が怪訝な顔になった。

「何でしょうか」

「あの博士に対抗できる魔法が身に着くんでしょうか」

美奈子が気にしているのはそこであった。

「少しの時間で。あの博士に」

「御安心下さい」

しかし小百合先生は安心しきったような声でこう応えるのであった。

「それは何も気にすることはありません」

「そうなんですか」

「それは着けばわかります」

「こつも言ってきた。」

「ですから。今はゆっくりと」

「していればいいんですね」

「別に命の心配をするような修行でもありませんし」

「何なんでしょうね」

「さあ」

華奈子は今度は美奈子に問うが美奈子もわかりかねていた。首を傾げるだけだ。

「何なのかしら」

「今日中に終わりますよ」

「今日中なんですか」

「どんなのかしら」

春奈と赤音もわかりかねていた。

「けれどまあここは」

「行くしかないわよね」

美樹と梨花のしつかり系は覚悟を決めていた。とにかく修行をしないと博士にはとても勝てないことだけはわかっていたからだ。

「あのゴキブリ軍団を何とかしないとね」

「そうね」

美奈子が華奈子の言葉に応えた。

「どうしようもないから」

「何かあるかわからないけれど頑張りましょう」

「着きましたよ」

「ここで先生が言ってきた。

「ここです」

「ここですね」

「はい、そうです」

六人が辿り着いた場所とは。とにかくこれではじまるうとしていた。

第七十五話

完

2
0
8
・
1
・
2

第七十六話

第七十六話 魔法空間

そこは建物だった。何か教会に似ている。

「ここですか」

「はい、そうです」

小百合先生はまた六人に答えてきた。

「この建物の中で修行をします」

「ここですか」

「そう、一日の間」

そう六人に言う。

「ここで修行ですよ」

「はあ」

「ここですか」

「何か」

何か言いたそうな六人にまた声をかけてきた。

「いえ、ここで六人って」

「できるのかなあって」

「大丈夫なんです、これが」

そう言われても先生の言葉は変わらない。

「それも全然」

「全然なんですか」

「ですから皆さん」

また六人に言ってきた。

「大船に乗ったつもりでさあ」

「入ったらいいんですか」

「そういうことです」

扉が開かれた。その中は。

「あれ、何もなし」

「それどころか」

「やたらと広い。真っ暗であるがどう見ても外観よりかなり広がった。」

「何処まであるんだろう」

「ここって」

「魔法空間です」

「先生はこう言うのだった。」

「ここに入って修行するんです。それでは先生も」

「先生もって」

「えっ!？」

「六人と一緒に先生も入る。するとそのまま落ちていく。」

「ど、どうなってるの!？」

「この建物の中って」

「ですから魔法空間です」

「何処かに落ちながらもにこりとマイペースに笑っている先生であつた。」

「そしてこの先には」

「この先には？」

「何が」

「それは言ってみてのお楽しみです」

「そういえば何故か落ちながらも皆のスカートはめくれない。魔法空間のスカートの長くてやたらとめくれるものだというのだ。」

「これも魔法空間だからだろうか。」

「それぞれの場所に」

「それぞれって」

「あたし達これからどうなるのかしら」

「それもわからないし何故か先生まで一緒なのかも。全くわからないまま六人はそれぞれの修行の場へと向かうのであつた。魔法空間の中で。」

第七十六話

完

2
0
8
・
1
・
2

第七十七話

第七十七話 ラビリンズ

六人が小百合先生と一緒に辿り着いた魔法空間、そこは何と。

「ここって」

「何なの!？」

「迷路ですよ」

先生はこう六人に答えてきた。

「ちよつと複雑な」

「それだけじゃないですよ」

華奈子はもうそれを読んでいた。それで先生に尋ねた。

「そこんところはどんなでしょう」

「勿論魔法空間ですから色々な動物さん達がいますよ」

「色々ってどんな」

「例えばニメートル程の狼とかですね」

「狼!？」

「そんなのがいるんですか」

六人はそれを聞いて驚きを隠せなかった。それも当然のことであつた。

「大丈夫です。皆さんで力を合わせれば平気ですよ」

「それでもねえ」

「ねえ」

流石にそんなことを言われて安心できる筈もなかった。狼というだけでも大変なのにニメートルもあるのだ。六人は不安を感じずにはいられなかった。

「ねえ御主人」

「大丈夫だよ、今回は」

ライゾウとタロがここで華奈子に対して尋ねてきた。

「多分狼だけじゃないぜ」

「僕の予想では他にも色々」と

「いるっていうのね」

華奈子はそう自分の使い魔達に対して尋ね返した。

「御主人もそう思うだろ？」

「多分迷路を歩いていたら急に出て来るよ」

「やれやれ。とんでもないところなのね」

華奈子はあらためて溜息をつく。しかしそんな彼女に美奈子が言うのであった。

「それでもあの博士に比べたらましでしょ」

「いや、それを言ったら」

元も子もない話であった。何しろあの博士は歩く非常識というレベルではないからだ。

「その通りなんだけれど」

「それを考えたらましよ」

美奈子はここまで言うつと毅然として前を見据えた。

「そうでしょ？それじゃあ」

「わかってるわよ。どのみち行くしかないっていうのはね」

こうした時には度胸を据える華奈子であった。正面を見据えた。

「行くわよ、それじゃあ」

「わかったわ。じゃあ皆も」

「ええ」

「いざ前へ」

六人と一緒に先生が声をあげるが何故か先生だけはいつもの穏やかな様子であった。

「お弁当もちゃんとありますからね」

「何でこの先生っていつもこうなんだろ」

「さあ」

タロとライゾウは先生を見て言うが先生は全く意には介していない。とにかく迷路での修行が幕を開けたのであった。何はともあれといった感じで。

第七十七話

完

2008・1・9

第七十八話

第七十八話 最初に出たのは

六人は迷路を歩いていく。すると最初に彼女達の目の前に出て来たのは。

「URYYYYYYYYYYYYY!!」

「ああ、これはわかったわ」

赤音が奇声を発しながら前に出て来た仮面の男を見て言った。

「あれね、吸血鬼ね」

「吸血鬼だったんだ、これって」

「何かと思ったら」

彼女の使い魔である兔のジップとハムスターのハリーがそれを見て言うのだった。

「吸血鬼っていったらあれだけねど」

赤音は落ち着いた様子で言う。あまり怖がってはいないのがわかる。

「太陽に弱いつてというのが相場よね」

「それでは赤音さん」

ここで小百合先生がその赤音に声をかけるのだった。

「御願いますね」

「倒せてことですよね」

「はい」

先生は実にあっけらかんとした調子でまた赤音に告げた。

「皆さんで。御願います」

「それじゃあ」

梨花がまず赤音のフォローに回るのだった。

「ここは六人でやりましょう。いいわね」

「ええ。けれど」

赤音がここで梨花に応えて言うのだった。

「あたしがメインよね」

「そうですね。吸血鬼がメインですから」

先生がまた言ってきた。

「光を使えば楽に倒せますよ」

「楽にでしょうか」

「先生が仰るんだから間違いはないと思うわ」

首を傾げる春奈に美樹が告げる。

「多分ね」

「とにかくやるしかないってことね」

赤音はそれだけはもうわかっていた。他の面々も。

「さもないところちも吸血鬼になるわよ」

「そうね。いい、皆」

リーダーである梨花がコントロールタワーになっていた。

「皆で周りから一斉攻撃を仕掛けて」

「ええ」

「それで」

「赤音ちゃんは上から頼むわ」

赤音に対してはこう告げた。

「光は上から照らすのが一番だから」

「わかったわ。それじゃあ」

赤音も頷く。そうしてそのまま攻撃に入る。それぞれの使い魔達も。中でもジップとハリーは赤音と一緒にかなり緊張した状態にあった。

「私達もいるから」

「御主人、頑張ってるわ」

「わかってるわ」

「全部で六匹いますから」

六人の後ろから先生が言ってきた。

「頑張ってるわね」

ということであった。六人にとっての戦いであった。

第七十八話

完

2
0
8
・
1
・
9

第七十九話

第七十九話 光の連携

六人はそれぞれ身構える。まずは梨花が言う。

「まずはね」

「ええ」

五人がそれに応える。

「困みましょう。話通りね」

「了解」

「まずはそれね」

五人がそれに応える。その中で赤音が梨花にまた問うた。

「私は上よね」

「そうよ、上から御願いな」

「わかったわ。じゃあ予定通り」

「御主人」

「僕達もね」

ジップとハーリーも応えてきた。

「連携で行きましょう」

「そうすれば勝てるから」

「そうね。落ち着いてね」

実は赤音には最も難しいことであるが。彼女はそれをするつもりであった。

「やればいいわよね」

「じゃあ皆」

また梨花が皆に言うてきた。

「仕掛けるわよ、いいわね」

「ええ、わかったら」

「行くわよ！」

まずは五人は素早く吸血鬼を取り囲む。それから一斉攻撃を仕掛

けた。

「あら、かなり」

小百合先生は彼女達の動きを見て声をあげる。

「速いんですね。これはかなり」

優しい目だがその奥が輝いた。彼女達を見ていて。

五人は吸血鬼めがけて一斉攻撃を浴びせる。石に水に風に火、そして音で。まずはそれを周囲から浴びせて吸血鬼の動きを止めるのであった。

「赤音ちゃん！」

「今よ！」

「ええ、わかつてるわ！」

既に赤音は魔法の力を使って大きく跳躍していた。そうしてそこから吸血鬼の頭上を抑えていたのである。

「いい？」

赤音はここでジップとハーリーに声をかける。

「いよいよだけれど」

「勿論よ」

「任せて御主人」

二匹はそれに応える。そうして一旦主から離れて宙を舞う。そこで何と彼等が分身をはじめたのであった。

「えっ!?!」

「使い魔が!?!」

五人もそれには驚いた。だが赤音は平気な顔で魔法を放つ態勢に入っていた。

「何とかこれでやれたらいいけれど」

「やるわ」

「安心して」

「そうね。それじゃあ」

使い魔達の言葉に応える。そうして。

「行くわよ!」

光を放った。今彼女の魔法がはじまった。

第七十九話

完

2008・1・13

第八十話

第八十話 赤音の魔法

赤音は空中から右手のステッキで光を放つ。最初からそれは一つではなかった。

「一つじゃない!？」

「幾つも」

「この光をさらにね」

彼女は魔法を放ちながらまた言う。

「こうするのよ!ジップ!ハーリー!」

また二匹に声をかけた。

「御願いね!」

「わかつてるわよ!」

「御主人、任せて!」

二匹のそれに応える。そのうえで分身達で飛び回る。

それぞれの鏡に赤音の光達が当たると反射する。それが複雑に動き五人の攻撃で怯んでいた吸血鬼を撃つのであった。

それはかなりのダメージであった。一つ一つもそれなりの大きさだったがそれが無数に放たれ複雑な動きを示すのだ。とてもよけられるものではなく吸血鬼は光を受け続ける。そうして遂に倒れ消えてしまったのであった。

「やったわね」

「ええ。けれど」

五人はここで着地してきた赤音を見るのであった。

「赤音ちゃん」

「今のは」

「ええ、前の特訓でやったのを応用してみたのよ」
そう五人に答えるのであった。

「前のを!？」

「そうなのよ。ジップとハーリーには今回助けてもらって」
「まあそういうことで」
「宜しく」
「二匹はにこりと笑って五人に述べてきた」
「上手くいったわね、何とか」
「そうね、使い魔ね」
「ここで梨花が気付いた」
「使い魔を使えばいいのよね、ここは」
「そういうこと。何か見つけた？」
赤音はくすりと笑って述べた。
「ひよつとして」
「かもね。これからの戦いのヒントをね」
「さて皆さん」
「いいタイミングで小百合先生が出て来た」
「あと五人ですよ」
「五人つていつたら」
「人数分よね」
「そうですね、丁度いいですね」
「にこりと笑って六人に述べる」
「一人一回で。では」
「はい、行きます」
「それなら話が早いです」
六人もそれに乗るのであった。
「ではいざ続きに」
「わかりました」
「それにしても」
「ここで赤音は先生の言葉に思わず呟いた」
「続きつて」
「何はともあれ迷宮を進む。まだまだ迷路は続くのだった」

第八十話

完

2
0
8
・
1
・
1
3

第八十一話

第八十一話 二番目の相手

暫く迷宮を進んでいると。また敵が出て来た。

「今度は何!?!」

「見て!?!」

「フンガー……!?!」

今度はフランケンシュタインであった。どう見ても映画のそれである。

「フランケンね」

「今度は誰なの?」

「多分私ね」

美樹が前に出て来た。

「美樹ちゃん!?!」

「どうして美樹ちゃんが」

「だって。フランケンシュタインよ」

そのフランケンを見据えながらの言葉であった。

「スピードが遅いわよね」

「ええ」

「多分だけれど」

「だったら。風よ」

彼女はこう答えた。

「それで攻めれば。かなり楽な筈よ」

「それでは」

ここで後ろから先生がその緊張のない声で言ってきたのであった。

「佐藤さんを軸で今回は御願いたしますね」

「わかりました」

「それじゃあ」

六人は先生の言葉に頷く。そうしてまたフォーメーションを組む

のであった。

「今度はね」

「ええ。どうするの?」

他の五人が美樹の言葉に顔を向ける。目はフランケンを見たままである。

「今度は正面から仕掛けるわ」

「正面からって」

華奈子がそれを見て言う。

「大丈夫? 相手はガード固いわよ」

「それでもよ」

しかし美樹の考えは変わらない。

「やってみるわ。いいかしら」

「決意は固いのね」

「勿論」

美奈子にも答える。

「だからこそ言うのよ」

「勝算もあるのね」

「そうよ」

また華奈子の言葉に答えてみせた。

「それも完全にね」

「わかったわ。それじゃあ」

華奈子もここで完全に頷いてみせた。

「任せるわ。いいわね」

「ええ。頼むわ」

六人は美樹の言葉を受けてフォーメーションを組む。美樹が正面に立ち他の五人が彼女を囲む。そうしたフォーメーションであった。

「行くわよ!」

「わかったわ!」

皆美樹の言葉に答える。いよいよはじまるうとしていた。

第八十一話

完

2
0
8
・
1
・
2
0

第八十二話

第八十二話 風切り

「仕掛けるわ！」

「まずは！」

梨花と赤音が動いた。それぞれ石と光を左、上からそれぞれ放つ。赤音の光はフランケンの目を狙っていた。目晦ましを狙ってのとであるのは言うまでもない。

「これで動きを鈍くするか止めて」

赤音は言う。

「次御願ひ春奈ちゃん！」

「うん！」

今度は春奈が仕掛ける。フランケンの後ろに回り込んでシャボン
を放ちダメージを与えるのであった。

だがそれは微々たるダメージである。しかしそれによりフランケ
ンの注意がそちらに行く。実はそれこそが六人の狙いなのである。

「これでいいわね」

「次は私達が」

華奈子と美奈子は前に飛ぶ。華奈子は左、美奈子が右だった。そ
こからそれぞれ魔法を放ちさらにフランケンの注意を削ぐのであっ
た。

「よし、いい感じね」

美樹は視力を奪われたフランケンが必死に辺りを見回しているの
を見て会心の笑みを浮かべていた。見事に策が的中しているからだ。

「これで後は」

「御主人」

「どうするの？」

ビルガーとファルケンが主に問うてきた。

「足元よ」

「足元!？」

「フランケンのか？」

「そうよ、そこを狙うわ」

自分の頭のところを飛んでいる二羽に対して告げた。

「それでいいわね」

「足元かあ」

「狙いはそこだったんだ」

「大きい相手にはこれよ」

美樹は鋭利な目になっていた。その目でフランケンを見つけている。

「足元を狙えば効果があるから」

「それはいいけれど」

「上手くいくかな」

二羽が思うのはそこであった。幾ら理論がそうであっても成功しなければ何の意味もないからである。これはもう言うまでもないことである。

「いくかな、じゃないわよ」

しかしここで美樹は言うのだった。

「いかせるのよ。いいわね」

「何かそれって」

「強気だね」

「強気じゃないと勝てないわよ」

美樹はまた二羽に答えた。

「あの博士にはね」

「博士なの？」

「フランケンじゃなくて」

「だってそうじゃない」

美樹の言葉は変わらない。

「あの博士に勝つ為にここに来ているんだから」

身構えながらの言葉であった。今まさにフランケンに対して攻撃

を仕掛けようとしていた。

第八十二話 完

2008・1・20

第八十三話

第八十三話 足元を

美樹が狙うのは足元。フランケンの足元に向けてステツキを左から右に横薙ぎに払う。すると鎌イ足が発生しフランケンの足元に襲い掛かる。しかもそれを何回も繰り出す。それと同時にビルガーとファルケンに声をかけるのだった。

「今よ！」

声も鋭利なものになっている。

「飛んで！ビルガーは右！」

「うん！」

「ファルケンは左！」

「了解！」

二羽はそれぞれ頷く。そうして二羽もまた飛び翼を一閃させるのだった。それが鎌イ足になりフランケンに襲い掛かるのであった。

それでフランケンを攻める。フランケンは動きが鈍い。美樹はそれがわかつている。わかつているからこそ果敢に攻める。しかも彼女も動くのだった。

「確かにね。大きくて力は強いわ」

それもわかつていた。フランケンの能力を一目で見抜いていたのだ。

「それでも。それならそれでやり方があるわ」

「それがこれなのね」

「御主人、そうなのね」

「ええ、そうよ」

二羽の使い魔達にも答える。

「これなら。フランケンを倒せるわ」

「そうだね」

「別に正面からぶつかり合う必要はないんだ」

「そういうこと。相手の弱点を攻める」

頭脳派の美樹らしい判断だった。それに基いて攻め続ける。

「それで勝てるわ。ほら」

動きながらも二羽と共に鎌イ足を放ちフランケンを撃ち続ける。

それで遂にフランケンが膝を着いた。膝を着くと共に前に倒れ伏していき消えたのだった。

「やっつけたのね」

「はい」

小百合先生が答えてきた。やはり六人の後ろでにこにここと笑っている。

「お疲れ様でした。そしてお見事でした」

「力でぶつかり合う必要はないんですね」

「頭を使うのもやり方の一つですから」

先生もそれを認める。

「別に構いませんよ」

「わかりました。それじゃあ」

「あと四人です」

先生は残りのモンスターの数をあらためて六人に告げた。

「さて、今度は何が出るでしょうか」

「何が出て来てもやってやるわ」40

華奈子は強気だった。

「鬼でも蛇でもね」

「本当にここに博士が出て来たら？」

「それでもよ」

美奈子の言葉にも引かない。本物であった。

「やってやるわよ」

「そうね。その意気じゃないとやっぱり駄目よ」

「わかってるじゃない。それじゃあ皆」

あらためて皆に声をかける。

「行きましよう、先に」

「ええ」

「わかったわ」

皆も彼女の言葉に頷く。そうして先に進むのであった。

第八十三話

完

2008・2・6

第八十四話

第八十四話 三番目の相手

先を進む一行。迷路はまだまだ続いている。

「それにしても長いわよね」

「ええ」

美奈子が華奈子の言葉に頷く。

「何処まであるのやら」

「ひよつとして終わりが無いんじゃないかしら」

「いえ、ありますよ」

不安な顔になった美奈子に小百合先生が答えてきた。

「あるんですね」

「はい。六番目のモンスターを倒せばそれで終わりです」

「つてことはどんどん倒せばいいんですね」

「そういうことです」

先生は華奈子にも答えた。にこりと笑ったままで。

「そうすれば出られますので」

「言い換えればあれね」

美奈子は先生のここまでの話を聞いたうえで述べる。

「全部倒さないと出られない」

「そうなるわね、そういえば」

華奈子はその考えにも気付く。

「じゃあ。倒すしかないわよね」

「そういうことね。さて」

ここで美奈子は辺りを探る。

「今度は何が出るかしら」

「そのケルベロスかしら」

華奈子はあまり考えることなく述べた。勘である。

「今度は」

「それはわかりませんよ」

先生の言葉は何処か他人事にも聞こえるものであった。にこにことしていただけに余計にであった。本人がそれを意識しているかどうかはわからない。

「果たして。何が出て来るか」

「ドラキュラにフランケン」

華奈子は言う。

「じゃあ次はミイラ男かしら。だったらあたしの出番だけれど」

「火に弱いからね」

「そういうこと。まあそれでも上手くはいかないでしょうけれど」

華奈子もそれは予測していた。相手を侮つてはいないのだ。

「そもそも何が出て来るのかさえわからないしね」

「何かしら、今度は」

そんなことを話している側から。前に巨大な像が現われたのであった。

「これは？」

「ゴーレムです」

先生が六人に伝える。

「三番目はこれなんですな」

「これなんですって何か」

「緊張感が本当にないってどうか」

「さて」

それでも先生の言葉は続く。

「ではでは頑張つて下さいね」

「ええ」

「倒さないといけませんし」

緊張感に少し欠けるがそれでもゴーレムに向かう六人であった。

2
0
0
8
·
2
·
7

第八十五話

第八十五話 土の怪物

三番目の怪物ゴーレムと退治する六人。その中で不意に梨花が春奈に声をかけてきた。

「春奈ちゃん」

「私？」

「ええ」

春奈の言葉に答え返す。

「今回はメインで頼むわよ」

「私なのね」

「土だから」

それが理由なのであった。梨花にとっては。

「これでわかるかしら」

「土だから」

「そうよ」

また春奈に告げる。話をしている間もじっとゴーレムを見据えている。

「これでわかってもらえたかしら」

「ええ」

「流石ね」

春奈が頷いたのを見て美樹はくすりと微笑んだ。

「やっぱりクラウンの頭脳だけはあるわね」

「そうね。じゃあ今回もいけるかしら」

赤音も言う。彼女達はこれでいけると思った。だがまだゴーレムは倒してはいない。それはまだこれからの話なのであった。

「今回は華奈子ちゃんね」

春奈が華奈子に声をかけてきた。

「あたしは？」

「最後に攻撃を仕掛けて。最初の波状攻撃の最後でね」
「最後ののね」

「そう」

華奈子の言葉にこくりと頷いてみせる。

「最後で。御願いな」

「わかったわ。じゃあ春奈ちゃんに任せるわ」

「御願いな。それで絶対に上手くいくから」

優しい微笑みを浮かべる。こんな時でも春奈はいつも通りのおっとりとした春奈であった。

「そう。それじゃあ」

「仕掛けるわよ」

梨花が華奈子だけでなく皆にも声をかける。

「まずは五人で」

「ええ」

いつも通りのフォーメーションであった。

「いきましよう」

「わかったわ。それじゃあ」

まずは五人が動く。華奈子が最後だ。

その後ろには春奈がいる。しかし彼女は動かない。

「御主人」

その春奈にイーとリャンが声をかける。

「動かないんですか？」

「皆出ているのに」

「いいの」

二匹に言われてもまだ動こうとはしない。

「ここでいて。今はね」

「今は」

「じゃあそこにも考えがあるんですね」

「そう。だからね」

そう言うのだった。何はともあれ彼女は動かないのであった。

第八十五話

完

2
0
8
・
2
・
1
3

第八十六話

第八十六話 直線攻撃

五人は美奈子を先頭にして進む。そのまま一直線に。

「いい、美奈子ちゃん」

後ろから春奈が美奈子に声をかける。

「そのまま仕掛けて。御願い」

「わかつているわ」

美奈子はそのまま前を進みながら答える。進みながら笛を構える。

「まずは。私の笛でね」

「ええ」

美奈子はゴーレムに突き進むがそこに拳が来る。しかしそれを上に跳んでかわすと笛の音を奏でるのであった。ブラムスの子守唄であった。

「まずはこれで」

その笛の音がゴーレムの耳に入ると動きが鈍った。子守唄はゴーレムにも有効なのであった。

「よし、効いてるわ！」

「じゃあ次は！」

赤音、美樹、梨花が続いて一直線に進み一人ずつ攻撃を放ちダメージを与える。ダメージを与えるとそれぞれ横に跳ぶ。そうして出て来たのは華奈子であった。

「よし、それじゃあ出番ね」

「ええ、頼むわ」

春奈は華奈子にも声をかける。

「ゴーレムだから」

「そうね。じゃあー！」

華奈子は上に大きく跳躍した。上から炎を放つ。それがゴーレムの周りを飛び回る。直接攻撃を与えるのではなくゴーレムの周りを

飛ぶだけだった。

「春奈ちゃん、これでいいのね」

「ええ、有り難う」

にこりと微笑んで華奈子に礼を述べる。

「後は」

「僕達もいるね」

「じゃあ」

「御願いな。これで決まるわ」

イーとリヤンは既に前に出ている。二匹が水を放ちゴーレムを下から撃つ。そして春奈は正面から水を放ってゴーレムを撃つのであった。

「水なのですね」

「はい、そうです」

春奈は水を放ちながら後ろで見ている小百合先生に答える。

「ゴーレムは土ですから。まずは火で乾燥させて」

「それから水で撃てば脆くなって崩れるわね」

「はい。それを狙っていました」

土の特性を利用した攻撃なのであった。

「これならゴーレムも」

「そうですね」

先生は春奈の言葉に微笑む。今度は先生がにこりと微笑むのであった。

「合格です。三番目のモンスターもこれでクリアです」

「有り難うございます。あっ」

その時だった。ゴーレムが土に戻って崩れ落ちたのであった。崩れ落ちるとそのまま消え去ってしまった。まるで砂が消え去る様に。今終わりました」

「はい」

今完全にゴーレムは消え去った。こうして春奈達は見事ゴーレムを倒したのであった。残るは三匹、半分が終わった計算になる。し

かし迷宮はまだ続く。

第八十六話 完

2008・2・13

第八十七話

第八十七話 趣味は何か

六人が必死に迷宮の中で修行をしている時に博士は何をしているかという。相も変わらず何か得体の知れないことをしていた。

「今度は何してるんですか？」

「何、大したことではない」

あくまで博士のコメントであるので当てにはならない。

「ちよつと趣味をしておるのじゃ」

「趣味？」

「左様、わしの数多い趣味の一つじゃ」

「博士の趣味という」と

小田切君の脳裏に不吉極まる事柄が次々と沸き起こった。

「生体実験に兵器の開発に劇薬の研究に」

「それと生物の細胞操作じゃ」

「まともな趣味には興味がないんですね」

「まともなことなぞ詰まらん」

実に博士らしいコメントであった。

「折角知能指数二〇万なんじゃぞ。それでどうして普通に使うのじゃ」

「国際貢献とかは？」

「何じゃそれは」

本気でそんな言葉は知らない博士である。

「イギリス料理なら食わんぞ」

「いえ、もういいです」

冗談抜きで知らないことがわかったのでこれ以上は国際貢献に関しては聞かなかった。それで話を元に戻すのであった。

「それですね、博士」

「うむ」

「何をされているんですか？趣味といいますと」

「新たな兵器の開発じゃ」

やはり碌でもないことであった。

「今度は生物兵器を考えておる」

「生物兵器っていいますと」

「これまで開発した怪獣をな」

「ゴ　ラですか？」

他にも色々な傍迷惑な怪獣を生み出してきてきたがその中でもそうした怪獣を創ってきたのだ。今度はそれを応用して何かをまた作るうというのだ。

「それはもうあるしな。そこからまた創ろうと思っているのじゃ」

「そうなんですか」

「ビオ　テはもう作ったしう」

そんなものも生み出しているのだ。

「いや、待てよ」

「どうしたんですか？」

「閃いたぞ。もっと面白いものを作ろう」

ここでまたまたとんでもない方向に考えを向けた。

「メカじゃ、メカ」

「メカですか」

「怪獣をメカにしたものを開発する」

博士が考え付いたのはそれであった。

「名付けてメカコ　グじゃ。どうじゃ」

「キ　コン　をロボットにしたものですね」

「左様、それを作る」

どちらにしるとんでもないものを作るつもりであった。

「さて、それでニューヨークか北京かモスクワでも破壊してやるか」

「破壊以外には考えないんですね」

「形あるもの必ず壊れる」

壊すと言っ。

「さて、作ろうか」

「趣味はそれだったんですか」

結局碌でもないことをする博士であった。

第八十七話

完

2008・2・20

第八十八話

第八十八話　　アクシデントも怖くない

三日でメカ　　グを開発した博士。早速それを何処かの街に向けようとしたがその矢先に思わぬ相手が彼の前に姿を現わした。

「何じゃあれは」

「宇宙人みたいですね」

やけに小さく頭が大きくて釣り目の黄色い宇宙人が出て来た。

「人類二告グ」

宇宙人は博士を前にして宣言する。

「今ヨリコノ星ハ我々ノモノダ。無駄ナ抵抗ハ止メロ」

「つて、侵略者!？」

「何じゃ、また御主か」

「ムツ、天本博士」

何とこの宇宙人と博士は知り合いであるらしい。

「おお、遊びに来てくれたのか」

「久シ振ダナ、元氣ソウデ何ヨリダ」

「何よりだつて」

小田切君はこの宇宙人が急に友好的な態度になったのを見て目を顰めさせた。

「侵略に来たんじゃないんですか!？」

「いや、生体実験の材料を探しに来たんじゃ」

「けれど今」

どちらにしろとんでもない理由で来ているが小田切君はそれとはりあえず置いておいて博士に対して問うのであった。

「実際にこの星は我々のものだつて」

「あれはこ奴の星の挨拶じゃ」

変わった挨拶もあったものである。

「要約すればこんにちは。仲良くしましよつてことなのじゃ」

「そうなんですか」

「うむ、そうじゃ」

それにしても物騒な挨拶の言葉ではある。しかも問題はまたあった。とりあえず置いておいた問題がそれである。

「それでもですね」

「生体実験のことか」

「そうですね、まさかそれって」

「決まっておるではないか」

なお博士の生体実験の素材は大抵生きた人間である。生きた人間をサイボーグにしたり劇薬の実験に使ったりするのは普通である。

「生きておる人間じゃよ」

「じゃあとんでもないことじゃないですか!」

「何、大したことではない」

しかし博士の態度は普段と変わらない。

「何処その暴力団をな。事務所ごと拉致してな」

「拉致ですか」

「今回八百人程モライタイ」

「ならいい国があるぞ」

博士は博士で斡旋をしている。生体実験の。

「日本の北西にな。人を攫う国があるからその偉いさんを百人程持って行ってくれ」

「ワカッタ」

「つてあの国まだあつたんですか」

博士が散々色々なことをしているので崩壊したのかと思っていたがまだ存在していたのだ。存外しぶとい。

「特にいいのはパーマでサングラスをかけた小柄で太ったおっさんじゃ」

「フム、ソイツガイイノダナ」

「何ならそいつ一人でもいいぞ。後はクローンをしてだな」

「クローンをして」

「世の中に広めてもよい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

またとんでもないことを吹き込む博士であった。小田切君も絶句だった。

第八十八話 完

2008・2・20

第八十九話

第八十九話 本当にしてみた

そのクローンの話が嘘ならばどれだけよかったか。しかしそうはならなかった。

「さてさて」

「さてさてって博士」

その得体の知れない不細工なおっさんが街に溢れ返っていた。

「もう作つたんですか？」

「わしは仕事が早いのじゃ」

何と一時間で千人のクローンを作ったのであった。しかもその小柄で太っていてパーマをしていてシークレットブーツと灰色の変な服を着ていてサングラスをしているお世辞にも格好いいとは言えないおっさんであった。

「どうじゃ、出来映えは」

「性格はどんなのですか？」

「当然オリジナルのままじゃ」

なお悪かった。

「安心していいぞ。わしは完璧主義者じゃからな」

「完璧ってこれが」

「だから見ておるのじゃ」

まだ言うのであった。

「このおっさんが街に出たらな」

「皆普通に怖がりますよ」

「はっはっは、それだけではないぞ」

とてつもなく嫌なことにそれだけではなかったのであった。

「それだけではな」

「って何があるんですか」

「だから。性格はそのままなのじゃ」

ここが重要であった。嫌になることであるが。

「わかるな、それは」

「ということは」

小田切君もおっさんの性格は知っているつもりだ。女好きで尊大で利己的な独裁者だ。実際に会ったことはないがそれで有名である。

「街に出したら」

「ほれ、見よ」

早速問題を起こしまくっている。何でも勘でも尊大でやりた放題である。

「ゴツキローチより悪質なんじゃ？」

「それはいいことじゃな」

それをいいことと言うのが博士なのだ。

「むっ、しかし」

「どうしました？」

「そうじゃった。こいつは独裁者だった」

今更言うまでもないことである。言うまでもないことだが博士はそれをすっかりと忘れていたのである。というよりはだからこそ災厄を起こすと考えていたのであるが。

「さて、どういったことになるかの」

「何か大変なことになるのは確信できます」

これは言うまでもないことであった。

「まだヒトラーやスターリンの方がましじゃないんですか？」

「そうかの」

その辺りの判断は極めて難しいところだ。

「とりあえず最後はろくなことになりませんよ」

「結構結構」

マッドサイエンティストにとってはそれが最も望ましいことである。

「どうなっていくかのう」

やはり天本博士は天本博士であった。最悪の結末を想定して悦に
耽るのであった。

第八十九話 完

2008・2・27

第九十話

第九十話 独裁者の結末

その無数に増えたパーマでサングラスでシークレットシューズのおっさんであるが。何とここで互いに争いはじめたのであった。

「御前邪魔ニダ！」

「御前肅清ニダ！」

「あれっ!？」

小田切君はそれを見て首を傾げさせた。

「何かお互いに殺し合いをはじめましたよ」

「むっ、そうか」

だが博士はそれを見て納得していた。

「そうじゃったか」

「どうして納得できるんですか？」

街の至るところで殺し合うおっさんのクローン達を見ながら博士に問う。

「当然じゃ。独裁者じゃぞ」

「はい、独裁者です」

「認められるのは自分だけじゃ」

だから独裁者になるのだ。独裁者とは強烈なエゴイストでもあるのだ。

「だからじゃよ。お互いに殺し合うのじゃ」

「そうだったんですか」

「あれじゃ。ザリガニじゃ」

博士は今度はその話にザリガニを出してきた。

「ザリガニ!？」

「ザリガニを大勢同じ所に入れていたらどうなる？」

「殺し合います」

それがザリガニの習性だ。ザリガニを飼う時はこれに用心してお

かなければならない。ザリガニというのはかなり獰猛な生き物であるのだ。

「それと同じじゃ。しかもあいつは共産主義というか全体主義の中でも最悪の部類の独裁者じゃ」

「確かに」

その通りだ。まさに世界最悪の独裁者だ。

「殺し合うのも道理。うむ、いい実験になるな」

「実験なんですか」

「互いに争わない兵器を作り出すのも重要なのじゃぞ」

博士にしてみれば兵器が互いに争っては意味がない、そういうことだ。

「それを考えればあのおっさんはクローン兵器としては無意味じゃな」

「というか嫌がらせの役にしか立ちませんよ」

小田切君の指摘は当たっていた。

「あんな不細工なおっさん」

「嫌がらせか」

だが今の言葉は。博士にとってはツボであった。その言葉を聞いた塗炭に悪魔めいた邪悪な笑みを浮かべてきた。

「そうじゃ、それじゃ」

「それじゃってまさか」

「そのまさかじゃ」

小田切君の危惧は当たった。残念なことに。

「早速開発決定じゃ。そうじゃな」

また口くでもないことを考えだす。

「暴走族の集会やヤクザ屋さんの集まりの中に集団で殴り込ませてな」

「また凄い嫌がらせですね」

「何、時間が経てば殺し合いをして数を減らしてくれる」

今日の前でも殺し合ってその数が激減している。もうすぐ全員い

なくなりそうだ。最後の一人も傷だらけで倒れてそれで終わりである。

「これはよいな。小田切君、よくぞ教えてくれた」

「やっぱりこの博士は何考え出すかわからないな」

後悔先に立たず、言った言葉はもう戻らない。小田切君は博士のろくでもない決定に顔を顰めさせるのであった。

第九十話 完

2008・2・27

第九十一話

第九十一話 休息の時

何とか三匹まで退けた一行であったがここで小休止を取っていた。要するにお弁当を食べていたのである。

「とりあえず残り三匹」

「あと半分ね」

そんな話をしながらお握りやサンドイッチを食べている。小百合先生の手作りである。

「順調かしらね」

「どうかしら」

美奈子が華奈子の言葉に疑問を投げ掛けた。

「それはね」

「六匹でしょ？それでも」

「そういう問題じゃないわよ」

美奈子はまた答えた。

「相手のレベルの問題よ」

「相手の」

「何が出るのかわからないのよ」

美奈子は言う。

「ケルベロスだっているし」

「あれ、やっぱりいるのね」

「そうよ。今までもドラキュラとかフランケンとかゴーレムとか
今まで出て来たモンスターのことを出す。

「凄いのが出て来たから。何が出るか」

「けれどやるしかないじゃない」

しかしそれに対する華奈子の言葉はあっけらかんとしていた。しかもそのあっけらかんとした言葉のままに御握りをその口の中に放り込むのだった。

「どっちにしる。そうでしょ？」

「まあ一言で言えばそうだけれど」

「そういうことよ。案ずるよりね」

「動く方がいいってことね」

「それがこの華奈子ちゃんよ」

右目でウィンクしてみせての言葉であった。

「鬼が出ようが蛇が出ようがね」

「相手がモンスターでもね」

「平気よ。大体相手はあの博士よ」

「天本博士ね」

「下手な妖怪よりとんでもない相手じゃない」

その通りであった。伊達に宇宙空間に隔離された経験がないわけではない。

「そんなの相手しなきゃいけないんだから。モンスターで怖がっていたら」

「華奈子さん」

そう宣言する華奈子に先生が声をかけてきた。

「はい？」

「いい心掛けです」

その明るい笑顔で告げるのであった。

「そうですね」

「そうですね。ですから」

そう述べたうえで皆に声をかけてきた。

「皆さん」

「はい」

「御飯を食べ終わりましたらまた行きましょうね」

「次の相手にですね」

「その通りです」

そういうことであった。六人と先生は食べ終わるとすぐにしまつて立ち上がった。そうしてさらに先へと進むのであった。次の相手

に向かつて。

第九十一話

完

2
0
8
・
3
・
5

第九十二話

第九十二話

狼男登場

先に進んでいると。遂に四匹目が登場した。

「って今度はこれね」

「何かお約束よね」

梨花と赤音が言うのだった。

「狼男ってねえ」

「まあドラキュラにフランケンが出たから」

「やっぱりこれなのね」

「本当にミイラも出そうね」

「けれど困ったわ」

春奈が困惑した顔で狼男を見ていた。

「どうしてなの？」

「だって狼男よ」

こう美樹に答える。

「銀の十字架を溶かした銃弾じゃないと」

「御心配なく」

しかし先生がにこりと笑ってここで困惑する六人に対して言うのだった。

「大丈夫なんですか？」

「あれは映画だけのことです」

「どうやらそうらしい。」

「この狼男は普通に倒せますので」

「銀の弾丸じゃなくても」

「その通りです」

美樹の問いににこりとしてみせる。

「ですからどれでも。さあ」

「それならここはあたしが」

「いえ、待つて」

出ようとする華奈子を美奈子が止めた。

「あれっ、どうしてなの？」

「今度は彼女の番よ」

「彼女のって」

「そうね。ここはね」

そう言っ出て来たのは。美樹であった。

「狼って森の中にいるじゃない」

「うん」

彼女の問いに春奈が応えて頷く。

「そうよ。ヨーロッパとかじゃ特に」

「だからよ。私にやらせて」

狼男を見据えて述べる。

「是非ね。皆、それでいい？」

「私はいいわ」

「私も」

「私もよ」

春奈、梨花、赤音はすぐに答えてきた。

「美樹ちゃん御願いな」

三人に続いたのは美奈子であった。残るは一人だが。

「あたしは最後まで何でもいいわよ」

華奈子は明るく言うのだった。

「絶対に出番はあるでしょうしね」

「じゃあ。いいわね」

「任せたわ」

今度は五人が一斉に美樹に告げた。こうして美樹の戦いがはじまるのだった。

2
0
8
·
3
·
5

第九十三話

第九十三話 狼狩り

狼男を取り囲む一同。だが積極的には動こうとはしない。

「あら」

小百合先生は彼女達のそんな状況を見ても普段のままだ。一向に焦った様子はない。にこにここと笑ってさえいる。

「皆さん。考えておられますね」

「いい、皆」

美樹は取り囲む五人の後ろにいる。丁度狼男の前で赤音の真後ろだ。

「合図と一緒にね」

「ええ」

「わかってるわ」

それぞれ美樹に対して答える。しかし彼女の方は見ずに狼男を見据えたままである。声だけでやり取りをするのだった。

やがて美樹の肩の上を彼女の使い魔であるビルガーとファルケンがやって来た。そのうえで彼女に声をかけるのであった。

「御主人」

「もついいよ」

「わかったわ」

美樹は二匹の言葉に頷くと一旦目を閉じた。そして。

「皆、御願い！」

「了解！」

「受けなさい！」

まずは赤音が光を放った。それは狼男の目を正確に打ち目晦ましとなった。彼がそれに戸惑っていると他のメンバーがさらに攻撃を浴びせる。周囲からの一斉攻撃を受けてさしもの狼男も怯んだ。その時だった。

「よし！」

美樹は上にいた。そこにはビルガーとファルケンもいる。二匹と共に今必殺の魔法を放つのだった。

「これで………終わりよ！」

彼女と使い魔達は共に木の葉を放った。それはまさに竜巻であり恐ろしいまでの数の木の葉が放たれ乱れ飛びながら狼男に上から襲い掛かるのだった。

「あら、これは」

小百合先生はそれを見てまた声をあげた。

「木の葉に魔力を込めて小刀みたいにしたものですね。それで切るのですね」

その通りだった。夥しい量の木の葉に切られた狼男はそれ以前に他の五人の攻撃も受けておりダメージは限界だった。木の葉を受けたところで散りそのまま消え去るのだった。これで美樹は狼男を倒したのだった。

「やったわね」

「ええ」

降り立った美樹に対して五人が歩み寄って声をかける。まずは成功であった。

「木の魔法もあんな使い方があるのね」

「ただ木の葉や使い魔達を使うだけじゃないのよ」

大人びた、そんな笑みを浮かべて五人に答えた。

「こうして力を合わせることもね。魔法だから」

「成程ね。私達のフォーメーションと同じね」

「そういうこと。さて」

「ここまで終えたところでまた言うのだった。

「あとは。二匹ね」

「そうね」

「あとは、ね」

それに応えたのは華奈子と美奈子であった。二人共真剣な顔であ

った。

「やるわよ、美奈子」

「わかってるわ」

美奈子が華奈子の言葉に頷いた。それからまた言う。

「あたし達の力見せてあげましょう」

「ここでね」

二人は顔を見合わせて言い合う。いよいよ双子の出番であった。

第九十三話

完

2008・3・6

第九十四話

第九十四話　ケルベロス

モンスターもあと二匹となった。しかし緊張はまだ続いていた。

「一体はわかってるのよ」

華奈子が迷路を進みながら言う。

「ケルベロスよね」

「そうね」

美奈子が真剣な顔で華奈子のその言葉に頷いた。二人は横に並んで歩いている。その周りに他のメンバーと使い魔達、それと小百合先生がいる。

「それだけはね」

「あれよね。頭が三つあって」

華奈子もケルベロスのことは知っていた。

「それで尻尾が蛇で背中にも蛇が一杯生えている犬よね」

「そうよ。ギリシア神話に出て来るあの犬よ」

美奈子が華奈子のその言葉に答えた。

「それはわかるわよね」

「ええ。かなり手強いわよね」

普段よりも慎重になっている華奈子であった。

「それってやっぱり」

「でしょうね。けれどあれよ」

美奈子は普段と変わらない。冷静な顔で華奈子に言葉を返すだけだった。

「倒せるわ。絶対にね」

「自信。あるのね」

「任せて」

その自信に満ちた顔で答えた。

「絶対にやれるから」

「そう。じゃあケルベロスの時のメインは美奈子ね」

自動的にそれが決定したのだった。

「頼むわよ、本当にね」

「わかったわ」

そう話をしながら先に進む。すると。

前から異様な獣がやって来た。それは。

「言っている側から、ってやつね」

華奈子はその獣を見据えて言うのだった。歩くのは止めている。

「いいタイミングね」

「そうね」

それに美奈子が答える。他の面々も既に歩くのを止めて身構えている。出て来たのはケルベロスであった。

「じゃあ美奈子」

華奈子が双子の相方に声をかけた。

「言葉通りに頼むわよ」

「わかっているわ。確実にやれるから」

「确实、なのね」

「私なら。間違いなくね」

また自信の程を述べてみせた。

「やれるわ」

「それじゃあ」

華奈子はそれを受けて一歩前に出た。他のメンバーと一緒に。

「サポートは任せてね」

「御願ひ。華奈子」

美奈子がここで前に出た華奈子に声をかけた。

「何？」

「次は御願ひね」

「わかっているわ」

美奈子のその言葉に頷く。既に戦闘態勢に入っていた。

第九十四話

完

2
0
8
・
3
・
6

第九十五話

第九十五話 ケルベロスの弱点

六人はケルベロスを囲む。しかしそれ以上は動かなかつた。

「気をつけて、皆」

普段は大人しい春奈が皆に言うのだった。

「ケルベロスはただの怪物じゃないわ」

「はい、わかっております」

「それに関しましては」

美奈子の使い魔であるタミーノとフィガロが答えるのだった。

「冥界の番犬ですから」

「その力はかなりのものです」

「だからよ」

美奈子も言うのだった。

「気をつけるどころの相手じゃないわ。だから」

「どうするの、美奈子」

華奈子が彼女に問うた。

「その相手に」

「皆、いい？」

美奈子が皆に対して言う。今度は。

「まずは一斉に総攻撃を仕掛けて」

「今度は総攻撃ね」

「ええ。しかも正面から」

こつ皆に告げるのだった。

「まずはそれを仕掛けて」

「それからはどうするの？」

「それからは……私ができるわ」

美奈子の言葉は意を決したものだつた。

「私がね。だから」

「絶対の自信があるってことね」
「そうよ」

華奈子への返事は確かなものだった。

「間違いなく。やれるわ」

「そう。だったらここはあんたに従うわ」

「そういうことだね」

「それじゃあ」

美樹、梨花、赤音も応える。これで決まりだった。

「皆、行くわよ！」

「わかったわ！」

華奈子の声に伝えて五人は正面から果敢にケルベロスに総攻撃を浴びせる。まずはそれでケルベロスの動きを止めるのだった。

そしてその間に。美奈子はタミーノ、フィガロと共にいた。その手には笛がある。

「やはり笛ですか」

「これが一番なのよ」

タミーノに答える。

「ケルベロスにはね、やっぱり」

「では御主人様」

今度声を出したのはフィガロだった。

「私達は」

「ええ。御願いますわ」

こう言って彼等に頼むのだった。

「アシストをね」

「了解です」

「それでは」

こうして二匹がまず変化した。それは。

2
0
8
·
3
·
8

第九十六話

第九十六話 笛の音

二匹が変化したのは。それはマイクであった。二つのマイクが宙に浮かんでいる。

「マイクですか」

小百合先生はそのマイクを見て声をあげる。

「また変わったものに変身しましたね。いえ」

だがここで。先生もあることに気付いたようだった。おっとりとしてにこにことした顔はそのままだったが納得したものもそこに見せて後は見守るのだった。

「じゃあ。行くわよ」

美奈子はフルートを構えて吹く。その音色は二匹のマイクの助けも受けケルベロスの耳にも入る。すると。ケルベロスは忽ちのうちに動きを止めたのだった。

「御主人様」

「どつやら狙い通りですね」

「ええ」

マイクになったままの二匹の言葉に頷く。笛を吹きながら。

「どつやらね。じゃあ後は」

「どうされますか？」

「このまま吹くわ」

そう答えてさらに笛を吹く。

「こうしていけばケルベロスは眠って。それで消える筈よ」

「そうですね」

「この曲で」

「ブラームスの子守唄」

それをフルートで奏でているのだ。音楽を得意とする美奈子らしかった。伊達に天才とまで言われているわけではなかった。

「これで駄目なら。もうおしまいだけれどね」

笛を吹き続けると次第にケルベロスは横たわりそうして眠りに入り。そのまま寝てしまい最後には消えたのだった。

美奈子と五人はケルベロスに勝った。これで五匹目、後は最後の一匹だけとなったのだった。美奈子は満足した笑みを浮かべて皆に語っていた。

「オルフェウスなのよ」

「ギリシア神話ね」

「ええ。あれだとオルフェウスは豎琴の音色でケルベロスを眠らせたのよ」

「そうだったね」

ケルベロスはただ恐ろしい外見を持っているだけではないのだ。

実はその知性も高く音楽を愛しているのだ。実に意外なことであるが。

「だからね。それを使ったのよ」

「そういうことだったの」

「凄い自信があると思ったら」

「音楽だったらね」

美奈子は毅然として皆に述べた。

「あるわ。だから何とかなかったのよ」

「それでも何とかなのね」

「そうなの。タミーノとフィガロにも助けられたし」

元の姿に戻っている二匹を見て述べる。

「本当に。何とかだったわ」

「何とかでも勝ちましたよ」

華奈子は笑って双子の姉に対して言った。

「違つかしら」

「そう考えればいいかしら。じゃあ華奈子」

美奈子は双子の妹の言葉を聞いて微笑みながらその彼女に言葉を返すのだった。

「何？」

「ラスト、頼むわね」

「わかってるわ」

華奈子もにこりと笑って応える。何はともあれ最後の勝負になるのだった。

第九十六話

完

2008・3・8

第九十七話

第九十七話 ラストバトルへ

いよいよ最後になった。六人、とりわけ華奈子の気合はかなりのものだった。

「ねえ御主人」

「何？」

ライゾウに対して応えた。

「緊張してる？今」

「していないって言ったら嘘になるわね」

はつきりところ述べるのだった。

「あたしにしては珍しくね」

「それも無理ないね」

タロはそんな華奈子の言葉を聞いて言う。

「正直言って」

「自分では戸惑っているけれどね」

「緊張してるんことが？」

「ええ。だって」

使い魔達に対して述べる。

「今まで。そういうことなかったから」

「まあ度胸が御主人の一番凄いところだったしね」

「確かに」

ライゾウとタロはそれぞれ言う。

「それが緊張するっていうんだからこれはかなりだね」

「僕なんか御主人様が緊張するなんてはじめて見たよ」

「また随分と言ってくれるわね」

そんな二匹に普段の顔に戻って言い返す。

「全く。あたしだって緊張するわよ」

「緊張するのはいいことよ」

「美奈子」

今華奈子に声をかけたのは美奈子であった。

「それだけ集中力ができるから。けれど」

「けれど？」

「あまり緊張したら駄目よ」

反面でこころも告げるのだった。

「言っておくけれどね」

「そうなの」

「そういうもの。身体が硬くなったらかえって駄目だからね」

「わかったわ。あつ」

ここでふと背伸びをしてみると。思ったより身体が硬くなっていたことに気付いた。それに気付いて思わず声をあげたのであった。

「やばいわね。かなり硬くなっていたわ」

「でしょ？」

それに応えて双子の妹に対して述べた。

「気付いてよかったわね」

「ええ。それじゃあ」

「そろそろよ」

美奈子の声が強いものになった。

「いいわね」

「わかったわ。それじゃあ」

美奈子の言葉に頷いたその瞬間だった。目の前に。

「出たわよ」

「ええ」

遂に最後の敵が姿を現わした。それは。華奈子の顔に緊張が走る。

2
0
0
8
·
4
·
1
1

第九十八話

第九十八話 ミイラ男

遂に出て来た最後の敵。それは。

「まさかとは思っていたけれどね」

「これとはね」

ライゾウとタロがまたしてもそれぞれ声をあげる。そこにいたのは。

「ミイラ男だつてさ」

「何かハリウッドばいような」

「ええ、そうね」

さつきよりはかなり硬さが取れた顔で華奈子は自分の使い魔達に
応えるのだった。

「ドラキュラ、フランケン、狼男、ゴーレムで」

「ケルベロスも出たことあったと思うわ」

美奈子が華奈子に言ってきた。

「確かね」

「そうなの。じゃあこれで全部揃ったのね」

目の前のミイラ男を見てまた言う。

「こいつはあたしがやるとして」

「どうするつもりなの？」

「任せて」

一言だった。

「やり方があるから」

「そう。じゃあ任せていいのね」

「ええ。じゃあ美奈子」

あらためて美奈子に声をかけてきた。

「何かしら」

「上から頼むわ」

「上からね」

「ええ。これまで上から皆での陽動はなかったじゃない」

そのことを指摘するのだった。それをあえて指摘できるというところには華奈子の非凡さがあつた。やはり彼女も頭がいいと言えた。少なくとも悪くはない。

「だからよ。今回はそれでね」

「あら、それでは」

小百合先生がそれを聞いてまた呑気な感じの声で話してきた。

「箒に乗ってですね」

「はい」

美奈子はその先生に対して答えた。

「それでもいいですよ」

「箒は魔法の魔法の一つですよ」

先生の返事はこれであつた。

「言うまでもありませんね」

「わかりました。じゃあ華奈子」

「ええ」

また美奈子の言葉に応える。

「任せるわよ」

「こつちもね」

言葉が重なつた。心も。

「頼んだわ」

「引き受けるわ」

姉妹を中心として動く。まず五人が飛んだ。

「じゃああたし達もね」

「わかつてるよ」

「それじゃあ」

華奈子とその使い魔達も動いた。いよいよラストバトルだった。この迷宮での。

第九十八話

完

2
0
8
・
4
・
1
1

第九十九話

第九十九話 乱舞

「行くわよ！」

「ええ！」

五人が華奈子の言葉に伝えて一斉に飛び上がる。当然華奈子も一緒だ。

六人で飛び上がるとそこに箒が出て来た。それに乗って舞うと。

ミイラ男は上に向かって包帯を投げて来る。しかし上手くは当たりはしない。

「当たらないわね」

「当たり前よ」

華奈子が美奈子に対して答える。

「下から見上げたらね。狙いにくいだよ」

「そうなの」

「だって。視界が限られるから」

何気に勉強以外のことには頭がよく回る華奈子だった。

「見上げるからね」

「成程。そういうことなのね」

「そのかわり」

華奈子は言う。

「こつちからは狙い易いのよ」

「そうなの」

「そういうこと。タロ、ライゾウ」

「あいよ」

「何、御主人」

二匹の使い魔達は華奈子の側にいる。見れば他の使い魔達も主と同じである。

「仕掛けるわよ、いいわね」

「狙いを定めて？」

「いいえ」

ライゾウの問いには首を横に振る。

「その必要はないから」

「その必要はないって」

「だって。上は押さえてるのよ」

これをまた言う。

「だから」

「狙いを定める為に上上がったんじゃないの？」

今度はタロが華奈子に尋ねる。

「それだと」

「違うわ。別の作戦よ」

「作戦って。何を考えてるの？」

今度は美奈子が華奈子に尋ねてきた。

「上上がったのはいいけれど」

「まずは赤音ちゃんが仕掛けてね」

「私？」

「そう、もうミイラ男に向かって集中攻撃よ」

それをまず伝える。

「それから春奈ちゃん、美樹ちゃん、それから梨花ちゃん」

「わかったわ」

「それじゃあ」

「その順番で」

三人は華奈子の言葉に頷いた。それから。

「美奈子ね。やっぱり狙いは定めなくて集中攻撃でいいから」

「それが作戦なのね」

「ええ。とにかく威力を重視して狙いは適当でいいから」

それを五人に伝える。作戦がこれで決定した。

第九十九話

完

2
0
8
・
4
・
2
1

第百話

第百話 絨毯爆撃

五人は華奈子の言葉のままにミイラ男に対して上から集中攻撃を順番で浴びせる。それはそれぞれかなりの攻撃でありミイラ男からの反撃さえ封じてしまっていた。ここでタロとライゾウが華奈子に對して問うた。

「これが作戦なの？」

「順番で派手に攻撃するのが」

「ええ、そうよ」

それに華奈子が答える。

「これが作戦なのよ」

「狙いを定めなくていいの？」

「適当で」

「それでいいのよ」

しかし華奈子はそれでよしとするのだった。

「見て」

「!？」

「ミイラ男をよ」

また二匹に告げる。華奈子に言われるままにミイラ男を見ていると。

「かなりダメージ受けているでしょ」

「そついえば」

「思ったよりもずつと」

二匹がそれに応える。もう包帯はボロボロで動きもかなり鈍っていた。あともう少しで倒れそうになっているのがわかる。

「それで。ミイラ男の弱点は」

「火だろうね」

「間違いないよな」

タロとライゾウにもそれはすぐにわかった。

「何せ包帯だからな」

「それしかないよな」

「そういうこと。じゃあ行くわよ」

「わかったよ、御主人」

「じゃあ行くぜ」

「行くわよ！」

華奈子は二匹を従えて一斉攻撃に入る。出すのは当然火だ。上から無数の火の玉をこれでもかという程出してそれが終わった時にはミイラ男は消え去ってしまった。

「よっし！」

華奈子はミイラ男が消え去ったのを見て篝の上でガッツポーズをする。

「やったわね、これで」

「ええ、これで全部ね」

美奈子が側に来て華奈子に応える。

「これで六体の魔物を全員やったわね」

「そうよ。さて」

満面に笑みを浮かべてまた言う華奈子だった。

「これまでの戦いで身に着けたものを博士にぶつけてやるわ」

「そうね」

「皆さん」

下から小百合先生が六人に声をかけてきた。

「先生」

「では。最後の関門に行きましょう」

「えっ!?!」

皆これを聞いてまずは思わず口を開けてしまった。

「最後の関門!?!」

「これで終わりじゃなかったの!?!」

「ですから。最後ですよ」

話がかみ合わないまま最後の関門となる。六人にとってはまさに寝耳に水であった。

第百話 完

2008・4・21

第一百話

第一百話 最後の試練

最後の関門、問題はそれであつた。それが何かと小百合先生に尋ねると。

「このままゴールまで行くだけです」

「えっ、それだけですか!？」

華奈子はそれを聞いて思わず声をあげた。

「ゴールに行くだけって」

「そうですね」

「それだけって」

「何か。拍子抜けっていうのかしら」

美奈子も今一つ実感がなかった。それが最後の試練と言われても。

「本当かしら」

「ねえ」

「先生は嘘は言いませんよ」

そのにこりとした笑みでの言葉だつた。この笑みは変わらない。

「ゴールに行くことが最後の試練ですよ」

「本当みたいね」

「そうですね」

また顔を見合わせて言い合う双子だつた。

「ゴールに行くだけって試練なのかしら」

「先生がそう仰るのならそうなんですよ」

とりあえず納得し合う。それで一向は歩きだした。その時梨花が皆に告げた。

「ねえ」

「何？」

「モンスターはもう出ないわよね」

「それはわからないわね」

冷静な美樹が周囲を警戒しながら答えた。

「ノルマは六人でもそれ以上は出ないつても言われていないし」

「えっ、それじゃあ」

赤音はそれを聞いて一気に暗い顔になった。

「また戦いあるの？」

「魔力補給しといた方がいいかしら」

春奈はそれを気にした。

「何かあつた時の為に」

「そうね。あと体力も」

華奈子が気にしたのはそれだった。

「これから何かがあるのかわからないのなら」

「そうね。はい」

美奈子はここで懐から何かを出してきた。それは。

「これ何？」

「お団子よ」

こっぴど皆に告げる。

「赤いのが体力を回復させて青いのが魔力を回復させるのよ」

「へえ、そうなんだ」

「皆食べて。量はたっぷりあるから」

「わかったわ」

「それじゃあ」

「使い魔達にもね」

皆に次々とそのお団子を手渡す。何はともあれ用心に越したことはないということだった。先生はそんな六人を見てにこにここと笑っていた。

「さあ食べましょう」

何はともあれそのお団子を食べるのだった。

第一百話

完

2
0
8
・
4
・
2
4

第二百二話

第二百二話 お団子

皆は美奈子からその赤と青のお団子を受け取った。使い魔達にも小さく千切ったりして分け与える。それから皆で食べはじめた。

「あれっ、この赤いのは」

「それは黍団子の味よ」

美奈子は華奈子に答えた。

「それで青いのは笹団子の味なの」

「へえ、そうなんだ」

「外見からは想像できないでしょ」

「ええ」

食べながら美奈子に答える。

「確かに黍団子の味ね。それでこっちは笹団子」

「外見からはわからないわよね」

「まさか黍と笹なんてね」

首を傾げる。だが本当にその味なのだ。

「思わなかったわ。けれど美味しいわね」

「ただ体力や魔力を回復させるだけじゃ味気ないじゃない」

美奈子は言う。

「だから。こうして味付けしたのよ」

「成程ね」

皆美奈子のその言葉に納得して頷く。

「いいアイディアね」

「これなら幾らでも食べられるわ」

「とりあえずこれで体力と魔力は全快できる筈よ」

美奈子はまた皆に告げる。

「お団子の数はまだかなりあるしね」

「わかったわ。じゃあ美奈子」

華奈子は今度は青い団子を食べながら美奈子に対して言う。

「何？」

「とりあえずこれがあるのは助かるわ」

「そうでしょ。とにかく数はたっぷりとあるから」

美奈子はまた答える。

「安心していいわ」

「了解。あと聞きたいことがもう一つあるわ」

「何かしら」

「味だけけど」

華奈子が尋ねたのはそれについてであった。

「他の味とかもできるの？」

「ええ、できるわよ」

美奈子はその質問にも答えた。

「例えばバナナ味にしたり林檎味にしたり」

「できるのね。便利ね」

「基本的には体力や魔力を回復させる為のものなのよ」

そこを言う。

「けれどそのままじゃ味がないから」

「味を付けて」

「ええ。じゃあ皆、食べ終わったら」

「わかってるわ」

「出発ね」

「そういうこと。気をつけて行きましょ」

皆美奈子の言葉に頷きまた歩き出す。最後の関門まで気は抜かないのだった。決して。

2
0
0
8
·
4
·
2
4

第二百三話

第二百三話 警察の苦悩

六人がいない間。警察は警察で大弱りだった。それはやはり博士のせいであるのは言うまでもない。

「どうしたものかしらね」

「困ったものです」

博士の研究所を管轄下にある署では署長が困った顔で話をしていた。あの自衛官の署長だ。

「あの博士の暴走は留まるところがありません」

「そうなのよね。もう暴走どころじゃないわ」

「はい」

緑の制服の青年が署長の言葉に頷いている。彼も署長と同じ自衛官だ。

「暴走族やその辺りにいるチンピラや暴力団を片っ端からゴツキロ―チにしているそうね」

「それならまだ運がいい方で」

「ゴキブリの怪物にされるのはまだ運がいいのだった。」

「下手をしたら生体実験に使われているとか」

「人権思想が本当にならないのね」

「そんなものは最初からないようです」

青年はまた署長に対して答える。

「果たして生体実験に使われた者がどうなっているか」

「考えるだけで恐ろしいわね」

「殺人罪ですよね」

青年はふとこゝろ署長に述べた。

「やっぱり」

「今更だけれどね」

署長もそれに応える。

「その他諸々の無数の罪状があるわよ」

「全部現行犯でもありますよね」

「容疑どころじゃないわね」

刑法の点から見れば立派な犯罪者である博士だった。

「はつきり言わせてもらうけれど」

「すぐに踏み込んで逮捕は」

「それ各国の軍隊が集結してそれやったわよね」

「はい」

それは記憶に新しいことだった。だから頷くしかなかった。

「ですが」

「そういうことよ。つまりは」

「誰も止められないんですね」

「カイザージョーなんてのも持つてるしね」

あの巨大ロボである。

「自衛隊でも勝てないから」

「困ったことです」

青年はあらためて溜息をついた。

「そんなのがいるとなると」

「あの女の子達がいきましたね」

青年は華奈子達のことを話に出してきた。

「今何処にいるのでしょうか」

「何でも神戸にいるらしいけれど」

署長はぼやくように述べた。

「早く戻って来てくれないかしら」

「全くです」

自衛官にはいささか頼りない言葉だった。

「さもないとこのまま」

「あの博士のやりたい放題よ」

署長も溜息をつく。博士はその間にも怪しげな実験を行っていた。

第二百二話

完

2
0
8
・
4
・
2
8

第四百話

第四百話 人命なぞ問題では

ない

博士は自身の研究所にある地下の改造室にいる。寝台には如何にもガラの悪そうな金髪の若者がいる。髭にピアスがさらにガラを悪く見せている。

「おい、何なんだよここ！」

「知れたこと。改造室よ」

白いタキシードに黒いマントの博士が彼の側で囁く。

「何っ、改造だと！」

「左様」

若者の言葉に応える。

「鼠とコンドルの細胞を移植させて御前を改造人間にしてやるのだ」
「何っ!?!」

それを聞いて驚きを隠せない若者だった。

「じゃあ俺はこれから！」

「案ずるな。只のゴロツキがわしの手によって栄えある改造人間になるのだ」

この若者は所謂人間の屑だった。いじめにカツアゲ、恐喝、窃盗、障害、車上荒らしに集団暴行と悪事の限りを尽くしてきているのだ。その若者をこれから改造しようというのだ。

「感謝するのだ」

「ざけんじゃねえぞ爺！」

流石に博士に対して抗議する。

「そんなの受けられるかよ！俺のツレ達が」

「そいつ等ならそこじゃ」

「なっ！」

右を見れば何か得体の知れない肉か骨かわからない残骸達が転が

っているだけであつた。やはり人間の屑共であつたが本当に屑になつていた。

「まさか……あいつ等が」

「ほんの少し改造しただけであの有様じゃ。不甲斐ないのう」

「不甲斐ない!? 手前まさか」

「天本破天荒という」

「じゃああの」

彼とてもその名を知らない筈がなかつた。しかしだつた。

「安心しろ成功すれば御前の力は倍以上になる」

「止める、止めるおお~~~~~っ!」

「細胞移植開始じゃ」

「う、うわあああああー~~~~~っ!」

忽ち若者の身体がコブラとカナリアのそれが交互に出て遂には。身体が爆発して死んでしまったのだつた。

「えぎいっ!」

「ふむ、こいつでも無理か」

残骸になつた若者を平然と見下ろして言う。

「こいつはもう使い物にならん。捨てるとするか」

博士にとつてはそれで終わりだつた。そして言う言葉は。

「わしが求める真の改造人間にはまだまだ生贄が必要だな」

「あの、博士」

後ろから部屋にやって来た小田切君が呆れながら博士に声をかける。

「何じゃ?」

「今日だけでもう。ええと」

「デクじゃな」

博士は生体実験の素材をこう呼んでいるのだ。

「デクがどうした?」

「いなくなつたのですが」

「まだ五十人程度いよう」

「今日一日で全員殺したじゃないですか」

「その程度か」

やはり人命なぞ知ったことではない博士だった。

「ではまた何処ぞの犯罪者なりヤクザ者なりを捕まえてきて」

「続けるんですね」

「無辜の民を害してないからいいじゃろ」

少なくとも実験には使っていない。

「ヤクザ者やゴロツキや暴走族がいなくなれば世界がそれだけ奇麗になるぞ」

「それはそうですね」

「では今度は暴力団の事務所じゃ」

「はあ」

「デクの確保に行くか」

こうしてまた犠牲者を捕まえに行く博士だった。何時しか日本にはそうした存在がいなくなろうとしていた。博士の実験の影響で。研究所には白骨の山が無残な姿を晒していた。

第四百四話 完

第二百五話

第二百五話 死体の捨て方

とりあえずその白骨の山を処分することになった。しかし、であった。

「あの、博士」

「何じゃ？」

小田切君の問いに対して顔を向ける。

「凄いま更って気がしますけれどいいですか？」

「随分もつたいぶっておるな。どうしたのじゃ」

「その白骨だの肉片だのを処分するんですよね」

「うむ」

話はそこであった。

「それですけれど。どうすれば」

「その辺りに捨てておけ」

「だから凄いま更ですけれど犯罪ですよ、それって」

こう博士に言う小田切君だった。

「死体遺棄で」

「何じゃ、そんなことか」

「そんなことって」

死体遺棄という重罪を前にしても平気な顔の博士に困惑するしかなかった。

「捨てたらそれこそ犯罪ですよ。刑務所に入れられるレベルの」

「そういえば刑務所にも何回か入れられたことがあったのう」

ふと昔のことを思い出す博士だった。

「ちよつとばかり凶悪犯の脳味噌をいじくつたら陸軍だの内務省だのが怒つてのう」

「戦前ですか」

「うむ、戦前じゃ」

随分と昔の話になっていた。

「思えば昔よのう」

「昔はいいですけど本当はどうするんですか？」

小田切君は死体の処理が気になって仕方がない。幾ら世の為人の為にはならない屑達とはいえやはり死体遺棄はまずいのだ。既に殺人だからそれはもう言わないのだった。

「そこいらに捨てたらやっぱりまずいですよ」

「海にでも捨てればいいではないか」

「だからそれも犯罪ですって」

立派な犯罪である。といってもこの博士には法律を守るという意識は全くないのだが。

「どうしますか、本当に」

「ふむ。捨てるのが駄目とするとじゃ」

「ええ」

「一つ解決する方法があるな」

博士はまた何か思いついたようだった。

「丁度いい方法がな」

「方法!？」

「うむ、それではだ」

早速またおかしな行動を開始するのだ。つた。

「また一つ発明しようぞ」

「発明、ですか」

「とりあえず暴走族を三十人程度連れて来い」

「どうするんですか、一体」

「とりあえずわしの偉大なる生体実験に奉仕する栄誉を与える」

要するにまたデクとして扱い死体として捨てるということだ。

「それとこれからの発明との関係は？」

「ない」

一言だった。

「ちよっとしたストレス解消ですか」

「そうじゃ」

「それだけ好き勝手やってストレス溜まるんですか」

とりあえず突っ込みを入れる小田切君だった。すぐに暴走族が三十人博士に捕まり生体実験の素材として一応行方不明扱いとなるのだった。

第百五話 完

2008・4・30

第六話

第六話 無限焼却装置

無関係に三十人程度の暴走族を生体実験で書類上は行方不明にした博士はストレスを解消させてすっきりしたうえで発明に取り掛かった。それは。

「で、何を作るんですか？」

「焼却装置じゃ」

博士は勿体ぶらずに小田切君に答えた。

「それを今から作る」

「骨とか肉片をそれで焼くんですね」

「もう跡形もなくなるぞ」

早速何かを作りながら言う。

「これでもう人体実験の後のゴミ掃除も楽になる」

「人体実験をした相手はゴミですか」

人を人と思わない博士の非常識さにあらためて絶句する小田切君だった。最近では世界中からとりあえず世の役に立たない黒社会だのマフィアだの連中をゴツキローチ等を使って連れて来て生体実験の素材にしているのだ。時々ただのストレス解消で解剖することもある。

「ゴミじゃ。所詮な」

「はあ」

「それで。できたぞ」

「もうですか」

話している間にもう作ったのだった。

「ほれ、これじゃ」

「何か外見は宝箱みたいですね」

見ればそのままだった。ブラウンの木造の宝箱に見える。

「これに骨を近付ける」

「はい」

実際に骨や肉のところにその焼却装置を置いてみる。すると。いきなり宝箱が開いてその開いたところが口になっていた。しかも舌まで出ている。舌と歯を使って白骨や肉をどんどん食べていくのだった。

「何かどっかのモンスターみたいですね」

「ロボットじゃぞ」

外見ではそう見えないがそうらしい。

「原子力で動く」

「原子力ですか」

「食べたものは瞬時に焼却し」

やはり普通ロボットとは少し離れている。

「灰すらも残さないのじゃ」

「小さいけれど凄いですね」

「どうじゃ、今度の発明は」

「いや、かなり」

これは素直に褒める小田切君だった。

「凄いですよ、本当に」

「これでゴミノ心配はなくなった」

とりあえずこの話は終わりだった。

「さて、また楽しい生体実験にかかるとするか」

「最近生体実験をよくされていますね」

博士の趣味の一つだ。他には発明や兵器開発、劇薬の研究等がある。かなり多趣味な人間なのだ。

「どうしてですか？」

「気分だな」

多くの人命を犠牲にするのも気分だけであった。

「やっておるのじゃよ」

「そうですね」

「明日はヤクザ者を百人程度改造して人間爆弾として宇宙に飛ばし

てみるかのう」

翌日本当に大阪辺りのヤクザ者がそれだけいなくなった。博士の趣味はまだまだ続く。

第百六話 完

2008・4・30

第一百七話

第一百七話 歩いていこう

六体のモンスターを倒した華奈子達。今はただひたすら迷宮を進んでいる。しかし行けども行けども迷宮に終わりが無い。途方もないものだった。

「何かおかしくない？」

「そうね」

美奈子が華奈子のその言葉に頷く。

「何か何時まで経ってもね」

「辿り着けないわね、終わりに」

二人は次第にそのことに気付きだしたのだ。他のメンバーもまた同じだ。

「そもそもここってどれだけ広いの？」

「さあ」

言われてもわからない。首を傾げるだけだ。

「わからないわね。何処まであるか」

「もう化け物は出ないわよね」

「多分ね」

華奈子が美奈子の言葉に答える。

「確信はないけれど」

「出ませんよ」

二人がこんな話をしていると後ろから小百合先生がにこりと笑って告げてきた。

「それは安心して下さい」

「出ないんですか」

「はい」

またにこりとした笑みで述べる。

「さっきも言わせて頂きましたが後はゴールに辿り着くだけですよ」

「それだけですよね」

「はい。それだけです」

やはり返事は同じだった。辿り着くだけだった。

「ですから。安心して下さい」

「敵がないのはいいけれど」

まずはそれを聞いて安心する一行だった。

「このまま歩いていたらお腹空くわね。疲れるし」

華奈子はそれを心配していた。

「どうしたものかしら」

「お弁当あるじゃない」

美奈子はその華奈子に言う。

「ちゃんと」

「あつ、そうだったわね」

言われてそのことに気付く華奈子だった。

「あつたわね、そういえば」

「それにお団子もあるし」

さっきのお団子である。体力と魔力を回復させる。それを考えれ

ば色々とあるのだった。

「豊富よ、食べ物は」

「そう。じゃあ大丈夫ね」

「後は歩くだけね」

美奈子はまた答える。

「だから最後は絶対に辿り着けるから」

「そう。それじゃあ」

華奈子はそれを聞いてまずは安心した。そのうえで顔を上げて言った。

「歩こう。最後までね」

「そうね。そうすれば最後は絶対にね」

「辿り着けるわよ」

「ゴールにね」

それがわかれば後は歩くだけだった。実際に彼女達は歩き続けることにした。何処までも何処までも。ただひたすら歩くのだった。

第一百七話 完

2008・5・7

第百八話

第百八話 上から行くのは

黙々と歩き続ける一行。だがここで美樹の使い魔であるビルガールとファルケンがふと一行に対して言ってきたのだった。

「あの」

「少し考えたんだけれど」

「どうしたの？」

美樹が二羽に顔を向けて問うた。

「上から行ったらどうかね」

「箒を使って」

「！？そういえば」

美樹はその言葉を聞いてふと気付いた。

「そうよね。上から行けば」

「歩かなくていいわ」

赤音も言う。

「すっごい楽よ」

「それだけじゃないわ」

梨花はもう一つのこと気付いていた。

「上から見ればゴールもすぐに気付くわよ」

「あっ、そうね」

春奈が梨花のその言葉を聞いて頷く。

「確かに。それだとすぐよ」

「じゃあそれで行く？」

華奈子も一行の話聞いてそれに傾く。

「箒で。一気に」

「そうね。じゃあそれで」

「決まりじゃないの？」

美樹と赤音は賛成だった。見ればリーダーの梨花もそうだし春奈

も同じだった。

「すぐ行けるし」

「いいと思うわ、私も」

「いえ、ちよっと待って」

しかし最後の一人の美奈子がここで疑問符を投げ掛けたのだった。

「どうしたの、美奈子」

「この迷宮は何処まであるのかわからないのよ」

「だから使っんじゃないの」

皆が箒に乗ろうかと言った理由はそもそもそれだ。だから乗るのだった。

「それで。違うの?」

「箒に乗って空を飛ぶのは結構魔力を使うわ」

実はそうなのだ。箒に乗るのも魔力だ。それを考えればふと気付くのだった。

「お団子にも限りがあるわよ。この人数だし」

「あっ」

勘のいい華奈子はここでわかった。美奈子が言わんとしていることが。

「そうね。若し迷宮がとんでもなく大きかったら」

「そうよ。すぐに魔力が尽きてしますわよ。そうなれば」

「終わりよね、それで」

「変な場所に落ちてどうしようもなくなる可能性もあるわよ」

美奈子はまた言う。それが彼女が危惧していることだったのだ。

「だからそれは」

「止めておいた方がいいわね、大事を取るのなら」

「そうね。やっぱり」

「歩きましょう」

美奈子はあらためて皆に告げる。

「それが一番確実よ」

「わかったわ」

こうして一行は歩き続けることになった。迷宮はまだ続く。しかし終わりに近付いていっているのは間違いなかった。

第百八話 完

2008・5・7

第百九話

第百九話 大きな前進

歩き続ける一行。しかしその中でふと華奈子が言うのだった。

「ねえ」

「どうしたの、華奈子」

「考えたんだけど、あたし」

「考えた？何を？」

美奈子が彼女に問うていた。

「ええ。同じ場所ばかり堂々巡りになってるかも知れないじゃない」

「確かにね。それはね」

美奈子も他のメンバーもそれは否定できなかった。言われてみればその可能性はあるのだ。

「だから。それを防ぐ為にも」

「どうするの？」

「目印をつけましょう」

「こう提案してきた。」

「壁にでも何か書いてね」

「それを目印にするのね」

「これだと前に来たってわかるじゃない」

また言ってきた。

「だから。どう？」

「そうね」

美奈子もそれに同意した。そのうえで頷く。

「いいわね、それって」

「悪くないでしょ」

「ええ、いいと思うわ」

あらためて華奈子の言葉に対して頷く美奈子だった。

「それでね」

「他の皆はどうかしら」

「私はそれでいいと思うわ」

「いいじゃないか」

春奈と美樹がまず賛成してきた。

「私も賛成」

「そうね。それだと堂々巡りはなくなるわね」

続いて赤音と梨花も。それに応えて頷いてみせてきた。六人の意見は一致していた。

「これで決まりだけれど。先生」

「いいことですね」

小百合先生も賛成してくれた。ここでもそのにこりとした笑みを見せてきてくれた。

「それは」

「じゃあそれでいいんですね」

「魔女はただ魔法を使うだけじゃないんですよ」

「魔法を使うだけじゃない」

「はい。頭を使うことも大事なのです」

その微笑みでの言葉であった。

「ですから」

「いいんですね」

「魔法も大事ですけれど」

先生はそこを強調する。

「頭ですよ」

「そうなんですか」

「ですから。合格です」

先生はまた言ってきた。

「ではどうぞ。それで」

「わかりました。それじゃあ」

こうして六人は目印をつけつつ迷路を進んでいくことにした。それは効果を奏し同じ道を通らなくなった。まずは一つ大きな前進だ

つた。

第百九話

完

2
0
8
・
5
・
1
6

第一百話

第一百話 ゴールに

こうして同じ道を通らずに先に進めるようになった一行。それにより遂にゴールが見えてきた。見れば大きな英語でGOALと書かれた看板がある出口である。

「間違いないわね」

「そうね」

美奈子が華奈子の言葉に頷く。

「とういかどう見てもゴールにしか見えないわね」

「そのままね」

美奈子もまた華奈子の言葉に頷くのだった。

「けれど。長かったわね」

「ええ、本当に」

今度は華奈子が美奈子の言葉に頷く。さっきと完全に正反対になっている。

「そのわりには疲れていないけれどね」

「お団子のおかげね」

美奈子は言う。

「そのおかげでね。疲れていなくて済んだわ」

「ええ。それじゃあ最後は」

「あそこを通り抜けて終わりね」

「だから。行きましょう」

華奈子は美奈子だけでなく他のメンバーにも声をかけた。

「一体何日かかったかわからないけれど」

「さて、それはどうでしょうか」

しかし小百合先生はここでまたにこりと笑っている。何か思いきり含んでいる様子である。

「それは」

「それは？何かあるんですか？」

「それはゴールしてのお楽しみです」

先生は語ろうとしない。笑ったままで。

「ですから。どうぞ」

「どうぞですか」

「これで終わりなんです」

「はい、完全に終わりです」

美奈子と華奈子に対してまた答える。

「元の世界にです」

「やっど、ですね」

華奈子は先生の言葉を聞いてまた言う。

「それを思うと」

「はい、それでは皆さん」36

先生はその笑顔で六人とその使い魔達に告げる。

「最後の最後まで気を引き締めて行きましょう」

「わかりました」

華奈子が先生のその言葉に応えた。

「それじゃあ最後の最後まで気合を入れて」

「そうね。はい」

ここで美奈子はお団子を出すのだった。

「これ食べて。ゴールまで行きましょう」

「兜の緒を締めよってわけね」

「ええ、その通りよ。だからね」

「食べて力をつけて」

「そういうこと」

皆にまたお団子を配ってそれを食べながらゴールを潜る。ゴールを潜ると。一行はようやく長く長い長い迷宮という試練をクリアしたのだった。

第一百十話

完

2008・5・16

第百十一話

第百十一話 博士の謎

「そついえばですね」

「何じゃ？」

小田切君はふと博士に尋ねた。博士は猫を巨大化させつつ小田切君に言葉を返す。

「博士つて生まれは何処なんですか？」

「宇宙じゃ」

「いえ、それはわかっていきますから」

「わかつておる、銀河系じゃ」

「そつじゃなくてですね」

話がどうもずれていた。

「何処でしょうか、御出身は」

「出身か」

「ええ、よく考えたら僕博士のことは何も知らないんですよ」

それに今気付いたのである。

「何をされていたとか。全然」

「実はわしはな」

「はい」

「生まれは日本じゃ」

「日本人なんですね」

「何じゃと思つておつた？」

「いえ、スペイン料理がお好きですから」

まずはそこを指摘する。

「スペイン人なのかな、と」

「コロンブスには会ったことがあるかな」

「そつなんですか」

どうもそつらしい。信じられない話だが。

「じゃがスペイン生まれではない。れっきとした日本人じゃ」

「ロシア人とのハーフではないですよね」

「いいや」

首を横に振ってそれも否定する。

「父も母もれっきとした日本人じゃ。これは確かじゃぞ」

「日本人なんですか」

「顔を見ればわかるだろう」

とはいってもあまりにも怪しい顔立ちと雰囲気なのでそれがよくわからないのだった。結局はこの博士の奇人ぶりに帰結するのだ。

「違うか？」

「まあ日本人には見えますね」

小田切君も一応はこう答える。

「言われてみれば」

「スペインは好きじゃが日本が一番落ち着くのう」

「ですか」

「うむ。そういえばじゃ」

「はい？」

「この猫じゃが」

その巨大化させている猫を見て言う。

「どうも虎に見えてきたのう」

「っていうか博士」

小田切君はその巨大化した虎を見つつ博士に突っ込みを入れる。

「猫が大きくなったらそのまま豹か虎ですよ」

「では早速これを真夜中にたむろしている不良共に対して放ってやるのう」

話の途中だがまた流血の事態が繰り広げられることになったのであった。

2
0
0
8
·
5
·
2
7

第一百十二話

第一百十二話 博士の年齢

日本人なのはわかった。しかしであつた。

「それですね」

「今度は何じゃ？」

次は犬を巨大化させていた。他には蛇や鳥も用意している。

「博士つてお幾つですか？」

「わしの歳か」

「何か以前から日本軍と戦つたとか」

そついうことを言つていたことも実際にある。

「さつきだつてコロナプスがどうとか仰つていたし。実際はお幾つなんですか？」

「確かな数字は忘れたわい」

ということだつた。

「一応生まれは日本じゃ」

「ええ」

これは間違いないようだ。

「しかしな。歩きはじめてまずは大陸に渡つて」

「大陸にですか」

「バベルの塔の建設に立ち会つたのじゃ」

「えっ!？」

この言葉を聞いてまずは啞然となつた。

「バベルの塔つて」

「聖書に出て来るあれじゃ。途中で飽きてロケットにしてやったのじゃ」

どうやらあの塔の破壊の真相はこつらしい。この博士の言葉だと。

「面白かつたぞ、それはそれで」

「それはそれでつて博士」

「あと錬金術とかもやったし黒魔術も学んだしの」

博士の教養はそこかららしい。嘘か本当かはわからないが。

「日本に戻って弥生時代の呪術を学んだりローマでユリウス・カエサルと大立ち回りをしてその時にアレクサンドリアの図書館を燃やしてしまった」

「あれは博士がやったんですか!？」

またしても明かされる衝撃の歴史の真実であった。

「何とまあ」

「蔵書は全てわしが異次元の図書館に置いておいた」

「どうやらそうらしい。」

「じゃから安心せよ」

「安心って」

「これがその時の写真じゃ」

こう言って出して来たのは禿頭をしていてみらびやかな黄金色の鎧と見事な緋色のマントを羽織った男と博士の剣と鞭での戦いの場面だ。背景には何故かピラミッドとスフィンクスがある。何故か博士の服が今と全く同じなのが奇怪だ。

「カエサルは見事じゃった」

「何で服が変わらないんだろっ」

「それでこれが万里の長城を破壊してやった時じゃ」

大昔のものと思われるただの壁の列の一部をあのカイザージョーで踏み潰している。周りで逃げ惑う兵士の服装は秦代のものだがやはり博士の服装は変わらない。

「始皇帝をぎゃふんと言わせてやったわい」

「あちこちで無茶苦茶していたんですね」

「アメリカで騎兵隊が前にたまたまいたんでミノタウロスをけしかけてやったこともある」

「はあ」

「それでじゃ。今は」

「どうされているんですか?」

「今の生活を楽しんでおるのじゃよ」
何メートルにもなった巨大な犬を見つつうっとりとしたうえで
声であった。やはり完全なマッドサイエンティストなのであった。

第一百十二話 完

2008・5・27

第一百十三話

第一百十三話 巨大猫の災厄

ただの興味本位というか時間潰しで巨大化させた猫。とりあえず博士はそれを待ちにたむろする不良達に対して放つことにしたのだ。つた。

「例えばじゃ」

「例えば。何ですか？」

「哺乳類というのはよく食うのじゃ」

このことを言う。体温をコントロールする為にこれは必要なのだ。

「それでじゃ。その餌の問題を解決するには」

「どうすればいいんですか？」

「ゴミを食べられるようにすればいいのじゃ」

「ゴミをですか」

「そう、ゴミをな」

あくまでゴミと言い切ってみせる。

「わしもな。ゴミの再利用には常に頭を巡らせている」

「そうだったんですか」

「ゴツキローチにしたり生体実験の材料にしたりな」

ゴミの意味が違うがこの博士にとってはそこいらにいる暴走族や夜の街の不良達はそうとしか見えないのであまり意味はない。

「しておるのじゃがこうした処理方法もある」

「猫の餌ですか」

「そうじゃ。いい話だと思わんか？」

夜の公園でよからぬことをしようと集まっている不良達の前にその巨大猫を放った。

「今日一日餌を抜いておいた」

「餌を」

「しかも数匹放っておいた。これでこの公園の不良共は皆殺しじゃ
平気な顔でとんでもないことを口にする。」

「善き哉善き哉」

「しかし博士」

だが小田切君はここで言う。

「何じゃ？」

「不良達の残骸はどうするんですか？」

既に重大な犯罪行為を幾つか犯している気はするがそれについてはあえて聞かなかった。この博士にとっては法律は何の意味もないからだ。

「食べ残しは」

「鳥が何とかしてくれるじゃろ」

「そうですね」

「ゴミのことは気にするな」

何気に話が先程のものとは矛盾しているがそんなことはどうでもよかった。

「些細なことじゃ」

「わかりました」

「鳥の餌にもなっていない」

実に人道を全く無視した言葉が続く。

「野良猫やら雀やら生ゴミやらを襲ったり漁ったりしなくて済む」

「あの連中は生ゴミ以下なんですね」

「無駄な人口は減らせばいい」

こうまで言い切る。

「それだけじゃ」

「はあ」

今小田切君の目の前では不良達が巨大猫に襲われ虐殺され生きながら食い殺されていた。断末魔の悲鳴が木霊する。しかし博士にとってはそれは最高のミュージックだった。心地よい顔でその声を聞いて悦に入っていたのであった。しかも話はまだ続くのであった。

第一百十三話

完

2
0
8
・
5
・
3
3
0

第百十四話

第百十四話 犬なのかどうか

街の不良達を猫の餌にってしまった博士。今度は犬の餌であった。

「暴走族や不良は猫の餌でしたよね」

「うむ」

「じゃあ犬の餌は何なんですか？」

「あの連中じゃ」

指差したのは暴力団の事務所であった。

「やはり犬も一日餌を食わせていない」

「そうですね」

その方がより貪るからである。しかも今回はそれだけではなかった。

「だが相手は暴力団じゃ」

「はい」

小田切君もそのことはわかっている。少なくとも街の不良や暴走族達とは違う。

「拳銃やら何やら持つておる。例え人を襲い喰らうようにコントロールした犬でも拳銃が相手では危険じゃ」

「何か方法がありますか？拳銃に対しては」

「これじゃ」

出して来たのはカプセルであった。

「これを使う」

「何ですか、それは」

「毒ガスじゃ」

またしても国際法を平然と破る兵器を出してきた。

「かなり強力な麻痺ガスじゃ。これを事前に暴力団の事務所に撃ち込む」

「まずはそれですか」

「そのうえで犬達を事務所に突撃させる。後はお楽しみじゃ」
「お楽しみですか」

「暴力団以外の生物は食わぬように仕込んである」

「そうしたところも徹底していた。無用な犠牲は避けるというのだ。」

「何もかもな。万全じゃ」

「じゃあまずは麻痺ガスをですね」

「そうじゃ。ほれっ」

そのカプセルを暴力団の事務所に向かって投げ付ける。すぐに防弾ガラスを破って中に入り忽ちのうちに断末魔を思わせる悲鳴が聞こえてきた。

「後は犬達を送って終わりじゃな」

「そうですね」

「うむ。これで餌の問題は解決じゃ。動物園もこうすれば餌に困らんのだな」

「そんなことできる訳ないですよ」

小田切君は顔に汗をたれ流させつつその言葉に応えた。

「とても」

「ゴミを処理するのにか」

「人間ですから」

「人間だろうとゴミはゴミじゃ」

こう言い切るところが博士であった。

「処理して何が悪い」

「普通の人はそんなこと言いませんよ」

「普通なぞ何も面白くはないわ」

「これまた言い切ってみせた言葉であった。」

「楽しくやらないとな」

「楽しくって」

「なおあの麻痺ガスは動けなくするだけで目や耳、声は大丈夫じゃ」
博士はさっきの麻痺ガスについて述べてきた。

「しかも痛覚は倍になるからう。生きながら食われる苦痛も普通

よりさらに恐ろしいぞ」

「・・・・・・・・よくそこまでできますね」

流石に今度ばかりは引く小田切君であった。暴力団の事務所からの断末魔の素敵なハーモニーが聞こえてくるのであった。

第百十四話

完

2008・5・3

第一百五話

第一百五話　　またしてもゴツキローチ

何でもないといいた態度で街の不良とヤクザ達を犬と猫の餌にした天本博士。しかし博士の暴虐はこれで終わったわけではなかった。むしろこれはほんのプレリウドだった。全てははじまりでしかなかった。

「さて、今度はじゃ」

「何を考えてるんですか？」

「思い出したのじゃがな」

小田切君に対して述べる。

「あれがあつたじゃろう。ゴキブリじゃ」

「ゴツキローチですね」

「それじゃ。暫くぶりにそれを使ってみようぞ」

あれだけの大騒ぎを今まで忘れていたのであった。やはりこの博士は普通ではなかった。

「最近あれはどうなつておる？」

「どうなつておるつて博士」

今の博士の言葉に呆れながら言葉を返す小田切君だった。

「ずっと野放しにしていますから大変なことになっていますよ」

「大変なこと？」

「そうですね。あれ勝手に増えますよね」

「うむ」

ゴキブリは放つておいても勝手に増えるものである。しかもこのゴツキローチは。

「細胞分裂みたいに増えますし」

「ただ単に迷惑なものを作るつもりはないわ」

これが博士だった。単に迷惑なものを作るだけでは気が済まない御仁なのだ。

「だからじゃ。細胞分裂して増殖するようにしてみたのじゃ」
「そうだったのですか」
「それで今ゴツキローチはどれだけ増えておるのじゃ？」
「百万程度に」
「増えれば増えるものである。」
「日本中大混乱ですよ。国連軍は来るし正義の味方は総登場ですし」
「善き哉善き哉」
騒動になっていると聞いて満足することしきりの博士であった。
「これこそがわしの望んだことじゃ。さて、それではじゃ」
「まだ何かするんですか？」
「ゴツキローチ達を集めよ」
「またしても何かとんでもないことを考えているようであった。」
「国連軍やあちこちの正義の味方がまず来る」
「東 や円 のスター総結集ですよ」
「まだまだじゃよ」
それで満足する博士ではなかった。
「話はこれからじゃ」
「国連も正義の味方も全部敵に回してまだまだですか」
「来るぞ、あの娘達が」
高笑いしつつ述べるのであった。
「そろそろな。楽しみじゃて」
「ああ、あの娘達ですね」
小田切君にも博士が誰のことを言っているのかわかった。
「久し振りに会えますね」
「左様。さてさて」
マントを風にたなびかせつつの言葉だった。
「街を幾つか廃墟にってしまうかも知れんもの」
そんなことまで楽しみにしている博士であった。今とんでもないことが起ころうとしていた。

第一百十五話

完

2
0
8
・
6
・
2
3

第一百十六話

第一百十六話 帰って来た魔女達

やっと修行を終え街に帰って来た華奈子達。駅に降りるともうそこにはゴツキローチ達がうろろして善良な市民達を襲っていた。

「明らかに悪化してない？」

「認めたくないけれどそうね」

美奈子が華奈子に答える。六人は街まで一緒に来てくれた小百合先生と一緒に駅を出たのだ。その目の前でいきなりそれだったのだ。

「至る所ゴツキローチだらけ」

「あちこちでテレビで見た正義の味方が戦ってるし」

美奈子と華奈子は遠い目になっていた。その目での言葉だった。

「あとさ。あたしの気のせいならいいけれど」

「何？」

「ゴキブリ、自然増殖していない？」

丁度一同の目の前でゴツキローチの一匹が分裂して二匹になっていたのだ。アメーバの様に。

「気のせいならいいけれど」

「残念だけれど気のせいじゃないわ」

美奈子はこう華奈子に対して答えたのだった。

「どう見ても自然増殖しているわ」

「そうよね。どんなゴキブリなのよ」

「あら、お帰りなさい」

そのとんでもない光景の中で。今田先生が綺麗な白いドレスとパラルルというお嬢様かお姫様そのままの格好で一同の前にやって来たのだった。

「皆さんお元気そうでご様子ですね」

「あの、先生」

華奈子が最初にその先生に声をかける。

「はい。何でしょうか」

「物凄いいことになってるんですけど」

今の惨状がわかっていないというより見えていないとしか思えない先生に対する言葉である。

「どうすればいいんですか、解決するには」

「はい、それは凄く簡単です」

「簡単!？」

「そうですね」

おっとりとした調子で華奈子に返答する今田先生であった。

「では皆さん」

「はい」

六人は先生の言葉に応える。応えながらその全身に緊張をみなぎらせる。今まさに決戦の時かと身構えたのである。まだ魔女の服を着ていなくとも。

「まずは先生のお家へどうぞ」

「えっ!？」

「先生の!？」

「はい、そうですね」

この先生らしいにこやかな返事だった。

「折角皆さん帰って来られたんですからまずは御祝いです」

「御祝いつて」

「今それどころじゃないんじゃない」

「それは御心配なく」

先生のおっとりは変わらない。

「ではいざ我が家へ」

「はあ。そう言われるんでしたら」

「それで」

こうしてまずは先生の家に向かう六人だった。小百合先生も一緒である。

第一百十六話

完

2
0
8
・
6
・
2
3

第一百七話

第一百七話 先生のお家で

先生の家に来た。ここまでは実に平和だった。

「あれ、ゴキブリいないね」

「そうね」

「結界を張っていますので」

今田先生は六人々にこやかな笑みで述べる。

「それでなんですよ」

「結界を張っておられるんですか」

「ですからここには正義の味方の方々もおられません」

そういうことであつた。

「ただし」

「ただし？」

「結界はこの辺りだけです」

ということであつた。先生の言葉では。

「ですから少し行けば出ますよ」

「そうですね」

「そうですね」

先生はこう述べたうえで話に入ってきた。

「入りましょう、お家に」

「パーティーにですか」

「そうです。もう御馳走は用意していますよ」

「それはいいことですね」

先生その言葉に小百合先生が笑顔で応える。

「それでは皆で」

「はい、皆で」

先生は小百合先生の言葉に頷く。二人の笑顔が鏡合わせの様になる。

「楽しみましょう。いいですね」

「わかりました」

華奈子が代表して答えてきた。

「それじゃあ皆で」

「そうですね」

「折角だし」

他の五人もそれに頷く。

「けれど先生」

「はい？」

ここで華奈子の問いに応える。

「使い魔達もいいですか？」

「勿論ですよ」

返事は快諾であった。

「魔女にとつては分身ですから。どうぞ」

「じゃあタロ、ライゾウ」

「うん、御主人様」

「行こうぜ」

二匹もそれに頷いて先生の家の門を潜る。いよいよであった。

「それにしてもねえ」

「どうしたのよ」

「あたし達って食べてばかりじゃない？」

華奈子はこう美奈子にぼやくのだった。

「何気に。どうかしら」

「気にしないことね」

相方への返答はこうであった。実に素っ気無い返答の後で宴に向かうのだった。

2
0
0
8
·
6
·
2
2
4

第一百十八話

第一百十八話 巨大フォアグラ

六人が今田先生に招かれていたその頃。博士は自分の研究所で宴を開いていた。参列者は小田切君とタロ弟、ライゾウ兄の一人と二匹である。

「なあ旦那」

「どうした？」

タロはライゾウの声に顔を向けた。既にテーブルに着いている。

「兄弟はどうしているかな」

「さてな」

タロの返事は実につれない。

「生きているのは確かだ。それならそれでいい」

「最近見ないからちよつと心配なんだよな」

「心配するのなら自分のことを心配した方がいいよ」

小田切君はここでライゾウに言ってきた。

「自分のこと？」

「そうだよ。見ればわかるよ」

ここで博士を指差してみせる。

「何か巨大なフォアグラ出しているけれど」

「大きさが滅茶苦茶じゃないかい？」

「あれ、どうやって作ったんだろうねえ」

ライゾウもそれを見た。見ればゆうにタロ位の大きさがある。

「これか」

「はい、それですよ」

小田切君は自分に顔を向けてきた博士に応える。

「それ、どうやって手に入れたんですか？」

「普通のフォアグラを買ってな」

「買ったんですか」

「フランスから特別に買い入れたのじゃよ」

何気にグルメな博士であった。

「それをビッグ トで巨大化させたものじゃ」

「そうだったんですか」

思えばこれもかなり凄い話である。小田切君はもう何も感じなくなっているが。

「さて、これをメインに料理していくぞ」

「お酒は」

「今回はカクテルをたっぷり用意しておいた」
とのことだった。

「カシスだのカンパリだのをな」

「イタリア風ですか」

「うむ、実はイタリアも好きだな」

やはり博士はラテン好みであった。

「それを見てみた。ではこのフォアグラをあらたに開発した料理用マシンに調理させ」

「ええ」

「皆で楽しくやろうぞ」

「わかりました。それじゃあ」

「うむ」

小田切君の言葉に対して頷いてみせる。

「飲んで食つぞ」

「了解です」

「料理は五分でできる」

とのことだった。

「ではその間酒でも飲みながらな」

「待ちますか」

珍しく平穏な博士の開発であると思われた。しかしそれは大きな間違いであったのだ。小田切君はこの時そのことを知らなかった。

第一百十八話

完

2
0
8
・
6
・
2
4

第百十九話

第百十九話 宴の余興に

とりあえずは平穩にはじまろうととしていたフアアグラパーティーであつた。しかしそれは大きな間違いだつた。この博士に限つてそれはなかつた。

「さてと、余興じゃ」

「余興つていいですよ」

「だから余興じゃ」

博士はフアアグラをステーキにしたものをスペイン産の赤ワインで楽しみながら言い出したのだつた。この博士は普通に思いつきで動く人間だ。

「宴には余興が必要じゃろう?」

「それはそうですが」

「嫌な予感がするよな」

「それも凄く」

小田切君もライゾウもタロもここで不吉な感じを否定できなかつた。そしてこつした不吉な感じは博士に関してはまず的中するのである。

「ほれ、例えばな」

「例えば?」

「そこいらの悪党を改造人間にするだのな」

博士の趣味の一つである。

「生きたまま怪人に食わせるだのあるじゃろうが」

「それやつたらまた警察来ますよ」

「警察なぞ怖くはないわ」

博士はそんなものを恐れない。国家権力を恐れていてはマッドサイエンティストなぞではしなないというのが博士の持論である。

「それが怖くて南極や宇宙にバカンスに行けるか」

「あれってバカンスだったんだな」

「こんな新解釈はじめて聞いたよ」

ライゾウもタロもフォアグラを食べながら驚きだった。少なくとも南極に幽閉されたり宇宙空間に隔離されていたのは博士にとってはそのうちではなかったのだった。

「各国の軍隊も遊びに来ておる。何を今更」

「そういえば最近ニュースで緊張した顔の兵隊さんが日本に来るってあるよね」

「ゴツキローチのせいだよな」

タロとライゾウがまた言い合う。軍隊だけでなく正義のヒーロー達も日本で必死に戦っている。全て博士が引き起こしている惨事のせいだ。

「まあとにかく余興じゃ」

「それで余興って何なんですか？」

「うむ。それはのう」

博士はそれを受けて話をはじめてきた。

「何だと思う？」

「格実にとんでもないことだと思うけれどね」

ライゾウとタロはこう予想していた。これはいつものことからの予想だ。

「まあ生きた人をそのままミュータントにするとかじゃないの？」

「それか普通の蛇をアナコンダみたいにするとかかな」

「こうしたこと得意な博士である。」

「さて、何かな」

「あまり見たくない気もするけれど」

「それではじゃ」

二人の話をよくそに博士は言葉を続けていく。

「今宵の宴じゃ」

「うわ……」

「やっぱりかよ」

「予想通りだったね」

その言葉と共に出して来たのは。小田切君と二匹の予想通りだった。こうした予想は本当によく当たるものである。世の中は不吉な予想は当たるのだ。

第百十九話 完

2008・6・29

第二百十話

第二百十話 やつぱりこんな宴

博士は突如巨大なモニターを部屋の壁に出して来た。そこに映っているのは何かロスとワールドみたいな光景だった。不気味な異形の怪獣達がジャングルをうろついている。

「これ、何処ですか？」

「北朝鮮じゃ」

博士はいきなり訳のわからないことを小田切君に告げてきた。

「見ればわかるじゃろうが」

「北朝鮮にジャングルが？」

「少し改造したのじゃよ。空から少し薬や種を撒いてな」

どういった薬や種を撒いたのかはもうあえて聞かなかった。どうせとんでもないことをしたのは容易にわかったからだ。だから聞くまでもなかったのだ。

「どうせあそこは禿山だらけじゃ。いいじゃろう」

「朝鮮半島の気候でジャングルなんて」

「細かいことはどうでもいい」

博士は気候だのは無視できる技術を持っているのだ。

「とにかくじゃ。ちよっと演出をしておいたのじゃよ」

「演出ですか」

「怪獣にはやつぱりジャングルじゃろ」

博士の気紛れの考えによる趣味である。

「だからじゃ。ちよっと細工をしてな」

「そうでしたか」

「それでじゃ」

見れば怪獣達は好き勝手に暴れ出している。それから逃げ惑う人々も見える。あの人民軍が迎撃しているが一方的にやられているだけだ。

「軍隊もかたなしですね」

「よいぞよいぞ」

その軍が一方的にやられていく姿を見てまた悦に入る博士だった。ワインを楽しそうに飲んでいるがまた印象的である。

「やられておるわ。もっとやるがいい」

「もっとって博士」

「何じゃ？」

「絶対死人出ていますけれど」

「そうかもな」

完全に他人事を感じだった。

「だがそれがどうかしたのかのう」

「どうかしたのかって」

「ほれ、あの醜い凱旋門が壊れた」

ついでに誰もが知っているあの銅像が踏み潰された。見事なまでに粉々になってしまい後に残っているのは瓦礫の山だけである。

「今度は宮殿も。楽しいのう」

「全世界レベルで問題になりませんか？」

「忌まわしい独裁国家が災厄に逢っており」

今度はフォアグラのソテーを食べている。やはりワインもまた。

「何処が悪いのじゃ」

「何処がって言われますと」

「それにじゃ」

博士はまた言う。誇らしげに。

「禿山に緑の木々を植えたのじゃ。いいことじゃる」

「何か禿山っていうよりは」

どう見ても街も何もかも怪獣と同じ位不気味な巨大植物に覆われている。中には食虫どころか人まで含む大型の哺乳類まで襲いそうな植物まである。それもまた人々を襲っている。

「どうなるのかな、あの国」

「さあ。そういえば前も博士が怪獣送って滅茶苦茶にしていたし」

「何とかなるんじゃないかな」

達観に達したライゾウとタロの言葉が締めとなった。とりあえず博士は今回の宴に満足はしていたのだった。他国の迷惑とかいいう言葉は博士の頭の中には全くない。

第二百十話 完

2008・6・29

第二百一十一話

第二百一十一話 テレビで観てい

ても

博士が某国に恐ろしいものを放ち悦に入っていた頃華奈子達はとりあえず今田先生のお家にいた。そのお家で博士の悪事を観ていたのだ。

「何よ、今度はまた」

「相変わらずダイナミックな博士ね」

華奈子も美奈子もこう言うしかなかった。

「あの博士って本当に何考えているんだろ」

「それわかったら博士と同じ思考回路ってことになるわよ」

美奈子の華奈子に対する突っ込みはかなり容赦のないものだった。

「華奈子、あんなことできる？」

「お金と技術があっても発想はないわね」

「そもそもお金の作り方がどうせ碌でもないものでしょうしね」

これは容易に想像がついた。何しろ平気でそこいらの暴走族の内臓を抜き取ってそれを売ったりサイボーグにしてテロ組織に売り飛ばしたりするのだ。およそ人間として考えられる限りの非道を尽くして金を調達しているのだ。他には宝石を造ることもある。

「その博士とこれからやり合うんだけれど」

「そういえばあのゴツキローチは？」

華奈子はゴキブリ達のことをふと思い出したのだった。

「何か今のところ姿が見えないけれど」

「相変わらず日本中で暴れ回っているわよ」

何時の間にか騒ぎは日本中に広まっていた。

「この辺りにもね」

「じゃあ早速退治開始ね」

「そういうこと。とりあえずあの国はいいとして」

「いいのね」

「どうせどっかの特撮ものの悪役みたいな国家よ」

そうした国家が実際にあるのだから世の中恐ろしい。さらに恐ろしいのは特撮ものの悪役みたいな博士が暴れ回っていることであるが。

「放っておいてもいいわよ。毒を以って毒を制すよ」

「どっちも猛毒ね」

「ええ。最悪のね」

博士とその国のことである。

「そんな連中だからとりあえず何があっても私達はノータッチ。行くこともできないし」

「あたし達は博士の相手ね」

「ええ、それじゃあ」

まずはすくつと席を立った。他の四人や使い魔達も一緒だ。しかし今回一緒なのは彼女達だけではなかったのだった。

「ではでは」

「私達も」

「今田先生、小百合先生」

二人の先生がにこにここと笑って一緒に立っていたのである。

「私達も御一緒させてもらいます」

「それで宜しいですね」

「はあ、まあ」

「私達は別に」

六人には異存はなかった。

「先生が来て頂けるのでしたら凄く助かりますし」

「じゃあ香ちゃん」

「ええ、小百合ちゃん」

今先生の名前がわかったのだった。

「行きましょう」

「久し振りに二人でね」

「楽しみましょね」

こうして二人で笑顔で向かい合いながら六人と一緒にお家を出た。二人の先生はもう法衣を着てそこにいたのであった。

第二百一十一話 完

2008・8・11

第二百二十二話

第二百二十二話　　まずは六人で

先生のお家を出るともうそこには。ゴツキローチ達が大群でうろついていた。六人の姿を見つけると早速物凄い勢いで群って来た。

「さあさあ来たわよ！」

「ゴキブリ達がね！」

華奈子と赤音がまず楽しそうに言った。

「いい、皆」

「ええ」

梨花に対して美奈子が応える。

「フォーメーションね」

「迷宮で身に着けたあれをやりましょう」

春奈と美樹はもう身構えている。既に他の四人と使い魔達も一緒だ。

「まずは音ね」

「美奈子」

美奈子が前に出るとすぐに他の五人が彼女の後ろについた。そして使い魔達もそれぞれの主の側について主が動くと共にそれに合わせて動いた。

「行くわよ」

「ええ！」

美奈子に伝えて早速攻撃を開始した。

美奈子の笛が鳴り響き五人が動く。まずは美奈子の攻撃がゴツキローチ達を撃ち続いて華奈子がメインになる。それが順番に繰り返される。

六人の攻撃が終わるともうその場にいたゴツキローチ達は皆倒れていた。暫く経つとそのゴツキローチ達が人間の姿になっていた。

「あれっ、人間に!？」

「あつ、そうか」

ここで六人はあることを思い出したのだった。

「あの博士そこいらのチンピラとかヤクザ屋さんをゴツキローチにしていたんだ」

「とことん非道な博士ね」

美樹と赤音が呆れていた。そもそも天本博士にはモラルという言葉が頭の中にインプットされていないのだからこれを言ってもはじまらないのだった。馬の耳に念仏ということだ。

「その割には数が」

「それは増えた分が消えたのよ」

いぶかしむ華奈子に春奈が答えた。

「そういえばゴツキローチって自然増殖もしたわね」

「何処までも迷惑な怪人ね」

梨花の話に美奈子が突っ込みを入れる。そうした悪意の塊の様なものを作るのが博士なのであった。

「とにかく。こうしてゴキブリ達は消していきましょう」

「大本は消さないと駄目だけれどね」

「大本っていうとやっぱり」

「そう、あの人」

「あの人しかいないか」

「やっぱり」

美奈子、梨花、赤音、春奈、美樹、そして華奈子の順番であった。

「天本博士ねえ」

「口で言うのは簡単だけれど」

今度は華奈子と美奈子で話をしていた。

「行くのだけでも大変なのよね、実際」

「行くしかないのだけれどね」

「皆さん、大丈夫です」

しかしここで六人に今田先生が言ってきた。

「今田先生」

「小百合ちゃん、それじゃあ」

「ええ、香ちゃん」

また二人は顔を見合わせて笑い合っていた。いよいよ何かが起ころうとしていた。

第二百二十二話 完

2008・8・11

第二百二十三話

第二百二十三話 二人の先生の魔法

「行きましよう」

「ええ、久し振りに」

顔を見合わせたまま笑顔で言い合う二人の先生。今の二人のこの言葉に華奈子と美奈子はあることに気付いたのであった。そのあることとは。

「そういえば先生達って」

「ええ」

他ならぬ先生達のことである。

「魔法使いの中でも凄腕だったのよね」

「今田先生はそうらしいわね」

まずは今田先生について語るのだった。

「それに小百合先生もやっぱり」

「金色と銀色の法衣って確か」

実は法衣にも特徴があるのだ。普通のカラーの法衣、丁度今華奈子達が着ているそれは簡単に言えば誰でも着られるのだ。それぞれが得意とする魔法の色なのだから。

しかし金色や銀色のものは違うのだ。こうした光る色の法衣を着られるというのは。それこそかなり高位、しかも魔女、魔法使いとして最高ランクが金色と銀色なのである。

「最高ランクだったわよね」

「言われて思い出したわ」

こうしたところはいい加減な華奈子であった。

「今あんにに言われて」

「ってあんな一応魔女なんでしょ？」

先生達を見たまま双子の相方に呆れた声を返す美奈子であった。

「そんなのも知らないなんて」

「先生が凄いつてのは知ってたけれどね」

流石にこれはわかつてはいた。

「けれど。法衣までは」

「全く」

「とにかくよ」

話をしている間にも先生達は動いていたのであった。よくよく考えればお喋りをしている状況ではない、だがせざるを得なかったのである。

「先生達、何か」

「あの魔法……何？」

二人の先生達の姿が消えた。そして次の瞬間には。

「何処なの!？」

「気配まで」

六人は必死に先生達を探した。だが何処にもいない。やはり気配すらない。それで咄嗟に探るがそれでもであった。完全に何処かへと消えてしまっていたのだ。

「先生、何処に!？」

「まさかこれも魔法なのかしら」

「姿を消す魔法!？」

華奈子は美奈子の言葉に応えた。

「ひよっとしてこれって」

「それだけじゃないかもね」

美奈子独特のその鋭さが発揮された。そしてその勘は。

「!？来た!」

「これって!」

空から雨が降り注いだ。いや、それは雨ではなかった。

「な、何てことなの」

「まさかこれが」

何かが起こったのだった。二人だけでなく六人全員が思わず息を飲んだ。果たしてそれは何なのか。驚くべきものであるのは確かだ

つた。

第二百二十三話

完

2008・8・18

第二百二十四話

第二百二十四話 空から

空から降ってきたのは雨ではなかった。確かに水もあつたがそれだけではない。それ等は複合であつた。

「まずは水!？」

「そして!」

次は光、土即ち石、風、音、最後は火。そこに雷やら氷やらまで降り注ぐ。六人が見たこともないような、まさに爆撃の様なものであつた。

「石まで来てるわよ!」

「雷まで!」

六人はまずはそういつたものから逃れようとした。

「早く、バリアー!」

「え、ええ!」

六人で慌ててバリアーを張ろうとする。しかしだつた。その途中で彼女達は気付いたのだつた。

「あれっ、石も雷も」

「そうね。私達には当たっていないわ」

そうなのだつた。何故か石も雷も全て彼女達を襲わずゴツキローチ達だけを襲っていたのであつた。それで彼等を次々と倒していつていた。

「ひよつとしてこれこそが」

「先生達の」

「はい、そうです」

それに応えて先生の明るい声が上から聞こえてきた。

「私達が二人で出している魔法」

「それがこれなんですよ」

同時に小百合先生の声も聞こえてきた。これこそ二人で魔法を出

していることの何よりの証拠であった。

「名付けてハイパーソニックソウル」

「如何でしょうか」

「ハイパーソニックソウル」

華奈子はその技の名前にまずいぶかしむ顔になった。

「確かに凄い名前だけれど」

「技のイメージに合っていないとか？」

「いや、そも思わないけれど」

こう美奈子に返しはする。

「けれど。何かね」

「引つ掛かるものがあるとか？」

「まあそんなところ」

首を捻りつつ正直に述べたのであった。

「何かねえ。かなりね」

「私は別にそうは思わないけれど」

だが二人が話をしているその間にも。ゴツキローチ達はどんどん倒されていく。そして遂には周りにはゴツキローチは一匹もいなくなりヤクザ屋さんや暴走族が転がっているだけになっていた。38

「凄い威力」

「確かに」

威力は流石と言えるものであった。

「もう誰も残っていないし」

「こんなに凄いなんて」

「さて、それでは」

「これを日本全国に」

「放ちますので」

だが先生達の魔法はここだけではなかった。何とここぞとばかりにこのハイパーソニックソウルを日本全土へ放つというのだ。しかもそれはすぐに実行された。

こうしてまずゴツキローチ達は消えた。瞬く間にだ。しかし博士

との戦いはまだ終わりではなかった。むしろこれからなのであった。

第二百二十四話 完

2008・8・18

第二百二十五話

第二百二十五話　ゴツキローチなくとも

ゴツキローチ達が全部消された天本博士。しかし全く動じた様子はない。

「それならそれじゃ」

「全然平気なんですね」

「ほんの余興じゃ」

小田切君にも余裕の顔で返す。

「ゴツキローチなんぞな。本番はこれからじゃ」

「これからなんですか」

「左様。カードは何枚でもある」

本当にあるのだからこの博士は恐ろしいのであった。

「幾らでもものう。さてとじゃ」

「諦めないんですね」

「諦めたらそれで終わりじゃ」

諦めが悪くてしかも非常に気紛れなのがこの博士である。つまりどうなるかは全くわかりはしないというわけなのだ。

「じゃからわしは諦めぬぞ」

「そうですね」

「さて、小田切君よ」

博士は平然とそのタキシードの裏ポケットから何かを出してきた。

「早速一枚切るぞ」

「何を出すんですか？」

「改造人間はもう使った」

それはもう使うつつもりはないということであった。

「さて、だからじゃ」

「ロボットでも出すんですか？」

「そのつもりじゃが」

見れば出してきたものは何かのリモコン装置であった。どう見てもタキシードの裏ポケットに入る大きさではなかったがこの博士に
関しては考えても無駄なことである。

「鉄人を使うつもりじゃよ」

「鉄人っていうと」

小田切君には心当たりがあった。

「あれですか。ビルの街や夜のハイウェイでガオーーーーーッつ
ていう」

「古い歌じゃのう」

「けれど二十八番じゃないですよね」

「わしは人真似はせん」

少なくとも独創性はある博士である。

「それにじゃ。かつての宿敵日本軍を凌駕せねばならんのじゃぞ」

「そういうえはあれ日本軍の兵器でしたね」

実はそうなのである。

「それで博士、その鉄人っていうのは」

「只の鉄人ではない」

普通の破壊兵器を作る博士ではないのだ。

「わし以外の誰もコントロールできないのじゃ」

「あのスティック二つで怪しい電波出して動くものじゃないんです
ね」

「だから遙かに凄いものじゃ」

胸を張ってさえる。

「まあ見ておれ。どう凄いのかをな」

「じゃあ見せてもらいますね」

少し投げやりな感じの小田切君の返事だった。

「その鉄人」

「うむ。さあ出るのじゃ、鉄人よ」

「ガオオオオオオオオオオオオン!!!」

出て来たその瞬間にまたしても街を破壊していく。またまた焦土

になっていく街であった。

第二百二十五話 完

2008・8・21

第二百二十六話

第二百二十六話 迷惑な鉄人

今度は鉄人であった。その鉄人により街が破壊されていく。

「皆さん、御覧下さい！」

アナウンサーが切羽詰った声で実況中継している。その後ろでは異常に巨大なロボットが街を破壊しまくっていた。人々も逃げ惑っている。

「今度はロボットです！天本博士がまたやってくれました！」

テレビの画面に向かって絶叫している。

「街が！街が！もう！うわああああああああっ！」

画面が切れた。それで終わりだった。特撮映画そのままの惨状であった。

「あれで諦めるとは思ってたかったけれどねえ」

「それでもね」

華奈子と美奈子は並んでその真っ黒になった画面を見ている。見ながら呆れ果てた顔になっていた。

「今度はロボットなんだ」

「色々なもの開発してるのね」

「そういえばさ」

ここで華奈子が美奈子に言う。

「あの博士科学だけじゃないんだって」

「他にも色々やってるのね」

「化学とか医学とか工学とか生物学とか」

そういった知識を全てとんでもないことに使っているのが博士である。まともな方向に使おうという考えも発想も微塵もない御仁なのだ。

「あと魔術とか妖術とか錬金術もやってるんだって」

「魔術って私達のじゃない」

「そつちもやっつてるらしいのよ。今田先生のお話だと」
「それはかなり面倒ね」

あらためてこのことを認識する美奈子であった。

「魔術までなんて」

「あと仙術とか陰陽道とかにも精通しているらしいわ」

「しかもそういったのを全部とんでもない方向に使うのね」

「それだけは間違いないんだって」

その為に学んでいるから当然であった。

「どれだけ生きているかわからないけれどもまともな方向に行ったことのない人らしいから」

「厄介に厄介が重なってまあ」

美奈子も絶句する程というわけなのだ。

「無茶苦茶ね」

「それで美奈子」

華奈子はさらに美奈子に言う。

「何？」

「あのロボットね、今度は」

「ああ、あれね」

「何か素っ気無いわね」

「もう慣れたから」

クールな美奈子の返事であった。

「いい加減ね」

「そうなの」

「そうよ。だからね」

美奈子はまた華奈子に言う。

「またやるだけよ。いいわね」

「そうね。それじゃあ」

「ええ」

こうして次の戦いへの決意を冷めて固める二人であった。いい加減わかってきたのであろうか。

第二百二十六話

完

2
0
8
・
8
・
2
1

「鬼ですね」

「どうせ何の役にも立たん屑じゃ」

またこの論理であった。

「悪さばかりしておる奴等が行く高校じゃよ、ここは」

「だから破壊してるんですか？」

小田切君は問う。

「許せないから。悪事が」

「いや、それは違うぞ」

これははつきりと否定する博士であった。そもそもこの博士自体が人類屈指の凶悪犯であるから悪事を言う資格は一切ないのである。

「それはな。断じて違う」

「じゃあどうして」

「嫌いだからじゃ」

何と理由はこれであった。

「だからじゃよ」

「嫌いだからですか」

「うむ、不良は大嫌いじゃ」

やはり善悪を基準としてはいないのであった。

「だからじゃよ」

「生体実験にも使うんですね」

「あとヤクザ屋に暴走族もな」

こうした連中も博士の嫌いな連中なのだった。それは世の役に立たないからではなくただ博士が嫌いだからだ。実に恐ろしい論理である。

「嫌いじゃよ。じゃからいつも始末したり実験の肥にしておるのじゃよ」

「はあ、やつぱり」

博士のとんでもない論理に呆然とする小田切君だった。しかし呆然とするのは彼だけではなかった。

第二百二十七話

完

2008.8.29

第二百二十八話

第二百二十八話 廃墟にて

「うわ、これって」

「ここまでする？」

六人は鉄人が暴れた不良高校の跡地を見て唾然としていた。最早そこにあるのは廃墟だけで無残な屍はもう警察や自衛隊に片付けられた後であった。それでも瓦礫は残っているのであった。

「地震の後みたい」

「いえ、これ怪獣でしょ」

博士は怪獣を使うことも大好きだ。それで時々竹島やならず者国家の首都に海獣達を送り込んだり怪獣島にしたりして遊んでいるのである。

「もう完全に」

「どっちにしろロボットだからね、今回」

「あらためて鉄人のことが述べられる。」

「どっちにしても酷いわよ」

「酷いってどうかねえ」

「今回犠牲者何人？」

「四百人」

「実に恐ろしい数字であった。」

「それだけ死んだんだって」

「四百人ねえ」

「まあこの学校ってね」

「ここで華奈子が言う。」

「皆札付きばかりだったんでしょ？」

「ええ、そうよ」

「美奈子が彼女に答える。」

「それこそヤクザ養成機関だったんだけれど。何度も退学になった

人が最後に辿り着く」

「それでも。これは」

「あの博士らしいけれどね」

この一言で済むのが最も怖かった。

「本当に」

「まあとにかくよ」

華奈子はその廃墟を見ながらまた述べる。

「今度は鉄人よ」

「ええ」

「わかってるわ」

皆も彼女の言葉に頷く。

「ある意味いつもの巨大ロボットより悪質ね」

「そうね。だって」

今度言うのは美奈子だった。

「動かしているの博士だし」

「そうそう」

ここが問題であった。

「何するかわからないってどうか」

「した結果がこれ」

目の前の廃墟である。

「どうしたものかしらね、今度は」

「そうねえ」

華奈子が双子の姉妹に答える。

「博士自身を倒すしかないんじゃないの？」

「それってかなり難しいってどうかあの博士多分不死身よ」

「実に始末が悪いわね」

あらためて博士のとんでもなさを確認する六人であった。何はともあれあらたな戦いがはじまっていた。

第二百二十八話

完

2008.8.29

第二百二十九話

第二百二十九話 言葉遣い

華奈子と美奈子は学校が終わるとすぐに家に戻った。そうして魔法で魔女の法衣にすぐに着替え終えた。華奈子は赤、美奈子は紫のいつもの法衣に。

「さてと。あたし達はこれでいいわね」

「ええ。タミーノ、フィガロ」

「はい」

「何時でも行くことができます」

まずは美奈子の二匹の使い魔が答える。続いて華奈子の使い魔達も。

「じゃあさ、御主人」

「行くよね」

「ええ。それにしてもねえ」

華奈子はここで少し残念な顔になって二人を見るのだった。

「どうしてあんた達ってタミーノとフィガロみたいじゃないの？ 行儀がよくないっていうか」

「行儀って何だよ」

特に行儀の悪いライゾウが華奈子に言葉を返す。

「そんなのどうだっていいじゃないか」

「僕は真面目にしてるつもりだけれど」

タロはタロでこう反論する。

「別におかしくないよ」

「だから。タミーノとフィガロは違うじゃない」

口を少し尖らせてまた二匹に反論する。

「言葉遣いだって丁寧だし。そういつぶうにちょっとはねえ」

「いいじゃない、そんなの」

やはりライゾウはいつものライゾウだった。悪びれるところもない。

「普通に上手くやってるんだしさ、おいら達」

「それはそうだけれどね」

「わかつたらさ」

すかさず華奈子に言う。

「先生のところに行こうぜ」

「そうだよ。こんなことを話していても何にもならないよ」
タロもライゾウと一緒に華奈子に言うのだった。

「だからさ。早く先生のお家にね」

「口は上手くなったのね」

「使い魔は主に似るのよ」

一段落ついたところで横から美奈子が華奈子に告げる。

「知らなかったの？」

「そういえばそうだったっけ」

双子の姉に言われてこのことを思い出す華奈子だった。

「使い魔って」

「そうよ。親と子が似るのと一緒よ」

また華奈子に言う。

「そこところは。だから」

「タミーノとフィガ口は美奈子に似てるのね」

「無意識から出るものもあるから」

美奈子はこつも述べる。

「そうそう変えられるものではないわよ」

「あたしが変わるしかないの」

美奈子の言葉を理解して眉を顰めさせる華奈子だった。

「すごい苦労しそうね」

「自分を変えたいならね」

美奈子の華奈子への言葉が続く。

「それは大変よ」

「うづん、どうしようかしら」

今のところそこまでは考えてはいない華奈子だった。だが自分が気付かないうちに変わっていつている部分もまたあるのだった。

第二百二十九話 完

2008・9・9

第三百十話

第三百十話　　ここが変わっていた

法衣を着て使い魔達と悶着をやってから箒に乗って先生の塾に向かう。使い魔達はそれぞれ小さくなって二人の法衣のポケットに入っている。美奈子は華奈子と並んで飛びながらその華奈子に声をかけてきた。

「ねえ華奈子」

「何？」

「まだ時間あるわよ」

こう声をかけてきたのである。

「少しね」

「そうなの」

「そうなのって。それだけなのね」

あらためて彼女の言葉に頷く。

「もう」

「！？もうって？」

華奈子は美奈子の今の言葉の意味がわからず目をしばたかせる。

「どういうことなの？それって」

「お菓子屋さんとかスーパーとか寄らないのね」

美奈子が言うのはこのことだった。

「もう。寄らないのね」

「だって寄る位なら」

華奈子はここで言う。

「少しでも早く言って魔法のお勉強とかお稽古とかした方がいいじゃない」

「そっちの方が優先なのね」

「相手はあの博士よ」

今度は怪訝な顔になって美奈子に述べる。

「少しでも強くないと駄目じゃない。そうでしょ？」
「確かにね」

今の華奈子の言葉にはその通りだと頷く美奈子だった。

「そうよ。あの博士は本当にそうそう簡単には勝てないわよ」

「だからなんだけれど」

「そこよ」

美奈子は今度は指摘してきた。

「そこなのよ。変わったのは」

「やっぱり何が何なのかわからないけれど」

美奈子の顔はすつきりしているがそれとは反比例して華奈子の顔は怪訝なものだ。しかもその色はさらに濃いものになっていつている。

「何処が変わったのよ」

「だから。少しでも魔法を身に着けようとしているわよね」

「ええ」

「遊ぶのよりも優先させてね。そういうことなのよ」

「成程」

ここでも美奈子に言われて気付く華奈子であった。

「そういうことなの。言われてみればそうね」

「遊ぶのよりそっちを優先させるようになったわね」

「自分でもそれは気付かなかったわ」

右手の人差し指の腹のところを口に当てて述べる華奈子だった。

「そこが変わったの」

「変わったわ。けれどいい感じよ」

また華奈子に告げる。

「魔女としてはね」

「うっん、何か言われてもわからないわ」

自分ではどうしても実感できないままだった。けれどそれでも華奈子も大きく変わったのだった。それは皆についても言えることだった。

第三百三十話

完

2
0
8
・
9
・
9

第三百一十一話

第三百一十一話 到着してみて

先生のお家に到着すると華奈子と美奈子が最初だった。まだ他の皆は来ていない。

「あたし達が最初みたいね」

「ええ、そうね」

美奈子は華奈子のその言葉に対して答えて頷いた。

「私達が最初ね」

「あたし結構遅れること多かったけれど最近は何か」

「だからまずは寄り道しなくなったこと」

美奈子はまたこのことを華奈子に告げた。

「それが大きいわね」

「やっぱりそれなの？」

「ええ、それにね」

美奈子はさらに華奈子に話す。今度は寄り道とは違うことをだした。

「華奈子の魔力があがってるのよ」

「あたしの魔力が？」

「そうよ、それもかなりね」

美奈子が言うのはそれだったのである。

「あがってるわよ」

「そんなになの？」

「やっぱりあれね」

美奈子は冷静に華奈子の顔を見つつ述べた。

「これまで色々あったわよね」

「そうね。紫の魔女とか」

ちらりと華奈子を見る。彼女が紫の魔女の正体だということとはもうわかっていたのだ。

「その時にも色々あったしね」

「あの時だつてかなりあがつていつていたけれどね」

「そうなの」

「そうよ。けれどそれ以上に」

美奈子はさらに言う。

「博士との戦いで経験が大きいわよね」

「バンドでチームワークができてきたことはまた別なのね」

「あれもよかつたわ」

それも認める美奈子だった。

「魔力が互いに反響し合つてね」

「それもあつたの」

「ええ。けれどやっぱり」

博士との戦いが大きいのだと。美奈子は主張する。

「博士を何とかする為に頑張つてるじゃない」

「それは皆がじゃないの？」

「確かにね。けれど」

美奈子はあらためて華奈子の顔を見詰める。自分と同じ顔で髪の毛の色だけが違う双子の妹を。顔は同じだが個性は全く違っているのは生まれた頃からだ。

「華奈子が一番伸びたわよ」

「何度言われても自覚ないけれどね」

「自覚はないけれど確かよ」

足元のタミーノとフィガロをあやしながら述べるのだった。

「魔力があがつたのはね」

「うっん、修行もあつたからかしら」

「勿論」

やはりこれもあるのだった。

「それもね。あるわ」

「そうなのかしら」

「それにね」

美奈子は話を続ける。華奈子は今はその話を彼女には珍しくじつと聞くのだった。

第三百一話 完

2008・9・16

第三百三十二話

第三百三十二話

華奈子の成長

「動きと魔力じゃ華奈子が一番だったわよ」

「修行での迷路の時ね」

「そう、その時よ」

微笑んで華奈子に述べた言葉だった。

「その時ね。いい動きをしていたし魔力もね」

「そんなになの」

「統率は梨花ちゃん、頭脳は春奈ちゃん、バランスは美樹ちゃん、

元気は赤音ちゃん」

「で、サポートは美奈子かしら」

「言っわね」

今度は華奈子の言葉に微笑んでいた。

「私はサポートなのね」

「いいサポートだったわよ」

見れば華奈子もまた微笑んでいた。その微笑んだ顔で美奈子に対して言うのである。

「おかげで助かったわ」

「私がサポートなんてね」

「全く。意外だったわ」

「けれど私は意外には思わなかったわ」

「あたしのことでなのね」

「ええ、それよ」

またそれを話す美奈子だった。

「華奈子のことはよくわかってるからね」

「あたしも美奈子のことはわかってるつもりだったけれど」

「自分でもサポートが向いてるのは意外だったし」

微笑み合いながら話をする二人だった。

「まあそれはね。いいわ」
「そうなの。それであたしのことは意外じゃなかったって」
「やっぱり華奈子はあれなのよ」
微笑みの中に暖かいものを宿らせて華奈子に語っていく。
「運動神経がいいじゃない」
「ええ」
「それで動くだけ魔法を使うわね」
「手数で攻めるのがあたしのやり方だからね」
「それがよかったのよ」
美奈子がいいとしたポイントはここだった。
「やっぱり数やっていけばね」
「魔法もよくなるのね」
「そういうこと。だからやればやる程」
「よくなるってことね」
「皆にも言えることだけれどね」
「よし、じゃあ」
意を決した笑みになっていた。
「あたしこれからやるわよ」
「ええ、頑張つて」
二人の微笑みながらの言葉がまた出た。
「思う存分ね」
「そして思う存分やって今は」
「博士をね。何とかしましょう」
「勿論よ。相手にとってはまあ」
ここで華奈子は苦笑いにまた戻った。
「不足はないなんてレベルじゃないけれどね」
こうは言っても決意は確かにあった。華奈子は確かに魔女として
スケールが大きくなっていったのだった。それは確かであった。

第三百二十一話

完

2008.9.16

第三百三十三話

第三百三十三話 青い炎

他の四人も来て魔法の勉強になった。早速華奈子が火の魔法を使う。

「行くわよ!」

「ええ」

華奈子は皆の声を聞いてから魔法を使う。それは複数の炎を放った派手なものだった。それはやはり今までとは全く違っていた。

「やっぱりね」

美奈子はその魔法を見て言う。

「華奈子、腕をあげてるわね」

「これ初歩の初歩だけれど」

「その初歩だからよ」

美奈子が言うのはそこだった。

「基本が一番大事じゃない」

「そう言うけれどね」

「だからそれよ」

美奈子はまたそこを指摘するのだった。

「華奈子の腕があがってるのよ、それもかなりね」

「だから自覚ないけれど」

「自分では案外わからないものよ」

「そうかしら」

やはり首を傾げる華奈子だった。

「あたし、前からこんなのだったけれど?」

「前は一つだったじゃない」

美奈子が言うのは炎の数だった。

「それが幾つも。しかも炎の大きさも温度もあがってるわね」

「かなあ」

細かく指摘されてもやはり華奈子は自覚できず首を傾げるばかりだった。

「色だつて変わってないし」

「ちよつと気合入れて出してみて」

「ええ」

ここで美奈子に言われるままに炎を出してみる。するとそれは。

「あれっ!？」

華奈子は自分の炎を見ていきなり驚きの声をあげた。

「青いわよね」

「ほら、青い炎だつて出せるじゃない」

「そついえば確かに」

「赤い炎と青い炎どっちが熱いかは知ってるわよね」

「それはね」

それはわかっている華奈子であった。伊達に火の魔法を得意としているわけではないのだ。とにかく学校の勉強以外のことはよくできる華奈子なのだ。

「青に決まってるわ」

「じゃあわかるわね」

「ええ。青い炎も出せるようになったのね」

「これが一番はつきり出ているところよ」

また言う美奈子だった。

「その青い炎がね」

「これなの」

「華奈子だけじゃないし」

美奈子はさらに言う。

「皆もね」

「皆も?」

「ええ」

美奈子の話は続くのだった。彼女は今度は四人にも話していった。

第三百二十二話

完

2008・9・22

第三百二十四話

第三百二十四話 シャボンの

秘密

「まずは春奈ちゃん」

「うん」

美奈子はまず春奈に声をかける。春奈は少し頼りない感じの言葉を返した。

「春奈ちゃんの魔力もね」

「あがつてるかしら」

「シャボン玉使ってみて」

春奈の水の魔法の基本中の基本の魔法だった。

「それ。いいかしら」

「わかったわ。それじゃあ」

美奈子の言葉に従い魔法を放つと早速無数のシャボンが出て来た。それは忽ちのうちに春奈だけでなく六人全体を包み込んだのだった。

「この量よ」

「シャボン玉の量？」

「ええ。前はこんなに多くなかったわね」

「そんなに多いかしら」

反応が華奈子のそれと同じだった。やはり自覚のない春奈だった。

「私の今のシャボン玉」

「桁が一つ違うわね」

「そんなに？」

「ええ。見て」

ここで漂うシャボン玉を指し示して春奈に言う美奈子だった。

「前はこんなに多くなかったわ、絶対にね」

「そういえば」

「一〇〇あったのが一〇〇〇位にね」

そこまで違うのだった。

「これは大きな違いよ。それに」

「それに？」

「ほら、まだ漂ってるわよね」

美奈子はその宙を漂うシャボン玉を指差していたのだった。

「こんなのつて前はなかったわよね」

「あつ、確かに」

「春奈ちゃんも魔力があがってるのよ」

また微笑んで春奈に述べる。

「それもかなりね」

「華奈子ちゃんと同じでなのね」

「そうよ、華奈子と同じ」

微笑んでまた春奈に言う。

「魔力があがってるのよ」

「シャボン玉だけじゃなくてね」

「その通りよ。華奈子と違ってお水自体は変わっていないけれどね」

「時間と量なのね」

「そういうことよ」

春奈の魔力の上昇はそこに出ていたのだ。ここが華奈子と違っていた。 42

「凄くなってるわ」

「じゃあ、これからも」

「頑張つてね。まあこれは」

ここでまた微笑む美奈子だった。

「春奈ちゃんに限っては大丈夫ね。努力家だしね」

「それは。私は」

こつ言われると顔を赤らめさせる春奈だった。この辺りは相変わらずだった。

第三百二十四話

完

2008.9.22

第三百二十五話

第三百二十五話 光の壁

「赤音ちゃんもね」

「私もなの」

美奈子の指摘は赤音にも及んでいた。

「光の数も威力もかなりあがったじゃない」

「そうかしら」

「試しに一回魔法使ってみて」

「こう彼女にも言う。」

「一回。ほらっ」

「あっ」

実際に使ってみる。するとこれまでよりも遥かに多い数の光が放たれる。それにその動きもそれぞれかなりトリッキーなものになっている。

「今までは一つの動きしかなかったじゃない」

「一つの動き？」

「ほら、魔法を放つてもね」

また言う美奈子であった。

「バウンドするのならバウンドするだけ、飛ぶのなら飛ぶだけだったじゃない」

「ええ」

「それが今ではこれよ」

今では、とまで言う。

「光によってまっすぐ飛んだりあちこちバウンドしたり。ぐねぐね曲がったり上下したりよね」

「そういえば」

「それよ。威力だってね」

木の枝を投げるとそれが消え去ってしまった。赤音の光を受ける

とすぐに。

「今までよりずっと強くなってるわよね」

「うっん、今まで自覚していなかったけれど」

赤音はここで首を捻った。

「そうなの」

「そうよ。それだからね」

「攻撃にも影響するのかしら」

「するわ」

はつきりと赤音に対して告げる美奈子だった。

「これもまた大きな力になるわよ」

「そうよね。それじゃあ」

「使えば使う程さらに凄くなるわよ」

またこのことを話す美奈子である。

「もつとね」

「そう。それじゃあ」

「華奈子と春奈ちゃんも同じだから」

「あたし達もなのね」

「まずは一人一人よ」

「一人一人」

「ほらっ」

赤音が再び魔法を使ったところでまた声をかける。

「今度はもつと光の量が増えたわね」

「本当、何か」

「あたしも」

華奈子もであった。そして春奈のシャボンも数がさらに増えていた。

魔法は使えば使う程度その威力が高まっていく。そのことを確かめつつさらに魔法を使っていくのだった。

「光もどんどんその輝きが増していくのね」

「そういうことよ」

あらためて自分の魔法のことを認識した赤音であった。

第二百二十五話 完

2008・9・30

第三百三十六話

第三百三十六話

風の魔法使い

美樹は風を扱っていた。それは。

「えっ!？」

まず自分で使って驚きの声をあげる。

「今の威力ってまさか」

「これまたかなり凄いじゃない」

華奈子も今の美樹の魔法を見て驚いていた。

「鎌イ足が一杯出て無茶苦茶に暴れ回るなんてね」

「こんなのはじめてよ」

使った美樹はまだ驚いている。

「風の魔法にしるね」

「今までは竜巻が限界だったっけ」

「ええ。その竜巻だって」

実際に竜巻も放ってみる。

「ほら、今までは一つだったのに」

「今じゃ四つも五つもよね」

「凄いことになってるね、美樹ちゃんも」

「そうみたい。じゃあ私も」

「その通りよ。美樹ちゃんもね」

美奈子は美樹に対しても言うのだった。

「魔力があがってるのよ」

「やっぱり使っていればなのね」

「そうよ。それにしても」

美奈子もまた美樹が今さっき放った無数の鎌イ足の魔法のことを話す。

「今の魔法がとりわけ凄いわね」

「っていうか見てよ」

華奈子が美奈子に対してここで声をかけた。

「あたしだつてこうだし」

青い炎と赤い炎を同時にそれぞれ複数出すことができるようにもなつておりその動きもコントロールさえしている。さっきよりも進歩している。

「春奈ちゃんと赤音ちゃんだつてね」

「そうね。何か」

春奈のシャボンは虹色になつてやはり数が比較的増えている。もう風の動きとは関係なくめいめいのシャボンが生き物の様に動いてさえいる。

赤音のそれもまた。動きも量もさらに凄いものになっている。さっきよりもさらにだ。

「また凄くなつてるなんて」

「私達つてね」

美樹がここで美奈子に話す。

「一つの魔法に専念してるじゃない」

「ええ」

「それがかえつていいのかしら」

「そうね」

美奈子は少し考えてから美樹に答える。

「多分それね」

「一芸つてやつね」

「そういうことね。そういえば私もなのね」

「ああ、美奈子だつてそうよ」

華奈子がまた横から言う。

「実際のところはね」

「そうなの」

美奈子も同じであるという。話はさらに動いていた。

第三百二十六話

完

2008.9.30

第三百二十七話

第三百二十七話 梨花もやっぱり

五人目はやはり梨花だった。美奈子は彼女の魔法も見る。

「地震起こせるようになってたわよね」

「ええ」

梨花は美奈子のその問いに頷く。

「やっと使いこなせるようになったわ」

「しかもそれだけじゃないわね」

「そうかしら」

「梨花の魔法も進化してるわ」

「こう梨花に話す。」

「ただの地震じゃなくなってるわ」

「じゃあ使ってみるわね」

「ええ、使ってみて」

実際に彼女に魔法を使うことを促す。彼女から言ってきたにしろだ。

「そうしたらわかるから」

「じゃあ」

「ええ」

実際に地震の魔法を使ってみる。すると。

「きゃっ！」

「これって」

「魔法の威力があがってる？」

他のメンバーは梨花が今使ったその地震の魔法を受けて言う。

「揺れが今までよりもずっと激しいわ」

「それに」

「ほら。見て」

美奈子はその魔法を見るように皆と梨花自身に告げる。

「地震だけじゃないわよね」

「ええ。今気付いたわ」

梨花自身もそのことに気付いた。見れば。

宙に無数の石が浮かんでいる。それこそが魔法の進化の証であった。ここで美奈子はまた梨花に対して言うのであった。

「念じてみて」

「念じるの？」

「そうしたらもっとよくわかるから」

「そう。じゃあ」

また言われるままに念じてみる。するとその無数の石が宙を複雑に舞う。それは梨花の意志に忠実に従って動いているのだった。

「凄い……………」

「それよ」

美奈子はそれだと指摘した。

「梨花の魔法もね。それだけレベルアップしてるのよ」

「そうなの。これも」

「そうよ。自信を持っていいわ」

語る美奈子の声が確かなものになっていた。

「絶対にね」

「そう言うのなら」

「さて、最後は」

ここで華奈子が出て来た。

「美奈子、あんたよ」

「私!？」

「そうよ。あんたの音の魔法も見せてもらっわよ」

楽しげに笑って美奈子の顔を見ていた。いよいよ最後の一人の番であった。

2
0
0
8
·
1
0
·
6

第三百二十八話

第三百二十八話 音もまた

「あたし達全員魔法のレベルがあがってるのよね」

「それもかなりね」

「じゃああんたもそうなるわよ」

筋が通っていないようで通っている華奈子の理屈であった。

「その魔法はね」

「そうかしら」

「何なら太鼓判押してあげるわよ」

こうまで言う華奈子であった。

「試しに使ってみれば？絶対に凄いことになってるから」

「絶対になの」

「あたし達全員がそうなのよ」

このことをまた言うのであった。

「だったらあんたもね」

「そんなに言うのなら。それじゃあ」

「さあ、どうぞ」

少しおどけてみせて美奈子をリラックスさせる。この辺りの細かい気配りもできるようになってきている華奈子だった。この面でも成長していると言えた。

「やってみて。さあ」

「そんなに言うのなら」

美奈子は横笛を口に当てる。そのまま吹くと。何と周りのあらゆるものが動きだしたのだった。

命がない筈の石も動かない花々や木々も。それぞれ動く。踊る様に舞う様に。これもまた今までの美奈子の魔法にはなかったものだった。

「嘘……」

「嘘じゃないわ」

美奈子に対して微笑んで告げる華奈子だった。

「これがあなたの成長なのよ」

「これが私の」

「自分でも凄いやと思うでしょ」

「嘘みたいよ」

偽らざる彼女の本音だった。

「私がこんな凄い魔法を使えるようになったなんて」

「あなたの音楽も。凄くなったわね」

「まだ。それでも」

「だから。謙遜しないでいいのよ」

戸惑い続けている美奈子に対してまた言う。

「あなたが実際に使ってるんだからね」

「ううん、それでも」

「何よ、あたし達に言ったのはあなたよ」

華奈子はこのことをくどいまでに美奈子自身に告げる。

「そのあなたがそんなのでどうするのよ。とにかくね」

「とにかく?」

「これで六人全員パワーアップよ」

ここを力説する華奈子だった。

「さて、あの博士の相手もちよっとはできるようになったかしらね」

「それでもね」

美奈子はいつものクールな表情に戻って華奈子に言ってきた。

「一人では絶対に無理ね」

「やっぱり六人全員でないと駄目なのね」

「ええ。それはしっかりとわかっていてね」

「了解」

やはり最後は真面目な美奈子で締めるのだった。こうしてそれぞれの成長を知った六人であった。

第三百二十八話

完

2008・10・6

第三百二十九話

第三百二十九話 先生達は

六人はそれぞれかなり成長を見せていた。そしてその六人を教える今田先生はというと。

「最近ね」

「ええ」

にこにことしながら小百合先生と茶道を嗜みつつ話をしている。

今田先生は青、小百合先生は緑の着物をそれぞれ着て静かな茶室で向かい合ったうえで話をしているのだ。

「またお茶が美味しくなったわ」

「それはいいことね」

小百合先生はにこやかに今田先生の言葉に応える。

「香ちやんらしいわ」

「そうかしら」

「そうよ。このお茶は」

話は今飲んでいるそのお茶についてであった。

「柔らかくて。優しくて」

「お茶は性格が出るのよね」

「ええ。だからね」

「小百合ちゃんもそうなのかしら」

「そうよ」

今田先生と同じくにこやかな笑みになっている小百合先生であった。

「多分ね。だって私達って」

「そうね。従姉妹同士だからね」

「覚えてるかしら。あの時のこと」

茶室でのにこやかな話が続く。

「子供の時の」

「幼稚園低学年の時かしら」

「そうよ」

笑顔で今田先生に返す、それと共にまたお茶を飲む。

「あの時。二人でトマトのシチュー作ったわね」

「ああ、トマトのシチューね」

言われて思い出したようである。やはり今田先生は何処か天然だ。本人は自覚しているかというところではないのがまた先生らしいのだ。

「あの時にはじめて魔法を使ったのよね」

「二人共ね」

「楽しかったわ」

今田先生もまたお茶を飲む。抹茶の味を心から楽しんでいる。

「包丁が宙に浮かんでそれでトマトにお肉を切ってたね」

「そうだったわね。スプーンも飛んで」

「ガスコンロじゃなく火の魔法を使って」

「お水も入れてね」

つまり全ては魔法で作ったというのだ。まだ五歳でだ。

「本当に楽しかったわよね」

「そういえば私達って」

小百合先生はまた言う。42

「魔法勉強していなかったわね」

「そうね」

何と今になって気付くのであった。

「そういえば」

「何時習ったかしら」

「確か。幼稚園高学年だったかしら」

「あら、思ったより早いわね」

「そうね」

実に呑気な会話であった。しかしそれがまた実にこの二人の先生らしかった。

第三百二十九話

完

2
0
8
・
1
0
・
1
4

第四百十話

第四百十話 博士と会った時

先生達の話は続いていた。

「そういえばね。香ちゃん」

「何かしら」

「あの博士とはじめて会った時だけねど」

「ええ」

言うまでもなく天本博士とはじめて会った時のことである。

「あの時は幾つだったかしら」

「十歳だったかしら」

「小学生だったのは覚えてるけれどね」

「何年前かになるともう」

「そうなのよね。とても」

「覚えてないわ」

なおこの先生達の詳しい年齢は誰も知らない。戸籍にあるそれは実は違うものではないのかとも噂されている。役所もそこは知らないと言われている。

「けれど長いわよね」

「それは確かね」

「ええ。もう本当に」

今度はお菓子を食へながらの話になっていた。勿論和菓子である。

「御会いしてから」

「その間何かとあったけれど」

「どれもこれも」

「そうね」

話は続く。

「楽しい思い出よね」

「けれど寂しかったわ」

先生はここでふと小百合先生を咎めるような目で見てきた。

「小百合ちゃんが神戸に行ってるね」

「御免なさいね」

小百合先生もそれに応えて申し訳なさそうに謝る。

「八条学園にどうしてもって言われて」

「私も誘われていたわよ」

「聞いてるわ」

二人の先生に同時に声をかけたのだ。日本でもトップクラスの魔女である二人に同時にだ。思えばある金満球団よりも強引である。

「けれど断ったのね」

「だって私もう塾があつたから」

「この塾ね」

「そうよ。代々やってる」

つまり先祖代々魔女というわけなのだ。生粋の日本人であるが。

「ここでね」

「やっぱりここがいいの？」

「それもあるわ」

先生もそれは認める。

「けれどね」

「ええ。けれど？」

「生徒の娘達が好きだから。皆が」

「香ちゃんらしい言葉ね」

「皆大好き」

少女の心そのものの言葉であつた。

「これからもずっとね」

最後に微笑みお菓子を食べる。何時までも少女の心を忘れない二人の先生であつた。

2
0
0
8
·
1
0
·
1
4

第四百一十一話

第四百一十一話 相変わらず非常識に

魔女達が己の力量をあげているその頃。博士はいつもと変わりない日常を送っていた。今日はこの前怪獣を送って廃墟にした地上の楽園にまた何かをしようと考えていたのだ。

「さて、今度はじゃ」

「あのならず者国家にまた何かするんですか」

「わしはあの国が嫌いじゃ」

好き嫌いで動いて大惨事を引き起こすのがこの博士の常だ。

「だからじゃ。今日もな」

「それで今度は何するんですか？」

「雨を降らせてやる」

今度はこれだというのだ。

「雨をな」

「意外とまともですね」

「どうせなあ」

「その雨がとんでもない代物に決まってるさ」

小田切君とは違ってタロ弟とライゾウ兄は既に達観していた。

「酸性雨なんて生易しいものじゃなくてさ」

「今度は何なのさ、博士」

「酸性雨！？下らん」

やはりこんなことを言い出してきた。

「そんな甘いものをわざわざこのわしが開発するものですか」

「ああ、そうなんですか」

小田切君は博士の今の言葉を聞いてまたうんざりとした顔になる。

「何かって思えば」

「有機王水じゃ」

やはりこれであった。

「しかもそれを思いきり凝縮したものをな。降らせてやる」
「それで大変なことになっていいんですか？」
「結構なことじゃ」
大変なことこそ博士の望むところなのだ。やはり実に悪質だ。
「そうでなくては面白くない。違つか小田切君」
「面白くないと意味ないんですか」
「当たり前じゃ。わしは天才じゃぞ」
天才だが同時に天災でもある。
「このわしが発明するものが面白くなってどうするのじゃ」
「そうですか。それですね」
「うむ」
「一体どういったふうに雨を降らすんですか？」
「そこが問題であった。」
「あの街だけにするんですか？それで」
「まず恐竜達をじゃ」
「はい」
「竹島に戻す」
「まずはそれであった。」
「途中半島を横断させてのう」
「そつちにも災厄をもたらすんですか」
「そのまま海を行かせては面白くないじゃろ。だからじゃ」
「はあ」
「まあ見ておれ」
暗がりのスポットの中不気味な笑みを浮かべての言葉だった。
「わしの天才ぶりをな。今度もな」
「期待しないで待ってます」
こう言うのが精一杯であった。何はともあれ今度は雨であった。

2
0
0
8
·
1
0
·
2
2
2

第四百二十二話

第四百二十二話　ヘルズレイン

「雨だ！」

「雨が降ったぞ！」

遂にその国に雨が降った。

「恵みの雨だ！」

「將軍様の雨だ！」

こう喜んでいた。ところが急に。

「うっ、うわあああああつ！！！」

「何だこれは！」

人民達が急に苦しみだした。

肌が焼け髪が溶ける。大地は燃え上がり川は干上がる。有機王水
どころではなかった。

「な、何だありゃ」

「あの雨普通じゃねえだろ」

その国以外でも早速ネット等で議論になりだした。

「凶悪な酸性雨みたいだな」

「そつみたいだけれどそんなレベルじゃねえぞ」

「有機王水……じゃねえよな」

「何だありゃ」

「あれっ!？」

それを見て小田切君も首を傾げるのだった。

「何かおかしいな」

「おかしいなんてものじゃねえぞ」

「これはもう有り得ないよ」

ライゾウ兄とタロ弟も同じものを見て言った。

「有機王水じゃなくてな、あれって」

「もつと遥かに悪質な酸性の液体みたいだよ」

「そうみたいだね。だとすると」

謎はそこにあつた。

「何なのかな、本当に」

「ちよつと調べてみるよ」

小田切君は冷静に二匹に対して述べた。

「これはね。ちよつとね」

「いや、ちよつとどころじゃねえから」

「この雨は幾ら何でも」

「そうだよ。おかしい」

また言う小田切君だった。

「あの博士だからね」

しかし問題点ははつきりとわかっていた。

「どうせ碌でもないものだけけれど」

「仮定は入れないんだな」

「そこで」

「入れられる？じゃあ」

そもそもそのこと自体が不可能なのだった。

「博士がすることだよ」

「予想を遥かに超えるからなあ、いつもいつも」

「全く。今回も最初は有機王水だつて言っていたのに」

あくまで最初である。最初だけだ。

「何なんだろう、本当に」

「知りたいけれどね、どうも」

「本当に何なのかな」

その謎は何なのかはわからない。しかしとんでもないことであることだけは確かであった。

2
0
0
8
·
1
0
·
2
6

第四百十三話

第四百十三話 雨の結果

その怪しいどころではない雨の結果。半島の北半分は恐ろしいことになっていった。

「うわ……」

「見事に禿山だらけ」

ライゾウ兄もタロ弟もテレビを観て啞然としている。そこに移るのは本当に草木が一本もなくなってしまった半島の北半分だったのだ。

「物凄い威力」

「それどころじゃないね、これは」

「素晴らしいじゃろ」

博士だけが誇らしげに胸を張っている。

「わしの発明は。また大成功じゃよ」

「ってどうか博士」

「野生動物はどうなったの？」

「ん！？そんなもん最初から考えておらんぞ」

これが博士の返答だった。そもそも人権すら完全に無視するのに野生動物のことまで考えている筈がなかった。当然環境についても関心はない。

「一切な」

「一切って」

「酷過ぎるんじゃない」

「そもそもあそこに野生動物なんぞもうおらんわ」

そして今度はこう言ってきた。

「一匹もな」

「そうかなあ」

「幾ら何でもそれは」

「あれだけ食糧危機だったのじゃぞ」

それで有名な国でもある。それで日本のテレビ局が餓えた子供達の映像をながし援助を煽ったこともある。その援助物資は全て軍に行った。

「おるわけないじゃろうが」

「鼠一匹も？」

「人が飢え死にしておるのじゃぞ」

これがあの国の現実である。

「そんなもん。いたらとつくに食われておるわ」

「何かさ、それって」

「大航海時代の船みたいだよな」

二匹はその国の話を聞いて言い合った。

「そうだよなあ。凄い国だよ」

「博士の方がずっと凄いけれど」

「だからじゃ。元々禿山だらけじゃったしな」

「木までなかったんだ」

「本当に何もなかったんだ」

「だが。わしの雨はそれでもじゃ」

しかしそれでも力説するのである。

「土を毒の土にし川を汚し尽くす」

実に最悪である。

「これで百年は使い物にならぬぞ」

「やっぱりこの博士ってさ」

「どうにもならないんだね」

二匹はあらためてこのことを認識した。

「どうなることやら」

「既に最悪の結果になっているけれど」

「さてと。次はじゃ」

二匹の話了他所に博士は次の発明のことだけを考えていた。もう雨のことは輝かしい栄光のページになってしまっていた。

第四百十三話

完

2
0
8
・
1
1
・
4

第四百四十四話

第四百四十四話

その次の発明は

早速次の発明に取り掛かる博士。今度は。

「さて、とじゃ」

「今度は何発明するんですか？」

「あの鉄人の武器じゃよ」

「武器ですか」

「うむ」

こう小田切君に対して答える。既に研究室で一人発明に専念している。

「その通りじゃ」

「で、何発明するつもりなんですか？」

「簡単に言えば大量破壊兵器じゃ」

「またしてもよりによってこういうったものであった。」

「それをな。ちよいとな」

「ちよいと、ですか」

「街の一個は簡単に潰せる」

「また実に物騒である。」

「どうじゃ。いいものじゃろ」

「で、それを鉄人につけて何をするんですか？」

「とりあえずそれは聞いた。内心またか、と思っていたが。」

「どっか攻撃するんですか？」

「自衛隊の富士演習場突っ込ませる」

「またしてもこんなことを考えているのであった。」

「ちよいとな。軽くな」

「軽くなつて」

「そもそもじゃ。自衛隊は」

「自衛隊は？」

「あまりにも腑抜けておる」

随分と身勝手な自衛隊批判であったがその批判の言葉自体は正論であった。もっとも問題があるのは日本政府こそであるが。

「少しカツを入れておく」

「カツですか」

「そうじゃ。このわしがな」

「大体さあ」

「そうだよなあ」

そして後ろでまたライゾウ兄とタロ弟が話をするのであった。

「この博士を野放し同然にしている日本政府って凄いよな」

「怪物よりも悪質なのに」

「有事立法とか破壊活動防止法は？」

「適用しないんだね」

「ああ、そういうのが通用する人じゃないから」

小田切君の言葉は実に冷めたものであった。

「だからね。それはね」

「無視しているんだ」

「そういうこと。けれど時々南極とか宇宙に隔離してるし」

それでも戻って来るのが博士であるが。

「まあそういうのはね」

「法律じゃどうしようもないんだな、結局のところ」

「困った博士だよ」

「ふふふ、さあできたぞ」

彼等の言葉をよそに完成を喜んでいる。

「これでまた。鉄人が暴れるぞ」

こうして知らず知らずのうちにまた博士のターゲットにされる自衛隊であった。彼等の不幸はまだまだ続くのであった。

2
0
0
8
·
1
1
·
6

第四百十五話

第四百十五話 小田切君の散歩

小田切君にも趣味はある。実は結構多趣味でもある。

「音楽鑑賞に読書にゲームに切手の収集にね」

「インドアばかりじゃないの？」

「そっだよな」

「あと散歩とかね」

こうライゾウ兄とタロ弟に対して話していた。

「そっというのが趣味なんだ」

「ふうん、じゃあ毎日歩いてるんだ」

「健康的だね」

「最近じゃランニングとか筋肉トレーニングもしてるよ」

「ああ、そっいえば何か」

「身体も引き締まってきたいるし」

「そっじゃないと身体がね」

ここでは少し苦笑いになっていた。

「もたないからね」

「まあそっだよな、それは」

「博士と一緒にいたらね」

その辺りはもう説明不要だった。地球規模で迷惑やトラブルを起こし続けている博士の助手である。やはり体力がなくてはやっていけないのだ。

「それにさ。何かおいら達って」

「どうにもね」

「どうかしたの？」

「いや、結構暇じゃないかい？」

「小田切君にしる」

ここで二匹は小田切君に対して言うのだった。

「大抵定時で帰ってないかい？」

「いても結構自由時間あるし」

「ああ、そういえば結構」

言われてみればそうである。そもそも博士は博士にしかできないような発明ばかりするからである。他人ができるものではないのだ。

「お給料の割りにはね」

「それ考えたら結構身体鍛えたり趣味に時間割けてるよな」

「どうかな」

「そうだね」

小田切君もそのことに気付いたのだった。

「僕も買い物に行く時間多いしね」

「食材とかお酒だよな」

「博士ってこだわりの人だから」

意外なことにそうなのだ。これは兵器や危険物に対するこだわりだけではない。服装にもこだわっているし他のことに対してもなのである。

「料理だつてね。自分で作るしね」

「時々自分で買いに行くしね」

「確かにね」

「やってる仕事って僕って」

ここで考えてみる。

「あれっ、あまりないかも」

「ないんだ」

「実は」

「ひょっとして」

よくよく考えてみればそうかも知れない。小田切君も実は意外とおかしな日常を送っているようである。

2
0
0
8
·
1
1
·
7

第四百十六話

第四百十六話 歩いていると

その小田切君が歩いていると。大抵はいいことが起こらない。

「あつ、泥棒！」

「よし、こいつは内臓を増やす実験の道具じゃ！」

「暴走族五月蠅いぞ！」

「ふははははははははは、またしてもストレス解消の的じゃ！」

博士が事あるごとに出て来てそのいいことを起こさない犯罪者達を無残な末路に追いやるからである。もっともこれは街でいつもあることだ。

「やれやれだな」

その散歩の中で溜息をつく小田切君だった。

「せめて一回は落ち着いた散歩がしたいよ」

今の彼の願いである。だが博士がいるこの街に平穏なぞないのでまさに夢物語である。だがそれでも夢は見たいのだった。

そんなある日のこと。ふと目の前に。

「あつ」

「おや、これは」

何と公演で今田先生に出会ったのである。先生は落ち着いた白いワンピースを着て公演の花園のところへ一人立ってたたずんでいたのである。

実に絵になる光景だ。その先生を見て小田切君は思わず先生に近寄りそして。

「あの、あのですね」

「貴方は確か」

「はい、小田切と申します」

自然な流れで話に入るのだった。

「博士の助手の」

「今日はどうしてこちらに？」

「ちよつと暇ができました」

つまり博士が悪夢の研究に没頭している時間なのだ。

「それで散歩にと思ひまして」

「それにこちらにですか」

「ええ、まあ」

こう先生に返す。

「そういうことです」

「そうだったのですか」

「先生でしたよね」

小田切君も小田切君で先生のことを思い出すのだった。

「あの女の子達の魔法の」

「はい、そうです」

にこりと笑つて小田切君の問いに答える先生だった。

「教えさせてもらっています」

「そうでしたね。いや」

あらためて先生を見る小田切君だった。そして言う言葉は。

「あのですね」

「はい。何でしょうか」

「宜しければ」

言葉が自然と出て来る。

「お時間。あるでしょうか」

「はい、暫くは」

「それでしたらですね」

先生の言葉を受けてさらに言うのだった。

「お茶でも」

言葉を続ける。自分でも驚く位言葉を自然に出していく小田切君だった。

第四百十六話

完

2008.11.13

第四百七話

第四百七話 小田切君と先生

「お茶ですけれど」

「お抹茶ですか？」

「あつ、いえ」

今のは先生の天然だった。小田切君もそれを受けてかなり戸惑いはした。しかしすぐに体勢を立て直してまた言うのであった。意外とめげない。

「そうではなくてですね」

「ではどのお茶ですか？」

「紅茶です」

こう先生に言うのだった。だが何処か先生のペースに入ってしまった。ついでに。

「紅茶ですけれど」

「紅茶ですか。コーヒーではないのですね」

「勿論コーヒーもあります」

やはり先生のペースに巻き込まれてしまっている。

「それもありますか」

「コーヒーもですか」

「そうです。喫茶店です」

あらためて先生に対して言った。

「喫茶店ですけれど。どうでしょうか」

「そこにはお抹茶はあるでしょうか」

「喫茶店にお抹茶ですか」

「はい」

にこやかな笑みで答える先生だった。

「そうです。そこにお抹茶はありますか？」

「ええと。確か」

完全に洋風のアンティークなお店である。少なくとも和風が似合うお店ではない。小田切君はそのことを思いつつ頭の中でどうするべきか考えていた。具体的には何を言うべきかだ。

「なかつたですけれど」

「それではですね」

今度は完全に先生のペースになっていた。

「一つ。いいお店を知っていますよ」

「お抹茶が出るお店ですか」

「はい、そうです」

やはりにこやかに笑って答える先生だった。

「あります。如何ですか」

「そうですね。お抹茶ですか」

実は紅茶だけを考えていた。しかしお抹茶と聞いても別に駄目だという気も起こらなかった。実はそちらも好きな小田切君なのである。

「宜しければ」

「有り難うございます。それではですね」

「ええ」

その笑みで小田切君の言葉に応えてきていた。

「御願います」

「いいお店なんですよ」

にこやかな笑みのままでまた小田切君に言ってきたのだった。

「そこは」

「そうなんですか」

「はい。ですから御一緒に」

「わかりました。それでは」

「こちらです」

こうして先生に案内されてそのお店に向かうことになった小田切君だった。本当に気付けば完全に先生のペースに入ってしまったのだった。

第四百七話

完

2
0
8
・
1
1
・
1
3

第四百十八話

第四百十八話 そのお抹茶は

先生に案内されて入ったお店は。これまた実に和風だった。

黒い木を基調とした店の内装は物静かで尚且つそのメニューは筆で書いたものだった。そして当然ながらテーブルも椅子も木製であり和風の造りだ。何もかもが実に和風だった。

「ここなんですか」

「どうでしょうか」

小田切君の向かい側に座っている先生がにこりと笑って尋ねてきたのだった。

「このお店は」

「そうですね」

まず一呼吸置いてから答える小田切君だった。

「感じが凄くいいですね」

「落ち着きますよね」

「はい」

先生の問いに対して答える。

「本当に。ここは」

「日本は落ち着くんですよ」

先生の言葉である。

「こうしているだけで」

「いるだけでですか」

「そうです。ですから」

「ここに案内してくれましたか」

「勿論それだけではありません」

先生のにこやかな笑顔と共の言葉は続く。

「そのお抹茶もです」

「お抹茶もですか」

「お抹茶好きですよね」

「はい、お茶でしたら何でも」

こう答える小田切君だった。

「大好きです」

「それなら。安心しました」

またにこやかな笑みを小田切君に見せる先生だった。

「それでは。お茶菓子はです」

「何がいいですか？」

「羊羹はどうでしょうか」

先生が言ったのは羊羹だった。

「蒸し羊羹は」

「そうですね。それじゃあ僕は」

ここで小田切君は羊羹と聞いてあるものを頼んだのだった。

「栗羊羹を頼みます」

「あつ、いいものを頼まれますね」

先生は小田切君が栗羊羹を頼もうというのを聞いてまたその笑顔

で言ってきた。

「私それも好きなんですよ」

「蒸し羊羹だけではなくてですか」

「はい。それではその羊羹をそれぞれ」

「頼みますか」

「飲み物は勿論」

それはもう決まっていた。

「お抹茶で」

「わかりました。それではそれで」

「はい」

こうしてそれぞれお抹茶と羊羹を頼む二人であった。その二つが来てから。二人はあらためて話をするのだった。

第四百十八話

完

2
0
0
8
・
1
1
・
1
3

第四百十九話

第四百十九話 珍しく穏やかに

小田切君と今田先生は本当に穏やかに話をはじめた。まずその「
とに声をあげたのは小田切君だった。

「何といたしますかね」

「どうかしました？」

「いえ、毎日何かと騒がしいじゃないですか」

「こつ言つのである。そうさせているのが誰なのかは言つまでもない。
い。

「それが。珍しく」

「そうですね。穏やかですね」

「そうですね。何かそれが」

「どんな感じですか？」

「忘れていました」

そんなことは完全に忘れてしまっていた小田切君なのだった。

「正直言つて」

「そうだったんですか」

「博士と一緒にいるとですね」

その騒がしくしている張本人についてごく自然に話していく。

「朝起きて研究所に行くと」

「そついえばですね」

先生はふとした漢字で話を変えてきた。

「研究所にはいつもどうやって行かれてるんですか？」

「研究所にですか」

「はい、どうやって通ってるんですか？」

「自転車です」

意外と平和な方法での通勤である。

「雨だと歩いてです」

「そうだったんですか」

「自転車は身体にいいですし移動に楽ですし」

その理由はごく自然である。

「ですから」

「そうなのですか」

「別におかしな理由じゃないですよね」

話をしているうちに何かそれではまずいのかとも思い先生に問い返す。

「自転車でも」

「ええ、それは」

先生もそれにはこだわらないのだった。

「私も自転車は好きですし」

「あつ、そうなんですか」

「はい。意外ですか？」

まるで天女のような優しい笑みで言う先生だった。

「それは」

「いえ、それは」

だが小田切君はそれについて特に思うことなくこう答えるのだった。

「別に」

「おかしくないですか」

「いいじゃないですか。自転車は身体にいいですから」

「そうですね。私も健康に気をつけていますから」

「そうなんですか」

「これでも。何かと大変なんですよ」

その天女の笑みのまままた小田切君に話す。

「魔女の先生も」

「そうだったんですか」

話は面白い方向に進んできた。今度は今田先生の日常についてだ。

思えば謎の多い先生だが遂にそのヴェールを脱ぐ時が来たのかも知れない。

第四百四十九話 完

2008・11・19

第二百五十話

第二百五十話 就職の経緯

「実はですね」

「はい」

先生が話しはじめる。小田切君もその話をじっとして聞く。何時しか小田切君は先生のその整った奇麗な顔と向かい合っていた。

「私小田切さんより年上なんですよ」

「ああ、そうですね」

それを聞いても特に驚かない小田切君だった。

「それはわかります」

「あれ、驚かれないんですか？」

「何となくそういう感じしましたから」

その特に驚くことはない様子の顔でまた述べる小田切君だった。

「僕はですね」

「はい」

「二十三歳なんですよ」

「では大学を卒業されてすぐに」

「そうだったんですよ。大学を卒業しても仕事がなくて」

「それは確か前に御聞きしましたね」

「あれっ、そうですね」

その辺りは記憶に乏しいのだった。

「そういうばお話したような」

「それでたまたま博士の研究所の求人広告を御覧になられたんですよ」

「月給手取り四十万円でボーナスは年二回あって」

破格の待遇ではある。

「しかも交通費や食費まで出してくれるって聞いて。しかも資格経歴等一切問わずでしたし」

「いい条件ですね」

いいどころではないがそもそもそうした条件を出しても人が来ないのが博士の研究所である。国連から要注意テロリストと名指しされていて日本政府すら破壊活動防止法の適用を当然と考えており過去何度もマリアナ海溝の底や宇宙空間や南極に隔離しても平気な顔で出て来る人間のところに行く物好きもいない。しかもその趣味が生体実験や兵器開発といった碌でもないものなら余計にそうである来る方が凄い。

「それは」

「とりあえず言ったら博士が出て来て」

「はい」

「僕の顔見ただけで採用決定でした」

「それだけですか」

「はい、それだけです」

バイトの面接でもこうはいかない。

「何でも助手の応募して来たのは僕が最初だったそうですし」

「それは少し残念ですね」

先生も先生で条件だけ聞いて考えている。博士がどれだけとんでもない存在かということはあまりというか全く考慮していない。

「いい条件だと思いますし」

「それでまあ。就職ということになりました」

本当にそれだけで決まったのである。

「今に至ります」

「わかりました」

「ですが。僕が二十三歳というのは驚かれますか？」

「いえ、別に」

先生はそれはどうとも思っていなかった。

「ただ。年下の方だとわかっただけで」

「そうなんですか」

とりあえず小田切君の話に戻って彼の就職の際のことがわかった。

しかし先生のことはまだよくわかってはいなかった。

第一百五十話 完

2008・11・19

第百五十一話

第百五十一話 縁の話

「私もですね」

「どうかされたんですか？」

先生はふとした感じで声を出してきた。小田切君もそれに応えてその話を聞く。

「子供の時がありました」

「ええ、それはわかります」

頷くがわかるというよりは当然の話であった。

「誰にだってそういう時がありますよね」

「あの時はあの時で楽しかったのですよ」

「確か先生は」

先生のことです。一つ思い出したのである。

「この街でお生まれになったんですよね」

「そうです」

穏やかな笑みで小田切君に答えてきた。

「そして学校も全部こちらで」

「それで今もですか」

「ここで生計を営ませて頂いています」

「そうですよね。ずっとこの街ですよね」

「この街が好きです」

今度は気品のある笑みになる。どの笑みにしろいい笑顔なのがこの先生の特徴である。色も白くそれが笑顔をさらに引き立てている。ずっと。いたい位です

「確かに。いい街ですよ」

「小田切さんは最初からこの街におられたのではないのですか？」

「いえ、実はですね」

そのことについて先生に話すのだった。

「実は子供の頃から高校まではずっと名古屋だったんですよ」
「名古屋の方だったんですか」
「ええ。意外ですか？」
「名古屋訛りがありませんので」
「先生が言うのはそこであつた。」
「ですから。少なくとも名古屋とは」
「そうですね。やっぱりそうは見えませんか」
「はい」
静かな声で小田切君に答えてきた。
「それは。少し」
「隠してはいないのでよ」
このことはあえてという感じで言うのだった。
「別に。それはですね」
「そうだったんですか」
「大学がまあ。こっちでして」
「名古屋の方ではなく」
「名古屋の大学落ちたんですよ」
少し苦笑いを見せてきた。
「名古屋大学は」
「それですか」
「まあそれでもここに来たんですけれど。縁ですね」
不意に縁という言葉を出すのだった。
「これも。今こうしているのも」
「縁ですか」
「そう思います」
言いながら先生の顔をじっと見ている。どうもまんざらな感じではなくなってきたようにあつた。

2
0
0
8
·
1
1
·
2
5

第一百五十二話

第一百五十二話 味覚については

小田切君の生まれもわかった。先生はそのうえであることを彼に尋ねてきた。

「名古屋ですよね」

「はい、そうです」

「名古屋でしたら」

前置きの後で小田切君に対して問うのである。

「あれですね。赤味噌ですよね」

「ええ、そうです」

小田切君も先生の言葉に頷く。まるでわかっているように応えるのだった。

「もう何でも味噌です」

「そうですよね。名古屋にも何度も行ったことがありますけれど」

「名古屋に行かれたことがあるんですか」

「お仕事で」

こつ小田切君に答える。

「それで何度も」

「そうでしたか。お仕事で」

「いつもきし麺を食べています」

今度話に出たのはこれだった。

「いろいろも海老も」

「ええ、それなんですよ」

小田切君はきし麺に続いてそういったものも話に出すのだった。話にいい具合に乗っていた。ただし小田切君自身はそれに気付いてはいない。

「名古屋はね。後は」

「味噌カツですよね」

「どうですか？そういうのは」

「美味しいです」

満面の笑みで答える先生だった。

「どれも。名古屋に行く楽しみですね」

「一人だと結構それなんですよ」

小田切君は自分自身についても述べた。

「きし麺買って。カツには名古屋からネットで買った味噌で」

「あとういろうもですよね」

「はい、それです」

饒舌に語る小田切君だった。

「海老もあって。やっぱりそれですよね」

「それでは天麩羅うどんも」

「味噌煮込みうどんも好きですよ。やっぱりいいですよね」

「そうですね。どれも」

「博士はあまり和食食べないんで」

博士についても話す。

「それでアパートだとそうなんですよ。名古屋尽くしです」

「名古屋。お好きなんですね」

「故郷ですし」

語るその目が暖かい。

「好きですよ。やっぱり」

「そうですね。では機会があればやっぱり」

「はい。帰っています」

笑顔で先生に答える。

「いつも。時間があれば」

「そうですね」

故郷をこよなく愛する小田切君だった。彼にもそうだったものはあり愛しているのであった。

第五百一十一話

完

2
0
8
・
1
1
・
2
5

第五百五十三話

第五百五十三話 先生の好物

とりあえず小田切君の話は一段落となった。そして次は。

「それではですね」

「ええ。それでは？」

「私ですね」

自分からこう言う先生であった。

「私のお話ですね」

「ですが先生はずっとこちらにおられるんですよね」

「はい」

まずは小田切君のその問いに答える先生であった。

「そうですね。生まれた時からここで暮らしています」

「では別に何もないので？」

話をしながらそう思う小田切君だった。

「別に。これといって」

「好きな食べ物ですが」

「あつ、そちらですか」

話はそちらの方であった。話を聞いて合点した顔になり頷く小田切君だった。

「そちらの方のことですか」

「はい、そうです」

先生もいつもの微笑で小田切君に答えた。

「そのことですね」

「甘いものは好きですよ」

「その通りです。甘いものでしたら何でも」

「何でもですか」

それを聞いてまずは納得する小田切君だった。

「この羊羹もそうですね」

「羊羹ですか」
「あとカステラも」
「それもであった。」
「カステラも好きなんですよ」
「じゃあその場合は紅茶ですね」
「そうですね。カステラには紅茶です」
「答えると共にまた微笑む先生であった。」
「その組み合わせが好きです」
「ですよ。僕はコーヒーもどちらもいけますが」
「どちらですか」
「けれどカステラは好きですよ」
「これは小田切君も同じであった。」
「それも」
「あとはアイスクリームも」
「むっ!？」
「先生の話を聞くうちに。小田切君はあることに気付いたのだった。」
「それと餡パンもです」
「餡パンもですか」
「それが何か？」
「いえ。それではですね」
「ええ」
「もつと御聞きしたいんですが」
「こつ問う小田切君だった。」
「ちよつと。それは」
「それは？」
「はい。それですね」
「かなり気になって先生にさらに尋ねる小田切君だった。どうやら何か気付いたようであった。」

第五百五十二話

完

2008・11・29

第一百五十四話

第一百五十四話 あの方と同じ好みだ

った

小田切君はさらに先生に尋ねるのだった。今度尋ねたことは。

「お酒ですけれど」

「お酒ですか」

「お好きですか？」

お酒のことを尋ねたのである。

「そちらもいけますか？」

「ええ、お酒も好きです」

そして今度も微笑んで頷く先生であった。

「日本酒が」

「やっぱりそうですか」

「やっぱりいいいますと!？」

「いえ、それですけれどね」

ここで真顔になって先生に話す小田切君だった。

「実は先生の味の好みですけれど」

「はい。それが何か」

「ある方と同じなのですよ」

こう述べる小田切君だった。

「実はですね。そうなんですよ」

「ある方とは？」

「明治帝です」

近代日本の象徴であられた方である。言わずと知れた日本中興の祖でもある。その生活は実に質素なことであったことでも有名だ。

「明治帝によく似ているのですが」

「そうだったのですか」

「はい、実は」

先生にあらためて述べる小田切君だった。

「そうなのです。帝は甘いものが好きでして」

「意外ですね」

そのことを聞き目を少し丸くさせる先生だった。

「あの方が甘党だったなんて」

「味の好みと外見は別ですから」

これはまさにその通りだった。繊細な美人が酒豪だったり張飛を
思わせる外見の豪傑が無類の甘党だったりする。その辺りは本当に
わからないものだ。

「それでお酒も好きでして」

「お酒もですか」

「日本酒を。後には白ワインも」

「白ワインも好きです」

それもであった。

「赤も好きですけど」

「それではそちらもですね」

「そうです」

小田切君の言葉にまた頷くのだった。

「ワインも」

「では完全に同じですね」

「そうですね」

「こういうこともありますか」

次にこう言った小田切君だった。

「好みは。やはり」

「わからないものですね」

「ですね」

あらためて先生の言葉に頷くのだった。こればかりは本当に誰に
もわからないことであった。

第一百五十四話

完

2008・11・29

第一百五十五話

第一百五十五話　またお一人

そんなとりとめのない話を二人でしているとここで。もう一人店に来たのであつた。

「あつ、香ちゃん」

「小百合ちゃん」

今田先生はすぐにその人に笑顔で言葉を返した。小田切君がその人を見ると。彼はすぐにその目を大きく見開くことになつたのであつた。

「ええっ!?!」

「ええつて」

「どうされたんですか?」

その人にまで言われる。見ればその人は何と。

今田先生そつくりだった。というよりはクローンであつた。殆どそつとしか見えないのであつた。

「先生がお二人!?!」

「はい、そうです」

「そうですつて」

今のもう一人の先生の言葉が小田切君をさらに混乱させたのだつた。

「それじゃあ。ドッペルゲンガー!?!」

「違いますよ」

今田先生が笑顔でそれは否定する。

「私は一人ですよ」

「けれど今」

声を慌てさせながら言う小田切君だった。

「二人つて。確かに」

「二人ですよ」

もう一人の今田先生が言う。見れば最初からいる今田先生は金色の服で新しく来た今田先生が銀色だ。それで何とか見分けがついてはいた。

「先生は二人です」

「先生は!？」

ここで言葉に気付いた小田切君だった。

「先生は二人ですよね」

「はい」

「そうですよ」

二人並んで笑顔で答えてくる。やはり服の色以外は完全なクロインである。

「けれど今田香先生は」

「私です」

金色の服の今田先生が答えてきた。

「私です」

「それじゃあそちらの方は」

「今田小百合と申します」

銀色の今田先生が名乗ってきた。

「宜しく御願いたします」

「従姉妹なんです」40

今田香先生の説明である。

「実は」

「成程」

ここまで話を聞いて完全に納得した小田切君だった。

「だからなんですか。そっくりですね」

「はい、よく言われます」

「子供の頃からです」

「そうですよね」

そのことに頷く小田切君だった。彼が見ても全く同じに見えるからだ。最早そこには何の説明も不要であった。何しろ全く同じ容姿

であるのだから。

第一百五十五話

完

2008・12・9

第一百五十六話

第一百五十六話 場所を変えて

小田切君と先生達は三人になっても話を続けた。そしてここで今田小百合先生がふと言つのであつた。

「それですね」

「はい」

小田切君が小百合先生の言葉に応えた。

「もうここのお菓子は堪能されましたよね」

「ええ、まあ」

小百合先生の言葉に頷く小田切君だつた。

「美味しかったです」

「お茶は」

「それもよかつたです」

お茶についても答えた。

「やはり。堪能させてもらいました」

「わかりました。それではですね」

「何かありますか？」

「場所を。変えませんか」

小百合先生はこう提案してきたのだつた。

「場所を。どうでしょうか」

「場所をですか」

「お時間はおありですか？」

「はい、今は」

博士がまた何やら怪しげな研究だの開発だのに入つたからである。そうした場合は常に後で第惨事になるのだが少なくとも今は暇なのであつた。小田切君は。

「まだ結構あります」

「そうですね。それではですね」

「何処に行かれるのですか？」

「喫茶店です」

これが小百合先生の返事であった。

「いい喫茶店を知っています」

「喫茶店ですが」

「和菓子の次は洋菓子を」

流れとしては悪くなかった。お菓子のほしごというのも中々いい趣味である。大人の女性でこれを楽しむ人は結構多かったりするのである。

「如何でしょうか」

「いいですね」

そしてそれは小田切君も同じであった。

「それじゃあそれで」

「洋菓子もお好きなんですか」

「はい、実は」

甘いものも結構以上に好きなのである。

「そちらも。博士もあれで結構お菓子が好きですし」

「そうなのですか」

「博士は洋菓子派です」

スペイン料理をこよなく愛しているからそれも当然であった。なおスペインの菓子の特徴としてかなり甘い。甘いものは徹底的に甘くするのがスペイン人であるのだ。

「それもありません」

「それでは宜しいですね」

「ええ。御願います」

「わかりました」

「それでは」

香先生も応える。こうして小田切君は今度は洋菓子を食べに行くのであった。何と両手に花、ダブルデートの状態という何とも羨ましい状況でだ。

第一百五十六話

完

2
0
8
・
1
2
・
9

第一百五十七話

第一百五十七話　ダブルデートの時に

小田切君のダブルデートの時に博士は。もう鉄人の強化を終えてしまっていた。

「これでよしじゃ」

「強化までどれだけかかったっけ」

「一時間だね」

ライゾウにタロが答える。

「それだけ」

「相変わらず速いもんだよ」

「わしは天才じゃ」

返答になっではないがこの博士に限って返答になるやり取りだった。

「この程度はな、当然のことじゃ」

「一時間でロボットを強化って」

「普通はないよ、博士」

ライゾウもタロも今の博士の自信満々の返答に呆れた声で述べるのだった。

「そんなにさ、迅速に」

「できるものじゃないし」

「わしの知能指数は二十万じゃ」

最早人間の数値ではない。

「だったらこの程度は朝飯前じゃろっが」

「そうなのかね」

「さあ」

二匹は博士の言葉に顔を見合わせて首を傾げ合っのだった。

「とにかくじゃ。これで自衛隊にじゃな」

「どっするっていつの?」

「喝を入れる」

タロの問いに答えた。

「思う存分な」

「喝ねえ」

「自衛隊はたるんでおる」

いきなり愛国めいた言葉になっていた。なおこの博士の国籍は日本であるが古墳時代よりこのかた日本にとっていいことをした記録はない。そもそも何時からいるかも不明である。

「日本軍はその点凄かったの」

「そんなになのかい？」

「うむ。気迫が違った」

こうライゾウに答える。

「しかも全くな」

「そういえば博士日本軍と戦ったことあったんだっけ」

「明治維新から敗戦までな」

随分と長い間戦っている。

「乃木大将と帝都で大立ち回りをしたこともある」

「ふうん」

「山縣有朋ののう」

その陸軍の法皇と言われた人物である。なお生前はおるか現代に至るまでその不人気さは特筆すべきものがある人物でもある。

「槍も凄いものじゃった」

「そういえばあの人槍の免許皆伝だったよ」

「そうだったのかよ」

ライゾウはタロの説明を聞いて声をあげた。

「そんな相手ともやり合っていたのか」

「古きよき時代じゃった」

こう言って昔を懐かしみだした。今ここで博士の恐るべき過去が他ならぬ博士自身によって語られるのであった。その過去の一部が。

第五百五十七話

完

2
0
8
・
1
2
・
1
6

第百五十八話

第百五十八話 戦前では

「日本軍は強かった」

博士は二匹に対して語り続けていた。

「日本刀で百人斬るしろう」

「それって普通に人間じゃないよな」

「刀ってそんなに斬れないし」

二匹はその常識を踏まえて博士の話に突っ込みを入れる。

「そもそも何でそんなに斬れる刀があつたんだ？」

「わしが開発した」

こうライゾウに答える博士だった。腕を組み誇らしげに。

「それで日本軍に渡したのじゃよ」

「何でまたそんなことを」

「知れたこと。面白いからじゃ」

面白ければそれだけで何でもやるのが博士である。

「そうしたら戦場で大活躍じゃった」

「それでも戦場で一度に百人斬りなんて」

「やっぱり人間じゃないよな」

「そこじゃ」

博士はその百人斬りの部分を指摘してきた。

「そこなのじゃよ」

「そのだつて!？」

「じゃあ本当に日本軍は百人斬りできたの」

「柔道で百万人殺しておるのじゃぞ」

またしても途方もない数字が出て来た。

「朝鮮半島でな」

「日本軍って全員サイボーグなのかよ」

「もうそこまでいったら何が何だか」

「だからこそわしの好敵手だったのじゃよ」

また昔を懐かしむ声になっっている博士だった。

「その異常なまでの戦闘力がのう」

「殆どサイ 人だな」

「全くだよ」

ライゾウにしるタロにしる博士が戦ったというそのあまりにも強い日本軍の話聞いて咄嗟射にその戦闘民族のことを思い出したのであった。

「空手で二四〇万人、合気道で一〇〇万人」

途方もない数字が続く。

「そしてその剣道では四〇〇万人じゃ。日本軍が半島で殺したのはな」

「じゃあさ、聞くけれど」

「あの戦争全体で日本軍はどれだけの人を殺したわけ？」

「五億はいつておるのう」

「五億つて……」

「どれだけ」

「このわしと全力で戦いながらじゃ」

なおこの博士は当然昔から地球規模の危険人物とされてきている。

「それでそれだけ倒したのじゃよ」

「本当に化け物だったのかよ、日本軍」

「凄いつていうか何ていうか」

「銀河の遙か彼方でわしがアポカリユプシスを行おうとしておつたら来たのじゃ」

「アポカリユプシスつて」

「何でそんなことを」

「まあ暇じゃったからのう」

それだけのことをした根拠もこれであった。

「じゃからな」

こんな調子で博士の昔話が続く。どんどんとんでもないことにな

つてきていた。

第一百五十八話

完

2
0
0
8
・
1
2
・
1
6

第一百五十九話

第一百五十九話 アポカリユプシス

博士はタロとライゾウに対してその日本軍の話が続けていた。二匹が聞いてもその戦闘力というか非常識な有様は人間のものではなかった。

「アポカリユプシスを行おうとしていた」

「それもよくわからないんだけど」

ライゾウは博士に対して問うた。

「何でそんな滅茶苦茶なことをしようとしたんだよ」

「アポカリユプシスってあれだよ」

タロも言う。

「確か世界どころか全ての並行世界を無に返すっていう」

「左様」

博士は二匹の問いに腕を組み平然と答える。

「この知能指数二十万のわしでなければできぬことじゃ」

「その知能指数も出鱈目だけれど」

「アポカリユプシスはもつと出鱈目じゃない」

「面白いからのう」

いつもの理由であった。

「だからやってみようと思ったのじゃ」

「世界を無に返すことが面白いつて」

「何か違うような」

「面白くないことはせん」

博士は二匹の話をはば聞いてはいなかった。話を聞くような人間でもない。

「だからやってみただけじゃ」

「それだけかよ」

「それだけなんだ」

「それだけじゃ」

また二匹の問いに答えた。

「まあ銀河の中央に行つてな」

「銀河の中央で？」

「そのアポカリユプシスを」

「うむ。今それを行おうと宇宙怪獣を百億程度周りに置いておると
そもそもその宇宙怪獣だの百億だのが非常識な話ではある。だが
この博士にとって非常識というものは当たり前なので今更なことでは
ある。」

「日本軍が来た。わしの前にな」

「日本軍つて宇宙まで出られたんだ」

「しかも銀河の中心まで行けるなんて」

二匹にとっては今更だがそれでも驚くべきことではあった。

「何だかもつ」

「どんどん話が滅茶苦茶に」

「わしの生涯でも屈指の戦いがはじまった」

博士の滅茶苦茶な話はまだ続く。

「銀河の存亡をかけてな」

「日本軍を応援したいよな」

「全くだよ」

二匹はこう心から思わずにいられなかった。

「今おいら達がここにいる理由つて」

「日本軍のおかげだったんだ」

「では話そうぞ」

博士の非常識な話はいよいよクライマックスに向かっていた。

「わしのその生涯の中でも屈指の戦いをな」

「日本軍があらゆる世界を救った話だよな」

「そうだよな」

最早完全に悪役になっている博士であった。そして今博士と日本軍の最終決戦が語られるのであった。

第百五十九話

完

2
0
8
・
1
2
・
2
7

第一百六十話

第一百六十話 銀河の中心で

「それでじゃ」

「ああ、その銀河の中心での戦いだよね」

「日本軍との」

「うむ」

相変わらず腕を組んだまま話す博士だった。白いタキシードにマントと言う異様そのものの格好がここではまた実に絵になっていた。

「それでじゃ」

「で、どういう戦いだったの？」

「まあ凄かったのはわかるけれど」

「日本軍は宇宙空間でも生身で戦えた」

いきなりこれである。ほぼ何処かの戦闘民族だ。

「そして宇宙怪獣を素手で倒し」

「素手で……」

「しかも宇宙空間で」

戦闘においても非常識な日本軍であった。

「そして蹴りを飛ばせばそれで無数の宇宙怪獣を倒していったのじゃ」

「って何処の巨大ロボットなんだよ」

「そんなに強かったんだ、日本軍って」

「百億の宇宙怪獣は瞬く間にその数を減らしていった」

博士はその時のことを思い出しつつ語り続ける。

「そしてわしはさらに百億出した」

「また百億なんだ」

「しかも地球の人口より遥かに多いし」

「その百億も瞬く間にやられてしまった」

合計二百億が瞬く間にである。

「本当にあつという間にのう」

「で、博士はどうしたんだよ」

「その二百億の宇宙怪物が倒されてから」

「どうやらそれからが本番であつたらしい。一匹は話を聞いて本能的に悟った。」

「うむ。日本軍はわしを包囲した」

「包囲!？」

「ということは」

「二匹はここであることに気付いた。それは。」

「博士も宇宙空間にいたんだ」

「だとすると」

「左様」

やはり平然と答える博士であつた。

「実はわしは宇宙空間でも生きていけるのじゃよ」

「何処まで人間離れしているんだか」

「そもそも何歳なんだろ、この人つて」

「そしてわしに一斉に襲い掛かり」

「いよいよ本番であつた。」

「わしはこの一億ボルトの電気鞭を取り出し」

実際にその乗馬鞭に似た鞭を取り出してきた。

「これを半径百キロまで伸ばし振り回しつつ彼等と戦つたのよ」

「その鞭つてそんなに伸びたんだ」

「何かもうスーパー寶貝みたいだね」

「足掛け数年。そう、昭和十六年から二十年まで戦いお互い一休みしたところで」

「終戦だつたんだね」

「それで」

「空しい終わりじゃつた」

要するに博士との戦いに超人軍団を送り込みその結果地球での戦争に敗れた日本軍なのだった。これがよかつたのか悪かつたのかは

誰にもわからないことであった。

第一百六十話 完

2008・12・27

第六十一話

第六十一話 マントの秘密

博士と日本軍の非常識を通り越して異次元とも言うべき戦いの話は終わった。だが博士の話はこれで終わりではないのであった。

「日本軍は強かった」

「それはわかったよ」

「けれどそれだけ？」

ライゾウもタロも博士に対してさらに尋ねるのだった。

「まだ何かありそうだけれど」

「とりあえずどうやって銀河の中央から帰ったの？」

「そんなことは簡単じゃ」

そもそもどうやって行ったのかすら謎だがそれについても答えるのだった。

「このマントじゃがな」

「マント!?!」

「そのマント!?!」

「うむ」

ここでいつも羽織っているそのマントを持って話す博士であった。

「これを使って瞬間移動が出来るのじゃよ」

「宇宙空間にも？」

「銀河の中央まで」

「わしは真空中でも呼吸できる」

また一つわかった博士の特殊能力である。とりあえず人間の能力かどうかはここでは問題にはなっていない。

「それでじゃ。銀河の中央までな」

「うん」

「それで？」

「一瞬で行けるのじゃよ」

これまたあっさりと答えたのであった。

「これを上に被るだけだな」

「そのマントそんな能力があったんだ」

「ただの飾りだと思ってたのに」

「飾り？馬鹿を言うでない」

二匹の今の言葉にも普通に返す。

「わしの持つておるものは全てわしの発明品じゃ」

「そういえばそうだったっけ」

「あの鞭もそうだしね」

「だからじゃ。このマントにしるじゃ」

またマントの話をする。

「普通にのう。瞬間移動にも使えるのじゃよ」

「もう何が何だか」

「話が余計滅茶苦茶になつていつてるような」

「それで地球まで帰ったのじゃよ」

呆れる二人をよそに博士の話は続く。

「帰ったら玉音放送じゃった」

つまり昭和二十年八月十五日だったのである。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍びのう」

「つていうか博士がアポカリユプシスしようとしなかったら日本軍

負けてなかったじゃない」

「そういえばそうだね」

タロはライゾウの言葉であらためてそのことに気付いた。

「何かそれ考えたら博士のせいとその玉音放送だし」

「今更そう言うこと言われてもねえ」

「まあちよつと前の話じゃ」

博士の時間感覚ではそうらしい。しかも博士の狂気の行いは戦後間もなくも続いたのである。

第六十一話 完

2009・1・6

第六十二話

第六十二話 戦後間も無くは

そして戦争が終わってから。博士は何をしていたかというと。

「まず食べ物がなかった」

「そうらしいね」

「その時のことは知らないけれど」

「二匹の生まれる遙か前の話である。」

「食べるものじゃが」

「ここでまたとんでもないことをしたことは二匹にもわかった。」

「で、どうしたんだよ」

「今度は」

「作った」

「作ったんだ」

「ふうん」

「空気からのう」

いきなりオーパーツ並の技術を展開したのである。

「それでパエリアにワインを楽しんでのう」

「第二次世界大戦直後にパエリア!？」

「よくそんなのあったね」

「スペインには建国当時、いやハンニバルが子供の頃にカルタゴノヴァにおった頃からの馴染みの場所じゃ。よくローマ帝国のレギオンを怪獣に貪り喰わせてやったわ」

「またこんなことを言う。やはり何千年も生きているようである。」

「他にもせいじょそこいらで暴れておった不貞の輩をのう」

「博士の暴虐は終戦直後においても健在であった。」

「殺人口ボットの餌食にしてやったりしてやったわ」

「殺人口ボットって？」

「何かやたら物騒な名前のロボットだけれど」

そもそも殺人という言葉がついていること自体が異常である。普通は間違ってもこんな名前はつけない。その辺りは流石に博士だった。

「それってどんなんだよ」

「どうやって人を殺すの？」

「まずはいきなり捕まえ」

「まずはこれであつた。」

「おもむろに鋸で切り刻んでのう」

「鋸で」

「切り刻むって」

「それもゆっくりとやるのじゃよ」

やはりこんな代物であつた。

「他にも毒薬で苦しませ抜いて殺したり穴だらけにしてのう」

「惨殺するんだな、やっぱり」

「そんなことだろうと思つたけれど」

ライゾウにしるタロにしる予想していたことなのでこれには驚かなかった。ただやはり終戦直後にそうしたロボットを作るのは凄かつた。

「しかし。それにしても」

「で、何人殺したの？」

「さて」

殺した人間の数も覚えていなかった。

「どれだけじゃつたかのう。まあ一万人はおつたかのう」

「一万人って」

「それだけ？」

「食料危機が叫ばれた時に不要な奴をそれだけ始末した」

平然とこんなことを言つてそのことは終わらせてしまった。やはりこの博士にモラルや常識といったものは全く無縁のものであつた。悲しいことに。

第一百六十二話

完

2
0
9
・
1
・
6

第六十三話

第六十三話 考えてみれば今でも

終戦直後の博士の行いは非道の極みと言っているいいものであった。

しかし少し考えてみればそれは終戦直後だけではないのがわかるのだった。

「よく考えたらさ」

「だよなあ、旦那」

ライゾウはタロの言葉に対して頷いていた。

「今だって。そうなんだよな」

「そうだよな。今だってね」

「そうなのであった。実は。」

「やってることっていえば」

「生体実験にとんでもない兵器の開発」

「それがこの博士の趣味である。」

「そういうのばかりだし」

「全然変わってないよな」

結局はそうなのであった。

「昨日だってあれだろ？」

「暴走族相手にね」

博士は暴走族が嫌いである。何故嫌いかというところ皆の迷惑になる存在だからではない。博士はそういった理由で動く人間では決しない。

「蛇の大群を連れて行ってね」

「一万匹だったっけ」

「ううん、二万匹」

「また随分な数になったんだな」

ライゾウは二万と聞いて呆れてしまった。

「二万の蛇に襲わせたのかよ」

「しかもその蛇は全部毒蛇だったんだ」
「やっぱりな」

これはすぐに予想がついた。あの博士が毒を使わない筈がないからだ。

「じゃあその毒蛇の群れに包み込まれて」

「全員死んだよ」

結果は最早言うまでもないのだがタロはあえて言った。

「あちこち噛まれてそのうえ穴という穴から身体の中に侵入されてね」

「うわ、最悪な死に方」

誰もが聞いただけで寒気がする末路である。

「そりゃまたえぐいな」

「何でも噛まれたらそれこそ何時間も苦しみ抜く猛毒の毒蛇なんだって」

「そんな毒蛇いたっけ」

とりあえずライゾウは毒蛇については詳しくなかった。知っているといえば精々キングゴブラや日本にいる毒蛇位である。まあ普通程度の知識だ。

「何時間もって」

「台湾の方からヒヤツポダ輸入したんだって」

「ヒヤツポダ!？」

「そう。噛まれたら百歩で死ぬ猛毒の蛇」

「実在の蛇である。」

「それを改良したんだって」

「改良ねえ」

そう言っただけなのかどうか迷う話であった。

「とにかくその毒蛇だね。暴走族を百人ばかりね」

「殺戮したと」

「そう。いつも通り」

やはり博士は博士であった。そしてこの蛇達でまた恐ろしい行動

を取るのであった。

第百六十三話

完

2009・2・18

第六十四話

第六十四話 蛇の巣

「さてと。実験は成功じゃな」

「あれ実験だったんですか」

意気揚々とあの全自動車椅子に乗って街を歩く博士に小田切君が尋ねていた。

「百人も殺しておいて」

「些細な余興じゃよ」

百人殺しても博士は全く平気なのであった。

「あの程度はな」

「あの程度はって」

「これからもつと凄いことをするつもりじゃ」

そして平然としてまた述べるのだった。

「これからのう」

「これからって何するんですか？」

「当然蛇を使うのじゃ」

これはもう決めてあることであつた。

「あの二万のな」

「それで一体何を」

「これでちとあのならず者国家の出先機関に行く」

言わずと知れたあのテロ支援組織である。自分達はそうではないと力説しているが説得力は全くない。何しろ拉致に関わっていたのだから。

「それでじゃ」

「で、暴走族の時と同じですか」

「そのうえでそこを蛇の巣にしてやるわ」

博士はそこまで考えていたのだった。

「二万のこの蛇達のな」

「街のど真ん中に蛇の巣をですか？」

「安心せい。ちゃんと毒はキングコブラの三十倍にしておる」

「三十倍って」

なおキングコブラに噛まれて助かった事例は一つしかない。

「威力は三十倍で量は三倍じゃ」

「そんなのに噛まれたら絶対に助かりませんね」

「しかも激痛に襲われる出血毒じゃ」

蛇の毒の種類の一つである。神経毒と出血毒があり神経毒はあまり痛まず身体の神経を破壊していく。出血毒は激しい痛みを与えるうえに身体の筋肉等を破壊していくのである。

「凄まじい苦しみじゃぞ」

「うわ……」

小田切君も話を聞いて思わず絶句してしまった。

「そんなに凄まじい毒なんですか」

「前からあの組織は気に入らんかった」

「どうしてですか？」

「何となくじゃ」

これが理由であった。

「それでじゃ。蛇の毒の餌食にしてやるのじゃ」

「それが理由ですか」

「わしが気に入るかどうかはかなり重要な理由じゃぞ」

博士はそういったことだけで狂気の実験を行う人物なのは小田切君もわかっているがそれでも唾然としなないわけにはいかない話であった。

「違うか？」

「じゃあそういうことにしておいて下さい」

「うむ、そうしておくぞ」

こうして完全に主観だけで博士は大量虐殺に向かうのであった。

車椅子は周りの不穏なものを見る目なぞ全く無視して目的地に向か

うのであった。傍若無人に。

第一百六十四話 完

2009・2・18

第六十五話

第六十五話 毒蛇地獄

博士は車椅子に乗ってその組織のビルに向かう。途中警官が呼び止めるが当然ながらそんなものは全く気にしてはいない。

「何かパトカーや機動隊が後ろから来ていますけれど」

「ギャラリーに丁度よいのう」

今回は彼等はそうだと思っているのだった。

「いいことじゃ」

「いいことって」

「わしの新たななる伝説のページの観客は多い方がいい」

「伝説ですか」

「毒蛇地獄じゃ」

博士は言う。

「それがこの伝説の名前じゃよ」

「毒蛇地獄ですか」

小田切君はここであることに気付いた。

「そつえばはですね」

「何じゃ？」

「毒蛇はいいんですけれど」

それを使うのはわかった。ところがであった。

「けれどその毒蛇は一体何処にいるんですか？」

そのことを尋ねるのだった。見ればそんなものは何処にも見えはしない。それこそ二万匹もいるというのにだ。博士の言うにはであるが。

「二万の毒蛇は」

「すぐにわかる」

博士はこう答えるだけだった。自動で動く車椅子に乗って前を見

たままの返答だった。

「すぐにのう」

「すぐにつて」

「さて、見えてきたな」

今度は小田切君には答えなかった。

「組織のビルがのう」

「ですね」

小田切君にもそのビルは見えた。やたらと大きな、そして外観は立派なビルである。だがどういいうわけか妙な禍々しさを漂わせてもいる。

「あそこですね」

「さて、それではじゃ」

博士はなおも前に進みながら述べる。

「その伝説を創るとするか」

「蛇がいないですけれど」

「では見せよう」

博士はここでニヤリと笑ってみせてきたのだった。

「その蛇をな」

「それで蛇は何処に」

「見るのじゃ」

博士は不意に車椅子から立ち上がった。

「わしのあらたな発明も」

「発明もあるんですか」

「ただ毒蛇だけを研究していたわけではない」

それだけに留まらないのがこの博士である。

「そう、これじゃー！」

「なっ、それは！」

小田切君も驚愕した。何と博士はここで思いも寄らぬ行動に出たのであった。その行動とは何か。

第六十五話

完

2009・2・19

第六十六話

第六十六話 マントを広げると

立ち上がった博士はそのいつも羽織っている黒いマントをおもむろにその手に握った。そしてそのマントを高々と放り投げたのであった。

「マントを!？」

「い出よ!」

博士はここで叫んだ。

「蛇達よ。己の巣を作るのじゃ!」

こつ叫ぶとそのマントの形が変わった。巨大化してそのうえ無数に散った。何とその散ったそれぞれの破片は漆黒の蛇であったのだ。

「マントが蛇に」

「物質変換装置を使ったのじゃよ」

博士は誇らしげに小田切君に告げた。

「それが今回わしが作った発明品じゃよ」

「それで蛇達をマントに変えたんですか」

「うむ」

博士は小田切君の問いに頷いた。

「その通りじゃ」

「まさか。こんなことが」

「わしは宇宙一の頭脳の持ち主じゃ」

豪語さえる。

「知能指数二十万のな」

「何か何処かの悪質な宇宙人みたいですね」

少なくとも人間の知能指数ではない。人間の脳を仮に百パーセント使えたとしてもそこまでの数値は到底出せるものではない。どう考えても。

「そこまでいくと」

「そうした連中とも渡り合ってきた」

「そうですね」

博士の行動は宇宙規模なのである。

「そして常に勝利を収めてきた。頭脳では誰にもひけは取らんよ」

それが有り難いかというと違う。優秀な頭脳は時として大きな災厄の原因ともなる。この博士の場合は言うまでもなく大きな災厄である。しかも途方もない。

「さて。それでじゃ」

「もう蛇は全部ビルの方に入りましたよ」

「蛇はいい」

博士は今度はこう呟いた。

「何処にでも忍び込め一噛みで屠ることができる」

「だから蛇なんですか」

「蛇にした理由はそれだけではない」

博士はそれだけで選ぶ程甘くはない。これまた残念なことに。

「無数の蛇に襲われ穴という穴に入られる」

「絶対に迎えたくはない最期ですね」

「それを迎えさせてやる」

博士は実に楽しみに笑った。

「よいことじゃ」

「それですか」

「それ、聞こえてくるじゃろ」

声まで上機嫌になっていた。

「ビルから阿鼻叫喚の断末魔の音が」

「はい、とてもよく」

最早ビルは地獄絵図だった。実際に断末魔の悲鳴が木霊する。ただしその悲鳴はその殆どが日本のものではなく他の国のものであった。

「聞こえます」

「これでわしの伝説がまた一ページ」
博士はまた言うのだった。今度は毒蛇であった。

第百六十六話 完

2009・2・19

第六十七話

第六十七話 占拠させて

組織のビルはあえなく全員死んでしまった。後に残っているのは屍だけである。

「さて、皆死んだようじゃな」

「見事に大量虐殺なんですから」

「気にすることはない」

小田切君の突っ込みに平然と返すのもいつものことだ。

「さて、それでじゃ」

「次は何をされるんですか？」

「食事じゃ」

何処からかテーブルと椅子を出して来た。

「もうお昼じゃからのう」

「食事って」

「さて、今日はマカロニと牡蠣のグラタンじゃな」

小田切君の話は今度は聞いていないのだった。

「ワインは赤じゃな。イタリアのランブルスコがいいかのう」

「ワインはいいですけど」

「あとフェットチーネじゃな」

やはり話を聞いてはいない。

「イカ墨で決めるかのう。あとサラダと肉は鳩じゃな」

「こんなところで食事ですか？」

「外で食べるのもいいものじゃぞ」

やっと小田切君の話を聞いた。

「わしは好きじゃがな」

「博士が外で食べるのが好きなのは知ってますよ」

以前からそうして食べていたりするからだ。青空の下で気持ちよ

く食べるのが博士のお気に入りなのである。この辺りは趣味である。

「それでもですね」

「小田切君の分もあるぞ」

「そうなんですか」

「鳩はオリーブ煮じゃな」

メインディッシュについてももう決めていた。

「それと魚は。鰯を焼いてのう」

「鰯ですか」

「パンは柔らかい食パンでじゃ」

完全に洋食であった。

「デザートはすぐりのパイじゃ。これで全部まとまったな」

「はあ」

「では早速」

今度はテーブルかけを出してそれをテーブルに置くとそれだけで料理が出て来た。当然ながらワインも一緒についている。

「食べるとするか」

「そのテーブルかけも発明品なんですね」 40

「うむ」

小田切君の問いにあっさりと答える。

「その通りじゃ。ネコ型ロボットの道具からヒントを得たのじゃよ」

「あのロボットからですか」

「あのロボットの持っているものはどれも実に興味深い」

席についた小田切君と向かい合い合いグラタンを食べながら述べる。

「どれもこれもな。わしの手にかかれば」

「どうなるんですか？」

「この世を大混乱に陥れる最高の兵器となる。また何か開発してみるとしよう」

またしても碌でもないことを考えていた。博士は惨い死体の山を前にして悠然と食事に入るのであった。

第六十七話

完

2009.2.20

第六十八話

第六十八話

まだ生きている者がいても

「うう……」

「助けてくれ……」

組織のビルから声がしてきた。

「蛇が、蛇が……」

「まだ生きている奴もいる。だから」

「ほう、生存者がおったか」

博士はビルから人が出て来たのを見て声をあげた。やはり昼食を食べている。ランブルスコワインを飲みつつグラタンやフェットチーネを楽しんでいる。

「運がいいのう」

「それでどうするんですか？」

「決まっておる」

また小田切君に言葉を返す。

「わしの蛇達から逃れることはできぬ」

「まずはこう言うのだった。」

「一噛みで死ぬ。どの様な生き物でもな」

「じゃああの人達も」

「うむ、死んでおる」

どのみち逃れられないなどと生易しいことは言わないのであった。

「既なのう」

「そうですね。じゃあ」

「見るのじゃ、小田切君」

博士はここで小田切君にその組織の人間を見るように告げた。

「ならず者国家の僕共の末路をのう」

「末路って」

言っている側からそのやつと逃げて来た連中の顔や身体が膨らんできた。そうして。

「あろおっ!!」

「ばぼべっ!!」

爆発してしまった。彼等は脳味噌や内臓、鮮血、骨を撒き散らしつつ惨めに死んだのであった。あまりと言えばあまりな末路であった。

「ああなるのじゃ」

「何かの拳法漫画みたいですね」

「一子相伝の暗殺拳じゃな」

史上最悪の拳法である。

「まあそれに近いかも知れん」

「秘孔じゃなくて毒ですか」

「うむ。身体を中から破壊するのは同じじゃ」

博士はこう説明する。

「その辺りはな」

「それであなるんですか」

「あの断末魔と共に聞こえておった筈じゃ」

博士は今度は鰯を食べていた。

「心地よい爆発音がのう」

「あの音はこれだったんですか」

「さて、後はあのビルは蛇達の巣じゃ」

博士は悠然と言う。

「二万の蛇達のな」

「二万の蛇があそこに巣をですか」

「当然ながら増えるぞ」

生き物だから当然である。

「そしてさらにテリトリーを広げてのう。面白くなるぞ」

「何かまた」

小田切君は博士の得意げな言葉を聞いて暗澹たる顔になって咳い

た。

「ゴツキローチみたいなことになってきたな」

その通りだった。またしても騒動が起こるのであった。

第百六十八話

完

2009・2・20

第百六十九話

第

百六十九話 　少しだけバカンス

博士がまたしても恐ろしいことを平然と行っていたその時。クラウンの面々は先生の家であり塾でもあるその屋敷の近くにあるプールで楽しい時間を過ごしていた。

「ねえ美奈子」

「何？」

流水プールの中で華奈子が美奈子に声をかける。

「最近結構暇よね」

「そうね」

美奈子は浮き輪に腰を入れてそれでぶかぶかと浮かびながら横で泳いでいる相方に応えた。

「確かに。最近はね」

「博士も大人しいし」

「今のところはね」

限定ではある。

「けれど大人しいのは確かよね」

「このままずっとの筈がないけれどね」

「それは絶対に有り得ないわ」

美奈子も断言してきた。

「それはね」

「あの博士に限ってね」

「あの博士は特別よ」

特別どころではないがこう言う美奈子だった。

「もう何が何だか」

「何時何をしてもおかしくないわよね」

「本当にね。今度は何をするのやら」

美奈子は一体全体次は何が起こるのやらと考えだしていた。二人はそのままプールの中で楽しくやっている。だが完全にリラックスもできない状況でもあるのだった。

「いきなり国会議事堂を爆発させるとかかしら」

「それで生易しいって思えるわよね」

「そうなのよね」

博士にとってはそんなことは道を歩いていて石を蹴飛ばすようなものでしかない。

「そんな大事でもね。あの博士はね」

「今この瞬間にも何をしてるかわかったものじゃないけれど」

華奈子の勘はやはり鋭い。

「とりあえずは今ほね」

「ゆっくりと心を休ませてね」

「そういうこと。それでね、美奈子」

「ええ」

「泳ぐ？」

華奈子はこう相方に尋ねた。

「ちよつとばかり。どう？」

「泳ぐって？」

「一キロ位泳がない？それか二キロでも」

「二キロって」

その距離を聞いてうんざりとした顔になる美奈子だった。

「私はそんなには」

「泳げないっていうの？」

「無理よ」46

今度は困った顔になっていた。

「そんなには、私にはとても」

「そんなのやってみなくちゃわからないじゃない」

「二十五メートルも泳げないのに」

相変わらず身体を動かすことは苦手な美奈子だった。やはり浮き

輪に腰を入れてぶかぶかと浮かんでいるのだった。

第一百六十九話 完

2009・2・22

第一百七十話

第

百七十話 実際に泳いでみても

「とにかくね」

「泳げって？」

華奈子はまだ美奈子に言っていた。浮き輪に腰を入れて浮かぶ彼女の横で泳ぎながら。

「二キロも？」

「休みながらでいいから」

「だから無理よ」

あくまでこう言って乗ろうとしない美奈子だった。

「二キロもって。とても」

「ここなら大丈夫じゃない」

華奈子はどうしてもという美奈子に対して言葉を変えてきた。

「この流水プールならね」

「このプールならね」

華奈子はさらに言ってきた。

「それによ」

「それに？」

「浮き輪も付けて」

浮き輪を見ての言葉だった。

「それだと絶対に大丈夫じゃない。どう？」

「浮き輪があったら」

美奈子もやっとまんざらではなくなってきた。

「そうね。それだと」

「やるのね」

「二キロもいけるかはわからないけれど」

それでもまだ弱気ではあった。

「じゃあ。浮き輪も一緒だったら」

「やるのね」

「ええ」

「やっ」と頷く美奈子だった。ようやくではあった。

「それじゃあ。とりあえずは」

「さあ、泳ぎましょう」

華奈子は浮き輪から出てそれを頭から被りだした美奈子に話した。

「早速ね。競争はやっぱり」

「それは無理だから」

競争については全拒否であった。有無を言わせない口調だった。

「はつきり言って」

「だからそれは言わないから」

「だったらいいけれど」

それでもまだ不安そうな美奈子である。運動の類では華奈子にはどうしても勝てないのは彼女が一番よくわかっているのだ。もっとも勉強ではそれが逆になるのだが。

「じゃあ二キロね」

「そう、二キロ」

華奈子は明るい顔で美奈子に話す。

「行くわよ」

「とりあえずやってみるわ」

美奈子はとりあえず手足を動かした。

「はじめてみないとどうしようもないからね」

「そういうこと。千里の道も一歩から」

華奈子も言う。

「だから」

「そうね。やってみないとね」

そう言い合いながら泳ぎは始める二人だった。二人は学校のスクール水着ではなく今流行の半ズボンタイプの水着だった。華奈子は赤で美奈子は紫、この辺りの色は法衣と同じだった。

第一百七十話

完

2
0
9
・
2
・
2
2
2

第七十一話

第七十一話 泳いだ後は

流水プールで泳いだ華奈子と美奈子。驚いていたのは美奈子だった。

「本当に二キロ泳げるなんて」

「なんては何よ、何ては」

しかし華奈子は美奈子の今の言葉に突っ込みを入れた。

「こんなの当たり前じゃない」

「二キロ泳ぐのが当たり前なの？」

「だって流水プールよ」

華奈子が最初に言うのはこのことだった。

「水が流れるからかなり泳ぎ易いじゃない」

「それはそうだけれど」

「もっとも流れに逆らったら辛いけれどね」

このことは華奈子もよくわかっていた。少し考えればすぐにわかる理屈である。

「けれど流れに従ってたし」

「それは私もわかってるけれど」

「しかも浮き輪もあるじゃない」

華奈子が次に言ったのはこのことだった。

「浮き輪も。楽だったでしょ」

「ええ、まあ」

楽でない筈がない。何しろ浮き輪は泳げない人が浮かぶ為にあるのだから。まさに美奈子の為にあるようなものである。とりあえず今は。

「そうだけれど」

「それで二キロ泳げるのは当たり前よ」

華奈子はまた美奈子に対して言った。

「それだったらね」

「そういうものの」

「美奈子は運動神経なさ過ぎよ」

ここで少しだけうんざりとしたような顔になったのだった。

「全く。泳げないっていつても」

「仕方ないじゃない。泳げないのは」

「まあダンスだけはいけてるけれどね」

これは音感も大きく関係する。だから音感のある彼女がダンスが上手くてもそれは不思議ではないのだ。実際華奈子もダンスはかなり上手い。

「だからバンドでは困ってないけれど」

「有り難う」

「けれど泳ぐもね」

褒めてもまだ言うことは言う華奈子だった。

「ちゃんとしないと。せめて浮き輪なしでね」

「だからそれは無理よ」

「なせばなる」

華奈子は古典にさえなっている言葉を口にしてみた。

「なさねばならぬ何事もよ」

「つまり努力しろってことね」

「あたしだって一応勉強してるし」

「そうね」

双子だからそれはわかるのだった。実際華奈子は華奈子なりに学校の勉強も努力はしている。しかしそちらはどうにもあまり上がらないのである。

「だから美奈子もね」

「やれってことね」

「泳ぐの。とにかく」

華奈子とはかく双子の相方を泳がせようとする。美奈子はオフ

でも疲れることをする破目になっていた。彼女にとっては不幸なことだ。

第七十一話 完

2009・2・23

第七十二話

第七十二話　とりあえず休んで

「まあとにかくね」

「ええ」

華奈子は不意にといった感じで話を変えてきた。

「今は休みましょう」

「休むの」

「あまり疲れても何にもならないわ」

こう言うのである。

「疲れて泳いだら溺れたりするし」

「わかったわ。それじゃあ」

「とりあえず。何か飲む？」

あらためて美奈子に問うた。

「ジュースか何かでも」

「ちよつと身体が冷えたし」

温水プールでも水は水である。それで身体が冷えてもいた。

「温かいものがいいわ」

「じゃあコーヒーか紅茶ね」

「ココアにしない？」

美奈子はココアを提案した。

「あれだとゆつくり飲めるし。それに美味しいし」

「そうね。あたしもココア好きだし」

華奈子もココアは好きだった。家では美奈子と二人でいつも飲んでいたりする。

「それじゃあね」

「ええ。ところで」

美奈子はココアを飲むと決まったところでプールから岸边にあげ

りながら華奈子に尋ねた。

「皆は？」

「皆って？」

「だから梨花ちゃん達よ」

言わずと知れた彼女達の仲間である。

「皆は何処行つたの？」

「皆はジャングルプールの方にいるわよ」

華奈子はこう美奈子に答えた。

「皆ね。そっちに行つたわ」

「そう、そっちに行つたの」

美奈子は華奈子の言葉を聞いてそれで頷いた。

「そっちにね」

「後であたし達も行く？」

「私達も？」

「ココア飲んでからね」

これは忘れなかった。華奈子は食べ物や飲み物のことは決して忘れないのだ。

「行く？皆いるし」

「そうね」

美奈子もそれを聞いて頷く。

「皆もいるなら」

「もつともそこで魔法は使えないけれど」

「当たり前よ」

今の華奈子の言葉にはこのプールではじめてお姉さんの顔になった。

「ジャングルっていったら緑で一杯じゃない」

「ええ」

「そんなところで火なんて使つたら」

華奈子の魔法は火である。木にそれが燃え移つたらどうなるかは自明の理であった。

「流石に使わないとは思うけれど」

「勿論よ。けれど」

魔法を置いても良かった。

「ジャングルプール。楽しみよね」

「それはね」

そのことは純粹に楽しみな二人だった。だが今はココアであった。二人仲良くココアを飲み流水プールを後にするのだった。

第七十二話 完

2009・2・23

第七十三話

第七十三話　ココアを二人で

一休みを取りプールの中の喫茶店でココアを飲む二人。華奈子はココアを飲みながら自分の席の向かい側に座る美奈子に声をかけてきた。

「ここのお店のココアって」

「美味しいでしょ」

「かなり甘いよね」

まずはそれを味わう華奈子だった。

「ここのもって」

「そうでしょ？だから私好きなのよ」

美奈子にはこりと笑って華奈子に答えた。

「というか気に入ったわ」

「そうね。やっぱりココアは甘くないとね」

華奈子もそれは同じ好みだった。

「飲んだ気がしないわよね」

「ええ。そういえば華奈子がいつも飲んでもココアって」

「何？」

「森永のココアよね」

「ここ華奈子に問うのだった。」

「いつも。そうよね」

「美奈子だってそうじゃないの？」

華奈子もまた美奈子に対して問い返した。

「森永じゃない。お家じゃいつも」

「そうね」

美奈子もまたそれに頷く。

「森永ね。お家じゃ」

「でしょ？何かあれかなり飲みやすいわよね」
「ええ。けれどこういうお店のココアもね」
「そうね」

また笑顔になる華奈子だった。

「いい感じね。飲んでて身体があったまるし」
「プールってやっぱり冷えるから」

「あっ、見て」

華奈子はふとお店の張り紙を見て声をあげた。

「ここのお店のココア」

「どうしたの？」

「おかわりできるわよ」

それを見逃さない華奈子だった。

「当然ただで」

「無料なのね」

「どうする？」

華奈子は美奈子の顔を見つつ問うた。

「おかわりする？どうするの？」

「聞くまでもないでしょ」

美奈子にはこりと笑って華奈子のその問いに答えた。

「おかわりできるのならやっぱり」

「そうね。それじゃあ」

「もう一杯」

美奈子はその満面の笑顔で言い切った。

「飲みましょう、二人でね」

「ええ」

こうして二人でその甘いココアを楽しむ二人だった。今はとりあえず一休みであった。

2
0
0
9
·
2
·
2
4

第七十四話

第七

十四話 ジャングルプールへ

ココアを飲み終えた二人。休憩も終えお店を後にして目指す場所
は。

「さて、と。それじゃあね」

「行くのね」

「ええ。ジャングルプール」

華奈子は楽しそうな笑みを浮かべて美奈子に答えた。

「皆もいるしね」

「そうね。ただ」

「ただ？」

「問題は何処にいるかなのよね」

美奈子は考える顔で華奈子に述べた。

「ジャングルの何処にね」

「ジャングルね」

華奈子は美奈子の話を受けてそのうえで彼女も考える顔になった。

「何が出て来るかわからないわよね」

「そうよ。話だところこのジャングルプールって相当広いのよね」

「八条グループのプールだからね」

八条グループは戦前はそれこそ日本最大の財閥であり今も世界屈指のグループである。そのグループが運営しているプールとなればやはり相当なものである。

「何か桁外れに広いのよね」

「遊園地一個分らしいわね」

「本当にジャングルなのね」

華奈子はそう言う他なかった。

「それだけ広いなんて」

「中には色々とおあるみたいだし」
「そこに皆いるの」
「それで今からそこに入るのだけれど」
「凄いことになりそうね」
「華奈子は今はそれだけはわかった。
中に入って四人探すとすると」
「ただし。いいわね」
「わかってるわよ。魔法は使わないのよね」
「そういうこと。火の魔法は厳禁よ」
「仕方ないわね。それに戦うわけでもないし」
「だから余計にね」
「美奈子はさらに釘を刺す。
使わないでね。行きましよう」
「とりあえず勘の勝負ね」
「華奈子は美奈子の言葉を聞いてこう考えた。
まあ勘ならね」
「そういうの華奈子得意だしね」
「ええ、やるわ」
「やはりここでも楽しそうに笑って美奈子に伝える。
皆を探す為に今から」
「ジャングルにね」
「別に虎とか鱈とかいないわよね」
「行くと決めてからふと相方に問う華奈子だった。
ジャングルの中に」
「そんなのいたら大変なことになるわよ」
「流石にそれはなかった。」
「それこそ。ただ単に色々なプールの周りがジャングルになってる
だけでしょ」
「それだけなの」
「それでも遊園地一個分の広さよ」

とにかく広さが問題になるのだった。

「気をつけてね。迷子にならないように」

「二人でってことね」

「そういうことよ」

互いに確認し合ってからいよいよ密林に挑む。二人は四人を見つめる為に今その密林の中に入るのだった。二人並んで魔法を使わないと決意したうえで。

第七十四話 完

2009・2・24

第七十五話

第七十

五話 ジャングルプール

二人はそのジャングルプールに入った。するとそこは。

「うわ……」

「これって」

まずはその中を見て絶句したのだった。

「広いね」

「広いつてどころじゃないわよ」

美奈子が華奈子に返す。

「こんなに広いなんて」

「予想してなかったの？」

「全然」

また華奈子の言葉に応える。

「確かにあれよ。遊園地一個分の大きさって聞いていたけれど」

「ええ」

「けれど。実際に見たら」

「実感してみるとつていうことね」

「そういうこと。凄いわね」

「こう言うしかなかった。」

「これは」

「それで美奈子」

華奈子はここで美奈子に言うのだった。

「この中にね。皆がね」

「いるのね」

「そうよ。四人共何処かにいるわよ」

「問題は何処にいるかだけれど」

「地図、持ってるわよね」

「ええ。これよ」

華奈子に伝えて早速その地図を出してきた。

「現在地はね」

「ここなのね」

「それでここがこうなって」

「で、ここが出口ね」

「そうよ。そこが出口よ」

二人はその地図を見て言い合う。

「これはあれね」

華奈子はその地図を見終わってから述べた。

「やっぱり一人ずつ歩いたら迷子になるわね」

「じゃあやっぱり二人で行くのね」

「さもないと大変なことになるわよ」

これは二人もよくわかっていた。

「だからね」

「了解」

美奈子は華奈子のその言葉に頷いた。

「あたしもそうじゃないと心配よ」

「珍しいわね。華奈子がそんなに慎重なんて」

「迷路だから」

だからだというのだ。

「この前のあの迷路でも苦労したしね」

「この前とは目的は違うけれどね」

「迷路は迷路よ」

二人はこのジャングルを迷路と見ているのだった。そのうえで今その迷路に向かうのだった。二人力を合わせて。

2
0
9
·
2
·
2
5

第七十六話

第七十六話

ここでも持って来ていて

ジャングルプールの中を進みはじめた二人。河そのものに見えるプールを泳いでいく。左右に見えるのはジャングルの木々である。プールの中にもある。

「あの木ってひょっとして」

「本物ね」

美奈子が華奈子の言葉に答える。

「間違いなくね。アマゾンにイメージしてるわ」

「アマゾンね」

アマゾンと聞いて華奈子の顔が曇る。

「じゃあ河の中にピラニアとかいるの？」

「流石にそれはないわよ」

ただしプールから浮かび上がるCGの小魚や鰐や蛇の類は一杯泳いでいる。それがまた独特の雰囲気を出している。現実感を出していた。

「それはね」

「いたら人が食べられるわね」

「そうよ。まあこのCGはよくできてるけれどね」

「出来過ぎじゃないの？」

華奈子は目の前に巨大なピラルクを見ていた。

「CGはCGでもホノグラフィーだし」

「透けて通ってくれるけれどね」

「それでも」

迫力はそのままでった。その巨大ピラルクは二人を通り抜けてそのまま二人の後ろへ泳いでいく。

「凄い迫力」

「確かに」

美奈子もそれは完全に同意だった。

「他にアナコンダもいるわよ」

「あの二十メートルはあるっていう蛇ね」

「一説には、だけれどね。その大きさは」

「いるの、その大きさが」

「そうらしいわ」

この辺りは実際に見ていないので美奈子にもわからないのだ。

「そういうのもCGで出て来るわよ」

「期待したいけれど怖いわね」

華奈子は泳ぎながらその喉をぐくり、と鳴らして述べた。

「ちよつとね」

「そうね。私も」

「そうなの」

美奈子の言葉に応えたところで気付いたことがあった。

「そついえば美奈子」

「何？」

「ここでも浮き輪なのね」

見れば浮き輪の中に入ってそうやって華奈子と一緒に泳いでいた。

「ここでも」

「だって仕方ないじゃない」

華奈子の言葉に口を尖らせて反論する。

「泳げないんだから」

「けれど格好悪いわよ」

「それでも泳げないの」

また口を尖らせて言い返す。

「だからいいでしょ。浮き輪は」

「まあね」

わかっているからそれ以上言いはしない。

「とにかく。四人をね」

「探すのね」

何はともあれそれであった。今は河そのままの曲がりくねったプールを二人並んで泳ぎながら仲間達を探す二人であった。

第七百七十六話

完

2009・2・25

第七十七話

第七十七話 手懸かりは

二人は残る四人を探す為にそのジャングルプールの曲がりくねった中を泳いでいく。華奈子はそのままだが美奈子は相変わらず浮き輪を手放してはいなかった。

華奈子はそんな美奈子に対して言うのだった。

「やっぱり浮き輪ないと駄目なのね」

「悪いけれどね」

美奈子は彼女にしては珍しいバツの悪い顔になって華奈子に言葉を返したのだった。

「ちよつとね。これだけはね」

「そうなの、まあ仕方ないわね」

華奈子もそれで納得した。美奈子の運動神経のことは彼女が一番よくわかっていているからだ。わかっているからこそであった。

「とにかくよ。まずは一人でも見つけないと」

「ええ。とりあえず手懸かりは」

「そんなのあるの？」

怪訝な顔で美奈子に対して問うた。

「手懸かりって。何も無いじゃない」

「そうなのよね。何も無いのよ」

美奈子も困った顔になって話す。浮き輪を使って泳ぎながら。

「こうして泳いでいるだけじゃ何もならないし」

「どうしようかしら」

普段は能天気なまでに明るい華奈子ですら今は困った顔になっていた。

「とりあえず手懸かりの一つでもないとどうしようもないわよ」

「ええ。ここは魔法を使おうかしら」

「魔法ってあんたの？」

「そうよ。音の魔法ね」

美奈子の魔法といえばやはりそれであった。彼女の魔法は音である。

「これを使つてね」

「音を使つてわかるの？」

「音といつても色々よ」

泳ぎながら微笑んで華奈子に述べるのだった。

「色々だね」

「確かに色々あるけれどそれでもどうするのよ」

華奈子は双子の相方が具体的にどうするのかまでは全く考えが及ばなかった。彼女は火の魔法が専門だからこれも無理もないことだった。

「音を使つて誰か探すつて」

「どうするのよ」

言いながら出してきたのは笛であった。彼女がいつも使っているその笛だった。

「これを使つてね」36

「使つてどうするの？」

その笛を見ても華奈子は首を傾げるばかりだった。

「何か召喚するの？どうするの？」

「召喚はしないわ」

それは否定する美奈子だった。

「それはね。それとは別の方法を使うのよ」

「それがそもそもわからないんだけれど」

「音は。立てないわ」

美奈子は楽しげに笑つて述べた。

「そうして。見つけるわ」

「音を立てない？」

「そうせずにはね」

「やっぱりわからないけれど」

華奈子にはもう何が何なのかさっぱりわからないことだった。しかしそれでもだった。

美奈子は笛を吹きはじめた。彼女だけはわかっているのだった。

第百七十七話 完

2009・3・22

第七十八話

第七十八話 レーダーとソナー

美奈子は笛を吹きはじめた。確信した顔で。

横笛から出される音はなかった。しかしそれでも何かを必死に吹いているのだった。

「それがあんたの今の魔法なの？」

「そうよ」

いつもの落ち着いた調子で華奈子に答える。浮き輪に身体を預けながらそのうえで吹き続けている。

暫く吹き続けていたがやがて。美奈子は急にその笛を止めたのだ。つた。

そしてそのうえでこう言った。

「わかったわ」

「誰がいるのかわかったの？」

「ええ、そうよ」

こう華奈子に答えるのだった。

「ちやんとね。居場所がわかったわ」

「それは何処なの？」

「プールをこのまま進めばいいわ」

確かな顔で華奈子に話す。

「そうすればね。そこにいるから」

「ただ正面に進めばいいの」

「そうよ。それだけ」

また華奈子に対して語る。

「今回はそれだけでいいわ。プールで泳ぎ続けてるわ」

「何だ。正面を進めばいいの」

華奈子は美奈子の言葉を聞いて話がわかった。

「それじゃあ」

「ええ。ただ」

しかしここで。美奈子の声が急に弱いものになってしまった。華奈子もそれに気付いて彼女に対して問うのだった。

「どうしたのよ。急に弱気になって」

「一キロも先よ」

こう華奈子に対して言った。

「一キロ泳がないとそのメンバーのところには辿り着けないのよね」
「何だ、たった一キロなの」

しかし華奈子にとってはそれ位は何でもないといった様子だった。それは顔にも出ていた。

「流れもあるし軽いじゃない。一キロだと」

「そういうところは負けるわ」

あらためて華奈子のそうした体力には脱帽するのだった。

「一キロ泳いでも平気なんて」

「とにかく。そっちにいるのなら行きましょう」

「わかったわ。じゃあ」

華奈子は勇んでいたが美奈子は渋々だった。しかしそれでも一キロ泳いでそのうえで見つけた仲間。赤音であった。

「ああ、華奈子に美奈子じゃない」

見れば彼女はボートの上にいる。そこでジュースを飲んでくつろいでいたのだった。

「どうしたのよ、また」

「ちよつと探してるのよ」

「皆をね」

「?何でまた?」

赤音にはわからない話だった。とりあえず彼女は気楽にくつろいでいただけであった。別に誰かを探すということは考えもしていなかったのである。

「ちよつとね。魔法の修行の意味でもね」

「皆を探そうって思ってたね」

「だったらまずは私ってことね」

これで話がわった赤音だった。そうなれば彼女の取るべき行動も決まっていた。

「じゃあ今度は私も入ってってことね」

「ええ、そういうことよ」

「行きましよう、三人でね」

「了解。じゃあ乗って」

すぐに二人を今自分が乗っているそのボートに乗せるのだった。こうして三人になったうえでまた別の仲間を探すのだった。

第七十八話 完

2009・3・22

第七十九話

第

百七十九話　ボートで進みながら

赤音を入れて三人になった。しかもボートを手に入れたので移動はかなり楽になった。少なくとももう水の中に直接入らなくてもよくなったのだった。

「ああ、もうこれだけでね」

美奈子はボートの上で満面の笑みを浮かべていた。

「満足したって感じがしら」

「まだ赤音しか見つかってないの？」

「もう泳がなくていいから」

「だからだというのである。」

「もうそれだけでね。最高よ」

「そんなに泳ぐの嫌なの」

「水自体は嫌いじゃないわ」

実は美奈子はかなりの奇麗好きだ。お風呂も毎日入っている。入る時はいつも華奈子と一緒に二人仲良く入っているのである。何だかんだで仲のいい姉妹である。

「それはね」

「泳がないからなのね」

「そういうこと」

バツの悪い顔で双子の相方に答える。

「だからよ。泳がないからよ」

「浮き輪がないとそれこそなのね」

「沈んでもうそこから」

「そういうことであった。」

「浮かんでこれないから。だから泳ぐのは嫌なのよ」

「仕方ないわね。もうそれはね」

「納得してて。私とにかく身体動かすのは駄目だから」

「美奈子まだ泳げないの」

横で話を聞いていた赤音がその美奈子に対して言ってきた。見れば彼女は自分の色とも言える黄色の水着だ。どういいうわけか彼女も半ズボンタイプの水着である。

「学校でも泳げてなかったわよね」

「ずっと泳げてないわよ」

赤音に対してもバツの悪い顔で返す美奈子だった。

「それはね。恥ずかしいけれど」

「別に恥ずかしいことじゃないけれどね」

赤音は泳げないこと自体はいいとしたのだった。

「それ自体はね」

「泳げないことはいいの」

「だから。誰だって得手不得手があるじゃない」

こう美奈子に言うのだった。オールをこぎながら。今は華奈子と彼女がこいでいる。美奈子は舵取りをしている。その状態で三人役割分担をしているのだった。

「だから。いいのよ」

「そうなの」

「ただ。それを恥ずかしがらないことね」

だが赤音はこうも美奈子に言った。

「それをね。恥ずかしがらないの」

「恥ずかしがったらいけないの？」

「そうよ。だから誰にだって得手不得手があるのよ」

このことをまた美奈子に話す。

「それは仕方ないからね。恥ずかしがっても」

「そういうものなの」

「だからよ。ちゃんと胸を張って」

実際にここで胸を張ってみせる赤音だった。

「前を向きましょう。いいわね」

「そうね。やっぱりね」

赤音のその言葉に微笑む美奈子だった。今華奈子も入れて三人は温かく微笑んで先に進んでいた。

第一百七十九話 完

2009・3・29

第一百八十話

第一百八十話 今度は光を使って

三人はボートを漕ぎながら進んでいく。進むうちにやがてまた新しい場所に入ってしまった。そこは暗く夜の世界を映し出しているのがわかった。

「夜？」

「そうみたいね」

美奈子が華奈子の言葉に応えた。

「まあ泳ぐのはお昼だけじゃないってことね」

「それはわかったけれど」

しかし華奈子は辺りが暗くなってどうにもこうにも不安そうであった。それが顔にも出ている。

「ちよつと。これは」

「何か困ったの？」

「周りが見えないし」

まず言うのはこのことだった。

「それに」

「それに？」

「ぶつかけたりしたらどうしようかしら」

周りが見えないことと直接関係することだった。彼女が心配することは道理であった。

「そうだったらそれこそ」

「そうよね。私が笛を吹くにしても」

「ちよつと無理があるでしょ？ 幾らソナーやレーダーになっても」

「ええ。ちよつとね」

美奈子自身もこのことを認める。実際にその手には笛を手を取ってはいなかった。そのうえで華奈子に対して言っているのである。

「それはね。かなりね」

「だからよ。周りが見えないから」

「ああ、大丈夫よ」

しかしここで赤音が言ってきた。

「それはね。安心して」

「安心してってまさか」

「魔法使うの？」

「その通りよ。私の魔法知ってるわよね」

楽しそうに二人に対して言う赤音だった。もうその右手を自分の顔の高さに上げている。今まさに魔法を出そうとしているかのようだった。

「だからよ。今ね」

「じゃあ御願いできる？」

華奈子はその赤音に対して言ってきた。

「灯り。魔法で」

「任せて。はいっ」

一言であった。それと共に早速その右手から光を出す。その光はすぐに光のボールとなりポートの前に来た。そうしてそこに浮かびポートの前を照らすのだった。

「これでどう？」

「あっ、いいわね」

「これなら大丈夫ね」

美奈子も華奈子もその光を見て笑う。充分過ぎる程はつきりとした光でポートの前はおろかかなりの範囲が丸見えになっていた。

「これならもうさっきまでの明るい場所と同じよ」

「前も周りも心配することないわ」

二人は笑顔で言葉を続ける。

「それじゃあ。安心してそうね」

「そうね」

「どう？私の今度の魔法」

魔法を出した当の赤音は満面の笑顔でポート漕ぎに戻っている。

「結構以上にいいでしょ」

「ええ、おかげでね」

「普通に前に進めるわ」

「善き哉善き哉」

美奈子と華奈子の返答に上機嫌で笑う赤音だった。こうして三人は暗がりを気にすることなくさらに先に進むことができるようになったのだった。

第一百八十話 完

2009・3・29

第百八十一話

第百八十一話 四人目の手懸かりは

ボートに乗りながら四人目を探す三人。暗がりの中でも赤音の光のおかげで明るく意気揚々としていた。その中で順調に進んでいた。

「さて、いい具合よね」

「そうよね」

華奈子は赤音の言葉に笑顔で頷いていた。

「暗くても灯りがあるとね。全然違うわよね」

「そうでしょ。おかげで四人目も結構楽に見つかりそうじゃない？」

「そうね」

美奈子が二人に言ってきた。彼女はこれまで通り舵を取っている。

「光があるよね。こちら側の目印にもなるしね」

「というところからも来てくれるってこと？」

華奈子は美奈子の話を聞いて問い返した。

「そういうこともあるってことよね」

「ええ、そうよ」

美奈子のはつきりと華奈子に答えた。

「その可能性もね。あるわよ」

「そうかあ」

華奈子は美奈子のその言葉に右手の人差し指の先を唇に当てて考える顔になった。

「目印になるからね。それも」

「そういうことよ。そうじゃなくても灯りになるから」

「何処かにぶついたりはしないわよね」

「それが一番大きいわね」

こう答えた美奈子だった。

「だから。順調にいけるわ」

「ええ。そうね」

話している間に赤音はさらに光を放った。その光もさらに周囲を飛び回り照らし出す。するとその光があるものを照らし出したのだった。

「あっ」

「どうしたの、華奈子」

「いたわ」

華奈子はその光の中で見つけたのだった。

「梨花がいたわ」

「梨花が!？」

「ええ、いたわ」

彼女の姿を見つけたのだ。

「あそこに」

「あそこ?」

「そう、あそこよ」

言いながら先を指差すのだった。

「あそこにね。いたわ」

「あそこっていうと」

赤音は華奈子が指さしたその先を見るのだった。そこは。

「ジャングルの中じゃない」

「そこにいたのよ」

また言う華奈子だった。

「そこにね。行きましょう」

「それじゃあね。美奈子」

「ええ、そちらにね」

赤音の言葉に頷き舵をそちらに留める。後はそのまま漕ぐだけだった。そうしてそのジャングルのすぐ手前に行くと梨花が出て来たのだった。

「華奈子?」

「やっぱりいたわね」

梨花が顔を出してきたのを見て笑顔になる華奈子だった。

「梨花がね」

「よく見つけられたわね」

「光さえあればね」

得意満面といった面持ちで赤音に対して答えるのだった。

「見つけるのは簡単よ。あたし視力二・五あるんだから」

「それって日本人の視力じゃないわよ」

その視力を聞いて思わず突っ込みを入れる赤音だった。

「けれどそれでもよ」

しかし華奈子は言った。

「これで四人目よ」

今度はにこりと笑って言う華奈子だった。赤音の光と華奈子の目によって四人目も見つけたのだった。

第百八十一話 完

2009・4・5

第八十二話

第八十

二話 どうしていたのか

四人目になった梨花もボートに乗った。今度は華奈子が両手で漕ぎだした。残った梨花は赤音の隣の席についてそこで右側を担当して漕ぎだした。その中で美奈子が彼女に問うのだった。

「ところでね」

「何？」

「どうしてジャングルの中にいたの？」

彼女が尋ねるのはこのことだった。梨花も半ズボンの水着でその色は緑であった。

「あの時。何かあったの？」

「ううん、ジャングルの中ってアスレチックになってるじゃない」

「ええ」

このプールはただジャングルがあるのでではなくそこはアスレチックになっているのだ。そこでも楽しめるといっわけなのである。

「そこに入ってたのよ」

「暗い中でアスレチック!？」

赤音はそれを聞いて思わず声をあげた。

「それって危くない？」

「いいえ、別に」

しかし梨花はそれはないと答えた。

「それはないわよ」

「本当!？」

「大丈夫よ。暗がりの時はそういう危ないのは使えないから」

こう答えるのだった。

「だからね。特に危なくはないのよ」

「そうだったの」

「蛸壺の中に入ってそこをロープで出ていたのよ」
「それをしていたというのだ。」

「後はね。あの浮き石を跳びながらお池を進んだり」
「それね」

華奈子はそれを聞いて笑顔になった。

「あれも面白いわよね」

「そういうのしてたのよ。そうしたら向こうから光が見えて」

「ああ、それこの光」

赤音が今もボートの周りを飛び回っている光を指差して言った。

「これだから」

「そうよね。それを見てね」

梨花はまた述べた。

「そうしたら華奈子が見つけて」

「それでだったの」

「驚いたわよ」

華奈子に顔を向けて少し苦笑いだった。

「いきなり声出したし」

「だって見つけたから」

しかし当の華奈子はそれについてこう思っているだけであった。

「だからだったんだけど」

「まあそれでも。皆と合流できたからいいかしら」

そんな華奈子を観てこれ以上言うのは止めたのだった。

「それでね」

「それでいいのね」

「一人だとやっぱりあまり面白くないのよ」

梨花は美奈子に答えながら首を少し捻った。

「何でも皆と一緒にの方がね」

「そうよね。じゃあ残るは二人」

華奈子は明るく両手でボートを漕ぎながら言った。

「張り切って見つけましょう」

こうしてさらに先を進む一行だった。四人になった彼女達はさらに明るくなっていた。

第百八十二話 完

2009・4・5

第百八十三話

第百八十

三話 五人目の手懸かりは

三人でボートを漕ぎつつさらに向かう四人。美奈子は舵を取りつつ片手でオカリナを吹いている。華奈子は彼女がオカリナを吹いているのを見て尋ねた。

「何でオカリナなの？」

「片手は舵に使ってるから」

だからだというのだ。見れば美奈子は確かに左手で舵を取っていた。そして右手にオカリナを持ってそのうえで吹いているのだった。

「だからよ」

「それでなの」

「ええ。オカリナだところこういうふうにも吹けるじゃない」

「確かにね」

華奈子もオカリナを吹くからそれはよくわかった。

「それで吹いてその音でなのね」

「ええ。調べてるけれど」

言いながら探る目になる美奈子だった。

「あれ？」

「あれって？」

「何処かしら」

今度は首を捻るのだった。

「何か。出たり消えたりしてるけれど」

「出たり消えたりって？」

「これってどういふことかしら」

こう言っただけでまた首を捻る。

「プールの中を出たり消えたりしてるけれど」

「何処のプールなの？」

「それはこの先よ」

丁度今進んでいる先を指差す美奈子だった。

「この先は広くなっているけれどね」

「お池みたいになってるってことよね」

「ええ。そうなっているけれど。その中で」

「出たり消えたりしてるの」

「何でかしら」

こう言って首を捻り続ける。

「これって。何なの？」

「あたしも聞いてもわからないけれど」

華奈子もそう言われても何がどうなっているのかわからなかったのだった。

「ちよつとね。何なのかしらね」

「わからないわよね」

「ええ。わからないわ」

また言う華奈子だった。

「けれど。とにかくそこにいるのね」

「ええ、それはね」

間違いないと頷きさえする。

「間違いないわ。お池にいるわ」

「了解。じゃあ赤音ちゃん、梨花ちゃん」

「了解」

「わかってるわよ」

二人は華奈子の今の言葉に笑顔で返してきた。

「お池にね。このまま行きましょう」

「そうね。そこに五人目がいるんだし」

「さて、誰かしら」

とにかくそのお池に行くことは決めた。そのうえでボートを漕ぐのも舵を取るのもさらに気合を入れて向かう四人なのだった。五人になる為に。

第一百八十三話

完

2
0
9
・
4
・
1
3

第百八十四話

第百八十四話　お池に来てみると

かくして四人はそのお池に入った。そこはまたかなりの広さだった。とりあえず美奈子はまたオカリナを吹いてその音の反射を受け取ってから大きさについて述べるのだった。

「百メートルはあるわね」

「百メートルね」

「ええ。百メートル四方」

こう三人に述べるのだった。

「それだけの広さはあるわ」

「凄いわね」

華奈子はその広さを素直に賞賛したのだった。

「そんなに広いの、このお池」

「ええ。ただでさえ広いこのプールの中でも特にね」

「そしてこの中にいるってことよね」

赤音は自分が出している光に照らされている範囲だけを見て述べた。

「もう一人が」

「さて、誰かしら」

梨花は誰がいるのかを考えていた。

「美樹ちゃんかしら。それとも春奈ちゃんかしら」

「そうね。出たり消えたりって」

華奈子はそれが何のことかまだわからなかった。

「誰かしら。二人共泳がないわけじゃないし」

「どっちも泳ぐの上手よね」

「ええ、そうよ」

梨花は赤音の問いに答えた。

「どっちもね。タイプは違うけれどね」

「美樹ちゃんは運動神経いいし春奈ちゃんは水の魔女なんだしね」

だから二人にとつては泳ぐことは何でもないのであった。だからここここにいるのは誰か、そして何故出たり消えたりしているのかわからないのだった。

「それで美奈子」

「ええ」

それでもとりあえず場所を探っている美奈子に対して問う華奈子だった。

「何処にいるの？今」

「その娘よね」

「そうよ。何処で出たり消えたりしてるの？」

「そこよ」

こう言つて右を指差すのだった。

「そこにいるわ」

「ふうん、そこね」

「あつ、華奈子ちゃん」

ここで梨花が出て来た。

「そこだったらね。私に任せて」

「梨花ちゃんに？」

「そうよ。この魔法でね」

言いながらステッキを出してきた。魔女のそのステッキをだ。

「探してみるわ」

「お水の中で土？」

「どうやってなの？」

「それはね」

楽しそうに笑いながらそのステッキを振りだした。すると。

そこから彼女の使い魔のトカゲのピエールとヘビのジュリエッタが出て来た。そうして水の上を泳ぎながらそこに向かうのだった。

「杖で二匹を呼んだのよ、実家からね」

「召喚の魔法覚えたのね」
「そういうこと。これもかなり便利よ」
にこにここと笑って三人に答えるのだった。今度は梨花の魔法が見せるのだった。

第百八十四話 完

2009・4・13

第八十五話

第百

八十五話 召喚した二匹が

梨花が召喚したのは彼女の使い魔達であつた。ピエールとジュリエッタである。

「そつえばさ」

「何？」

「あの二匹泳げるのね」

華奈子は梨花に尋ねるのだった。

「今気付いたけれど」

「ええそつだけれど」

何でもないと口をつたふように返答する梨花だった。

「それ言わなかつたかしら、前に」

「言つてないわよ」

華奈子は速攻で言い返した。

「そんなの今知つたし」

「そつだつたの。言わなかつたの」

「そつよ、言わなかつたわ」

また言う華奈子だった。

「初耳だけれど。けれどね」

「泳げるのが不思議なのね」

「蛇はわかるわ。泳ぐの見たことがあるから」

ジュリエッタを見つづ述べる。

「けれどね。それでもよ」

「ピエールはつてことよね」

「トカゲも泳げるのね」

華奈子は感心したように言つ。やはりまだ二匹を見ながら。

「今はじめて知つたわ」

「ええ、トカゲも泳げるのよ」
梨花はここで笑顔になった。
「特にうちのピエールは泳ぎ上手よ」
「そうだったの。泳げるのね」
「意外でしょ。中には水の上を歩くトカゲもいるし」
「この話もする梨花だった。」
「トカゲも泳げたりするのよ」
「で、そのピエールとジュリエッタが泳いで調べに行くのね」
「そういうこと。私の魔法って土じゃない」
「このことは最早言わずと知れたものであった。」
「土はね。お水だと使いにくかったりするから」
「だから召喚したってわけね」
「そういうことなの。考えたんだけど」
「こう述べる梨花だった。」
「さて、誰かしら」
「そうね。問題はそれね」
華奈子も今の梨花の言葉にはしっかりとした声で頷く。
「誰なのかしらね」
「残るは美樹ちゃんと春奈ちゃんだけねど」
赤音もここで考える顔になった。
「さて、どちらかしら」
「うっん、どちらかしらね」
美奈子も今度ばかりはどちらなのかわかりかねていた。それで首を傾げる程だった。
「本当にね。どちらかしらね」
「それが問題ね」
残るは二人、そのどちらかなのは間違いなかった。しかしどちらなのかわからずそれで首を捻る一回であった。

第八十五話

完

2
0

2
0
0
9
.
4
.

第八十六話

第八十六話　こちらだった

ボートはとりあえずピエールとジュリエッタの方にゆつくりと向かった。すると暫くして二匹の方から戻って来たのだった。そしてその後ろには。

「あれっ、皆何でボートに？」

「って美樹ちゃんだったね」

「ええ、そうね」

皆彼女を認めてそのうえで頷き合っただった。

「どちらかと思ったけれど美樹ちゃんだったの」

「っていつかここで潜水してたの？」

「そうだけれど」

皆が何でそれを知っているのかわからずきよとんとなる美樹だった。

「何でそれわかったの？おまけに梨花ちゃんの使い魔までいるし」

「これは私が召喚したのよ」

「そうなんです」

「ですから御気になさらずに」

こう述べるその使い魔達であった。

そのうえで使い魔達はまるで煙のように梨花の杖の中に入ってそのうえで消えた。美樹はそれを見届けてから暫くぼうつとしていたがその彼女に美奈子が声をかけてきた。

「まずあがって」

「あっ、そうね」

美奈子の今の言葉に応えてボートにあがる美樹だった。これで五人目だった。

「ここでもいいのね。オール持って」

「ええ、御願い」

「とりあえず梨花ちゃんの使い魔のことはわかったけれど」
華奈子の横につきつつ言う美樹だった。

「ただ。気になるのは」

「どうして潜水しているのかわかったってことよね」

「そうそう、それよそれよ」

美奈子に顔を向けて述べるのだった。

「何でわかったのよ」

「笛で」

「ここで自分の笛を出す美奈子だった。

「これでわかったの」

「笛っていうと」

美樹は笛と聞いてすぐに考える顔になった。そうしてそのうえで言うのだった。

「あれ？音で？」

「やっぱりわかってくれたわね」

美樹の今の返事に微笑む美奈子だった。

「その跳ね返りでね。レーダーというかソナーでね」

「成程ね」

美奈子の話を聞いて納得した顔で微笑む美樹だった。彼女はわかっているのだった。

「そういうことならね。わかるわ」

「ええ。それで潜水してるってわかったのよ」

「音はやっぱりそういう時便利ね」

「そうなのよ。おかげで助かるわ」

笑顔で言い合う二人だった。華奈子はそんな美奈子を見てふと呟いた。

「あたしの魔法でも似たようなことできるかしら」

「無理じゃないの？火と音じゃ全然違うから」

「うっん、とりあえず考えてみるわ」

赤音にはこう返す。何はともあれ五人目も見つかった。そうして最後の一人である春奈を探しに今再び漕ぎ出すのだった。その最後の一人に向かって。

第百八十六話 完

2009・4・20

第百八十七話

第百八十七話 風なら

最後の一人が誰なのか、もう言うまでもなかった。

「さて、春奈ちゃんだけねどね」

「ええ」

その春奈だけなのであった。

「何処かしら」

「そうね。大体何処にいるのかは見当がついたけれど」

華奈子に美奈子が答える。やはりその手には笛がある。

「ちゃんとね。ここにね」

「あつ、もうわかったの」

「ええ。おおよそね」

おおよそであるがわかったというのである。

「わかったわ。この広いプールを出てね」

「ええ」

まだ皆のボートは美樹がいたその広い池の様なプールにいるのであった。そこにおいてこれから何処に行くのかを考えているところだったのだ。

「それでそのまままた川を進んで行って」

「それで？」

「滝があるわ」

今度は滝なのだった。

「そこにいるみたいよ」

「そう。そこになのね」

「そういうこと」

華奈子だけでなく皆にも話す美奈子であった。

「先に滝があるけれど」

「そこにいるのはわかったけれど」

赤音は漕ぎながら美奈子の言葉に述べた。

「滝じゃあボートは無理よね」

「そうね」

リーダーの梨花もそのことについて考えて難しい顔になるのだ
た。

「ボートじゃね。どうしようもないわ」

「どうしようかしら」

華奈子にもいい考えは思い浮かばなかった。

「ここは一体どうやって」

「ああ、それならよ」

しかしここで美樹が言うのだった。明るい声で。

「私にいい考えがあるわ」

「いい考えって？」

「そうよ。風よ」

彼女は言うのだった。

「風を使えばいいのよ」

「風？」

「そう、風よ」

また言う美樹だった。

「それを使えば例え滝でもボートはね」

「どうするのよ、美樹ちゃん」

華奈子はそれを聞いても全くわからなかった。

「風を使うって言われても何が何だか」

「そこは任せておいて」

美樹の顔はいぶかしみそれで眉も顰めさせている華奈子とは全く
の正反対に明るいものであった。

「ちゃんとね。できるから」

「できるの？」

「要は落下傘よ」

「こう言うのである。

「それでいくからね」

「何かよくわからないけれどここは任せたわ」

腹を括っただけでなく美樹も信じているからこそその言葉であった。こうして華奈子だけでなく皆も美樹の言葉を信じてその滝にボートのまま進むのだった。

第百八十七話

完

2009・4・27

第百八十八話

第百八十八話 滝にて

その滝がいよいよ近付こうとしていた。美樹以外の面々の顔が強張っていく。そして皆その顔で美樹に対して言うのであった。言わずにはいられなかった。

「それでももうすぐ滝だけれど」

「任せたわよ」

「ええ」

美樹一人悠然としていた。

「わかっているわ。それじゃあね」

「ここで魔法を使うのよね」

「ええ」

それは最初から皆読んでいたことだった。

「そうよ。風の魔法ね」

「それはわかるんだけど」

華奈子は眉を顰めさせ首を捻りながら言うのだった。

「一体どうやって使うのかしら」

「そうよね、風はわかるんだけど」

「一体」

赤音も梨花も美樹が今何を考えているのかわかりかねていた。しかし美奈子がここで何とか落ち着いた顔になって彼女に話すのだった。

「あれ、するのね」

「そうよ、あれよ」

美樹はここでも明るい顔であった。

「それをするのよ」

「そうなの。わかったわ」

これで納得した顔になった美奈子であった。

「それじゃあ安心してね」

「美奈子ちゃんにはわかったみたいね」

「そうみたいね」

赤音と梨花は美奈子の顔が今は晴れ渡ったものになったのを見てまた言い合った。

「けれど何をするのかしら」

「このまま滝に行っても」

「ヘリコプターよ」

美樹が言った。

「ヘリコプターをするのよ」

「ヘリコプターって」

華奈子はまた首を傾げるばかりだった。

「何、それ」

「だから。こうするのよ」

言いながら自分の杖を高々と掲げる美奈子だった。

「こうしてね。ほら、少し大きな竜巻出来たわよね」

「ええ、確かにね」

見ればボートの上にそれが出来ていた。見ればそれは威力はそれ程でもない、穏やかな竜巻であった。ただし大きさはボートに丁度という位だ。

「この竜巻よね」

「これをボートの下にやって」

実際に竜巻は移動しだした。水を跳ね除けてボートの下に。

するとボートは自然に浮かび上がったのだった。それはまさにヘリコプターだった。

「浮いてるじゃない」

「これって」

「そういうこと。ホバークラフトみたいだけれどまあヘリコプターの方が近いから」

美樹は笑って皆に話す。

「だからヘリコプターって言ったのよ」

「成程ね」

皆ここでやっとわかったのだった。そうして空中を竜巻で浮かび上がりながらそのうえで宙を舞うのだった。そうして滝を降りていった。

第百八十八話 完

2009・4・27

第百八十九話

第百八十九話 滝を降りる

滝を降りていくボート。その中で華奈子は言っただった。

「これってやつぱり凄いわよね」

「凄いつてもものじゃないわよ」

「ねえ」

彼女の言葉に赤音と梨花が続く。

「美樹ちゃんこんな魔法使えるなんて」

「何時の間に」

「それは私だつて言いたいわよ」

しかし美樹は二人にこう返すのだった。

「美奈子ちゃんからお話聞いたけれど」

「ええ」

「それで？」

「四人共何よ。召喚魔法とかソナーみたいなのか探索に使えるのとか覚えてるじゃない」

「普通よね」

「ねえ」

しかし華奈子と赤音は平気な顔で言っただった。

「それ位ねえ」

「普通よ」

「私だつて音を出すのは」

美奈子もまた言っただった。

「これ。ただの応用だし」

「応用できるのが凄いのよ」

美樹の言いたいことはそれであった。

「それよ。それができるのがよ」

「凄いの？」

「凄いわよ」

そしてまた言う。

「私のより絶対に凄いわよ」

「そうかなあ」

華奈子はそう言われても実感が湧かないのだった。

「あたしにしろこれ位普通でしょ。火の玉出して」

実際にここで火の玉を幾つか出してみせる。

「自由に動かすのって」

「それ前にできた？」

「いいえ」

それは否定するのだった。

「それは無理だったわ」

「それができるようになったのが凄いのよ。皆攻撃魔法だけじゃな

くなくてきたから」

「魔法は千変万化」

美奈子の言葉だ。

「そういうことね」

「そう、それ」

美樹が言いたいこともそれであった。

「それができるようになったって。何か私も負けていられないわ」

「それはあたしの台詞」

しかしここでまた華奈子が言う。

「美樹ちゃんにも負けていられないわね」

「望むところよ」

そして美樹は今の華奈子の言葉に微笑んで返すのだった。

「私も。負けないからね」

「競争ね」

仲間うちでの切磋琢磨であった。彼女達もいい意味でライバルになっ

第一百八十九話

完

2
0
9
・
5
・
5

第一百九十話

第一百九十話　そして最後の一人

美樹の魔法でボートをホバリングさせつつ降りそうして滝の下に着いた。そこに遂に彼女がいたのだった。

「あつ、皆？」

春奈がここで五人に気付いたのだった。

「ボートで来たの？」

「そうよ」

華奈子がにこりと笑って泳いでいる春奈に答えた。

「春奈ちゃん探してね」

「そうなの。有り難う」

探してくれたと聞いてまずは礼を言う春奈だった。

「私を探してくれて」

「いいのよ。これで皆揃ったしね」

「そうね」

美奈子が華奈子の今の言葉に頷く。

「これでね」

「さて、春奈ちゃんも乗って」

そして春奈にボートに乗るよう勧める。

「これで帰られるわ」

「そうね。私もそろそろって思ったし」

それについては春奈も同じ意見なのであった。

「じゃあ。ボート、乗っていい？」

「っていつか乗ってもらわないと困るし」

「そうそう」

皆思わず突っ込んでしまった。やはりこの辺りはおっとりしている春奈だった。

「乗って乗って」

「帰るし」

「うん。それじゃあ」

こうしてやっと乗る春奈だった。華奈子は彼女が乗って前で先導役になったところであらためて彼女に対して尋ねるのであった。

「それで春奈ちゃん」

「ええ」

「滝壺で何やってたの？」

青いビキニと半ズボンタイプの水着姿の彼女に対して尋ねる。

「あんな場所で」

「ちよつと滝を昇ってたの」

「こう言う春奈だった。」

「泳いでね。やってたのよ」

「そんなことしてたの」

「魔法で後ろから追い上げてね。何回かそれしてて」

「しかも何回も」

「ちゃんと一番上までいつてるわよ」

「このことも話すのだった。」

「それでまた降りてそれを繰り返して」

「流石ね」

華奈子は春奈の今の言葉を聞いて唸るように頷いた。

「春奈ちゃん、泳ぎも水の魔法もグレードアップさせたのね」

「泳ぐのは得意だから」

謙遜して答える春奈だった。

「だからそれは」

「凄いのには変わりないわよ。そうね、春奈ちゃんも凄いのね」

その春奈の凄さをあらためて感じる華奈子だった。

「何か皆に負けていられないかも」

そしてこうも言うのだった。六人が六人それぞれいい意味でライバルになってきていた。

第一百九十話

完

2
0
9
・
5
・
5

第九十一話

第九十一話 助手が一人だけ

小田切君は博士の助手である。しかも雇われている身分だ。

従って給料は入る。しかも手取り四十万でボーナスまである。しかも食費やアパート代も別に出してくれる。かなり物凄い給料である。

「けれど今まで中々人が来なかったのじゃよ」

「それはそうでしょうね」

博士に対してその理由ははっきり言えるのだった。

「だって博士の助手ですから」

「天才の助手というのは苦労するからのう」

「まあ字が違いますけれどね」

かなりダイレクトに言うのだった。しかしそれで動じる博士でもない。

「僕だってあれですよ」

「あれとは何じゃ？」

「何か成り行きで今ここにいますし」

電柱の求人への貼り紙を見てであったのだ。

「もう何時の間にか」

「資格は問わぬ」

そんなことにこだわる博士ではない。

「やる気のある者が来ればそれでいいからのう」

「じゃあ僕じゃなくてもよかったですか」

「うむ」

実はそうなのだった。

「別のう。小田切君じゃなくてもものう」

「まあその時就職も決まってなかったですし」

それで困つてもいたのである。

「それで来たんですけれどね」

「しかし他にも就職が決まっておらん若者は一杯おるじゃろうに」
「ちなみに助手の募集は一人でなかつたりする。」

「それで何で君だけなのじゃろうな」

「だから博士ですから」

またこのことを言う小田切君だった。

「博士は世界的な有名人ですよ」

「よいことじゃ。世界がわしを知っておるのだからな」

「決していい意味ではないですよ」

実はそうなのだった。

「もうそれこそ。史上最凶のマッドサイエンティストとしてですね。
赤ちゃんでも知ってますから」

「ふむ、ではわしはアメリカ大統領より有名なのじゃな」

「世界的宗教の教祖より有名だと思えます」

あえてその名前は言わない小田切君だった。

「絶対に」

「だったら助手がもつと来てもいいものじゃがのう」

「だからこそ来ないんですよ」

話が完全に噛み合っていなかった。見事なまでに。

「博士ですから」

「しかし。助手が一人というのじゃ」

この博士の耳は人の言葉は聞こえないのである。実に自分自身にとつて都合のいい耳である。

「思えば寂しいのう」

「つていうか今まで助手いたことつてあつたんですか？」

「あつた時もあるのじゃがない時の方が圧倒的に多いのう」

やはりそうであつた。

「この二百億年のう」

「そもそも何歳なんですか、本当に」

実は孤独な博士であった。それも当然であるが。

第百九十一話 完

2009・5・12

第百九十二話

第

百九十二話 けれど人手は

実はいつも助手を募集している博士、しかしであった。

「やはり来ぬのう」

「だから当然なんですって」

この話はループしていた。

「博士ですから」

「給料は手取り四十万で食費に部屋代も出す」

条件もまた述べる。

「しかも年三回ボーナスがあつて一年で月給が一万ずつ増えていてもか」

「その前にどんな目に逢うかわかりませんからね」

これが誰も来ない理由のもう一つだった。一つは博士の助手という仕事そのものについてである。

「だからですよ」

「しかし君は生きておるぞ」

「まあそうですね」

小田切君はここで己の過去を振り返る。そのうえでの結論は。

「奇跡でしたよ」

「そうなのか」

「そうですね。南極に博士と一緒に隔離されたこともありましたし、なおこれは終身刑であった。

「そこからカイザージョーで帰ったりしたこともありましたよね」

「楽しかったじゃろ」

「つていうかあそこでも死ぬと思いましたよ」

その時のことを話すのだった。

「本当にね」

「だから生きておるではないか」

「ですから運がよかつたんですよ」

また二人の言葉は完全に食い違ってしまった。

「僕は。昔から運はかなりよくて」

「じゃからわしの助手になる榮譽を授かつたのじゃな」

「いえ、それは悪い意味での運命でしたから」

こう返す小田切君だった。

「本当に」

「運命は引き寄せるものじゃ」

博士の言葉が急に変わってきた。

「自分でのう」

「じゃあ僕が自分で選んだっていうんですか？」

「その通りじゃ。君はわしのところに来たかつたのじゃ」

とはいってもその内容自体はいつも通り強引である。

「だから来たのじゃよ」

「全然そうは思えないんですけれどね」

小田切君にとっては不運という意味の運命にしか思えなかったの

である。

「それは」

「まあそれで給料じゃがな」

「はい」

「臨時ボーナスも加わって今月は手取り六十万じゃよ」

「臨時ですか」

「そうじゃ。留守番を多くしてもらったからのう」

博士はいつもあちこちに言って犠牲者を探している。その間小田

切君が研究所の留守番をしていたのだ。それへの報酬だというのだ。

「だからじゃ。受け取っておいてくれ」

「はあ。わかりました」

何はともあれ報酬は多いことには満足している小田切君だった。

しかしそれでも助手はずっと彼一人のようである。

第一百九十二話

完

2
0
9
・
5
・
1
2

第百九十三話

第百九十三話 お金の稼ぎ方

「しかしまあ一人だと小田切君も忙しいじゃろ」

「はあ」

実際のところあまり働いてはいない気もするが一応額はする。

「まあ人が多い方がいいでしょうね」

「雇うお金はあるのじゃよ」

博士はお金に困ったことはないのだ。

「この前そこいらの不良が因縁つけてきたんでそいつ等を解剖して内臓を売ってやった」

「相変わらず物凄い非人道的ですね」

実に今更な言葉である。

「それで何人位そうしたんですか？」

「その連中が五人か六人じゃったな」

つまり少なくともそれだけの人命が失われたのである。

「わしを知らぬと見えて親父狩りとかしようとしてきたから懲らしめてやったのじゃよ」

「懲らしめたんですか」

「わしの懲罰は命を代償にするのじゃよ」

やはり平然と言うのだった。

「まあ内臓を売った程度で勘弁してやったのじゃ。生きていても何の役にも立たんのじゃからせめて内臓を売ってわしの研究費用になるのじゃ」

「はあ。何か言葉が矛盾している気もしますが」

内臓を売った程度で、ということである。それだけで人間として実に恐ろしい悪事であるのだが博士は全く意識してはいないのである。

「まあ他に犠牲者は？」

「ついでにその連中の学校まで行ってやったら何か全員碌でもないのばかりじゃったからその連中をゴツキローチで捕まえたうえで校舎はエンペライザーで完全に更地にしてやって跡は底なし沼にしてやったのじゃ」

彼の悪事は実に徹底している。これはいつものことだ。

「それでその生徒も全員内臓を売ってやった。生きたまま解剖すると一番いいのじゃよ」

「生きたままですか」

「しかも麻酔なしじゃ」

博士の趣味の一つに解剖がある。彼は気に入らない人間を捕まえて気が向けば拉致し拘束した後で麻酔も何もせず解剖するのである。そして内臓を全て売りさばくのだ。

「それが叫び声も聞こえるしイキがよくてのう」

「はあ。イキもいいんですか」

「のべ三百人は解剖して内臓を売ってやった」

つまり三百人も殺したのである。

「どうせ世の役に立たん不良達じゃ。悲しむことはないぞ」

「そういう問題じゃないと思うのですが」

「とにかくそれで手に入ったのは二十億じゃ」

「多いですね」

「内臓はよく売れるのじゃよ」

まるで農家の人が人参や大根を売るような何でもない口調である。

「研究費用にもなるしのう」

「二十億もありますからね」

「他には兵器を売ったりして金は稼いでおる」

これも犯罪である。言うまでもなく。

「さて、今月の収入は百億じゃよ」

文句なしに大金持ちである。

「あとは錬金術で金やダイヤでも造るかのう」

「お金は簡単に稼げるんですね」

「そんなものはどうとでもなる」

錬金術まで極めている博士ならばだ。

「わかればほれ。バイト君を探すぞ」

「わかりました」

お金が入ったところでアルバイトを募集するのだった。これがまた騒ぎの元になる。

第百九十二話

完

2009・5・17

第九十四話

第九十四話 アルバイト募集

「で、まあ小田切君さ」

「とりあえず貼り紙からなんだね」

「うん、じゃあ貼っていいこう」

博士がアルバイトを募集することになり小田切君は早速ライゾウ兄とタロ弟を連れて街に出る。その手には貼り紙とテープがある。

「一枚一枚ね」

「あとインターネットのサイトでも求人を出したし」

「他にはアルバイト雑誌でも求人広告出したしね」

「それでも来るかなあ」

しかし小田切君はここでぼやくのだった。

「果たして誰か。来てくれるのかな」

「絶対に来ないと思うよ」

「僕もそう思うよ」

二匹はこう小田切君に対して答えた。

「だってあの博士の研究所だろ？」

「どんなに困ってる人でもまずね。来ないよ」

「うちの博士は世界的に有名な人だからなあ」

悪名という意味である。

「それこそ。各国語にしてそのうえでネットにも雑誌にも出して
けれど」

「それでも絶対に来ないって」

「小田切君だってよくいると思うよ」

「そういえば辞めようって思ったことないな」

小田切君はふとこのことに気付いたのだった。

「南極に隔離されたり得体の知れない物体にまで変えられた死体を

捨てさせられたりしたけれどね」

「普通の人間そこまで経験しないよ」

「っていうかあの博士の名前見ただけで皆逃げるから」

それが普通の人である。

「どんな殺され方するかわからないから」

「もう側にいるだけで」

「そういうことをするのはあくまで不良とかチーマーとか暴走族とかヤクザ屋さんとかだけだけれどね」

つまり博士はそういう職業の人種が嫌いなのである。

「それでも皆来ないからねえ」

「だから今回も絶対に来ないって」

「来たら僕達驚くよ」

ライゾウ兄もタロ弟も遠慮なく言う。

「本当によ。貼り紙貼ったらそこには鳥さえ近寄らないぜ」

「子供も逃げ出すよ」

「だよなあ。絶対に来ないね」

小田切君もそれは確信していた。

「まあそれでも。やってみるかな」

「とりあえず時間はあるからな」

「貼っていいこうよ」

「そうだね。仕事だしね」

小田切君は二匹の言葉に伝えて述べた。

「一枚ずつね。丁寧に貼ってくか」

「そうそう、地道が一番だからな」

「じっくりしていこう」

「何か研究所に入ってはじめて聞く言葉だね」

このことも今気付いたのだった。

「まあそれが僕の座右の銘だけれどね。焦らずコツコツ地道に」

「今全然離れてるけれどな」

「それでもなんだね」

「うん、そうだよ」

そんなことを二匹と話しながら今は貼り紙をしていくのだった。
とりあえず今は地道な小田切君だった。

第百九十四話 完

2009・5・17

第百九十五話

第百九十五話 折角来たバイトも

「おう、ここかよ」

「何か面白そうじゃねえか？」

「ってというかバイト料すげえいいじゃねえか」

「なあ」

見るからに頭があれそうな暴走族や不良達が研究所の前に集まっていた。彼等はその研究所が一体どんな場所なのか全く知らなかった。

「これいけるぜ。一日いったらそれで風俗行けるしよ」

「シンナーやり放題だぜ」

「もうカツアゲとかする必要ねえぜ、遊んでいられるぜ」

「こんなことを言っつて研究所に入り。そうして言うのだった。」

「おう、バイト探してるんだって？」

「俺等でよくね？」

特攻服に如何にもといった感じの柄の悪い服装のまま研究所の中に入る。そうして三十分後研究室で何が起こったのかというところ。

「お、おい離せよ！」

「何するつもりだ手前！」

「調子こいてつと殺すぞ！」

「丁度実験の素材が欲しかったところじゃ」

彼等は研究所の実験用ベッドの上に拘束されていた。両手両足を動けなくさせられてそのすぐ側に博士が怪しげな手術道具を持っていた。

「わしも運がいいのう」

「はあ！？バイトじゃねえのかよ」

「手前嘘ついてんのかよ、嘘よ」

「バイト！？わしは人を選ぶ」

博士はバイトにも一応人を選ぶのである。

「じゃが御前等のような連中はじゃ」

「何だつてんだよ」

「雇わないつてんのなら帰せよ」

「ふざけてんじゃねえぞ」

「ふざけてはおらん」

彼等に対して相変わらず平気な顔で返す。

「バイト君も探しておつたが実験材料も探しておつたのじゃよ」

「実験つて何なんだよ」

「食い物がよ」

どうやら実験という言葉も本当に知らないらしい。

「手前の言葉意味わかんねんだよ」

「何言つてんだよ」

「わからなくともよい」

博士はそんなことは全く気にしてはいなかった。

「さて、それではこれから」

その右手にメスを持つのだった。

「実験を開始するとするか」

「おいこら、だから実験つて何なんだよ！」

「放せつてんだよ手前！」

「何様のつもりだよ！」

彼等の叫びはそのまま響くだけだった。博士のメスが煌きまですはそれぞれの首が切断され。それから恐ろしい実験がはじまったのだった。

「またあの研究所からか」

「新たな犠牲者が」

また街から暴走族や不良が姿を消した。最早これは日本の風物詩となっていた。博士は実験材料やそうしたことには彼等を使うのである。

第一百九十五話

完

2
0
9
・
5
・
2
5

第百九十六話

第百九十六話 今回の実験の目的

その尊い命を自分達の意志とは全く無関係に博士に捧げた暴走族や不良達。その屍はミキサで粉々に砕かれ焼却処分にされてしまった。

小田切君が帰った時にはその実験はもう終わっていた。彼等はその存在を瞬く間に影も形もなく消されてしまっていた。やはり彼等の意志とは全く無関係にだ。

「で、今回は何の実験だったんですか？」

「ちよつと血の入れ替えの実験をじゃ」

博士は静かにこう述べた。

「やって見たのじゃよ。まずは実験材料の首を切断してじゃ」

「いきなりそれですか」

「それから止血をして血を入れ替えたのじゃよ。醤油にな」

「はい！？」

醤油と聞いて思わず声をあげた小田切君だった。

「醤油といますと？」

「だからじゃ。ちよつと人間の血と醤油を入れ替えてみてじゃ」

「そんなことをしたんですか」

「あつという間に死んでしまつたわ」

実にあつさりと言うのだった。

「首をつなげて蘇生させてやったのにすぐにだったぞ」

「そりゃ死にますよ」

とんでもない実験で人命を使うのはいつものことだった。

「醤油なんて」

「あとソースとかチリソースとかにも入れたのじゃがな」

「やっぱり死にましたよね」

「入れ替えの時点で苦しみ抜いて死んだぞ」

人が死のうがそれで何かを思う博士ではない。

「断末魔の顔はよかったのじゃがな」

「そんなことやってたんですか」

「まあ些細なことじゃ」

博士にとつてはである。あくまで。

「暇潰しにはなったのう」

「そうですね。暇潰しですか」

「偉大なるわしの実験に貢献した」

完全に自分の主眼のみで語っている。博士にないものは人権思想の他にも色々とあるが他人の苦しみや人生について考えるところともまたその一つなのである。なお他には常識や良識や中庸やそうした思想もまた何一つとして存在していない。それも全く。

「感謝してもらいたいものじゃよ」

「それで何か得たんですか？」

「うむ。やはり苦しみ抜いて死ぬ」

博士がわかったのはこれであつた。再確認である。

「今度は暴力団の連中を捕まえてやってみることにする」

「暴力団員をですか」

「気に入らんからのう」

博士が実験の犠牲者を選ぶ最大の根拠である。

「ちよつとな。百人ばかり捕まえてそれで断末魔の叫びも録音してやる」

「左様ですか」

「うむ。断末魔の叫びを聞くのもよい」

博士にとつては最高のBGMである。

「それもよいことじゃ」

「それはいいですけど」

とりあえず博士のそうした狂気の趣味は置いておいて問う小田切君だつた。

「何か最近遊びで色々な人そうやって犠牲にしていますか？」

「ついでに街の掃除もしておるのじゃ。よいことじゃる」

「誰もそうは思っていないせんよ」

誰もが博士の行動を取り締まろうとしている。しかし博士の狂気の実験に発明は続くのだった。華奈子達はまた彼に向かうのであった。

第百九十六話 完

2009・5・25

第百九十七話

第百九十七話　プールから帰ると

プールから帰って華奈子達。暫くはクラウンの活動に専念できた。

「っていつかさ」

「どうしたの？」

「バンドやるのも久し振りよね」

華奈子は学校の体育館で練習しながら美奈子に語るのだった。

「何か最近色々あったから」

「本当にね」

そして美奈子も双子の相方のその言葉に対して頷く。

「それはその通りね」

「そうよね。もう博士が訳のわからないことばかりするから」

何故活動が滞っていたか。原因は他ならぬそこにあった。

「そのせいでね」

「本当にね、全く」

美奈子は華奈子の言葉にまた頷いた。

「気付けば何するかわからないから」

「それにしても。ありとあらゆる騒動を引き起こす人よね」

華奈子がつくづく思うのだった。

「悪事どころじゃないしね」

「そうね。警察がどうしようもない位だから」

だから彼女達の出番となっているのだ。普通の人間ではとても相手にならないからだ。それで魔女の力を助っ人に行っているというわけである。

「それでも最近大人しいわよね」

「大人しくていいわよ」

華奈子はうんざりとした顔で述べた。

「あんな変態博士。一生ね」

「そうね。このまま静かにしておいてくれたらいいけれど」

「絶対そんな筈がないけれどね」

そんな博士ではないことは皆わかっていた。

「あの博士に限ってね」

「そうよね。問題は今度はどんな騒ぎを引き起こすかだけれど」

「また何か改造人間出してくるのかしら」

華奈子はまずはこのことを想定したのだった。

「やっぱり」

「どうかしら。毒ガスじゃないかしら」

美奈子が想定したのはこれだった。

「そうした大量破壊兵器出すとか」

「有り得るわね、それも」

「そうでしょ？本当に何してくるかわからないわよ」

「なのよねえ。本当に何するのかしら」

華奈子はあらためて考える顔になってしまった。

「今度は」

「何なんだろうね、洒落にならないことだったのはわかるけれど」

「ええ。覚悟は決めておきましょう」

「そうね、何が起こってもいいようにね」

「そういうことよ」

こう話していく。そのうえでそれぞれ楽器を使ってみる。華奈子はサククス、美奈子はフルートを。それぞれヴォーカルと共に担当している楽器である。

「あれっ、結構長い間やってなかったのに」

「いけてる？」

「そうね。いい感じじゃない」

音楽に戻ると感じはよかった。しかしそれはあくまで束の間のひとであつた。

第九十七話

完

2009・5・31

第九十八話

第百

九十八話 家に帰ったらもう

久し振りのバンドの練習を終えて家に帰ってきた二人。だが早速。

「よお御主人」

「待ってたよ」

「お待ちしてありました御主人様」

「ようこそお帰りに」

ライゾウとタロ、それにタミーノとフィガロが玄関で二人に挨拶してきた。とりあえずこれはいつものことなので二人は特に気にはしなかった。

「それでだけれどよ」

「悪いニュースがあるよ」

「ああ、もうわかったわ」

それだけで充分であった。

「博士よね」

「うん、その通り」

「その博士だよ」

やはりライゾウとタロの返答はこれであった。

「もうね。早速はじめてるから」

「アルバイトに来た柄の悪い人達を」

「どうやって殺したの？」

もう早速こんな調子で尋ねるのだった。

「それでその人達を」

「何かまた遊びで実験に使ったらしいよ」

「それでね。一応行方不明になってるけれどマスコミも信じてないし」

最早それで誰も信じられるような博士ではないのだった。

「とうわけでき」

「出番が来たってわけ」

「やれやれね」

華奈子はそれを聞いてまずは溜息をつくのだった。

「予想通りだけれど」

「それでタミーノ、フィガロ」

「はい、御主人様」

「何でしょうか」

美奈子の使い魔達はかなり礼儀正しい。二人の個性がそのまま使
い魔達にも出ているようである。

「今博士は何をやってるの？」

「とりあえず道で出会った不良達を拉致しています」

「そして気の向くまま生体実験を」

「そうなの」

とりあえず話は聞いた。しかし納得はしていない。

「いつも通りなのね」

「その通りです」

「それでどうされますか？」

「それはもう決まってるわ」

「選択肢は他にはなかった。

「皆ももう知ってるわよね」

「はい、それはもう」

「間違いありません」

「わかったわ。じゃあ華奈子」

「ええ」

使い魔達の言葉を聞いたうえで華奈子に対して声をかけた。

「皆とお話しましょう」

「まずはね」

こうしてまずは六人全員が集合するのだった。こうして再び博士
との戦いがはじまるのだった。

第一百九十八話

完

2
0
9
・
5
・
3
1

第百九十九話

第百九十九話 再び集まって

今田先生のその塾に集まった六人。既にその服は魔女の法衣だった。それに身を包んでいるのだった。しかも使い魔達も一緒であった。

「じゃあさ、これからだけれど」

「ええ」

美奈子が華奈子の言葉に応えるのだった。

「博士がまた活動をはじめたけれどね」

「やることは決まってるわよ」

美奈子がここで告げた言葉は実にストレートなものだった。

「あの博士を止めるのよ」

「それよね、やっぱり」

「そうよ。またあれでしょ？」

そしてここで話すのだった。

「暴走族の人とかを生体実験に使ってるのよね」

「ええ、その通りよ」

やはりであった。いつも通り非道を極めているのだった。

「アルバイトの面接に来てね。そのままね」

「えっ、それって何よ」

赤音はそれを聞いて思わず声をあげてしまった。

「アルバイトの面接に来た人をそのまま生体実験に使ったの!？」

「そうなのよ、態度が気に入らないってね」

「また随分と滅茶苦茶ね」

赤音は美奈子の説明を聞いてあらためて呆れたようであった。

「それはまた」

「まああの人らしいけれどね」

美樹はこうコメントするのだった。

「気に入らないってだけで生体実験の素材にするのは」

「もうそれで結構犠牲者が出てるのよ」

「結構なのね、もう」

「そうなのよ」

美奈子は難しい顔で美樹に言葉を返した。

「厄介なことだね」

「じゃあ、もう決まりね」

次に言ったのは梨花だった。

「何とかしないとね」

「そういうこと。博士を止めるわよ」

「今度は宇宙空間どころじゃ終わらないわよ」

華奈子は既に気合充分であった。

「もうね。銀河の果てまで送ってやるわよ」

「その意気でいかないとね」

美奈子も言うのだった。

「絶対にね。何とかしないとね」

「ええ。それでよ」

ここで華奈子がふとした感じで言うてきたのだった。

「先生は何処なの？」

「あれっ、そういえば」

「何処かしら」

皆先生が何処にいるのかは知らなかったのだった。

「そういえば」

「何処なの？」

肝心の先生がいなかった。このことがまず問題なのだった。

2
0
0
9
·
6
·
7

第二百話

第二百話 先生達は

今田先生はこの時何をしてたかというところ。実に呑気なものだった。この先生の場合はそれが常なのでこれもまた問題なのだが。

小百合先生と二人でお茶をしていた。また二人で遊んでいたのだ。

「ねえ香ちゃん」

「何？小百合ちゃん」

その明るい調子でケーキも食べていた。

「これからどうするの？」

「どうするのって決まってるじゃない」

その明るい呑気な調子で答える今田先生だった。

「それはね」

「決まってるのね」

「そうよ。このまま飲みましょう」

こつ小百合先生に答えるのだった。

「お茶をね」

「そうね」

そしてにこやかに返す小百合先生だった。

「今日もね。仲良くね」

「ところで小百合ちゃん」

今田先生はのどかなま言葉返してきた。

「このお茶は何処のお茶なの？」

「セイロンのお茶よ」

つまりセイロンティーということだった。

「それだけね」

「あっ、セイロンティーなのね」

「どうかしら。ローズティーもあるけれど」

それもあるというのだった。

「そうよ。このセイロンティーを楽しみましょう」

「今はね」

「これが終わったらローズティーよ」

それも飲むというのだった。

「お茶菓子は」

「今はチョコレートパイだけねど」

喫茶店でのどかに話していくのだった。

「ローズティーの時は何にしようかしら」

「いいがあるわ」

今田先生はまたにこりと笑って答えてきた。

「パイの次はケーキにしましょう」

「ケーキね」

「ええ。ローズケーキ」

そういったものもあるのだった。当然薔薇を入れたケーキである。

「それをね。皆でね」

「そうね。じゃあ」

「薔薇には薔薇よ」

今田先生のにこりとした笑みでの言葉は続く。

「それでいいわね」

「そうね。薔薇尽くしでね」

「楽しめばいいわ」

「香ちゃんの生徒さん達にも御馳走しましょう、今度はね」

「そうね。美味しいものは皆で食べて飲まないね」

「その通りね」

こんな調子だった。とにかく呑気な彼等であった。

2
0
0
9
·
6
·
7

第二百一話

第二百一話　まずは偵察から

再び博士と戦うことを決意した六人。しかしすぐには動かないのだった。

「まずは情報を集めましょう」

「情報をなのね」

「ええ。まずはそれからしたらいいと思うわ」

六人の中で最も頭がいい春奈が穏やかな調子で皆に話すのだった。「博士つてすぐに研究所の周りに変な生き物とか兵器とか置くじゃない」

「そうなのよね、悪質なことにね」

「そうしたこと大好きな人だから」

とにかく何をすることも悪質な博士なのである。

「じゃあまずは周りを偵察するってことね」

「それね」

「では御主人」

「僕達が」

早速春奈の足元にいるイーとリヤンが名乗り出てきた。その蛙と亀の使い魔の彼等である。当然ながら皆使い魔も集めてきているのだ。

「行きますから」

「そういうことで」

「いえ、いけないわ」

しかし春奈は彼等のそんな申し出を拒むのだった。

「今回はそれは駄目よ」

「えっ、何ですか？」

「偵察とかってまさに僕達の仕事なのに」

「それでもよ。今回は駄目よ」

やはりそれはさせない春奈だった。

「どうしてもね。絶対に駄目よ」

「何でなの？それって」

華奈子も何時になく強情な調子の春奈に対して首を捻りながら尋ねた。

「そんなに行かせないのは。どうしてなのよ」

「危険だからよ」

だからだという春奈だった。

「最近でも不良校を全部蛇の巣にしたりまた巨大ロボットで暴走族壊滅させたでしょ」

「それ本当にいつものことだけねどね」32

華奈子は春奈の話を聞いてからこの言葉を出すのだった。

「厄介なことだね」

「それでね。考えたのだけれど」

そのうえでさらに言う春奈だった。

「あのね、偵察にはね」

「ええ」

「それでどうするの？」

皆その春奈に尋ねるのだった。

「使い魔使うのは確かに危険だけれど」

「それでも偵察はしないとどうにもならないのよね」

「影を使いましょう」

春奈がここで言う言葉はこれであった。

「影をね。それでいきましよう」

「影！？」

「っていつとどうするの？」

「それはね。今から話させて」

春奈はこう皆に切り出した。そうしてそのうえで今の自分の考えを話すのだった。それは他の五人にとってもかなり驚くべきことで

あつた。

第二百一話

完

2009・6・15

第二百二話

第二百二話 影

「それでね」

「ええ」

「影よね」

皆春奈の言葉に注目する。注目しているのは五人だけでなくそれぞれの使い魔達も同じである。じつと彼女の言葉に注目しているのである。

「影をどうするの？」

「何かするのよね、やっぱり」

「そうよ」

やはり春奈の返事はここでもしっかりとしたものだった。

「その影でね」

「それでその影は誰の影なの？」

華奈子は最初にそのことを尋ねるのだった。

「自分の？それとも他の人の？」

「自分達だよ」

春奈はそれは自分だけではないというのだ。やはりその言葉は深いものがあつた。

「私達も。それで使い魔達のもね」

「そうなんだ」

「僕達のも」

イーとリャンが主の言葉を聞いてまた言う。

「それでその影を使って」

「偵察するんですね、御主人様」

「そついうことなのよ。つまりは」

春奈の話が続く。

「自分や使い魔の影を分離させてそのうえでね」

「偵察に向かわせる」

「そうするの」

「それだとかしら」

ここまで話してあらためて皆に尋ねる春奈だった。

「影なら物理的な攻撃はされないしすぐに隠れられるし。リーダー

とかにも見つからないしかなりいいじゃないかって思っただけねど」

「そうね」

まずは華奈子が彼女の言葉に応えるのだった。

「あたしはいいと思うわ」

「華奈子ちゃんは賛成ね」

「ええ。影からその偵察しているところが見えるのよね」

このことも尋ねるのだった。

「だったらね。最高じゃない」

「有り難う。それで皆は？」

「そうね。私もね」

「いいじゃない」

「賛成するわ」

梨花に赤音、美樹も笑顔で言ってきたのだった。そしてそれぞれの使い魔達もだ。

「いいよね」

「そうだよね。僕達も安全だし」

「賛成します」

そして最後の一人だった。春奈は彼女に対して直接尋ねるのだった。

「美奈子ちゃんはそうでどうなの？」

「私はね」

「ええ。どうなのかしら」

「賛成よ。影を使うのも面白いわよね」

にこりと笑っての言葉であった。

「それじゃあ。これで全員賛成ね」

「ええ、そうね」

彼女も賛成してくれて心から笑顔になる春奈だった。こうして影を使って偵察をすることになったのであった。

第二百二話 完

2009・6・15

第二百三話

第二百三話 影の離し方

影を使って偵察をすることにはなった。しかし、であった。

「影をどうやって離すの？」

「そうよね。それよね」

華奈子と赤音が怪訝な顔で春奈に対して尋ねてきた。

「あたしそういった魔法はちよつと知らないけれど」

「春奈ちゃんどうやって見つけたのよ」

「この前先生がやってるの見たの」

春奈はその二人の問いに対して述べるのだった。

「影を離して。それを動かすのをね」

「つまりあれね」

美樹がそれを聞いて少し頷いてから言った。

「門前の小僧習わぬっていうのね」

「うん、それ」

春奈もこくりと頷いて美樹のその言葉に答える。

「それで覚えたの」

「そうなの。いいじゃない」

そして梨花はそれをいいとするのだった。

「そうやって先生の技をこつそり拝借するのも魔女のお勉強の一つよ」

「そうなの」

「先生も言っていたじゃない、これって」

今度は華奈子が明るく笑って戸惑ったようになっていた春奈に対して述べた。

「習うのもいいけれどこつそりその技を盗み見て身に着けるのもいいって」

「そうなの。だったら」

「いいのよ。それで春奈ちゃん」

「え、ええ」

まだ戸惑いは残っていた。それでいつも通り元気な華奈子に対しても遅れを取ったような形になってしまっているのだった。

だがそれでもちゃんと応えはしていた。春奈も昔に比べると強くなっているようである。

「その魔法だけれどどうするの？」

「そうね。それね」

美奈子もそれについて尋ねる。

「肝心の魔法は。どうやって使うの？」

「ええとね」

春奈は美奈子の問いに応えまずは。右手に持つそのステッキを動かしてみせたのだった。

「このステッキをね」

「ええ。ステッキを」

「こうするの」

こう言って足元の影の付け根にちよんと置くのだった。

「それでね。こうやってね」

「うん、こうして」

「こうやって？」

皆もそれに合わせてそれぞれのステッキを足元の影の付け根にやる。

「それからどうするの？」

「これから」

「ここからね」

皆に応えながら今度は。

魔法を唱えるのだった。その魔法は。

「シャドウムジマジマー……」

こう唱えるとそれで影が離れた。そのうえで一人で動きはじめるのだった。

「いじやるの」

影を離れたうえでにこりと笑ってみせる。今皆その動く影を見るのであった。

第二百三話

完

2009・6・22

第二百四話

第二百四話 動く影

春奈の影はそのまま春奈の形をしている。見れば仕草も彼女そっくりである。

「動いてるね」

「そうね」

皆その影の動きを見て言う。

「じゃあ私もやってみようかしら」

「私も」

そして今度はそれぞれ春奈が今した通りに呪文を唱えてみたのだ。つた。

「シャドウマジマジマー……ジ」

「シャドウマジマジマー……ジ」

するとやはり彼女達の影も動きだした。しかもその動きは彼女達の思う通りに動くものであり念じればそのままの動きを見せてくれた。

「あつ、こつ動いてくれるんだ」

「成程」

皆その影の動きを見て楽しそうに言った。

「面白いじゃない、これって」

「こつやって動かすのね」

「そうなの。自分で念じた通りに動いてくれるのよ」

春奈は皆にも話した。

「この影はね」

「そうね。じゃあ博士のところに行けって念じたら」

「行ってくれるのね」

華奈子と美奈子は自分達の影を動かしながら春奈に尋ねた。見れば華奈子の影はブレイクダンスを踊っていて美奈子のそれはフルー

トを吹いている。それぞれ個性が出ている。

「そうなの。勿論使い魔達のもね」

「はい、こうやったら」

「それでいいのね」

「じゃあ」

赤音、美樹、梨花がそれぞれの使い魔達の影にステッキをやって呪文を唱えるとやはり同じであった。影が離れて独自の動きをしたのであった。

「うわっ、動いてくれるわ」

「見事見事」

「それじゃあこの影達で」

「ええ。博士のところだね」

春奈は二人に対しても言った。

「行けるわよ」

「流石にあの博士でもね」

華奈子がここでまた言う。

「影まで攻撃はできないでしょ」

「そうね。あの博士魔術も使っらしいけれど」

美奈子は何気に不吉なことを言った。

「流石にそこまではできないと思うわ。影から本隊を攻撃するのはね」

「そうね。じゃあ安心して行かせることができるわね」

「そう思うわ」

とはいっても今一つ自信のないような美奈子の返事であった。

「それよりもまずあのとんでもない科学とかで来るわ」

「そうね。じゃあ用心しながらこっそりと」

流石に華奈子も今回はいささか慎重である。

「行きましょっ」

「ええ」

こうして六人と使い魔達の影が博士の研究所に向かった。ものや

音は影を通してはつきりと見えていた。これまた実に新鮮な感覚であつた。

第二百四話 完

2009・6・22

第二百五話

第二百五話 影が向かい

こうして自分達とそれぞれの使い魔達の影を博士の研究所に向かわせた華奈子達。今は先生の塾にいてそこであれこれと話をしているのだった。

「そういえばさ」

「どうしたの？」

「あたし達影出したけれど」

華奈子が春奈に言ってきた。

「それでも影今あるけれど」

「ええ」

「これってどういうことなの？」

こう春奈に問うのだった。

「影は出したのに」

「影は幾つでもあるのよ」

春奈はまずはこう華奈子に話すのだった。

「ほら、光を同時にあちこちから浴びる時ってあるじゃない」

「ああ、学校の体育館とかよね」

こう言われるとすぐにわかった華奈子だった。

「天井に一杯ライトがあるわよね」

「そうよ。そこが一番わかりやすいと思うけれど」

「確かにね」

こう言われると実によくわかる華奈子であった。やはり頭は悪くないのである。

「あそこだと影は薄いけれど一杯出て来るわよね」

「それと同じよ。影は幾つでもできるのよ」

ここでまた同じことを話す春奈だった。

「何ならまた他に出せるけれど」

「あつ、それはいいわ」
華奈子はそれはいいとしたのだった。
「それはね。いいから」
「そうなの。いいの」
「だって。皆の影が向かったし」
言いながら影が見ているものも同時に見ていた。二つの場所が同時に頭の中に浮かんでくる、非常に特殊な経験もしているのだった。
「それにライゾウやタロもいるし。もう充分よ」
「そう。それじゃあいいのね」
「けれどこの術って凄いわよ」
華奈子はあらためて感心したような言葉を出した。
「だって。影は幾つも出せるのよね」
「ええ、そうよ」
「その気になつたら何個でも同じ場所を見られるから」
華奈子が言うのはこのことだった。
「凄いわよ。これって」
「じゃあこれから使ってみる？皆」
「使いましょう。是非ね」
華奈子が皆を代表して言うのだった。
「ではそういうことだね」
「ええ。じゃあまずは博士の研究所ね」
「遂に来たわよ」
華奈子は影が見ているものを脳内で見ながら言った。
「研究所にね」
「さて。何が見えるかしら」
皆離れてはいても頷くのだった。彼女達は今見るべきものを見よ
うとしていた。

2
0
0
9
·
6
·
3
3
0

第二百六話

第二百六話 研究所で見えるもの

「さて、と」

「研究所に着いたけれど」

皆影が見ているものを脳裏に思い浮かべながら述べる。

「何が出て来るかしらね」

「それが問題ね」

「どうせとんでもないものよ」

華奈子はそれは確信していた。

「あの博士がやることだから」

「そうよねえ。何かさ」

赤音はぼやいたように述べた。

「蛇が一杯見えない？」

「見えるわ」

美樹が少し嫌そうな顔になっていた。

「百匹とか千匹じゃないわよね。これって」

「一万匹はいるわ」

梨花は言葉だけは冷静だったが顔は顰めさせていた。流石に誰でもそれだけの数の蛇を見れば気持ちいいものではなかった。だからである。

「これはね」

「一万どころじゃないかも」

「もっといてもおかしくないわ」

美奈子と春奈も暗い顔になっていた。

「しかも。何あれ」

「嫌なものが見えるわね」

華奈子と美奈子もまた思いきり暗い顔になっていつてきている。

「蛇が骸骨さんの周りにうじゃうじゃ集まっているわよね」

「側に鉄パイプもあるし」

そして改造してありマフラーがこれでもかという程付いているバイクが転がっている。一体どういった連中がどうなったのかよくわかるものだった。

「暴走族の人達が、よね」

「蛇の餌かしら」

「相変わらず残虐非道なのね」

華奈子は呆れ果てた声を出さざるを得なかった。

「あの博士は」

「そうみたいね。さて、と」

華奈子もまた博士の非道に呆れながらもそれでも言っただった。

「それはいいとしてよ」

「ええ。とりあえず外は全部観たわよね」

「中も見てみない？」

「こう華奈子と皆に提案するのだった。」

「中もね。どう？」

「中もなの」

「ほら。今まで博士の研究所は見たことなかったじゃない」

美奈子はこのことを皆に話す。

「外見は今も含めて何度も見てるけれど中身はね」

「そういえばそうね」

華奈子は美奈子のその言葉に対して頷いた。

「じゃあ影だしここは思い切って」

「そうするのいいと思うわ」

美奈子もまた思い切った声だった。

「いきましよう。いいわね」

「ええ、いいわ」

華奈子が皆を代表して頷いた。こうして今彼女達はその影を研究所の中に潜入させようとするのだった。

第一百六話

完

2
0
9
・
6
・
3
0

第二百七話

第二百七話 研究所の中には

六人の影達は博士の研究所に入ってみた。入ったそこはとりあえず異様な雰囲気を感じられる場所だった。

皆は影を通してその研究所を見回りながら。こう言い合っていた。

「何か予想していたのよりもさらに」

「不気味？つていうか」

「廃墟じゃないわよね」

気配は感じるのに何故か廃墟に似たものも感じていた。

「こつて」

「間違いなく博士の研究所よ」

美奈子が華奈子に答える。

「それはもうわかるわよね」

「わかつてるけれど」

それでもなのだった。

「何よ、この不気味な気配」

「そうよね。何か死者の声が聞こえるような」

「壁に顔が見える気がするし」

「怨念が感じられるし」

「床から手が生えてるみたいなの」

赤音も美樹も春奈も梨花もその顔を思いきり曇らせてきた。皆博士の研究所全体にえも言われぬ不気味なものを感じ取っていたのである。

その不気味なものを感じながら。皆はさらに話す。

「これって何かしら」

「やっぱり博士の生体実験にされた人の怨念かしら」

「それしか考えられないわよね」

「あの博士つてただけだけ人を殺してきたのよ」

華奈子は影を通して研究所を見回り続けていた。そうしてその中で顔を曇らせて呟くのだった。

「あたしが感じ取るんだから相当なものでしょ」

「多分一万やそこらじゃ利かないわ」

美奈子も暗い表情になっていた。

「この妖気はね」

「一万やそこいらつて」

「大体博士つて気が向けばすぐに暴力団の人や暴走族の人や不良さんやチーマの人達とかを生体実験に使ったり兵器のテストに使ったりするじゃない」

博士の趣味である。博士はそうした存在が嫌いであり気が向けばすぐに暴力団の事務所に兵器を撃ち込んだり暴走族を捕まえて生体実験を行うのである。時々死ぬ際の断末魔を聞きたいからという理由だけで捕まえて惨殺したりすることもあったりする。

「それを考えたらね」

「それこそ一万や二万じゃ、なのね」

「ええ。それ位は普通にやる人よ」

美奈子は博士のことを実によく理解していた。

「確実にね」

「言つまでもないけれどとんでもない人ね」

「ええ。けれど」

「ここで美奈子はさらに言ってきた。

「困ったわね。何か道がわからなくなってきたわ」

「あつ、そういえばあたしも」

華奈子もであった。

「何かこの研究所の中つて迷路みたいだからね」

「ええ。これ以上進むのは無理かしら」

美奈子の顔が曇った。

「もつ」

「そんな。まだ入ったばかりなのに」

華奈子も皆も残念そうな顔になった。研究所の中の探索ははじまったばかりだということにもう暗礁に乗り上げてしまっていた。

第二百七話 完

2009・8・3

第二百八話

第二百八話 仕方なく撤退

「どっつ?」

「駄目ね」

美奈子は無念そうな顔で華奈子の問いに答えていた。

「こっちもね」

「そう。こっちもよ」

見れば二人は同じ表情になっていた。先への道を見つけれないでいるのだ。

それは他の四人も同じだった。皆困惑したものをさえ見せていた。

「こっちも」

「行き止まりよ」

「全然先に行けないけれど」

「どうなってんの?この研究所」

華奈子は思わず首を捻ってしまったのだった。

「何か全然先に行けなくなっただけだ」

「あれじゃないかしら」

ここで美奈子は考えたうえで述べた。

「博士がその都度研究所の中身を移動させてるんじゃないかしら」

「博士が?」

「あの博士よ」

美奈子は博士のことをよくわかっている。それは六人の中でも一番であると言ってもいい。それは博士のあまりもの異常さに興味も抱いているからだ。

「研究所の中が自在に変化する位はね」

「普通だっというのね」

「そうであっても不思議じゃないわ」

そしてこう断言するのだった。

「現によ。今ここつて」

「ええ、ここね」

美奈子と華奈子は影を通して今自分達の目の前にある壁を見るのだった。

「さつきは通路だったじゃない」

「そういえばそうだったわね」

「けれど今は壁よ」

実際に壁がある。これはどう見ても壁であった。絶対に否定できない、大きな如何にも分厚そうな壁が目の前に存在しているのである。

「つまりよ。これは」

「やっぱりこの研究所の中つてあれこれと変化してるのね」

「ある程度入ったらね。だからもう」

美奈子はここで一つの決断を下すのだった。

「帰りましょう」

「撤退つてわけね」

「少なくともこれ以上先に進むのは無理よ」

美奈子は華奈子だけでなく皆に対して告げた。

「だからね。もうね」

「少ししか入っていないけれど」

美奈子は双子の相方の言葉に如何にも残念な顔になっていた。

「それでもなの」

「下手に見つかったら影でも何されるかわからないし」

美奈子はその危惧も語った。こうしたことには慎重なのだった。

「だからね。帰りましょう」

「仕方ないのね」

「また次があるから」

こう言つて華奈子だけでなく皆にも言うのだった。とりあえず残念ではあるが撤退が決まった。この時はそれは仕方のないことだと思われ実行に移されようとしていたのだった。

第一百八話

完

2
0
9
・
8
・
3

第二百九話

第二百九話 博士とワイン

生体実験を終えた博士はまずは。昼食を摂っていた。

「さて、今日のお昼は何だったかのう」

「今日は中華料理ですよ」

小田切君が博士にこう答える。

「中華もいけましたよね、確か」

「基本的に料理は何でもいけるぞ」

こう小田切君に答える博士であった。

「和食でも何でものう」

「けれど一番好きなのはやっぱり」

「うむ、スペイン料理じゃ」

これは引けないのであった。所謂博士のこだわりである。

「やはりあれが一番じゃ」

「そうですね。それでお酒は」

「ワインはあるかのう」

ワインを頼むのであった。

「中国のワインがあれば尚よいが」

「ええ、ありますよ」

すぐにこう返事を返した小田切君であった。

「それもちやんとあります」

「尚よい」

中国のワインと聞いてさらに笑顔になる博士であった。もっともその笑顔も何故か生体実験や破壊兵器の開発をする時のように邪悪な笑みであるのだが。

「中華料理には中国のワインじゃ」

「中国のですね」

「アメリカだとアメリカのワイン」

それだというのである。

「そして和食にはじゃ」

「日本のワインですね」

「和食じゃと基本は白じゃな」

どうやら博士はワインにはかなりのこだわりがあるらしい。それが窺える今の言葉である。

「魚とかが多いからのう」

「そうですね。やっぱりお魚とかには白ですよ」

小田切君もこれには納得して頷くのだった。

「僕もそう思いますね、それは」

「しかしドイツのモーゼルはのう」

話はあの有名なモーゼルワインにも及ぶ。

「あそこは肉料理が多いというのに白は」

「チーズで飲めっていうことでしょうね」

ぼやく博士に対してこう答える小田切君だった。

「あとクラッカーみたいなのとかで」

「それもいいがのう。やはりドイツといえじゃ」

「ソーセージですか」

もう博士の言いたいことはわかったのだ。ドイツといえはやはりソーセージである。これは日本で刺身と同じで切っても離れないものである。若しかしたら日本人にとっての刺身以上なのかも知れない、ドイツ人にとってソーセージはそれ程までの存在なのだ。

「それですか」

「それじゃ。ソーセージには赤じゃ」

これもまた博士のこだわりであった。

「じゃからのう。モーゼルはのう」

「まあ中国の赤ワインでも飲まれて」

「うむ。それで夜はアメリカのティーボーンステーキじゃったな」

「ちゃんとアメリカのワインも用意してますよ、赤で」48

「それならばいいのじゃ」

何気にワインにはそれなりのこだわりを見せる博士であった。そうしてこの日は昼も夜も中国とアメリカのワインをそれぞれ楽しむのであった。

第二百九話

完

2009・8・10

第二百十話

第二百十話 煙草はどうか

博士はワインが好きである。そして他の酒はというと。

「ビールも日本酒もいけるんですね」

「しかしやはりワインじゃ」

見れば今日はビールを飲んでいゝる。しかしこう小田切君に答えるのだ。

「ワインが一番いいのう」

「そうですね。やっぱりワインなんですね」

「うむ」

頷いて答えてそれを認めるのだった。

「そうじゃ。ワインは酒の王者じゃぞ」

「僕もワインは好きですけれどね」

実はお酒はワイン党の小田切君である。このことだけは博士と同じであると言える。その他の部分は言うまでもなく全く違っているのであるが。

「まあお酒はわかりましたけれど」

「後は何がわかっておらん？」

「博士は紅茶もコーヒーも飲まれますよね」

「どちらも好きじゃ」

そちらもいいのである。中々味覚の範囲が広いようである。

「それであと甘いものも」

「甘いものも当然いけるぞ」

それもなのだった。

「チョコレートもお菓子も大好きじゃ」

「お酒も飲めてお茶もコーヒーもいけて甘いものも大好き」

全く隙がないように思える。

「じゃあ嫌いなのは」

「煙草は吸わん」

「ここでこう言うのだった。」

「あれはやらんぞ」

「そうだったんですか。煙草は」

「麻薬は他人に投下するのは好きじゃ」

「これも自分はやらないというのである。」

「気に入らん奴を捕まえてそれで麻薬中毒にさせてそれから実験に使ったり廃人にしてからそのうえで始末したりするのは好きじゃ」

「それも最悪の犯罪行為じゃないですか」

小田切君はここでまた博士に対して突っ込みを入れた。

「そんなこともするんですか」

「些細な遊びじゃ」

博士にとつて人命はまさに塵芥である。

「気に入ることはない」

「気にしますよ。まあとにかくですね」

「うむ」

「煙草は吸われないんですね」

このことを確認するのだった。薬はとりあえず博士自身は絶対にやっていないとわかったのでここでは聞かなかったことにしてしまふのだった。

「それは」

「あれは何もいいことはないからのう」

「だから吸わないというのである。」

「わしは何の興味もないわ」

「僕も吸わないですけどね」

何とここでも博士と同じだった小田切君である。

「煙草は」

「吸わなくても構わん」

やはり興味がない博士であった。

「ではビールを飲むのじゃ」

「ええ。それじゃあ」

今は二人で楽しくビールを飲む博士と小田切君だった。珍しく平和な研究所であった。

第二百十話 完

2009・8・10

第二百十一話

第二百十一話 小田切君の好物

小田切君はビールを飲んでいる。そして飲んでいれば当然ながら一緒に食べるものもある。つまりつまみであるがそのつまみは。

「枝豆か」

「ええ、これ好きなんですよ」

にこにことして枝豆を食べながら博士に伝えるのだった。

「もうね。これとビールの組み合わせになると」

「ふむ。そんなにいいものか」

「いいものかって博士」

今の博士の言葉には無意識のうちに怪訝な顔になった小田切君だった。

「枝豆食べたことないんですか？」

「あるぞ」

こつした返答は返って来たのだった。

「当然のう。美味しいものじゃ」

「けれど枝豆とビールの組み合わせは食べたことがないんですか」

「うむ、ない」

はつきりと答えてきた博士であった。

「枝豆にはいつも白ワインじゃ」

「枝豆に白ワインですか」

「いいものじゃぞ」

博士はまた小田切君に言うのであった。

「この組み合わせがのう」

「そんなにいいんですか」

「和食には白ワインじゃ」

博士はその範囲も広げてきた。

「和食全体に合うのじゃよ」

「そういうものなんですか」

「日本酒と同じようなものと考えればいいのじゃ」

「そんなもんですかね」

そう言われても今一つ実感できない小田切君であった。ビールを飲みながらそのうえで腕を組んで首を傾げてさえいるのだった。

「日本酒とって」

「欧州では白ワインは海のものに使っじゃろっ」

「ええ、そうですね」

小田切君にもこれはわかった。

「それじゃあ和食はやっぱり魚ですから」

「そうなるのじゃよ。牡蠣にも同じじゃよ」

「成程、牡蠣と」

「じゃから」

ここでその白ワインを出す博士だった。

「わしはこれをやることにする」

「その白ワインですね」

「フランス産じゃ」

フランスのワインというのである。

「それもシャンパンじゃが。どうじゃ？」

「えっ、シャンパンって」

シャンパンと聞いた小田切君の言葉が止まった。その顔の動きも。

「まさかと思えますけれど」

「遠慮はいらんぞ。どうじゃ？」

「そうですね」

流石にシャンパンを勧められると小田切君も尋常ではいられなかった。心が揺れ動いていた。

2
0
0
9
·
8
·
1
7

第二百十二話

第二百十二話 シャンパンかビールか

博士にシャンパンを勧められた小田切君。しかしであった。

「嬉しいですけど」

「嬉しければ飲むといい」

「いえ、それでもですね」

小田切君は言葉をくぐもったものにさせていた。声がくぐもったものになるのにはそれなりの理由がある。それが何かというと。

「僕今ビール飲んでいますし」

「ビールか」

「ええ。これがありますから」

それを飲まないといけないというのである。小田切君はビールを全部飲まないといけないと思っっているのであった。

「飲み残しはやっぱりよくないですから」

「そうじゃな。それではビールを飲むのじゃな」

「いえ、ですが」

それでもという小田切君だった。

「シャンパンも飲みたいですし。どうしたのですかね」

「ではまずビールを飲むことじゃ」

簡単だと言わんばかりの博士の返答だった。

「ビールを全部な」

「全部ですか」

「それからシャンパンを飲めばいいじゃろっ」

「こっ勧めるのであった。」

「ビールを全部飲んでからのっ」

「そうですね。それからビールをですか」

「どっちにしる空けているのはまだ缶一本ではないか」

「ええ」

まだ飲みはじめである。だから最初の一本目であったのだ。

「では充分飲めるぞ」

「僕二本はいけますけれどね、ワインなら」

「では問題ない」

博士は太鼓判すら押すのであった。

「さつとそれを飲んでのう」

「ええ」

「シャンパンじゃ。楽しくやろうぞ」

「わかりました。しかしシャンパンに枝豆っていうのも」

「いい組み合わせじゃろう」

博士は笑っていた。この博士が笑うとどんな笑みでも邪悪なものになってしまふのだが。それでも笑っていることは確かであった。

「これも」

「合わないような気もしないではないですけどね。けれど何か」

もうビールは飲み干してシャンパンを飲みはじめている小田切君だった。彼も何だかんだといってその酒への動きはかなり速いものがある。

「この組み合わせも悪くないですね」

「では今日は心ゆくまで酒じゃな」

「そうですね。ライゾウにタロも入れてですか」

「当然じゃ。ちゃんと飲めるように改造してある」

まさに何時の間にか、であった。

「あの連中も呼んでのう」

「楽しくですね」

「そうすればまた新たな発明のインスピレーションも湧く」

「いえ、それはいいですから」

このことについてはすぐに突っ込みを入れて止める小田切君だった。何はともあれシャンパンと枝豆の宴は今はじまったばかりであった。

第一百十一話

完

2
0
9
・
8
・
1
7

第二百十三話

第二百十三話 飲んでいると

そのシャンパンで枝豆を食べる小田切君。実際にこの組み合わせでじっくりと飲んでみると。中々面白いことだと気付いたのである。

「あれ、結構以上に」

「いいじゃろ」

「はい、飲みやすいですし」

まずはこのことに気付いたのだった。

「それに合いますし」

「シャンパンは最高の酒の一つじゃよ」

博士は目を細めさせてそのシャンパンを飲みながら述べるのだった。

「最高ののう」

「最高ですか」

「最高と言わずして何と言う」

「こつまで言い切るのだった。」

「シャンパンはまさに酒の貴族なのじゃよ」

「貴族ですか」

「あのビスマルクも愛したのじゃぞ」

言わずと知れたドイツの鉄血宰相である。その卓越した指導力と統率力、内政と外交、とりわけ外交における天才的な手腕でドイツを作り上げた。一メートル九十の大男であり学生時代に数十回の決闘に勝利を収めてもいる。顔には向こう傷まであった男でもある。

「あのビスマルクものう」

「ビスマルクもシャンパンが好きだったんですか」

これは小田切君の知らないことであつた。

「それはまた意外ですね」

「意外か」

「だってドイツ人じゃないですか」
「だからだという小田切君だった。」
「それでシャンパンって」
「ビスマルクは偏狭な人間ではなかったのじゃよ」
「しかしここで博士は言うのだった。」
「酒にまで国にこだわるようなのう」
「そうだったんですか」
「そうじゃ。美味しいものは美味しい」
「言いながらそのシャンパンを飲む博士だった。」
「そういうものじゃよ」
「国は関係なくですか」
「舌には関係ない」
「これが博士の主張であつた。」
「だからビスマルクはシャンパンだったのじゃよ」
「そういうことだったんですね」
「他にはとにかくかなりの量を食べておつたが」
「ビスマルクについてさらに話す博士だった。」
「相当な量をのう」
「そういえば身体が大きかつたんですね」
「だからじゃよ」
「やはりそれが理由なのだった。」
「だからかなり食べたのじゃよ」
「成程」
「そしてわしもじゃ」
「言うそばから枝豆を次々に食べる博士であつた。」
「食べんどのう」
「そう言えば博士も」
博士の背の大きさを思い出した小田切君だった。実はこの博士は意外と長身なのであつた。

第一百十二話

完

2
0
0
9
・
8
・
2
3

第二百十四話

第二百十四話 博士の食事量

黙って見ていると。相当な量を食べる博士であった。

枝豆はかなりある。だがそのかなりの量を食べているのであった。同時にシヤンパンもだ。もう二本空けて三本目であった。枝豆の殻はうずたかく積まれている。しかしそれでもまだ食べる博士なのだ。

「そういえば博士も」

「何じゃ？」

「よく食べますよね」

本人にこのことを告げるのだった。

「それもかなり」

「食べんとエネルギーが採れん」

エネルギーだというのである。

「とてもものう」

「だからそれだけ食べるんですね」

「いざという時に動けんしものう」

それもあるというのである。

「ほれ、わしは時々二日か三日飲まず食わずで動くじゃろ」

「ええ」

「それも不眠不休のものう」

そうしたことでもできるのが博士の恐ろしいところである。「この博士にとってはそんなこともごく普通のことではかないのである。恐ろしいことだ。

「その時に備えて食い溜めにもなるのじゃ」

「食い溜めできるんですか」

「飲み溜めもできる」

それもだというのだ。

「どちらものう」

「それってかなり凄いですよ」

「少なくとも普通の人間の体質ではない。」

「そんなことができるなんて」

「わしはできるのじゃよ」

「ここでまた一つわかった博士の特異性である。異常性と言ってもいい。どちらにしろまともな人間ではないことは間違いないことである。」

「その程度はのう」

「その程度はですか」

「それに頭を使えば腹が減る」

「はい」

「このことは小田切君もよくわかった。実際に脳を使うということはそのだけでカロリーをかなり消費するからだ。考えてもカロリーは減るのである。」

「じゃからのう。こうしてたらふく飲み食いするのじゃよ」

「そういう理由からだっただんですね」

「とにかく飲み食いは不可欠じゃ」

「博士もそれは欠かせないのであった。」

「絶対なのう」

「何か食べて二百億年ですか」

「食わなくても生きていけるのじゃがな」

「この辺りもまた博士であった。」

「しかし食うに越したことはない」

「そういうものですかね」

「そういうものじゃ。それではじゃ」

「ええ。今日はとことんまでいきましょう」

「うむ」

「この日は特別に二人で何処までも飲み明かすのであった。」

第二百十四話

完

2
0
9
・
8
・
2
3

第二百十五話

第二百十五話 情報を得て

とりあえず博士の研究所に己の影を向かわせた華奈子達。そのうえで皆で話をするのだった。

「どう思つかしら」

「そうね」

まずは華奈子が美奈子の言葉に応える。

「あまり情報は手に入らなかったけれど」

「研究所の中のはね」

「それがねえ」

華奈子はそのことを残念がっていた。

「ちよつと。あれだけれどよ」

「けれどそれは仕方ないじゃない」

「そうよ」

その華奈子に赤音と梨花が言ってきたのだった。

「それでもそのあまりでも手に入っただけでもね」

「いいと思うわ」

「そういうものかしら」

だが華奈子はその言われても今一つ実感がないようであった。首を傾げてさえている。

「だったらいいけれど」

「零より一よ」

「そういうことよ」

その彼女に今度は春奈と美樹が告げてきた。

「だから少しだけでも手に入っただけで」

「それに研究所の周りは大体わかったじゃない」

「それはね」

美樹の今の言葉には素直に頷くことのできた華奈子だった。

「その通りだけれど」

「そういうことよ」

「だからいいじゃない」

今度は四人に言われた。彼女達に言われると確かにその通りだとも思うのだった。

「そういうものなのね」

「はい、華奈子」

ここで隣にいた美奈子が彼女にラムネを出してきたのだった。

「とりあえずはこれ飲んで落ち着きましよう」

「あつ、ラムネね」

「そうよ。ラムネよ」

それだというのである。見ればそれは確かにラムネである。

「これ飲んで少し落ち着きましよう」

「別に落ち着いてるけれど」

「それでも飲んで」

どちらにしろ飲んでくれというのである。

「それでいいわね」

「わかったわ。それじゃあ」

言われてそのラムネを美奈子から受け取る。そのうえで飲みはじめるのだった。

「それでだけれど」

「ええ」

そのうえで再び双子の相方に話してきた美奈子だった。今皆は華奈子と美奈子の家の二人の部屋に集まって。そのうえで絨毯の上でそれぞれ車座になりながら話をしているのである。

その中で美奈子はまた華奈子に言っているのだった。

「研究所の周りはわかったわ」

「それね」

「そう。それよ」

「それって」

まさにそれだと言つ美奈子だった。華奈子はその言葉の意味がまだよくわからない。そのうえで彼女の話の話を聞き続けるのであった。

第二百十五話 完

2009・8・30

第二百十六話

第二百十六話 わかったことは

「いい？周りはわかったのよ」

「うん」

華奈子は美奈子の話をそのまま聞いていた。彼女がくれたサイド
―を飲みながら。

「これだけでもかなり大きいわよ」

「かなりなのね」

「お城の中はあまりわからなかったけれど内堀まではわかった」

美奈子は言うのだった。

「これって凄いことよ」

「内堀までね」

「大体何処に何があるかわかったでしょ」

また言う美奈子だった。

「そうでしょ？それはね」

「確かに。じゃあ研究所の外がわかったっていうことは」

「その辺りは動くことができるようになったのよ」

「そういうことよ」

今度は梨花と美樹が華奈子に告げてきた。

「魔法だって使えるしね」

「それも大きいわよ」

「言われてみれば確かにね」

華奈子は腕を組んで考える顔になっていた。そのうえでの言葉だ
つた。

「それは大きいわね」

「それにね、華奈子ちゃん」

「場所によってはだけれど」

赤音と春奈も話すのだった。

「思いきり魔法が使える場所もあるし」

「これはかなりいいわよ」

「そうなの」

まだそういった詳しい場所をチェックしていない華奈子はよく実感できていないような言葉を出して二人の言葉を聞くのだった。

「だったら結構以上に」

「ええ、いけるわ」

今度は美奈子が告げたのだった。

「これはね。かなり使えるわ」

「そう。だったら」

華奈子は美奈子の言葉も受けてまた言うのだった。

「今回の偵察は無駄じゃなかったのね」

「そういうことよ」

こう華奈子に言うて微笑んでみせる美奈子だった。

「敵地の地理を知ることが重要じゃない」

「ええ」

それはわかっている華奈子だった。彼女は学校の勉強は嫌いなだけに実は頭はそれ程悪くはないのである。むしろ結構いい方であるのだ。

「それはその通りだけれど」

「じゃあわかるわね」

美奈子の言葉は微笑んでいた。

「そのことはね」

「わかったわ」

そして華奈子も微笑みになっていた。

「それじゃあ博士の研究所の方に攻めていくのも」

「これでできるようになったのよ」

「よし、それじゃあ」

また笑顔で言う華奈子だった。

「これで話はいいわね」

「ええ」

笑顔で頷く二人であった。まず情報を手に入れたことは確かに大
きかった。

第二百十六話 完

2009・8・30

第二百十七話

第二百十七話　それでどうするか

情報が手に入ったことは確認できた。しかしであった。それだけでは戦いが終わったことにも何にもなりはしない。このこともまた言うまでもないことであった。

それで華奈子は。再びいぶかしむ顔になって皆に問うのであった。「それでどうするの?」

「どうするって?」

「だからどうするのよ」

言葉は繰り返していられたが確かに尋ねるものであった。

「動くの?それとも様子を見るの?」

「どちらにするか決めたいのね」

「そうよ、それよ」

彼女が決めたいのはまさにこのことだった。つまり作戦を決めたいたのであった。

「まさか何もしないっていうんじゃないでしょうね」

「ああ、それはないわ」

「安心して」

このことはすぐにリーダーの梨花と軍師の春奈が否定した。

「今何もしなかったらそれだけでお話にならないから」

「折角新しい魔法使って情報手に入れたから」

「そうよね、やっぱりね」

それを聞いてまずは安心した華奈子であった。実際にその表情をほっとさせてもいる。

「じゃあどっちにするのよ」

「ここは積極的にいくべきでしょ」

「いいえ、慎重にいくべきよ」

赤音と清音がそれぞれ言った。

「もうね。先手必勝で一気にね」

「あの博士よ。ここはじっくりと考えてね」

「あたしはどっちかっていうと積極的にいったらいいって思うけれど」

活動的な華奈子としては赤音の案を指示したかった。実際にそちらに気持ち動いている。

「どうかしら。ここは」

「積極的かつ慎重にいくべきね」

だがここで美奈子はこう言うのである。

「今回はそう行くべきよ」

「ちよつと美奈子」

華奈子は今の美奈子の相矛盾するような言葉に思わず突っ込んでしまった。

「それって駄目じゃない」

「駄目って?」

「積極的かつ慎重につて」

実際に美奈子が出した言葉をそのまま述べもしてみせる。

「完全に矛盾してるじゃない。同時になんて無理よ」

「無理じゃないわよ」

しかし美奈子は華奈子に対してにこやかに笑って答えるのであった。

「全然ね」

「無理じゃないの?」

「そうよ、無理じゃないわ」

そしてまた言うのであった。

「それどころか完全に両立するものよ」

「そうかしら」

「私達みたいなものよ」

そして今度はこんなことも言うのであった。

「つまりはね」

「余計にわからないけれど」
さらに首を傾げることになった華奈子だった。だが皆は美奈子の
その言葉を聞くことになった。

第二百十七話 完

2009・9・8

第二百十八話

第二百十八話 積極かつ慎重に

「それで美奈子ちゃん」

「どういうことなの？」

「積極的だけれど慎重にって」

「それって一体」

華奈子以外の春奈、赤音、美樹、梨花の四人もその意味がわかりかねているのであった。それで彼女達も怪訝な顔になってその美奈子に対して尋ねるのであった。

「何か矛盾してるような」

「ねえ」

「華奈子ちゃんと同じこと言っけれど」

「実現できることなの？」

「ええ、矛盾していないし実現できるわよ」

その美奈子は平然と微笑んで彼女達のその言葉に返すのであった。

「もう簡単にね」

「簡単にして」

「そうかしら」

「積極的に行くのはわかるわよね」

まずはこのことから話すのだった。

「積極的にね。前に出るのは」

「ええ。それなら」

「わかるけれど」

四人もこれはわかった。

「つまりもういつも以上に大掛かりに攻めるってことでね」

「そういうことよね」

「具体的にはそういうことよ」

やはりそれは同じであった。だがここでまた事情が付け加えられ

るのであった。

「それで慎重にっていうのはね」

「それよ」

「それが入るとちよっと」

話がわからなくなるといふのである。四人もまた。しかしここで美奈子はその平然とした笑顔のままその四人に対して語るのであった。

「つまり。事前に計画を立てるのよ」

「計画を立てて」

「そのうえで派手に攻めていく」

「そういうことなのかしら」

「その通りよ。それよ」

にこりと笑って話す美奈子であった。

「つまりはね。事前にじっくりと考えてそのうえでね」

「大掛かりに攻める」

「それなの」

「その通りよ。これでわかってくれたかしら」

「ええ、そう言ってくれたらね」

四人ではなく華奈子が彼女のその言葉に答えた。

「わかったわ」

「わかってくれて何よりだわ」

「そういうことだったの」

「動く前にじっくり考えて」

「皆で話し合ってじっくりとね」

また言う美奈子であった。

「それで行きましょう。いいわね」

「わかったわ」

「それじゃあ」

四人もこれで頷いたのであった。

「慎重かつ積極的にね」

「そう行くのね。今回は」

「その通りよ。それじゃあまずは」

ここで博士の研究所の周りの地図を開く。そのうえで紙も出して書いていく。

「研究所の地図もある程度まで作られるし」

「何か本当にじっくりって感じね」

「こつこつという作戦を立てるのもいいかもね」

「そうね」

皆このことも楽しみはじめていた。何はともあれこれで皆美奈子の言葉の意味がわかったのであった。

第二百十八話 完

2009・9・8

第二百十九話

第二百十九話 意味がわかれば

華奈子も皆も美奈子の言いたいことはわかった。そしてそれを踏まえたとうえで早速行動に移るのだった。動かなくては何にもならないからである。

六人はそれぞれの使い魔達と共に出発した。目指す場所はもう決まっていた。

「まずは行つてからね」

「そうよ」

美奈子が華奈子の言葉に答える。

「それから始まるのよ」

「それであそこに入つて」

華奈子は美奈子の言葉を受けながら考える顔になっていた。

「それから始めてね」

「そういうことよね。けれど」

「けれど。どうしたの？」

「博士だからね」

ここで華奈子が言うのは天本博士のことだった。最早言うまでもない彼女達のその相手のことである。博士のことは念頭から離れないのだった。

「何かしてきたら」

「だからあの場所なのよ」

美奈子の返答はこうであった。

「あの場所に入るのが一番いいのよ」

「ええ、それはね」

そのこともよくわかる華奈子だった。だからこそ今も共に進んでいるのである。

「わかつてるけれど」

「不安？ やっぱり」

「否定はしないわ」

何かにつけて積極的な彼女にとっては珍しい言葉であった。

「正直なところね」

「そう。 やっぱり」

「美奈子はどうなの？」

今度はその美奈子に対して問うてみせた華奈子だった。

「やっぱり不安なの？ あそこに行くのは」

「不安なのは確かよ」

それは否定しない美奈子だった。

「けれどね。 考えたけれどね」

「あそこが一番だっていうのね」

「そう。 だから」

美奈子は自分のその言葉を続ける。 華奈子に向けて。

「私は行くわ。 考えた結果の結論を信じてね」

「そう。 信じてなのね」

「ええ。 失敗しても次があるようにもしてあるし」

この辺りは抜かりがなかった。 慎重派の美奈子らしかった。 彼女はもういざという時のことも考えていたのである。

「もうね」

「そうよね。 じゃあここは勇気を出してなのね」

「勇気がないと何もできないわよ」

美奈子にしては珍しい、勇気という言葉を出した時だった。

「だからね」

「ええ、それなら行くわ」

華奈子はその勇気をここで出した。 そしてであった。

「博士と戦いにね」

「そうしましょう」

今皆の先頭に出た華奈子であった。 彼女はその心に勇気を宿らせたのだった。

第一百十九話

完

2
0
9
・
9
・
1
5

第二百二十話

第二百二十話 博士の方では

六人が向かう博士の研究所。しかし博士は至って普通に日常の生活を送っていた。

「あげれぼっ!!」

今日も人体実験の材料にされた街のチンピラの断末魔の叫び声が研究所の中に響き渡る。博士の劇薬投与の副作用で身体が爆発してそれで死んでしまったのだ。

「ふむ。死んだか」

「完全に肉片になってるじゃないですか」

小田切君はチンピラが死んでも一向に意に介していない博士に対して告げた。流石に彼は人の死にどうかと思う部分があるのである。

「っていつか何の実験ですか？今日は」

「うむ。体力増強剤の開発をしておつてのう。それで実際に投与してみてもそのうえで見ておるのじゃが」

「それで五人も死んでますけれど」

「何、大したことはない」

五人なぞというのである。

「いつものことじゃ。違うかのう」

「まあそうですね」

こう言われてはその通りだと答えるしかない小田切君だった。実際に博士にとつては人命なぞまさにその辺りの枯れ木と同じ様なものであるからだ。

「けれど体力増強剤ですか」

「あれば何かと役に立つじやろう」

「そうですね。何でも飲んで爆発するんですか？」

小田切君はそもそもそれが不思議であった。

「何入ってるんですか、中に」

「ニトログリセンをたっぷり入れておる」
「それだというのである。」

「あえて爆発するようにのう。ちよつと動かせば」

「それじゃあ人が飲めないじゃないですか」

話を聞いてすぐに突っ込みを入れた小田切君だった。

「せめてニトログリセリンを爆発するようになんて」

「駄目か」

「駄目ですよ」

はつきりと答える小田切君であった。

「そんなことしたら体力増強剤じゃないですよ。何でそんなの入れてるんですか？」

「まあちと遊びでのう」

「遊びでそんなの入れるんですか？体力増強剤に」

「ひよつとしたらと思つたりもしてじゃ。まあ五人死なせたからよしとしよう」

「死んだことはかえつていいのであつた。つくづく人権思想とは縁のない博士である。」

「まあそれでじゃ」

「ええ。薬の調合は変えるんですよ」

「既にそれは容易しておる。今六人目に投与したところじゃ」

「それで今度は何を入れたんですか？」

「どうせ碌なものではないということとは予想していたがそれでも一応尋ねる小田切君だった。そうして返つて来た返答はというと。」

「テトロドキシンじゃが」

「河豚の毒ですよ、それ」

「それはすぐにわかつた小田切君だった。言わずと知れた凄まじい猛毒である。河豚一匹の分だけで二十人は殺せる代物である。」

「確か」

「クサフグ一匹分を入れたが」

その河豚の中でも最も毒が強い種類である。間違えて食べればま

ず死んでしまう。

「さて、どうなるかのう」

「若しかして体力増強剤は名目で人が死ぬの見て楽しんでません？」

「それは気のせいじゃ」

こうは言っても明らかに顔が笑っている博士であった。その目の前では六人目のチンピラが顔を紫色にして呼吸困難になってはいつくばって悶え死んでいた。こうしたいいつもの日常を過ごす博士であった。

第二百二十話 完

2009・9・15

第二百二十一話

第二百二十一話 ツインボーカル

「行くわよ美奈子！」

「ええ華奈子！」

二人は背中合わせになっていた。華奈子は左に、美奈子は右に。それぞれ位置してそのうえで掛け声をかけ合ったのだった。

「今日のライブがいよいよスタートするけれど」

「いつも通り頼むわよ」

背中合わせになったうえでお互いを目で見合う。しかし顔は動かさない。その目だけで見合う二人だった。

「あんたもね」

「わかったわ」

二人は言い合ってから離れた。そうしてだった。

「スタート！」

「行くわ！」

歌いはじめた。ソロで歌い部分もあれば重唱の部分もある。歌っているのだった。何と無数の音符が境界を超えて宙に舞いだしたのだった。

「えっ、音符が出て来たぞ」

「そうだね」

それを見て互いに言い合うライゾウとタロだった。彼等もモニタ―から戦いを見ているのである。当然博士と小田切君もである。

「あの音符って何だ？」

「絶対に魔法だと思うけれど」

「そうじゃ、魔法じゃ」

ここで博士が彼等に対して告げた。

「あれは間違いなくそれじゃ」

「魔法の音符」

「一体どんな効果があるんだろう」
「ふむ。どうやら」

博士はその音符を見続けている。風の中に漂う様にしてそのうえでエンペライザーの周りを囲んでしまったのであった。何時の間にか。

「攻撃の為の音符じゃな」

「攻撃って？」

「あれが？」

「そうじゃ、攻撃じゃ」

それだというのである。

「あれはのう」

「攻撃っていつても」

「風に漂ってるだけじゃないの？」

彼等にはそう見えるだけであつた。しかしここで彼等や博士と共にモニターから戦闘を見ている小田切君があることに気付いたのであつた。

「んっ、あれは」

「あれは!？」

「何かあつたの、小田切君」

「うん、あつたよ」

まずはライゾウとタロにこう答える小田切君だつた。

「ほら、音符の動きだけれど」

「うん」

「それは」

「エンペライザーを完全に囲んでいるよ」

そのことを指摘するのだった。見ればその通りだつた。音符達は何時の間にかエンペライザーの周りを完全に囲んでしまっていたのである。

ただ周りに漂っているだけではない。無数の音符達がマシンの至る部分を囲んでしまっていたのだ。小田切君はこのことに気付いた

のである。

第二百二十一話

完

2009・10・26

第二百二十二話

第二百二十二話 バンド

「行くわよ!」

「ええ!」

「いいわ!」

皆華奈子の言葉に応えてスタンバイから動くそして。

「スタート!」

そうして一気にそれぞれの楽器を演奏しだした。何とバンド演奏をはじめたのである。

その曲はロックだった。それを奏でている。

華奈子はサククス、美奈子はそのフルートだ。そして梨花がギター、美樹がベース、春奈がキーボード、赤音がドラムなのは変わらない。

「やっぱり魔法使えてよかったわね」

「そうね」

皆そのロックを奏でながら話をする。

「こうして楽器を小さくして持つて来れることもできたし」

「おかげでね」

「それだけじゃないわよ」

華奈子はサククスを吹く間に皆に言う。既に激しいステップも見せている。

「こうしてね。音楽の中に魔法を入れるのもね」

「そうよね。まさかこんなに合うなんて」

春奈がキーボードを演奏しながら言う。

「思わなかったわ」

「美奈子ちゃんそういうの得意みたいだけど」

赤音のドラム捌きも見事なものである。

「元々フルート上手だしね」

「私はかなり苦労したわよ」

梨花はギターを奏でながら激しいステップを見せている。

「最初ギターの演奏そのものが中々だったし」

「けれどあれね」

今度は美樹が言う。当然ベースを演奏している。

「こうして楽器を演奏するだけでもいいものね」

「そうでしょう？これを取り入れられない手はないわよ」

美奈子がかつての紫の魔女のことは内緒にしていた。

「絶対にね」

「そうよね。魔法もかなり入れやすいし」

華奈子が一番ノリがいいのであった。

「こうやってね。結界を作れるなんてね」

「魔法と音楽は本来密接なものなのよ」

美奈子もまた笛を吹いている。

「それを入れない手はないわよ」

「そういうことね。それじゃあ」

「ええ」

「これで結界を作って」

華奈子はあらためて言うのだった。見れば六人共それぞれステップも踏んでいる。ドラムを叩いている赤音もその場で座りながらしている。使い魔達もそれぞれ躍り舞っている。

「それから攻めましょうね」

「まずは護りからよ」

美奈子も言う。

「あの博士相手にはね」

「あまりこういうのはあたしの好みじゃないけれど」

「こうは言いはする華奈子だった。しかしここは大人しくしていた。

「いいわ、それでね」

そうして今も演奏とステップを続ける。やがて六人と使い魔達の周りに黄金色のオーラが生じてきたのだった。

第二百二十二話

完

2
0
9
・
9
・
2
0

第二百二十三話

第二百二十三話 演奏がはじまって

演奏とステップをはじめた六人と使い魔達。黄金のオーラがそれぞれから出されそのうえで彼女達を包み出したのであった。

「どう？美奈子」

「いい調子よ」

こう華奈子に答える美奈子だった。ヴォーカルの二人はまずはそれぞれサククスとフルートを吹いている。この辺りの息が見事だった。

「演奏やステップだけでなく結界もできているしね」

「そうね。わたしもよ」

それは彼女もだった。軽やかに演奏し舞っている。

それと共に黄金色の結界が広がっていたのだった。

結界は彼女達を包み込み。そうして。

巨大な一つの結界になったのであった。瞬く間にであった。

「よし、いい感じでできたわね」

「まずはね」

美奈子はここでまた華奈子に対して応えるのだった。

「これで私達の護りはできたわよ」

「あとは」

「ここでまた言う華奈子であった。

「仕掛けるだけだけれど」

「待って」

しかしそれはまだ止める美奈子だった。

「仕掛けるにはまだ早いわ」

「様子を見るっていうの？」

「そうよ。だからここに入ったから」

だからだというのであった。

「今はね。様子を見ましょう」

「そうなの」

こう言われた華奈子はとりあえず動きを止めるのだった。とりあえず演奏もステープも止めて今は静かなものであった。その中で話しているのだ。

「じゃあ次の曲は？」

「それもまだよ」

それもだと述べる美奈子だった。

「結界を張ったし。まずはこれだけよ」

「この広くて研究所が見渡せる場所でのね」

「ここなら何処から来ても対処できるから」

本当に実に研究所がよく見えていた。だからここにしたのである。

「暫くは様子を見てもいいわ」

「慎重にすることね」

「その通りよ」

まさにそれだというのである。

「いいわね」

「そうね。結局打ち合わせ通りね」

話を聞いてこう述べた華奈子だった。

「それじゃあ」

「ゆっくりとしましょう」

言いながら双子の相棒に五〇〇ミリリットルのペットボトルのポリスエットを出す美奈子だった。見ればそれは二本ある。

「汗かいたでしょ」

「あっ、有り難う」

「皆も」

続いて他の四人に対しても出すのだった。そのうえで飲みながら今は様子を見ることにしたのである。

「水分補給も大事だからね」

「そうということね。じゃあ今は」

「休憩も兼ねてね」

こうして休憩にも入った。今は至って穏やかな彼女達であった。

第二百二十三話 完

2009・9・29

第二百二十四話

第二百二十四話 博

士の好きな音楽

六人が結界を張っているその時。博士はまだ彼女達の行動に気付いていなかった。警戒システムから離れてのどかに音楽を聴いていた。

その音楽は。見ればクラシックであった。

「オペラのアリアですね」

「そうじゃ。ドミンゴじゃ」

見るとそれは高い男声であった。所謂テノールである。

「プラシド＝ドミンゴじゃよ」

「スペインのテノールですよ、確か」

「確かじゃなくてその通りじゃよ」

かなりの費用をかけたことは間違いないかなり充実したステレオ設備の前に安楽椅子の上に座りながらそのうえで側に来た小田切君に話す博士だった。

「スペインが誇る偉大なテノールじゃよ」

「ここでもスペインなんですか」

小田切君はそのドミンゴについて聞いてからまた述べた。

「何か不都合でもあるのかのう」

「いえ、本当にスペインが好きなんだなって」

小田切君が思ったのはこのことだった。特にどうこういうつもりもなかったし悪意もなかった。人の趣味に介入する趣味はなかったのである。

「思いまして」

「スペインは歌手も優れた人材が多いのじゃよ」

安楽椅子に座ったままでの言葉だった。

「テノールだけではなくソプラノもメゾソプラノもじゃ」

「へえ、そうだったんですか」
「本場イタリアにも匹敵する」

そのオペラの本場イタリアにもというのである。

「スペインの人材がなければクラシック界はかなり困ったことになるじゃろうな」

「かなりですか」

「少なくとも歌手には困る」

断言であった。

「このドミンゴを聴くことができなければそれだけで不幸なことじゃよ」

「確かに凄いい歌ですね」

小田切君も実際にドミンゴの歌を聴いていた。ただ声がよく歌が上手いだけではない。そこにはそれ以上のものもあつたのである。

「これは」

「どうじゃ？小田切君も聴いてみるかのう」

「ええ、それじゃあ」

小田切君は博士の申し出に対して頷いて答えるのだった。

「御願います」

「では安楽椅子をもう一つ持って来るのじゃ」

こう小田切君に言うのだった。

「もう一つな」

「隣で聴いてもいいんですね」

「そうじゃな。あの二匹も連れて来てじゃ」

ライゾウとタロのことである。何だかんだで彼等のことも忘れていないのだった。

「聴かせてやろう、一緒にな」

「それじゃあ今は」

「うむ、皆で聴こう」

博士はあらためて小田切君に告げた。

「いいものは皆で味わうものじゃ」

「確かに」

「生きる価値のない奴は別じゃがな」

こう言ってしまうところが博士らしかった。しかし今は。

「あの連中も呼んで来ますんで」

「皆でのう」

こうした一面もある博士だった。もっともそれは一瞬のことだったが。

第二百二十四話

完

2009・9・29

第二百二十五話

第二百二十五話 発見

「むっ!？」

「どうしたんですか?」

「来たぞ」

こう小田切君に答える博士だった。

「どつやらのう」

「来たつていいいますとやつぱり」

「その通りじゃ」

ある程度以心伝心になっていた。それだけ博士と小田切君の付き合いも長くなつていているということだ。

「あの娘達じゃよ」

「ここにまで来たんですか」

小田切君はそれを聞いてまず少し驚いた言葉を出した。

「それはまだ」

「予想していなかったようじゃな」

「ええ、まあ」

その通りだった。素直に博士に対して述べる。

「まさかとは思いましたけれどね」

「しかし実際に来たのじゃよ」

博士はそれを真実だと。小田切君に話すのだった。

「この研究所のう」

「中に入ったわけじゃないですよね」

「以前影は入ったようじゃな」

「影はですか」

長ギリ君は影が入つて来ていたと聞いて少し驚いた顔になった。

実は彼はそのことは全く気付いていなかったのである。気付いていてわかつていたのは博士だけであるのだ。

「入っていたんですか」

「その通りじゃよ」

「そんなことがあったんですか」

小田切君はそれを聞いてあらためて考える顔になった。

「それはまた」

「意外じゃったかのう、小田切君には」

「ええ、まあ」

頷きながらそのうえで話す小田切君だった。

「影って動かすのがかなり大変ですよね」

「魔術の中でも高等テクニクじゃな」

「それをあの娘達がやったんですか」

小田切君はこのことについて考えた。考えてみればこれはかなり
凄いことだった。そう思わざるを得なかった。

「まだ小学生だっというのに」

「それだけでも凄いのじゃがわしの研究所の前にも来た」

博士はそちらの方を重要視しているようである。

「このわしの研究所にじゃ」

「今まで暴走族とか暴力団は殴り込みに来ましたけれどね」

仲間や舎弟、兄貴分の敵討ちやハク付けにである。そうして全員
無惨な最期を遂げているのである。

「魔女でしかも小学生の娘達がですか」

「面白いことじゃ」

ここで楽しそうに笑う博士だった。

「さて、どうの様にしてもてなしてやるうかのう」

「もてなすんですか」

「これが暴走族とかだとじゃ」

その博士が嫌いな人種である。

「即座に気分のまま殺戮じゃが」

「あの娘達は違うんですね」

「その通りじゃよ。さて、それではじゃ」

早速何かをしようとする博士だった。研究所の前で何かが起こる
うとしていた。

第二百二十五話 完

2009・10・5

第二百二十六話

第二百二十六話 相変わらずの先

生達

六人と博士が研究所で激突しようとしていたその頃。今田先生と今日子先生はいつもの様に二人でのこやかにお茶を楽しんでいた。

「今日はローズティーなのね」

「そうよ」

イギリス風の緑と紅の洒落た庭で白いテーブルを挟んで二人仲良くお茶とお茶菓子を楽しんでいる。ここは今日子先生の家である。

「それとパイだけねど」

「チエリーパイなのね」

「どうかしら」

今田先生が従姉妹に尋ねる。

「今日子ちゃんこれ好きだったわよね」

「ええ、大好きよ」

にこりと笑って従姉妹に答える今日子先生だった。

「それは昔からじゃない」

「ふふふ、そうだったわね」

「パイもケーキもタルトも」

今日子先生は洋菓子を次々と挙げていく。それは確かに美味そうなものばかりである。

「昔からね」

「子供の頃からよね」

「香ちゃんもそうじゃない」

それは今田先生もだというのだ。

「お菓子。大好きじゃない」

「そうよ。作るのも食べるのもね」

「私もよ。私は」

言いながら今日子先生が出してきたものは。これまた実にお菓子に合ったお菓子であった。

「これね」

「クレープね」

「そうよ。台所で焼いてね」

「それでここに持って来てくれたの」

「どうかしら、このクレープ」

あらためて今日子先生に尋ねてみせてきた。

「美味しいかしら」

「ええ、とてもね」

食べてみて幸福そのものの笑みを浮かべて答える今日子先生だった。

「流石よ、今日子ちゃん」

「そう、ならいいわ」

「そうね」

そしてここで今日子先生は言うのだった。

「あの娘達にも食べさせてあげたいわね」

「香ちゃんの生徒さん達ね」

「そうよ。そうね、時間は」

目を少し考えさせるものにしてからの言葉であった。

「このお茶が終わった辺りかしらね」

「そうね。その時間かしらね」

先生達の話が微妙に変わってきていた。

「その時間にね」

「あの娘達にね」

「そうしましょう」

「そういうことで」

「今はゆっくりと」

のどかな中にも何かがある、それを思わせる今の先生達の会話であった。

第二百二十六話

完

2009・10・5

第二百二十七話

第二百二十七話 博士動く

博士はゆつくりと動きだした。そうして、であった。

「それではじゃ」

「どうするんですか？それで」

「まずはワインでも飲むとしよう」

何と酒を飲むというのである。ワインであるが酒は酒である。

「ゆつくりと」

「飲むんですか？」

「そうじゃが」

いぶかしむ小田切君に対して平然と返してみせてきた。

「何かおかしいのかのう」

「おかしいっていいですかね」

小田切君は戸惑いながら博士に対して述べる。

「あの娘達に何かしないんですか？」

「するぞ」

それはするといっているのである。しかしその口調は変わらない。相変わらずといった調子である。

「ちゃんとのう」

「ですがお洒って」

「わしが動かずともじゃ」

こんなことを言い出すのであった。

「やれることは幾らでもあるじやろう。違つか？」

「幾らでもですか」

「エンペライザーを出す」

それだといっているのである。あの恐ろしい性能を持つ脅威のマシンである。

「あれを出しておくからのう」

「エンペライザーですか」

「あれなら大丈夫じゃ」

己の開発したそのマシンには絶対の自信があった。そしてその性能は実際にその自信に見合うものがあるから余計に問題なのである。

「ちよちよいとじゃよ。追っ払うのじゃ」

「殺してしまいませんか？」

小田切君はそれが気になった。何しろこの博士の作るものといえどもそれこそ国の二つや三つは瞬く間に破壊してしまうからだ。危惧するのも当然であった。

「あの娘達を」

「あの娘達も馬鹿にできん」

だが博士はこう返したのだった。

「手強いぞ」

「手強いですか」

「だからじゃよ」

そのうえで出した言葉である。

「エンペライザーなのじゃよ」

「スピードのエースをですか」

「左様。エースを出したのじゃ」

博士の言葉は真剣なものであった。

「わかっておるからじゃ」

「それじゃあ博士」

「さて、あの娘達はじゃ」

実に楽しみであるような言葉であった。

「わしのエンペライザーをどう防ぐかのう」

「それを見ながらのワインですか」

「チーズはカマンベールじゃ」

酒のつまみはそれだというのである。そうして小田切君だけではなくライゾウとタロも呼んでそのうえで観戦としゃれ込むのであ

た。

第二百二十七話

完

2
0
9
・
1
0
・
1
3

第二百二十八話

第二百二十八話 エンペライザー来たる

六人が演奏による結界を固めるその前に。突如として巨大な白銀のロボットがその姿を現わしてきたのであった。そのロボットことまさに。

「エンペライザーね」

「そうね」

美樹の言葉に梨花が頷く。

「博士の作った強力なロボットの二つよ」

「それこそ一国を滅ぼすようなね」

「でかいわね」

赤音はその巨大ロボットを見上げてこう呟いた。

「あらためて直接間近で見るとね」

「そうよね」

春奈が彼女のその言葉に応える。

「高層ビルみたい」

「ただ、これと高層ビルの違いわね」

華奈子は真剣な面持ちでロボットを見上げている。

「攻撃してくるってことよ」

「その通りよ」

美奈子はまさにそのものずばり、といった口調であった。

「あのロボットが私達をね」

「ねえ美奈子」

華奈子はロボットを見上げたまま双子の姉妹に声をかけてきた。

「このまま演奏は続けるのよね」

「そうよ」

華奈子の言葉にこくりと頷いてみせる。二人は今一緒に並んでいる。そうしてそのうえでお互いに対して言うのである。視線はロボ

ットにやっただけである。

「このままね」

「わかったわ」

相方のその言葉に応える華奈子だった。

「それじゃあこのまま」

「ただし」

しかし、だというのだった。

「音楽は変えましょう」

「そうね」

彼女の今の言葉に頷いたのはリーダーの梨花だった。

「攻撃用にね」

「わかったわ」

「それじゃあ」

赤音と春奈もそれに応えて身構える。それぞれの楽器を。

「音楽はこれよね」

「この曲で」

「使い魔達はこのままよね」

美樹も自分の楽器を手に美奈子に問うた。

「このまま周りでダンスね」

「そうよ。それで結界を維持するのよ」

踊りによって、というのであった。それがこの結界を保たせているというのである。

「それでね」

「それじゃあさ、美奈子」

華奈子がまた彼女に声をかける。

「あたし達はこのまま」

「そうよ、ミュージックスタートよ」

ロボットを見上げながら演奏をはじめめる六人だった。戦いが遂にはじまったのである。

第二百二十八話

完

2009・10・13

第二百二十九話

第二百二十九話 エンペライザーの攻撃

その巨大ロボットが動きはじめるとだった。

六人は演奏をしながらも警戒の念を出した。そうしてだった。

「来るわね」

「踏み潰して来るのかしら」

「いいえ、これは」

ここで美奈子は言った。そうではないと。

「違うわ」

「じゃあ別の方法!?!」

「だとするとそれは」

まずはいきなりジャンプしてきた。そうして。

その両手から激しいミサイルを繰り出してきたのだった。空から

地面へ。

「ミサイル!?!」

「それも何て数」

見れば百発は優に超えていた。それだけのミサイルを放ってきた

のだった。

しかし六人はその結界の中から動こうとしない。あくまでその中にいた。

「いい、皆」

「うん」

梨花の言葉に春奈が頷く。

「何があってもよね」

「そうよ。結界から出たら駄目よ」

彼女が言うのはこのことだった。使い魔達はその結界の中で六人の奏でる音楽に合わせて踊り続けていた。彼等も頑張っていた。

「使い魔達を信じてね」

「そういうことね」

赤音は美樹の今の言葉に応えた。

「ここは何があってもね」

「そうよ。絶対に大丈夫だから」

その使い魔の作り出している結界はということである。六人は一心に演奏を続けている。その軸になっているのはやはりヴォーカルの二人だった。

華奈子と美奈子はそれぞれのサククスやフルートを奏でそのうえで歌う。そしてその中で華奈子は美奈子に対して言ってきたのだ。た。

「ミサイルが来たわね」

「わかってるわ」

静かに双子の相方の言葉に頷く美奈子だった。

「二百は来てるわね」

「演奏、頑張ってるね」

彼女はこう言うのだった。

「いいわね、それは」

「わかってるわ」

「それならいいわ。あたし達の演奏で使い魔達が踊って」

「それで結界が作られているから」

つまりお互いあつてのことということである。

「それにこの音楽自体がね」

「ええ。あのミサイル達をね」

「倒すわよ」

そうだというのである。

「撃ち落としていってね」

「ええ。それじゃあ」

華奈子はここぞとばかりにサククスと吹きはじめた。

「あたしのこのサククスでね」

「私も」

そして美奈子もだった。そのフルートを構える。戦いは本格的に
なるうとしていた。

第二百二十九話 完

2009・10・18

第二百三十話

第二百三十話 演奏の威力

六人は一心に演奏を続ける。

するとだった。それにより凄まじい衝撃波が生じた。それが上に向かいミサイル達を襲う。

「さあ、どうかしら」

「私達の音楽の力」

攻撃を出しながら上を見上げる。そのうえで様子を見守る。

「ミサイルといてども」

「やれる筈よ」

そのことを確信していた。そして。

ミサイル達が次々と空中で爆発していく。六人の出した音楽の衝撃で破壊されたのだ。

「やったわ!」

「ええ!」

「衝撃波で!」

六人はミサイル達が破壊されていくのを見て会心の声をあげた。

「これで」

「いけたわ」

しかしだった。破壊されなかったミサイル達もあった。それは半数程度だった。そのミサイル達はそのまま六人に向かって来る。

「今度は結界だけれど」

「さあ、これはどうかしら」

「破れるかしら」

「防げるか、ではなかった。

「使い魔達の力」

「侮れないから」

彼等への絶対の自信がここにあった。彼女達は信じていたのだ。

「確かにエンペライザーは強いけれどね」

「それでもね」

「やれるわ」

こう言い合い様子を見守る。するとだった。

ミサイル達が次々とぶつかって来る。しかしバリアーは破られなかった。

残っていた全てのミサイル達が炸裂する。だがバリアーは微塵も揺らがなかったのだ。

「どうかしら、これで」

「防ぎきったわよ」

ここで防いだと言う六人だった。

「あれだけのミサイルでもね」

「そう簡単には破られないわよ」

エンペライザーは着地した。その六人の前に。

「さあ、いいわねテンペライザー！」

「エンペライザーよ」

華奈子の言い間違いに美奈子が突っ込みを入れる。

「確かに言い方が難しいけれど」

「うっ、しまったわ」

自分でも言い間違いに気付いて口をつぐむ華奈子だった。

「エンペライザーだったわね」

「そうよ。エンペライザー」

言葉が訂正されたのだった。

「その辺りしつかりとね」

「ええ、それじゃあ。それでよ」

言い間違いの話の後でさらに言う華奈子だった。

「いいわね！」

「戦いはこれからよ」

美奈子もここで言う。

「今のは序奏だからね」

「そうね。じゃあ歌いはじめるわよ」
美奈子の言葉に頷く。そうして本格的にはじめるのだった。その
戦いを。

第二百三十話 完

2009・10・18

第二百三十一話

第二百三十一話 ツインボーカル

「行くわよ美奈子！」

「ええ華奈子！」

二人は背中合わせになっていた。華奈子は左に、美奈子は右に。それぞれ位置してそのうえで掛け声をかけ合ったのだった。

「今日のライブがいよいよスタートするけれど」

「いつも通り頼むわよ」

背中合わせになったうえでお互いを目で見合う。しかし顔は動かさない。その目だけで見合う二人だった。

「あんたもね」

「わかったわ」

二人は言い合ってから離れた。そうしてだった。

「スタート！」

「行くわ！」

歌いはじめた。ソロで歌い部分もあれば重唱の部分もある。歌っているのだった。何と無数の音符が境界を超えて宙に舞いだしたのだった。

「えっ、音符が出て来たぞ」

「そうだね」

それを見て互いに言い合うライゾウとタロだった。彼等もモニタ―から戦いを見ているのである。当然博士と小田切君もである。

「あの音符って何だ？」

「絶対に魔法だと思うけれど」

「そうじゃ、魔法じゃ」

ここで博士が彼等に対して告げた。

「あれは間違いなくそれじゃ」

「魔法の音符」

「一体どんな効果があるんだろう」
「ふむ。どうやら」

博士はその音符を見続けている。風の中に漂う様にしてそのうえでエンペライザーの周りを囲んでしまったのであった。何時の間にか。

「攻撃の為の音符じゃな」

「攻撃って？」

「あれが？」

「そうじゃ、攻撃じゃ」

それだというのである。

「あれはのう」

「攻撃っていつても」

「風に漂ってるだけじゃないの？」

彼等にはそう見えるだけであつた。しかしここで彼等や博士と共にモニターから戦闘を見ている小田切君があることに気付いたのであつた。

「んっ、あれは」

「あれは!？」

「何かあつたの、小田切君」

「うん、あつたよ」

まずはライゾウとタロにこう答える小田切君だつた。

「ほら、音符の動きだけれど」

「うん」

「それは」

「エンペライザーを完全に囲んでいるよ」

そのことを指摘するのだった。見ればその通りだつた。音符達は何時の間にかエンペライザーの周りを完全に囲んでしまっていたのである。

ただ周りに漂っているだけではない。無数の音符達がマシンの至る部分を囲んでしまっていたのだ。小田切君はこのことに気付いた

のである。

第二百三十一話

完

2009・10・26

第二百三十二話

第二百三十二話 音符の動き

音符の動きに気付いた小田切君はここで、博士に対しても言った。
「何ですかね」

「わからんが危険なのは間違いないのう」

それは本能的に察した博士であった。そうしてであった。

「エンペライザーはこうした時にはじゃ」

「どうなるんですか？」

「自然に危険を察知して動くのじゃよ」

そうするというのである。

「その超AIでのう」

「つくづく迷惑なまでに優秀なマシンだよな」

「本当にね」

博士の今の言葉を聞いて顔を見合わせて言い合うライゾウとタロであった。

「おかげで一機だけで大騒ぎだよ」

「本当に特撮の悪質なロボット兵器だよね」

まさにそれであった。博士の造るものはどれも迷惑千万なものばかりであるがこのエンペライザーはその中でも特に酷いものである。

「そんなのを造ってさ」

「困った人だね」

「それだけでけれど」

こんなことを言う彼等にまた小田切君が言ってきた。

「エンペライザーが跳んだよ」

「あつ、本当だ」

「跳んだね」

その巨体からは想像もできない高さを跳んだ。さながら蚤の様に跳ぶ。それだけでも驚くべきものがあつた。しかし驚くべきものは

他にもあった。

「えっ、音符が」

「全然離れないよ」

そうなのだった。マシンの周りのその音符達は全く離れないのだ。跳んでも着地してもである。全く離れずまとわり付いているのである。

「何だ、あの音符」

「全く離れないなんて」

「しかも」

小田切君もあることに気付いたのだった。

「何かエンペライザーの装甲が」

「あっ、本当だ」

「確かに」

彼等も気付いた。何とエンペライザーのその無敵の装甲が破損してきたのだ。まるで爆雷に当たったかの様である。壊れてきたのである。

「音符ですね」

小田切君はその原因をすぐに察した。

「あれが壊してるんですね」

「そうじゃな」

博士もそれを見てすぐにわかったのだった。

「そういうものじゃったか」

「何か凄くない？」

「そうだよね」

ライゾウとタロは音符がマシンを破壊することに驚いていた。

「何かこれって」

「やばいみたいな」

「何、これからじゃよ」

だが博士の余裕は変わらない。

「全てはのう」

「こう言って戦いを見守るのだった。確かにまだ戦いははじま
ったばかりであった。」

第二百三十二話 完

2009・10・26

第二百三十三話

第二百三十三話　その頃先生達は

華奈子達が博士の誇るエンペライザーと対峙していた頃。今田先生と今日子先生は実に気楽にお茶を飲み続けていた。しかしであった。

「香ちゃん」

「ええ、今日子ちゃん」

穏やかな中に少し緊張が漂ってきていた。

「あの娘のことね」

「ええ。エンペライザーは」

「倒せるわ」

それはできるといっているのである。

「ただ」

「その次ね」

「ええ。次は」

「難しいわね」

それを言う今日子先生だった。

「エンペライザーも強いけれど次のはもっと」

「そうね。それにしても」

今田先生も言う。

「あの博士って本当に」

「ええ。やっぱり天才ね」

博士が非凡な科学者であることは認めるのである。ただしその非凡さが人類にとって甚だ有害なものであるのが大きな問題なのである。

「それは事実ね」

「ええ。確かに」

それは確かに認めている。

「ただ」

「ええ、ただね」

「それが華奈子ちゃん達にとって」

「あれが出た時ね」

「また言う今日子先生だった。」

「出ましよう」

「ええ。あれは私達じゃないとね」

「相手にできないわ」

「まずね」

「今田先生も頷く。」

「だからね」

「ええ、ここは」

「行く準備はできてるから」

「筭に乗っては無理よ」

「わかってるわ」

「それは当然だと返す今田先生だった。」

「瞬間移動を使いましょう」

「そうよ。一気にワープして」

「それで行きましょう」

「博士のところだね」

「こつ話して身構えているのであった。だが今は。」

「じゃあ今はお茶を」

「飲みましょう」

「出番が来るまでね」

「ええ」

「こつ言い合ってにこやかにお茶を飲む。そうして過ごすのだった。」

2
0
0
9
·
1
1
·
2

700

第二百三十四話

第二百三十四話 博士はそれで

エンペライザーと六人の戦いを見守る博士。ふとここの言っただった。

「さてと、じゃ」

「どうしたんですか？今度は」

「エンペライザーは善戦しておるが」

まずは戦局を見て言っのであった。モニターで相変わらず戦い続けている。

「それでもじゃ。万が一ということがある」

「万が一ですか」

「真の天才とはじゃ」

そのIQ二十万の頭脳で話す。

「あらゆる事態を想定するものなのじゃ」

「あらゆるですか」

「そうじゃ。あらゆるじゃ」

想定しているというのである。

「想定しているものじゃよ」

「じゃあどうするんですか？」

小田切君はそこを尋ねるのだった。

「つていつかもう用意してあるんですよね」

「左様」

まさにその通りだという。

「もう用意はしてあるのじゃ」

「じゃあエンペライザーをもう一機ですか」

単純にそんなことを考えた小田切君だった。

「それともカイザージョーですか？」

「いや、どちらでもない」

しかし博士はその双方を否定するのだった。

「こちらでものう」

「じゃあ何を用意してるんですか？」

「四足のロボットじゃ」

それだというのである。

「それを用意してあるのじゃ」

「四足ですか」

「意外かのう」

「ええ、まあ」

まさにその通りだと答える小田切君だった。

「博士つてそういうタイプのロボットも好きなんですね」

「ちよっと面白いロボットを見てのう」

だからだというのである。

「それで開発したのじゃよ」

「面白いですか」

「形も面白いがかなり強い」

強さも凄いのだという。博士のロボットはどれも戦略兵器クラスの戦闘力であるがその四足のロボットにしてもまさにそうだということである。

「かなりじゃ」

「そんなにですか」

「まず一機で地球を吹き飛ばせる」

そこまでだという。

「楽勝でじゃ」

「楽勝ですか」

「そうじゃ」

とにかくまたしてもとんでもないものを開発してしまった博士であった。戦闘はまだ続きそうであった。

第二百三十四話

完

2
0
9
・
1
1
・
2

第二百三十五話

第二百三十五話 エンペライザーへの攻撃

エンペライザーの攻撃は続いていた。六人と使い魔達はそれは障壁で守っている。それはかなりの強度で無数のミサイルを完璧に防ぎ続けている。

そうして音符でロボットの全身を包んでいる。それを見て華奈子が言った。

「いける!？」

「そうね」

双子の相方の言葉に美奈子が頷く。

「このままいけばね。いい流れよ」

「そう。だったら」

「このままいくわ」

こう華奈子に返すのだった。

「それでいいわよね」

「ええ」

「それでね」

今の美奈子の言葉に頷いたのは春奈と梨花だった。

「勢いはこっちにあるし」

「このまま一気にいくべきよ」

「その通りね」

「ここはね」

赤音と美樹も同じ意見であった。

「そうしましょう」

「それであのロボットをこのまま」

「答えは出たわ」

四人の言葉を受けてあらためて真剣な顔で頷いた美奈子であった。

「華奈子はもう言うまでもないわね」

「あたしはいつも積極路線よ」

実際に楽しげに笑って言葉を返す華奈子であった。

「その通りよ。言うまでもないわよ」

「そういうことね。じゃあ」

「やりましょう」

自分から声をかけてさえしてみせるのだった。

「このままもう一気にね」

「音符で全身を包んだから」

美奈子はそのロボットの巨体を見続けている。そのうえでさらに言うのであった。

「あとはね」

「このままいくにしても」

「音符の数をさらに増やすわ」

「そうするというのである。」

「それでいいわね」

「任せるわ」

華奈子はまた彼女に告げた。

「それもね」

「やるわよ」

言って一気に演奏の勢いを強める。五人もそれに続く。

とりわけヴォーカルの二人はだ。背中合わせになりそのうえで歌うのだった。

「美奈子！」

「華奈子！」

お互いの名前を言い合う。

「派手にやるわよ！」

「ええ！」

歌は重唱だった。見事なデュエットである。それを歌うと音符が乱れ飛びそのうえでエンペライザーを取り囲みさらに攻撃していく。すると。

その巨体のあちこちから火を噴いてきた。火花も散る。そうして遂に。

巨体がゆっくりと崩れ落ち爆発していく。彼女達は遂に勝ったのである。

「やったわ!」

「そうね」

その崩れ落ちる姿を見て会心の笑みを浮かべる六人、遂にエンペライザーを倒したのである。

第二百三十五話 完

2009・11・8

第二百三十六話

第二百三十六話 遂に出番が

エンペライザーが破壊された。ライゾウとタロはそれに大いに驚いていた。

「嘘だろ、これってよ」

「エンペライザーが敗れるなんて」

「おいらはじめて見たぜ」

「僕もだよ」

こう言い合う。しかし当の博士は至って冷静であった。

「ふむ」

「じゃあ博士」

「左様、あれを出す」

至って冷静に小田切君に対して答える。

「あれをじゃ」

「名前は何でいうんですか？」

「ガメオ」

それだというのである。

「わしが開発したあらたなロボットじゃ」

「ガメオですか」

「エンペライザーやカイザージョーも凄いものじゃが」

どちらも過去凄まじい災厄を人類に与えた恐ろしいマシンである。人類の歴史において恐ろしい悪夢、まさに恐怖の大王とさええられているのである。

「これはもつと凄いで」

「それでどんな風に凄いですか？」

小田切君はそこを問うた。

「そのガメオっていうのは」

「見てのお楽しみじゃよ」

しかし今はこう述べるだけの博士であった。

「見てのじゃよ」

「まあとんでもないのはわかるけれど」

「それだけは確かだね」

ライゾウもタロもそのことは何も疑ってはいなかった。何一つと
してだ。

「とんでもない兵器を一杯搭載しているんだろうな」

「滅茶苦茶なのをね」

「わしは天才じゃよ」

そのIQ二十万の頭脳で語る。

「それこそ不可能はないのじゃよ」

「それじゃあそのロボットを」

「発進させる」

それはもう決定しているのであった。

「今からのう」

「じゃあ今から」

「さて、それではじゃ」

実に楽しそうに言うのだった。

「本当に発進させるぞ」

「わかりました。それじゃあ」

「ガメオ発進せよ!」

高らかに叫ぶ博士だった。

「そして何もかも破壊するのじゃ!」

「何もかもですか」

「そうじゃ」

ここでまた胸を張る博士であった。

「わしの開発したマシンらしくのう」

「あの娘達の相手だけじゃないんですね」

話はややこしくなってきた。この辺りは流石博士であった。

第二百三十六話

完

2009・11・8

第二百三十七話

第二百三十七話　　それで出て来たのは

「さあ、それでじゃ」

「ガメオですね」

「うむ、発進させる」

そして今そのロボットが出て来た。それは。

「あれっ、今度はこの形なんですか」

「どうじゃ、これは」

「そうですね。正直驚きましたね」

そのロボットのシルエットを見て言った小田切君である。

「この形にするってというのは」

「わしはいつも同じものを造ることはせん」

この辺りが博士のこだわりだった。

「こうして常にじゃ。違うものを造り続けるのじゃよ」

「常にですね」

「そうじゃ」

誇らしげに胸を張って言うのはこうした時の博士の常である。

「そういうことじゃよ」

「そうですね。それでなんですね」

「どうじゃ？これで」

あらためて小田切君に問うてみせるのだった。

「このロボットで」

「外見は面白いですね」

「そして外見だけではないのじゃよ」

それだけでは絶対に終わらせない博士であった。

「カイザージヨ、エンペライザーと並んでじゃ」

「物凄い性能なんですね」

「一体でオーストラリア大陸全土を一時間で沈めることができる」

まさに戦略兵器である。一步間違えなくとも何処からか光の戦士が来て倒されてもおかしくはないようなとんでもないマシンである。

「簡単にじゃ」

「それをあの娘達に向けるんですか」

「エンペライザーを倒したのじゃ。いいじゃろう」

だからだというのである。

「これを出してな」

「まあ別にあの娘達を殺す気とかはないんですね」

「それはない」

ないというのであった。

「これがそこいらの暴走族や暴力団だったらじゃ」

「容赦しないんですね」

「一人残らず踏み潰すところじゃ」

そうした人種に対しては個人的嫌悪感から一切容赦しない博士であつた。

「しかしあの娘達はそういう相手ではないからして」

「殺しはしないんですね」

「遊ぶだけじゃ。それだけじゃよ」

「遊びですか」

実はそこにも引つ掛かるところのある小田切君だつた。

「遊びで戦略兵器出すんですね」

「遊びは徹底的にやるものじゃよ」

これもまた博士のポリシーだつた。

「じゃから」

「わかりたくないけれどわかりました」

「うむ、出たぞ」

こうしてそのロボットが出撃した。そうして華奈子達の前にその姿を現わすのだった。

第二百三十七話

完

2009.11.16

第二百三十八話

第二百三十八話 ガメオ

六人とそれぞれの使い魔達の前に出て来たものは。これまでにな
いシルエットのロボットであった。

その巨大な黒いシルエットを見て。まずは赤音が言った。

「四つ足ね」

「そうね」

彼女の言葉に春奈が頷く。

「あれって」

「四つ足のははじめてだけれど」

「あれはかなり」

梨花と美樹は早速ロボットの戦力を見ようとしていた。

「強いわね」

「そうね。間違いなく」

それはわかるのだった。ロボットは彼女達の前にもう位置してい
た。

まだ攻撃は仕掛けては来ない。だがその威圧感は尋常なものでは
なかった。

凄まじいプレッシャーを感じながら。華奈子が美奈子に言ってき
た。

「ねえ」

「どうしたの？」

「あれ、どう思う？」

「こっす尋ねたのである。

「あのロボットは」

「そうね。さっきのロボットよりもまだね」

「そうね、強いわね」

「それは間違いないわ」

二人共そのロボットから目を離さない。

「戦っててもそう簡単には」

「勝てないのね」

「結界の力を強くしましょう」

まず彼女が言ったのはそれだった。

「結界のね」

「攻めないの？」

「今は止めた方がいいわ」

こころ華奈子に答えた。

「今はね」

「様子見ってことね」

「そういうこと。下手をしたら攻めているその間に」

美奈子は樂觀していなかった。現実を考えかなりシビアになっていた。

「向こうの攻撃でやられることもあるから」

「あたしとしては攻撃は最大の防御だけれど」

アグレッシブな華奈子らしい意見であった。

「それでも。今はね」

「わかってくれたわね」

「ええ、よくね」

華奈子をしてもそう言わせる、それだけのものが今出て来たロボットにはあるのだった。六人の中で最も攻撃的な彼女でさえもである。

「何か。何をしてくるかわからないから」

「じゃあ皆」

美奈子が他のメンバーに告げた。

「まずはね」

「ええ」

「それじゃあ」

まずは赤音と春奈が応える。次に梨花と美樹だった。

「結界をさらに強くさせて」

「守りましょう」

「様子を見ましょう」

あらためて皆に告げるのだった。

「ここはね」

「そういうことね」

最後に華奈子が頷く。こうして六人はまずは結界をさらに強いものにするのだった。

第二百三十八話 完

2009・11・16

第二百三十九話

第二百三十九話 恐ろしい攻撃

その四足のロボットはゆっくりと動いて来なかった。

「って凄いスピードね」

「そうね」

華奈子と美奈子はそのロボットのスピードを見て言い合う。

「これはかなり」

「速いわ」

「エンペライザー以上ね」

梨花もそれを見て言う。

「あの速さは」

「速さだけかしら」

春奈はその他のことももう考えていた。

「それだけじゃないかも」

「そうね。そう考えた方がいいわ」

美樹はここでは悲観論をあえて述べたのだった。

「さもないと痛い目に逢うわ」

「そうよね。間違いないわね」

赤音も今はシリアスだった。

「これはね」

「それだけけれど」

美奈子がここで述べてきた。

「いいかしら、皆」

「どうしたの、美奈子」

「まずは守るって言ったわよね」

彼女が言うのはこのことだった。

「一旦様子見でね」

「それを変えるっていつの？」

「変えないわ」

それは変えないと。華奈子に対して答えるのだった。

「それはね」

「変えないの」

「一層守りを固めるのよ」

そうするというのがあった。

「ここはね。何があっても守り抜くわよ」

「そこまで凄いかもっていうのね」

「ミサイルだけで済めばいいけれど」

既にミサイルが来るのは予想しているのだった。

「他にも何が来るかね」

「わからないのね」

「そうよ。ビームとか後は」

それから先のことも考える美奈子だった。

「怪しげな攻撃がうんとね。来るわよ」

「じゃあここは」

「何があっても守らないと負けるのは」

美奈子のその言葉がさらに険しいものになった。そうして言うのだった。

「私達よ」

「そういうことね。じゃあ」

「気合入れていくわよ」

「ええ」

華奈子も他の皆も美奈子のその言葉に頷いた。そうしてであった。

「音楽、ダンススタート！」

「わかったわ！」

「派手にいくわよ！」

こうして六人でそのダンスと音楽をはじめた。それでまずはガメオの攻撃を防ごうというのであった。

第二百三十九話

完

2
0
9
・
1
1
・
2
2

第二百四十話

第二百四十話 ガメオの能力

博士はモニターからガメオを見続けている。そうして得意げに言うのであった。

「あのガメオはまさに最終兵器第三弾じゃ」

「三弾ですか」

「いや、四弾じゃったかな」

小田切君の突っ込みにふと訂正したのだった。

「五弾じゃったかな。それとも六弾じゃったかな」

「何で増えるんですか？そこで」

「わしの開発したロボットが多いからじゃ」

そこに理由があるのだった。

「だからじゃよ」

「そういえば僕が助手になってからも随分と作ってますよね」

「うむ」

博士の開発スピードは尋常なものではない。それこそ一日で戦略兵器を作ってしまう、それがこの天本破天荒博士なのである。

「じゃからわからん」

「本当にどれだけあるのやら」

「しかしじゃ」

ここで博士はまた言うのだった。

「能力は凄いぞ」

「あのガメオのですか」

「まずミサイルだけではない」

それだけではないというのである。

「ビームランチャーもあれば」

「それもですか」

「他にはじゃ」

さらに言う博士であった。

「アトミックレイにサークルに波動砲」

「凄いですね」

「他にはデルタアタックという攻撃もある」

「随分と重武装なんですね」

「それを意識したのじゃよ」

誇らしげに語る博士であった。

「それがあのガメオじゃ。また補給や整備の必要もない」

「ああ、そうだよな」

「博士の兵器ってね」

ライゾウとタロもそのことをよく知っていた。

「自動的に内部でエネルギーとか弾薬とか生産されたりするし無限動力だし」

「自動修復装置もあるしね」

「あのエンペライザーにしるじゃ」

先程六人によって敗れ去ったそのロボットのことである。

「また三日もすれば元に戻っておる。安心するのじゃ」

「三日ですか」

「そう、三日じゃ」

たったそれだけだというのである。

「じゃから安心してよいのじゃよ」

「安心ですか」

「さて、どうなるかじゃな」

実に楽しそうにモニターを観続けながらの言葉だった。

「今度はどうやって戦うかのう」

「まあ無茶苦茶になるのはわかってますけれどね」

それだけは予想できた小田切君だった。何はともあれ戦いが本格化しようとしていた。

第二百四十話

完

2
0
0
9
・
1
1
・
2
2

第二百四十一話

第二百四十一話 小田切君の疑念

いよいよそのガメオとクラウンの戦いがはじまろうとしていた。

その時小田切君は戦いの流れを冷静に見ようと務めて努力していた。

気持ちを落ち着けてだ。そうして博士に問うたのだった。

「それですが」

「何じゃ？」

「いえ、あのガメオですよ」

「そうじゃ。それじゃ」

そのガメオの話に應える博士であった。

「それがどうかしたのか？」

「あのマシンって量産できるんですか？」

小田切君はそのことを博士に問うのだった。

「エンペライザーみたいに」

「ああ、それは考えておらん」

このガメオについてはそうなのであった。別にであった。

「それはのう」

「それじゃああれ一体だけですか」

「とりあえずはそうじゃ」

とりあえずはというのが博士らしい。何しろ極端に気紛れな博士である。気が向けば何体でも製造したり量産もする。それが博士なのである。

そうして今も。あくまでとりあえずはというのであった。

「それはのう」

「そうですか。ガメオは一体だけですか」

「究極最終兵器の一つじゃ」

「あの、博士」

今の博士の言葉に思わず突っ込みを入れた小田切君だった。

「究極最終兵器が幾つもあるんですか？」
「そうじゃ、あるのじゃ」
「そうだとまた言う博士だった。」
「それはじゃ」
「何か日本語がおかしくないですか？」
「おかしくはない。何故ならじゃ」
「何故なら？」
「わしが造るものは全てそうだからじゃ」
「実に強引に言い切ってしまった。」
「全てのう。だからじゃ」
「だからですか」
「うむ、カイザージョーもエンペライザーも」
「そうした世を大いに騒がしてきたマシン達のこと話すのだった。」
「究極最終兵器じゃ」
「それでガメオもですか」
「左様。よいか」
「博士の胸を張った言葉は続く。」
「わしの造ったものに抜かりはない」
「どれもですね」
「例えばじゃ」
「何故かここで猿にそっくりの如何にも頭の悪そうな人間型ロボットが出て来たのだった。両手にグローブをはめてトランクスをはいている。」
「この猿ボクサーロボじゃ」
「何か見るだけでむかつくロボットですね」
「そのロボットを見てこう言った小田切君だった。何故かこのロボットの話にもなった。」

2
0
9
·
1
1
·
2
9

第二百四十二話

第二百四十二話 ボクサーロボの末路

その愚劣を絵に描いた様なボクサーロボが出て来た。博士はそれを見て言うのだった。

「このロボットはじゃ」

「何の為のロボットですか？」

「人に嫌悪感を抱かせる為のロボットじゃ」

まさにそれだというのである。

「常に愚か者丸出しの大口を叩きそして最低限の知能も備えておらず後ろから異常なまでのこいつだけを褒め称える実況放送が聞こえてくる」

「こんなの好きになる奴つてリアルで頭がおかしいんじゃないですか？」

実際に小田切君もそのロボットを見て嫌悪感を露わにさせていた。小田切君にしてもそうした感情を見せるしかないような相手なのである。

「何ていうか家族とかいたら全部頭も顔も素行も悪そうですね」

「実際に悪くなるしかないぞ」

それも断言する博士だった。

「それでじゃ。わしも見ているとじゃ」

「どうなんですか？」

「頭に来たのでこうしてやる」

言った側からその一兆ボルトの高圧電流の電気鞭をロボットの口の中に入れた。そうしてスイッチを入れて忽ちのうちに壊してしまつたのじゃ。

「これで終わりじゃ」

「造ってすぐに壊しちゃったじゃないですか」

「どつじゃ。開発者ですら見ているだけで頭にくるのじゃ」

博士以外の人間が言えばそのまま言い訳になる言葉だった。

「だからこうしたのじゃ」

「そうなんですか」

「他にも番長ロボも造られるが」

「そうしたものもあるのだという。」

「それも開発者がまず頭に来る」

「そういう見ているだけで嫌悪感を抱かせるのってありますよね」

小田切君もそれは頷けるのだった。

「フランケンみたいなロボットもですね」

「あれは人望も識見もない。愚かの極みじゃ」

「けれどマスコミには好かれるんですね、そういうのは」

「一度マスコミは破壊せねばな」

博士の解決方法で最も多いものである。

「わしもあした奴等は好かん」

「そうですね」

「ただ嫌いなものじゃ」

博士の行動原理の中でも最大のものである。

「卑劣な奴等がじゃ」

「卑劣なですか」

「あと小悪党で無法者もじゃ」

「そうした存在もだというのだ。」

「じゃから暴走族だの不良だの暴力団なのはじゃ」

「容赦なく殺戮するんですね」

「悪と無法はわしの様にやるのじゃ」

つまり博士の如くそれこそ世界を破壊しかねないレベルでするべきだというのだ。

「わしの様にじゃ。ああした下らん奴等は見ていてだけで抹殺したくなる」

「抹殺ですね」

「しかしわしに正面から向かう相手はじゃ」

「いいんですね」

「その通りじゃ」

何気に自分のポリシーも話していた。無法の中に信条がある、それこそが博士なのだった。

第二百四十二話 完

2009・11・29

第二百四十三話

第二百四十三話 力の源

そのガメオがだった。攻撃を本格的に開始してきた。まずは圧倒的な数のミサイルを放つ。数はもう数え切れないまでだった。

「な、何!?!」

「このミサイルの数は!?!」

華奈子も美奈子もその数を見て唾然となる。結界の中にあってもだ。

「あの数だと」

「結界も」

「いえ、大丈夫よ」

ここで梨花が二人に言ってきた。

「それはね」

「いけるの?この結界で」

「大丈夫だというのね」

「ちよつと美奈子ちゃん言葉じゃないわね」

今の美奈子の不安げな言葉に微笑んで返した彼女だった。

「華奈子ちゃんでもそうだけれど」

「あれだけのミサイルだと」

やはり彼女も不安だというのである。

「ちよつとね。結界も」

「結界を強くするのはね」

ここで梨花は二人にさらに言ってきた。

「私達じゃない」

「私達なの」

「だったら」

「そうよ。私達の歌と演奏とダンスがね」

その三つを話に出してまた微笑むのだった。

「だから。わかるわね」

「そうよね。だったら」

美樹が梨花の横に来てベースを鳴らしながら応える。

「さらに派手になのね」

「そういうことね。じゃあ」

赤音もドラムを鳴らす。美樹の言葉に伝えてだ。

「やりましよう」

「音楽が結界を作って」

春奈もキーボードを打つ。

「それでガメオに対することが出来るから」

「そうね。要はあたし達自身ね」

「それだったら」

それを聞いて気を取り戻したのは美奈子だけではなかった。実は華奈子も同じでそれで四人の言葉を受けて気を取り戻したのである。

「もっともっと上手にね」

「やりましよう」

こうして演奏をはじめめる。二人も歌う。

すると結界がだった。さらに厚いものになった。

その結界がミサイルを防ぐ。全てだった。

「よし、いけるわ」

「そうね」

それを見て気を完全に取り戻した二人だった。

「本当にあたし達次第なのね」

「それだったら」

「やりましよう、美奈子」

「ええ、華奈子」

俄然やる気になる。少なくとも彼女達は気では負けてはいなかった。その巨大な新しいロボットを前にしてもだ。それは間違いなかった。

第一百四十三話

完

2
0
9
・
1
2
・
7

第二百四十四話

第二百四十四話　　こんな武器まで

ミサイルは見事防いだ。しかしであった。

今度はビームを一斉射撃してきた。これまた物凄い数のビームがこれでもかと結界に叩き付けられる。それもまたかなりのものだった。

「ミサイルだけじゃなかったのね」

「本当に何でもあるのね」

華奈子も美奈子もその結界を襲うミサイルを見てそれぞれ言う。

「これは尋常なものじゃないから」

「もつとね。音楽を」

それでミサイルを防ぐ。ビームも何とか防ぐ。そうして今度はデルタアタックやサークルといったものも放つ。しかし結界は何とか防いでいたのであった。

博士は攻撃が全て防がれているのを見てもだ。態度を変えてはいなかった。極めて落ち着き払った顔でまた小田切君達に言っていた。

「ふむ。それではじゃ」

「今度はどうするんですか？」

「何、あれは超AIがある」

それはもう博士のマシンには必ず備わっているものであった。

「じゃから安心していい」

「そうなんですか」

「見よ、今度はファンネルじゃ」

それもあるのだというのだ。

「それを出す」

「博士の車椅子にも備え付けられているあれですか」

「そうじゃ。まあな、あれはじゃ」

ここで自身の車椅子に備え付けられているものについて話す博士

であった。

「ドラグーンじゃったかな」

「けれど同じものですよね」

「結論としてはそうじゃ」

博士もそれは否定しない。

「まあそのドラグーンもファンネルも同じじゃ」

「そうですね。結果としまして」

「他にはハイメガ粒子砲も拡散メガ粒子砲もあるぞ」

「そういったのもですか」

「他にはインコムもある」

とにかく色々な装備があるのである。

「何でもかんでもじゃ」

「物凄い装備ですね、相変わらず」

「わしのマシンはどれもフル装備じゃ」

まさに博士のマシンである。

「とりわけあのガメオはじゃ」

「それなんですね」

「その重装備でじゃ」

さらに言う博士であった。

「あの魔女っ子達の結界をいずれはじゃ」

「破壊するんですね」

「それは間も無くじゃ」

確信している言葉であった。

「じゃから見ているのじゃ」

「ああ、そのファンネルが出ましたね」

マザーファンネルが五つにチルドファンネルがそれぞれ六つずつである。

「何かモビルスーツのそれよりずっと多いですね」

「戦略兵器じゃぞ。当然じゃ」

豪語する博士であった。とにかく戦いはまだ続くのであった。

第一百四十四話

完

2
0
9
・
1
2
・
7

第二百四十五話

第二百四十五話 ファンネルオールレンジ

六人と使い魔達の結界に今度は。ファンネルが来た。

「ファンネルまであるの!？」

「予想以上ね」

華奈子と美奈子はそのファンネルを見てあらためて身構えた。

「本当に何でもありね」

「そうね、本当に」

しかしであった。彼女達はもう怯んではいなかった。

「それならね」

「もつと結界をよ」

「ええ」

華奈子は美奈子のその言葉に頷いた。

「わかってるわ。それじゃあ」

「とにかく攻撃はまだ続くから」

ファンネルだけでは終わらないというのだ。

「だからね。ここはね」

「守り抜くのね」

「敵の攻撃が出尽くしてからよ」

それからだというのだ。

「その時にやるわよ」

「わかったわ。それじゃあね」

「踊って演奏して」

まずはそれであった。

「そうして歌ってね」

「結界を維持して」

「とにかく様子見よ」

美奈子は真剣そのものであった。

「守り抜いてね」

「そういうことね。それにしても」

華奈子は今はそのファンネルを見ていた。

「凄い数のファンネルね」

「ファンネルだけじゃないわ」

美奈子はそれも見ていた。

「見て、華奈子」

「！？あれは」

美奈子が指差したそれは。有線式の兵器だった。ファンネルに似ているがそれとはまた違う、そうした兵器も出て来ていたのである。

「インコムまで」

「しかも一種類じゃなくて」

インコムも複数あったのであった。

「違うわね、ビットだったわ」

「リフレクタービットね」

「そういうのまで出してきたの」

華奈子は険しい顔になっていた。

「どつやら」

「本当に色々あるわね」

「そうね、感心するわ」

「それだけ重武装ならそれこそ」

「あれ一機あつたら世界を征服できるわよ」44

華奈子の今の言葉はあながち間違いでもなかった。

「冗談抜きでね」

「じゃあそれを凌げればね」

「あたし達も本物ってことね」

「そういうことよ」

二人だけでなく皆敢然と向かっていた。まさに本気のバトルであった。

第一百四十五話

完

2
0
0
9
・
1
2
・
1
1

第二百四十六話

第二百四十六話 のどかな先生達

華奈子と美奈子達がガメオの凄まじい攻撃に耐えている頃。今田先生と今日子先生はそれぞれの筈に乗ってある場所に向かっていた。その中で。今日子先生が今田先生に尋ねてきた。

「ねえ香織ちゃん」

「何？今日子ちゃん」

空の上でも二人は二人だった。のどかなやり取りである。

「あの娘達だけれど」

「大丈夫よ」

にこりと笑って今日子先生に返していた。

「あの娘達ならね」

「まだいけるのね」

「充分ね」

笑みはそのままにこりとしたものである。

「いけるから」

「そう。じゃあ瞬間移動はしなくていいのね」

「いけるわ。それに」

ここで今田先生はさらに言うのであった。

「こうしてあの娘達も頑張るのもね」

「いっていいのね」

「そうなのよ」

「こう言うのである。」

「だから。今はね」

「急がなくていいのね」

「かえって急いだらいけないわ」

「逆に、というのである。」

「それはかえってね」

「急がないの」
「そう、急がないの」
また言うのであった。
「穏やかにいいわよ」
「のどかにね」
「あの娘達は頑張ってくれるから」
自分の生徒達をよくわかっていた。そうした意味でこの先生は中々立派な先生であると言えた。そしてそれだけではなかったのである。

今田先生はさらに。こんなことを言うのだった。

「ただね」

「ただ？」

「あの娘達が危なそうなら」

それでも顔も言葉も穏やかなままである。

「その時はね」

「一気に、なのね」

「ええ、そうしましょう」

穏やかだがこう言うのである。

「その時はね」

「わかったわ。それじゃあ今は」

「ゆっくりでいいわ」

あくまで今は、というのである。

「それでいきましよう」

「ええ。それじゃあここでも」

指を鳴らすとだった。二人の前に白いカップに入った紅茶が出て来た。

「お茶をね」

「飲むのね」

「そういうことよ」

こうして空の上でもお茶を楽しむのだった。先生達のこうした性

格はここでも変わらないのだった。

第二百四十六話 完

2009・12・11

第二百四十七話

第二百四十七話 核はどうか

ファンネルでの攻撃が続く。小田切君はその猛攻をモニターから見ながらふと思つのだった。

「そついえばですね」

「何じゃ？」

「このガメオですけれど」

またガメオについて尋ねるのだった。

「色々な武装持ってますけれど」

「うむ」

「核はないんですか？」

それを問うのである。

「それは持つてないんですか」

「核兵器は搭載しておらんよ」

それはないという博士であつた。

「それはじゃ」

「そうですね、ないんですか」

「うむ、ない」

そしてまた答えた。

「それはないぞ」

「珍しいですね、博士が核使わないなんて」

「そうかのう」

「毒ガスとかもないですよ。化学兵器も」

どれも博士が好む兵器である。

「そついうのも一切」

「趣向を変えてじゃ」

だからだというのである。

「それでガメオにはじゃ」

「そういうものは一切ですか」
「まあ核は何時でも装填できる」
「ただしこんなことも言うのだった」
「毒ガスとかもじゃ」
「装填はできるんですか」
「ミサイルに備え付ければ一発じゃ」
「実に簡単に言ってみせたのである」
「それで終わりじゃからな」
「そうですね。それじゃあ今は、ってことですか」
「気分次第で装填するぞ」
「これまた簡単に言っただけのける」
「あの北の独裁国家相手にはよいのう」
「またあそこの国ですか」
「嫌いじゃからな」
「まさにそれだけだという」
「じゃから徹底的にじゃよ」
「それじゃあ暴力団の事務所には」
「今まで通りじゃよ」
「実に素っ気無い」
「それこそ毒ガスでも何でもな」
「それは変わらないんですね」
「うむ、変えるつもりもない」
「そもそもそんなつもりもなかった」
「そういうことじゃよ」
やはり博士は博士であった。それがよくわかる会話であった。

2
0
9
·
1
2
·
1
9

第二百四十八話

第二百四十八話 助っ人が

六人も使い魔達も必死に守っている。その中で。

「ねえ美奈子」

「何？」

美奈子は隣の華奈子の言葉に応えた。

「そろそろかしら」

「いえ、まだね」

こう双子の相方に返す。

「それはね」

「まだなの」

「これで終わりじゃないわね」

また言う美奈子だった。

「このマシンは」

「そこまで強い」

「あの博士のマシンよ」

何につけてもそれであった、

「この程度じゃね」

「やっぱりそうなのね」

「エンペライザーだってそうだったじゃない」

その悪夢の如き戦略兵器である。先程皆で何とか倒したそれだ。

「そうだったでしょ。あれよりずっと強いみたいだし」

「まだまだ我慢なのね」

「そうよ」

まさにそうだというのである。

「だからね。いいわね」

「いい加減痺れが切れてきたけれどわかったわ」

この辺りは攻撃的な華奈子らしかった。

「それじゃあまだね」

「我慢してね」

「ええ、じゃあ」

それに頷いてだった。さらに粘るうとするとそこで。二人が来たのだった。

「皆お待ちせ」

「お菓子はどうかしら」

こう言って先生達が来たのだ。何と結界を何でもないといたよ
うにすり抜けてだ。本当に何でもないといた様子で、である。

「一杯あるわよ」

「お茶もあるわよ」

「いえ、それはいいですけど」

「あの、いきなり」

六人はその先生達に唾然となって問う。

「出て来ましたけれど」

「いいんですか？」

「いいのよ、それはね」

「それにしても。よく頑張ったわね」

そののどかそのものの声での言葉である。

「それじゃあ後はね」

「先生達も入れてね」

「入れてって」

「あの」

「任せてくれていいから」

「それでもいいのよ」

六人が言うよりも強く入るのだった。

「さあ、それじゃあ」

「はじめましょう」

今田先生も今日子先生もマイクを出していた。そうして先生達の
歌がはじまるのだった。

第二百四十八話

完

2
0
9
・
1
2
・
1
9

第二百四十九話

第二百四十九話 絶大な魔力

先生達はマイクを手に取って。そうして言い合つのだった。

「じゃあ今日子ちゃん」

「ええ、香ちゃん」

声を重ねてそれで。歌いはじめた。

「よし！」

「スタート！」

そうしてであつた。一気にはじめた。演奏に合わせて。

歌うと。音符が今までとは比較にならない量が出た。それに動きもだ。六人のそれとは全く比較にならない程凄いものであつた。

「何っ、この量」

「それに動きも」

「私達とは全くの別物」

六人は完全に演奏に回つていたがそれでも驚きを隠せなかつた。

「これだけ凄いものを見せるなんて」

「何処まで凄いのよ」

「これって」

驚く六人をよそにだ。二人の歌は続く。それはガメオの圧倒的な攻撃のラッシュも次第に押していつていた。それも目に見えてである。

「少しずつ退けていつて」

「もう少し」

「そうね」

「あと少しね」

先生達はこう言い合つてであつた。さらに歌う。音符達は遂にガメオを囲んだのだった。

「遂に！」

「あのガメオに」
「辿り着いたわよ」
それを見てまた驚く六人だった。
「嘘みたい……」
「こんなことつて」
「すぐにここまで」
あらためて先生達の実力を思い知るのだった。
「追い詰めるなんて」
「一気に」
「凄……」
「いえ、これからですよ」
「はい、これからよ」
しかし先生達はいつもの穏やかな笑みで六人に返すのだった。
「これからが本番ですから」
「あのマシンはそう簡単には崩れないから」
それを既に見越しているというのである。
「だから、これからです」
「見ていてね」
「はあ、それじゃあ私達は」
「ここはやっぱり」
「演奏に専念ですね」
こう言うのだった。先生達の返答は。
「はい、それで御願いますね」
「演奏をね」
とにかく今は主役は二人であった。その二人の歌がだ。素晴らし
いまでの魔法をそこに見せていた。これまでにない程の魔力をであ
る。

2
0
0
9
·
1
2
·
2
2
7

第二百五十話

第二百五十話 博士はそれを見て

ガメ才は次第に押されてきている。それを見た博士は。

「ふうむ」

まずは腕を組んで考える顔になっていた。

「これは」

「これはって？」

「面白いことになってきたのう」

「こう話すのだった。」

「これはじゃ」

「面白いんですか」

「左様」

「こう小田切君に返すのだった。」

「これはじゃ」

「何か余裕ですね」

「また言う小田切君だった。」

「ガメ才が危ないのに」

「危なくてもそれでもいいのじゃよ」

「平気な顔で言うのである。」

「楽しいからのう」

「楽しければ何でもいいんですか」

「うむ、それでよい」

「実に博士らしい返答だった。」

「それはじゃ。いいのじゃよ」

「ガメ才が破壊されてもですか」

「確かにそれは悔しいことじゃ」

「そのことは言う。」

「しかしじゃ。それでもじゃ」

「楽しければいいんですね」

「そういうことじゃ」

何処までも博士は博士であった。それ以外に言い様がなかった。そしてであった。さらに言うのであった。

「そうしてじゃ」

「そうして？」

「ここで負けたら今回はじゃ」

「また何か出すんですか？」

「これで終わる」

それでいいというのである。

「これでじゃ。終わるのじゃ」

「あれっ、あっさりしてますね」

「ガメオの性能のチエックでもあったからのっ」

だからだというのである。

「だからじゃ。それでいいのじゃよ」

「そうですか。それで満足ですか」

「うむ、それではじゃ」

博士はまたワインを出して来ていた。グラスもである。それを空けて早速出してである。そうして一杯ずつ飲んでいくのであった。

そうしながらまた。博士は言った。

「さて」

「さて？」 4 4

「飲むか、小田切君も」

グラスをもう一個出してきての言葉である。

「どうじゃ？」

「あっ、いいんですか」

「うむ、飲もうぞ」

こう言って勧めるのであった。小田切君もそれを受けて飲むのだった。

第二百五十話

完

2
0
0
9
・
1
2
・
2
7

第二百五十一話

第二百五十一話 勝負あり

先生達はその圧倒的な音符攻撃を受けて。ガメオも遂に動きを止めてしまった。

それを見た六人は驚きを隠せなかった。

「嘘でしょ!?!」

「あのガメオを」

「本当に止めるなんだ」

「手強いですよ」

「けれどそれでもです」

先生達はその六人に対して話すのだった。

「攻撃を集中させればです」

「勝てるものです」

「いえ、それは」

「ちよつと無理かと」

「そうよね」

六人は顔を見合わせて言い合う。六人にしてみればそれはとても無理な話だった。ここに彼女達と先生達の実力差が出ていた。

「やっぱり先生達って凄いわよね」

「尋常じゃないっていうか」

「確かに」

「皆さんもこうなれますよ」

「自然に」

しかし先生達は温和な顔のまま言うだけだった。

「魔法を勉強していけばです」

「なれますからね」

「ううん、そうかしら」

「それはかなり」

華奈子も美奈子もそのことについては自信が持てなかった。

「あたし達が逆立ちしてもね」

「先生達みたいにはなれないよね」

「そうよね」

「そう思うとなれないですよ」

「諦めたらそれで終わりですよ」

しかし先生達はそれでも言うのだった。

「ですから諦めずにです」

「少しずつやっていけばいいですよ」

「それであれにも勝てるのかしら」

「そうみたいね」

さしもの華奈子も美奈子もそのことには自信が持てないでいた。

とても、である。そんな彼女達の前で今ガメオが動きを完全に止めてしまった。

それを見て。あららめて驚く六人だった。

「うわ、本当に」

「止まった、あのマシンが」

「何てこと……」

それを見てまた驚く六人であった。六人は今は驚いてばかりであった。

そうして驚いたまま。さらに言うのだった。

「勝ったのよね、これって」

「そうよね、先生達が」

「勝ったわ」

それは間違いなかった。ガメオが動かなくなったのが何よりの証拠だった。

「これで終わりね、今日子ちゃん」

「ええ、香ちゃん」

先生達にはこりと笑ってお互いに言い合う。

「これでね」

「一件落着ね」

先生達は今も同じペースだった。相変わらずのマイペースであった。

第二百五十一話

2010・1・4

第二百五十二話

第二百五十二話 諦める博士

ガメ才は動かなくなつた。それを見たライゾウとタロがまず言う。

「折角の最新鋭がよ」

「動かなくなつたよね」

「うん、完全にね」

それに小田切君も続く。

「動かなくなつたよね」

「博士、これつてまずいんじゃないのか？」

「折角最新型を造つたのにいきなり負けたんじゃ」

「それでもありのままですか？」

小田切君も問うた。しかし博士は言うのだった。

「これも有り得ることじゃ」

「有り得ることですか」

「勝敗は戦いの常じゃ」

落ち着いた顔で言う博士だった。それだけだった。

「敗れるのも当然のことじゃ」

「そうですね。それだけですか」

「負けたらより新しい強いものを製造するだけじゃ」

博士にとつてはまさにそれだけだった。さばさばとさえしていた。

「さて、それではじゃ」

「新しいものをまた造るんですね」

「あのガメ才は試験作じゃよ」

「だから平気なんですね」

「偉大なものを造るには失敗は付き物じゃ」

今度はこんなことも言う博士であった。やはり何ともなかった。

「さて、では」

「ひよっとして今からですか」

「造るとしよう」

博士はすぐに後ろに下がった。そうして己の研究室に籠ろうとするのであった。

小田切君はその博士の後姿に声をかけた。

「それで博士」

「アシスタントはいらんぞ」

「いえ、あのガメオのプロトタイプはどうするんですか？」

「回収するよ」

これも何とでもなく返す博士だった。

「それから造るからのう」

「それでなんですか」

「三日程でできる」

「三日で、ですか？」

「そうじゃ。三日あれば充分じゃ」

実に素っ気無い返答だった。後ろを振り向くことはない。

「それではじゃ。また会おう」

「じゃあ僕は暫くここで見張りですか」

「八時に来て五時に帰ればいい」

それだけであつた。

「研究室にいるだけでいいからのう」

「わかりました。それじゃあ」

「小田切君、暫くは気楽に過ごそうぜ」

「ゲームでもしながらね」

ライゾウとタロが小田切君に声をかけてきた。

「仲良く過ごそうぜ」

「それでいいよね」

「うん、それじゃあ」

小田切君も微笑んでそれに返す。騒動は何とか終わったのであつた。次の騒動までの息抜きでしかないにしてもである。

第二百五十二話

完

2010・1・4

第二百五十三話

第二百五十三話 戦いの後では

戦いが終わって華奈子達は何をしたかというのだ。

「それではです」

「いいですか？」

今田先生と今日子先生が二人に声をかけてきたのである。

「これから」

「お茶にしますよ」

「えっ、お茶って」

「お茶なんですか!？」

六人はそれを聞いて思わず驚きの声をあげてしまった。

「お茶って」

「今からですか」

「はい。それが何か」

「どうかしましたか？」

いつもの穏やかな顔で尋ねる先生だった。

「お茶にしますけれど」

「それが何か」

「いえ、お茶って」

「戦いがあったんですけれど」

その直後である。それで六人はまだ気持ちが悪く落ち着いていないのである。それで先生達の言葉に困惑した顔を向けているのである。

「それでもなんですか？」

「あの、それでいいんですか？」

「そうですね」

「嫌なんですか？」

「嫌っていうわけじゃ」

まず答えたのは華奈子だった。

「そうじゃないですけどね」
「少し」

今度は美奈子も言ってきた。

「時間を置いた方がいいんじゃない」

「いえ、今です」

「今でいいのです」

しかしそれでも穏やかな微笑みのまま言う先生達だった。

「ですから」

「今から」

「はあ。それじゃあ」

「私達は別に」

華奈子と美奈子だけではなかった。他の面々も頷くのであった。

そうしてであった。話は先生達のペースで進む。

「お茶はですね」

「香ちゃんのお家で飲みますよ」

「香ちゃんって」

「今田先生のことじゃない」

美奈子が華奈子に囁く。

「それはわかってるんじゃないの？」

「わかってるわよ。ただ」

「ただ？」

「その呼び方に驚いてるのよ」

そうだとするのである。とにかく話はかなりややこしくなるとい

るだったが終わりは実に素っ気無いまでに穏やかなものであった。

何はともあれ皆は今田先生のところでお茶を飲みに向かった。

2
0
1
0
·
1
·
1
1
1

第二百五十四話

第二百五十四話 ライゾウとタロも

「まあ終わってよ」

「一件落着だね」

ライゾウとタロもである。実に穏やかな顔でいた。二匹は華奈子の足元で早速緊張を解いている。もう何もないとわかっていているからである。

「兄貴達も今時ほつとしてるだろうな」

「そうだね。またさ」

「また？」

「弟と話がしたいな」

ライゾウの兄とタロの弟が博士のところにいるあの二匹なのである。博士が気紛れで喋れるようにしてそれから研究所にいるのである。

「またね」

「ああ、そうだよな」

ライゾウもタロのその言葉に頷いた。

「それもな」

「君もそう思うかい？」

「何だかんだ言っただけだしな」

だからだというのである。

「いやさ、おいらの兄弟ってな」

「うん。どうしてるの？」

「全員いい御主人に貰われて幸せになってるんだよ」

そうだというのである。

「旦那のところもかい？」

「そうだよ。けれどあいつはね」

「おかしなところにいるよな」

「君のお兄さんもね」

「兄貴は兄貴で楽しくやってるみたいだけれどな」

ライゾウは自分の兄についてはこう言う。実際に向こうのライゾウは彼は彼で楽しくやっているのである。その辺りはやはり兄弟である。

「まあだからいいんだけれどな」

「そうなの。いいの」

「いいさ。じゃあ旦那」

「うん」

「お茶に行こうぜ」

先生達が言うそのお茶会である。

「今からな。それでいいよな」

「御主人様と一緒にだしね」

「おいら達も何か貰えるしな」

早速いつものちゃっかりしたところを出して楽しそうに笑うライゾウだった。

「それじゃあな」

「うん、それじゃあね」

「行こうか」

「うん、先生のお家にね」

こう話してそのうえで彼等も向かう。戦いは終わり彼等も安息の時を迎えるのだった。

その道中だった。ライゾウは華奈子の幕のところに行った。そこにタロと一緒にいるのだ。そこで浮かんでいる。使い魔だからその程度の魔術は使えるのである。

そこからタロに話してきた。

「なあ旦那」

「どうしたんだい、今度は」

「いや、おいら達もな」

「うん」

「修業しないか？」
「こんなことを言ってきたのである。これがまた一つの話のはじまりだった。」

第二百五十四話 完

2010・1・11

第二百五十五話

第二百五十五話 柔軟から

ライゾウとタロはだ。華奈子が学校に行っている間に自分達で家の庭に出た。そうしてそのうえで緑の芝生の上でまずは準備体操をするのだった。

やはり猫だけあってライゾウの身体は柔らかい。タロはその彼を見て言う。

「やっぱり猫だけはあるね」

「柔らかいってか」

「そうだよ。犬に比べてずっとね」

ライゾウ自身もそれについて言うてきた。身体を曲げるとまるでボールの様である。

「柔らかいからな」

「犬はそんなに曲がらないからね」

タロは身体を前にやってみる。しかしやはり猫程には曲がらないのであった。

「そこまではね」

「まあ犬と猫じゃ何もかもが違うからな」

ライゾウはこうそのタロに対して言う。

「別に気にすることはないんじゃないかな」

「そうかな」

「そうだよ。猫は猫、犬は犬」

ライゾウは四足で身体を伸ばしながら述べた。

「それぞれできることとできないことがあるじゃないか」

「言われてみればね」

タロもライゾウのその言葉に頷く。

「それはその通りだね」

「そうだろ？例えば旦那はさ」

「うん」

「凄く長く走られるじゃないか」

このことを言うのである。犬の長所をだ。

「そうだろ？相当な」

「走るの得意だよ」

タロ自身それを認める。今は二匹共ストレッチを終えてもとの四足で立っている姿勢に戻っている。そのうえで話をしているのであった。

「やっぱり犬だし僕は元々狩猟犬の種族だしね」

「甲斐犬だったよな」

「うん」

その犬だと答えるのであった。

「そうだよ」

「それだよ。おいらはそういうのは駄目なんだよ」

スコティッシュフォールドのライゾウの言葉である。

「長く走るのはな」

「そのかわり君は隠れるのが上手だよな」

「ああ、それだよ」

その話になるとにこりと笑って話すライゾウであった。猫であるがその表情はかなり豊かである。喜怒哀楽が顔にそのまま出ている。

「それなら任せておけよ」

「つまりそういうった個性をそれぞれ活かせば」

「御主人の役にも立てるよな」

「そうだね。僕が走って」

「おいらが隠れる」

役割分担もできてきた。

「そういうことでいいかな」

「そうだな。後はだ」

「うん。後は？」

「ちよっと魔法の勉強していくか」

「そうだね。僕達も使い魔だし」
こうしてトレーニングの後で魔法の勉強に入る。彼等も真面目に
使い魔として考えていたのである。決して遊んばかりいるわけ
はないのだ。

第二百五十五話 完

2010・1・18

第二百五十六話

第二百五十六話 覚える魔法は

二匹はトレーニングの後で話をしていた。場所は家の中である。華奈子と美奈子の部屋でそれぞれあだこつだと話をしているのである。

「僕はやっぱりあれだよな」

まずタロが言う。

「速さと持続の魔法だよな」

「旦那はそれでいいと思うぜ」

ライゾウは彼のことはそれで太鼓判を押した。そうして次に自分のことも言うのであった。

「それでおいらはな」

「うん、やっぱり隠れる魔法だよな」

今度はタロがライゾウに対して話す。

「それが一番だよ」

「そうだよな。じゃあそれで決まりか？」

「あとまだ何かあるかな」

しかしここでタロがさらに言う。二匹は座って話をしているのである。

「他には」

「他にはなあ。何か派手な魔法でも覚えるか？」

「派手な魔法？」

「御主人達みたいなのだよ」

ライゾウは華奈子達を話に出してきた。

「ああしたな。派手で威力抜群の魔法をな」

「そういうのを覚えるの」

「それでどうだよ」

こつタロに提案するのである。

「何かそうした魔法をな」

「そうだね」

タロはライゾウの提案にまずは一呼吸置いた。それから述べた。

「悪くはないね」

「旦那もそう思うか」

「悪くはないけれど」

しかしであった。ここで言葉が曇るのであった。

「ただね」

「ただ？何かあるのかよ」

「どういった魔法を覚えようって考えてるの？」

実に具体的なことをライゾウに問うのであった。

「ライゾウはさ、どういった魔法がいいのかな」

「そう言われると」

困った顔になるライゾウだった。やはり表情豊かな猫である。

「ちよつとな」

「そこまで考えてなかったんだ」

「旦那はどうなのがいいと思う？」

逆に彼に問う始末であった。

「それでだけれど」

「わからないな」

こう言うしかないライゾウであった。

「そう言われてもね」

「旦那もわからないのか」

「だっていきなりそんなこと言われても」

突然だと、というのである。

「すぐに言える訳ないじゃない」

「それもそうか」

「どうしようかな、本当に」

「さてな」

二匹の前に壁が出て来た。そしてそれはどういった壁なのかさえ

わからないものであった。

第二百五十六話 完

2010・1・18

第二百五十七話

第二百五十七話　　それでは

「二匹はあれこれ考える。しかしであつた。」

「どうしたものかな」

「ってライゾウが言い出したんじゃない」

「それでもわからないものはわからないさ」
かなり悪質な居直りである。

「わからないものはよ」

「わからないの」

「ああ、わからないよ」

「こつタロに返すのである。」

「そついう旦那はどうなんだよ」

「僕だつてわからないよ」

「だろ？じゃあ同じじゃないか」

「だから同じじゃないから」

それはすぐに否定された。そのタロによつてである。

「それはね」

「同じじゃねえのかよ」

「だつてさ。言ったのはライゾウだよ」

「ああ」

「僕はそれに応えてるだけ」

確かにその通りであつた。今の二人の関係はである。

「それで同じって言われてもね」

「違つていつのかよ」

「実際に全然違つじゃない」

「それもそうか」

「ここでようやく認める始末である。こつしたところにも犬と猫、
ひいてはタロとライゾウの違いが出ていた。そして二匹はさらに話

していくのであった。

「それでな、旦那」

「うん」

「いいか？」

あらためてタロに言ってきた。

「ここはまずな」

「どうするの？それで」

「修業だ」

それをするというのである。

「修業だ。いいか？」

「修業をするんだね」

「ああ、二匹でやろうぜ」

華奈子の使い魔として一緒である。これは当然であった。

「それでいいよな」

「そうだね」

そのことには納得した顔で頷くことができたタロであった。

「それだったら」

「よし、じゃあ決まりだな」

「うん。とりあえずはどうするの？」

「走ろうぜ」

ランニングからだという。

「それでいいよな」

「ランニングだね」

「ああ、走るぜ」

ライゾウは微笑んでさえいる。

「それでいいよな」

「それだけでけれど」

「何だい？」

ここでタロは一言加えてきたのであった。その加えてきたものは何か。はじまる前からあれこれと話の尽きない二匹の行動であっ

た。

第二百五十七話

完

2
0
1
0
・
1
・
2
4

第二百五十八話

第二百五十八話 障害物も使って

「それでだよ」

「ああ」

ライゾウはタロのその話を真面目に聞いている。彼も自分が言うばかりではないのである。タロの話も聞いている。これは華奈子に對しても同じである。

「ただ走るばかりじゃね」

「物足りないっていうのかよ」

「だってさ。僕達は使い魔じゃない」

「ああ、だから修業をな」

「それだったら思い切ったことをしようよ」

「思い切ったこと？」

そう言われてもである。ライゾウは首を傾げさせてそのうえでタロに言葉を返すのだった。

「ただ走るんじゃなくてね」

「どうするんだよ、それで」

「障害物競走みたいにしようよ」

「障害物かよ」

「屋根の上とかさ。そうしたところを走っていかない？」

「道だけじゃなくかよ」

「そう、例えば」

ここでさらに言うタロであった。

「川を泳ぐとか。ライゾウ泳げるよね」

「ああ、泳ぐのは得意だぜ」

猫であるがそれもいけるのである。実際に箱の中で川に流されるだけの猫を何度も助けたことがある。そうしたこととするライゾウなのである。

「それもな」

「じゃあ丁度いいじゃない。それだとしっかりとした修業になるよね」

「そうだよな。言われてみれば」

「激しい運動でもあるし」

「油断したら怪我するから精神的な鍛錬にもなるしな」

言われてそのことにも気付くライゾウだった。

「それだといいか」

「うん、それでどうかな」

「よし、乗ったぜ」

ライゾウは笑顔でタロに言葉を返した。

「おいらはそれでいくぜ」

「それじゃあそれでいいよね」

「ああ、是非な」

ライゾウは笑ってこう返したのであった。彼にとっても望むところであった。

「それでな」

「早速はじめる？」

「えっ、早速かよ」

「僕はそれでいいけれど」

タロはこう言ってきたのだった。

「ライゾウはどうなの？」

「まあおいらもな」

ライゾウはその首を傾げさせて述べてきた。

「今からでもいいけれどな」

「じゃあそれでいいじゃない」

「ああ。それにしても」

「それにしても？」

「話の展開が早いな」

こう言ってきたのである。

「何かな」

「それでいいじゃない」

それでいいと返すタロだった。何はともあれ二匹の修業がはじまった。

第二百五十八話 完

2010・1・24

第二百五十九話

第二百五十九話 上に下に

二匹の修行というのだ。まずはであった。

何はともあれランニングからだった。ただのランニングではない。街の家々の屋根の間を飛びその上を駆ける。電線の柱を台にして跳んだりもする。

そして下に下りては狭い溝の中を駆ける。川を泳ぎ狭い道も駆ける。そうしたランニングだった。

その中でだ。ライゾウがタロに言う。

「なあ旦那」

「何？」

「旦那もかなりやるな」

彼のその動きのよさに対する言葉である。今二匹は歩道橋の上を駆けている。

「犬なのに狭い道もさ」

「甲斐犬だからね」

タロは元々この犬であるのだ。黒犬である。

「だからね」

「甲斐犬だからだったのかい？」

「そうだよ。甲斐犬は元々狩りとかに使われててね」

「そうだったのか」

「うん、山の中を駆けたりもしたから」

犬としてはわりかし小柄だったたりするのである。

「だからね。こうした場所もね」

「平気だったのか」

「そういうこと。そういうライゾウだった」

今度はタロからライゾウに話すのだった。

「随分頑張ってるじゃない」

「猫だからこういう狭い場所とかは得意なんだよ」

「違うよ、体力だよ」

彼がライゾウに言うのはこのことだった。

「犬の僕と一緒にずっと駆けてるじゃない」

「ああ、おいら達兄弟は体力はあるんだよ」

こうタロに答えるライゾウだった。今度は川の中を泳ぐ二匹であるがその泳ぎも見事である。少なくとも溺れるようなことは全くない。

「それはな」

「そうだったんだ」

「スコティッシュフォールドは動きが鈍いけれどな」

猫にしては、ということである。

「それでもおいらもあの博士のところにいる兄貴もな」

「体力はあるんだね」

「ああ、そうさ」

まさにその通りだということのである。

「だからな。旦那にもな」

「合わせられるんだね」

「そういうことさ。それじゃあな」

「うん、それじゃあ」

「さらに先に行こうぜ」

こう言ってさらに先に進む。結局その川は泳ぎきるのだった。川からでて身体を振って水を飛ばしてからまた駆けはじめるのだった。そうして学校に入る。そこは華奈子達の通っているその小学校である。

そこに入りだ。そのうえで。

「アスレチックだね」

「そうだな」

学校の鉄棒やそういった様々な遊ぶ器具に向かう。今度はそちらを使うのであった。

第一百五十九話

完

2
0
1
0
・
2
・
2

第二百六十話

第二百六十話 アスレチックの後で

学校の鉄棒やジャンゲルジムが並んでいる。砂場もあればプールもある。校舎も高い。二匹から見ればそこも立派な修行の場であった。

二匹はお互いに顔を向け合いそのうえでだ。

「じゃあ今度は」

「ここだな」

こう言い合いだった。すぐに駆け出す。

まずは鉄棒の上をそのまま駆けジャンゲルジムも登り棒の上も駆けてだ。シーソーの上を跳ねて素早くグラウンドを一周してそのうえでプールに入りバタフライの如く泳ぎ校舎の上を駆け巡りだった。凄まじいまでの速さで誰にも知られることなく駆け巡ったのだった。そのうえで家に帰りだった。二匹は風呂に入った。

ちゃんとその前足でシャワーを出して湯を浴びてシャンプーで身体を洗う。そのうえで自分達で身体を拭いてドライヤーも使う。風呂から出た時はすっきりとなっていた。

「これにて」

「今日の修業は終わりだよな」

二匹は風呂から出て居間でくつろぎながら話をしている。ミルクを出して飲みながらだ。そのうえで話をしていた。

「それで明日は」

「何をするかだよな」

「ランニングもやるとして」

「その他には何をすればいいんだろうな」

こんな話をしているとだった。ここで華奈子が帰って来た。彼女は二匹が居間でくつろいでいるのを見てすぐにこう言ってきたのである。

「あんた達何してるの？」

「ああ、御主人」

「お帰り」

その彼女に顔を向けて挨拶もした。

「今帰ったんだ」

「何が面白いことあった？」

「別に。って言いたいけれど」

その二匹のところに来て言ってきたのである。

「あんた達今暇？」

「ちよつとくつろいでるだけだけれど」

「こつしてシャワーも浴びた後で」

「そうなの。ちよつと見てくれるかしら」

何やら思うところのある顔での言葉であった。

「ちよつとでいいから」

「ちよつとでいいって」

「魔法の勉強でもするのかよ」

「そうよ」

まさにそうだといっているのである。

「ちよつとね。考えてるのよ」

「新しい魔法かな」

「それなのかよ」

「そうよ、美奈子も多分そうだけれど」

双子のそのパートナーである。やはりこの二人の絆は切っても切れないものがある。それはもう生まれた時からのものである。

「あたしもね。考えてね」

「じゃあさ。付き合うから」

「そうさ。見るだけだったらな」

こつ言って主の魔法にも付き合っただった。二匹にとってはこれもまたいい修業になるのだった。まさに暮らしの中に修業ありであった。

第一百六十話

完

2
0
1
0
・
2
・
2
・
2

第二百六十一話

第二百六十一話 炎の文字

華奈子のその魔法を見ることになった二匹はまず彼女について家の庭に出た。そうしてそこで彼女の魔法を見させてもらうのだった。「それでさ」

「一体どんな魔法なの？」

「うん、それはね」

まずは二匹の言葉に頷いてであった。既に法衣には着替えている。いつもの赤い法衣である。6

「こうしてね」

「あつ、火が出たね」

「そうだね」

ステッキを動かすとそれだけでそのステッキの先に火が点いた。それが虚空をまるでペンの様に文字を描いていくのであった。

そしてその文字が何かというのであった。

アルファベットである。そこで何やら書かれている。

しかし二匹はその文字を見てだ。首を傾げるばかりであった。そうしてこう華奈子に対して問うのであった。

「ええとさ」

「何て読むの？」

「英語だね。ファイアーっていうのよ」

それだというのである。見れば確かに大文字でそう書かれていた。その火で書いた文字が宙に浮かんだままで燃えているのである。

「これはね」

「御主人が使う魔法そのものだよね」

「そうだよね」

二匹はその文字と彼女の言葉の両方を確かめながら答えた。「つまりは」

「けれどこれが一体」

「こうしてね。魔法で文字を書くでしょ」

あらためて二匹に話す彼女だった。

「そうしたらね」

「そうしたら？」

「それでどうかなるの？」

「うん、この文字を飛ばしたり」

実際に飛ばしてみる。文字がそれぞれ自由自在に動きだした。

「好きなように操ったりできるんだけれど」

「それって凄いいんじゃないか？」

「かなりね」

二匹は実際にその文字がそれぞれ動くのを見ても話した。

「そんな魔法も身に着けたんだ」

「御主人もやるじゃない」

「ほら、博士と戦ったじゃない」

話をそこにまで遡らせての言葉だった。

「それで考えたのよ。こうした魔法もどうかかってね」

「それを美奈子ちゃんの魔法と一緒にだね」

「使っただね」

「美奈子はね」

ここで華奈子はあらためて真剣な顔になって述べた。

「召喚魔法使えるしね。凄いのが」

「だよ。最近使わないけれど」

「あれは凄いよね」

紫の魔女の頃の話である。あの時の美奈子の魔法のことは皆よく覚えていた。

「あの魔法とこの魔法一緒に使ったらどうかって思ってたね」

「成程な」

「それでなんだ」

ここで主の考えがわかった二匹だった。またしても魔法の修業で

あつた。

第二百六十一話

完

2
0
1
0
・
2
・
7

第二百六十二話

第二百六十二話 文字を考えて

華奈子は自分の使い魔達にその文字を見せた。そのうえで、であった。

アルファベットで書いたその文字を飛ばしてみせる。だがここで彼女は言うのだった。

「ちよつとねえ」

「ちよつとつて？」

「何かあるの？」

「ええ、何かね」

首を傾げながらの言葉だった。

「何か文字の威力が弱くない？」

「威力が？」

「それが？」

「そうよ。それに」

自分が書いて操っているその文字を見ての言葉である。

「しかも動きだつて遅いし」

「そうかな」

「気のせいじゃないの？」

「いえ、やっぱり弱いし遅いわ」

自分への妥協はなかった。それは決してである。

「やっぱりね」

「じゃあ一体」

「ここはどうするの？」

「私の魔法がまだまだ弱いのかしら」

最初に考えたことはこれだった。

「それでなのかしら」

「それじゃあもつと修業する？」

「そうして威力も速さももつとあげて」
「それしかないわね」

そして修業することに決めたのだった。

「それで文字をもつと強くしてね」

「そうだよな。やっぱり修業しないと」

「魔法も強くないからね」

二匹はここで自分達のことにはめてはめても述べた。自分達も今さつきまでその魔力を強くする為に修業していたからである。これは何よりも確かに実感できることだった。

「いいと思っぜ、それでな」

「まずは何につけても修業だからね」

「そうね。それじゃあ」

あらためて二匹の言葉に頷いてであった。

さらに文字を書いていく。何度も何度もであった。

「これでどうかしら」

「もっとしてみたらどうかかな」

「そうだよ、もっとだよ」

二匹はここで主にさらに告げた。

「数をしないとね」

「それで文字は次から次に消してね」

「消すの」

念じればだった。それだけで消えた。これは魔法だからだ。魔法は出した本人が念じればそれで消えるのである。少なくとも華奈子達が習っている魔法はだ。

「そうだよ。火なんだから」

「危ないからね」

それが理由であった。

「それに消すのも修業のうちじゃない」

「だからね」

「わかったわ。それじゃあ」

華奈子は二匹のその言葉に頷いた。そうしてそのうえで出したその魔法を消して次の魔法を出していく。そうしながら修業を続けていくのであった。

第二百六十二話 完

2010・2・7

第二百六十三話

第二百六十三話 出して消して

華奈子はその自分の炎を出しては消していく。そうして魔法の修行をしている。そうしながら自分の使っているその魔法をじっと見ている。

そうしてである。そのうえでタロとライゾウに言うのだった。

「ねえ」

「んっ、何だ？」

「どうしたんだよ」

「どうかしら」

その魔法についてどうかというのである。

「こんな感じで」

「まあいいんじゃないのかな」

「そうだよな」

これが二匹の返答だった。彼女のその魔法を見ての言葉である。

「そんな感じだね」

「特に問題はないぜ」

「だったらいいけれど」

しかし華奈子はそれを言われてもまだ自信がないようである。浮かない顔になってそのうえで腕を組んで首を捻ってしまっていた。

「それだと」

「まあさ、自信がないなら」

「もっと練習したらいいしさ」

タロとライゾウがこう彼女に言うてきた。

「まずは何でも修業じゃない」

「努力あつてのものだろ？」

「まあそれはね」

努力の大切さは華奈子にしてもわかっているつもりだ。それを踏

まあたうえでまた言うのであった。

「けれどそれでもね」

「だからさ。数やっつけていけばいいって」

「そうそう」

「それもあるけれど」

浮かない顔はさらに続くのだった。その言葉もだ。

「今の魔法って二人でって考えてるのよ」

「二人ってことはだ」

「美奈子さんと？」

「そう、美奈子」

双子の相方の彼女だというのだ。

「さっき言ったじゃない。美奈子と一緒にするのを考えてるって」

「ああ、そうだったよね」

「それはな」

「だからね。あたし一人だけでも」

「じゃあさ。それだったら」

「美奈子さんも呼んだらどうだよ」

二匹はこう主に提案したのだった。

「それだったらいいんじゃないかな」

「二人でやるもんなんだろう？」

「そうだけれど。じゃあ」

珍しくはつきりしない華奈子だった。

「そうしようかしら」

「何か今日の御主人様って」

「はつきりしないな」

それは二匹にもわかった。それが何故かはまだわからなかった。しかし理由があるのは間違いないかった。

2
0
1
0
·
2
·
1
3

第二百六十四話

第二百六十四話　はっきりしない理由

いつもとは全く違いつまかくはつきりしない華奈子、夕口とライゾウもそんな主を見てそのついでこつ尋ねるのだった。尋ねずにはいられなかった。

「まあとにかくだけれどね」

「何があつたんだよ」

そのはつきりしない理由を尋ねたのである。

「まずはそれを話してみてよ」

「おいら達にさ」

「うん、実はね」

ここでその理由を話しはじめる華奈子だった。俯き加減で浮かない顔で話す。

「今美奈子がね」

「喧嘩したとか？」

「それだつたら仲直りを」

二人もいつも仲がいいわけではない。時々喧嘩もしたりする。そしてすぐに仲直りをする。こつしたごく普通の姉妹関係であるのだ。そうした意味でもだ。

「したらいいじゃないかな」

「それだつたらな」

「喧嘩じゃないのよ」

しかし華奈子はそれは否定した。

「喧嘩じゃないのよ」

「んっ！？それじゃあ」

「何なんだよ」

「美奈子今度コンクールに出るのよ」

美奈子は音楽の分野で非常に高い評価を得ているのである。それ

と対象的に華奈子はスポーツでかなり高い評価である。姉妹でも二人のタイプはそれぞれ全く違っていているのだ。

「それでそっちの練習に忙しくて」

「それで魔法の方にはなんだ」

「あまり時間を、なんだな」

「ええ、そうなの」

それで今は、というのである。

「だから美奈子とはとりあえずは」

「御主人もスポーツの大会前は念入りにトレーニングするしね」

「それと同じだな」

「だからわかるのよ」

自分もそうだからというのである。赤い法衣と大きな縁のトンがり帽子の中での言葉だった。

「美奈子のががね。だから今は」

「一人で魔法の勉強をするしかない」

「そうということなんだな」

「そうなのよ。とりあえず今はね」

また言う華奈子だった。

「そうするしかなくて」

「じゃあ今は我慢して一人でやるしか」

「それしかないんじゃないの？」

「折角二人でする魔法考えたんだけどね」

それが残念でもあるらしい。表情が晴れない理由は一つではないようである。

「どうしたものかしら」

「困ったね、それは」

「いや、待てよ」

ここでライゾウがふと閃いたのだった。

「御主人、旦那、それだったらさ」

「どうしたの？」

「また急に」
華奈子とタロはその彼の言葉を聞く。ここでまた話が動くのだっ
た。

第二百六十四話 完

2010・2・13

第二百六十五話

第二百六十五話 イメージ

「考えてみるんだよ」

「考えるって？」

「何を？」

華奈子とタロはライゾウに対して問い返した。

「何を考えるのよ」

「いきなり言っただけだよ」

「つまりだよ」

ライゾウはそのまま一人と一匹に話す。

「ここはさ。イメージするんだよ」

「イメージって？」

「御主人今一人だよな」

「ええ」

それはどうしても覆せないことである。彼女が今一人でいることはどうしてもだ。だからこそ悩んでもいるからである。そのことはどうしようもなかった。

「そうだけれど」

「だったら想像、イメージだよな」

「それをするっていうの？」

「いると思っただけ」

「こう言うのである。」

「それでやってみたらどうだよ」

「美奈子がいるって思うのね」

ここまで聞いて話を理解してきた華奈子だった。

「つまりは」

「そういうとき。これでわかったよな」

「そうね。何かそれって」

「それって？」

「それはそれでトレーニングになりそうね」

「こんなことを言うのである。」

「どうやらね」

「そうだろ？美奈子さんがいるって想像するよな」

「ええ」

「それもまたいいんだよ」

ライゾウは笑顔で話す。

「美奈子さんがどう動くかとか想像しながらな」

「魔法を使って練習するのね」

「それでどうだよ」

ライゾウはさらに話す。

「やってみるか？」

「そうね」

華奈子はライゾウのその言葉にこくりと頷いた。

「それじゃあね」

「よし、旦那はどう思うんだい？」

「ああ、僕ね」

「旦那はどうかな」

「僕の考えだと」

ここでタロも自分の考えを言うのだった。彼も考えているのだ。実にすっかりとした使い魔達である。

「それだけじゃなくてね」

「それだけじゃなくてか」

「うん、パターンかな」

「こんなことを言うのだった。」

「パターンを考えていたらどうかな」

「パターンって？」

「いいかな」

主人である華奈子に対しても話す。

「それはね」

そしてその話は。タロもまた自分の考えを述べるのであった。

第二百六十五話 完

2010・2・20

第二百六十六話

第二百六十六話 シュミレーション

「僕はね」

「ええ、それで」

「旦那はどう考えてるんだよ」

「まずはライゾウの言った通りのことをするんだよ」

「こっちは華奈子とライゾウに話すのだった。」

「最初はね」

「イメージするのね」

「そう、そしてそれをね」

「それを？」

「書いておくんだよ」

「そうするというのがのである。」

「イメージした美奈子さんの動きをね」

「ノートにでも？」

「そうだね、ノートが一番いいね」

「そのものずばりといったことだった。」

「ノートに美奈子さんの動きを想像したものを書いておくんだ」

「それだけ？」

「勿論それだけじゃなくてね。書いておいてそこからさらに想像していった」

「そうしていくというのである。タロの話もかなり重要だった。」

「色々考えていくんだ」

「ああ、シュミレーションね」

「華奈子はそれを聞いてこっちは述べた。」

「つまりは」

「そういうこと、シュミレーションするんだ」

「それこそまさにタロの言いたいことであった。」

「書いていってね。これでどうかな」

「成程、イメージとシュミレーションね」

華奈子はタロの話の聞いても頷くのだった。

「それをしていってね」

「つまりそういうことだよな」

「それでどうかな」

二匹はあらためて彼女に問うた。

「考えてみたんだけれど」

「そうね、じゃあ」

「これでいいんだよな」

「決まりつてことで」

「ええ、決めたわ」

にこりと笑って答えた華奈子だった。そして言う言葉は。

「まあ勉強は苦手だけれどね」

「たまには頑張るんだな」

「そうだよ」

このことについてはこう言うのだった。

「勉強もたまにはね」

「頑張るしかね」

「全ては魔法の為ね」

実のところ華奈子もわかっていた。それならばであった。

「やるわ。それじゃあ」

「ああ、じゃあな」

「決まりだね」

こうして話は決まった。華奈子はノートにイメージとシュミレーションを細かく書くことになった。それが勉強であった。

2
0
1
0
·
2
·
2
0

第二百六十七話

第二百六十七話 変わったトレーニング

華奈子はそうしたものを書いていく。その中でだ。

「うっん、どうかな」

「どうかなって？」

「どうしたんだよ」

タロとライゾウは彼女の傍にいる。机に座る彼女の横に座っている。

そのうえでだ。彼等に言うのであった。

「どうかな」

「いや、それだけじゃかなり」

「わからないけれど」

二匹の言葉もかなりであった。

「まあ頑張ってるんだね」

「それはわかるけれどな」

「どうなのかしら」

ここでまた首を傾げさせる華奈子だった。

「こつした修業って」

「ああ、それも修業だよ」

しかし二匹はここでまた彼女に言った。

「頭の中でするのもね」

「結局書くのもな」

「学校のお勉強みたい」

華奈子はこんなことも言うのだった。実際こんなふうにも感じていたのだ。

「これって」

「ああ、確かにね」

「それはその通りだね」

「つまり学校の勉強も」

「大事だつてことだよな」

「そうなるの」

それを聞いてであつた。あらためて考える顔になる華奈子だつた。そのうえで言葉であつた。机に座つたまま二匹に話しているのだ。

「やっぱり」

「御主人は学校の勉強は好きじゃないけれど」

「そっちは大丈夫なの？」

「大丈夫よ」

それは大丈夫だというのだ。彼女もだ。

「それはね」

「けれど学校の勉強はできないよね」

「それは」

また言う二匹だつた。

「それはね。そういう勉強は嫌いなものよ」

「魔法はいいんだね」

「そっちは」

「うん、いいの」

それはいいとしてであつた。

「あたしこっちは好きだから」

「ああ、つまりあれだね」

「だよな」

タロとライゾウはそれぞれ顔を見合わせて言い合つた。

「好きこそね」

「もの上手だよな」

そういうことだつた。華奈子はそうなのであつた。

2
0
1
0
·
2
·
2
2
7

第二百六十八話

第二百六十八話 その頃の美奈子

華奈子が必死に魔法の勉強をしているその時。美奈子はどうしているかというのであった。

彼女は学校の音楽室に籠っていた。そのうえでフルートを吹き続けている。

横には彼女の使い魔のタミーノとフィガロが控えている。彼等が言うのだ。

「いいです」

「ただしです」

二匹は極めて冷静かつ客観的に主に述べている。

「もう少しテンポをゆっくりとです」

「その方がいいです」

「ゆっくりなのね」

「はい、そうです」

「やはりその方がです」

こう話す二匹だった。そのうえでさらに聴くのであった。

美奈子は音楽の調子を少し遅くした。するとであった。

「はい、そうです」

「その調子です」

「いいという二匹だった。」

「やはりこの曲はこれがいいです」

「ゆっくりでいくべきです」

「そうね。どうやら」

実際に吹いてみてだった。美奈子もそれを実感したのだった。

「こっちの方がいいわね」

「はい、そうです」

「では御主人様、その様に」

「させてもらうわ」
また言う美奈子であった。
「そういうことでね。ただ」
「ただ？」
「どうなのでしょうか」
「もう少し遅くしてもいいかしら」
実際に吹いてみての言葉である。
「この曲は」
「どうでしょうか。これ位がいいのでは」
「私もそう思います」
しかしタミーノとフィガロの言葉はこうであった。
「テンポはやはり」
「この程度では」
「そうかしら」
「この辺りはまさに意見の相違であった。
遅くてもいいと思うけれど」
「いえ、どうもです」
「これ位が」
あくまでこう言つて引かない二匹だった。
「実際に吹かれてみればどうでしょうか」
「それで考えられては」
「そうね」
二匹の言葉に素直に従う美奈子だった。
「それじゃあ実際に」
「そうしないとはつきりとわかりませんから」
「是非にです」
「ええ、わかつたわ」
こうして実際に吹いてみる美奈子だった。するとだ。
「やっぱり貴女の方がいいわね」
「はい、それでは」

「その様に」

こうして冷静に話を進めていく美奈子達だった。彼女も真面目に勉強していた。

第二百六十八話 完

2010・2・27

第二百六十九話

第二百六十九話 博士もまた

二人が勉強している間。博士も何か本を読んでいた。小田切君がそれを見てだ。その博士に問うた。

「何の本を読んでいるんですか？」

「色々じゃ」

「色々ですか」

「そうじゃ、色々じゃ」

いきなり会話になっていない。

「色々読んでおるぞ」

「何か十秒で一冊読んでいません？」

「わしは読むのは早い」

実際にかかなりの速読である。

「一分で文庫本一冊は楽勝じゃ」

「そうなんですか」

「それに一度読んだものは絶対に忘れぬ」

こうした能力まで備わっていた。

「絶対にじゃ」

「じゃあ三週間前の話は」

「一語一語ずっと覚えておる」

ヒトラーもそうであった。ただし博士の知能指数は二十万であるから比較にならない。

「完璧にのう」

「そうなんですか。じゃあ今日は何冊本を読みますか？」

「そうじゃな。三百冊といったところじゃな」

それだけ読むというのである。

「それを読んだらじゃ」

「後はどうするんですか？」

「昼食にしよう」

まだ朝の九時であつた。

「一休みしたらろう」

「わかりました。それじゃあ」

「読書も大事じゃ」

文庫本を一冊置いてからの言葉だつた。

「本には真理がある」

「真理がですか」

「そうじゃ、それがあるのじゃよ」

言いながらまた本を読みだしている。

「というより読まなければじゃ」

「どうなるんですか？」

「何にもならん」

そうなのだという。

「知識は科学者の生命線じゃからな」

「それはその通りですね」

小田切君も納得することであつた。

「僕も本は読みますし」

「今は何の本を読んでるのじゃ？」

「仕事のものとは別に」

こつ前置きしてからであつた。

「純文学を読んでいます」

「ほう、文学をか」

「はい」

そしてであつた。ここからまた話が動くのであつた。話は何かの
はずみで動くものである。

2
0
1
0
·
3
·
8

第二百七十話

第二百七十話 小田切君の愛読書

「それでじゃ」

「はい」

「何の本を読んでおるのじゃ？」

博士はこのことを尋ねてきた。

「文学というがじゃ」

「泉鏡花です」

小田切君は懐から一冊の文庫本を出しながら答えた。

「これを」

「ふむ。天守物語か」

「中々いいですよね」

その天守物語を博士に見せたうえで微笑んで言うのだった。

「泉鏡花も」

「研究所に全集があるぞ」

「えっ、そうなんですか」

「わしは文学博士でもあるのじゃ」

とにかく無数の博士号を持っている。それは日本だけに留まらない。

「じゃからそうした作家の全集もな」

「持つてるんですか」

「谷崎潤一郎もあれば志賀直哉も三島由紀夫もあるぞ」

「ジャンルも多彩ですね」

「当然芥川や太宰もある」

どちらかというと博士からはイメージできない作家である。

「海外の作家のものも原語であるしのうち」

「そういえば博士語学にも堪能でしたね」

「英語も中国語もスペイン語もじゃ。東南アジアの言語も大抵いけ

るぞ」

伊達に知能指数二十万ではない。

「それもそれぞれの方言までもじゃ」

「コックニーもいけますか？」

ロンドンの下町の言葉である。かなり独特な訛りで有名である。

「それもですか」

「うむ、喋れるぞ」

やはりそれもいけるといふのだった。

「ロシア語もいけるしヒンズー語もじゃ」

「本当に何でもなんですね」

「昔の言葉も知っておるぞ。帝政ローマの時代のラテン語もじゃ」

「そんなのまでなんですか」

「古代エジプトの象形文字の解読もできる。まあ言語もわしにとっ
てはどうということはない」

博士の異常な天才故である。

「それでじゃ」

「はい、それで」

「泉鏡花じゃな」

話がそこに戻った。

「そのの全集なら何時でも出せるぞ」

「そうですね。それじゃあですな」

「何なら全部読むか？最近暇じゃしな」

「はい、ではそれで」

小田切君もいいと頷いた。

「御願います」

「読書は秋だけでなくいつもするものじゃよ」

最後にこう言う博士だった。読書量もそのジャンルも何もかもが
桁外れであった。

第二百七十話

完

2
0
1
0
・
3
・
8

第二百七十一話

第二百七十一話 嫌いな本

とにかく本を次々に読破していく博士。この中でふと言うのだった。

「うづむ」

「どうしたんですか？」

「この作品はのう」

見ればある小説を手に取りながら難しい顔をしていた。

「好かんな」

「お嫌いですか」

「そうじゃ。好かん」

「こう言うのである。」

「こうした作品はじゃ」

「何読んでるんですか？それで」

「プロレタリア文学じゃ」

それだというのである。見れば確かにそうした感じのタイトルが表紙に書かれている。本自体は結構薄い感じの本である。それを読みながらの言葉だった。

「こういうのは好かんのじゃ」

「まあ博士だったらそうでしょうね」

「わかるか」

「共産主義とかナチズムとかお嫌いですよね」

「マルクスはわしを非科学的だと言ってくれた」

「こうむつとした顔で語るのだった。」

「見事なまでにじゃ」

「マルクス本人に御会いしたんですか？」

「ロンドン博物館の図書館で会ったのじゃよ」

そこだというのである。マルクスはイギリスに亡命しそのロンド

ンで日々図書館に通い学んでいた。そのうえで共産主義思想を形成していったのだ。

「その時にじゃ。面と向かって言われたのじゃ」

「マルクスともお知り合いだったのですか」

そのことにそもそも驚く小田切君だった。

「それはまた」

「だからわしは二百億歳じゃ」

博士の年齢は地球より古い。

「マルクスなんぞほんのひよっこじゃ」

「というか現実の会話に思えないんですけれど」

そもそも非現実的な存在の博士である。

「二百億歳だなんて」

「わしは嘘は言わんぞ」

「嘘じゃなかったらほら吹き男爵みたいですけどけれど」

「ほら吹き男爵はよい」

その本も読んでいるらしい。

「ドンキホーテは結末が非常に悲しいものじゃがな」

「まあそうですけどね。とにかくどうしてなんですか？」

「どうしてとは？」

「何でマルクスに言われたんですか？そんなこと」

「うむ、それはじゃ」

そのことについて話をはじめてきた。

「話せば長くなるがよいか？」

「ええ、御願います」

小田切君は何処からかお茶とお菓子を用意してきた。

「それじゃあゆっくりと」

「うむ」

こうして博士とマルクスの因縁が話されていく。それはまさに奇想天外そのもの話であった。

第二百七十一話

完

2
0
1
0
・
3
・
1
5

第二百七十二話

第二百七十二話 博士とマルクス

「思えばじゃ」

「はい」

「あ奴はそもそも矛盾しておった」

博士は忌々しげに小田切君に話す。二人でテーブルを囲みそのうえでザツハトルテとウィンナーコーヒーを楽しみながら話していく。

「マルクスはな」

「矛盾していたのですか」

「あの男がユダヤ系だったのは知っておるな」

「はい、それは」

それについては小田切君も知っていた。マルクスが元々ユダヤ人であるのは歴史ある通りである。あまりにも有名な話であるのだ。

「しかし反ユダヤ主義じゃった」

「無神論者だったからですね」

「そうじゃ。ユダヤ人でありながらそのルーツを否定しておった」

このことを言うのである。

「しかも女性の権利を主張しながらじゃ」

「やっつてることは逆だったんですか」

「娘達に対しては暴君じゃった」

これも意外な素顔である。

「今もマルクスを信奉している人間はおるな」

「ええ、いますね」

小田切君もマルクス主義は嫌いではない。しかしそれでも今だにそうしたことを信じている人間がいることも知っていた。

「それは確かに」

「十九世紀の思想や経済がそのまま二十一世紀に通用する筈もない」
博士は冷静に述べながらそのウィンナーコーヒーを飲んでいる。

「まあそれは置いておいてじゃ」

「はい」

「あの男の主張はその時からおかしいと思っておったのじゃ」

「革命とかお嫌いなんですね」

「革命はただの破壊じゃ。破壊の後の創造はない」

博士の趣味の一つは破壊である。しかしただ破壊するだけではないのだ。

「後に残るのは流血と廃墟だけじゃ」

「まあ革命はそうですね」

「図書館でただ本ばかり読んでおって現実なぞ何一つとして知らぬ男じゃった」

「じゃああの共産党宣言とかもですね」

「左様。そういうものだったのじゃよ」

こつ小田切君に話すのだった。

「それを言えば怒ってじゃ。わしを非科学的だと言ってきおったのじゃ」

「成程、そうだったんですか」

「わしが魔術の本を大英帝国の博物館から永久に拝借しようと思つてその本を持ち去ろうとおつたその時に会つての話じゃった」

「泥棒しようとしたんですか」

「いや、強奪じゃ」

余計に悪質である。

「丁度博物館員や衛兵達と大立ち回りをして出る時に会つたのじゃよ」

「その時からそんなことをしてたんですか」

「ただ図書館に置いておくよりわしが有効に使う方がいいじゃろ」

「物凄い勝手な解釈ですね」

「気にするな。とにかくじゃ」

さらに話す博士だった。

「あの男とはそういう因縁があつたのじゃ」

「そうですね」

あなたにわかった博士の過去だった。その時から無法の限りも尽くしていたのであった。

第二百七十二話 完

2010・3・15

第二百七十三話

第二百七十三話 美奈子と合流

華奈子はそのままたろ、そしてライゾウと共に魔法の勉強を続けていた。しかしその勉強をしている中庭においてふと言ったのだ。

「うっん、かなりやったけれど」

「じゃあ満足じゃないのか？」

「そうじゃないの？」

「やっぱり美奈子がいないと」

こう言うのである。

「どうにも実感がわからないから」

「だからそれは仕方ないだろ？」

「美奈子さんいないんだし」

二匹はそれは仕方がないという。それはどうしてもというのだ。

「だからそういうのもイメージトレーニングしてるんじゃないか」

「そうじゃないの？」

「それはそうだけれど」

そのことには頷く。しかしなのだった。

「けれど、それでも」

「まあそう言うなって」

「言ってもどうしようもないじゃない」

華奈子を慰める言葉だった。

「それよりもだよ。今やれることをやるんだよ」

「ないものねだりをしても仕方ないよ」

「うっん、そうだけれどね」

こうは言ってもそれでも困った顔になる華奈子だった。

「やっぱり美奈子がいないとねえ」

「やれやれ、困ったな」

「結局美奈子さんなんだね」

「あたしも自分でもそう思うわ」

それでもだというのだ。華奈子自身もわかつてはいるがそれはどうしてもだという。これは絆故のことであり実にややこしい話であった。

「でも。とにかく美奈子がいないと完全じゃないのよ」

「そうよね」

ここで誰かの声がしてきた。

「私も。華奈子がいないと」

「そうよね。やっぱり双子だし」

「そうね。私達は」

「って待って」

ここで気付いた華奈子だった。その声の主は誰かだ。

「美奈子、帰ってきてたの」

「ええ、今ね」

見ればそこにもういた。美奈子は微笑んで立っている。その足元にはタミーノとフィガロもいる。服もあの紫の法衣を既に身にまとっている。帽子もだ。

「帰ってきたのよ」

「早いわね。っていうか」

「聞いたわ。私が必要なのよね」

「ええ、それはね」

こう返す華奈子だった。

「やっぱり。あたし達って双子だから」

「そうよね。それじゃあね」

「有り難う」

もう言葉は不要だった。二人は早速並んで構えに入った。

2
0
1
0
·
3
·
2
3

第二百七十四話

第二百七十四話 ジェミニ

「ねえ華奈子」

「何？」

二人並んで構えに入りながらだ。華奈子は美奈子の言葉に応えていた。

「私達生まれた時同じだったわよね」

「そうよ。双子だから」

そしてこう言葉を返した。

「生まれた時から一緒だったわよね」

「それに血液型もね」

「それもね」

これも同じなのだった。そして同じものはそれだけではなかった。

「それと身長も体重も」

「スリーサイズもね」

とにかく全てが同じであり一緒なのだ。二人を見分けるには実は髪型以外にはこれといって決め手はなかったりする。両親ですら見間違っ程だ。

「全部一緒よね」

「そうよね、本当に全部ね」

「そして」

美奈子はさらに言ってきた。

「これからもずっと一緒よ」

「勿論よ。あたし達の絆は絶対に誰にも引き離せないから」

「最後もね」

美奈子の言葉がさらに強くなった。そうしてだ。

「死ぬ時も一緒よ」

「死ぬ時もなのね」

「そうよ、死ぬ時も一緒だから」

このことを強く言うのである。まるでそれが口にすれば現実のものとなるかのようにだ。こういうのである。

「いいわよね、それで」

「当たり前でしょ。あたし達は双子よ」

華奈子の言葉も美奈子の考えを完全に受け入れているものだ。

「何があってもね。死ぬ時だって一緒よ」

「じゃあわかるわよね」

「ええ」

構えているのも息が合っている。まるで鏡の様に一緒である。

「魔法だつてね」

「そうよね。魔法も音楽もね」

「一緒よ」

まさにそうだというのだ。

「だから今だつて。当然じゃない」

「有り難う、本当にね」

「御礼はいいわよ」

美奈子の声が微笑んでいる。優しげですらある。

「それはね」

「いいの？それは」

「いいわよ。とはいっても私も華奈子に御礼言ったりするけれどね」

「ふふふ、そうね」

「けれどそれもね。お互いに思ってるからよね」

「そうよね」

ここでもお互いの心を確かめ合ってた。いよいよ。

「それで美奈子、わかってる？」

「華奈子のことなら何でもわかるわよ」

「そうよね。あたしだってそうだし」

こうして二人で魔法に入る。美奈子はまだ何も聞いていなかった。しかしそれでもそれが嘘であるかの様に動きはぴったりと合ってい

た。

第二百七十四話

完

2
0
1
0
・
3
・
2
3

第二百七十五話

第二百七十五話 双子だからこそ

魔法の練習を終えてだ。二人は自分達の部屋に入った。まずは華奈子が言ってきた。

「やっぱりね」

「やっぱりって？」

「美奈子がいたらね。やっぱり違うわね」

「こつ言うのである。」

「実際にいてくれたら」

「そうなの」

「実は色々イメージトレーニングしたりとかノートに書いて考えたり勉強したりしていたのよ。それはそれでかなりいい経験になったけれどね」

「それはだというのだ。」

「けれどね」

「けれど？」

「やっぱり違うわね。二人一緒だと」

「にこりと笑って話す。」

「それも全然ね」

「華奈子」

美奈子はその華奈子に対して自分からも言ってきた。

「いいかしら」

「どうしたの？」

「私もね。音楽のことだけれど」

「うん」

「華奈子と一緒にだと全然違うの」

「美奈子の音楽も？」

「そうなの」

こゝ双子の相方に返す。そしてそれは嘘を言っている言葉ではなかつた。

「それはね。だからね」

「だから？」

「よかつたら一緒にね」

「あたしもフルートとかバイオリンとか」

「華奈子はサククスだけね」

それに対して美奈子はフルートである。クラウンでは二人がそれぞれその楽器を操り同時にヴォーカルもしている。二人の息は最高に合っている。

「それで御願いできるかしら」

「あたしがサククスを吹くのね」

「それで私がフルートを」

やはりそうするというのだ。

「御願いしていいかしら」

「あたしはいいけれど」

華奈子は自分はそれでいいと答えた。

「けれど。あたしはサククスでしか吹けないけれどそれでいいのね」

「ええ、それで御願い」

「わかつたわ。じゃあそれでね」

「はじめましょう」

「早速なのね」

美奈子のその言葉の調子を聞いて話した。

「もうはじめるのね」

「思い立ったらって言うから」

美奈子の決断は早い。この辺りは姉妹同じであった。

「それでね」

「よし、じゃあ早速ね」

こゝして二人で今度は音楽の練習をする。二人の息はそれでも完璧なまでに合っていた。やはり双子だった。

第一百七十五話

完

2
0
1
0
・
3
・
2
9

第二百七十六話

第二百七十六話 先生達にしても

「ねえ今日子ちゃん」

「何？香ちゃん」

先生達は今日ものどかにお茶を楽しんでいる。ある喫茶店の中に入りそこで紅茶とケーキを楽しんでいる。ライトブルーが美しいその店の中でにこやかな笑みを浮かべながら話すのだった。

「このお店の名前だけねど」

「ブルーライオンね」

「いいお店よね」

その笑顔で話す今田先生だった。

「とてもね」

「そうね。はじめて来たお店だけねど」

今日子先生もこう返す。

「私のお家の近くなのにな」

「来たことはないのね」

「マジックにはよく行くわ」

「ここであるお店の名前が出て来た。

「あそこはね」

「マジック？あそこね」

「そう、あそこ」

「じつ話すのである。」

「あそこにはよく行くけれど」

「あそこもいいお店よね」

「そうね。それにしてもね」

今日子先生の方からも今田先生に対して言ってきた。

「香ちゃんがこのお店どうかしらって言ってくれたからね」

「それでこのお店に入ってるね」

「よかつたら」

あらためて言うのだった。

「とてもね」

「そうでしょ？私勘でわかるの」

「香ちゃんは勘でわかって」

今日子先生はどうかというのだった。

「私は雑誌やネットで調べてね」

「そうして美味しいお店を探してきたわよね」

「お菓子は女の子の永遠の友達よ」

そしてこんなことも言うのだった。

「だからね」

「そうよね。だからこそ」

「お互い力を合わせて見つけて」

「そして食べてみる」

動きはそのまま続くのだった。一つでは終わらない。

「そういうことだからね」

「今日子ちゃんが従姉妹でよかつたわ」

「私もよ。香ちゃんが従姉妹でね」

「お互いよかつたわよね」

「そうよね。そしてこれからもね」

「御願いな」

こう二人で話してだ。ケーキに紅茶も食べてみて。笑顔で言い合
う言葉は。

「美味しいわね」

「また来ましよう。それで次に行くお店は」

スイーツのはしごに余念がない。先生達もこんな調子だった。

2
0
1
0
·
3
·
2
9

第二百七十七話

第二百七十七話 魔法は完成し

華奈子と美奈子は魔術の修業を続け。そうして遂にであった。

「やったね、美奈子」

「ええ、華奈子」

二人は顔を見合わせて言い合う。

その顔は笑顔だ。そのうえでのやり取りだった。

「これで遂にね」

「魔法は完成ね」

「やっぱりあれよね」

華奈子は言うのだった。

「二人でやると全然違うわよね」

「そうよね。実際に相手がいるだけでなく」

美奈子はそれだけではないというのだ。

「私達ってやっぱりね」

「息が合うわよね」

「そう、それよ」

まさにそれだと頷く美奈子だった。

「双子だからね。それが大きいわよね」

「それでだけれど」

「ここで華奈子はまた言ってきた。

「あたし何となく美奈子の考えてることがわかったのよ」

「えっ、華奈子もなの」

美奈子は華奈子の言葉に驚いた顔で返した。

「実は私も」

「美奈子もなの」

「そうなの。華奈子の考えていることがわかるわ」

「こういうのである。」

「本当にね」

「そうよね。それでだけれど」

「そうね。魔法は完成したし」

「ええ」

それだけではなかった。さらにあるのだった。

「後は音楽よね」

「それだけれど」

美奈子も華奈子の言葉に頷いてだ。今度は笛を出した。美奈子はフルートであり華奈子はサククスである。それぞれ出してきたのである。

「いいわよね、こっちも」

「勿論よ」

既に出しているサククスが何よりの返答だった。

「それじゃあね」

「ええ、それじゃあ」

「あたし達って魔法だけじゃないから」

既にそうではなくなっていた。それは二人だけではなかったが二人にとつてはとりわけそうであった。やはりここでも双子であることが大きかった。

「音楽もね」

「そうよ。だからね」

「美奈子、もう掴んでるわよね」

華奈子は微笑んで美奈子に問うた。

「音楽は」

「わかるわよね、それも」

「わかるわ。あと一歩だから」

「御願いするわ」

こうしてだった。二人は今度は音楽にかかった。それももう少しであった。

第二百七十七話

完

2
0
1
0
・
4
・
6

第二百七十八話

第二百七十八話 音楽もまた

フルートとサククスも吹いてだ。そのうえでわかったのだった。

「これね」

「掴んだのね」

「ええ、間違いなく」

美奈子はフルートを止めてだ。そのうえで華奈子の問いに頷いた。

「掴んだわ」

「そう、やっぱりあと一歩だったのね」

「あと一歩が時としてね」

美奈子は今度はそのあと一歩について言うのだった。

「中々踏み込めないから」

「そうなの」

「華奈子はそういうことには全然迷わないし足を出せるのね」

「そうなのよね。あたしはね」

笑って美奈子に返す。

「そういうの全然迷わないから」

「そこは姉妹でも全然違うわよね」

「そうね、本当にね」

それを二人でも言い合う。そうしてだった。

「あたしは迷わなくてどんどん先に進んで」

「私はその逆で」

「じっくり考えて慎重よね」

この辺りは見事なまでに個性が出ていた。双子でもそこは違っていた。

「そこが違うから」

「けれどそれがかえってね」

また二人で話す。

「噛み合うのよね」

「私達はやっぱり」

美奈子は微笑んで話す。

「一人一人でもやっていけるけれど」

「それでもね」

「二人いれば余計にいいわよね」

「だって双子じゃない」

何につけてもであった。双子だからこそそれだけの力が出せるのであった。それは二人だけがわかることであり出来ることであった。

「それも当然じゃない」

「そうね。二人だからね」

「そう、双子だからね」

また二人で言い合う。

「音楽もできたしね」

「私達だけができたこと」

「魔法も音楽もね」

両方共だった。そうしてだ。

「できたわね」

「ええ。じゃあ後はこれを使っていつてね」

「完全に慣れるだけね」

こう話していく。完成させて終わりではなかった。

そうしてだ。また話す二人だった。

「後はどうするの？」

「そうね。お部屋に入っておやつとお茶にしない？」

「いいわね、それね」

「そうでしょ？チョコレートケーキとミルクティーがあるから」

「二人で食べましょう、二人でね」

「ええ」

お菓子やお茶の好みも同じだった。そして二人はそのチョコレートケーキとミルクティーも楽しむのであった。

第二百七十八話

完

2
0
1
0
・
4
・
6

第二百七十九話

第二百七十九話

博士のお菓子

「さて、小田切君よ」

「今度は何ですか？」

「どうにも不穏な気配のやり取りである。

「お腹が空いてはおらんか」

「ああ、もう三時ですね」

「三時といえばじゃ」

博士は当然のような口調で言ってきた。

「一つしかないな。そうじゃな」

「おやつですね」

「うむ、それじゃ」

まさにそうだという口調であった。

「おやつじゃが」

「ドーナツがありますよ」

小田切君はすぐにそれががあると告げた。

「じゃあ今から食べますか」

「ふむ、ドーナツか」

「お嫌いですか？嫌いなものはなかったのでは」

「好きじゃ」

それは事実だと返す。

「ドーナツは好きじゃ」

「じゃあそれでいいですよね」

「いや、それでも問題がある」

「こつも言つのであった。

「それでもじゃ」

「問題といたしますと」

「ドーナツといっても色々じゃ。何かあるのじゃ？」

「オールドファッションにエンゼルシヨコラに。まあ十種類はありますよ」

「随分と多いな」

「僕が好きなんで」

何と小田切君はドーナツが好きだったのだ。ここではじめてわかる彼の好物だった。

「それで色々と買っておいたんですからね」

「ふむ、ならばよい」

博士はここまで聞いて満足した顔で頷いた。そしてそのうえで言うのであった。

「それならばな」

「それで何を食べるんですか？」

「まあ出してみてくれ」

話はそれからだという。

「見てみたくなった」

「それで決めるんですね」

「飲み物はコーヒーじゃ」

しかし飲み物はもう決めていた。

「それで頼む」

「わかりました。じゃあそれで」

「コーヒーは外せん」

博士はこだわりも見せた。

「だからじゃ。それでよいな」

「ええ。豆は何ですか？」

「キリマンジャロじゃな」

「わかりました」

そんな話をしてからおやつにかかる。博士のこだわりが見えるやり取りであった。

第二百七十九話

完

2
0
1
0
・
4
・
1
0

第二百八十話

第二百八十話 ドーナツ

そのドーナツが小田切君の手で運ばれてくる。そうしてであった。

「ではオールドファッションじゃな」

「それですか」

「まずはそれじゃな」

「こう言う博士だった。」

「それが欲しくなった」

「ではどうぞ」

「うむ。それでコーヒーは」

「もうすぐできます」

返答は簡潔であった。

「もう少し待って下さい」

「わかった。それではな」

「それでなんですかね」

ここまで話してであった。小田切君はまた言うてきた。

「あの、博士」

「どうしたのじゃ、それで」

「博士はドーナツはどれが一番好きですか？」

それを問うのであった。問いながらそのコーヒーを持って来た。

既にカツプ等は博士が造ったロボット達が持って来ている。何かのアニメに出て来た様な緑色でトマホークを持った如何にもやられ役の外見のロボットである。

「ドーナツは全部お好きなようですね」

「まあエンゼルシヨコラじゃな」

「それですか」

「それがいいのう」

「こう答えるのであった。」

「他のも好きじゃがな」

「まずはエンゼルシヨコラですか」

「そうじゃな」

その通りだと頷きもする。

「やはりそれじゃ」

「こだわりなんですね」

「わしはこだわる男」

もう小田切君が最もよく知っていることだ。

「さすればそれはドーナツも同じ。違うかのう」

「そうかも知れないですね」

一応頷く小田切君だった。

「それもまた」

「何か今一つはつきりしない返答じゃな」

「どうかいつものことですか」

「だからか」

「はい、だからです」

「味気ないのう」

「だからいつもだからですよ」

小田切君の返答はこれしかなかった。

「全く。そのこだわりがまたとんでもないことを引き起こすし」

「天才だから常じゃよ」

「字が違うんじゃないんですか？」

「やれやれ、今日の小田切君は何かいらいらしておらんか？」

「阪神が負けたからですよ」

「それでか」

最後に理由もわかった。今はとりあえず平和な博士達であった。

2
0
1
0
·
4
·
1
0

第二百八十一話

第二百八十一話 博士の鼻屑

「わしの好きな球団はじゃ」

「そういえば博士巨人嫌いでしたね」

「うむ。大嫌いじゃ」

こうした話もするのだった。博士も一応、いやかなり疑わしいが人間である。従ってその嗜好も存在しているのである。それは野球にも反映されているのだ。

「存在自体がな」

「そこまで嫌いなんですか」

「巨人ができた頃から嫌いじゃ」

「そこまでなんですか」

「そうじゃ、とにかく嫌い嫌いでのう」

博士の言葉は続く。

「あのドームを一度派手に吹き飛ばしたいと思ったのじゃ」

「一度ですか？」

「思い続けている。だから一度じゃ」

言葉は言い様である。確かに思い続けているのなら一度だ、そうした意味において博士は一途な人間であると言えなくもないのだ。

「一度なのじゃ」

「そういうことですね」

「わしはまあ中日が好きじゃな」

「中日ファンだったんですか」

「杉下が好きじゃ」

かつて中日を日本一に導いた大エースである。そのフォークボールはあまりにも有名だ。ただしそのフォークはあまり投げなかった。

「星野も好きじゃ」

「漢が好きなんですね」

「まあおう。それで巨人じゃが」

「はい、その大嫌いな球団ですね」

「吹き飛ばしたらどうじゃろうか」

また話が物騒な方向に向かう。

「ドームごとな」

「別にいいんじゃないですか？」

小田切君の今度の返答は素っ気無いものだった。

「それは」

「今回は止めんのか」

「僕も巨人嫌いですし」

だからだというのである。返答が素っ気無い理由もここでわかった。

「甲子園に何もしなければ」

「わしは甲子園には何の興味もない」

破壊活動が趣味の博士にとっては意外な言葉だった。

「むしろ高校野球が見られるいい場所じゃ」

「いい場所ですか」

「そうじゃ、いい場所じゃ」

また言う博士だった。

「あそこには何もせん」

「それは何よりです」

「うむ、それではじゃ」

「それでは？」

「一度あのドームを吹き飛ばすか」

巨人関係にはその破壊という趣味を平気で示す。

「カイザージョーかエンペライザーでも送ってな」

「ガメ才もいいんじゃないですか？」

「悪くないのう」

「そうですね」

こうして何気に博士の次の活動がはじまった。そしてであった。

第一百八十一話

完

2
0
1
0
・
4
・
1
9

第二百八十二話

第二百八十二話

総動員によって

博士はすぐに決めた。ドームの破壊をだ。

「本拠地を破壊すればじゃ」

「相手は根無し草になりますね」

「うむ、それだけ戦力が落ちる」

彼はまた言った。

「満足すべきじゃな」

「しかし何ですね」

小田切君は博士に対してさらに言った。

「博士もたまにはいいことするんですね」

「いいことか、これは」

「はい、いいことです」

小田切君はあっさりと言う。本当に素っ気無いままだ。

「巨人にとっての不利な行いは人間にとっていいことです」

「わしはただ巨人が嫌いなだけなんじゃがな」

「それがいいんです。巨人は万年最下位でいるべきです」

「それはその通りじゃ。巨人は負けるべきじゃ」

「ではどうぞ」

「うむ、わしはやるからには徹底的にやる」

こうしたところは何をするにも同じであった。やはり博士は博士

だ。

「それだからじゃ」

「ええ、頑張つて下さい」

「まずはカイザージョーを送る」

最初はそれだった。

「そしてエンペライザーもじゃ」

「それもですか」

「ガメオも送る」
「えっ、総動員なんですか」
「さて、ここまで送れば問題ないな」
「ついでに親会社も破壊するんですか？」
「おお、それはいいのう」
小田切君の言葉に乗った。何でもないといった風いだ。
「ではそうしよう。これであのチームも終わりじゃ」
「何か凄い展開になりましたね」
「巨人の破滅はよいことじゃ」
問題は どうしていいかであった。
「わしの気分が晴れるからのう」
「全てはそこにありますか」
「うむ、では送ろう」
博士はまた言った。
「そしてじゃ。あのドームも親会社も破壊し尽くしてくれるわ」
「東京まで結構ありますけれど」
「ああ、そんなものはすぐじゃ」
距離は問題ないというのである。
「どのマシンもマツハ20で行けるからのう」
「ああ、それだったら本当にもう一瞬ですね」
「左様、では行くがいい」
「ええ、どうぞ」
博士の手にはもうコントローラーがあった。それを動かしてであつた。
今ドームと親会社に向かって破壊のマシン達が向かった。翌日の一面記事がこうして見事なまでに決定されたのであつた。まさに博士は時の人ではある。

2
0
1
0
·
4
·
1
9

第二百八十三話

第二百八十三話 東京へ

博士のマシン達は恐ろしい速さで東京に向かう。小田切君は博士の研究所のモニターからその様子を見ている。そのうえで側にいる博士に対して言った。

博士は今くつろいでいる。見ればスタンダールの赤と黒を優雅に呼んでいる。

その博士にだ。今言ったのであった。

「あのですね」

「何じゃ？」

「本読んでますけれど」

問うのはこのことだった。

「いいんですか、それで」

「本を読んで悪いのか？」

博士は平然と小田切君に対して返した。

「それでじゃ」

「それは悪くないですけど」

「ではよいな」

「観ないんですか？」

博士に対して言った言葉はこれであった。

「今マシン達が東京に向かってますけれど」

「ふむ、そうじゃな」

それを聞いてやっと応えた博士だった。

「ではそろそろ観るとするか」

「かなりくつろいでますね」

「人間ゆとりが大事じゃ」

二百億年生きている人間らしき者の言葉である。

「楽しくなるまで待っておったのじゃ」

「そうなんですか」

「そうじゃ。では観るとするか」

また言う博士であった。それと共に椅子から立った。そのうえでモニターの前まで来た。見ればマシン達はもう箱根の方まで来ているのであった。

「速いですね」

「超音速じゃからな」

それで飛んでいるのである。速いのも当然である。

「では間も無くじゃな」

「ええ、もうすぐですね」

「楽しい祭りのはじまりじゃ」

最初から笑っている博士であった。

「さて、あの忌々しいドームも親会社のビルもじゃ」

「全て破壊ですか」

「何が球界の盟主じゃ」

博士は忌々しげな言葉になっていた。

「そんなものはありはしないのじゃよ」

「それで破壊ですか」

「気に入らん。ではやるか」

こうしてであった。一直線に向かうマシン達であった。災厄が東京に向かっていた。

そうしてである。博士はまた言うのであった。そのマシンを観ながらだ。40

「よいぞよいぞ」

「あともう少しですね」

「まずはドームじゃ」

博士は笑っていた。破壊を楽しむ物騒な笑みである。

「さて、跡形もなく破壊してやるぞ」

「中に誰もいないですかね」

「とっくの昔に破壊予告をしておる」

「じゃあもう逃げて誰もいませんね」

「ヤクザ者や暴走族なら幾らでも踏み潰すぞ」

何気にこの後でだ。博士は横須賀や湘南で暴走族狩りをするつもりだった。やはり何処までも物騒な博士であった。

第二百八十三話 完

2010・4・26

第二百八十四話

第二百八十四話 ドーム破壊

遂にドームに辿り着いた。そうしてであった。

まずカイザージョーが動いた。そのドームを上から思いきり踏みつけた。屋根が突き破られ大穴が開いた。

「まずはこれですか」

「オーソドックスにじゃ」

博士は今度はワインを片手に観戦を楽しんでいる。何気に優雅である。

「こうしてみたのじゃよ」

「成程、そうだったんですか」

「左様じゃ。そしてじゃ」

「そして？」

「次はじゃ」

こう言っただであった。次はだ。

エンペライザーがドームを攻撃する。大穴が開いていたドームがここで大破した。もう修理費について考えることが馬鹿馬鹿しいレベルになっている。

カイザージョーとエンペライザーの攻撃が続く。ドームは最早残骸になっている。

その下では東京都民とキャスター達が騒いでいる。博士達はそれを観て言うのだった。

「ふむ、いいのう」

「注目されているからですか」

「こつしたことは注目されんと意味がない」

博士はこう言うのであった。

「やはりじゃ」

「それじゃあ注目されないと何もしないんですか」

「うむ、注目されるようにするだけじゃ」

鳴かぬなら鳴かせてみせようであった。博士はこちら側の考えなのだ。

「騒ぎを起こしてじゃ」

「騒ぎを起こせば人が来るからですか」

「注目されん騒ぎなら注目される騒ぎにする」

そうするというのである。

「それだけじゃよ」

「じゃあこれからですね」

「ふふふ、面白いのう」

博士は今の騒ぎを楽しんでいた。そもそも騒ぎ自体が好きであるらしい。

「この騒ぎはのう」

「今度はガメオですね」

「総攻撃を全て消し飛ばす」

それをするというのだ。

「まさに跡形もなくじゃ。欠片さえも残さんぞ」

「じゃあ跡に残るのは」

「更地じゃ」

それだというのだ。

「よいぞよいぞ」

「いいんですか」

「うむ、よいぞ」

また言うのであった。

「これでよいのじゃよ」

「ああ、今総攻撃を仕掛けてきましたね」

ガメオの総攻撃だった。それで本当に跡に残ったのは更地であった。実に見事な有様であった。ある意味壮観である。

「本当に何一つとして残りませんね」

「さて、次はじゃ」

博士はまだ満足していなかった。

「本社じゃな」

「第二幕ですね」

「今度はあのマスコミ界のドンとやらだけは吹き飛ばしておきたいのじゃがのう」

「ええ、確かに」

小田切君は珍しく博士の暴挙に賛成した。

「あいつだけは本当にそうですね」

「まあ逃げてるに決まってるがな」

それでもそう思う博士だった。だがそれだけは叶わなかった。

第二百八十六話

完

2010・4・26

第二百八十五話

第二百八十五話　ビルも破壊して

本社のビルも取り囲んだ。そうしてだ。

「さて、第二幕じゃ」

「潰すんですね」

「どっちにしても潰すのは趣味じゃ」

博士の趣味だ。紛れもなく破壊が趣味なのである。

その博士がだ。また言ったのである。

「好きなだけやらせてもらうぞ」

「けれどあいつはいないんですよね」

「そうじゃな。しかし社長、それもジャーナリストならば己の会社と共に死ぬのが本来の姿じゃ。自分が真つ先に逃げてはお門が知れるというものじゃ」

「今の総理大臣も平気でそうしますよ」

小田切君はその総理が嫌いだった。

「もう自分だけ逃げて後は」

「友愛じゃな」

博士も極めて冷淡に述べた。

「所詮はその程度じゃ。逃げるのなら逃げるといい」

「天下に恥を晒すからですか」

「恥を晒したことに気付かないのならそれならそれでいい」

「それもだというのだ。実に素っ気無い言葉のままである。」

「恥を恥と思わない輩はそれまでじゃ」

「まあ大したことはないっていうか碌でもない奴なのは事実ですよ
ね」

「恥を恥と思わなくなった時最も恐ろしい腐敗がはじまる」

博士は珍しく道徳的な言葉を言ってみせた。

「もっとも世の中そういう奴も多いのじゃがな」

「博士は腐敗はしないですね」

確かに破天荒で非常識であつてもだ。それはなかった。

「それはないですよね」

「腐敗なぞ小者のなるものじゃ」

博士の言葉はここでも素っ気無い。

「所詮はじゃ。そしてじゃ」

「そして、ですね」

「そうした輩は天下に裁かれる」

そうなるというのである。それは確かに真理であつた。

「では。わしのやることはじゃ」

「破壊ですか」

「我が愛するロボット達よ」

そのカイザージヨウやエンペライザー、ガメオに対しての言葉である。

「徹底的に破壊するのじゃ」

「明日の一面凄いでしようね」

「それもまた楽しみじゃ」

またそれを楽しみだというのである。

「さて、見るのじゃ小田切君」

「はい、じゃあ」

小田切君はグリーンティーを飲みながら話す。

「その記念すべき場面を見せてもらいますね」

「おお、次から次に壊れていくのう」

博士が言っているそばからだった。ロボット達がビルを粉々にしていく。

そして瞬く間に跡形もなくなった。後はまたしても更地だった。

「よいぞよいぞ」

「まあこれはいいですけれどね」

小田切君もあの新聞社も球団も嫌いだった。だからこれで終わったのだった。

第一百八十五話

完

2
0
1
0
・
5
・
3

第二百八十六話

第二百八十六話 新聞の一面

次の日の新聞はだ。何処も盛況だった。博士はその各紙をわざわざ取り寄せてである。実に上機嫌であった。

「よいぞ、よいぞ」

「今回の悪事は大成功だったからな」

「それでなんだね」

「うむ、そうじゃ」

だからだとライゾウとタロにも言うのであった。今はモーニングのトーストとハムエッグ、それにサラダとミルクという完璧な洋風の朝食を食べている。

そうしながらだ。博士は言うのだった。

「今朝のわしは実に気分がいい」

「じゃあさ。後はどうなの？」

「この話はこれで終わり？」

「うむ、目的は達した」

ミルクカップを左手に持ったの言葉である。

「今回はこれで終わりじゃ」

「何か素っ気無いね」

「そうだね、博士にしてはね」

ライゾウもタロもそれを言う。

「ただドームと本社破壊してそれで終わりだなんて」

「そうだよ。普段はもつと派手に暴れるのに」

「大丈夫じゃ、もう次は決めておる」

今度はハムエッグをフォークとナイフで素早く切りながらの言葉だった。

「帰りにじゃ。次はじゃ」

「ああ、やっぱり破壊するんだ」

「それで何処なの？」

「あのテロ支援国家の出先機関とその関連学校じゃ
そこだというのである。」

「そこを徹底的に破壊しておく。何が無償化じゃ」

「ああ、あれね」

「確かに図々しいよね」

「小悪党国家が偉そうなことを言いよるわ」

伊達に大悪党ではない。少なくとも博士は悪ということにおいて
もせいじよそこいらの国家を遙かに凌駕していた。当然個人なら尚
更である。

「そういう奴にはお仕置きじゃ」

「それでなんだね」

「今から破壊するんだね」

「そうじゃ、まあ軽くお仕置きしておく」

博士にとってはそうしたことは実に些細なことであった。伊達に
ただ気に入らないという理由で多くの暴走族や暴力団、街の不良達
を殺戮しているわけではない。

「軽くな」

「今度は人が死ぬかもね」

「まあいいか」

ライゾウもタロも冷酷とも取れる言葉だった。

「あの国と関連機関はね」

「その協力者もね」

「気に入らん奴は次々と天誅を下す」

勝手に天誅とまで言う。

「では。行くのじゃ」

「朝からまた派手なことになるね」

「そうだね。まああの連中ならどうでもいいし」

「本当の楽しみはこれからじゃよ」

博士はトーストを食べている。その言葉には何の迷いもなかった。
人がどれだけ死のうともだ。

第二百八十六話 完

2010・5・3

第二百八十七話

第二百八十七話

小田切君と二匹

小田切君は博士の助手だ。しかしである。それでも人間なのだ。これは間違いない。

「何か成り行きでここに来たよな」

「その辺り運命めいてるよな」

ライゾウとタロがその小田切君に言う。

「気付いたらここにいてるっていうかね」

「そんな感じだからな」

タロとライゾウはそれぞれ言うのだった。

「しかも全然辞めようと思わないんだな」

「それが一番不思議だけれどどうしてなのかな」

「お給料がいいからね」

まず言うのはそれだった。

「各種保険とか税金とか抜いても手取り四十万だよ。しかもボーナスは年三回なんて普通の職場じゃ絶対にそこまで貰えないよ」

「しかも結構暇も多いしな」

「いてるだけでよかったですね」

「だからいるんだ」

その辺りは実に現金なのだった。

「まあ博士の恐ろしい研究を見ることはあってもね」

「けれど小田切君はそうした研究に関わらないよな」

「それは」

「というか博士って自分の趣味は独占する人だからね」

その生体実験やら危険な兵器の開発である。

「だから必然的にね。僕は何もしくなくなるね」

「まあ関わったら犯罪だからな」

「それはね」

そのことについても言う二匹だった。

「犯罪どころじゃないけれどな」

「実際のところはね」

「まあ僕も博士と一緒に南極に隔離されたことがあったし、今となつては懐かしい思い出だったりする。」

「大変なことでも沢山あったけれど」

「というか大変なことばかりだよね」

「有り得ないことばかり起こすしね」

起こるのではなく起こすのである。

「あの博士つてな」

「生粋のトラブルメーカーだし」

「けれど実は普通の人には何もしいんだよね」

実はそうだったりするのだ。

「本当にね」

「だよな、それは」

「一般市民には興味ないからね」

「そこはいいと思うよ」

博士の隠された美点なのかも知れない、小田切君も二匹もこう思った。

「そこだけはね」

「暴走族とか不良とかヤクザには容赦しないからな」

「これまでどれだけ殺したかな」

「さあ」

首を捻って二匹に答えたのだった。

「どれだけだろうね」

しかし殺した人間の数が桁外れなのは事実だった。そんな博士であるのだ。

2
0
1
0
·
5
·
1
1

第二百八十八話

第二百八十八話 生首

博士の話をしているとだった。小田切君達のところ急に何かが出て来た。

見ればそれは。何と生首だった。

それが宙を浮かんでいる。そのままふらふらと飛んでいるのである。

「何だろうね、これって」

「博士だな」

「そうだね」

「二匹はすぐにこう察したのだった。

「これはな」

「他に有り得ないから」

「見たところまた暴走族を捕まえて実験したんだな」

見れば如何にも柄の悪そうな顔ばかりである。十代の顔である。

「それでこれなんだ」

「つてことはまた殺したんだな」

「首が離れてるしね」

出て来る答えは一つしかなかった。

「やっぱり。これは」

「首切ったのかな」

「まあ殺したのは確實だね」

小田切君もそれは察していた。

「それ位全然平気な人だしね」

「だよな、やっぱり」

「他にはないよね」

「しかし今度は何をするんだらう」

小田切君が次に考えたのはこのことだった。

「ただ首を切ってこうしてふらふらさせてるってことも考えられるけれど」

「それじゃないのか？博士だしな」

「遊びで人を殺す人だし」

「気まぐれや気分転換で生体実験もしたりする。それが博士だ。」

そしてその生首がだ。

不意に爆発したのだった。いきなりである。

小田切君達もそれを見てだ。とりあえず啞然となった。それから言うのだった。

「まさかと思うけれど」

「ああ、悪戯だよな」

「人を驚かせる為の」

「その為にわざわざそうしたんだ」

小田切君は言った。

「暴走族の首を切って生首に」

「それだけではないぞ」

ここでその博士が出て来て言うてきた。

「身体も改造してじゃ。街中を歩き回らせておるぞ」

「ゾンビみたいなことをさせてるんですね」

「そうじゃ。そうしておる」

まさにそうだというのである。

「どうじゃ。面白いじゃろう」

「それで今度は何人殺したんですか？」

「さて。二百じゃったかな」

実に素っ気無い返答であった。

「その程度じゃ。大した数ではない」

「そうですか」

とりあえずまた騒動になるのであった。今度は首なし死体と動く生首だった。

第二百八十八話

完

2010・5・11

第二百八十九話

第二百八十九話 舞首

かくして大量の生首をだ。博士は街に放った。

「さて、どうなるかじゃ」

「大騒ぎになるに決まってるじゃないですか」

すぐに答える小田切君だった。

「生首が空を漂ってたら」

「それだけじゃないしな」

「だよな」

小田切君だけでなくライゾウとタロもここで言う。

「身体もあるからな」

「首のない身体がね」

「両方を動かすんですよね」

小田切君もここで問うた。

「やっぱり」

「無論じゃ。どちらも動かさなくては面白くないじゃろ」

博士の返答はいつも通りへ依然としたものだった。

「そうじゃろ」

「どっちでも大騒動だよな」

「そうだよね」

ライゾウとタロが顔を見合わせて話をする。

「首でも身体でもな」

「どっちでもね」

「さて、では最高の大騒動を起こしてやるっ」

完全にそれがメインだった。今回は愉快犯に徹している博士であった。

「日本中をな」

「そのうち日本政府も切れますよ」

「今の日本政府なぞ怖くとも何ともないわ」

「少なくとも今の日本政府では相手にならないというのである。」

「大したことはない」

「昔の日本軍がいた政府とはですか」

「明治政府とは何度も大立ち回りをしたわ」

その時の姿が絵に残っていたりする。白衣の博士が警官や軍人達と戦い見得のポーズをしている浮世絵さながらの絵がである。

「面白かったのう。それに対して今の日本政府はじゃ」

「何だっというんですか？」

「腑抜けじゃ。あんなのでは駄目じゃ」

こう言うのであった。

「何が平和憲法じゃ。非武装じゃ」

「自衛隊は？」

「警察は？」

「今の警察は怖くない」

博士は腕を組んでライゾウとタロに述べた。

「それに自衛隊なんぞ。金をかけているだけで気合も根性も敢闘精神も何もないではないか」

「完全にカスなんだな」

「つまりは」

「そうじゃ。あの時の日本軍のようになればじゃ」

またライゾウとタロに告げる。

「面白いのじゃがのう」

こう言うのであった。生首と首なしの身体を一齐に日本中に放ったのだった。

そのうえでだ。博士は言う。

「昔の日本軍ならこの程度すぐに解決じゃったぞ」

「つまり自衛隊への嫌がらせなんですね」

「全く。あれで日本軍の代わりが務まるものか」

こう言うのであった。今回も博士は騒動を起こすのであった。

第一百八十九話

完

2
0
1
0
・
5
・
1
7

第二百九十話

第二百九十話 首を見て

「う、うわあああー！ー！ー！ー！」

「く、首がー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「身体がー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

日本中阿鼻叫喚であった。

それも当然だった。生首の団体が空を飛び首のない人間の身体が団体で徘徊する。それは昼も夜も日本中で蠢いて回っているのである。

これで驚かない者はいなかった。そう、誰一人としてだ。

しかしその元はすぐにわかった。最早これは常識のレベルだった。

「また博士か」

「天本博士か」

「またやらかしたんだな」

それぞれこう言う。これはすぐにわかることだった。

「あの博士か」

「また騒動を起こすんだな」

「全く」

こうそれぞれ言う。だがそう言ってもどうしていいかはわからないのだった。

「しかしな」

「そつよね」

「あの博士を止めるなんてな」

「普通の方法じゃ無理だし」

そもそも普通の人間ではない。もつと言えば博士が人間であるという保証も誰にもできないものだった。何しろIQ二十万で二百億歳である。

「自衛隊も頭が痛いだろうな」

「そうよね」

「また、だし」

その自衛隊もだ。今必死に対処に追われていた。

「首は捕まえる！」

「身体は拘束しろ！」

陸海空の三つの自衛隊がそれぞれ果敢に動いてであった。

生首は捕らえて身体は拘束してだ。それぞれ対処していた。しかしである。

「何か数が減らないな」

「ああ」

「ひょっとしてこれは」

「その通り！」

自衛官達の前にだ。ビルの屋上からそのマントをたなびかせてだ。

博士が登場してきた。その姿は妙に格好いいものすらあった。

「自衛官の諸君！」

「犯人の登場か」

「相変わらず迷惑だよな」

「全く」

こう言つてであった。博士を見上げてそのうえで応えている。

博士はだ。胸を反らせて言つのであった。

「この生首と身体にはクローン技術を使っている」

「ああ、それで数が多いんだな」

「やっぱりそうか」

「本当に迷惑な技術だけ持つてるな」

「数はこれからどんどん増える」

自衛官の仕事を無駄に増やす発言だった。

「さあ諸君、それを受けるがいい」

「仕事はこれだけじゃないんだけれどな」

「人の迷惑を考える相手じゃないのはわかってるにしても」

「いい加減にして欲しいな」

「全くだよ」

文句を言う自衛官達だった。そうしてだ。

三日後には生首の数は百万を超えていた。身体の数もだ。それぞれ日本中を徘徊してだ。パニック状態にしてしまっていたのであった。

第二百九十話

完

2010・5・17

第二百九十一話

第二百九十一話 回転ノコギリ

日本中で起こる騒乱を見てもだ。博士はまだ満足しないものがあった。それが何故かというのである。スペイン産のワインを飲みながらの言葉だった。

「ふむ、ここはじゃ」

「今度は何を考えてるんですか？」

「演出をするのじゃよ」

「こう言うのであった。」

「少しな」

「少しですか」

「暴走族や暴力団員の首を刎ねるマシンを作る」

「今度はこんなものを考えるのであった。」

「少しのう」

「首切り用のマシンですか」

「左様、それを考える」

「楽しいな笑みを浮かべての言葉だった。」

「今からじゃ」

「それで今度はどんなマシンですか？首を切るといいにしても」

小田切君は話しながら頭の中でだ。自分が思いつく限りの首の切り方を考えていく。しかしどれも常識の範囲内のことであった。

「刀とか斧とか鉈で切るんですか？それともギロチンですか」

「いやいや、簡単に切っては面白くない」

「これが博士であった。ただ殺すだけでは満足しないのである。」

「ここはじゃ」

「それでどうするんですか？」

「どうするもこうするもじゃ」

「はい」

「回転ノコギリを使う」

これまた非常に物騒なものだった。これであった。

「これを使ってじゃ。首をどんどん刎ねていくのじゃよ」

「何かえげつないですね」

「そうじゃ、えげつないからこそいいのじゃ」

実に素っ気無くともんでもないことを言う。

「それでいいのじゃよ」

「じゃあ実際にそれでいくんですね」

「あれで切られることはかなりの恐怖じゃ」

殺す相手にこれ以上はないものはないまでの恐怖を与える、これも博士の趣味であった。何処までも残酷な博士であった。

「死ぬまでに最高の恐怖をじっくりと堪能させてそのうえで」

「殺す為にも」

「回転ノコギリは最高じゃ」

まさに殺すことだけを考えていた。

「よいな。では早速開発する」

「はあ。それでやっていくんですか」

「さて、さらなる大量殺戮の開始じゃ」

博士はワインを飲み干してだ。生き生きとした顔で言う。

「よいことじゃ」

「それでまた殺していくんですね」

「研究に犠牲はつきものじゃ」

「こんなことまで言うのであった。」

「ではのう。はじめるか」

「私はどうすればいいんですか？」

「まあ適当にパソコンでもいじっておいて留守番しておいてくれ」

それだけだというのであった。本当にそれだけなのだった。

「ではな」

「わかりました」

こうして開発の楽しみにも浸る博士であった。それはまさに次の

惨劇へのプレリユードであった。

第二百九十一話 完

2
0
1
0
・
5
・
2
4

第二百九十二話

第二百九十二話 開発完了

小田切君は定時になりその日は博士の研究所に泊まることにした。実は警護用というか明らかに殺人用のロボットやマシンが二十体以上研究所の内外を徘徊していて警護は万全なのだ。

だがこの日は次の日が休みということもありだ。そうすることにしたのだ。

「それじゃあ今日は」

「ああ、飲むか」

「そうする？」

博士の代わりにライゾウとタロが出て来て酒を誘ってきた。

「ワインあるしな」

「それにビールも」

「そうだね。じゃあお風呂に入っつてすっきりとして」

それからだというのだった。

「洗濯もしてね。そうしてからだね」

「ああ、そうするか」

「それじゃあね」

「お風呂に入っつてくるよ」

まずはそれなのだった。

「それじゃあね」

「ああ、じゃあな」

「行っつて来て」

小田切君は二匹に応えて実際に風呂に入った。それからだった。そのうえでだ。部屋に戻るともうワインとビール、それにつまみが用意されていた。つまみはチーズにソーセージといったものだった。

「あっ、いいね」

「ああ、組み合わせを考えてな」

「用意したんだ」

二匹はテーブルの傍にちゃんと座っていた。しかも座布団の上だ。

「じゃあ飲もうか」

「今夜はじっくりとね」

「そうだね。しかし博士はね」

テーブルの席に座ってそのうえで飲みはじめながらだ。小田切君は言うのだった。

「研究はじめたらそれに没頭するからね」

「おいら達はそれを見ているだけだからね」

「本当に」

「僕がやってるのって結構簡単な仕事ばかりなんだよね」

むしろ秘書と言ってもいい。実は空いている時間もかなり多いのでその余暇を利用してそれで実際に秘書の資格も手に入れていたりもしているのだ。

「まあ博士に巻き込まれたこともあるけれど」

「それはそれだよな」

「諦めるしかないね」

「そうだけれどね。じゃあ今日はここにいるからさ」

「ああ、飲もうぜ」

「楽しくね」

こんな話をしながらかなり飲んだ。そのうえで布団の中に入って二匹と一緒に寝た。その次の日に二日酔いで痛む頭で起きてみると。目の前に化け物がいた。

両手が回転ノコギリでだ。青い身体にあちこち首がついた不気味な長い髪の毛の口裂け女の顔のマシンがだ。彼の前に立っていたのだ。

小田切君はそれを見てだ。冷静に返した。

「これですね」

「うむ、これで気に入らん奴等に恐怖を与えそのうえで首を断ち切

ってやるのじゃよ」「

博士がその凶悪なマシンの横で言うのだった。

「これからまた楽しくなるぞ」

「はあ。そうですか」

とりあえず酒を抜きにランニングに出る小田切君だった。すっかり慣れていく彼だった。ランニングの後の風呂で完全に二日酔いは消えてしまった。

第二百九十二話 完

2010・5・24

第二百九十三話

第二百九十三話 何がはじ

まるか

「ああ、あがつたんだね」

「丁度いいところだよ」

小田切君がお風呂からあがつたところだ。タロとライゾウが声をかけてきた。

「はじまるよ」

「今からね」

「ああ、首切りね」

小田切君は二匹の言いたいことが何かすぐに察した。

「それなんだね」

「丁度今一体暴力団の事務所に入ったんだ」

「マシンのカメラから実況できるよ」

「成程」

小田切君は二匹のその言葉に頷きながらだ。テレビを観る。

百インチのそれにだ。丁度その実況の光景が映し出されていた。

それは。

まず暴力団員達がいた。勿論中は事務所だ。任侠の文字まである。

その暴力団員達だ。口々に言っていた。

「な、何だこりゃよ!」

「あの博士のマシンか!」

「今度は何だ!」

「ああ、やっぱりわかるんだ」

小田切君は暴力団員達の言葉を聞いて頷いた。

「そりゃね。こんなマシンはね」

「博士しかいないからね」

「開発するのは」

「そうだね。それじゃあだけれど」

「凄いことになるよ」

「それは確実に言えるからな」

タロとライゾウもそれぞれテレビの前に座ってそのうえで観ている。

「首切られるからね」

「しかも電気ノコギリでな」

「あれっ、その電気ノコギリだけれど」

小田切君はここでマシンのそのノコギリを見て言った。

「何か違うね」

「そういえば右は丸くて」

「左は細長いものになってるな」

「変わったんだ」

「みたいだね。何でかな」

小田切君はそれについて考えた。するとだ。

ここでタロとライゾウは言う。博士の趣味から推察してである。

「やっぱりあれだろうね。色々な殺し方が見たい」

「それしかないね」

「相変わらずとんでもない人だね」

「わかってることだしね」

「それはもうな」

「だよなあ。まあとにかく」

あらためて言う小田切君だった。

「これから何が起こるか」

「じっくりと観るか」

「そうしようか」

「お菓子もあるし。お茶もね」

そうしたものも用意したうえでだ。そのこれから起こることを観る彼等だった。それはもう実に慣れたものであった。

第一百九十三話

完

2010・5・31

第二百九十四話

第二百九十四話 処刑シーン

ノコギリが一閃した。そうして。

サングラスの若い男の首が吹き飛んだ。

「まずは一人」

「そうだな」

タロとライゾウはその鮮血を撒き散らしながら吹き飛ぶ首を見て述べた。

「さて、それで」

「後は」

すぐにもう一人だった。リング型のノコギリの上に断末魔の顔があった。

それを手を払って吹き飛ばしてだ。返す刀でもう一人だった。

小田切君はそれを見てだ。冷静に言った。

「凄く簡単に切れるんだね」

「首ってそんなに簡単に切れないよね」

「普通はそうだよな」

それぞれテレビのその処刑を観ながら話す。

「博士のマシンってどれも簡単に切るけれどね」

「実際は違うからな」

「あの刃は何でできてるんだろ」

小田切君はこのことも考えるのだった。

「一体全体何で」

「何か凄い特殊合金みたいだけれどね」

「何だろうな」

「ちよつとわからないよね」

こうタロとライゾウに言うのであった。

「ここから見ただけじゃ」

「何かダイヤモンドの二十倍の硬さとかじゃないかな」

「切れ味も尋常じゃなくしてな」

「何処をどうやったらそんなものができるんだろっ」

小田切君もそこが不思議なのだった。

「博士つて普通にやってたら凄い天才なんだけれど」

「まあそうだよな」

「あれで人間性がまともだったらな」

それは彼等もよくわかっていた。

「今頃人類にとってね」

「かなりの貢献をした筈だからな」

「それがこれだからね」

小田切君と二匹も呆れるものがあつた。

「また首が一つ飛んだし」

「派手に殺してるな」

「もう十人か」

小田切君はメモ用紙に正の字を書いてそれをカウントにしていた。

「ペースが速いね」

「ああ、確かにね」

「これじゃあすぐに終わるな」

こんな話をしていっているうちにまた一人殺していた。

そして一時間後だ。事務所の中には首のない死体で満ちていた。

逃げた者はというとだ。一人もいなかった。

何と既に他の首切りマシンが稼動していてだ。事務所を囲んでい

たのだ。

それでだ。逃げられた者は一人もいなかったのだ。

「終わったか」

小田切君がカウントしている数は三十人であつた。それだけ死んだのである。

第一百九十四話

完

2
0
1
0
・
5
・
3
1

第二百九十五話

第二百九十五話 切った首は

全てが終わるとだった。博士は平然として言った。

「三十じゃな」

「三十人も殺しましたね」

「ほんの三十人じゃな」

博士にとってはそれだけの数は何でもないものだった。

「思ったより少なかったのう」⁶

「殺人犯でこれだけ殺したら記録なんですが」

「そんな数はいちいち気にしていられるか」

「そうなんですか」

「わしの殺した数なんぞ一万や二万じゃきかん」

はつきりと言い切ったのであった。

「だからじゃ」

「三十人なんて今更ですか」

「たった三十人じゃ」

またこう言うのであった。

「何でもないじゃろ」

「わかりました」

小田切君はまだ釈然としなかった。しかしそれでも博士のその言葉に頷くことにした。博士にはそんなことは本当に些細なことだからだ。

「じゃあこの三十人の首と身体は」

「勿論あれに使う」

実に素っ気無く言った博士だった。

「わかっておるな」

「わかりたくないけれどわかります」

小田切君はいつもの言葉を出した。

「そういうことですね」

「そういうことじゃ。それではじゃ」

「改造ですね」

「首がないまま動く身体と空を飛ぶ生首じゃ」

博士はそれに執着していた。

「それをやるぞ」

「はい、それじゃあ」

「既にものさえあればすぐにできるようにしておる」

博士の言葉はここでも素っ気無い。

「さて、それではじゃ」

「僕はその間は」

「適当に掃除なり食べ物を買っておいてくれ」

それだけでいいというのだ。

「わしはこれから芸術に専念するからじゃ」

「芸術だったんですか」

「殺人も芸術だし改造手術も芸術じゃよ」

そうした世の中で絶対に許されないことである。博士は芸術と称しているのだ。まさにマッドサイエンティストに相応しい言葉である。

そしてだ。小田切君が暫く待っているとであった。

研究所の地下からだ。まずは生首の団体が飛んできた。

小田切君はそれを見てだ。まずは表情を消した。44

そしてだ。タロとライゾウに対して言う。

「また来るね」

「そうだね」

「相変わらず趣味が悪いな」

二匹も呆れていた。そして首の次は身体が来るのであった。こうして日本での不気味な騒動が続くのであった。博士の悪事は続く。

第一百九十五話

完

2010・6・5

第二百九十六話

第二百九十六話 六人も

見て

「博士ね」

「そうね」

華奈子と美奈子はテレビの中で動き回る生首と身体を見てだ。す
ぐに確信した。

「それ以外にこんなことやる人なんて」

「いないから」

実際にだ。テレビのアナウンサー達も言っていた。

「またしても天本博士です」

「今度はこんなことをしてくれました」

実況しているすぐ側にもだ。生首が恐ろしい表情で飛んで来る。

そして首のない身体が団体で徘徊する。実に恐ろしい姿だ。

市民達はその生首や身体から逃げ回るだけだった。それを見れば
であった。

「どうする？これ」

「どうするって？」

「だから。放っておくわけにはいかないでしょ」

華奈子はこう美奈子に対して言うのである。

「こつした時こそあたし達じゃない」

「いつも通りね」

「そう、いつも通り」

まさにそれであった。

「いつも通りね。何とかしないと」

「確かに。それじゃあまた」

「皆も呼んでね」

「ええ、そうしないと」

そしてであった。皆も集めることになった。

携帯で連絡するとだ。皆知っていた。華奈子はその返ってきたメールを見ながら美奈子に対して話す。ここまでの流れは実に速い。

「皆知ってるわよ」

「やっぱりそうなの」

「そうよね、これだけの騒ぎだし」

「知らない方がおかしいわよ」

美奈子はこつも話した。

「実際ね」

「そうよね、やっぱり」

華奈子もそれに頷く。まさにその通りだった。

そしてだ。また話すのだった。

「集まる場所は何処にするの？」

「そうね。塾がいいわね」

「今田先生にもお話してなのね」

「ええ、そうよ」

その為だというのだった。そうしてだ。

二人が箒で塾に行くのだ。皆も後ろから来ていた。

「華奈子ちゃん、美奈子ちゃん」

「じゃあすぐにね」

「話し合ってそれで」

「決めましょう」

皆それぞれ箒から降りて話す。六人共もう魔女の法衣を着ている。

そして六人揃ってだ。塾に入る。

「先生、いいですか？」

「生首と身体のことですけど」

また彼女達と博士の戦いがはじまる。今度もまた賑やかなものとなるのであった。

第一百九十六話

完

2010・6・5

第二百九十七話

第二百九十七話　こんな状況でも

六人は今の状況を今田先生に話す。教室で必死の顔で。

「とにかく博士を何とかしないと駄目ですよね」

「そうですね」

こう言うのである。

「さもないとまたどうなるか」

「只でさえ大変なことになってるのに」

生首が空を飛び首のない身体が街中を徘徊して回る。これを大事と言わずして何というかという状況であった。まさに大騒ぎであった。

「ですからここは」

「どうしましょうか」

先生は六人の必死の言葉を教壇で聞いている。

しかしこれといって反応を見せない。しかし六人はまだ言う。

「博士を早く止めないと」

「大変なことになります」

「そうですね」

これが先生の今回の最初の言葉だった。

「また騒ぎになってますね」

「はい、そうですね」

「どうしましょう」

六人はさらに必死の顔で訴える。

「今回は一体」

「音楽を使うんですか？また」

「それじゃあ楽器用意しますから」

「すぐに」

「皆さん」

いつも通りのおっとりとした言葉であった。

「今日はですね」

「はい、行くんですね」

「早速」

「お庭に出ましよう」

そしてであった。言う言葉は。

「そしてお茶を飲みましよう」

「お茶!？」

「お茶って」

「今日は魔法を使ってお茶を淹れる勉強をしますよ」

まるで何も起こっていないような。そんな言葉だった。

「それでいいですね」

「あのですね」

「それって。あの」

「いいんですか？」

六人は先生の今の言葉に思わずその目を点にさせてだ。そのうえで問い返した。感情の昂ぶりが一気に消えてしまった形になった。

「博士がまた騒動起こしてるんですけれど」

「生首と身体が」

「今日はお茶です」

しかし先生は言う。

「いいですね」

「はあ」

「お茶ですか」

六人は呆然となる他なかった。先生はいつも通りであった。

2
0
1
0
·
6
·
1
1
1

第二百九十八話

第二百九十八話 今日子先生が来ても

今田先生はその金色の法衣と帽子を身に着けている。しかしこれは授業の時はいつもそうなので特に驚くべきことではない。

その格好で六人を屋敷のお庭に出してだ。そうして実際に。

「はい、こうするんですよ」

「抹茶ですか」

「それなんですな」

「茶道ですよ」

魔法で抹茶を淹れているのであった。外にその茶道のセットをしたうえでだ。魔女の服であるが今にはそれにはお構いなしということだった。

「女の子にとってお茶は必須ですよ」

「それはわかりますけれど」

「それでも」

六人はまだ戸惑っていた。言葉にもそれが出てしまっている。

「今は。いいんですか？」

「茶道をされていて」

「はい、どうぞ」

戸惑う六人をよそにだ。その魔法で淹れたお茶を差し出すのだった。それも魔法で出していてそれで空にふわふわと浮かんでいた。

「お菓子もありますよ」

「あっ、和菓子ですね」

「それですか」

六人も何だかんだでお茶にもお菓子にも反応する。

「それじゃあお言葉に甘えまして」

「それじゃあ」

「どうぞ」

またにこりと笑う先生だった。そしてここで。

今日子先生がだ。銀色の帽子と法衣でやって来た。そうしてであつた。

「今日は茶道なのね」

やはり博士のことは全く言わなかった。

「日本のものもいいわよね」

「ええ、そう思つてね」

今田先生はにこりと笑つて今日子先生に応える。

「皆に教えてるの」

「それはいいわね」

今日子先生は先生のその言葉を聞いて同じくにこりと笑うのだった。

「やっぱり茶道はね」

「礼儀作法も身に着くし」

「文化の勉強にもなるしね」

「だからつて思つて」

「流石香ちゃんね」

「有り難う」

のどかな雰囲気のまま今日子先生もお茶に加わる。実に自然に。

この日はそのまま魔法での茶道だった。それはとてものかなものだった。

しかしだ。六人は思つたのだつた。

「大丈夫かな」

「そうよね、こんなことして」

「今大騒ぎなのに」

「博士を放つておいて」

皆街の騒動のことが頭から離れないでそれでやきもきもしていた。とにかくどうにかしたかった。しかし先生達は相変わらずの調子であつた。

第一百九十八話

完

2
0
1
0
・
6
・
1
1
1

第二百九十九話

第二百九十九話

お茶を飲んでいる間に

も

先生達が華奈子達にもお茶を振舞っているその間にもだった。博士は生首と身体を日本中に放って大騒ぎを引き起こしていた。そしてそれだけではなかった。

「またですか」

「そうじゃ。またじゃ」

小田切君に胸を張って返す。

「その通りじゃ」

「生首と身体を調達ですか」

「広島の方にあれを出張させてじゃ」

「クビゲル をですな」

「それで暴走族を三百人ばかりじゃ」

殺したというのである。

「どれも人相の悪い連中の断末魔の顔じゃ。よいものじゃぞ」

「そしてその生首をですな」

「飛ばす。身体は徘徊させる」

無駄なく使うというわけである。

「この世のダニ共をあえてわしの役に立たさせる。いいことじゃな」

「いいことですか？」

「ゴミがわしの様な偉大な天才の研究や発明の役に立てるのじゃぞ？」

実に平然とした言葉である。

「それで何でよいことでないのじゃ」

「人権とかは？」

「人権？何じゃそれは」

小田切君の問いに真面目な顔で返す。

「聞いたことがないぞ。何処の国の言葉じゃ？」

「何回も話してません？」

「知らないな。わしはそんな言葉は知らない」

「こう言うのだった。」

「人権などという言葉はな」

「じゃあ暴走族を殺しても平気ですね」

「全く平気じゃ」

いつもの博士である。

「何ということはない」

「よくわかりました」

「うむ。では引き続き留守番を頼むぞ」

小田切君の今の仕事である。

「トレーニングルームを使っていいし風呂も自由じゃ」

「サウナもですよね」

「どれも使っていい。くつろいでくれ」

「わかりました」

「研究所にいてくれるだけでいいからのう」

それで月給は手取り四十万である。そうした面だけを見ればこんなに割りのいい仕事はないと言えた。問題は勤務先とその責任者であるが。

「そういうことじゃ」

「ええ、じゃあまたそうさせてもらいますので」

「自分とタロやライゾウの御飯は忘れんようにな」

「博士はどうするんですか？」

小田切君は博士のことも尋ねた。

「それは」

ここでまた一つ博士の発明品が出るのであった。とにかく天才であることは間違いないのでそれが実に厄介な博士なのであった。

第一百九十九話

完

2
0
1
0
・
6
・
2
2
3

第三百話

第三百話 機械のシエフ

小田切君は博士に博士自身の食事はどうするかと尋ねた。

これは何でもない問いだった。しかしである。

博士はその問いを聞いてだ。不意に不敵な笑みを浮かべてだ。こう言ってきたのである。

「それじゃがな」

「僕が作りましょうか？」

「いや、今回はそれはいい」

「こう言うのだった。」

「それはじゃ」

「あれっ、じゃあ出前ですか？」

「ここまで出前で来る店があるのか？」

「ないですけどね」

博士の研究所の周りは立ち入り禁止区域である。これも全て博士がいるからである。それ以外に理由は一切不要ですらあった。

「そんなのは」

「そうじゃろう。もっとも出前も不要じゃ」

「それもですか」

「うむ、不要じゃ」

博士ははつきりと言い切ってみせた。

「じゃからそういうことではなくじゃ」

「それじゃあどうやって食べるんですか？」

「料理用のロボットを造ったのじゃよ」

「こう言うのであった。」

「実はのう」

「料理ができるロボットですか」

「それじゃ。それに今パエリアやガスパチヨを作らせておる」

「へえ、スペイン料理もできるんですね」

「当然他の料理もな。じゃから小田切君は何もしなくてよい
そうだとするのである。」

「そういうことじゃ」

「じゃあ僕はいるだけですか」

「部屋等の掃除は掃除用ロボットがやってくれるし」

「はい、じゃあタロやライゾウ達の御飯は忘れませんか」

「気が向いたら自分のアパートにも返っていいから」
「それもいいというのだ。」

「夜にはな」

「まあ時々そうさせてもらってますけれど」

それはしていた。小田切君にとって家とはそこだからだ。

「最近こっちにいる方が多いですけどね」

「そうじゃな。全くな」

「まあそれは置いておいて。留守番はさせてもらいますので」

「頼んだぞ」

「はい、わかりました」

こうして小田切君は研究所の普通の部屋に戻ってだ。そうしてだ
った。

まずはタロ、ライゾウと共にだ。トレーニングルームで汗をかい
た。この時にタロの散歩も兼ねている。犬には散歩はつきものであ
る。

それからサウナと風呂で身体を綺麗にして一人と二匹で酒と夕食
を楽しむ。そしてこの時にふと言葉を漏らすのだった。

「これで博士の危険な研究は発明がなかったらな」

「まあ天国だよな」

「そうだね」

「全くだよ」

そんなこともぼやいたりする彼等だった。しかし給料はもらって
いて御飯も貰っているのです。この文句は面と向かっては言えないの

だった。

第三百話

完

2
0
1
0
・
6
・
2
3

第三百一話

第三百一話 落ち着いた時間

先生達のものかな時間は続く。本当に至つてのどかである。

「皆さん、今日のお茶は如何ですか？」

「ハーブティーは」

「はい、美味しいです」

「お菓子も」

華奈子達は一応そのお茶やお菓子を飲んで食べてはいる。しかしであつた。

それでもその顔はだ。晴れていないどころか今にでも飛び出そうな顔であつた。

「けれどいいんですか？」

「そうですよ」

六人はその顔で先生達に問う。

「博士がまた大騒動起こしてるんですけれど」

「そつちはいいんですか？」

「はい、今はこうしていいですよ」

「安心して下さい」

先生達はにこやかな顔で返すばかりだった。そのお茶をお代わりしてお菓子を手に摘んでだ。そのうえで食べていくのであつた。

「是非共です」

「リラックスも大事ですよ」

「そうなんですか？」

だが華奈子はそれを聞いても首を傾げさせて言葉を返す。

「あの、生首に首のない身体が日本中飛び回り動き回ってますけれど」

「本当に何もしなくていいんですか」

「安心して下さい」

「その通りです」

あくまでこう言うだけの今田先生と今日子先生であった。

「落ち着いてお茶を飲んで」

「そしてお菓子を食べて」

「こうしていること自体に何かあるんですか？」

美奈子も今回は落ち着いてはいられない。それでこう問うのだった。

「若しかして」

「お茶を楽しみます」

「それとお菓子を」

先生達の優雅な微笑みと共に来た返答である。

「それですが」

「他に何か必要ですか？」

「いえ、別に」

こう言われてはだった。さしもの美奈子も言葉を止めてしまった。そのうえでだ。諦めた様な感じで自分のティーカップにお茶を注いで飲むのだった。

「ちよつと美奈子」

「何か言えつていろいろの？」

「そうよ」

華奈子が怪訝な顔で美奈子に言ってきた。

「言わないの？それで終わり？」

「ちよつとね」

美奈子はもう完全に諦めた顔である。

「それはかなり」

「無理になったのね」

「ここはなるようにしかならないかも」

美奈子らしくない言葉だった。

「やっぱりね」

「そうなのね」

そう言われてだった。華奈子は溜息をつく。彼女も言う言葉がなくそつとしていた。

第三百一話 完

2010・6・29

第三百二話

第三百二話 焦る六人

「ねえ」

「ええ」

梨花が美樹の言葉に頷いていた。

「そうよね、今はこうしていてもね」

「どうにもならないと思うけれど」

「私もそう思うけれど」

「けれど先生達がいっていうし」

「そうよね」

二人も困っていた。そして春奈と赤音もであった。

「このままだと博士はもつととんでもないことするかも」

「あの博士だしね」

「そうよね。何かしないと考える方が」

「無理があるし」

そしてこんなことも言い合った。

「今すぐに動かないとね」

「まずいよね」

春奈と赤音も不安に思っていた。そうしてであった。

華奈子と美奈子もお茶を飲みながらだ。お菓子も食べているがやはりどうしても不安を拭い去ることはできなかった。どうしてもであつた。

「今こうしている間にもね」

「博士は材料を手に入れているわね」

「どうせ今もヤクザ屋さんとか暴走族とか街の不良とか殺してよ」

華奈子は美奈子に対して話す。

「それで材料手に入れてね」

「生首と身体がまた手に入るわね」

「まあねえ」

「ここで華奈子はこんなことも言った。

「ヤクザ屋さんとかを掃除してくれてるって考えることもできるわね」

「まあそうね」

美奈子もこのことには同意して頷いた。

「それはね」

「それはいいけれど」

「犯罪者がいなくなるのはいいことよ」

華奈子も美奈子も犯罪者に対する意識はこうしたものだ。

「それでも。殺された被害者の首とか身体が襲い掛かって来るのはね」

「それが問題だから」

華奈子はまた難しい顔で話した。

「すぐにも行きたいけれど」

「先生達は動かれないし」

「困ったわね」

美奈子は言いながらまた紅茶を飲む。

「このまま過ごしていいのかしら」

「お茶もお菓子も美味しいけれどね」

それはいいとしてもだった。

「けれどそれでも」

「こうしていいのかしら」

華奈子はここでライゾウとタロを見た。しかし二匹も他の使い魔達もだった。

全然焦っている様子はない。至って落ち着いて寝転がってさえいる。

「何か平和ね」

「そうね」

華奈子も美奈子もこれはわからなかった。何故か彼等はくつろい

でいた。

第三百二話

完

2
0
1
0
・
6
・
2
9

第三百三話

第三百三話 ゆとり

「さて、皆さん」

「今日はですね」

先生達のおっとりとした言葉がまた来た。

「この紅茶をです」

「魔法で淹れるようになりましょう」

「それでいいんですか？」

六人のリーダーである梨花がいぶかしむ顔で問い返した。

「今それで」

「何か駄目ですか？」

「問題がありますか？」

「あの、今は」

梨花にしろである。博士のことが念頭にある。それで心中穏やか
でおられずどうしてもこころ問い返しざるを得なかったのである。

「大変なんですけれど」

「そうですか？」

「大変ではありませんよ」

ところがだった。先生達は至って呑気な調子で返してきた。

「いつも通りすればです」

「問題ありませんよ」

「そうかしら」

「かなり疑問なんだけれど」

美樹と赤音もだ。悠長な顔をしてはいなかった。それどころかそ
んなことを言う先生達を見ながら途方に暮れようとさえしていた。

「博士がまた暴れてるしね」

「余計にね」

「音楽ならまだわかるけれど」

おっとりとしている春奈でもだった。今は流石にそういうわけにはいかなかった。彼女にしても今回はかりは事情が違っていた。

「それでも。お茶なんて」

「何かあるのかしら」

「ちよつと。私にも」

美奈子も怪訝な顔で華奈子に返す。

「今回は」

「そう思えないのね」

「お茶飲んでいいのかしら」

美奈子はこうさえ言った。

「この状況で」

「早く何とかしないといけないのに」

華奈子もかなり焦っていた。できれば今すぐに飛び出して博士を止めたい、そう思っただけで仕方がなかった。だが今はそんな動きはとてもなかった。

「どうしてなのかしら」

「このゆとりは」

「ちよつと」

「さて、皆さん」

狼狽し困惑する六人に今田先生の声がかげられた。

「紅茶だけでなく抹茶もありますからね」

「勉強しましょう」

今日子先生も言ってくる。本当に先生達はいつものおっとりとした調子だ。

「それでは」

「はじめますよ」

こうしてだった。六人はそのおっとりとした穏やかな授業を受けた。そうして紅茶、それに抹茶を魔法で淹れる勉強をしたのだった。

第三百三話

完

2
0
1
0
・
7
・
2
7

第三百四話

第三百四話 小田切君達のお茶

「お茶美味いな」

「そうだね」

ライゾウ兄とタロ弟がだ。それぞれ博士の研究所の中の一室においてお茶を飲んでいた。その前足を手のようにして使って飲んでいく。

「麦茶つていいよな」

「身体にもいいしね」

「夏はやっぱりね」

小田切君もいた。彼もまた麦茶を飲んでいる。その麦茶はガラスのコップに入れられていて実によく冷えた印象を与えるものであった。

「麦茶だよな」

「だよなあ。そういえばこの前冷えた抹茶あつたよな」

「ああ、あれだよな」

ライゾウ兄とタロ弟はその冷やした抹茶の話もした。

「グリーンティーな」

「あれもよかつたよな」

「抹茶も冷やして飲むことができるからね」

小田切君は二匹のその話に合わせた。

「だからあれもね」

「あれも美味かつたからな」

「甘かつたしね」

「お砂糖を入れてね」

そうして飲んだというのである。それを聞けば抹茶にしても紅茶等と大して変わらないと言える。お茶はお茶だということである。「そうして飲んだしね」

「けれど麦茶はこのままでいいよな」

「ストレートでね」

「まあお砂糖を入れることもできるけれど」

小田切君と彼等の話は続く。

「けれどそれでもね」

「ああ、ストレートが一番だよ」

「麦茶は何も入れないのがね」

「そうだね。何かドイツ人に言わせると」

小田切君は不意に彼等のことを話に出してきた。それは少し聞いただけでは全く関係のない話だった。しかしそれは違っていた。

「麦茶って代用コーヒーに味が似ているらしいね」

「へえ、じゃあ代用コーヒーって美味しいのか？」

「そうかな」

「けれどドイツ人はまずいって言うね」

旧東ドイツの人達である。彼等にとってはあまりいい思い出の味ではない。もっともその味はもう完全に過去のものとなるうとしてはいる。

「その代用コーヒーがね」

「じゃあドイツ人は麦茶をまずいって言うのか？」

「こんなに美味しいのに」

「味覚はそれぞれだからね」

小田切君はこのことにはこう言うに留めた。ドイツ人の味覚についてはあえて言わないようにしたのである。これは彼の気遣いである。

「だからね」

「まあおいら達は麦茶を楽しむか」

「そうしよう」

彼等は西瓜も一緒に食べていた。夏の納涼を十分に満喫していた。

第二百四話

完

2
0
1
0
・
7
・
2
7

第三百五話

第三百五話

落ち着きがもたらす

もの

先生達は落ち着き過ぎる程落ち着いている。そうしてだ。

お茶を飲みながらだ。六人に言ってきた。

「皆さん、暑くないですか？」

「大丈夫ですか？」

「そりゃ暑いですけれど」

「その通りですけれど」

華奈子と美奈子はその先生の言葉に応える。確かに全身汗だくである。とにかく今は洒落にならない程熱かった。

「けれどそれでも」

「今は」

「そうですね。それではです」

「中に入りましょう」

先生達は話を聞いていない感じだ。この先生達は時としてこうした状況になつてしまうのだ。天然にである。

「そしてですね。アイスクリームを食べましょう」

「水分も大切に」

「水分もですか」

華奈子が聞きなおした。

「温かいお茶の他にも」

「アイスティーがありますよ」

「グリーンティーも」

「グリーンティーですか。アイスの」

それを聞いて美奈子は少しだけ表情を変えた。そうしてこんなことを言うのであった。

「それじゃあ」

「そういえばあんた冷えたグリーンティー好きだったわよね」

「ええ。お砂糖を入れて甘くしたのがね」

美奈子の好物の一つである。抹茶は実は冷やして砂糖を入れるとだ。極端に甘くなるのである。

「大好きだし」

「そうよね。あたしもアイスマルクティー好きだし」

「とりあえずここは先生達の御言葉に甘えましょう。ここにずっといても熱中症になるだけよ」

「そうよね、やっぱり」

「博士との戦いもいいけれど」

それでもまだという美奈子だった。

「それよりもまずはね」

「体調管理、そしてエネルギー補給ね」

「そういうことよ。それじゃあ」

「わかったわ。先生」

ここでは華奈子が六人を代表していた。他の面々も彼女や美奈子と同じ意見だった。暑さには流石に勝つのは容易ではなかった。

「御願います」

「はい、皆さん中に入りましょう」

「そしてアイスと冷えたお茶を」

「わかりました」

「是非御願います」

こうして全員先生の屋敷の中に入る。中に入るとあらためてわかる物凄い大きさである。

その中に入った。ふと華奈子が美奈子に対して言った。

「そういえば先生ってここに一人なのかしら」

「そうじゃなかったかしら」

「一人でこの屋敷って」

華奈子は美奈子にそのことを聞いて首を捻った。

「寂しくないのかしら」

「どづかしらね」

そんな話をしているとであった。六人と使い魔達の前に出て来た。それは思いも寄らぬこの屋敷の住人達であった。その彼等とは。

第三百五話

完

2010・8・5

第三百六話

第三百六話 先生の使い魔

「えつ、犬!？」

「それに猫も」

「鳥も蛇も」

「物凄く多いけれど」

「まさかこの動物達って」

「先生の」

六人はその動物達を見て言う。そして今田先生もここで言うのだ。
った。

「はい、先生の使い魔ですよ」

「やっぱりそうなんですか」

「この動物達が」

「使い魔ですし同居人です」

それでもあるというのだ。つまりは。

「先生の家族です」

「お一人じゃなかつたんですね」

「こんなにいたんですね」

「はい、先生は家族が大勢いるんですよ」

にこりと優しい笑みを浮かべて六人に話すのだった。

「二十はいるでしょうか」

「使い魔が二十って」

「流石先生」

「そこまで同時に使い魔にできるなんて」

「凄いですね」

「今日子ちゃんもそうですよ」

何とそれはだ。今日子先生もだという。見れば何時の間にかである。今日子先生の周りにも今田先生と同じだけ多くの種類と数の生

き物達がいた。その生き物達も当然使い魔達である。

「ほら、こうして実際に」

「うわ、本当に」

「しかもあつという間に来たし」

「凄いですね」

「先生達が御願いすればすぐに来てくれるんですよ」

今田先生の言葉である。

「とてもいい子達ですよ」

「だから寂しくないんですね」

「これだけの使い魔達がいるから」

「家事もしてくれますし」

それもだという。使い魔はそうしたこともできるのだ。魔女達にとつては非常に頼りになる存在なのである。そして友達でもあるのだ。

「いつも一緒なんですよ」

「私ですよ」

今日子先生もだという。実際に六人にはその使い魔達がアイスにお茶を出してきた。食べてみるとそれはである。美味しかった。

「お茶もよく冷えてるしね」

「やっぱり先生にまでなるとね」

華奈子と美奈子はお互いに話す。

「使い魔も違うのね」

「そうね」

「あたし達もね」

「ここまでいかないよ」

使い魔の能力は魔女の能力に否定する。そこから先生達の力の凄さを実感する先生達だった。そしてだ。ここで先生達はあらためてその力を発揮するのであった。

第三百六話

完

2
0
1
0
・
8
・
5

第三百七話

第三百七話

使い魔を使って

「ええと、今日子ちゃん」

「うん、香ちゃん」

先生達はかなり若いようなやり取りをした。

「じゃあそろそろね」

「はじめる？」

「うん、はじめましょう」

今田先生が今日子先生に対して答えた。

「お茶も飲んだし」

「身体もいい具合に落ち着いたしね」

「だからね」

また言う今田先生だった。

「はじめましょう」

「わかったわ。それじゃあ」

「はじめるっていったら」

「まさか」

華奈子と美奈子だけでなく他のメンバーも今の先生達の言葉に期待した。期待せずにはいられなかった。状況が状況だけにである。

「いよいよあの首と身体に対して」

「動いてくれるのね」

「よし、それならあたし達もね」

「ええ、華奈子」

美奈子は笑顔で華奈子に応えた。

「勉強した魔術でね」

「あの気持ち悪い騒動を終わらせましょう」

そうなるかと確信していた。しかしであった。

ここでもだった。先生達は言うのだった。

「それじゃあ皆さん」

「流しそうめんはどうですか？」

「えっ!？」

「流しそうめん!？」

皆今の先生達の言葉を聞いてだ。また啞然となつてしまった。

「あの、流しそうめんって」

「今からゆがいてですか？」

「それからおそうめんを流して」

「食べるんですよ」

「はい、そうですよ」

相変わらずの調子の今田先生だった。

「その通りです」

「皆さん嫌いですか？」

「いえ、好きです」

「大好きです」

皆の返答は六人が六人とも全く同じであつた。

「夏ですし」

「おそうめんの季節ですし」

「最高に好きです」

「それならいいですね」

「じゃあ今から魔術で作りましょう」

一応魔術で作ることにはなつた。しかしであつた。

今こんなことをしていいのか、世の中は大丈夫なのか、博士はこのまま放つておいていいのか、どうしても考えてしまう六人だった。だが先生達は呑気な様子だった。

2
0
1
0
·
8
·
1
0

第三百八話

第三百八話　こつちでもそうめん

小田切君の今日の昼食はだ。そうめんであつた。

ガラスの大きな容器の中に氷で冷やした水を入れそこにそうめんがある。箸ですくつてそのうえでだ。そうめんのつゆに漬けてそれで食べている。

一口食べてだ。まず言うことは。

「夏はこれと西瓜だよな」

「西瓜もあるぜ」

「ちゃんと冷やしてるよ」

ライゾウとタロが小田切君の言葉に応える。二人はそれぞれキャットフードとドッグフードを食べている。流石にそうめんは食べていない。

「デザートはそれなんだな」

「西瓜なんだね」

「うん、そうするよ」

そうめんを食べながら答える小田切君だつた。

「これをたつぷりと食べてからね」

「それと冷奴か」

「それもあるね」

見ればそうめんだけではない。豆腐もある。小田切君はその夏の二大味覚を堪能していた。デザートも当然ながら夏の味覚であつた。だがここだ。二匹は言うのだった。

「そうめん豆腐に西瓜もいければどな」

「栄養はどうなの？そつちは」

「ああ、野菜ジュース毎日飲んでるから」

小田切君はすぐに答えた。

「だからそつちは大丈夫だよ」

「野菜ジュースか」
「それ飲んでるんだ」
「毎日ランニングの後とかにね。大体一リットルは飲んでるかな」
「それだけだというのである。」
「飲んでるけれどね。牛乳もね」
「ああ、牛乳もか」
「じゃあ栄養はいけてるね」
「栄養もすっかり摂らないと博士の研究所にはいられないよ」
「体力的にという意味である。」
「だからね。ビタミンもちゃんとね」
「そういえばそうめんと冷奴には」
「生姜にみょうが、それと葱もあるね」
「その三つをだ。かなり使っていた。」
「身体にいいからだよな」
「やっぱり」
「そうだよ。ちゃんと御飯も食べてるしね」
「冷やした御飯に冷たいお茶をかけてだ。そこに海苔や梅干で食べていた。所謂冷やし茶漬けである。」
「食べないと」
「梅干がいいよな」
「そうだね」
「二匹は梅の身体によさに注目していた。」
「夏でも栄養はしっかりと」
「そこはわかってるってことだね」
「うん、本当に体力が必要だから」
「何度もこのことを言う小田切君だった。彼にしてもただ夏の暑さに参っていたり夏の味を楽しんでいるではなかった。栄養もしっかりと考えていた。」

第三百八話

完

2
0
1
0
・
8
・
1
0

第三百九話

第三百九話　　そうめんの食べ方

先生達は使い魔達と一緒にそうめんを作る。そしてその食べ方は。

「うわあ、風流ね」

「そうよね」

六人はその食べ方を見て驚いた。竹を輪切りにした筒を使った流しそうめんなのである。水が清らかに流れそこにそうめんを流している。

「美味しそう」

「確かに」

「何か凄く食べたいし」

「はい、どうぞ」

「どんどん食べてね」

先生達はその六人に笑顔で告げる。

「お箸もおつゆもあるから」

「どうぞ」

六人分そのつゆが入ったそうめん用のつゆ入れと箸が来た。

「量はたっぷりとあるから」

「薬味もあるわよ」

「あつ、お葱」

「生姜も」

「みょうがも」

薬味も揃っていた。そしてである。先生達は六人に対してだ。あ
るものも出してきたのであった。

「これって何ですか？」

「赤いですけれど」

「梅ですよ」

今田先生がいつもの優雅な微笑みと共にこう話す。

「梅をすり潰したものです」

「それをおそうめんのつゆの中にですか」

「入れるんですか」

「はい、そうです」

「そうします」

笑顔で話す先生達だった。

「凄くあっさりとして食べやすくなるんですよ」

「食欲も出ます」

「梅はそうですね」

頷いたのは美奈子だった。

「確かに食欲を増進させます」

「美奈子梅好きだしね」

華奈子がその美奈子に言ってきた。

「あたしも好きだけれど」

「おばちゃんとポポちゃんが大好きだしね」

「そうそう。それでね」

「はい、梅は身体にもいいんですよ」

「だから皆さんどうぞ」

こうして六人に勧める。六人も当然その言葉を受ける。

「わかりました」

「じゃあ入れてみます」

「梅も」

こうして葱や生姜、みょうがと一緒に梅も入れてみるとだった。

その味は。

「美味しい」

「さらに食べやすくなったし」

「食欲も出るわよね」

「本当に」

先生達の言う通りだった。梅は最高であった。

第三百九話

完

2010・8・19

第三百十話

第三百十話 六人の好み

流しそうめんを梅も入れて食べながらだ。六人は話す。

「そういえば梨花つてね」

「そうよね。生姜好きよね」

赤音と美樹は梨花が自分のおつゆの中に生姜をかなり入れているのを見て話す。

「葛湯とかにも入れるし」

「好きなのね」

「ええ、そうよ」

実際にその通りだと答える梨花だった。

「身体にもいいしね」

「そうよね。生姜つて身体にいいのよね」

春奈が梨花のその言葉に笑顔で頷いた。

「私はお葱が好きだけれど」

「そういえばそうね」

「春奈はそれよね」

赤音と美樹は春奈のおつゆを見た。見れば実際にかかなりの量の葱を入れている。

「それで赤音はみょうがね」

「美樹ちゃんもバランスよくね」

梨花と美樹も二人のを見て言う。見ればその通りであった。四人共それぞれおつゆの中に入れる薬味のパターンが違っているのだった。

それは華奈子と美奈子もであった。まずは華奈子が言った。

「美奈子はとにかく梅なのね」

「だって。好きだから」

こう答える美奈子だった。そのうえで華奈子に対して返す。

「そういう華奈子だって」

「あたしもなのね」

「大葉入れてるわよね」

見ればその通りだった。彼女は葱や生姜や梅の他に大葉も入れている。そうしてそのうえでそうめんを食べているのである。

「昔からそれ好きよね」

「うん、何かそれ考えたらね」

「一緒よね」

美奈子は微笑んでこう言ってみせた。

「誰もがそれぞれ好きなものがあってね」

「そうよね。ただ好きなものが違うだけでね」

華奈子も笑って述べる。

「同じよね」

「そうよね。それじゃあね」

「ええ、食べましょう」

話の後でさらにであった。

そうめんを食べる。六人だけでなく使い魔達も、当然先生達も食べる。先生達のそれぞれの使い魔達もだ。それだけの数で食べると。

「お腹一杯」

「けれどなくなったね」

「そうね」

なくなるのが当然だった。そしてだ。

「デザートは西瓜ですよ」

「それと麦茶も」

これも出た。しかしである。

「甘いものは別腹だし」

「それじゃあね」

そちらも皆で食べるのであった。エネルギー補給は無事終わった。

第三百十話

完

2
0
1
0
・
8
・
1
9

第三百十一話

第三百十一話

食事の後から

そうめんに西瓜を食べてだ。それからだった。

「それじゃあ今日子ちゃん」

「ええ、香ちゃん」

先生達が顔を見合わせていた。

「はじめる？」

「そうね。お昼も食べたし」

「えっ、はじめるって」

「まさか」

「そうよ、まさかよ」

こう六人にも話してきた。

「これからちよつとね」

「生首と身体を収めてくるから」

造作もない感じの言葉だった。

「それじゃあ皆は」

「ちよつといいかしら」

「ちよつとって」

「私達は一体何を」

華奈子と美奈子が先生達に問う。するとであった。

先生達はだ。こう答えるのだった。

「楽器を演奏して」

「それに魔法を入れてね」

「それだけですか？」

「それだけなんですか？」

六人は今の先生達の言葉に怪訝な顔で返した。

「あの、何か大騒動になってるんですけれど」

「いつものことですからね」

博士が起こす騒動は常に大騒動である。博士はそうした騒動を起こすこともまた趣味にしているのである。趣味は他にもあるがだ。

「私達は音楽だけって」

「何か」

「今回のメインは先生達がしますよ」

「そういうことです」

ここでもにこりと笑って話す先生達だった。

「では皆さん、いいですね」

「今からはじめましょう」

「うっん、どうなるかな」

「今回は」

六人は正直予想ができなくなっていた。

「何が起こるかわからないのはいつもだけれど」

「今回もね」

「そうよね」

「先生達が何をするか」

「そしてどうなるか」

かなり不安に思っていた。しかしその先生達はというと。

「それじゃあ行きますよ」

「いいですね」

「はい、わかりました」

「それじゃあ」

それでも先生達の言葉には素直に頷くのだった。確かに不安を感じてはいた。しかしそれでも先生達への信頼はだ。絶対のものがあつた。

2
0
1
0
·
8
·
2
5

第三百十二話

第三百十二話 博士の昼食

小田切君もそうめんや西瓜を昼食としていた。そして博士はとうとだ。

「美味しいのう」

「何か思いきりへビーな昼食ですね」

「そうか？」

小田切君の問いに素っ気無く返す博士だった。見ればだ。博士はチーズフォンデュを食べていた。そしてその横には赤ワインまであった。

「別にそうは思わぬがな」

「暑くないですか？」

小田切君が問うのはこのことだった。

「夏にそれは」

「暑い時には暑いものじゃ」

しかし博士は言うのだった。

「それがいいのじゃよ」

「それで汗をかいてですか」

「夜はカレーがいいのう」

夜の食事の話もするのであった。

「野菜カレーじゃ」

「香辛料はたっぷりですね」

「無論じゃ。それでこれでもかど汗をかいてじゃ」

食べながら話す。尚食事中もいつもの白のタキシード姿である。

しかし別にそれでどうということはない様子だった。

「それでこそなのじゃよ」

「夏だからですか」

「暑い食事で汗をかく。それもクーラーの効いた部屋の中でじゃ」

「クーラーは必須なんですね」

「それがかえっていいのじゃよ。暑い夏の涼しい部屋で熱いものを食べるのじゃ」

「こつ小田切君に話す。」

「最高の贅沢の一つじゃよ」

「贅沢ですか」

「暑い時に冷たいものを口に入れるのもよいがな」

「それもいいという博士だった。」

「じゃがこつしてクーラーの効いた部屋で熱いものを食べるのもいいぞ」

「私はもうそうめんとか西瓜でいいですけれどね」

小田切君はかなり素っ気無い。

「もうあっさり」と

「面白くないのう。まあわしもそうめんは好きじゃがな」

実は和食も好きな博士である。

「それでも今はじゃ」

「そのフォンデュなんですね」

「美味いぞ」

そこに串に刺したパンやソーセージやハムや野菜を入れてだ。そのうえで食べて一緒にワインも楽しむのだった。中々優雅な食べ方と言えた。

「今度どうじゃ？小田切君も」

「冬にお願いします」

やはり小田切君の返事は素っ気無い。

「そういうことで」

「冬か。まあ冬は冬で面白いからのう」

「春夏秋冬全部楽しんでません？」

「何ごとにも楽しまなければ駄目じゃよ」

意外とそうしたこと楽しむ博士であった。そうしたことも考えとだ。やはり趣味が多い。しかしそのどれもが世を騒がすもので

あるのだった。

第三百十二話

完

2
0
1
0
・
8
・
2
5

第三百十三話

第三百十三話 出陣

「じゃあね、今日子ちゃん」

「うん、香ちゃん」

二人の先生が笑顔で頷き合い。そうしてだった。箒にそれぞれ乗る。そして空に舞う。

空の上からだ。まだ庭にいる六人にも告げた。

「はい、皆さん」

「では今から行きましょう」

「何か凄く気楽な感じしない？」

「するわ」

美奈子は少し心配そうな顔で華奈子の言葉に答えた。

「相手が博士だけけれど」

「しかも今回はかなり気持ち悪いわよね」

「ええ」

何しろ空を飛ぶ生首と首なしの身体がそれぞれ団体で動き回っているのだ。日本中が大騒ぎになるのも当然である。

「それでもこんなにお気楽で」

「いいのかしら」

「けれどね」

ここで華奈子はふと言うのであった。

「先生達っていつもそうよね」

「そういえばそうね」

今回は珍しく美奈子が後で頷く。実は勘ということについてはどちらかというとな華奈子の方が鋭いのだ。

「緊張するってことないわよね」

「それを考えれば特に不安に思うことはないのかしら」

「そうじゃないかしら」

美奈子もそうではないかと言うのだった。

「確かに不安だけれど」

「そうよね、それはどうしてもね」

しかしそれでもだった。ここでまた上から先生達の声がするのだ
った。

「はい、行きましょう」

「いざ戦いの場へ」

「行こう」

「そうね」

二人はここで頷き合った。他の四人もである。

「ここであれこれ行っていてもね」

「何にもならないわよね」

「それだったらまずは」

「動こう」

考えるよりまずは、であった。そうしてであった。

六人も箒に乗った。当然使い魔達も一緒である。それぞれの法衣
や帽子の中、箒に捕まったりして行く。

そうして六人の箒も舞い上がった。今まさにであった。

そしてだ。先頭を行く先生達はだ。

二人でこんな話をしていた。

「ねえ、もう一気にいこうかしら」

「そうね」

実に呑気な調子のままだ。

「その方が楽よね」

「そうよね。だからね」

今田先生はにこにここと今日子先生に話す。

「もうそうしましょう」

「わかったわ。それじゃあね」

「ええ、あれね」

「あの魔法使いましょう」

「わかったわ。それじゃあ
こう話してだ。そのうえで今仕掛けるのであった。二人の魔法を。」

第三百十三話 完

2010・8・30

第三百十四話

第三百十四話 飛ぶ使い魔

タロとライゾウ、それにタミーノとフィガロもだ。主達と一緒にいる。

しかし彼等は他の使い魔達とは違っていた。

「あれっ、飛んでるけれど」

「何時の間にそうなったの？」

「はい、私達も修行しました」

「その結果です」

タミーノとフィガロが華奈子とミナこの問いに答える。

「それでなのです」

「飛べるようになったのです」

「僕達もだよ」

「これでも勉強したんだぜ」

タロとライゾウも言ってきた。

「御主人様達が箒で空を飛ぶからね」

「それに合わせたんだよ」

「今までは箒の端に捕まっていたのに」

「それでも良かったと思うけれど」

「そこは誇りなんだよ」

「そういうことだよ」

二人の言葉にタロとライゾウが言い返す。彼等はまるでジャンプする様に自然に空を駆けている。当然タミーノとフィガロでもある。普通にそうしていた。

「使い魔にも誇りがあるからね」

「御主人の助けにならないといけないからな」

「間違っても足手まといになってはいけません」

「それはもつての他です」

タミーノとフィガロは普段通りの畏まった態度で述べている。

「ですから。我々も修行しているのです」

「無論他の使い魔達も」

見ればその通りだった。美樹の使い魔の二羽の鳥達以外にもだ。他の使い魔達も空を駆けていた。

「うわあ、皆凄いね」

「まさかお空を飛べるようになるなんて」

「だから御主人の為になるようにね」

「勉強して修行してるんだよ」

「ここでもそうだと述べるタロとライゾウだった。

「そういうことだから」

「御主人達が凄くなったらおいら達もそうなっていくんだよ」

「それが使い魔の習性だから」

「覚えておいてくれよな」

「ううん、魔女が強くなればなのね」

華奈子が自分の使い魔達の話聞いて考える顔で述べた。

「それに比例して使い魔もなの」

「いい勉強になるわね」

美奈子もここで考える顔で言う。

「私達だけに止まらないってというのは」

「そうよね。という」と

ここでさらに考える華奈子だった。

「先生達の使い魔達も」

「かなりの力よね」

「しかも」

それに止まらなかった。

「数も多いしね」

「一体どれだけのものなのかしら」

「見てみたくなかったわね」

こんなことも言う華奈子だった。

「一体どんなものかね」

「そうね。それじゃあ」

その期待も抱いた。その中で筭で然るべき場所に向かい続けるのであった。

第三百十四話 完

2010・8・30

第三百十五話

第三百十五話 博士とイスラエル

先生達と六人が動いている間だ。博士はというた。

「ふむ」

「また読書ですか」

「アインシュタインを読んでおる」

それだというのである。小田切君に対して答える。

「それもヘブライ語のじゃ」

「ヘブライっていうとイスラエルの言葉ですよね」

「ユダヤ人の言葉じゃ。知っての通りアインシュタインはな」

「はい、ユダヤ系でしたね」

それで有名でもある。歴史上ユダヤ系の知識人や科学者は多いが彼もまたそうなのである。

「それでヘブライ語ですか」

「イスラエルから取り寄せたのじゃ」

「わざわざですか」

「しかしちと苦労した」

ここで困った顔になる博士だった。

「何しろイスラエル政府はわしを目の敵にしておるからのう」

「イスラエルでも何かしたんですか」

「ちよつと原発に怪獣を突っ込ませた」

それをしたと読書をしながら平然と話す。自分の車椅子に畳の上で座りそこで読んでいる。

「それでのう。原発を破壊されそうになってじゃ」

「そりゃ怒りますね」

「些細な遊びだったんじゃないかな」

「普通原発に怪獣を突っ込ませるのは遊びじゃないですよ」

小田切君は正論で返す。

「それでどんな怪獣だったんですか」

「宇宙怪獣をさらに強化したやつじゃ」

「またしても碌でもないものだった。」

「ベムスーをのう」

「あんなのよく捕まえられましたね」

「それで原発を飲み込ませようとしたらイスラエル軍が総出で出て来たのじゃよ」

「流石イスラエル軍ですね」

「まあ自衛隊とは違うのう」

博士はイスラエル軍を自衛隊と比較していた。

「もう士気も何もかもがじゃ」

「常時戦闘状態の国ですからね」

「昔のユダヤ人は戦争には自分から武器を取って戦うことはあまりなかったがのう」

これはかつてのことである。少なくともイスラエル建国まではだ。ユダヤ人は知識人や商人になることが多かった。軍人もいたがそれでも少数派だったのである。ユダヤ人は都市に生きていたのだ。

「だがのう。イスラエル建国以来じゃ」

「変わったんですね」

「仕方ないとはいえ。わしの遊びを邪魔するとは」

「だから遊びじゃないですから」

小田切君はまた言う。

「そんなのは」

「ううむ、イスラエルは冗談がわからん」

「それを冗談と思う人って滅茶苦茶少数派ですよ」

「わしのジョークは理解されんか」

「絶対に誰にも」

こう返す小田切君だった。何はともあれである。二人はこんな話をしながらだ。今の憩いの時間を過ごしていたのであった。小田切君だけが戦いが迫っていることを知らない。

第三百十五話

完

2
0
1
0
・
9
・
8

第三百十六話

第三百十六話 博士のジョーク

「そもそもじゃ」

「はい、今度は何ですか？」

アインシュタインのへブライ語の本を読みながらだ。博士は小田切君に話していく。

そして小田切君もだ。博士のその話を聞いている。いつも通りである。

「それで」

「どの者もわしのジョークを理解せん」

「ですから博士のそれはジョークじゃありませんから」

「では何だというのじゃ」

「テロです」

一言であつた。

「それ以外の何でもありません」

「また随分なことを言うのう」

「原発を怪獣に襲わせるのは最悪のテロですよ」

「そうなのか」

「一体どれだけの損害が出ると思ってるんですか」

小田切君は口を尖らせて博士に言う。

「そんなことは………考えたことありませんね」

「悪いことか？」

「いえ、博士ですから」

博士にそうしたことを悪いと考える機能は最初からインプットされていない。破壊が趣味だからそれはいいことなのである。それが博士の主張である。

「そういうことですよね」

「折角原発と中にある核弾頭も破壊できたののう」

「ああ、それ公然の秘密ですから」

小田切君はその核弾頭について突っ込みを入れた。

「国際社会の」

「しかし誰も知っておるじゃろ。イスラエルが核兵器を持っておることは」

「けれど持っていないことになってますから」

小田切君は建前を言う。

「一応は」

「わしはそういうことはあまり好みではないのじゃがな。わしも核兵器は持っておるぞ」

「それ使いますよね」

「持っているのは何故か。使う為にあるのじゃ」

実に博士らしい返答であった。

「違うか？それで」

「そういう考えなんですな」

「左様、じゃから使った」

それだけというのである。

「この前のう」

「また隣の半島の北の方ですか」

「別によいじゃろ」

核兵器を使っても平然としている博士であった。

「あそこなら」

「というかあの国が本当に嫌いなんですな」

「醜いからじゃ」

だからだというのである。

「特に国家元首がじゃ」

「あの將軍様ですか」

「だからやってやるのじゃよ。怪獣を暴れさせることも核実験もじや」

「それが理由ですか」

「嫌いな相手には容赦せん。それがわしじや」
あくまでこつした考えの博士であった。そこには常識も理屈も存
在しない。

第三百十六話 完

2010・9・8

第三百十七話

第三百十七話 辿り着いた場所

先生達が来たのは。京都上空だった。

そこにだ。本当に瞬く間に来たのである。

「えっ、もう京都!？」

「ちよつと行っただけなのに」

「ねえ」

「神戸からもう京都って」

華奈子達六人はこのことにはかなり啞然となっていた。

「私達の筈ってそんなに速かったかしら」

「全然。一日かかるわよ」

「それが三十分って」

「どういうこと？」

「はい、それはです」

「先生達の魔法の力で速くなったのですよ」

先生達にはこりと笑って速く到着したその理由を話した。

「移動速度を速める魔法を使いましたので」

「それでなのです」

「うっん、凄いですね」

「確かに」

皆先生達のその話を聞いて啞然となっている。

「それだけでもうなんて」

「先生達の魔法って」

「はい、それではです」

「その京都の上です」

先生達はそこに付いてもだ。顔はにこにこしたままである。そうしてそのえうでだ。筈に乗りながら二人顔を見合わせて話すのであった。

「じゃあね、今日子ちゃん」

「うん、香ちゃん」

お互いの名前を言い合ってからであった。

「あの魔法を使いましょう」

「ええ、あの魔法ならね」

「すぐに終わるから」

「ええ。この場合一番いいわよね」

こう話をして。それぞれが手に持っているステッキを上にかざした。

「生首も身体もね」

「一気に消してしましましょう」

先生達の話の話を聞いた六人はだ。それぞれ首を捻って言う。

「それじゃあ私達は」

「何をするのかしら」

「そうよね。ここまで来て」

「楽器はあるけれど」

それはなのだった。

「ええと、これを使って？」

「何をすればいいのかしら」

「一体全体」

しかしだった。ここで先生達はその六人に言うのだった。

「それではです」

「演奏を御願いますね」

「演奏なんですか」

「わかりました」

「じゃあ」

先生達その言葉に従ってだ。六人はそれぞれ楽器を手に取った。箒の上だがそれでもだった。

第三百十七話

完

2
0
1
0
・
9
・
1
5

第三百十八話

第三百十八話 空での演奏

「ええと？」

「どうしよう」

赤音が困った顔になっていた。春奈もだ。

「ドラムなんてお空じゃ使えないんじゃない？」

「キーボードも」

「そうよね」

「言われてみればね」

ギター、梨花とベースも美樹もこのことに気付いて言う。

「ドラムをお空に浮かせるしか」

「それしかないけれど」

「けれどそんなの。私達の魔法じゃ」

「できないし」

「ううん、ここは」

「浮遊の魔法を使う？」

華奈子と美奈子が考える顔で述べた。

「やっぱりここは」

「そうする？」

「けれどドラムもキーボードも重いわよ」

「一人の魔法じゃちょっと無理よ」

双子の言葉に梨花と美樹が言う。

「だから。それは」

「難しいけれど」

「ううん、ちょっと無理みたい」

「こっちも」

赤音と春奈が実際にそれぞれ浮遊の魔法を使う。しかしであった。ドラムもキーボードも少しずつ下に落ちようとしていたのである。

それを見てだ。ふと美奈子が言った。

「これは全員の魔法使っつかないかしら」

「あっ、そうすればいいんじゃないの？」

華奈子が双子の姉妹のその言葉に頷いた。

「それだったら安全に浮かぶじゃない」

「皆の力を合わせて」

「そういうことなの」

「考えてみればそれがあたし達じゃない」

華奈子は笑顔で梨花と美樹にも話した。

「だからそうしよう」

「うん、じゃあ」

「それで御願いできるかしら」

赤音と春奈は華奈子の提案にすぐに頷いた。これで決まりだった。

六人でそれぞれ浮遊の魔法を使うとだ。それだった。

ドラムとキーボードが宙に浮かんでそれで演奏できるようになっ
た。

「じゃあね」

「はじめましょう」

二人のヴォーカルがそれぞれ言う。そしてだった。

六人で演奏をはじめた。二人も歌いはじめる。

「サククスもやるからね、美奈子」

「こっちもフルートを吹くわ、華奈子」

双子は箒の上でウイंकウシ合っただった。

そしてだ。先生達もだ。

「じゃあ」

「ええ」

呼吸を合わせて。そうして魔法を使い始めるのだった。

2
0
1
0
·
9
·
1
5

第三百十九話

第三百十九話 博士の研究の続き

先生達が仕掛けようとしている時だ。博士は。

また研究室に入っただ。何かをしていた。

「何してるんだらうね」

「さあ。また生首増やすんじゃないのか？」

ライゾウがタロに答える。

「それじゃないのか？」

「そうかな、それかな」

「そう思うんだけどな」

「どうだらうね」

その彼等に小田切君が言ってきた。

「気まぐれな人だから別のことするかもね」

「別のことっていったら」

「具体的に何なんだらうね」

「さあ。何するかわからない人だしね」

とにかくありとあらゆる意味で危険な博士である。

そしてだ。その博士が研究室から出て来たのであった。そしてそ

のうえで最初に言った言葉はこうしたものであったのだった。

「よし、できたぞ」

「できたんですか」

「うむ、新しい発明じゃ」

こう言うのであった。

「今度はガムじゃ」

「ガム、ですか」

「わしはガムが好きでのもう」

まずは自分の好みから話す。

「それで作ったのじゃ」

「何か普通ですね」

「噛むと眠気が取れるガムじゃ
やはり普通である。」

「コーヒー味のな」

「あつ、それいいですね」

コーヒー味のガムと聞いてだ。小田切君は思わず声をあげてしま
った。

「コーヒー味のガムって」

「むっ、そうしたガムは好きか」

「ええ、大好きなんですよ」

笑顔で言う。

「それじゃあよかったですけれど」

「食べたいのか」

「ええ、駄目ですか？」

「いや、いいぞ」

こう返す博士だった。

「むしろ是非食べてくれ」

「はい、それでどれですか？」

「これじゃ」

こう言って一枚のガムを出してきたのだった。

外見は何の変哲もないガムだ。色はミルクコーヒーの色をしてい
る。あのコーヒーガムをそのまま再現した。実にいい色である。

小田切君はそれを手に取ってだ。口の中に入れた。

「どんな味かな」

期待していた。その期待はどうなるかはまだ誰も知らなかった。

2
0
1
0
·
9
·
2
3

第三百二十話

第三百二十話 ガムの効果

小田切君は博士が作り上げたそのコーヒー味のガムを口の中に入れてみた。まずその味を確かめてみる。すると、であった。

「あつ、この味は」

「いいのじゃな」

「はい、美味しいです」

こう答えるのだった。

「あのコーヒーガムの味ですね」

「最近なくなつたのが寂しいのう」

「ええ、ですから食べたかつたんですよ」

「味は消えぬぞ」

ここで博士は言ってきた。

「思う存分楽しむといい」

「そうなんですか。幾ら噛んでも味は消えないんですか」

「うむ」

また言う博士であった。

「それがわしのガムじゃよ」

「成程、凄いですね」

「しかも一枚噛めばじゃ。歯垢や口臭も取ってくれる」

「ガムって軍隊じゃ歯磨きの代わりに使いますしね」

これは本当のことである。アメリカ軍ではそれを考慮してそのうえでレーションにガムを入れていたりしているのである。そうしたことも期待できるのがガムなのだ。

「それでなんですね」

「左様、それで眠気はじゃ」

「はい、取れました」24

こう答える小田切君だった。

「このガムかなり効きますね」

「これで居眠りなんぞしなくなるぞ」

「はい、確かに」

「何しろじゃ」

小田切君は常識の範囲内で応えていた。しかし相手はあの天本博士である。常識なぞ最初からない。そうした人物であるからだ。

こう言うのであった。

「一枚で一週間寝なくて済むからのう」

「えっ、一週間ですか」

「そうじゃ。凄いガムじゃろ」

「あの、それって」

一週間と聞いてだ。小田切君は戸惑いながら言葉を返した。

「その間ずっとですか」

「寝られんぞ」

「じゃあ僕もやつぱり」

「まあ一週間。時間はたっぷりあるからのう」

「かえって迷惑なんですから」

そこまで寝られないと聞くとだ。とりあえず普通の人間である小田切君は戸惑った。しかし普通の人間でない博士はというのだ。

「一週間ではなく最低でも一ヶ月は効くのがいいのう」

「いえ、それはいいですから」

「それは嫌か」

「一週間だけでも考えものなのに」

実際にここから一週間全く寝られなかった小田切君だった。その間仕方なくである。ネトゲにはまって中毒になりかけたのであった。

2
0
1
0
·
9
·
2
2

第三百二十一話

第三百二十一話 星が降ると

六人が奏でる音楽を聴きながら星を降らせる先生達。その星達は

「うわ……」

「何かね」

「これって」

「凄い……」

六人がその無数の星の瞬きを見て言う。

「これが先生達の魔法」

「私達と全然違うわよね」

「違うってどうか」

「ここまで来たら」

全員ほぼ絶句している。そのあまりもの凄さにだ。

「別物？」

「魔法っていうよりかこれって」

「そうよね、もう魔術ってどうか」

「ファンタジーってどうか」

「魔術と魔法は同じですよ」

ここで今田先生が六人に言ってきた。

「どちらも同じですよ」

「それはわかってますけれど」

「けれど」

「何か先生達のって」

「私達とは違い過ぎて」

「ですから」

だからだというのである。六人の驚きはそのまま先生達への尊敬になっていた。とにかくそこまで素晴らしい魔法だったからである。

それでだ。華奈子がふと言った。

「あたしも将来こんな魔法使えるかな」

「はい、使えますよ」

今田先生はにこりと笑ってその華奈子に答えた。

「安心して下さい」

「そうなんですか？ できるようになります？」

「毎日少しずつ努力して」

「そこから話す先生だった。」

「そうしていけばです。やがては」

「うっ、時間はかかるんですね」

「そうですね。何しろです」

そしてだ。先生はさらに言った。

「魔法は一日にしてならずです」

「それですか」

「はい、そういうことです」

「ううん、わかりました」

それを聞いて急に元気がなくなる華奈子だった。しかしそれでもだ。すぐに気を取り直してそのうえでこうも言ったのであった。やはり立ち直りが早い。

「けれどね」

「けれど？」

「やろうと思ったらやらないとね」

笑顔で美奈子に答えるのだった。

「あたしお勉強以外は皆できるしね」

「華奈子の場合お勉強も真面目にやったらできるわよ」

何気にこんなことも突っ込む美奈子だった。実は華奈子は頭はそれ程悪くないのである。

2
0
1
0
·
9
·
2
8

第三百二十二話

第三百二十二

話 華奈子の頭

その華奈子の成績である。美奈子は言うのだった。

「華奈子ってね」

「うん」

「いつも一夜漬けとかヤマカンよね」

「それが駄目なの？」

「それじゃあ本当の成績にはならないわよ」

そうだということである。こうしたことへの指摘は双子ならではの。他の誰が言うよりも説得力のあるものであった。それもかなりだ。

「一夜漬けっていつても」

「うん」

「二時間かそれだけやって終わりじゃない」

「ううん、あたし勉強嫌いだし」

「それだけでもいつも六十点は取ってるんだから」

極端に頭が悪いかというところまではいかないのだった。

「だから。真面目にやったら」

「成績よくなるって言うのね」

「なるわよ。むしろね」

「むしろ？」

「真面目にやったらよ」

この前提を強調して話す美奈子だった。

「私より成績上になるわよ」

「まさか、そんな」

華奈子はそれは否定しようとした。美奈子の成績は魔女達の間だけでなく学年でも女の子ではトップの春奈の次に来るのだ。音楽と

勉強の優等生なのだ。

「それはないわよ」

「あるわよ。私だってね」

「美奈子も？」

「一生懸命やったら。多分」

「そうね。運動音痴なおるわね」

華奈子は頬を赤らめさせて恥ずかしそうになった双子のかわりに話した。

「筋はよくなってるから」

「けれど。何か」

「運動好きじゃないのよね」

「ええ」

そうだと。赤くなった顔でこくりと頷いて答えた。

「そういうことを考えたら」

「あたし達って一緒なのね」

「そういうことだから」

「成程ね」

ここでわかった華奈子だった。

「つまり努力が大事ってことなのね」

「そうね。しかもそれって」

「あたしも美奈子も」

二人共だというのだった。

「同じってことよね」

「そうなるわね」

「ううん、けれど」

しかしであった。ここでまた難しい顔になる華奈子だった。そしてそのうえでこう言うのだった。

「あたしやっぱりお勉強はね」

これが華奈子の結論だった。どうしても勉強は駄目なのだった。

第三百二十一話

完

2010・9・28

第三百二十三話

第三百二十三話　その星によ

って

先生達の星が降るとだ。それで。

生首も身体もだ。急にその動きを止めた。そうしてその場に崩れ落ちて動かなくなってしまうた。

「えっ、星で？」

「それが降って」

「それだけで」

六人はここでまた驚くことになった。

「今の魔法って」

「そういう効果がある魔法だったんですか」

「はい、今のはですね」

今田先生がその六人に対して話す。

「アンデット系の呪いやそういったものを解放する魔法なんですよ」

「つまりデイスペルですね」

今日先生も六人に話してきた。

「そのの大掛かりな魔法です」

「日本全土に向けて放つ魔法だったんですよ」

「そうだったというのである。」

「先生達は今それを使いました」

「星はそれだったんですよ」

「そうだったんですか」

六人はそのあまりにも強烈な魔法を目にしてまだ呆然となつてい
る。それでも先生達の魔法がどれだけ凄いかはわかるのだった。

そうしてだ。美奈子が先生達に尋ねた。

「あの」

「はい」

「何ですか？美奈子さん」

「そのディスプレイって魔法ですけれど」

美奈子はその魔法のことについて尋ねたのだった。

「どうやったら使えるんですか」

「そうよね。あたし達まだその魔法は習ってないし」

「ここで華奈子も言った。」

「それって一体」

「どうやって使うんですか？」

「はい、それはですね」

今田先生はいつもの優しい微笑で二人に話す。

「今度の授業で教えますね」

「今度の授業で、ですか」

「その時に」

「そうです。こうして」

今田先生がステッキを振るとまた星が出て来た。金色に輝くあの五つの角を持つ星達が出てた。そのうえできらきらと光るのだった。

「お星様を使えるようになりますよ」

「そのお星様がなんですね」

「ディスプレイなんですね」

「そうです。では次の授業で」

先生は話す。

「やりますね」

「はい」

「御願います」

二人だけでなく他の四人も言うのだった。こうして生首と身体の話は終わった。終わってみればだ。それは一瞬の話であった。

2
0
1
0
·
1
0
·
6

第三百二十四話

第三百二十四話 やられた博士は

「博士」

「どうしたんじゃ?」

「生首も身体も全部止まっちゃいました」

小田切君がモニターを見ながら安楽椅子でくつろいでいる博士に話した。

「あの先生達の星の魔法で」

「ああ、デイスペルの魔法じゃな」

「何ですか、それ」

「ああした命がなくとも動けるものを元の死体に戻す魔法じゃ」

そうした魔法だというのである。

「あの先生達はそれを使ったのじゃな」

「そうだったんですか」

「それも日本全土に行き渡る魔法をな」

「それって凄いですけれど」

小田切君は先生達の魔法の凄さに唖然となった。

「日本全土につて」

「そうか? わしでもできるぞ」

平然と言う博士であった。

「何なら日本全土の墓場から屍をのう」

「今殆ど火葬でもですか?」

「僅かじゃがまだ土葬のところもあるぞ」

博士はこう小田切君に返す。

「田舎の方にじゃがな」

「そうだったんですか」

「それでやってみるがどうじゃ? 大騒ぎになるぞ」

「それは止めて下さい。洒落になりませんから」

「洒落にならんのがいいのじゃよ」

「こつ言つところかやはり博士であつた。とにかく世間が大騒ぎになるようなことが好きで好きで仕方ないのである。実に困つたことに。」

「そうではないのか？」

「全然です。とにかくですな」

「うむ。この話はこれで終わりじゃな」

「あれっ、諦めるんですか」

小田切君にとっては予想外の展開だつた。いつもはここでさらにとんでもないことを考え実行に移すのが博士の常であるからだ。しかし今回は違つていた。

「これで」

「また新しいことを考えついたからのう」
「だからであつた。」

「さて、それではじゃ」

「今度はそれなんですな」

「やってみるぞ。まあ楽しみにしておくことじゃ」

博士は笑いながら小田切君に話してきた。

「今度は何をするのかをな」

「また無茶苦茶をやるんですな」

「天才には常識なぞ何の意味もないことじゃ」

残念だが文字が違つていた。小田切君は博士の話を聞いてすぐに思つた。

「さて、それではまずは紅茶を飲むか」

「はい、ケーキもありますよ」

「ロイヤルミルクティーにしようぞ」

「こつ言つてまずは優雅にその紅茶と苺のケーキを楽しむ博士であつた。博士もまずは一時の休息の時を迎えるのだつた。次に騒ぎを起す前に。」

第三百二十四話

完

2010・10・6

第三百二十五話

第三百二十五話 騒動を終わらせて

生首も身体も眠った。それを見てだった。

今田先生と今日子先生はこう言い合うのだった。

「じゃあこれでね」

「帰りましょう」

「あれっ、もうなんだ」

「早いわね」

これには華奈子と美奈子も驚きだった。

「お空飛んですぐよね」

「ええ、三十分も経ってないわ」

「それで終わりって」

華奈子はついつい首を捻ってしまった。そうしてであった。こう言うのだった。

「何か早いけれど」

「けれど終わったら」

「塾に戻るしかないわよね」

「ええ、それしか」

「はい、塾に戻ります」

実際にこう言う今田先生だった。

「今日の授業はこれで終わりです」

「塾に戻ったらですか」

「それで」

「はい、終わりです」

やはりそうだというのだ。今田先生はとても穏やかな口調で話す。

「それで帰ったらですね」

「はい」

「何をするんですか？」

「お茶を飲みましょう」
またこれであった。考えれば考える程お茶の好きな先生である。
「お菓子もありますよ」
「確かお空に出る前もだったよね」
「そうよね」
また華奈子と美奈子が話をした。
「これって」
「ええ」
「いいですよ、それで」
今度は今日子先生の言葉だった。
「お茶を飲むのはとてもいいことですから」
「お茶は身体にいいですよ」
また今田先生が言う。
「だから皆さん」
「塾に戻りましょう」
「わかりました」
「それじゃあ」
皆も頷いてだった。そうしてだった。
塾に戻るのだった。その中でだ。
ふとだ。華奈子がまた美奈子に言った。
「今度のお菓子は何かしら」
「そうね。クレープじゃないかしら」
「そうなの。あたしあれ大好きなのよね」
「甘いものなら何でもでしょ」
双子の相方にすぐに突っ込みを入れる美奈子であった。何はともあれ彼女達の関心はここではもうお菓子に移っているのだった。

2
0
1
0
·
1
0
·
1
4

第三百二十六話

第三百二十六話 お茶は

梨花と美樹が最初に降り立つとだ。もう先生達が待っていた。

「では今から」

「お茶ですよ」

「えっ、もうですか」

「戻られてたんですか」

六人の中でしつかり者の梨花と美樹もこれには驚いた。

「私達が最初だと思ったのに」

「何時の間に」

「えっ、先生達って」

「もう戻られてたんですか」

今度は赤音と春奈だった。

「早いですね」

「一番後ろだと思ってたのに」

「瞬間移動を使いました」

「それです」

こう実に素っ気無くしかもにこにことして話す先生達だった。

「それでここまでです」

「一瞬で」

「瞬間移動って」

「そんな高等な魔法まで使えるなんて」

「やっぱり先生達って」

「凄いわよね」

四人はそんな先生達に啞然だった。そうしてである。

びっくりしているその時にだ。華奈子と美奈子が戻って来た。実は二人が一番最後なのは六人の間でじゃんけんをしてだ。戻る順番を決めたからだ。

それで最後に戻った二人もだ。先生達の姿を見てびっくりするのだった。

「もうつて」

「凄いわね」

「はい、それではです」

「お茶が入りましたよ」

先生達だけがあっけらかんとしているのは変わりがなかった。

「いいですね」

「飲みますよ」

「え、ええ」

「それじゃあ」

皆頷いてだった。庭に先生達の使い魔達が用意した白いテーブルと椅子に座つてであつた。

紅茶を飲む。お菓子は。

「やったね」

「よかつたわね、美奈子」

「ええ。クレープね」

見れば中にバナナとアイスクリームが入っていて溶けたチョコクリームをかけたクレープであつた。とても上品に作られているものだった。

「予想が当たつた以上にね」

「好きなものが出たからね」

「あたしもうこれで満足」

こう笑顔で言う美奈子だった。

「充分よ」

「クレープ食べたならそれでなの」

「そうなのよ。クレープ大好き」

華奈子が美奈子に言ったこの言葉がこの騒動の終わりだった。これで話は終わったのだった。

第三百二十六話

完

2010・10・14

第三百二十七話

第三百二十七話 掃除

博士がだ。また言い出した。

「さて、後片付けじゃな」

「部屋の掃除ならもうしましたよ」

小田切君は博士にすぐに答えた。

「トイレもお風呂も」

「そちらではない」

「あれっ、じゃあ何処を掃除するんですか？」

「街を掃除するのじゃ」

「そうだといいのであった。」

「これからのう」

「街をですか」

「うむ、街には汚物が溢れておる」

珍しくまともなことを言っているように聞こえないでもなかった。

「だからそれをじゃ」

「掃除するんですか」

「そういうことじゃ。それでじゃが」

「何か掃除機でも発明したんですか？」

「これじゃ」

こう言っ出てしてきたのはだ。ロボットだった。

銀色に輝き禍々しい牙と爪を生やしている。そうしてである。

八本の腕がある。その全てに爪があるのだ。全体的に仏教で言う

明王を思わせる外見である。見れば目つきはかなり悪い。

そのロボットを見てだ。小田切君はまず言った。

「これが掃除用ロボットですか」

「そうじゃ」

「あまりそうは見えませんか」

小田切君は実に素直だった。

「というかですね」

「何に見えるのじゃ？」

「殺人用に見えますね」

そうとしか見えないのであった。その爪と牙を見てだ。

「これっていつもの感じの」

「その通りじゃがな」

博士もここで言った。

「実はのう」

「またですか」

「街の汚物を掃除するのじゃ」

そういう意味の掃除であった。

「暴走族やヤクザや不良の類をだ」

「博士って本当にそういう人種が嫌いなんですね」

小田切君はあらためてそのことを認識した。

「何かと」

「うむ、嫌いじゃ」

博士もこのことを否定しない。そうしてだった。

「では。早速このロボット達をじゃ」

「街に解き放つんですね」

「さて、それではじゃ」

博士は言った。

「掃除のはじまりじゃ」

こうして掃除ははじまったのだった。博士にとっては掃除であり他の者には違うそれがだ。またしても幕を開けてしまったのである。

2
0
1
0
·
1
0
·
2
0

第三百二十八話

第三百二十八話 汚れる街

「う、うわあああああつ！！」

「ぎゃあああああつ！！」

街で断末魔が木霊する。あちこちでロボット達に虐殺される不良や暴走族やヤクザといった面々がだ。生きながら引き裂かれ食い干切られているのだ。

腕が飛び首がねじ切られる。そうした掃除が今街で行われているのだ。

博士も自ら街に出てだ。積極的に掃除を行っている。その車椅子であるテロ支援国家の関連組織のビルを車椅子から放つビームで攻撃しているのだ。

そのうえでだ。こう言うのだった。

「よいぞよいぞ」

「これが掃除なんですか」

小田切君はそのビルに車椅子に乗ったまま無差別攻撃を仕掛ける博士に横から尋ねた。

「これが」

「その通りじゃ」

「破壊活動じゃないんですか、これって」

小田切君は常識から尋ねた。

「どう見ても掃除じゃ」

「ゴミを掃除しておるのじゃぞ」

当然気に入らない人間がゴミだというのだ。

「その何処が掃除じゃないのじゃ」

「そう思ってるんですね」

「確信しておる」

実際にビルから出て来た人間もどんどん射殺していく。車椅子が

らマシンガンの銃撃まで行われているのだ。

「何処が掃除ではないのじゃ」

「何か博士らしいですね」

小田切君は博士の居直りにこう言うしかなかった。

「本当に」

「納得してくれたのう」

「そうじゃないと博士と一緒にいられませんから」

また言う小田切君だった。

「ですから」

「ふむ、左様か」

「左様ですね。それでなんですけれど」

「うむ、今度は何じゃ」

「とりあえずあのビルはどうするんですか？」

博士が今車椅子で攻撃しているそのテロ支援国家のビルのことである。

「やっぱりあれですか」

「破壊するぞ。跡形もなくな」

「そうなんですね。それじゃあ」

「当然中における連中も皆殺しじゃ」

博士は人を殺すことを何とも思っていない。嫌いな人間はどんどん殺していくか生体実験に使うのが常である。それが博士なのだ。

「テロ国家の連中なぞな」

「まあ普通にあのビルに武器が隠されてるって噂もありますしね」

「そういう姑息な奴や小悪党は好かん。だから殺すのじゃ」

「それでいつもそういう連中殺していたんですね」

「ここではじめてわかったことだった。

「だからなんですか」

「うむ、その通りじゃ」

こう話してであった。

博士は遂にビルを破壊したのだった。止めには何と総攻撃だった。

ミサイルも全て放つてだ。草一本残らないまでにしてしまった。

第三百二十八話 完

2010・10・20

第三百二十九話

第三百二十九話　あらたなお掃除ロボ

掃除という名の破壊と殺戮をまたしても行っている博士。だが博士の遊びはこれで終わりではなかった。博士にとっては破壊と殺戮は遊びなのだ。

こんなことをだ。小田切君に言うのだった。

「あの世紀末の漫画じゃが」

「北斗の　ですね」

「そうじゃ、あれじゃ」

伝説になっっている漫画である。名作と言ってもいい。

「あれの消毒じゃが」

「消毒って。あの漫画で」

「ほら、汚物がどうとかあったじゃろ」

「ああ、そういえば」

ここで小田切君もわかった。

「ありましたね、そういうの」

「あれはよいのう」

博士の言葉が感心するものになっていた。

「実にな」

「けれどあれを言っていたモヒカンって」

その漫画の特徴はモヒカンは悪党というものがある。もっと言えばモヒカンは雑魚である。主人公に惨殺される運命が待っている。登場すれば死ぬ者達だ。

「博士に消毒される口ですよ」

「まあわしもじゃ」

博士自身も言う。

「ああいう雑魚はじゃ」

「嫌いですよね」

「見てみると生体実験に使いたくなる」
やはりこう言うのだった。

「どうにもこうにもな」

「じゃあ何で話に出したんですか？」

「まあちよつとな」

「ちよつとつて」

「考えていることがあるのじゃ」

こんなことも言う博士だった。

「あの漫画からヒントを得てな」

「それでなんですか」

「ヒントは至るところに転がっておる」

やはり博士は天才である。ありとあらゆるものから発明等のヒントを得てしまうのだ。ただしそれが世間の役に立つことは絶対にな
い。

「だからじゃ」

「それで何をするんですか？」

「それはできた時にわかる」

今は言わないのであった。

「そういうことじゃ」

「まあ何となく予想はつきます」

博士の側にいるとわかることだった。

「それは」

「そうじゃろ」

「ええ、それじゃあそれが完成するまでですね」

「研究室に籠る」

実に素っ気無く述べる博士だった。

「それではな」

「ええ、留守番しておきますんで」

こうしてまた研究室に籠る博士だった。また騒動が起こるのだった。

第三百二十九話

完

2
0
1
0
・
1
0
・
2
8

第三百三十話

第三百三十話

焼き尽くす

博士が研究室に籠って一時間だった。

博士が出て来て言うのだった。

「できたぞ」

「えっ、もうですか」

「モーツァルトも作曲には時間をかけなかったぞ」

話はそこに至る。その音楽の天才にだ。

「わしも同じじゃ。ましてわしの頭脳はじゃ」

「知能指数二十万ですよね」

「そのわしにかかれば一時間も長くかかった位じゃ」

「プラモデル作る感じですね」

「あんなものだと一秒じゃな」

「どうやってそれだけで作れるんですか」

小田切君が突っ込むのはそこだった。

「一体全体」

「わしは天才じゃぞ。そんなことは容易い」

「まあだっいたらいいですけど」

「さて、それでじゃ」

博士の言葉があらたまった。

「それでできたのはじゃ」

「ええ、どんなのですか？」

「これじゃ」

研究室から何かが出て来た。それは機械のモヒカンだった。人間の姿をしているがあらゆる部分が銀色の機械でできている。そうしたモヒカンだった。

しかもその手には火炎放射器がある。そのうえで言うのだった。「汚物は消毒だーーーーーっ！ー！」

「あの、博士」

小田切君はそのモヒカンを見ながら博士に話す。

「これって」

「よくできてるじゃろ」

「そのまんまなんですね」

「今回は忠実に再現してみた」

博士は小田切君の問いに誇らしげに答える。

「凄いいじゃろ」

「凄いですけれどやっぱりこれで」

「うむ、街の掃除をする」

「今度も平然として言う。」

「何もかもを燃やし尽くすのじゃ」

「人も建物もですね」

「この火炎放射器からはじゃ」

「どうなるかというのである。」

「一兆度の炎が出るのじゃ」

「何処かの怪獣みたいですね」

「ついでに言えば柳田とか理科とかいう奴の理屈はわしには通用せん」

「それはよくわかります」

「さて、その炎でじゃ」

「その一兆度の炎でだというのだ。」

「気に入らん連中も建物も焼き尽くすぞ」

「そういう意味での掃除なんですね」

「掃除とはそういうものじゃ」

博士の中ではそうであった。

かくしてそのモヒカンがよりによって大量生産されてであった。ヤクザも不良もチーマも暴走族もその事務所やバイクもであった。ことごとく焼き尽くされることになった。

第三百三十話

完

2
0
1
0
・
1
0
・
2
8

第三百三十一話

第三百三十一話　今は放置

博士がまたしても暴れている。しかし先生達はだ。

今回は動かないのだった。落ち着いてお茶を飲んでいる。そしてそれぞれ言うのであった。

「今回は何もしなくていいのね」

「ええ、他の人がやることになったの」

今田先生が今日子先生に話す。

「だから私達はね」

「こうして紅茶を楽しんでいればいいのね」

「そうなの」

上等のドイツの陶器に入れたイギリスの紅茶を飲みながらの言葉だ。

「そういうことなの」

「それで誰がやることになったの？」

「太閤様らしいわ」

超時空天下人ヒデオシのことだ。時空を超えて戦い続ける偉大な英傑である。一応戦国時代に生まれたがそこに留まらないのである。

「あの方がね」

「あら、太閤様がなの」

「だから安心していいわ」

笑顔で言う今田先生だった。

「今度はね」

「そうね。それじゃあ」

「それで今日子ちゃん」

今田先生は従姉妹に問うてきた。

「このイギリスの紅茶だけれど」

「私は日本の方がいいわね」

「やっぱりそう思うの?」
「陶器も。やっぱり日本のがいいわね」
「そうね。日本の陶器で日本の紅茶を飲むのがね」
「一番いいわね」
「確かにね。これも悪くないけれどね」
「それでもだといっているのである。」
「日本のものってね。普通にいいのよね」
「イギリスやドイツよりも。私達にはね」
「合うわね」
「日本人だから」
「それが理由だった。」
「それでね」
「そうね。日本はね」
「日本人が一番合うわよね」
「お菓子も」
何処からお茶菓子が出来来た。チョコレートクッキーである。
それはフランスのものだった。しかしだった。今日子先生はそれを食べてまた言うのだった。
「美味しいけれどね」
「日本のが一番よね」
「本当にね」
「どうしてもね」
こうした話をしながらだった。二人でお茶を楽しむ。そして。
「太閤様って幾つだったかしら」
「確か六十二歳のままよ」
そう話してだった。先生達は極めてのどかな一日を過ごしていた。
今は博士の引き起こす騒動は忘れていた。気にすることもなかった。

2
0
1
0
·
1
1
·
5

第三百三十二話

第三百三十二話 美奈子の努力

美奈子はフルートを得意としている。それでだ。

この日も家に帰るとすぐにフルートの練習をはじめた。そこでだ。タミーノとフィガロは主である彼女に対して言ってきたのだった。

「美奈子様、思いますに」

「ここはです」

「何かあるのかしら」

美奈子はフルートを止めて二匹に問い返した。

「フルートのことね」

「はい」

「その通りです」

まさにそれだというのである。

「ここはもう少しです」

「穏やかにされるべきかと」

「穏やかに、なのね」

「近頃の美奈子様音楽は少しです」

「速くなっています」

彼等は美奈子のフルートをじっくりと聴いていた。そのうえでの言葉だけに確かな説得力があった。そして美奈子はどうかということだ。

落ち着いた顔で二匹の言葉を聞いてだ。こつ言つのであった。

「わかったわ」

「それではですね」

「すぐに」

「訂正するわ。穏やかにね」

「はい、そうです」

「穏やかにです」

「少しでいいわね」

美奈子はその穏やかな度合いについても尋ねた。

「具体的には」

「心もち穏やかにです」

「その位です」

「心もちね。わかったわ」

また頷く美奈子だった。そしてである。

彼女はまた吹いてみた。意識して少しだけ穏やかに吹いてみた。

一曲終わってからそのうえでだった。タミーノとフィガロに対して尋ねた。

「これでどうかしら」

「かなりよくなっています」

「しかしです」

聴いてからまた言う彼等だった。

「僅かですがまだ速いです」

「完璧ではありません」

「完璧を目指し過ぎたら機械になってしまうけれど」

それは避けたい美奈子だった。彼女は人間の音楽を考えているのだ。決して機械の音楽を目指しているのではない。問題はそこだった。

「それでもここはね」

「穏やかをですわね」

「目指されますか」

「ええ、そうするわ」

こう言ってだった。また吹く美奈子だった。

しかしまた速いと言われた。それならばとまた吹きそれを繰り返していく。彼女はこうして日々自分の音楽を磨いているのである。

2
0
1
0
·
1
1
·
5

第三百三十三話

第三百三十三話 フルートの力

美奈子はフルートを吹き続けている。そこでだ。

ふとした感じでタミーノとフィガロに話すのだった。

「そういえばね」

「はい」

「何かありますか」

「私はこうしてフルート吹いてるじゃない」

そのこと自体を言う美奈子だった。

「ただ。私だけじゃないからね」

「華奈子様ですね」

「あの方のサククスもありますね」

「そう、それね」

それだった。華奈子のそのサククスである。

「そのサククスだけねどね」

「フルートとの協和ですか」

「それを考えるべきなのです」

「そう、それだけねど」

まさにそれだった。美奈子はフルートを吹きながらそのうえで華奈子のサククスのことを考えていた。それで彼女は言うのであった。

「私の今の吹き方はどうかしら」

「そうですね。確かに素晴らしいです」

「しかしです」

ここでも二匹はしっかりと指摘する。相手が主であってもだ。指摘するところはしっかりと指摘するのだった。それが彼等であった。

「それでも華奈子様のサククスとの協和となりますと」

「中々難しいかと」

「それはできていないのね」

美奈子はこのことを理解して真剣な顔になった。

「そうなのね」

「はい、それも考えていきましよう」

「そして吹かれるべきです」

「わかったわ。それじゃあね」

こうしてだった。美奈子は実際に吹き方を変えてみた。頭の中に華奈子のサクスを置いてだ。そうして吹いてみた。するとだった。

二匹は今のフルートを聴いてから言った。

「いい感じになりました」

「もう少し練習されるとです」

「よくなるわね」

「はい、とにかくフルートだけではないので」

「サクスもありますから」

「一人じゃない」

美奈子はここでも真剣な顔だった。

「そういうことね」

「もっと言えば他の方々も楽器もありますから」

「華奈子様だけではないです」

「ええ、わかってきたわ」

こう言っただけであった。さらに吹き続けるのだった。

「じゃあ今日は晩御飯まで練習ね」

「わかりました」

「御供します」

二匹もその彼女に応える。美奈子は一途に努力を続けるのだった。

第三百三十四話

第三百三十四話 フルートとサク

クス

自分の練習をした次の日にだ。美奈子は華奈子に対して提案した。

「ねえ」

「何かあったの？」

「今日あんた暇よね」

まずはこのことから尋ねた。

「そうよね、確か」

「一応はね」

その通りだと返す華奈子だった。

「それで何かするのね」

「練習しない？サクスの」

「あっ、それであんたはフルートで」

華奈子もここでわかったのだった。

「二人で練習しようってことね」

「どうかしら、それは」

「そうね。いいわね」

華奈子は楽しげな笑みを浮かべて美奈子の提案に頷いた。彼女にしても美奈子のその提案はいいものだったのである。その理由も話す彼女だった。

「実はあたしもね」

「華奈子も？」

「そうなの、あたしだけでサクスの練習してもね」

それだけではというのだ。

「どうもね。今一つね」

「足りないって思ったのね」

「あたしがサククスで美奈子がフルートじゃない」

「ええ」

「じゃあ二人一緒じゃないと駄目でしょ」

まさに美奈子と同じ主張だった。

「そうでしょ。だからね」

「渡りに舟だったのね」

「そういうことよ」

今度はにこりと笑って答える華奈子だった。

「そういうことだからね」

「それじゃあね」

「ええ、練習しよう」

華奈子は今はつきりと言った。

「二人でね」

「それじゃあお家に帰ったらすぐにね」

「そうしましょう」

こうしてだった。家で二人で練習したのだった。

その結果だ。二人はわかったのだった。

「やっぱり一人で練習してもね」

「そうね」

「限度があるわね」

わかったのはこのことだった。

「やっぱり二人でやらないとね」

「中々わからないわね」

「ええ、本当にね」

二人で話す。

「じゃあこれから時間もきたらね」

「一緒に練習しようね」

こう二人で約束するのだった。美奈子も華奈子もお互いに学ぶことの多い練習だった。やはり一人より二人なのが彼女達だった。

第三百二十四話

完

2
0
1
0
・
1
1
・
7

第三百三十五話

第三百三十五話 サックスのリズム

華奈子は華奈子で毎日サックスと魔法の勉強を続けていた。毎日どちらもかなりの時間をかけて必死に勉強を続けているのだった。

そんな彼女を見てだ。タロとライゾウが言う。

「学校の勉強もここまで熱心なら」

「いいんだけれどな」

「こらっ、言うのはそこなのっ」

その彼等にだ。華奈子はむっとした顔で言うのだった。

「何でそこなのよ」

「いや、御主人学校の勉強はぱっとしないから」

「最近悪いつてところまではいかないけれどさ」

「学校の勉強はある程度でいいのよ」

これが華奈子の主張だった。

「それはね。ある程度でね」

「いいんだ」

「そっちは」

「そうよ。一夜漬けでどうとでもなるし」

実際にそうしている華奈子だった。この辺りは美奈子と違っていた。

「けれど魔法とかサックスはそうはいかないじゃない」

「継続は力なり」

「そういうことなんだ」

「そういうこと。わかったわね」

胸を張ってまで言うのだった。

「だからどっちも毎日やってるのよ」

「そつえば御主人、そのサックスだけけれど」

「最近リズムがおかしくないかい？」

「こう華奈子に話す彼等だった。」

「少しだけだけれどテンポが遅いよ」

「そこ、気をつけないとな」

「うっ、そうなの」

言われてはじめて気付く彼女だった。実際に言われないとわからないこともある。彼女にとっては今がまさにそれだったのである。

「それでだ。あらためて考える顔になり二匹に話す。」

「じゃあもつと練習しないとね」

「いや、一人でやっても」

「限界があるだろ」

今度はこう言う二匹だった。

「だからここはだよ」

「他のクラウンのメンバーと一緒に練習したらどうだい？」

「一緒にね」

それを聞いてだ。華奈子も考える顔になった。

そして暫く考えてからだ。こう言うのであった。

「それじゃあね」

「うん、それじゃあ」

「誰と練習するんだよ」

「誰としようかしら」

実はそこまでは考えていない彼女だった。

「一体全体」

「まずはそこからだね」

「誰にするかだよな」

タロとライゾウも言う。この問題もあるのだった。

2
0
1
0
·
1
1
·
1
1
7

第三百三十六話

第三百三十六話 決めた相手は

華奈子はだ。タロ、それにライゾウと共に考えていた。そうして言うのであった。

「美樹や梨花は違うわよね」

「二人共ギターにベースじゃない」

「ちよつと違うんじゃないか？」

「そうよね。かといつてもよ」

今度は華奈子が話した。

「赤音や春奈もねえ」

「ドラムにキーボード」

「やっぱり違うぜ」

「あたしのサククスと合うっていったら」

このことをじっくりと考える。するとだった。

答えが出た。というよりはこれしかなかった。

「あつ、いたわ」

「そうだよ。ここはさ」

「美奈子さんしかいないよな」

「そうよ、美奈子よ」

まさに彼女だとだ。華奈子も元気よく言う。

「サククスにフルート。それにヴォーカルだしね」

「しかも双子だし」

「一緒に練習するにはあの人しかいないだろ」

「よし、それじゃあね」

また言う華奈子だった。

「早速美奈子のところに行つてね」

「今日美奈子さんはフルートの練習は学校でしてるから」

「そこから帰つてからだよな」

「それでその間はね」

とりあえず華奈子は立ち止まることはしない。自分からどんどん動く。のんびりとかそうしたカラーではないのは間違いない。

それでだ。さらに言う華奈子だった。

「あたしの練習するから」

「テンポを自分でも確かめる」

「それだよな」

「そういうこと。それか歌の練習するから」

これも忘れてはいない。34

「むしろここは歌がいいかしらね」

「そうだね。今サックスの練習してもテンポを掴みにくいし」

「余計に変な癖つきかねないしな」

「じゃあ歌にするわ」

「うん、それじゃあそれでね」

「やるといいさ」

使い魔達がゴーサインを出す。これで決まった。

「歌、最近おろそかになってたかしら」

「いや、全然」

「ちゃんとやってたぞ」

「だったらいいけれどね」

それは自分でも少し不安なのだった。そしてだった。

歌の練習を試してみる。そっちは。

「その調子でやればいいよ」

「歌はさ」

それはいいというのだった。タロとライゾウも華奈子に真面目にアドバイスするのであった。

2
0
1
0
·
1
1
·
1
1
7

第三百三十七話

第三百三十七話 水を使ってみて

春奈はこの日は家で家事を手伝っていた。食器を洗っているのだ。そこにはイーとリヤンもいる。彼等も主の食器洗いを手伝っている。その時に彼等が言ってきたのだ。

「御主人様」

「宜しいでしょうか」

「何？」

春奈もおつとりとした調子で彼等に応えた。

「何かあったの？」

「はい、ここでなんですけれど」

「お水使ってますよね」

「ええ」

まずは彼等の言葉に頷いた。

「そうだけれど」

「ついからですから」

「魔法の勉強もませんか？」

「魔法の？」

「そうですね。丁度いい時ですし」

「どうでしょうか」

「そうですね」

イーとリヤンのその申し出にだ。春奈も納得した顔になった。そうしてそのうえで、であった。

早速水を動かしてみた。それからだった。

「まずはこうしてね」

「はい、スポンジも幾つか出して」

「それは魔法で操って」

「お水もスポンジも動かして何人かいるみたいに洗っていけばいい

わよね」

「そうですね。それなら魔法の勉強になりますから」

「何時でも勉強はできますよね」

「こう言う辺り彼等もやはり春奈の使い魔であった。とにかく勉強熱心な春奈である。」

「そしてだ。その春奈がこうも言うのであった。」

「ただ」

「ただ？」

「何かありますか？」

「これだけじゃ物足りないような」

「首を傾げさせながらの言葉だった。」

「そう思うけれど」

「そうでしょうか」

「充分ではないでしょうか」

「ううん、やっぱり何か足りないわね」

「まだ言う彼女だった。」

「だからここはね」

「どうされるのですか」

「それで」

「音楽かしら」

「また首を傾げさせる。」

「ここは」

「音楽といいますと」

「つまりは」

「あれですか」

「どうかしら。あれ」

「今度はこう言う春奈だった。」

「考えてみたけれど」

「ううむ、どうでしょうか」

「それは考えつきませんでしたので」

イーとリヤンはそれぞれ難しい顔になって述べる。春奈が言う音
楽とは何なのか、使い魔達はわかったうえで戸惑うのであった。

第三百二十七話 完

2010・11・23

第三百三十八話

第三百三十八話 キーボード

春奈はだ。一先手を洗いそれで泡を落とした。

そしてすぐにだった。自分が演奏で使っているキーボードを出してきたのだった。そのうえでイーとリヤンに対して話すのであった。

「それじゃあ演奏でね」

「お水とスポンジ達を操ってですか」

「そうして洗われるというのですね」

「ええ、そうしてみるわ」

こう答える春奈だった。

「じゃあ早速」

「ここまでは思いつきませんでしたよ」

「本当に」

使い魔達も春奈に対して唸りながら述べた。

「どうやら御主人様は」

「閃きも身に着けられましたね」

「そうなの？」

しかしそう言われてだ。本人はかえって驚いてしまったのだった。

「私、閃いたのかしら」

「はい、だからです」

「そうしたことが考え付いたのです」

これが使い魔達の言葉である。

「閃きは突如として舞い降りるもの」

「そしてそれを身に着けられれば」

「ええと、確か」

春奈はキーボードを動かしながら言う。音楽と共に水とスポンジ達が動きだ。食器達が次から次にと奇麗に洗われていいている。その中の言葉だった。

「天才とは」

「九十九パーセントの努力と」

「一パーセントの閃きですね」

エジソンの言葉だ。使い魔達もこの偉大な発明家のことは知っているのだった。

「御主人様はその閃きを手に入れられました」

「つまりは」

「けれど。閃きは誰にでもあるわ」

だが、だった。ここでこう言った春奈だった。

「一パーセントはね。だから私は別に」

「天才ではないと」

「そう仰いますか」

「私は私だから」

にこりと笑って彼等に話した。

「だからね」

「左様ですか。それでは」

「これもですね」

「ええ、別にどうとも思わないわ」

そうだと。使い魔達に述べる。

「それよりも」

「それよりも」

「といたしますと」

「もうちよつと勉強しないとね」

彼女が気にかけているのはこのことだだった。勉強、即ち努力のことだだった。

「駄目よね」

「そうですね。それではです」

「私達も協力させて下さい」

「ええ、御願いね」

最後は優しい笑顔で応える春奈だった。彼女はまず努力ありきな

のであった。

第三百三十八話

完

2
0
1
0
・
1
1
・
2
3

第三百三十九話

第三百三十九話 赤音の勉強

赤音は今は自分の部屋の中で勉強していた。その彼女に対して使
い魔であるジップとハリが傍に来て声をかけてきたのであった。

「そうそう、頑張ってるね」

「学校の勉強もね」

「うん、けれどね」

「ここでもこう言う赤音だった。困ったような顔でだ。」

「ちよつとねえ」

「ちよつとって?」

「何かあるの?」

「私この科目苦手なのよ」

「こう彼等に話すのだった。」

「理科はね」

「まあそれでもね」

「苦手科目もしつかりしないと」

「使い魔達は正論を述べた。まさにその通りだった。教科書通りで
すらある。」

「だから。今のその理科もね」

「しつかりとね」

「誰かとくいな娘いなかったかしら」

「今度はこんなことを言う赤音だった。」

「本当に誰か」

「いたっけ」

「理科ね」

「だが使い魔達は今一つはつきりしない言葉で答えたのだった。」

「どの教科もそれぞれ得意な人はいたけれど」

「理科は」

それはどうかというのだった。

「ちよつと。ねえ」

「いなかつたみたいな」

ここでこのことに気付いたのだった。そうしてだった。

勉強を続ける赤音にだ。こう話した。

「まあそれでもね」

「自分でしないとね」

「そうそう、大切なのは努力だからね」

「結局はそうなるのね」

それを聞いてだった。赤音も頷く。そうしてだった。

「それじゃあね」

「うん、じゃあね」

「自分でしよう、ここはね」

「勉強つて結局あれなのね」

赤音はその理科の教科書を読みながら言うのだった。

「自分で勉強しないと駄目なのね」

「だって。やる気が出てそれでやるものだから」

「その辺りはね」

そしてであった。ジップとハリーはこう彼女に話したのだった。

「魔法と同じだよ」

「本人のやる気が第一なのね」

「そういうことなのね、魔法となのね」

「そういうこと」

「だから苦手で頑張ろう」

こうしてだった。赤音はその理科を勉強し続ける。おっちょこち
よいでもそれでもやることはやる彼女だった。

2
0
1
0
·
1
1
·
2
9

第三百四十話

第三百四十話 暗くなったら

勉強を続ける赤音。するとだった。気付けばもう暗くなっていた。

「夕方？違うわね」

「うん、そうだね」

「夜になったよ」

ジップとハリーも周囲を見回して彼女に述べる。

「もうね」

「早いよね、何か」

「それじゃあ」

そしてだった。ここであった。赤音は立ち上がるうとしたのだった。

「暗くなつたしね」

「あつ、待って」

「灯りよりもね」

使い魔達がその彼女に言うのだった。

「もっといいのがあるよ」

「灯りよりもね」

「灯りよりも？」

それを言われてだった。首を傾げさせる彼女だった。

「何、それって」

「だから。御主人の魔法じゃない」

「それだよ」

二匹はそれだというのだった。

「光の魔法ね」

「それ使えばいいじゃない」

「あつ、そうね」

言われてだった。自分もそれに気付く赤音だった。

「それじゃあね」

「そういうこと。じゃあね」

「魔法を使つてね」

「わかつたわ。じゃあ」

赤音は笑顔で応えてだった。すぐにだ。

ステッキを出してそれを軽く一閃させた。それによつてだった。

光の玉が幾つか出た。上にふわふわと浮かんだ。それがそのまま灯りとなって部屋の中を明るく照らすのだった。

「これでいいのよね」

「そうそう、上出来」

「それでいいよ」

ジップとハリーもその彼女に笑顔で話す。

「折角勉強してるんならね」

「魔法も勉強しないとね」

「そうよね。私魔女だしね」

赤音もここで笑顔になった。

「魔女らしくいかないかね」

「何か御主人の魔法もかなり」

「凄くなつてきたし」

「勉強し続けてるからしら」

「ここでこう言う赤音だった。」

「魔法の勉強も」

「そういうことだね。魔法もね」

「勉強だよね」

「何でも勉強なのね」

「そうそう」

「それで苦手科目も克服できるよ」

赤音は明るい気持ちで魔法も学校のそれも勉強することができた。彼女の努力はそのまま報われるのだった。

第三百四十話

完

2
0
1
0
・
1
1
・
2
9

第三百四十一話

第三百四十一話 弟の為に

美樹は今編み物をしていた。その上をビルガーとファルケンが飛んでいる。そのうえで彼等は主に対してこんなことを言うのだった。

「それなのですが」

「何を編まれていますか？」

「マフラーよ」

それだと答える美樹だった。6

「それ編んでるのよ」

「成程、御自身のマフラーは御自身で編まれる」

「御主人らしいですね」

「あつ、それ違うわ」

だが、だった。美樹は使い魔達のその言葉を否定したのだった。

「私のじゃないのよ」

「御主人ではないとすると」

「一体どなたのですか」

「弟のよ」

彼女の弟の為のものだというのだ。美樹は弟思いの姉でもあるのだ。

「それなのよ」

「弟君のものとは」

「それはまた」

「だからね。色もね」

見ればだ。その色は美樹の色ではなかった。彼女の緑ではなかった。

「この色にしたのよ」

「赤ですか」

「その色にされたのですか」

「そうなの。ほら、暖色ね」

暖色と寒色の違いを意識しであった。

「どうかしら、この色で」

「そうですね。暖かい印象を受けていいかと」

「私もそう思います」

ビルガーとファルケンはその色をいいとした。賛成だった。

「問題はどれだけの長さにするかですが」

「どうされますか、それは」

「長めにするつもりよ」

こう話す美樹だった。

「その方が首に巻けるからね」

「そこまで考えてのことでしたか」

「我々はそこまでは考えませんでした」

「首に巻ければそれでいいと」

「こう考えていましたか」

「やっぱり長い方がいいからね」

それだけだという美樹だった。

「まああの子の身長よりは長くはしないから」

「それだけ長くしてもですね」

「少し問題ですし」

「だからね。さて」

ここまで話してだった。美樹は編み物にさらに力を入れる。

今は自室にいる。そしてその中で自分の机をちらりと見て話すのだった。

「これが終わったらね」

「はい、学校の勉強ですね」

「そちらを」

「そうするわ」

こう話してだった。美樹は今は編み物に専念するのだった。真剣な面持ちで。

第三百四十一話

完

2
0
1
0
・
1
2
・
5

第三百四十二話

第三百四十二話 風を使って

編み物を続ける美樹。しかしてあつた。

彼女はここだ。少し困った顔になって話した。

「ちよつとね」

「思うように進みませんか」

「そうなのです」

「やっぱりね。糸がふわふわしてね」

その糸のことを話すのだった。マフラーにするその毛糸だ。

「どうも。それが気になって」

「そうですね。それではですが」

「我々に考えがありますが」

「考え？魔法かしら」

すぐにそれを察した美樹だった。魔女の顔になる。

「それを使ってかしら」

「はい、それです」

「魔法を使って進められては」

「ええ、わかったわ」

美樹は彼等の言葉に頷く。そうしてだった。

風を出してだ。そのふわふわとした間隔を微妙にコントロールさせた。

そのうえでだ。ビルガーとファルケンもだった。

「我等もです」

「御助力させて下さい」

「あつ、有り難う」

彼等も翼を羽ばたかせて毛糸を動かしてだった。美樹が編みやすいようにしたのだった。

彼等の助力と魔法のお陰でだ。マフラーはすぐに終わった。

「もう終わったわね」

「はい、おめでとうございます」

「それではそのマフラーは」

「あの子にプレゼントするわ」

美樹は優しい笑顔になって述べた。

「その為に編んだのだしね」

「そうですね。では」

「そうされて下さい」

「ええ。さて」

ここで、だった。また言う美樹だった。

マフラーを収めてだ。そのうえで使い魔達に話す。

「じゃあ後はね」

「勉強ですね」

「そちらをされますね」

「そっちもちゃんとしないとね」

しっかりとした笑みであった。

「勉強と魔法。どちらもですね」

「そうですね。どっちかが駄目というのではお話になりませんし」

「ですから」

「そうなのよね。私も頑張らないと」

「ただ。美樹様の場合は」

「少し頑張り過ぎかと」

使い魔達はここでこんなことを言った。

「少し休まれることもです」

「時には必要です」

「わかっているけれどね」

そこは苦笑いで返す美樹だった。彼女にも苦手なものはあるのだ
った。

第三百四十二話

完

2010・12・5

第三百四十三話

第三百四十三話 リーダーの修業

梨花はだ。この日山に入っていた。

そして山の中の大きな岩の前に立ってだ。自分の使い魔のピエールとジュリエッタの言葉を聞いていた。

「ここはです」

「やはり慎重にいきましょう」

「そうね。やっぱりね」

梨花も二匹の言葉に頷く。

「さもないとね。これだけの岩はね」

「簡単には動かさせません」

「それに動かしてもです」

彼等の言葉がさらに続く。

「コントロールは困難です」

「ですから」

「この岩を分けてね」

どうするか。梨花も言う。

「それで私のギターに合わせて動かすってというのは」

「かなりの注意が必要ですから」

「岩の一つ一つを自在に動かされるのですよね」

「ええ、そうよ」

その通りだというのであった。そしてである。

梨花はだ。岩を見てだ。慎重な仕草でステッキを動かす。それで岩が動いた。

動かしてからだ。彼女は言った。

「じゃあこの岩はね」

「はい」

「分けられてですね」

「そうするわ。それじゃあね」

ステツキを前にかざした。するとだ。

岩が分かれた。小さい無数の石になった。その石を見てまた言う
梨花だった。

「じゃあこの石をね」

「はい」

「動かしてですね」

「そうするわ。いいわね」

「そうですね。ただ」

「いいですか？」

ピエールとジュリエッタは考える顔で述べる。

「石を一度に全部使われるのではなく」

「ここは少しずつ使われてはどうでしょうか」

これが彼等の提案であった。

「そうして少しずつ使える石を増やしていけば」

「いい練習にもなりますし」

「そうですね。確かにね」

梨花も彼等のその提案に頷く。そうしてだった。
浮かんでいる石達をだ。一旦全て地に落とした。

「これでなのよね」

「はい、使う石の数をセーブしてです」

「それでどうでしょうか」

「一度に全部使う必要はないしね」

梨花はこのことにも気付いたのだった。

「そういうことだしね」

「では。それで」

「練習といきましょう」

「そうですね。じゃあ」

ギターを出した。その演奏をはじめのだった。

第三百四十二話

完

2
0
1
0
・
1
2
・
1
5

第三百四十四話

第三百四十四話

ギター弾く手

梨花はギターを奏でる。そうしてだった。

石をだ。とりあえずは一割浮かばせるのだった。

「まずはこれだけね」

「はい、それでいいかと」

「最初はその数で」

「そうね。これが全部だとね」

どうかとだ。梨花は石達を自分の前に持って来ながら話す。石達
のその動きはさながら流星の如きだった。そうしたものだった。

そしてだった。彼等はまた話すのだった。

「まずは大丈夫でしょうか」

「一割程の数で」

「そうね。これ位は全然何ともないわ」

実際にそうだと述べる梨花だった。ギターを動かす手も順調だ。

そうして立った。使い魔達はまた話してきた。

「では今度はです」

「石の数を増やされてはどうでしょうか」

「どれ位がいいかしら」

梨花は使い魔達に対して問う。彼等は完全に参謀であった。

その参謀達もだ。的確かつ真面目にこう答えたのであった。

「二割がいいかと」

「それでどうでしょうか」

「そうね。一割ずつ増やしていったらいいわね」

梨花もそれを言う。

「慣れればそうしていったね」

「では。梨花様それでは」

「これでは」

こうしてであった。梨花は石の数を増やす。そうして順調に進めるのだった。

そんな練習をしてだ。夕方になり家に帰る。自分の部屋では。机に座ってノートを開いてだ。それぞれ左右に来ている使い魔達の話聞いた。

「とりあえず三割までいけたわね」

「はい、まずはですね」

「三割程でしたね」

「それでいいかしら」

梨花は首を傾げる。ノートは開かれその手にはボールペンがある。

「今日のところは」

「はじめられたばかりですしそれでいいのでは」

「そう思います」

「そうね。今日はじめたばかりだしね」

梨花も彼等のその言葉に頷いた。そしてであった。

ノートにあれこれ書いていく。見ればそれは楽譜だった。それを書きながら言うのだった。

「この曲に合わせて動かして行ってね」

「そうして。やがては石に様々な色を飾って」

「舞台を飾りますね」

「石じゃなくても他の軽いものでもいいしね」

それを考えてのことなのだった。彼女は実によく考えているのだった。魔法のこと、音楽のこと、ひいてはクラウンのことをである。

「それじゃあ後は」

「はい、学校の勉強もですね」

「それも」

そちらも忘れない。彼女もそうしたところはしっかりとしているのだった。クラウンでのしっかりとした面々、しかもリーダーだけはあるのであった。

第三百四十四話

完

2
0
1
0
・
1
2
・
1
5

第三百四十五話

第三百四十五話 小田切君の休日

小田切君にも休日はある。給料は手取りで月あたり四十万でボーナスは夏と冬に年二回、保険もちゃんとしている博士の研究所の休日だ。

「あれっ、休日あったのかよ」

「いつもここに居るけれど」

ライゾウとタロがだ。こう本人に突っ込みを入れる。

「休日は何してるんだよ、一体」

「ここにいて」

「いつもと同じだよ」

これが小田切君の返答だった。見れば彼はプレスステでアイドル育成ゲームをしている。研究所でよくゲームをしながら留守番をしているのだ。

「こうしてね」

「ゲームかよ」

「そればかりなんだ」

「一応家には帰ってるよ」

それはしているというのである。

「ただ。それでもね」

「ここに居るっていうのかよ」

「そうなんだ」

「だってここにいたら」

どうなるか。そのことを話すのだった。

「お酒も食べ物もただじゃない」

「この研究所って食費無料だからな」

「博士が出してくれるからね」

「だからなんだ。それに冷暖房は完備だし」

夏も冬もいいというのだ。

「それにトレーニンブルームにパソコンにステレオもいいのがあって」

「風呂だっていいしな」

「サウナもあるしね」

「だからここにいるんだ」

それで休日も研究所にいるというのである。

「休日だから博士の騒動は聞こえないふりしたらいいしね」

「兄ちゃんもタフになったよなあ」

「本当にね」

ライゾウとタロは平然とこう話す小田切君にある意味尊敬の念を感じていた。

「普通の人間だったら絶対に博士の傍になんかいたくないのにな」

「どんなに待遇がよくてもね」

何故いたくないのか、理由は簡単である。人類史上最悪のマッドサイエンティストであり人間の命なぞ何とも思っていないからだ。しかも次から次に世界規模の騒動を引き起こす人物ともなればだ。好き好んで近寄りたがる人間もいないというわけである。

「けれどここに来たしな」

「だから休日もここにいられるんだ」

「よし、ここはこうして」

今はゲームに熱中している小田切君であった。

「それでこうやれば」

「やっぱりこの兄ちゃんもな」

「何かが違うよね」

「よし、上手くいったな」

今は二匹の言葉を聞いてはいなかった。ただゲームに熱中している。

そうして一段落ついたところだった。

「お昼にしようかな」

身体を伸ばしながらの言葉であった。小田切君もまた非常にマイペースであった。何しろ危険区域に指定されている研究所で普通に休日を過ごすのだから。

第三百四十五話 完

2010・12・21

第三百四十六話

第三百四十六話 休日でも

今は昼食にイカ墨のスパゲティとマカロニグラタン、それに赤ワインを楽しむ小田切君だった。ライゾウはキャットフード、タロはドッグフードをそれぞれ食べている。彼等はこの日は昼食と一緒に食べているのだ。

その彼等の後ろで、だった。

柄の悪い少年が数人だ。如何にも人を殺しそうな感じの邪悪なオラに満ちているロボットにそれぞれの腕を捕まれて研究所の奥に連行されていた。

「ざけんな、こら」

「俺達をどうするつもりだ」

「おい、答えるよ」

「生体実験」

ロボットはこう彼等に答える。機械そのものの声で。

「御前達コレカラ博士ノ実験ニ使ワレル」

「何っ、生体実験ってどういうことだよ」

「俺達が何をしたってんだよ」

「答えるよこのロボット野郎」

「博士ガ御前達嫌イダカラ」

「これが理由だというのだ。」

「ダカラ御前達死ヌ。諦メロ」

「だからざけんな、こら」

「何が死ぬだよ、何が」

「だから何処に行くんだよ」

彼等はそのまま研究所の奥に連れて行かれる。そうしてであった。断末魔の声が聞こえてきてた。暫くしてた。

博士がだ。出て来て小田切君を見て言うのだった。

「何じゃ、来ておるのか」

「ええ、お昼頂いてます」

落ち着いた様子でワインを飲みながらの返答だった。

「パスタですけれど」

「コックロボットに作ってもらったものじゃな」

「はい、かなり美味しいですねこれって」

「そうじゃろ。ではわしもじゃ」

「お昼ですか」

「スパゲティを貰おうか」

小田切君が食べているそれを見ての言葉だった。

「それではな」

「そうするんですか。ところで博士」

「んっ、何じゃ？」

「さつきは何してらしたんですか？」

「うむ、ロボットに沖縄まで行ってもらってその不良を何人が連れて来てじゃ」

博士は日本中の暴力団員や暴走族や街の不良を拉致しているのである。言うまでもなくこれもまた法的には明らかな犯罪行為である。

「それでじゃ。西洋であったという腹の上に鼠達を置いてじゃ」

「鼠をですか」

「そこで蓋をしてその蓋の上から火を焚く」

そうしたというのである。

「それで実際に鼠がその暑さから腹を食い破るかどうかを実験してみたのじゃがな」

「どうなったんですか？その実験」

「うむ、無事食い破った」

そしてどうなるかであった。問題は。

「不良少年は全員あまりもの激痛に苦しみ抜き絶叫しながら悶え死んだわ」

「そうだったんですか」

「うむ。死体は今度暴力団の事務所に放つ怪獣の餌にしておいた」
今度は怪獣であった。

「それだけじゃ。やったのはな」

「そうなんですか」

「午後は名古屋まで行ってその怪獣を使って暴れて来るわ」

「休日ですけれど留守番しておきますんで」

「うむ、その分給料は出すからのう」

こんな休日であった。もうそんなことにはある程度慣れている小田切君であった。

第三百四十六話

完

2010・12・21

第三百四十七話

第三百四十七話 資格

「ねえ香ちゃん」

「どうしたの、今日子ちゃん」

今田先生はいつもの様に家の庭で優雅にお茶を楽しんでいた。そこに今日子先生が来てそのうえで話をしてきたのである。これもいつも通りである。その話とは。

「今年生の女の子って六人よね」

「そうよ。六人よ」

「それから増えないの？」

「今のところ予定はないわ」

「こつ答える今田先生だった。」

「いたら誰でも歓迎するけれど」

「そうなの。来る者は拒まずなのね」

「そうよ。誰でもいいわ」

「にこりと笑って話す。」

「男の子は男の子でね」

「いいのね」

「勿論よ。誰でもね」

「また言う先生だった。」

「それが私の教育方針だし」

「教育ね」

「そうよ。これでも教育者よ」

魔法塾の先生である。だから教育者だというのだ。

「実は教員免許も持ってるし」

「あら、そうだったの」

「ってこれって今日子ちゃんもですよ」

「うふふ、そうだけれどね」

今日子先生はにこりと笑ってそうだと答える。

「中学のね。音楽と美術のね」

「そうだったわね。今日子ちゃんはね」

「私はそれで」

そして今田先生はというのであった。

「小学校の先生のね」

「学校の先生だけじゃないしね」

資格は他にもあるのだった。

「図書館に博物館の学芸員にね」

「私達も色々持つてるわね」

「それで今は」

「魔法の先生ね」

それが先生達だった。実は教育者でもあるのだ。

その先生達がだ。話を続けていく。

「最近あの博士も大人しいし」

「お仕事もはかどるわよね」

「そうね」

こんな話をするのだった。

「それじゃあ私雑誌の占いの記事書くから」

「今日子ちゃん占い得意だしね」

「香ちゃんもできるじゃない」

「けれど最近してないから」

「またやればいいじゃない」

そんな話をしながらいつものどかな午後の紅茶を楽しむ先生達だった。しかし意外と色々な資格を持っていることを話すのだった。

2
0
1
0
·
1
2
·
2
2
7

第三百四十八話

第三百四十八話 先生の占い

今日子先生との話でだ。今田先生は占いをまたしようと思いついた。そのうえでだった。

夜に街角に出てだ。魔女の法衣と帽子で使い魔達を周りに置き水晶玉を出してだ。占いをしてみるのだった。

「あつ、何か凄い綺麗な人だな」

「だよな。魔女であんな綺麗な人いるなんて」

「凄くない？光る法衣よ」

金や銀といった光り輝く法衣は最高位の魔女が着るものなのだ。

「その人が占うって」

「どんなのかしら」

「凄いいんじゃないか？やつぱり」

街を行き交う人達はこう話してだ。先生の前に列を作る。そうしてだった。

先生に占ってもらおう。するとだ。

「へえ、俺はそれに気をつけないといけないんだな」

「私の出会いはすぐなのね」

「よし、僕あの学校大丈夫なんだ」

「お金が入るんだね、そうしたら」

先生の占いを聞いてだ。皆明るい顔で帰る。そうしてだ。

暫くしてネットでだ。先生の占いが評判になるのだった。

「当たるらしいじゃない」

「そうなの」

「そうよ。ネットで評判になってるわ」

今日子先生が笑顔で今田先生に話す。二人はこの日は喫茶店にいる。フランス風の白い店の中でだ。ケーキとカプチーノを楽しんでいる。

「絶対に当たるってね」
「私占いはそんなに」
「得意じゃないっていつの?」
「自分ではそう思ってるのよ」
「そうだといいのである。」
「それより今日子ちゃんの方が」
「私より香ちゃんの方が正確じゃない」
「そうかしら」
「タロットはあれなのよ」
「どうかというのである。そのタロットがだ。」
「少しでも感じるのを違えたらね」
「駄目よね、あれは」
「そうよ。カードが教えてくれることは色々に捉えられるし」
「そういうものだといっているのである。」
「だからね。難しいのよ」
「確かにね。トランプでもそうだけれど」
「それでも水晶玉は違うから」
「私の占い方ね」
「そうよ。占う人の能力がそのまま影響されて」
「このことをだ。今日子先生は話していくのだった。」
「見えるものが違ってくるじゃない」
「それでなの」
「そうよ。香ちゃんは凄くよく見えてるから」
「それで正確に占えるというのだ。」
「私水晶は使えないからね」
「私もタロットは駄目よ」
「そんな話をしていた先生達だった。先生達の占いはそれぞれ扱うものが違っていた。しかし先生達は占いもできることは確かだった。」

第三百四十八話

完

2
0
1
0
・
1
2
・
2
8

第三百四十九話

第三百四十九話 気付いた双子

華奈子がだ。不意に美奈子に言ってきた。場所は二人の部屋だ。そこで学校の授業の勉強をしながらだ。美奈子に対して言ったのである。

「ねえ」

「何？」

「あたし達って占いは勉強してないわよね」

「このことをだ。美奈子に言ったのである。」

「そうよね」

「ああ、そういえばそうね」

「言われてだ。美奈子も気付いたのだった。」

「占いも魔女には必須だけれど」

「それでもまだよね」

「先生がまた教えてくれるわよね」

「美奈子はこう華奈子に話した。」

「そうよね、やっぱり」

「魔女の必須科目だしね」

「それを華奈子も言う。」

「じゃあやっぱりね」

「けれど何時かしら」

「美奈子はそのことが気になるようだった。」

「一体何時になるのかしら」

「もうすぐじゃないの？」

「華奈子はここでは自分の勘に基づき話した。」

「何となくそう思うけれどね」

「もうすぐかしら」

「あたしはそんな気がするわ」

「勘で言ってるでしょ」

「ええ」

その通りだとだ。双子の相方に話した。

「そうよ。けれど絶対に習うものだから」

「占いの内容まではだけれどね」

「それはまだわからないけれどね」

「それでも絶対に習うからね」

「ううん、じゃあ何を習うのかしら」

美奈子はその占いについて考えるのだった。

「タロットかしら。水晶球かしら」

「それとも他のかしら」

「占いつていつても色々あるしね」

「そうよね。具体的にはね」

「まあとにかくね」

美奈子はまた言った。

「私占いにも興味あるの」

「そうなの」

「だから。余計にね」

こう言っただった。期待する顔になっただった。

「楽しみになつてきたわね」

「あたしだと何の占いかしら」

「何が合うのかはわね」

「やってみないとわからないのよね」

こんなことを話した二人であった。二人がこんな話をしている時にだ。今田先生と今日子先生はお茶を飲みながら占いの話をしていったのだ。

2
0
1
1
·
1
·
3

第三百五十話

第三百五十話 小田切君の新しい

趣味

「あれっ、何だよそれ」

「トランプかな」

「そうだよ」

小田切君はテーブルに座ってトランプを切っていた。そうしながらライゾウとタロの問いに応えたのである。応えながらも手を動かしている。

「そのトランプだよ」

「何だ？ポーカーするのかわ」

「それなら一緒にしない？」

「ああ、そういうのじゃなくてね」

ポーカーではないというのである。

「ちよつと占ってみるんだ」

「トランプ占いかよ」

「それなんだ」

「最近凝ってるんだ」

今度はこんなことを言う小田切君だった。

「それで今もやってるんだけれどね」

「ふうん、占いにねえ」

「ちよつと意外だね」

「科学者に占いは合わないかな」

不意にこんなことを言う小田切君だった。

「やっぱり」

「そんなことは言わないけれどな」

「別にね」

ライゾウもタロもそれはないというのだった。ライゾウは毛づく

ろいをしていて自然と中年男性の如き座り方になっている。夕口は丸くなっている。

「ただ。占いねえ」

「小田切君が」

「それがピンとこないんだね」

「そうなんだよなあ」

「ちよつとねえ」

これが二匹の主張であった。

「博士だったら怪しい占い一杯知ってるけれどね」

「あの人は特別だから」

「占いも科学だからね」

そしてだった。小田切君はこう言ったのだった。

「だからね。これも勉強のうちかな」

「科学なのかい？ 占いって」

「そうなるんだ」

「そうした意見もあるよ。まあ科学にも限界があるし」

小田切君はカードを並べながらこんなことも言う。

「今のその知識だけでしかわからないから」

「そういうものだけねどな、結局は」

「科学でも魔術でも何でもね」

「まああれだよ。占いも科学っていうのは」

またこの言葉を口にしてだった。

「名言だね。何でも科学であり魔術なんだろうね」

「区別するのをもってことだよな」

「そうなるね」

二匹は小田切君の言葉をそう捉えた。そうしてそのうえで彼のその占いを見守るのだった。彼は占いもはじめたのであった。確かに意外なことに。

第三百五十話

完

2
0
1
1
・
1
・
3

第三百五十一話

第三百五十一話

美奈子のスポーツ

美奈子の苦手なもの。それは。

スポーツである。それはどれもだった。

「相変わらずなのね」

「ええ」

体育の授業の後でだ。華奈子に元気がない顔で返す。二人は体操服姿である。見れば半ズボンに華奈子の方が似合っているようである。

「どうしてもね」

「よく動けないのね」

「しょっちゅう転んだし」

「縄跳びで転ぶの？」

「だって。足が絡まって」

縄跳びの縄にだということだ。それにだった。

「それでね」

「こけたのね」

「何度も」

「縄跳びの縄に絡まるって」

華奈子は話を聞いてだ。首を傾げさせながら言うのだった。

「あたしそんなことは一度もないけれど」

「華奈子は運動神経いいじゃない」

すぐに突っ込みを入れる美奈子だった。

「私は。全然だから」

「けれどさ。それはね」

「それは？」

「やってないからだと思うわ」

それでだということである。

「普段からね」

「それでだつていうの？」

「あたしだつてあれじゃない。お勉強ね」

「よくなつてきたつていうのね」

「これまでは1とか2ばかりだつたけれど」

お世辞にも成績はいいとは言えなかつたのだ。だが今の華奈子は
というのである。

「それでもね。今はあれじゃない」

「1も2もなくなつたわね」

「国語とか算数とかは酷かつたけれど」

もつと言えば理科と社会でもある。とにかく勉強関係は全く駄目
だつたのが華奈子だつたのである。それが特徴でもあつたのだ。

「今はあれじゃない」

「全部3になつたわね」

「そういうこと。努力すればね」

「よくなるつていうのね」

「そうよ。だから美奈子もよ」

「だといけれど」

困つた顔で返す美奈子だつた。

「華奈子みたいに。スポーツもできたら」

「それならね」

華奈子はまた美奈子に言つてきた。

「スポーツしよう。二人でね」

「二人でなの」

「ええ、じゃあね」

こうしてであつた。美奈子は華奈子と共にスポーツを頑張ること
になつた。話が決まるとすぐであつた。

2
0
1
1
·
1
·
1
1
2

第三百五十二話

第三百五十二話 最初には

華奈子と共にスポーツも頑張ることになった美奈子。まずはだつた。

家に帰つてだ。ランニング等をする事になった。それで二人共ジャージ姿になった。華奈子はそれから美奈子がある場所に連れて行った。

そこはだ。中庭だつた。

「ここで走るの？」

「違うわよ。中庭で走つても狭いじゃない」

「そうよね。道で走るのよね」

「ここでするのはね」

華奈子は笑顔で美奈子に話すのだった。

「あれよ。準備体操よ」

「準備体操って？」

「だから。身体を動かすでしょ？」

華奈子は美奈子にまた話した。

「それだつたらよ」

「準備体操をするのね」

「スポーツの前には絶対に準備体操をしないと駄目よ」

普段はすばらな方の華奈子だ。今は真面目に言うのであった。

「その後でもね」

「スポーツの後でも」

「準備体操しないと怪我するから」

「それでだというのだ。」

「まずはそれね」

「よく言われることね」

「そうそう。実際にそうだから」

その通りだとだ。美奈子に話すのだった。

「だからいいわね」

「ええ、じゃあまずほね」

「準備体操よ」

華奈子は早速身体を動かさしはじめた。美奈子も彼女に合わせる。そうして暫く手足や腰を動かしてだ。それからであった。

華奈子は美奈子にこう話した。

「普段もね」

「普段もって？」

「ストレッチなんかしておくといいわよ」

「それもなの」

「そう。ダンスにもいいし」

バンドの話も入れる。クラウンのだ。

「身体が柔らかいとね」

「そうね。確かにね」

これは美奈子にもよくわかる話であった。納得した顔で頷いたのが何よりの証拠である。

「それはね」

「そういうこと。ダンスも大事だから」

本当にここでは生真面目な華奈子だった。

「毎日それもね」

「するの」

「あたしはしてるじゃない」

実際にストレッチも毎日している華奈子だった。

「だから。これからは二人でね」

「わかったわ。それじゃあ」

美奈子も華奈子の言葉に頷いた。これで決まりだった。

そんな話をしてからだ。二人はランニングに出た。華奈子は赤、美奈子は紫のジャージだった。その二色が実によく映えていた。

第三百五十二話

完

2
0
1
1
・
1
・
1
1
2

第三百五十三話

第三百五十三話

ランニン

グは

二人はランニングをはじめた。しかしだ。はじめてすぐにだ。美奈子は肩で息をしまいだ。一歩も動けなくなった。

「も、もう駄目……」

「えっ、もうなの？」

「だって。私運動神経ないから」

「これは体力だけれど？」

「それでもよ」

駄目だというのだった。美奈子は本当に辛そうな顔で華奈子に話す。

「もう限界なのよ」

「ううん、じゃあ仕方ないわね」

それを聞いてだ。華奈子も諦めて言うのだった。

「毎日少しずつするのが大事だし」

「それがなの」

「そう、継続は力なりって言うじゃない」

珍しく華奈子が教訓を言っていた。美奈子ではなくだ。そしてその上でまた言う華奈子だった。

「だから今日はね」

「わかったわ。それじゃあ」

「あたしはこれからもつと走るけれどね」

華奈子は明るい顔で言った。

「それじゃあね」

「えっ、まだ走るの？」

「そうよ。まだまだこれからよ」

にこりと笑っての言葉だった。

「だからね」

「華奈子は違うのね」

美奈子は溜息混じりにこう華奈子に言った。

「体力が」

「まあいつも身体を動かしてるからね」

「泳ぎだって上手いし」

「スポーツだったら何でもいけるから」

「ここでもにこりと笑う華奈子だった。

「だからそれはね」

「うっん、やっぱり凄いわ」

「凄くないわよ。美奈子も毎日やっていけばね」

「華奈子みたいになるっていうの？」

「そう、なれるわよ」

「なれるかしら」

そう言われてもだった。美奈子は半信半疑どころか九分まで疑っている。いぶかしむ顔になってそのうえで首を傾げさせる程である。

「私が」

「だから毎日やればね」

「華奈子みたいになのね」

「あたしだって毎日勉強してるじゃない」

華奈子は自分のことも話した。

「それでできるようになってきたでしょ」

「言われてみれば」

「高校も大学も美奈子と一緒にいたいしね。だからね」

「そうね。私も華奈子と一緒にいたいしね」

そう言われるとであった。美奈子も確かな顔で頷くことができたのであった。

そうしてそのうえで、だった。

二人は今日はランニングはこれで終わった。しかしそれから毎日

ランニング、そして筋力トレーニングをするのだった。本当に毎日である。

第二百五十二話 完

2011・1・17

第三百五十四話

第三百五十四話 毎日していると

美奈子は華奈子と共に毎日トレーニングを続けた。すると。

「何か少しずつだけけれど」

「違ってきたでしょ」

「ええ、長い距離を走られるようになったし」

まずはそこからだった。二人は今ランニングを終わって少し休憩しているところだ。

「それに」

「走るの自体が速くなってきたでしょ」

「ええ、確かにね」

「毎日走ってるからよ」

そのせいでだと話す華奈子だった。

「だからなのよ」

「本当に続けていたら、なのね」

「そういうこと。継続は力なりよ」

華奈子はにこにことした顔になっている。

「あたしの言った通りでしょ」

「確かにね。それに」

「それに？」

「何かこうしてトレーニングしていると」

どうなってきたのか。美奈子は華奈子にこのことも話すのだった。

「勉強の能率もあがってきたし」

「あっ、そうなんだ」

「ストレスが発散されてるせいかしら」

こう分析する美奈子だった。

「そのお陰でね。勉強も能率がね」

「あたしそれはわからないけれど」

いつも身体を動かしているからである。華奈子の場合はそのがいつもだから気付かないのだ。普段からしていれば同じだからである。

「そうなんだ」

「そうみたいね。それにね」

「それに？」

「ダンスの身体の動きもよくなってきたし」

次に言ったのはこのことだった。

「身体をいつも動かしているとそうなるのね」

「ううん、あたしそれもわからないけれど」

やはり身体をいつも動かしているからだ。いつもならば本当にわからない。

「そうなのね」

「そうよ。まあとにかくね」

「うん、とにかく？」

「私これからもこのトレーニング続けるから」

笑顔で華奈子に言うのだった。

「いいことばかりだからね」

「そう。じゃあこれから毎日二人でね」

「ええ、頑張りましょう」

二人で誓い合う。そしてであった。華奈子はそのうえでこんなことを言うのであった。

「こうして身体を動かした後は」

「まだ何かあるの？」

「食べ物美味しいのよね」

「それはそうね。けれど」

「けれど？」

「そこで食べ物が出て来るのが華奈子なのね」

こう言って双子の相方の顔を見て困ったような、それでいて暖かい笑顔になるのだった。美奈子はそんな華奈子といつも一緒にいるのである。

第三百五十四話

完

2011.1.17

第三百五十五話

第三百五十五話 食事は

華奈子と美奈子は毎日トレーニングを続けていた。その中でだ。

「おやつの際にだ。美奈子はこう華奈子に言ってきた。」

「糖分は疲れてる時にいいのよね」

「あつ、それは聞いてるわ」

「摂り過ぎはよくないけれど適当な量ならいいのよ」

「太るからよね」

「太るだけでなく糖分はあまり多く摂ったら糖尿病になるから」

だから駄目だというのである。成績優秀な美奈子らしい言葉である。話すその顔も真面目なものでありそこから知性が出ている。

「だからなのよ」

「ううん、病気もなの」

「そうよ。これはどんな食べ物にも言えるのよ」

「お肉とかお野菜とかにもなの」

「お肉も食べ過ぎたらコレステロールが心配になるし」

肉はそれだというのだ。

「お野菜はあまり身体を作らないから」

「ううん、何かどれも食べ過ぎたら駄目なのね」

「バランスよくね」

美奈子はこう華奈子に話した。

「何でもバランスよく食べるといいのよ」

「バランスなのね、要は」

「そう、例えば華奈子はいつも凄く動いてるから」

そうした華奈子の場合はどうなのかもだ。美奈子は細かく話すのだった。

「どんな食べ物も多く、お肉もお魚も野菜も果物もね」

「バランスよくなのね」

「そうしたらいいわ」

「わかったわ。確かに走った後とかライブの後ってお腹が凄く減るからね」

そう考えると実感できるのであった。華奈子はここではこのことから考えてだ。そうしてそのうえで述べるのだった。そうした意味で華奈子もよく考えている。

「そうしたことがあるから。あたしも美奈子も」

「私もなの？」

「だって。美奈子最近ずっとあたしとトレーニングしてて」

華奈子にはこりと笑って美奈子に話す。

「そうしてライブもしてるじゃない。ダンスもするし」

「だからなの」

「そうよ。だから美奈子もね」

食べるべきだというのである。

「しっかりとね」

「ええ、わかったわ」

美奈子も華奈子のその言葉に頷く。

「それじゃあ私もね」

「そうしよう。このおやつもね」

「苺もね」

今二人が食べているおやつは苺だった。実は苺は二人の好物の一つである。母がそれをわかってそのうえで買ってきたものである。

「食べようね」

「ええ。じゃあ」

「牛乳もね」

美奈子は牛乳も話に出した。

「飲もうね」

「うん、一緒にね」

華奈子も笑顔で応える。牛乳もだ。二人の好物なのである。二人は仲良くそのおやつをバランスよく食べていくのだった。

第三百五十五話

完

2
0
1
1
・
1
・
2
4

第三百五十六話

第三百五十六話 牛乳

苺の後牛乳を飲む時にだ。華奈子が美奈子に問うた。

「ねえ、美奈子」

「うん、何なの？」

「牛乳って凄く身体にいいんだっけ」

美奈子に問うのはこのことだった。

「そうよね」

「ええ、そうよ」

その通りだと答える美奈子だった。

「カルシウムも多いし。たんぱく質も多いしね」

「他にも栄養が一杯あるのよね」

「そうよ。栄養の塊なのよ」

まさにそうだというのである。

「だから牛乳から作るチーズやバターもね」

「身体にいいのね」

「そうなの。だから牛乳も飲むとね」

「身体に凄くいいのね」

「それがそのまま魔法にも影響するし」

そちらにもだというのだ。美奈子は真面目な顔で双子の相方に話していく。

「だからね」

「トレーニングも。そういえば」

「魔法に影響するのよね。体力があればそれだけ無理が利くから」

そうした意味でトレーニングもそうだというのである。

「とにかく。話を戻すけれどね」

「そう、その牛乳よね」

「これはもうたっぷりと飲むといいのよ」

それは確かだというのである。

「身体に凄くいいから」

「わかったわ。それによね」

華奈子は美奈子の話を聞きながら笑顔になってだ。こんなことを言うのであった。

「飲んでると。胸も大きくなるそうね」

「えっ、そうなの!？」

それを聞いてだ。美奈子は目が点になった。実はそこまでは知らなかったし考えたこともなかったのである。

「胸も大きくなるの」

「そうらしいわよ。それで大人の女の人って胸が大きい人多いらしいわよ」

「そういえば先生達も」

今田先生と今日子先生である。二人のプロポーションは抜群と言っているがその胸もまた、なのだ。かなりのものなのである。

「胸あるわよね」

「でしょ?だから牛乳を飲むとね」

「大きくなるのね」

「先生達って結構牛乳を使ったお菓子とかお茶にミルク入れてるか」

華奈子はそうしたことを見ていた。視野はかなり広く観察眼もしつかりしているのだ。

「そのせいよ」

「じゃあ私達も牛乳を飲めば」

「大きくなるわよ。だからね」

また美奈子にだ。笑顔で話すのだった。

「牛乳。もつともつと飲もうね」

「バランスよくだけれど」

「それでも。もつと飲もうね」

「そうね。それじゃあね」

バランスよくとは言ってもだった。美奈子もその牛乳をどんどん飲んでいくのだった。二人にとってもだ。やはり胸は大きいことが望ましいのだった。

第三百五十六話 完

2011・1・24

第三百五十七話

第三百五十七話 今すぐには

華奈子も美奈子もトレーニングと共に牛乳をこれでもかと飲んでいく。そうして飲みながら二人でこんなことを話すのだった。

「ねえ。そろそろかな」

「大きくなるかって？」

「うん。なるかな」

華奈子が美奈子に言っていた。

「そろそろ。胸が」

「いや、それはないわよ」

ところがだ。美奈子は双子の相方の言葉を打ち消してしまった。

そのうえでこう華奈子に告げた。

「だって。幾ら飲んでもすぐにはね」

「大きくなるらないの」

「だから。体力つけるのと同じじゃない」

それとだというのである。

「徐々になのよ」

「ううん、牛乳もなの」

「牛乳飲んですぐに大きくなったら」

今回は美奈子が華奈子に話していた。この双子の大抵のパターンになっている。

「それこそ。皆ね」

「胸が大きくなってるわよね」

「そうよ。だからそれはないわよ」

こう華奈子に話すのだった。

「やっぱりね」

「そうね。考えてみたらね」

そして華奈子もだった。美奈子の話に納得するのだった。

「そんなすぐになる筈ないわよね」

「ゆつくりとだからね」

美奈子は微笑んでいた。そのうえでの言葉だった。

「こういうのもね」

「そうね。ただ」

「ただ？」

「若しかしたらだけれど」

次第に曇った顔になってであった。華奈子は美奈子に話すのだった。その話すこととは。

「幾ら飲んでも。それでもね」

「胸が大きくならないかもっていうのね」

「そうよ。その可能性もあるわよね」

こう美奈子に話すのだった。若し牛乳を飲んでもそれでも胸が大きくならなければ、というのである。将来への不安というものだった。

「あるわよね、それも」

「ええ、あるわ」 38

それはあるとだ。はっきりと認める美奈子だった。

「否定できないわね、それは」

「うっん、若しそうになったらどうしよう」

「背だつて伸びるとは限らないしね」

「そうそう」

背もであった。やはり牛乳を飲んでもだ。必ず大きくなったり高くなったりするとは限らないのだ。人それぞれということなのである。

「そうになったら。嫌よね」

「それでもね」

しかしだった。美奈子は華奈子にこう言った。

「いいことがあるじゃない」

「いいことって？」

華奈子は美奈子の今の言葉に顔を向けた。そうしてまた話をするのだった。

第三百五十七話 完

2
0
1
1
・
1
・
3
1

第三百五十八話

第三百五十八話 牛乳のいいところ

美奈子はだ。牛乳を幾ら飲んでみても胸が大きくならなかつたり背が高くならなかつたりしたらどうしたものかと今から心配する華奈子にだ。微笑んでこう話すのだった。

「ほら、華奈子も言つてたじゃない」

「あたしが？」

「そうよ。牛乳は栄養の塊だつて」

話すのはこのことだった。

「だからね」

「飲んでもいいのね」

「胸や背に関係なくね」

「身体にいいから」

華奈子は美奈子の話を聞いているうちにだ。次第に気を取りなおした。そのうえで彼女の話をもさらに聞くのだった。

「それでなのね」

「そうよ。だからそれでもいいじゃない」

「言われてみればそうね」

華奈子も頷いた。

「それでもね」

「骨は間違いなく強くなるじゃない」

「カルシウムも多いしね」

牛乳のいいところの一つだ。牛乳を飲むだけでだ。カルシウムはかなりの量が採れるのだ。無論他の栄養もかなりあるのである。

「身体が頑丈になるわよ」

「カルシウムつて髪の毛にもよかつたっけ」

「髪の毛はカルシウムでできてるからね」

「じゃあそれも踏まえてなのね」

「そうよ。飲めばいいから」

美奈子も笑顔で話す。

「胸や背だけじゃないから」

「髪の毛って綺麗な方がいいしね」

「華奈子今でも凄く髪綺麗よ」

それは確かだった。華奈子のそのロングヘアはさらさらとしてき
らきらとしている。そこには天使の輪が見える程であった。そして
それは。

「美奈子もじゃない」

「私もかな」

「そうよ。何か最近さらに綺麗になってるけれど」

「じゃあそれがなのよ」

美奈子はここでも笑顔になって華奈子に話した。

「牛乳のお陰よ」

「カルシウムだからなのね」

「そういうことよ」

「ううん、じゃあやっぱり牛乳って」

「飲むだけでかなりいいのよ」

美奈子が結論を言った。

「だからね。胸とか背とかを考えなくても」

「それでも飲めばいいのね」

「美味しいし」

「そうそう。牛乳って凄く美味しいからね」

それでなのだった。二人はだ。

「じゃあまたね」

「飲もうね」

味も楽しみながらだ。牛乳を飲んでいくのだった。身体にいいそ
の牛乳を。

第三百五十八話

完

2
0
1
1
・
1
・
3
1

第三百五十九話

第三百五十九話 牛乳から

相変わらず牛乳をよく飲む華奈子と美奈子だった。そうした中でだ。ある日美奈子が華奈子に対してこんなことを話したのだった。

「牛乳からバターとかチーズとか作るわよね」

「ヨーグルトとかクリームよね」

「牛乳から色々なものができるけれど」

「まずはこのことから話す美奈子だった。

「その中に面白いものがあるみたいよ」

「面白いものって？」

「昔、奈良時代とかの頃だけれど」

「ああ、あの奈良に都があった頃よね」

「そう、その頃のことだけれどね」

その頃のことだ。今度はこう華奈子に話した。

「牛乳から作った食べ物があったのよ」

「あれっ、日本って昔から牛乳飲んだり食べたりしてたの」

これは華奈子にとっては意外なことだった。和食にそうした牛乳なり乳製品なりはないからだ。それでまずはそのことを意外に思ったのである。

「そうだったの」

「そうなのよ。長い間忘れられたけれどね」

「そうよね。江戸時代とかないからね」

「それでね」

このことを話してからだ。美奈子は本題に入った。

「その牛乳から作った食べ物だけれど」

「どんなのがあったの？」

「結構面白いものがあったみたいなの」

「こう華奈子に話した。」

「どつやらね」

「面白いものね」

「そうよ。ちよつと興味出た？」

「ううん、あたし牛乳好きだし」

まずはここから答えた華奈子だった。

「チーズとかヨーグルトも好きだし」

「牛乳使ったお菓子も好きよね」

「大好きよ」

つつい笑顔になって答えた華奈子であった。

「それじゃあそついうのを」

「ええ。私達で作つてみない？」

美奈子が言いたいのはそついうことだった。その日本に昔あつたその乳製品をだ。自分達で作つて食べてみようというのである。

そのことをだ。華奈子に対して提案するのだった。

「どう、それは」

「いいわね」

華奈子にはこりとした笑顔のまま美奈子の言葉に頷いた。

「じゃああたし達でね」

「作つてみましょうね」

「それでね」

作つてからのこともだ。華奈子は早速話したのだった。

「仲良く食べようね」

「ええ、そうしましょう」

こつ話してだった。二人でその昔日本にあつた乳製品を作つて食べてみることにしたのだった。二人にとっては料理も楽しいもの一つなのだ。

2
0
1
1
·
2
·
8

第三百六十話

第三百六十話 日本の乳製品

二人はまず本で調べることからはじめるのだった。その日本に昔あったという乳製品のことをだ。はじめるのはそこからのなだった。

二人で図書館で本を開いているとだ。そうしたものがあった。

「ふうん、醍醐とか酪とかってというのがあるのね」

「そうね」

その名前を読んで二人で話す。大学の図書館はかなり広い。その中の一席に二人集まってだ。そのうえで図鑑やそういったものを開いているのだ。

「何か色々あるみたいだけれど」

「そうね。何か作り方は」

一番大事なそれについて調べる。するとわかったことは。

「牛乳を煮ていくのね」

「そうね。それで」

「ええと、牛乳から酪っていうのになるのね」

まずは華奈子が言った。

「煮ていくうちに」

「そうね。それで酪をさらに煮て」

「酥っていうのができるのね」

「そうみたいね」

美奈子は真剣な顔で華奈子のその言葉に頷く。

「じゃあ酪とか酥ってあったためた牛乳やチーズやバターみたいなものかしら」

「ううん、そうなのかな」

「どうなのかしらね」

二人共そういったものがどんなものか今一つ想像がつかなかった。ただ牛乳を煮ていくことだけはわかった。そしてその煮方という

とだ。

「ゆつくりとかきあげながら煮ていくのね」

「へらとかそういうのでね」

「それもずつとそうしないといけないみたいね」

「牛乳って焦げつきやすいからね」

牛乳のこの問題点についても話される。

「そこは注意して、みたいね」

「そうね」

華奈子は美奈子のその言葉に頷いた。

「じゃあ酪は」

「練乳かしらね」

「それで酥はバターかチーズ？」

「そんなところかしら」

「それで醍醐がバターオイルかしら」

こう二人で考えていく。

「そんな感じの食べ物なのかしら」

「そうかも。何か酥は牛乳を煮た時に上にできる膜を重ねたものと

も書いてるわね」

「あつ、そうね」

華奈子はまた美奈子の言葉に頷く。本のそのことが書いてある部

分を見ながらだ。

「じゃあチーズなのかしら」

「それに近いみたいね」

「どっちにしる牛乳を煮て作るのはね」

「どれも一緒よね」

「それは間違いないみたいね」

このことは確実に言えた。そしてだ。

二人はだ。あらためて話していく。

「牛乳を煮ていったね」

「どれもそうして作っていくのね」

それはわかったのだった。後は本の大事なところを美奈子がノートに書き写した。そのうえで図書館を後にしてだ。スーパーで牛乳を買うのだった。料理に使う為に。

第三百六十話 完

2011・2・8

第三百六十一話

第三百六十一話 煮はじめ

二人は牛乳を買ってだ。それからだった。

二人でだ。煮るのであった。

「さて、と。この牛乳を」

「三時間位煮るみたいね」

美奈子が華奈子に話す。

「大体それ位ね」

「ううん、時間かかるのね」

「それが蘇で」⁸

それからだというのだ。

「あとは酪、それに醍醐でね」

「とにかくじつくりと煮ていくのね」

「そうよ。ただここで大事なのは」

「何？その大事なのは」

「焦がさないことよ」

それが大事だというのである。

「それは気をつけてね」

「そういえば牛乳って焦げやすかったわね」

それを聞いてだ。華奈子はすぐに言った。

「そこが問題だったわね」

「そうよ。だからここはね」

「今度は何なの？」

「魔法でゆっくりとお料理をしましょう」

そうしてはとだった。美奈子は華奈子に提案した。

「そうすればどうかしら」

「ああ、牛乳を焦がさせない為にはいつもかき混ぜないといけないわね」

「そう。今みたいだね」

実際に二人は牛乳を常にへらでかき混ぜている。そうして焦げないようにしているのだ。そうした料理への知識も既に備えているのだ。

「それを魔法でね」

「いいわね、それ」

華奈子は美奈子の提案に笑顔で頷いた。そうしてであった。

二人はだ。へらを魔法で操りだした。

それで三時間程かき混ぜるとだ。するとだ。

牛乳がだ。姿形を変えた。それは。

「あれっ、何かこれって」

「そうよね。チーズみたいよね」36

「何かね」

そうしたものになってきたのだ。

「それがバターか」

「そんな感じよね」

「こうした食べ物なのかしら」

華奈子は魔法でへらをかき混ぜながら言う。

「蘇とかって」

「そうみたいね。じゃあ後は」

「三分の一は置いていてね」

「それを蘇にしてよね」

「残りを酪と醍醐にしていく感じね」

「そうなるわね」

こうして二人は少しずつその形作られていくものを置いていって冷蔵庫で冷やしていく。そうして古来の乳製品を作っていくのであった。

2
0
1
1
·
2
·
1
4

第三百六十二話

第三百六十二話 食べてみると

作ったその乳製品を冷蔵庫で冷やしてだ。食べるのは次の日だった。

学校から帰るとすぐに冷蔵庫からその三つを取り出してだ。二人で食べてみた。

するとだ。その味は。

「あつ、甘いね」

「そうね」

二人はその三つを食べてみてそれぞれ言った。

「何かその甘さって」

「自然な甘さよね」

「うん、お砂糖も入っていない」

「そんな甘さね」

こう話してだった。その素朴な甘さを楽しんだ。そうしてだった。

食べ終えてだ。その感想は。

「御砂糖の入っていない甘さっていつもの」

「いい感じね」

「あとね。気になるのはね」

華奈子は食べながら話す。

「似てない？ミルクキャンデーに」

「そういえばそうね」

美奈子も華奈子のその言葉に頷いた。

「味はもつと素朴だけれど」

「そうよね。感じとか似てるわよね」

「ええ。昔の人ってこうしたのを食べてたのね」

「こんなに手間隙かけて作って食べてたんだ」

華奈子は腕を組んでだ。こんなことを言った。

「それに昔って牛乳とかって」

「飲んでる人、殆どいなかったから」

「ご馳走だったのね」

「そうなるわね」

「こう話していった。またあることがわかったのだった。

「うっん、今じゃ時間かけたら作られるから」

「私達幸せよね」

「少なくとも牛乳買えば素材があるからね」

「それを考えればね」

「幸せになったわね」

「本当にね」

そのことがわかったのであった。時代が変わればだ。

あらためてその乳製品を食べてみる。するとその味は。

「さつきよりも何か」

「深い味に感じるわよね」

「ちよつと。見方が変わったただけでね」

「そうなるわね」

そうなのだった。先程までとだ。味が変わっているように、さらに深いものに感じられたのだ。その深いものが何かということであった。

「歴史かしら」

「それなの？」

「ええ、そうじゃないかしら」

美奈子が華奈子に言う。

「だから。さつきより深い味に感じるのかしら」

「歴史を知ったからっていうのね」

美奈子の言葉に華奈子は考える顔になった。今二人はそうしてだ。その乳製品を食べていたのだ。

第三百六十二話

完

2
0
1
1
・
2
・
1
4

第三百六十三話

第三百六十三話 一匹とミルク

ライゾウとタロがだ。小田切君に言っていた。

「今日はさ。お水とは別に」

「ミルクくれるかな」

「ミルク？牛乳かい？」

まずはこう考えた小田切君だった。

「それだったら冷蔵庫にあるから。すぐに出すけれど」

「いやいや、おいらは猫用のミルクじゃないと駄目なんだよ」

「僕は犬用でね」

「ミルクにも猫用とか犬用ってあるんだ」

「あるよ。ちゃんとな」

「だって。人間には人間のミルクがあるじゃない」

こう小田切君に話すのだった。

「それと同じだよ」

「だからね。僕達もね」

「それでなんだ」

「ペットショップに売ってるぜ」

「だから買って来て欲しいな」

「うん、わかったよ」

小田切君もだ。素直に頷くのだった。

「丁度僕もお昼買いに行くしね」

「お昼か」

「そういえばそんな時間だね」

「だからだよ。ちよつと買って来るよ」

こうしてだった。小田切君はだ。

自分の昼食をかうついでにだ。彼等のミルクもかうのであった。ペットショップに行く。するとだ。

「ああ、猫用と犬用ですね」

「ありますか？それ」

「はい、両方共ありますよ」

店員さんは素直に答えるのだった。

「じゃあどの種類がいいですか？」

「どの種類って」

「色々な種類があるんですよ」

こうだ。笑顔で話す店員さんだった。素敵な顔立ちの若いお兄さんだ。同性愛者が見ればすぐに声をかけそう。そんな美男子の店員さんだ。

その店員さんがだ。また小田切君に尋ねる。

「それでどれがいいですか？」

「ああ、適当でいいですよ」

何種類と言われるとわからないので。こう答える小田切君だった。

「まあ適当で」

「そうですね。それじゃあ」

こうしてだった。店員さんに任せてそのミルクをそれぞれ買った。

「どっちも粉でいいですよね」

「えっ、粉ミルクですか？」

「液体のミルクもありますけれど」

こう言うのであった。店員さんはだ。

「どっちにしますか？」

「粉もあるんですよ」

小田切君はここではじめてそのことを知ったのであった。猫用のものも犬用のものもだ。どうやらかなりの種類があるようだ。そうも考えるのだった。

2
0
1
1
·
2
·
2
2
3

第三百六十四話

第三百六十四話 液体に

店員さんに粉ミルクを出されてだ。小田切君はこう返した。

「粉だとすね」

「駄目ですか」

「ううん、どっちも味には五月蠅くて」

特にライゾウがあつた。ルーツがイギリスにあるスコティッシュ

ユフォルドなのだ。味にはかなり五月蠅い困つた猫なのである。

「粉だと」

「飲まないんですね」

「新鮮な食べ物や飲み物が好きなんですよ」

実際にその通りなのである。

「本当にね」

「それじゃあ生の方がいいですね」

「はい、生の飲み物で」

「わかりました」

実際に頷いてくれた店員さんだつた。

「それじゃあ液体のミルクを出させてもらいますね」

「御願ひします。じゃあそれで」

これで話が終わる筈だつた。本来ならばだ。

「ここです。店員さんがこんなことを言うのであつた。」

「実はこうしたミルク人間も飲めないってわけじゃないんですよ」

「そうなんですか」

「ドッグフードやキャットフードもそうですし」

「ああ、そういえばそうらしいですね」

「はい、まあ普通は食べませんけれど」

それでもだ。中にはだというのだ。

「外国の方が人間の食べ物だと思われることがあつたりします」

「そんなこともあるんですか」

「はい、キャットフードは殆どの国で本当に猫の餌にしかならない魚が多いですが」

「実際にそうなんです」

「はい、それでも間違えて食べる人はいます
そうだとするのである。」

「まあ食べられないこともないので」

「いざという時はですね」

「猫や犬は猫まんまにしておかずということ
できるというのだ。」

「どうですか？それは」

「遠慮します」

真顔で答える小田切君だった。

「やっぱり。犬や猫と御飯の取り合いはちょっと」

「だからですね」

「はい、止めます」

また言う小田切君だった。

「彼等にです。慎んで譲ります」

「そうした方がいいですね。やはり」

「人間同士でも食べ物の取り合いはよくないですし」

「ははは、そうですね」

「そうですね、やっぱり」

そんな話をしてだった。

小田切君は自分の昼食とライゾウ、そしてタロのミルクも買ったのであった。そこでそれぞれの食べ物についても考えたりもしたのであった。

2
0
1
1
·
2
·
2
3

第三百六十五話

第三百六十五話 研究所に帰って

研究所に帰った小田切君はだ。まずはライゾウとタロに対してだ。御飯とミルクを出した。

「はい、これね」

「ああ、有り難うね」

「じゃあ早速頂くね」

「うん、じゃあ一緒に食べようか」

ここでこう言う小田切君だった。

「皆で一緒にね」

「それが美味しいな」

「皆で食べてね」

「二匹もそれぞれ言う。」

「それじゃあ。皆で」

「楽しくね」

「うん。ところで博士は？」

小田切君は食べようとするとところで博士のことを尋ねた。

「まだ研究室の中なのかな」

「そうだよ。相変わらずだよ」

「研究に没頭してるよ」

「そうなんだ。まだなんだ」

博士は研究に没頭するとまさに寝食を忘れる。まさに三度の飯よりも研究が好きなのだ。問題はその研究の中身であるがだ。

「それじゃあ今は」

「研究が終わったら出て来るよ」

「それまではね。僕達はゆっくりしていればいいよ」

「そうだね。そうしようか」

いつものことだからだ。小田切君の反応も落ち着いている。

「御昼を食べながらね」

「だよな。そういえばさ」

「小田切君って最近」

「昼食を食べはじめながら。ライゾウとタロが小田切君にふと言った。どちらもいただきませすをしてからだ。そのうえで彼に声をかけたのである。」

「乳製品好きだよな」

「何でなの、それって」

「ワイン飲むからかな」

「そのせいではないかというのだった。」

「それでかな」

「ああ、ワインにはチーズか」

「そういうことだね」

「そのせいかなって思うけれどね」

「自分ではそう思うのだった。」

「ワインには合うしね」

「そうだよな。ワインはやっぱりな」

「チーズだよな」

「他にも色々合うけれど」

「伊達に昔から世界中で飲まれている酒ではないのだ。」

「赤でも口ゼでも白でも。チーズは合うからね」

「それ考えるとワインも凄いよな」

「全くだよな」

「だからか。それで」

「最近乳製品よく食べるんだ」

「二匹は小田切君の最近の嗜好がおおよそだがわかった。」

「彼も研究所に来てだ。ワインをよく飲むようになった。それは博士が好きだからだ。影響されるのはそれまででその特異な人格や異様な才能は流石に影響されてはいなかった。」

第三百六十五話

完

2
0
1
1
・
3
・
2

第三百六十六話

第三百六十六話 スイーツにも

華奈子と美奈子はだ。他の四人にもその酪やそういった日本の乳製品について話していた。それ等が一体どういったものかをだ。

「作るのに時間がかかるけれどね」

「手間もかかるけれど」

「それでも美味しいわよ」

「身体にもいいし」

「そうみたいね。バターやチーズと同じものだからね」

最初に応えたのは梨花だった。

「身体にいいのは当然ね」

「美味しいのもね」

続いては美樹だった。彼女は味について話した。

「それもわかるわ。牛乳から作るから」

「美味しく栄養があるのね」

春奈はその目をにこやかなものにさせて話す。

「それっていいわよね」

「そうよね。話聞いてたらミルクキャンデーみたいな感じもするけれど」

赤音はこう考えて頬を緩ませている。

「優しい甘さで。食べたなら病みつきになりそうよね」

「それがねえ。作るのにやたら手間がかかるから」

華奈子は自分の頭の後ろに右手をやって。そのうえで苦笑いの顔で述べた。

「ちよつと。病みつきにはね」

「なれないのよね」

美奈子も彼女にしては珍しく困った顔になっている。

「三時間もね。あつためていつもへらで掻き混ぜてだから」

「少しでも焦げさせたら駄目だから」
「こう四人に話す二人だった。」
「だから。そうおいそれとは」
「作られるものじゃないのよ」
「そうなの。じゃあ」
「ちよつと。今からっていうお菓子じゃないのね」
「それだと。生クリームのお菓子みたいなのにはいかないから」
「そこが問題よね」
梨花、美樹、春奈、赤音の順に言っていく。
「それ考えたら普通の生クリームのお菓子とかの方がいいかしら」
「手頃だしね」
「ずっと簡単に作られるし」
「それでも充分以上に美味しいしね」
「じゃあ。今度は」
「皆で洋菓子がいいかしら。ケーキか何かをね」
華奈子と美奈子も言う。
「そういうのがいいわよね」
「美味しいし」
「ここに最大の理由があつた。」
「だから。皆でね」
「ケーキ。どうかしら」
二人がこう提案するとであつた。他の四人もだ。
「楽しそうな笑顔になつてだ。こう答えるのだった。」
「うん、それじゃあね」
「それにしましょう」
これで決まりだった。六人でだ。ミルクをたっぷり使ったケーキを作ることになつたのである。

2
0
1
1
·
3
·
2

第三百六十七話

第三百六十七話 博士とミルク

小田切君も牛乳を飲んでいた。そこにだ。

はた迷惑な研究を終えた博士が研究室から出て来てだ。そのうえで彼に尋ねたのだった。

「ふむ、牛乳を飲んでおるのか」

「ええ、実は好きなんです」

こつその博士に答える小田切君だった。

「ライゾウとタロにも買ってますよ」

「よいことじゃ。牛乳を飲むのはな」

それはいいことだと言う博士だった。

そのうえでだ。博士はこんなことも言った。

「身体によい。牛乳と野菜で生きることができる」

「ベジタリアンですね」

「野菜や果物だけでも不十分なじゃ」

それだけではというのである。実は博士は栄養学にも造詣が深い。

医学博士でもあるからそれも当然のことと言えばそうなる。

「乳製品も必要じゃ」

「牛乳もそうですね」

「そうじゃ。モンゴル人を見ることじゃ」

ここで博士が言ったのは言わずと知れた草原の民である。

「羊と乳製品だけで生きておるな」

「そういえば確かに」

「乳製品だけでかなりの栄養が得られるのじゃ」

よく言われることだがだ。それを博士も言ったのである。

「牛乳はよいものじゃ」

「そうですよね。カルシウムが豊富ですしね」

「わしも好きじゃしな」

「ここでわかる博士の嗜好の一つだ。

「乳製品自体も好きじゃ」

「じゃあヨーグルトやチーズも」

「よいのう。ヨーグルトはデザートに最適じゃ」

まさにそれだというのだ。

「そしてチーズは欧州の料理には欠かせぬな」

「ですね。パスタにも上からかけて」

「あれがよいのじゃ」

パスタの味をさらによくするものの一つだ。パスタはそこにガーリックとチーズがあればだ。まさに無敵の料理となるのだ。

それを話してだ。博士は実際にだった。

「さて、そんな話をしておると」

「パスタですか」

「食べたくなつたのう。トマトにオリーブ、ガーリックをたっぷり使ったパスタにじゃ」

そこにさらにだというのだ。

「粉チーズをかけてじゃ」

「それでいきますか」

「料理用ロボットに言っておこう」

博士の研究所ではそのロボットが料理を担当している。どんな料理でも作ることができる、かなり優秀なロボットなのである。博士の自信作の一つだ。

「夕食はそれじゃ」

「パスタは何にしますか？」

「スパゲティじゃな」

それだというのだった。

そしてそう話してだった。博士は小田切君にこう言った。

「わしも一杯貰えるかの」

「はい、どうぞ」

こうしてだった。博士はそのチーズをふりかけるパスタの前に牛

乳を楽しんだ。そしてそれを食べてからであった。

第三百六十七話 完

2
0
1
1
・
3
・
8

第三百六十八話

第三百六十八話　コンビニに行く前に

夕食のチーズをたっぷりとかけたパスタを楽しんだ博士はだ。その後でだ。小田切君も家に帰ったところでふらりと外に出た。それはワインのつまみを買う為にだ。

「またチーズじゃな」

ワインのつまみとして最もポピュラーなものの一つである。それを買いにコンビニに向かう。

しかしそのコンビニの前にだ。博士の嫌いな面々がいた。

町のチーマー達だ。彼等を見てだ。

博士はすぐにであった。その手に電気鞭を持ち出して。

そのうえで彼等を攻撃しだした。鞭で打つ瞬間に一億ボルトの電流を流す。

「な、あの博士か!？」

「いきなり出てきやがったのかよ!」

「ここ福岡だぞ!」

福岡までだ。博士はあの車椅子を飛ばして向かったのだ。研究所の近所でもよかったのだが、だ。何となくそうしたのだ。

そして福岡のチーマー達をだ。容赦なく殺戮するのだった。

一億ボルトの電流を浴びればだ。ひとたまりもない。彼等は次から次にと黒焦げになっていく。まさに大量殺戮である。

そしてコンビニの前のチーマー達を皆殺しにしてからだ。こんなことを言った。

「さて、いい運動になったのう」

「七人も殺してそんなことを言うなんて恐ろしいばい」

「やっぱりこの博士普通じゃなかとよ」

福岡の人間から見てもだ。そうとしか思えないことだった。

しかし人の命なぞ何とも思わない博士は平然とコンビニに入って

だ。ドン引きしている店員さんからチーズを買ったのだった。

そのうえで自分の研究所に戻ってだ。ハンガリー産のワインを二本空けるのだった。

チーズと共にそのワインを楽しむ博士に。ライゾウとタロが尋ねた。

「何かいいことあったのかよ」

「にこにこしてるけれど」

「少し遊んできたのじゃ」

そうしたとだ。あっさりと話す博士だった。

「それでなのじゃよ」

「遊んできたって？」

「また誰か殺してきたのかな」

二匹もすぐに察しがついた。博士の趣味の一つに大量殺戮があるからだ。

「何処かの暴走族か不良かヤクザ屋さんか」

「チンピラとか？博士そういう相手が嫌いだからね」

「コンビニの前を掃除しただけじゃ」

実に素っ気ない返事である。

「ただそれだけのことじゃ」

「コンビニの前だとチーマーだな」

「それだね」

このことも察した彼等だった。伊達に一緒に住んでいるわけではない。

「それにしても。チーマー達も運が悪いよ」

「たまたま博士に会ってそれでだから」

最早博士がどれだけの人間を殺してきたか。把握している者はいない。二百億歳のうえにだ。誰もこれまで食べた米の粒数など覚えていないからだ。

「それでチーズを買って来てか」

「ワインも飲んで機嫌がいいんだ」

「このワインはハンガリーのものじゃが」

博士はワイン通だ。それもかなりのの。その博士の言葉だ。

「日本のチーズとも合う」

「普通のチーズなのにか」

「会っただね」

それはライゾウにとってもタロにとっても意外なことだった。日本のチーズはだ。実はどんな国のワインにも合う逸品だったのである。

第三百六十八話

完

2011・3・8

第三百六十九話

第三百六十九話 ミルクのお菓子

華奈子達はそのお菓子を作ることになった。六人共エプロン姿でキッチンにいる。その中でだ。

「ミルクケーキね」

「それなのね」

「そう、それなの」

美奈子が赤音と春奈に述べる。

「今からそれを皆で作ろう」

「うん、わかったわ」

「それじゃあね」

赤音と春奈は美奈子のその言葉に頷く。そのうえでだ。

それぞれ役割分担をしてケーキを作っていく。その中でだ。

華奈子がだ。スポンジを作りながら美樹と梨花に話すのだった。

「ねえ、何かね」

「何か？」

「何かって？」

「真っ白いケーキになりそうね」

こう二人に話すのだった。

「ミルクばかりだとね」

「そうね。今回は苺とか使わないから」

「そうなるわね」

美樹と梨花も言われてみてだ。華奈子のその言葉に頷いた。

そしてさらにだ。華奈子はだ。

ケーキを作っていくながらだ。今度は美奈子に述べた。

「ううん、やっぱり真っ白になってくわね」

「ええ。本当にお城みたいね」

「そうよね」

「こつ美奈子に話すのだった。するとだ。美奈子も言うのだった。」

「お城を食べるのね。私達って」

「お城をね」

「白鳥のお城っていうか」

美奈子はここでこんなことを話した。

「そうした感じよね。白鳥のね」

「ここまで真っ白だとね」

「けれどそれもね」

「そうね。いいわね」

美奈子も華奈子も笑みを浮かべる。そしてだ。

「真っ白なケーキね」

「白のお城ね」

「いかも身体にいいから」

美奈子はこのことを満面の笑顔で話す。

「綺麗で美味しいだけじゃなくて」

「いいこと尽くめね」

「そうよ。このケーキはね」

まさにそうだというのだ。そんな話をしながらだ。

六人は遂にそのケーキを作った。西洋のお城の形をしている。

「できたし」

「じゃあ後は皆で」

「食べましょう」

こつ話してだ。そうして。

それぞれそのケーキを口にすする。その味は。

「美味しいっ」

「本当にね」

六人共にこりと笑って言い合う。確かな美味がそこにあった。

第三百六十九話

完

2
0
1
1
・
3
・
1
4

第三百七十話

第三百七十話 紅茶にも

今田先生と今日子先生はこの時もだった。

二人仲良く紅茶を楽しんでいる。その紅茶は。

「やっぱり朝はね」

「これよね」

朝の紅茶であった。かなり白が強い紅茶だ。

「ロイヤルミルクティーよね」

「朝って気持ちになるわね」

その紅茶を飲みながらこうした話をしている。そのうえで。

今田先生がだ。今日子先生に話した。

「ねえ今日子ちゃん」

「何、香ちゃん」

「今度。牧場に行かない？」

にこやかに笑いながらこう提案するのである。

「どうかしら、それは」

「あつ、美味しい牛乳飲みに行くのね」

「他にはアイスクリームやソフトクリームをね」

「いいわね、それ」

にこりと笑って頷く今日子先生だった。そうしてである。

今日子先生はだ。こんな提案をした。

「八条牧場はどうかしら」

「あそこの牧場に行くのね」

「あそこは。物凄くいい乳牛が一杯いるそうだから」

それでだというのである。

「だからそこにしない？」

「そうね。いいわね」

今田先生がだ。今度は提案に頷く番だった。

にこやかに笑って今日子先生のその提案に頷く。そしてこう話す。

「牛乳は。何にでも使えるから」

「パンと最高に合うからね」

「オートミールにもいいしね」

「パン粥なんてどう？」

「それもいいわね」

洋食、それも朝食系統の話である。

「お昼はそれにしようかしら」

「いいわね。じゃあお昼は軽くそれにしましょう」

「そうしてね」

今田先生の言葉は続く。話はそのままであった。

「八条牧場にもね」

「今度の休みにでも行きましょう」

「その時は皆も一緒にね」

華奈子達のことは忘れていない。そうして。

先生達はロイヤルミルクティーを飲む。その中でだ。

牛乳の甘さと紅茶の苦さを堪能していく。

今田先生がだ。その二つの味を楽しみながらまた今日子先生に話す。

「この紅茶はセイロン産だけれど」

「牛乳は日本のよね」

「それでも。美味しいわね」

「そうね。絶妙なまでに合ってるわね」

「セイロンに負けていないわ」

それが日本の牛乳だとだ。笑顔で話しながら飲む先生達だった。

2
0
1
1
·
3
·
1
4

1110

第三百七十一話

第三百七十一話

ミルクの後で

ミルクのケーキを堪能した後でだ。赤音はだ。

春奈にだ。こう提案されたのである。

「ねえ。いいかしら」

「んっ、どうしたの？」

「赤音ちゃんの魔法って光よね」

彼女の魔法からだ。話をするのだった。

「それで私の魔法は水だけれど」

「それに何かあるの？」

「組み合わせてみたらどうかしら」

考える顔での言葉だった。

「それはできるかしら」

「魔法と魔法を組み合わせるの」

「そうよ。それしてみたらどうかしら」

「前にもやったことあったわよね」

赤音は少し前を振り返ってからだ。こう春奈に述べた。彼女もお
つちよこちよいだが馬鹿ではない。それでこう言っているのである。

「魔法と魔法を組み合わせるって」

「だからどうかしら」

また言う春奈だった。

「御互いに魔力も。魔法の質もあがってるし」

「その二つを組み合わせたら」

「どう？赤音ちゃん」

「わかったわ」

赤音は春奈のその言葉にだ。笑顔で頷くのだった。

そしてそのうえでだ。春奈に対して述べた。

「じゃあやってみよう」

「ええ。ひよつとしたら凄いことになるから」

だからだともいうのである。

「やってみる価値はあるから」

「何でもやってみるね」

これは赤音の考えである。彼女は基本的に動くタイプだ。それが悪い方向にいつてしまった時にだ。おつちよこちよいになつてしまふのだ。

「それで道が開けるから」

「それじゃあ。私達だけでなく」

「あれつ、二人だけじゃないの」

「そう、皆でしましょう」

これが春奈の考えだった。

「六人で一度にね」

「何か凄くない？」

赤音はその話を聞いて述べた。

「六人だと」

「そうかしら。博士のことを考えたら」

六人にとつてのライバルだ。その博士のことを考えるとだ。

春奈はだ。やはりこう言つしかなかったのだ。

「皆で力を合わせないとね」

「そういうことなの」

「とりあえず他の皆にも言おうかしら」

「ううん、ここは」

「ここは？」

ここだ。赤音は彼女にしては珍しく慎重になつてだ。春奈に対して言うのだった。そして彼女が言ったことは何なのか。それが問題だった。

2
0
1
1
•
3
•
2
3

第三百七十二話

第三百七十二話

まずは二人で

赤音はだ。春奈に対してだ。こう言うのだった。

「あのね、まずはね」

「まずは？」

「二人でやってみない？」

これがだ。赤音の春奈への提案だった。

「試しにね。二人でやってみない？」

「試しになの」

「そう。私と春奈でね」

その二人でだというのだ。こう話してだった。

あらためてだ。赤音は春奈にこんなことも話した。

「それで早速だけれど」

「早速？どうするの？」

「やってみよう」

そうしてはどうかというのである。動く時はすぐに赤音だった。

さらにだ。赤音は春奈にこうも話した。

「体操吹くもあるし」

「体操服って」

「だから。体操着と半ズボンによ」

彼女達の学校の体操服である。半ズボンは黒である。彼女達の学

校はスパッツではない。そしてブルマーというものは知らないのだ。

「それに着替えて実際にやってみよう」

「えっ、着替えるの」

「うん、身体も動かすのよね」

「あまり動かさないんじゃない」

「あっ、そうかな」

ここに二人の魔法スタイルの違いがあった。

赤音はかなり動くのだ。クラウンではドラムだがそこでもなのだ。彼女はとにかく激しく動いて魔法を繰り出すスタイルなのである。それに対してである。春奈はだ。

あまり動かない。クラウンのキーボードの時もだ。あまり動かず冷静にだ。魔法を使っていくのである。赤音とはまさに正反対だ。

それでだ。そうしたことを踏まえて春奈は言うのだった。

「体操服じゃなくてね」

「法衣がいいかしら」

「それがいいと思うけれど」

そちらだというのだ。そしてである。

二人は結局だ。それにするのだった。

「どうかしら」

「そうね。私達魔女だし」

赤音の考えもそこに至った。そうなればだ。

彼女はだ。春奈に対してこう述べたのだった。

「わかったわ。それじゃあね」

「それでいいわね」

「ええ、法衣でね」

「やってみましょう。二人で」

こう話し合っただ。そのうえで、だった。

二人は放課後。春奈の家の庭でだ。それぞれの法衣に着替えて。呼吸を合わせてだ。魔法を出し合ったのだった。

その日は夕方の遅くまでお互いの魔法を合わせてみた。その中でだ。二人共少しであるが共に同じものを見ることができたのだった。

第三百七十三話

第三百七十三話

この二人も

美樹と梨花もだ。

二人でだ。こう話をしていた。

「どう？二人で魔法をやってみない？」

「二人で？」

「そう、私が木の魔法を使うでしょ」

美樹からの言葉だ。それをしてからだというのだ。

「それで梨花がね」

「私が土の魔法を使うのね」

「そう。それどう？」

「こう梨花に尋ねるのである。」

「悪くないでしょ」

「そうね。むしろいいわね」

悪くないどころかだ。肯定する梨花だった。

「けれど。難しいわよ」

「難しいのは承知よ」

美樹は強気の言葉で述べた。

「けれどやってみる価値はあるでしょ」

「あえてやってなのね」

「そう、ものにするのよ」

「二人で一つの魔法を使ってみる」

「しかもこれまでよりも強い魔法でね」

こうした条件を着けてだというのだ。

そうしたことを話してだった。彼女達もだ。今度は梨花から話した。

「じゃあ。とりあえずはね」

「やってみる？実際に」

「ええ、そうしましょう」

こう話をして。二人の方針も決定した。まずはやってみる、考えるより先にだ。実際に動いてみてそこから色々としていくというのだ。

だが、だった。二人もだった。

どの服ですかでだ。話になった。

「やるのはいいけれど」

「法衣でやるんではよ、やっぱり」

「それよりもよ」

梨花は首を捻りながら美樹に話す。

「今は学校だしね」

「学校だからなのね」

「ええ。体操服ではない？」

学校にいるから。それではどうかというのだ。

「どうかしら、それで」

「そうね。汚れてもいいしね」

美樹も梨花の言葉に頷く。体操服は汚れる為にある服だ。しかも動きやすい。

「それじゃあね」

「それでいいわね、体操服で」

「ええ、いいわ」

美樹の言葉に頷く。それでだった。

全ては決まった。体操服ですることになった。話が決まればだ。

二人はだ。すぐに体操服を出して着替えに入ろうとする。着替えは一瞬で終わった。それからだった。

「じゃあ、校庭に出てね」

「はじめましょう」

こう話してだ。二人はすぐに学校の校庭に向かった。

第三百七十二話

完

2
0
1
1
・
3
・
3
0

第三百七十四話

第三百七十四話 一つの疑問

体操服になつて校庭に向かう美樹と梨花。ここでまた、だった。

美樹がだ。ふと気付いた顔になつてだ。階段を降りながら隣にいる梨花に尋ねた。

「ねえ、いいかな」

「どうしたの？」

「今私達上は体操服で」

白のだ。何処の学校でも同じ体操服である。

「それで下半ズボンよね」

「それがどうかしたの？」

「何か昔ブルマーつてあつたそうだけれど」

彼女達は今は黒の半ズボンだ。

「それってかなり恥ずかしい格好だったみたいね」

「下着と変わらなかつたみたいね」

「そんな格好で体育とかしてたのね」

美樹は眉を顰めさせて言った。

「ちよつとね。それはね」

「嫌なのね」

「私駄目」

首を横に振つての言葉だった。

「そういう服普通に着られないわ」

「そうね。私もね」

「梨花も駄目なのね」

「ええ、着られないわ」

実際にそうだと話す梨花だった。彼女にしてもだ。そうした服はというのだ。もう何があつても絶対に着られないような服なのだ。

「無理よ、それは」

「何で昔そんな服があつたのかしら」

「わからないわ。ただね」

「ただ？」

「今は誰も着てないわよね」

「それこそだ。絶滅危惧種となっている。」

「何処の誰も」

「そうね。本当にいないわよね」

「それだったらよ。なくなった理由はね」

「やっぱり。恥ずかしいからなのね」

「普通に恥ずかしいわよ」

その部分を強調して言う梨花だった。

「絶対にね」

「そうよね。私もだし」

「だからなくなつたのよ」

着ていると恥ずかしい、それならばだというのだ。

「今もうないのはね」

「そういうことなのね」

「そう思うわ。半ズボンだって」

二人が今着ているだ。その半ズボンですらというのだ。

「ちよつと油断したら隙間から見えそうになるから」

「そうなのよね。そこがね」

「問題あるのに」

「ブルマーなんてね。とてもね」

こんな話をしてだった。二人は校庭に出る。そうしてそこでだ。

二人一緒に魔法を使おうとするのだった。だがそこには既に。

2
0
1
1
·
3
·
3
3
0

第三百七十五話

第三百七十五話 双子も

華奈子と美奈子もだ。話をしていた。

「それでだけれど」

「あれよね。魔法よね」

「そう、それなの」

美奈子は華奈子のその言葉に頷いて答えた。

「少し考えてるけれど」

「考えてるって？」

「前にもやったと思うけれど」

ここの前置きしてからだ。美奈子は華奈子に対して話す。

「私達の魔法を。二人同時に使ってたね」

「同時に使うだけじゃないわよね」

「これまでよりもレベルの高い魔法を使ってしまったよ」

それでだというのだ。それが美奈子の考えだった。

「どうかしら、それで」

「そうね。これまでクラウンで音楽を使って同時に魔法を放ったこ

とはあったけれど」

華奈子は博士と戦った時のその演奏の時を思い出して述べた。こ

のことは彼女達にとっては忘れられない戦いの記憶であるのだ。

「それでもね。そういうのはね」

「なかったわよね」

「ええ。音楽に頼らずに二人同時に」

また話す美奈子だった。

「してみましよう。どうかしら」

「乗るわ」

華奈子は楽しげに笑って答えた。

「その話。面白そうだし」

「それだけじゃないのね」
「あたし達も魔女としてレベルアップしないといけないしね」
「向上心だった。華奈子の今の言葉の元はそれだった。」
「だからね。それしましょう」
「わかったわ。華奈子なら言うと思ったわ」
「あれっ、言うと思ってたの」
「ええ、そうなの」
美奈子は微笑んで華奈子に述べた。
「華奈子の性格を考えたらね」
「あたしの性格をつて」
「華奈子はいつも前向きだから」
「微笑みをそのままにしての言葉である。」
「だから言うと思ってたわ」
「あたしってそんなにわかりやすい性格かな」
「わかるのよ。双子だから」
「彼女がわかる原因はそれだった。」
「そういうこともね」
「そう言われたらあたしも美奈子のことは」
「わかるのね」
「わかるわ。やっぱり双子だからね」
「そうね。お互いにね」
「よくわかると話すのだった。」
「わかるわよね」
「考えてみたら不思議な話だけれど」
「それでもわかるのよね」
御互いに微笑みになっていた。そのうえでのやり取りだった。かくしてだ。二人も魔法の修業に入るのだった。

2
0
1
1
·
4
·
5

第三百七十六話

第三百七十六話

二人の修業の場

華奈子と美奈子も修業を決めた。そしてだ。

次は何処で修業するかだ。そこはというと。

「お家にする？」

「お家もいいけれど」

「他の場所がいいかしら」

「そう思うけれど」

美奈子が華奈子に話す。

「今学校だから」

「それじゃあ。ここですか？」

華奈子はここでも積極的に述べた。やはり彼女は行動派である。

「もうさ。グラウンドで」

「いいわね。それじゃあ」

「うん、ここでしょう」

「体操服に着替えてよね」

美奈子は服装について話した。華奈子に問うたのである。

「それですよね」

「法衣でもいいんじゃないかって思うけれど」

「学校にいるから」

それでだというのだ。この辺りは几帳面な美奈子である。華奈子

と美奈子を比べるとだ。華奈子が行動的で美奈子が几帳面なのだ。

「それでね。体操服がいいわね」

「それじゃあ体操服に着替える？」

「そうしましょう」

こう話してだ。すぐにだった。

双子は体操服と半ズボンに着替えた。その姿でグラウンドに向かうとする。しかしであった。

美奈子はだ。自分で言ったがそれでもだった。体操服になるとだ。
「運動は。やっぱり」
「前よりかなりよくなったじゃない」
「それでも。何か今一つなのよ」
「こつ言つのである。美奈子はまだ自分の運動神経に不安を感じているのだ。ちなみに華奈子の場合はそのまま勉強になる。」
「言いだしっぺは私だから仕方ないけれど」
「体操服に苦手意識あるのね」
「実は」
「浮かない顔で答える美奈子だった。」
「そうなのよ」
「服で運動する訳じゃないし」
「じゃあ気にしなくていいのね」 38
「そう思っければね、あたしは」
二人並んで学校の廊下を歩きながらだ。華奈子は美奈子に話す。
「法衣だと思えばいいしね」
「法衣だと思えば」
「そう、体操服だけけど法衣って思えばね」
「問題ないというのが華奈子の考えだ。その考えで美奈子に言つのである。」
「それでいいじゃない」
「つまりは気の持ちようなの」
「そういうことだと思っければね」
「そう。じゃあ」
美奈子は華奈子のその言葉を受けて考えることにした。そうして気持ちにある意味において切り替えてだ。二人でグラウンドに出るのであった。

2
0
1
1
·
4
·
5

第三百七十七話

第三百七十七話　グラウンドに出ると

華奈子と美奈子が体操服姿でグラウンドに出ると。既にだった。

四人もだ。そこにいた。彼女達を見てだ。最初に華奈子が言った。

「皆も来ていたの」

「ええ、ちよっとね」

「魔法の練習をしようと思ってね」

それでだ。赤音と梨花が答えた。

見ればこの二人だけでなく春奈と美樹もだ。彼等も体操服姿だ。

その白い上着に黒い半ズボン姿でだ。六人は一緒になった。する
とだ。

リーダーの梨花がだ。こう言うのだった。

「多分皆考えてることは同じね」

「そうよね。魔法と一緒にやってみて」

春奈が梨花のその言葉に込めて話す。

「それで新しい一緒に使う魔法をね」

「生み出すのよね」

美奈子も言った。やはりだった。

六人の考えていることは全く同じだった。それがわかってだ。

梨花はだ。仲間達にあらためてこう言った。

「一組の組み合わせだけじゃあれね」

「限りがあるっていうのね」

「そう。だからそれぞれでやってみない？」

これが梨花の提案だった。

「例えば華奈子と春奈とか。火と水ね」

「火と水を合わせたら」

「正反対だからこそ何かができるじゃない」

それでだ。梨花は春奈に話したのだ。

「どうかしら、それって」

「ううん、そうね」

話を受けるとだ。春奈はだ。

少し考えてからだ。そのうえで梨花に対して答えた。

「それじゃあね」

「やってみるわね」

「うん、華奈子ちゃんだけでなく他の皆とも」

してみるというのだった。そうした話をしてだ。

「してみるわ」

「そうね。水と光だけでも限られるからね」

赤音も笑顔で話す。最初に春奈を誘った彼女も言うのだった。

「それじゃあここはね」

「皆が皆で」

一人がだ。それぞれの他のメンバーと組み合わせるといっただった。

そのことが決まっていた。それでだった。

六人はそれぞれ魔法を行使した。二人一組になった。

華奈子は春奈と、赤音は梨花と、そして美奈子と美樹といった組み合わせになった。そうしてなのだった。

「じゃあこれから」

「やってみましょう」

カップルが決まると話は早かった。六人共それぞれ魔法を使っていく。

六人の魔法が三組になりだった。

「こっつ？」

「こっつかしら」

「こっつじゃないかしら」

こんなことを言い合いながらだ。互いに試していくのだった。合わせた魔法をだ。

第三百七十七話

完

2
0
1
1
・
4
・
1
3

第三百七十八話

第三百七十八話 音の使い方

六人がそれぞれのカップルで、その組み合わせもその都度変えながら魔法を考えていつているとであった。その中で美奈子が言うのだった。

「私の音って」

「どうしたの？美奈子」

華奈子が今組んでいる赤音と一緒に魔法を使いながら美奈子に問うた。美奈子は美奈子で梨花と組んでだ。彼女の音の魔法を出していた。

その彼女にだ。華奈子が問うたのだ。

「急にそんなこと言って」

「うん、音って使いにくいのかしら」

首を傾げさせながらの今の美奈子の言葉だった。

「目に見えないものだから」

「そう？あたしは別にそう思わないけれど」

「じゃあ違うっていつの？」

「何ていうかね」

一呼吸置いてからだ。華奈子は美奈子に話した。

「この場合見える見えないじゃなくて」

「そうじゃなくて？」

「相手と合わせるかどうかじゃないかしら」

「そこが重要だというのだ。」

「そうじゃないかしら」

「合わせることで」

「そうよ。美奈子の魔法って音楽からそれを表現したものが出るわよね」

例えば天使の曲を奏できれば天使が出る。それが美奈子の得意とす

る魔法だ。実は彼女と紫の魔女の関係は今も謎ということになっている。

「だからね」

「目に見えるから」

「少なくともわかるから」

「こう話す華奈子だった。」

「だからそれは別にね」

「いいのね」

「そう、だから大事なのはね」

「合わせること」

「そう思うけれどね、あたしは」

「そうね」

そして美奈子もだった。双子の相方の言葉にだ。

考える顔になってだ。そのうえで答えたのだった。

「じゃあ。見える見えないは考えなくて」

「そう、合わせること」

「それが大事なのね」

「その為に今こうして皆でやってるからね」

だからだ。余計にだと話してだった。

美奈子は晴れた顔になってだ。華奈子と今のパートナーの梨花に言った。

「それじゃああらためてね」

「ええ、宜しくね」

梨花が笑顔で応えたのだった。そうしてだ。

彼女の土と美奈子の音の魔法と一緒に出される。

それが何度も繰り返されていく。本当に何度も何度もだ。

他の面々もそれを続けていきだ。

この日は結局学校の下校時間ぎりぎりまで続けたのである。その日はグラウンドで、それからは塾でだ。彼女達はカップルになっての魔法を研究していった。

第三百七十八話

完

2
0
1
1
・
4
・
1
3

第三百七十九話

第三百七十九話 続けていって

魔法の研究を続けていくとだった。やがてだ。

学校のチャイムが鳴った。それを聞いてだ。最初に言ったのは梨花だった。

「時間ね」

「早くない？」

彼女とこの時にペアを組んでいただ。赤音が残念そうに言った。

「もうって」

「仕方ないじゃない。実際に下校時間なんだから」

「うん、それはわかるけれど」

それでもだとだ。赤音は残念そうに言うのだった。

「それでもね」

「残念なのね」

「うん。今日は塾もないし」

つまりだ。塾で魔法ができないというのだ。それが赤音にとっては不満だった。

そしてその不満をだ。そのまま言うのだった。

「どうしようかしら」

「別に学校や塾でしなくてもいいんじゃないかしら」

「そうよね」

春奈の言葉にだ。美樹が頷くのだった。

「春奈ちゃんの言う通りよね」

「うん、勉強や練習は何処でもできるから」

春奈はだ。こう言うのだった。

「だから。ここじゃなくてもね」

「いいわよね」

「そうじゃないかしら」

また言う春奈だった。美樹に伝える形でだ。

「どうかしら。他の場所だね」

「うっん、それじゃあ」

赤音は春奈に言われてだ。考えを変えた。

そうしてそのうえでだ。こう皆に言うのだった。

「じゃあ何処で続きしようかしら」

「それならね」

梨花がだ。すぐに赤音に答えた。

「公園がいいわ。学校のすぐ近くあの公園ね」

「あっ、あそこね」

今度はだ。美樹が梨花に応えた。

「そうね。あそこならね」

「いいわよね、あそこなら」

「ええ、いいと思うわ」

実際にそれでいいと頷く美樹だった。そして他の面々もだ。

こうして六人はだ。今度は公園で魔法の勉強をすることになった。しかしだ。

ここでだ。赤音はそのままの服で学校を出ようとする。しかしそれは美樹に止められた。そのうえで彼女にこう言われたのだった。

「いや、まだ服着替えてないじゃない」

「あっ、体操服のままだったわ」

「それにランドセルも忘れてるから」

「そうね。それじゃあ」

「ちゃんと帰り支度してから帰らないとね」

「うっかりしてたわ」

こういうところが赤音だった。そんなこともあった。赤音はぺろりと舌を出して左目をつむって言うのだった。

「てへぺろね」

「しっかりとね」

美樹が優しい笑顔で彼女に告げてだ。そうして皆で着替えてラン

ドセルを背負って学校を後にするのだった。

第三百七十九話 完

2011・4・17

第三百八十話

第三百八十話　　てへぺろ

公園に出た一行。ここでだ。

華奈子はだ。先程の赤音の仕草をだ。美奈子にしてみても言うのだ。つた。

「こつよね」

「確かね」

左目をウィンクにして舌を出してだ。左手はチョキにして左目に添える。そうしてみせてだ。

あらためて美奈子にしてみせて。そうして話すのだった。

「何かこの動作って」

「気に入った？」

「妙に可愛くない？」

華奈子は実際にそれをしてみせながら美奈子にまた話す。

「あたし結構気に入ったわ」

「そういえば華奈子には似合うかもね」

「あつ、美奈子もそう思う？」

「うん、その動作って髪が長い方が似合う感じだから」

華奈子の髪はロングである。美奈子も長い髪が長さで言うと華奈子の方が長いのだ。それでも活発に動くの華奈子の特徴である。

「いいと思うわ」

「じゃあ時々やってみるわね」

「ええ。ただね」

「ただ？」

「あまりやり過ぎると飽きるから」

それには注意だというのだ。

「他のも覚えるとかね」

「他もなのね」

「そう、何か思いつくのがあればだけれど」

「それって何気に難しいけれど」

「とにかく同じネタの多用は避けることよ」

美奈子はギャグもわかっている。彼女はどちらかというところ吉本新喜劇派である。そこから多くのお笑いを知ってきているのである。

その彼女がだ。双子の相方に言うのである。

「それは気をつけてね」

「うん、わかったわ」

「まあとにかくよ」

美奈子はあらためて華奈子に話した。

「ちよつと面白いと思つたネタは一つ一つマークしておくべきね」

「それで実際にやってみるとね」

「そうしたらいいから。お笑いはそうして身に着けていくものだっていうから」

「魔法に似てるわね」

華奈子は美奈子のその話を聞いて述べた、

「そういうところって」

「そうかもね。実際にね」

「お笑いと魔法って同じなのね」

「っていうか結局何でもそうかも」

「何でもやってみて種類を増やして」

華奈子は首を捻りながら言う。

「で、何度も何度もやってみる」

「それ考えると本当に何でもね」

「成程ね。勉強になったわ」

「なったのね」

「新しい勉強ね」

こんな話をしてであった。

二人もだ。他のメンバーと同じくだ。公園で魔法の勉強に入るのがだった。次の場所はここだった。

第三百八十話

完

2
0
1
1
・
4
・
1
7

第三百八十一話

第三百八十一話 勉強を終えてみて

魔法の勉強の後でだ。それからだった。

華奈子達はだ。帰り道でこんな話をするのだった。

「ここからが大事なのよね」

「そうなのよね」

美奈子が美樹の今の言葉に頷いた。

「続けていくのこそが」

「そう、そうしないと魔法もできないから」

「ええ、その通りよ」

リーダーの梨花も二人に続いて言った。

「そうして毎日やっていって。そうして見つかるからね」

「うっん、魔法もあれなのね」

「そうよね。学校の勉強と同じよね」

今度はだ。赤音が華奈子の言葉に応える。

「毎日毎日していって」

「そうしないと力にならないのね」

「何でもそうじゃないかしら」

今言ったのは春奈だった。六人共それぞれ言うのだった。

「魔法やお勉強だけじゃなくて」

「結局あれなの？努力が大事なの？」

華奈子は春奈の話聞いてた。今度はこう話したのである。

「魔法でも何でも」

「そうそう、そうなのよ」

梨花はまた言った。

「音楽でもそうじゃない。積み重ねていってなのよ」

「うっん、あたしの柄じゃないわね」

華奈子にしてみればだった。どちらかという天才肌でその場で

の閃きや思いつきがいい彼女にしてみればだ。努力というものはだつた。

「何かこう。ぱつとやるつてのがいいけれど」

「じゃあ好きならやるつて考えたら？」

その彼女に言ったのは美樹である。

「こう考えてはどうかとだ。彼女にアドバイスするのである。」

「そうしたらどう？」

「それだとしてこと？」

「そう、それならどうかしら」

また華奈子に言う美樹だった。

「そう考えたらね」

「ううん、それがいいかしら」

「まあ続けるのがいいんならそれでいいんじゃないの？」

赤音は彼女らしく気軽な考えを述べた。

「それでね」

「そう考えればいいかしら」

「大事なのは続けることだから」

春奈も華奈子に話す。

「考えるのにしても。続けられる考えでいいと思っわ」

「そういうことなのかしら」

華奈子は彼女達の話の聞いてだ。首を捻りながら言うのであった。

「好きなことを続けると思えばいいのね」

「まあそうね。簡単に考えたらそれだけ楽し」

美奈子も華奈子に話す。

とりあえず続けることが大事だと話されるのだった。そしてそうした話をしていった。華奈子は赤い夕暮れの中を家に帰るのだった。

2
0
1
1
·
4
·
2
5

第三百八十二話

第三百八十二話 華奈子の決意

家に帰ってからだ。華奈子はだ。

まずは学校の宿題をしてだ。晩御飯を食べた。そうしてだ。

美奈子と一緒に風呂に入る。その中で美奈子と同じ湯舟につかりながらだ。彼女に対してこんなことを言ったのである。

「ねえ美奈子」

二人とも長い髪の毛を後ろであげて束ねている。髪を洗う時以外はそうして邪魔にならないようにしている。その中で美奈子に話したのである。

「あたし考えたんだけどね」

「どうしたの？」

「魔法好きだから」

話すのはそこからだった。美奈子の顔を側から見ながら話すのだ。

「だからね」

「続けるのね」

「うん、こう考えればいいのかしら」

「簡単に考えればそうね」

美奈子は少し考えてからだ。そうして話すのだった。

「好きだから続ける。それでいいのよ」

「しなくちゃいけないとか考えなくていいのね」

「そうして力張って続けても中々身に着かないし」

美奈子はまた華奈子に話した。そうしたものだ。

「だから好きだから続ける。それでいいじゃない」

「わかったわ。そういうことね」

「そうよ。私だってそうだし」

美奈子は今度は自分のことを話すのだった。

彼女はどうなのか。そのことを華奈子に対して話すのである。

「フルーツも好きだから続けるから」

「あつ、そういえばクラウンもそうよね」

「好きだからやってるでしょ」

「うん、じゃあそう考えてね」

「お風呂だつてそうでしょ？」

今度は今二人が一緒に入っているその話だった。華奈子はお風呂が好きだ。美奈子もだ。二人は奇麗好きでもあるのである。

「好きだから入るわよね」

「ええ、そうね」

「だからそれでいいじゃない。好きだから続けるのよ」

「何でもね」

「華奈子お勉強の方もそうなってきたでしょ」

勉強の話もする。それもだった。

「だから続けるのよ」

「続ける。そういうことね」

「それでいいから」

「わかったわ。じゃあ続けるから」

好きならだとか。こう結論を出してだった。

華奈子は浴槽から出た。それでだった。

髪を束ねた留め金を外してそれを下ろしてだ。それにシャワーをかけてだ。

濡らしてからシャンプーでその髪の毛を洗いながらだ。また美奈子に話すのだった。

「次はね」

「ええ、私ね」

「どう？一緒に洗う？」

「いいわ、華奈子が先に洗って」

こうした話もしてだった。華奈子はそう考えることにしたのだった。難しく考えることもないのであった。

第三百八十二話

完

2
0
1
1
・
4
・
2
5

第三百八十三話

第三百八十三話 博士の入浴

博士はだ。風呂も好きだった。
毎日入る。そしてだった。

「やはり風呂はあれじゃな」

「サウナですか」

「うむ、あれはいいものじゃ」

こつ小田切君にも話すのだ。研究所の風呂にはサウナもあれば水風呂もある。そして泡風呂もあるのだ。スーパー銭湯並の設備なのだ。

「汗をかいてこそじゃな」

「サウナっていいですよ」

「酒も抜けるじゃろ」

随分と危ない話になる。

「サウナに入るとのう」

「あの、お酒飲んでサウナは」

小田切君はそのことにはすぐに突っ込みを入れた。

「危ないですよ」

「危ないかのう」

「死にますから」

正論を言うのだった。

「心臓とか血管に悪くて」

「ふむ。軟弱じゃのう」

「つていうか博士いつもそれやってるんですか？」

「わしはいくら飲んでも酔わん」

話のポイントが狂っていた。

「だから酔いを醒ます必要はない」

「いえ、お酒飲んでサウナは」

「それは悪いのか？」

「こうしたことで常識が通用しない博士だった。

「はじめて聞いたぞ」

「あの、本当に死にますけれど」

「わしは不死身じゃからな」

「そういう問題じゃなくてですね」

「では本当に死ぬかどうか実験じゃな」

話が飛躍した。酒を飲んでサウナに入ると本当に死んでしまうかどうかをだ。実際に実験で確かめてみようというのである。好奇心は何時でも旺盛な博士である。

「それをするか」

「実験しなくてもわかるんじゃないんですか？」

「ついでじゃ。それで何人が暴走族でも駆除する」

結局そこから殺人に至るのである。

「よいぞよいぞ」

「いえ、全然よくないですけどね」

「わしはよいのじゃよ」

博士自身はだというのだ。

「だからいいのじゃよ」

「そういう理屈ですか」

「うむ、何でも実験して確かめることじゃ」

この部分だけは科学者の言葉だった。しかしであった。

早速街から不良やヤクザ者やチーマーや暴走族が強制連行された。

そのうえでだった。

「さて。それではじゃ」

「今からですね」

再び生体実験が行われるのだった。果たして酒を飲んでサウナに入ると本当に死ぬかどうか。その実験がはじまるのだった。

第三百八十二話

完

2
0
1
1
・
5
・
5

第三百八十四話

第三百八十四話 やっぱ

り死んだ

まずはだ。捕まえたヤクザ者なり不良なりにだった。

無理矢理にだ。アルコールを飲ませるのだった。その中で。

「うむ。メタノールも入っておったな」

「早速何人が泡吹いて死にましたよ」

早速普通に人を殺す博士だった。

しかしそのことには何一つ思わずだ。さらにだった。

「ではじゃ。ウォッカニリットル分を飲ませたな」

「ええ、っていうかウォッカそのものを飲ませましたから」

九十六パーセントのその鬼の如き酒をである。博士が飲ませたこととは言うまでもない。

「もう全員意識が怪しいですよ」

「ではその者達を全員まずは水風呂に放り込む」

まずはそれだった。

「そしてそれからじゃ」

「サウナですな」

「そして暫く経ったら水風呂に戻す。それを繰り返す」

言いながらロボットに運ばせる。そうしてだった。

冷水の風呂に放り込み骨の髄まで冷やしてからだった。

サウナに放り込む。それを繰り返した。

するとだ。残ったのは。

「一人もおらんのか」

「二十人いたんですが」

「全員死んでしまったか」

本当にものが壊れた様な感じの博士の言葉だ。

「やはり酒を飲んでサウナに入ると死ぬのじゃな」

「心臓と血管に悪いですからね」
「脳の血管が切れて死んだ者もあるな」
「急性アルコール中毒で死んだのもいますよ」
「飲み過ぎじゃな」
自分が無理矢理飲ませたことはどうでもいい博士だった。
「しかしよくわかったぞ」
「だから調べるまでもないんじゃないんですか？」
「少なくとも退屈凌ぎにはなった」
やはり人命はどうでもいい博士だった。
「ではよしとしよう」
「それで死体は」
「ふむ。今しがた造り上げたキメラの餌にしようぞ」
「またキメラですか」
「鵪じゃ」
あの頭が猿で身体が狸、手足が虎、蛇の尻尾のあの獣である。平安時代に出て来たと言われている。あまりにも有名な合成獣だ。
「それを造ったからのう」
「鵪って肉食でしたっけ」
「肉食に改造しておいて。ヤクザ者だのを襲わせる為じゃ」
「そうして食い殺させるのは言うまでもない。」
「その為にじゃよ」
「そういう風に改造したんですか」
「では早速餌をやるう」
その鵪にだというのだ。
「二十人分じゃ。食いきれんかったらそれはそれで使い道がある」
「他の獣の餌にするんですね」
「そういうことじゃよ」
やはり何でもないと口調の博士だった。人権思想は天本博士の辞書にはないのだ。

第三百八十四話

完

2011・5・5

第三百八十五話

第三百八十五話

餌に飽き足らず

サウナで殺した死体をキメラの餌にしてからだ。

博士はだ。こんなことも言うのだった。

「では。次はじゃ」

「まだ何かされるんですか」

「うむ、死体は骨だけになった」

肉は全て食われてしまった。内蔵までだ。

「そしてその骨をどうするかじゃ」

「その骨を使って何をされるんですか？」

「スケルトンにする」

ロールプレイにングゲームによく出る敵だ。動く骸骨である。

「それにしてじゃ」

「町で暴れさせるんですね」

「とにかく暴走族やヤクザ者は好かん」

只の個人的感情としてだ。博士はそうした連中を嫌っているのだ。

「だからじゃ。そういつた連中をじゃ」

「殺してから骨もですか」

「利用してやるのじゃ」

「何か残酷ですね」

「使えるものは何でも利用する」

博士のポリシーの一つでもある。

「そういうことじゃよ」

「骸骨を暴れさせる」

小田切君はそれを聞いて考える顔になった。

そのうえでだ。こう博士に言った。

「何かありきたりですね」

「そうかのう」

「博士つてもつととんでもないことするじゃないですか」

そもそもそうしたことをすることがライフワークなのだ。博士は簡単に言う人と人を驚かせることが好きなのだ。それと気に入らない者を惨殺することもだ。

「それだけなんですか、今回は」

「ううむ、では止めておくか」

博士は考えたうえで述べた。

「他のやり方をしようぞ」

「そうするんですか」

「うむ、ではじゃ」

「骨は使っんですね」

「それは絶対に使う」

死んでもまだ骨まで利用される彼等だった。

「問題はどつ使うじゃな」

「ううん、何かヤクザ者達が哀れになつてきました」

小田切君は常識の立場からこう考えた。

「死んでもそうして利用されるなんて」

「わしの偉大な研究に貢献しておるのじゃよ」

「サウナに放り込んで殺すだけじゃなくですね」

しかも他愛のない実験でだ。何十人も殺したのだ。ただし博士にそのことについての罪悪感は一切ない。博士は罪悪感を知らないのだ。

「そうして骨までもというのか」

「よいよい、わしの偉大な発明に貢献してもらつ」

「死んでもなんですね」

「死んでもじゃ」

こう話してだった。博士は骨の再利用について考えていくのだった。

第三百八十五話

完

2011.5.9

第三百八十六話

第三百八十六話

骨の使い道

博士は三秒だけ考えてだ。結論を出した。

「うむ、それではじゃ」

「どうするんですか？それで」

「骸骨を飛ばす」

そうするといふのである。

「そしてそのうえでじゃ」

「飛ばすだけじゃないですよ」

「夜の町で人前で飛ばすのじゃ」

「それで驚かせるんですね」

「些細な悪戯じゃがどうじゃ？」

「それで心臓止まる位驚く人いますよ」

小田切君が言つのも道理だった。実際に夜歩いていて目の前から骸骨が飛んで来てはだ。驚かない方が無理な話である。

そしてそれをわかってだ。博士はするといふのだ。

「それこそ」

「だからいいのじゃよ」

「まあただスケルトンを動き回らせるよりいいですね」

「しかもじゃ」

それに加えてだといふのだ。

「骸骨は光らせる」

「そうするんですか」

「うむ、青白く不気味にのう」

演出であつた。

「そしてそのうえでじゃ」

「夜の町を飛ばせるってことですね」

「どうじゃ？これはよいぞ」

「何か滅茶苦茶悪質ですね」

「悪質だからよいのじゃ」

博士の狙いはまさにそれだった。

「違うかのう」

「そうした考えに基けばですね」

「実際に基いておる」

博士は小田切君に話していく。

「そういうことじゃよ」

「じゃあ今回はそれでいくんですか」

「決まった。これでいく」

青白く光る骸骨を夜の町に飛ばすことがだ。

それを決めるとだ。すぐにだった。

博士は骸骨達を夜の町に飛ばす。勿論光らせたうえでだ。

忽ち町は大騒ぎになった。そしてであった。

博士はその大騒ぎを見てだ。楽しそうに笑うのであった。

「よいぞよいぞ」

「気に入らない奴を実験材料にしたり遊びで殺したり人を驚かせるのが本当に好きなんですな」

「我が生きがいじゃよ」

「生きがいなんですな」

「うむ、そうじゃ」

こう話してだった。博士はだ。

何処からかワインを取り出しそれを飲みながらまた言った。

「さて、祝杯じゃ」

「人が大騒ぎしていることに対してですね」

自分がしたことによってだ。やはり博士は悪戯が好きだった。かなり悪質な。

2
0
1
1
·
5
·
9

第三百八十七話

第三百八十七話　ワインを飲んだ

後で

博士はワインを飲んだ。赤ワインのボトルを二本空けた。

そのうえでだ。こんなことを小田切君に言うのだった。

「赤ワインの色はじゃ」

「それがどうかしたんですか？」

「あれじゃな。血じゃな」

こんなことを言うのであった。

「キリスト教で言うあの主の血じゃな」

「それはいいですけど」

何気にだ。悪い予感をだ。小田切君も感じていた。

そのうえでだ。こう博士に尋ねた。

「まさかと思いますが」

「そうじゃ。血じゃ」

予感的中した。残念なことに。

「その血を集めようと思うのじゃがな」

「人間の血ですね」

「そうじゃ。すっぽんの血を飲むのもいいが」

精をつける為だ。博士は他に蝮の血も飲んだりする。

「ここはやはり人間の血じゃな」

「人間、ですか」

「血を集めそのうえでじゃ」

ここからがだ。よからぬことだった。実に博士らしく。

「また何かに使う」

「それはいいですけど」

それはもうだ。諦める小田切君だった。博士が残虐な実験なり何なりするのはもういつものことだからだ。それでもう諦めて話すの

だった。

「それで血はどうして集めるんですか？やっぱり生きている人間からですよね」

「だから人間の血じゃ」

博士の返答は実に素っ気無い。

「そこいらから集めるつもりじゃ」

「そこいらからですか」

「何、不良なり暴走族なりヤクザ者は何処にでもおる」

「ここでも彼等だった。博士の嫌いなだ。」

「その連中から集めるとしようぞ」

「そうするんですね。また」

「気に入らん者はわしの崇高な実験や研究の糧になってもらう」

「そこに人権思想はない。皆無だ。」

「血を抜かれる者も浮かばれよう」

「絶対に怨んで死にますよ」

「怨めばその魂を強引に地獄に送ってしんぜよう」

「今度はそうするというのだ。」

「ではじゃ」

「早速はじめますね」

「また尋ねはする小田切君だった。最早博士が止まらないことはわかってだ。」

「そこいらのならず者を捕まえて」

「さて、いい血が手に入かのう」

「血は全部抜き取るんですね」

「一滴も残さずじゃ」

「まさにだ。そうするという博士だった。」

「そうして実際にだった。博士はだ。すぐに再び殺人をはじめのだった。尚博士にとって殺人はだ。まさにパンを食べるようなものなのだ。」

第三百八十七話

完

2011・5・17

第三百八十八話

第三百八十八話 巨大昆虫

そこいらのヤクザ者なり何なりから血を抜き取って集めることにした博士だった。しかしここで問題となることがあった。それは何かというのだ。

「博士、人を殺すのはわかったけれどさ」

「それ自体もう犯罪だけれど」

今度はライゾウとタロが博士に話す。

「それでどうやって血を集めるのかな」

「どうやってするの?」

「吸血鬼を使う」

それをだという博士だった。

「しかも実際におけるな」

「実在の吸血鬼!?!」

「それってつまり?」

「チスイコウモリか?」

「それなのかな」

ライゾウとタロはそれではないかと考えた。中南米にいて実際に動物から血を吸う蝙蝠だ。そこから狂犬病を移す恐ろしい動物である。

それではないかとだ。ライゾウとタロは考えた。しかしだった。

博士はだ。こう平然と言つのであった。

「いやいや、それでは血を抜かれる相手があつさり苦しまずに死ぬから駄目じゃ」

「相手を苦しませて血を抜くんだ」

「そうするんだ」

「そうじゃ。それでこそ面白いのじゃ」

実にだ。人の命を何とも思っていない博士である。しかもその際

には苦しめるのも忘れない。マッドサイエンティストの鑑である。

「それで今じゃ」

「うん、その血を集める存在だね」

「それって何なのかな」

「蚊じゃ」

博士がこう言うのだ。早速だった。

研究所にだ。巨大な蚊が出て来た。しかも何匹もだ。

その蚊達が研究所に出てだ。早速であった。そこいらにいるヤクザ者なり暴走族なりを襲ってだ。そうして血を吸っていくのであった。

犠牲者の身体にその針を突き刺した。一気に吸っていく。吸われた方がやまったものではなかった。

「た、助けてくれ！」

「何だよこの巨大な蚊は！」

「またあの博士か！」

「今度は昆虫かよ！」

襲われるヤクザ者なり暴走族の面々は逃げ惑うばかりだ。しかしだった。

彼等は逃げ切れずにだ。次々にだった。

身体の血をだ。一滴残らず抜かれてだ。そうしてだ。

ミイラになり死んでいく。そして博士にはだ。

蚊が集めてきた血が来る。その血はだ。

気付けばかなりの量になっていた。その量を見てだ。

博士はだ。満足していた。そのうえで言うのだった。

「うむ、かなり集ったのう」

「一体何人分集めたんだか」

「何人殺したのかな」

「百人から先は覚えておらん」

こうライゾウとタロに答える博士だった。そして日本にはだ。

干からびたヤクザ者なりチーマーの死体が幾つも転がっていた。

政府はその犠牲者の死体を見てだ。社会の屑が消えたのを喜ぶと共にだ。

博士の新たな悪行に頭を抱える。しかしそれには全く意を介さない博士だった。

第三百八十八話

2011・5・17

第三百八十九話

第三百八十九話 酒を飲みながら

博士は赤ワインを楽しみながらだった。何でもない顔でだ。

捕まえた暴走族の一人をだ。実験用のベッドに括りつけていた。

そしてそのうえでだ。横にいる小田切君にこう話すのだった。

「さて、この愚か者をじゃ」

「どうするんですか？」

「改造人間にしようかと思う」

何とでもないような顔での言葉だった。

「まずは首を回転鋸で切り落としてじゃ」

「つてそれ死にますよ」

「うむ、死ぬのう」

人が死ぬことなぞだ。博士にはどうでもいいことだ。

そのどうでもいいという感覚でだ。博士はさらに話す。

「人は首を切り落とされれば死ぬ」

「しかも一気にしなんでしょうか」

「一気にしては面白くないからのう」

人権意識は皆無だ。

「ではじゃ」

「今からはじめるんですか」

「首を切ってそれからじゃ」

首を切って終わりではないのだった。

「そこから。そうじゃな」

「改造人間にするんですよね」

「蠍と蚤と一緒にしてみるか」

そうしたものだ。かけ合わせるといつのだ。

「どうじゃ。面白いじゃろ」

「面白いつていうか」

「違うか」

「はい、この暴走族の兄ちゃんがどうなるかと知ったことではないんですね」

「社会の肩が一匹わしの偉大な研究の礎となるのじゃぞ」
博士の感覚ではそうなるのだった。

「素晴らしいことではないか」

「そう考えておられるんですね」

「うむ。では早速じゃ」

その捕まえている者をだ。どうするかというのであった。

「改造手術の開始じゃ」

「それでまずはですね」

「首をゆっくりと切り落とす」

そのことを実に楽しそうに話す。

「ではそうしようぞ」

「人を殺すことについては本当に何でもないんですね」

「そんなことを気にして偉大な研究はできんわ」

博士の言葉は変わらない。こうしてだった。

回転鋸のスイッチを押した。すると。

鋸が動きだ。それでだった。

暴走族の若い男がだ。断末魔と共に首を切り落とされてだ。殺された。

そしてそれからだった。改造手術をはじめるのであった。その改造手術をする博士に対してだ。小田切君はふと尋ねたのであった。

「ところで首を切り落とす必要性は」

「苦しみ抜いて死ぬところを見る為じゃ」

それでそうしているというのだ。何処までも非道な博士である。

2
0
1
1
·
5
·
2
5

第三百九十話

第三百九十話 改造人間の末路

暴走族の者を蠍と蚤の改造人間にした。そうしてからだ。

博士はだ。小田切君にあっさりと話した。

「さて、この改造人間をじゃ」

「どうするんですか？」

「あの半島の北の国に特攻させる」

そうさせるといのである。

「尻にロケットをつけて人間ロケットとして打ち込む」

「あの、それだと」

それを聞いてだ。小田切君は首を捻りながら博士に尋ねた。

「改造する意味なかつたんじゃ？」

「蠍と蚤の改造人間にじゃな」

「はい。そう思っんですけれど」

「まあそうかも知れんろう」

小田切君に言われてだ。博士もそのことに気付いた。

しかしだ。博士はこう言っつてそれもいいというのであつた。

「しかしわしは改造手術を楽しむことができた」

「だからいいんですか」

「そうじゃ。ならばそれでよい」

博士の趣味の一つに人体を改造手術することがある。とにかく暴走族やヤクザ者やそうした存在を実験材料にすることはだ。博士にとっては何でもないのだ。

そのことを平気で話してだつた。博士はまた言つた。

「それではその改造人間を地獄に送つてやろう」

「地獄はもう見せたんじゃ」

首を切り落としてからの改造手術のことに他ならない。

「それでもですか」

「地獄は何度でも見せてもよいからのう」

あくまでこう言っただった。博士はだ。

改造人間をその国に、しかもよりによって核兵器を開発していると言われている原子力発電所だ。撃ち込んでみせたのだった。

そうして大爆発を起こさせてからだ。博士は平気な顔で言った。

「これでよしじゃな」

「いいんですか」

「あの国が核兵器を持ってはならん」

博士は言う。しかしだった。こつも言うのだった。

「わしが持つておるのにじゃ」

「つて持つてるんですあ？核兵器」

「何か悪いのかのう」

「悪いつて。日本は核兵器は持たず、作らず、持ち込ませずじゃないですか」

「わしに法律は効かん」

無視するからだ。

「ではよいではないか」

「だからですな」

「そうじゃ。一行に構わん」

こつ言っただであった。そのことをだ。

何でもないと済ませてだ。博士が次に言う言葉は。

「さて、もう一本飲むとするか」

「ワインですな」

「楽しませてもらうとしよう」

ワインのボトルを空けてであった。

そうしてまた飲むのであった。趣味が終わった後の満足感と共に。

2
0
1
1
·
5
·
2
5

第三百九十一話

第三百九十一話 先生達の飲

むお酒

今田先生と今日子先生が飲むお酒はというと。

二人は今レストランで飲んでいた。それは。

ワインだった。赤ワインをパスタと共に楽しみながらだ。話をしていた。

「このワインは何だったかしら」

「ランブルスコよ」

今日子先生が今田先生に話す。

「イタリアのあのね」

「あのお酒なのね」

「そう、それなの」

こう話すのだ。

「甘いでしょ」

「それに発泡性が強いわね」

「どう？美味しいでしょ」

「ええ、凄くね」

今田先生はその赤ワインを飲みながら上機嫌で話す。

「何か一口飲むとそれから」

「どんどん飲めるわよね」

「甘いワイン好きなの」

今田先生は自分の好みも話した。

「パスタにも合うわね」

「だって。これイタリアのワインだから」

何故パスタと合うのか。今日子先生はその理由も話した。

「だからね」

「そうね。イタリアのワインだからね」

「合わない筈がないから」

これが今日子先生の意見だった。そしてだ。

今日子先生もだ。そのランブルスコワインを飲みながら話す。

「私もこのワインはね」

「好きなのね」

「ええ、大好きよ」

今日子先生もだった。ランブルスコワインが好きなのだ。

「飲みやすいからね」

「飲みやすいワインが一番よね」

「香ちゃんも私も甘いもの好きだしね」

このことに秘密があった。何故二人がその赤ワインを好きかだ。

「だからワインも甘いのがね」

「一番いいわよね」

「赤でも白でもね」

色はどれでもなのだった。

「甘いのが一番よね」

「辛いワインはね」

どうかというのだった。それについてはだ。

今田先生がだ。困った顔で話す。

「飲めないわよね、どうしてもね」

「私も。辛いワインはね」

「昔から。駄目なのよね」

「本当にね」

そうした話をしてだ。そのランブルスコを飲みだ。

瞬く間に一本開け。すぐにだった。

「じゃあもう一本頼む？」

「そうしよう」

先生達はまた頼む。一本開ければまた一本、それを繰り返していった。甘い赤ワインを心ゆくまで楽しみ堪能するのであった。

第三百九十一話

完

2
0
1
1
・
5
・
2
9

第三百九十二話

第三百九十二話 驚く姉妹

華奈子と美奈子はだ。先生達からワインを飲んだ話を聞いてだ。驚いてこう話すのだった。

「うちのお父さんそんなに飲まないわよね」

「お母さんもね」

美奈子が華奈子に話す。

「ワインだと二人共一本ずつね」

「それが限界よね」

「それが二人共五本ずつって」

「お酒ってそんなに飲めるのかしら」

華奈子は首を捻りながら話した。

「どうなのかしら」

「多分無理よ」

美奈子はすぐに華奈子に話した。

「私達が大人になってもね」

「お父さんもお母さんもお酒弱いからよね」

「遣伝つてあるから」

それが理由だった。

「私達は五本も飲めないと思うわ」

「そついえばあたし達の親戚つて」

そちらはどうなのか。華奈子から話した。

「あれよね。お酒強い人いないわよね」

「そつでしょ？一人もいないでしょ」

「だから。そついうのを考えたら」

「私達絶対にお酒強くないわ」

美奈子は多少残念そつに華奈子に話した。

「それはわかつておいてね」

「うん。じゃあ先生達って」

そうしたことを考えて翻って先生達のことを考えるとだった。

華奈子はだ。こう話したのだった。

「尋常じゃない位お酒強いのね」

「多分ね。ワイン五本で」

「それで全然平気だったらしいわね」

「そう、そんな人だから」

それならばだというのだ。二人はさらに話す。

「特別だと考えたらいいわ」

「わかったわ。あたし大人になっても」

「お酒はあまり飲まないようにするのね」

「だって。あれでしょ？」

華奈子はここで実に華奈子らしいことを言うのだった。その表情はいつものあっけらかんとした明るいもので。出す言葉もそうなっていた。

「お酒って楽しむ為に飲むものよね」

「そう言われてるわね」

「それだったらよ。そんなに沢山飲む必要ないじゃない」

「量の問題じゃないのね」

「だから。お酒って」

また言う華奈子だった。

「楽しむものだから」

「そうね。それじゃあね」

「滅茶苦茶飲む必要もないからね」

これが華奈子の考えだった。そして美奈子も双子の相方のその言葉にだ。穏やかで優しい笑顔になって。そのうえで頷くのだった。

2
0
1
1
·
5
·
2
2
9

第三百九十三話

第三百九十三話 今度の活

動は

博士はだ。小田切君に急にこんなことを言つて来た。

「今思いついたのじゃがな」

「今度は何ですか？」

「うむ、人間爆弾じゃ」

こんなことを言い出すのだった。

「その辺りの暴走族や不良やヤクザ者を捕まえてじゃ」

「その身体に爆弾を埋め込むんですね」

「それでわしの好きな時間に爆発させるのじゃ」

無論だ。爆発した場合は死んでしまふ。博士はそうしたこともしみにしているのだ。

そのことについてだ。博士はこつも話した。

「面白いじゃろ。どうじゃ？」

「それでどれだけ殺されるんですか？」

「気が向くままじゃ」

つまりだ。好きなだけ殺すというのだ。

「どうじゃ。面白いじゃろ」

「また酷いことを考えておられるんですね」

「楽しいことを考えておるのじゃよ」

博士にとつてはだ。あくまでそうなのだった。

それでだ。早速だった。

その辺りから適当に捕まえたヤクザ者や暴走族や不良達にだ。麻酔なぞ一切使わずにだ。爆弾を次々と埋め込んでいったのであった。埋め込まれた彼等はだ。口々にこつ言つたのだった。

「い、嫌だ！」

「俺は死にたくない！」

また言う博士だった。本当に人権思想なぞないのであった。

第三百九十二話 完

2011・6・6

第三百九十四話

第三百九十四話 爆発させる場所

ライゾウとタロがだ。今度は人間爆弾なぞという人権なぞ何一つとして配慮していない遊びを実行に移している博士にだ。こう尋ねたのだった。

「もうさ。人の命を何と思ってるんだとかは言わないからさ」「ヤクザ者とか不良とか暴走族にするし」

社会の屑だからいいとだ。二匹もそのことはいいとした。そうしてあらためてだ。博士に尋ねるのだった。

「けれど博士って無差別テロは好きじゃなかったよな」

「何か綺麗じゃないとか言ってるね」

「うむ、そうじゃ」

その通りだとだ。博士も答える。

「ああしたことをしてもじゃ。何も面白くはない」

「けれどさ。人間爆弾って人ごみの中で爆発させるよな」

「それはいいの？」

「リモコンでわしの思うままに爆発できるようにしておってじゃ」

博士はこのことをライゾウとタロに話すのだった。

「それでじゃ。そうした場所では爆発させぬ」

「けれどそのことに気付いて人ごみの中にずっといようとする奴出るぜ」

「それと。自棄になって悪いことをする奴とか」

「実は爆弾には他に細工もしてある」

博士はまた二匹に答える。

「そうした不埒者には爆弾から毒が流れる様にしておるのじゃ。その毒もわしのリモコン操作で好きな時に流れるようになっておるのじゃよ」

「毒ってやっぱり猛毒だよな」

「本当にこの博士だけは酷いよな」

「こういうことも笑顔でできるからね」

ライゾウもタロも呆れている。何はともあれ博士の新たな遊びが
はじまったのである。

第三百九十四話 完

2011・6・6

第三百九十五話

第三百九十五話 人間爆弾の恐怖

博士の悪行は続く。

ヤクザ者に暴走族を片っ端から拉致し改造手術を施したうえで爆発させて惨殺させていく。この悪魔そのものの所業に対してだ。

日本国内だけでなく世界からだ。非難の声があがった。

「幾ら無法者相手でもやっつけていいことと悪いことがある」

「あれは非道の極みではないか」

「人権を何だと思っっているのだ」

「あの様なことが許されるのか」

世界最悪のテロリストとも認識されている博士に対して次から次に抗議の声があがる。そして研究所の前では人権団体がデモを行ってきた。

「これ以上の非人道的行いを許すな！」

「人命を粗末にするな！」

「人間は爆弾じゃない！」

「絶対に許さないぞ！」

博士はそうした言葉は全く聞こえなくなる体質だ。そうしてこう言うのであった。

「彼等は何を怒っておるのじゃ」

「ですから。博士の人間爆弾についてですよ」

「何じゃ？悪いのか？」

「こんなことを言う始末である。」

「気に入らん奴を始末して何が悪いのじゃ」

「それはいつもしているというんですね」

「そうじゃ。今回は趣向を変えただけじゃ」

博士にとってはだ。本当にそれだけのことだ。

「わしが気に入らん奴を始末するなぞいつものことではないか」

「いつもになつてること自体が問題では？」

「それもわからんがな」

「そもそもここからして大いに問題があるのだった。

「とにかくじゃ」

「人間爆弾を止められますか？」

「飽きればな」

「そうしなければ止めないというのだ。博士はとりあえずは人間爆弾を楽しんでいる。その断末魔も絶望も爆発もだ。楽しんでいるのだ。」

「そしてだ。博士はこんなことも言うのだった。

「では今日もじゃ」

「爆発させるんですね」

「あのならず者国家の出先機関の中に移動させて爆発させる」

「まさにだ。テロである。」

「さて、十人程送るか」

「今日の犠牲者は住人ですか」

「とりあえずそこから増やすがのう」

「十人で終わらないというのだ。」

「まあ気が向くままじゃ」

「爆発させるんですね」

「うむ。爆弾の他にもじゃ」

「また碌でもないことを考えるのだった。」

「花火なぞもよいのう」

「空中で爆発させて殺すんですね」

「それもよいと思うが。どうじゃ？」

「また人権団体からクレームが来ますよ」

「そんなものは聞こえんからいいのじゃ」

「こうあっさりと言ってしまった。博士は爆弾だけでなく花火の製造にも取り掛かるのだった。あまりにも人権を無視した花火のだ。」

第三百九十五話

完

2
0
1
1
・
6
・
1
4

やはりこう言って終わらせる博士だった。

「とにかくじゃ」

「花火どんどん打ち上げてますね」

つまりだ。その花火の数だけだ。

「死んでますね」

「さて、今日は二百発あげるとしよう」

「二百人も殺すんですね」

「そうなるのかのう」

「立派な虐殺ですよ、これって」

「ああ、わしは虐殺も趣味じゃ」

とにかく碌な趣味を持つていないのだ。生体実験に大量破壊兵器の開発と製造、改造手術にこうした非人道的な遊戯が博士の趣味なのである。とにかく危険な人物なのだ。

その博士はだ。虐殺についてもこう言うだけだった。

「まあ。虐殺でも大輪の花となればよいではないか」

「それ、殺される方は絶対に思いませんから」

「小悪党は減らすに限る」

博士は少なくとも小悪党ではない。人類史上最悪のマッドサイエンティストである。

「小者は好かんからのう」

「そしてその小者をなんですな」

「花火にしてやっていっているのじゃよ」

「だからいいんですか」

「さて、気分も乗ってきた」

赤ワインを楽しみチーズをつまみにしながらの言葉だ。

「それではじゃ」

「それでは、ですか」

「二百では満足できません。六百じゃ」

三倍に増えた。犠牲者の数が。

「思いきり楽しむか」

「今夜だけで六百人ですか」
小田切君は冷静に言う。その目の前でだ。花火が次々に大輪を咲かせていた。命の花火を。

第三百九十六話 完

2011・6・14

第三百九十七話

第三百九十七話 花火を見て

博士の打ち上げる花火は当然の如くテレビでもネットでも取り上げられた。当無論新聞でも同じで一面にでかでかと載っていた。

その一面を見てだ。美奈子が言うのだった。

「また派手なことしたわ」

「人間爆弾に人間花火ね」

華奈子は丼飯をかき込みながら美奈子に応えた。丁度朝食の時だ。

「無茶苦茶よね」

「その無茶苦茶を頼んでね」

「それでしてるのね」

「そう、いつも通りね」

美奈子は既に食べ終えている。それでお茶を飲みながら自分の席で新聞を読んでいるのだ。

そのうえでだ。美奈子は呆れながら言った。

「いつも通りの大量殺人よ」

「それがいつも通りになるって」

「あの博士らしいわ」

こうだ。呆れた口調で華奈子に言うのだ。

「本当にね」

「そうよね。相変わらず人権無視してるわね」

「で、それでね」

「それで?」

「多分。先生から話がるわ」

こう華奈子に言うのだった。

「このことだね」

「ああ、またあたし達の出番ね」

「そういうこと。こういうこと放っておける?」

その人間爆弾や人間花火をというのだ。

「絶対に無理でしょ」

「放っておいたらそれこそ次から次に」

「そうよ。人を殺していくから」

しかも遊びでだ。博士にとってこうした虐殺も遊びなのだ。確かに相手はヤクザや暴走族だがそれでも人間であることには変わりない。

それでだとだ。美奈子は言うのだ。

「話が来ない筈がないから」

「そういうことね。それじゃあ」

「話が来ることは考えておきましょう」

「わかったわ。それじゃあ今から」

「そう、登校」

朝起きたら学校に行く。そういうことだった。

「早く食べて。それで行きましょう」

「ちょっと待ってよ。朝はしっかり食べないと」

こう言っただ。大飯をかき込み続ける華奈子だった。同時におかずも食べる。そのおかずは。

「ソーセージと目玉焼きもしっかりとね」

「何か朝からカロリー高くない？」

「そう？いつもこんな感じじゃない」

平然と返す華奈子だった。そうしてだ。

丼を空にすると。今度は。

パンを頬張る。そうしながら言う言葉は。

「これも食べてね」

「で、登校ね」

「朝食べないともたないから」

こうして朝からすっかり食べて動く華奈子だった。とにかく朝から食べて食べて食べまくってだ。彼女は一日をはじめるのである。

第三百九十七話

完

2
0
1
1
・
6
・
2
2
2

第三百九十八話

第三百九十八話 華奈子の朝

華奈子は朝からとにかく食べる。ある日はだ。

「朝からトースト六枚？」

「うん。やっぱり食べないとね」

「しかもジャムをたっぷり塗ってザワークラフトとスパムも食べてパンだけでなくだ。そうしたものも食べるのだ。そのうえだ。」

「ミルクも一リットルなのね」

「牛乳って身体にいいから」

「けれど。そんなに食べて大丈夫なの？」

「っていうかね」

ここでまた美奈子にこう言うのである。

「食べないともうそれでね」

「身体がもたないのね」

「うん、もう力が出ないから」

それでだ。朝から食べるというのだ。

「だから食べるのよ」

「そうだったのね」

「美奈子は朝あまり食べないけれど大丈夫なの？」

「普通に食べてるけれど」

ただ華奈子が異常に食べているだけだ。美奈子の食事の量は普通なのだ。彼女も朝はしっかり食べないといけないと考えているのだ。しかしだ、華奈子はあまりにもだった。

「あとフルーツだけけれど」

「今度はそれ！？」

「なければトマトある？ビタミンもちゃんと採らないと」

「人によってはトマト一個で朝御飯だけれど」

「えっ、それでもつもの？」

その話を聞いて驚く華奈子だった。

「朝トマト一個で」

「朝食欲ない人もいるし元々少食な人もいるわよ」

「うん、あたしじゃ絶対に無理ね」

華奈子はそれはどうしてもというのだった。恐ろしいものを聞いたという顔になってさえる。

「やっぱりしつかり食べないと」

「けれど華奈子って」

「あたしが？どうしたの？」

「お昼も夜もしつかりと食べてるじゃない」

美奈子が今突っ込むのはこのことだった。

「それはいいの？」

「三食しつかりと食べないと駄目じゃない」

「だからそれでいいのね」

「うん、さもないと動けないから」

だからいいというのである。

「美奈子も食べようよ、しつかりとね」

「私はしつかりと食べてるから大丈夫よ」

「そう？だといいいけれど」

だが華奈子の基準では違っていた。そうした話をしてだった。

トマトまで食べ終えて牛乳も飲み干し。そのうえで立ち上がりだ。

「じゃあ歯を磨いて顔を洗ってね」

「ええ、登校よ」

華奈子の朝はここからはじまるのだった。そして一日もだ。朝からこれでもかという位食べてそれからだ。一日派手に動き回るのがある。

2
0
1
1
·
6
·
2
2
2

第三百九十九話

第三百九十九話 体育は得意

華奈子の得意教科は何といつてもだ。体育である。

とにかく俊敏に動き回りだ。そうしてなのだ。

力も強い。男の子並の力を持っている。その握力もだ。

「鉄棒もできるのね」

「鉄棒はね」

にこりと笑って美奈子に話す。今日の授業は鉄棒なのだ。

「あれよ。握力なのよ」

「どれだけ強く長く握られているかよね」

「そうよ。だから握力なの」

また言う華奈子だった。

「それとね。後は」

「後は？」

「度胸と意地よ。懸垂だと絶対に十回してやるとか」

そうした話だというのだ。

「そういう感じね」

「意地なの」

「度胸は。もう思い切り回ること」

こつといった意味での度胸というのである。

「前にも後ろにもね」

「あと大車輪も？」

「ああ、大車輪はあたしも無理よ」

笑ってだ。それはだというのだ。

「あれできたらもう神懸りじゃない」

「夢というか憧れかしら。あれをできるようになるって」

美奈子にとってはまさにそうだった。華奈子に比べて運動神経の落ちる彼女にとっては大車輪の様な大技はだ。まさにそういったも

のなのだ。

それでこう言うのだ。しかし華奈子は笑って言うのだった。

「だからそれもね」

「大車輪も？」

「度胸よ」

「そうだといいのだ。」

「もう思いきりよく回るっていいね」

「それでできるものかしら」

「できるわよ。できるかしらじゃなくて絶対にやるって」

「そうだ。前向きになってだといふのだ。」

「そう思って回るのが大事なのよ」

「あれ、じゃあ華奈子も何時かは？」

「大車輪。やってみせるわ」

体操服の半ズボン姿で大きく後ろ回りをしてから言う華奈子だった。

「何時かね」

「何か体操選手みたいね」

「そうね。体操選手みたいに回るわ」

「度胸と意地で？」

「そう、鉄棒だからね」

「そうした意味で後ろ回りも大車輪も同じだといふのである。」

それを聞いて美奈子はだ。自分が握っている鉄棒を見てだった。

「私も意地を出して」

「やってみるのね」

「そうしてみるわ」

「こう言うってだ。美奈子も鉄棒をするのだった。」

2
0
1
1
·
6
·
2
2
8

第四百話

第四百話 後

る回り

美奈子が今からしようとしているものは。

「うつんと」

「前回はできるわよね」

華奈子が双子の姉妹に問う。

「そっちは」

「できるわ。けれど後ろ回り、逆上がりはね」

「それはまだなのね」

「あれ、難しいわよね」

困った顔で華奈子に話す美奈子だった。

「何ていうかね」

「そう？あれなんかまずよ」

「その。度胸と意地？」

「そう、それ」

まさにそれだというのだ。

「それで何とかなるものよ」

「じゃあ。思いきり上にあげればいいのね」

「自転車に乗るのと同じで」

華奈子は自転車の話もした。美奈子も自転車は乗れる。それだけの運動神経は備わっているのだ。全く駄目というわけではないのだ。

「やってたらコツもわかるし」

「コツも？」

「そう、コツもね」

それもだとは。美奈子に話すのである。

「わかるから。やっていけばね」

「じゃあ誰でもできるものなの？」

「そう。できるから」

安心していいとだ。美奈子にこんなことも話す。

「もう度胸よ」

「思いきりやって」

「そう、そして何度もやる意地ね」

その二つだった。大事なものは。

「じゃあ。早速ね」

「やってみるわね」

「あたしは見てるだけだから」

華奈子は何もしないというのだ。美奈子がやるのに任せるといっただ。

「やってみて」

「うん。思いきり上にあがって」

「そこから身体を前にやる感じでね」

やってみるといいというのだ。こう話をしてだ。

美奈子は実際に後ろ回り、つまり逆上がりは何度もしてみるのができた。

そうして何十回としているうちにだ。不意に。

それができたのだった。奇麗に回ることができた。

後ろから一回転してからだ。美奈子は驚きの顔で言った。

「今が」

「そう、後ろ回りよ」

「今みたいな感じでやればいいのね」

「そういうこと。気持ちいいでしょ」

「ええ、できたら」

そのこともわかった美奈子だった。できなかったことができた、そのことにだ。

彼女は笑顔になりそのうえでだ。もう一度回ってみるのだった。

第四百話

完

2
0
1
1
・
6
・
2
8

第四百一話

第四百一話 実は皆も

逆上がりができるようになってから。美奈子は何度もやってみた。それは学校以外でも。公園でもするのだった。

そんな彼女を見てだ。華奈子だけでなく他の皆も言っのだった。

「美奈子ちゃんも遂になのね

「できるようになったのね

「まずは春奈と赤音が言う。

「私も最初できなかったのよね

「私も

「そうそう。私もね

「できるようになるまではね

「美樹と梨花もだった。

「中々大変でね

「ふとできるようになるのよね

「何か皆もなの？」

「美奈子は四人のそうした話を聞いて言っのだった。

「最初はできなかったの

「最初からできるものじゃないから

「そうそう。自転車と同じでね

「必死にやっついていてふとできるようになるものなのよ

「身体がコツ覚えてくれてね

「四人は優しい笑みで美奈子に話す。そうだというのだ。

「だから。美奈子ちゃんもね

「身体が覚えてくれたのよ

「気付いたそれをね

「自然になのよ

「うっん、頭じゃないのね

美奈子は四人の話からこう考えたのだった。そしてそれはその通りだった。

「こういうのって」

「そうよ。ダンスだってそうじゃない」

「頭より、よね」

「リズムで。後は身体が覚えてくれるわよね」

「そうね。そういえば」

美奈子はダンスは得意だ。こちらは持ち前の音楽センスを使っただ。かなり上手にやってみせている。華奈子と同じ位できているのだ。

「じゃあ。他にも？」

「そういうことって多いわよ。身体が覚えてくれるってことはね」

「そうなのね」

美奈子はあらためて頷いて述べた。

「身体なのね。要は」

「あたしなんか特にだしね」

華奈子は笑ってこんなことも言った。

「頭で考えるよりね」

「身体で覚える、ね」

「いつもそうだから」

「そうね。頭で考えるよりもってことがあるから」

「それがわかったのね、美奈子も」

「ええ、よくね」

笑顔で華奈子の言葉にも応えられた。

美奈子にとっては逆上がりができるようになったただけではなく、その他のこともわかった、そうしたとても大事な経験となったのだ。

2
0
1
1
·
7
·
6

第四百二話

第四百二話 小田切君も

ふとだ。買い物物の帰りに夕暮れの公園の中でだ。小田切君は一緒に来ていたライゾウとタロに対してこんなことを言うのだった。

「実は僕もさ」

「んっ、何だよ」

「何かあったの？」

「子供の頃があつてね」

ブランコに座つてあんパンを食べながら彼等に話す。尚ライゾウとタロはあんパンは食べていない。普通の食パンをそれぞれ食べている。食べながら小田切君の話の聞いているのだ。

「その頃なんだけれど」

「まあ普通の子供だったんだろうな」

「博士と違つて」

「大体あの博士つて二百億歳じゃない」

ビッグバンと同時に生まれたのだ。間違つても人間のスケールではない。

「あの人に子供の頃つてあつたのかな」

「さあ。多分ないだろ」

「あつても僕達その頃いないし」

「そうした異常な話じゃなくて」

博士に常識は絶無だ。ならば異常と言つべきだった。

「だから。僕の子供の頃だけれど」

「この公園でブランコ楽しんだのかよ」

「そんなの誰でもじゃないか」

「いや、あの鉄棒でさ」

無論ここは小田切君が幼い頃遊んだ公園ではない。だがその幼い頃に遊んだ公園とこの公園を重ね合わせてだ。それで話すのだった。

「ずっと遊んだんだよ」

「それで逆上がりとかしたんだな」

「そういうことかな」

「うん、したよ」

実際にそうしたというのだった。

そして昔を懐かしむ目でだ。二匹にこんなことも言った。

「できるようになった時の喜びっていったらね」

「だよな。できないことができるようになるのってな」

「どんな小さなことでもね」

「二匹にもだ。それはわかることだった。」

「空中で宙返りとかな」

「木に登るとかね」

「そうだよな。ってどうか君達も凄いね」

「伊達に人間の言葉喋れる訳じゃないぜ」

「そういうこともできるから」

これも博士の改造の賜物だろうか。彼等は人間の言葉を喋れるだけではなかった。この辺り華奈子の使い魔になっているそれぞれの兄弟達と違っていた。

「まあ。確かに逆上がりできるようになったのってな」

「些細なことだけれど凄く嬉しかったんだね」

「あの喜びは忘れられないよ」

小田切君のその目がさらに昔を懐かしむものになる。

「子供の頃ならではだね」

「だよな。その気持ちわかるよ」

「僕達もね」

自然にだった。ライゾウもタロもその目を温かいものにさせていた。そのうえでだ。夕暮れの公園の一時を一人と二匹で過ごすのだった。

第四百二話

完

2
0
1
1
・
7
・
6

第四百三話

第四百三話 逆上がりの

後で

逆上がりができるようになって。美奈子は。

次はだ。華奈子にこんなことを言った。

「次は懸垂をね」

「それができるようになりたいの？」

「私あれ駄目なの」

つまりだ。一回もできないというのだ。

「華奈子はあるできるの？」

「懸垂ね」

「できるの？どうなの？」

「一応できるけれど」

今一つばつの悪い顔でだ。華奈子は美奈子の問いに答えた。その

答えは。

「けれどね」

「あまりできないとか？」

「六回が限度よ」

それだけだというのだ。

「それ以上はどうしてもね」

「懸垂はそれが限界なの」

「手の力はあまり強くないから」

「そうだったの？」

「そう。あたし握力とかはそんなに強くないの」

実は素早く運動新家は確かだ。しかし握力やそうしたものはないのだ。

それでだ。また話す華奈子だった。

「だから。ちよっとね」

「懸垂は苦手なの」

「そうなのよね」

こうだ。華奈子は難しい顔で美奈子に話した。

「御免、それはね」

「うん、そうなの」

「悪いけれどやるのなら一人でやって」

華奈子の言葉は今是要領を得ないものだった。

「あたしはあまりできないから」

「そうなのね」

「そういうことだから」

こう話すのだった。そんな話をした後でだ。

美奈子はまた鉄棒に向かう覚悟を決めた。しかしだった。

その時にだ。ふとだ。

華奈子が来てだ。こう言うのだった。

「考えたけれど」

「華奈子もなのね」

「うん、一緒にやろう」

これが華奈子の提案だった。

「どうせやるのならね」

「そうね。懸垂もね」

「二人でね」

この話で決まりだった。二人は懸垂もだ。二人ですることにしたのだ。

このことを決めてからだ。華奈子は美奈子にあらためて話した。

「じゃあね」

「また明日からね」

「二人で頑張ろう」

こう言っただった。また二人で向かうことを決めたのである。

第四百三話

完

2
0
1
1
・
7
・
1
1
2

第四百四話

第四百四話 博士と鉄棒

博士はだ。ふと公園の鉄棒を見てだ。小田切君にこんなことを言
った。

「そついえば運動はのう」

「されたことありますか？」

「スポーツは好きじゃ」

小田切君に対して意外な返答で応えたのだった。

「それもかなりじゃ」

「えつ、そうだったんですか」

「左様。日課にもしておるではないか」

しかもだ。ジョギング等の様に日課にしているというのだ。

「毎日のう」

「あれつ、博士つて特に何もされてませんよ」

小田切君の記憶にある限りはそうだった。

「ジョギングも筋肉トレも」

「いやいや、しておるではないか」

「散歩ですか？」

「いやいや、散歩でもない」

それでもないという博士だった。

小田切君はこの言葉に余計に首を捻ってだ。博士にあらためて問
うた。

「じゃあ何なんですか？」

「うむ、殺人じゃ」

いきなりこれだった。

「それをしておるではないか」

「殺人つてスポーツだったんですか？」

「そうではないのか？カロリーを使うぞ」

「いや、カロリーは使っても」

それでもだというのだ。

「それスポーツじゃないですから」

「違うのかのう」

「じゃあ生体実験とか発明とか開発もスポーツですか？」

「カロリーを使うからのう」

博士がスポーツと断定する基準はそこにあつた。カロリーを使うかどうかなのだ。それによつてだ。スポーツかどうかを見るのだ。

そのうえでだ。さらにだつた。

「だから殺人はスポーツじゃよ」

「その辺りのヤクザ者を殺すのつてスポーツだつたんですか」

「狩りじゃよ、狩り」

そうだともいうのだ。殺人は。

「獲物が人間であるだけじゃよ」

「それが滅茶苦茶問題なんですけれど」

「何、何の違いもないぞ」

「滅茶苦茶ありますから」

小田切君が突つ込んでもだつた。

「それつて」

「そうかのう」

「というか日課なんですな」

「今日もじゃ。朝にじゃ」

今は昼だ。つまり既に、であつた。

「その辺りの不良中学生の首を電気ノコギリで切り落としてみたが」

「それでその死体は」

「サイボーグに変えてやつたわ。中に爆弾を仕掛けてな」

そうしたというのだ。これが博士のスポーツであつた。博士のスポーツには犠牲がつきものだつた。しかもこれが日課なのである。

第四百四話

完

2
0
1
1
・
7
・
1
2

第四百五話

第四百五話 犬と猫も

華奈子と一緒にいてだ、タロとライゾウは話すのだった。

「僕達も結構以上にね」

「身体動かしてるよな」

「そっだよな」

タロはこうライゾウに話していた。

「御主人動き回る人だから」

「もう何かっていうとだからな」

「魔法を使う時も」

その時もなのだった。華奈子、ひいては二匹は。

「動くからね、御主人」

「そうそう、別に動かなくてもいいような状況でもさ」

「右に左になって」

「物凄いやから。使い魔のおいら達も」

動かないとならないというのだ。それでだ。

見ればタロの運動神経はだ。かなりのものだ。

犬だというのに木にも軽々と登りさながら忍者の如きだ。しかし

である。ライゾウはというと。

タロはライゾウのそのでっぷりとした腹を見て言った。

「また太った？」

「んっ、そうか？」

「ライゾウってひょっとしてあまり動いてないとか？」

「いや、結構動いてるぞおいらも」

自分ではこう言う。少なくともライゾウは自己評価では動いてはいる。これは事実だ。しかしそれはあくまで自己評価のことであり、実際は。

見ればだ。今もだった。

どべつと寝ている。寝ている姿はさながらなめくじだ。身体の脂肪が多いせいだ。その身体がどうにも猫よりもそれに見えるのだ。タロもだ。その彼を見て言う。

「あのさ、本当に猫じゃなくて」

「何に見えるんだよ、猫じゃなかったら」

「なめくじとかさ」

彼もまたこう言った。

「そういうのに見えるんだけれど」

「馬鹿言えよ、おいらはれっきとした猫だぜ」

「けれどさ。どう見ても」

「ったくよ、旦那も言うよな」

ライゾウは寝たまま不機嫌な声でタロに話す。

「こんな美形のおいらを捕まえてなめくじなんてよ。失礼だぜ」

「いや、悪いけれど実際に」

だが、だ。タロもまだ言うのだった。

「そう見えるから」

「なめくじにかい？本当に？」

「うん、見えるよ」 42

「そうか？おいらそんなに太ってるか？」

「またダイエツトしてみたらどうかな」

タロも真剣にアドバイスする。

「太り過ぎだと問題があるしね」

「そんなに太ってるつもりないけれどな」

「いや、結構だから」

こうライゾウに言うのだった。しかしライゾウ自身は自覚のないままだった。しかしここからだ。ライゾウのダイエツトが再びはじまるのだった。

2
0
1
1
·
7
·
2
2
2

第四百六話

第四百六話 人魂

華奈子もだ。ある日部屋の中で美奈子と一緒にいる時にその部屋の中に入って来たライゾウを上から見てだ。美奈子にこんなことを言った。

「ねえ、ライゾウってさ」

「ライゾウがどうかしたの？」

「人魂に似てない？」

「こんなことを言ったのである。」

「何かね」

「人魂ってあの漫画とかによく出て来る」

「そう、人の魂。夜にふわふわと漂ってるね」

「まさにそれだというのだ。」

「それに似てないかしら」

「そういえばそうよね」

「そしてだ。美奈子もだ。華奈子のその指摘に頷いた。

「そのうえでだ。美奈子はこんなことも言った。

「あれよね。あの有名妖怪漫画のね」

「ゲゲゲの鬼太郎とかに出て来る人魂にね」

「確かにそっくりね」

「でしょ？何かもうそっくり」

「華奈子はさらにだ。具体的にどうして似ているのかも話をした。

「ライゾウがどうしてその漫画に出て来る人魂に似ているのかをだ。

「身体のところが大きくてずんぐりしてて」

「尻尾が細くて長くてね」

「色こそ違っけれど」

「具体的に言えばライゾウはホルスタインの模様だ。顔のところ中央が白くなって灰色で二つになっている。耳は垂れている。」

だが今はその形からだ。華奈子は言うのである。

「それでも。これって」

「うん、もう本当に」

「そっくりだから」

「人魂に似た形の猫なんてはじめて見たわ」

美奈子にしてもだ。そうした猫ははじめて見たのだ。

そして何気にだ。こんなことも言った。

「やっぱり。太ってるからね」

「そうそう。ライゾウあんだね」

華奈子は自分の使い魔、平然とした顔で部屋に入って来たそのライゾウに言った。

「太り過ぎ。デブにも程度があるわよ」

「何だよ、御主人と美奈子さんまでそう言うのかよ」

「だって事実だし」

「そうよね。どう見てもね」

華奈子だけでなく美奈子も言う。二人はそれぞれの机の席から足下に来ているライゾウを見下ろしてそのうえで言うのである。

「太ってるわよね」

「まん丸になってるわ」

「まん丸って。おいらそんなに太ってるのかよ」

ライゾウはむっとした顔になって言い返す。

「それで水木さんの人魂なのかよ」

「だからね。あんた本当にデブだから」

「それは事実よね」

主の華奈子はおるか美奈子にまで言われたライゾウだった。とにかく彼が太っているという指摘は一人からも来たのだった。それは事実である。

2
0
1
1
·
7
·
2
2

第四百七話

第四百七話 ツチノコ

主達にまで太っていると言われたライゾウはだ。他には。家の廊下でだらしなく寝そべっているとだ。また華奈子にだつた。言われるのだった。

「本当にあんたってね」

「何だよ、今度は」

「あれね。あれみたいよ」

「あれって何だよ」

華奈子の方を見ることなくだ。傲慢そのものの態度で主に返す。そのライゾウにだ。華奈子はこう言った。

「ツチノコみたいな形してるわね」

「あのいるかどうかわからない蛇かよ」

「そうよ。丸々と太ってて」

とにかくそこに問題があつた。何よりもだ。

「しかも尻尾があつて。まんまじゃない」

「おいらは蛇だったのかよ」

「そうよ。ツチノコ」

また言う華奈子だった。

「それに似てるわね」

「今度はそれなんだな」

最早何を言われても特に怒ったりはしないライゾウだった。しかし表情はふてくされたものだ。それを見れば感情だけはわかつた。「ったくよ。おいらって何なんだよ」

「デブ猫」

華奈子は実にはつきりと言いつつた。

「それ以外の何でもないわ」

「太ってて悪いのかよ」

「使い魔でそれはまずいでしょ」
「いいじゃねえかよ」
相変わらずふてくされて返すライゾウだ。
「おいらがデブでも何でもよ」
「もう開き直ってるのね」
「やる時はやるからいいんだよ。それにな」
「それに？」
「おいらは頭脳派だからな」
開き直ったうえでだ。こんなことまで言うのだった。
「別にいいんだよ」
「全く。幾ら頭がよくてもね」
「デブだったら駄目だっていうのかよ」
「性格が悪いと」38
ところがだった。華奈子はだ。今度はこんなことを言うのだった。
「どうしようもないわね」
「性格かよ」
「そう、性格」
とにかくそれだというのだ。
「あんた本当に性格悪いから」
「ふん、猫は皆こんなだよ」
「またお婆ちゃんとポポちゃんに怒ってもらわよ」
「それだけは勘弁してくれ」
これだけはこのだった。ライゾウもこの二人は苦手だった。
しかしだ。態度自体は全く変えずにだった。ライゾウはそのまま
寝そべり続けてだ。まさにツチノコそのものの太った姿を華奈子に
見せ続けるのだった。

2
0
1
1
·
7
·
2
4

第四百八話

第四百八話

狼の様な

太っているライゾウに対してだ。タロは。

華奈子はこちらについてはだ。こう言うのだった。

「タロはいいのよ」

「いいのですか？僕は」

「そう。引き締まった身体しててね」

だからいいとだ。本犬に対して言う。

「犬らしくていいわ」

「実際に犬ですし」

「犬というよりは狼かしら」

話がグレードアップした。犬から狼に。

「そんな感じでいいわよ」

「狼とはまた」

「だから。スタイルいいから」

タロは甲斐犬である。甲斐犬は大きさこそ小さいのだがその外見は極めて狼に似ているのだ。そうした意味では秋田犬と同じである。

「格好いいわよ」

「有り難うございます」

「御礼はいいのよ。だって事実だから」

それでだ。華奈子はタロに話す。

そのうえでだ。彼にこんなことも言った。

「けれど。タロは随分食べてるけれど」

「それでもこのスタイルは何故かというのですね」

「やっぱりあれよね。いつも動いてるから」

タロは運動好きだ。特に散歩が趣味である。

「そのせいよね」

「多分。そうですね」

「散歩なんか一日二回だし」

その他にもだ。華奈子に付き合っただけ色々動いている。それならだつた。

「そのスタイルなのも当然よね」

「やはり動けばですね」

「そうよ。痩せるのよ」

もっと言えばスタイルを維持できるのだつた。

「犬でもね」

「大切なのはスポーツですね」

「タロは実戦派で」

今度はこんなことを言う華奈子だつた。

「そのせいね。けれど考えてもくれるし」

それも華奈子にとっては有り難かつた。

「助かるわね」

「いえ、やはりそこまで言われますと」

「いいのよ、事実なんだし」

恥ずかしがるタロにまたこう返す華奈子だつた。

「これからも頼りにしてるわよ」

「はい」

「ライゾウと一緒に」

そしてだ。華奈子は彼の名前も出したのだつた。

「二匹だね。これからも御願いな」

「わかりました」

ライゾウの名前が出るとだ。タロの尻尾が大きく動いたのだつた。それを左右にぱたぱたとさせてだ。そうして動かしていたのである。

2
0
1
1
·
4
·
2
2
4

第四百九話

第四百九話 太る理由は

ライゾウはまだ考えていた。己の肥満のことをだ。

それでだ。今日もタロにそのことを相談して言うのであった。

「食い過ぎか？ひよっとして」

「ああ、結構食べてるよね」

「キャットフード好きだけれどな」

そのだ。キャットフードもどうかというのだ。

「あれ結構カロリー多いしな」

「そうそう、硬くまとまってるからね」

「あれが悪いのか？」

「栄養はあるけれどダイエットにはね」

「よくないとだ。タロは言う。」

「だから食べてもいいけれどその分は運動しないと」

「駄目なんだな」

「ライゾウ太いやすい体質だから」

それだけにだった。

「余計に気をつけないといけないよ」

「何だよ、面倒臭いな」

「それでダイエットだけれど」

「それだよなあ。とにかく全然痩せないんだよ」

見ればライゾウの腹は相変わらず出ている。その腹を自分でも見

てだ。彼はたまりかねた顔になったうえでタロにあらためて言う。

「どうしたものだよ、これ」

「人魂とか言われたしね」

「あれが心外だよ」

彼にしてもなのだ。

「御主人も美奈子さんも言うこときついぜ」

「とにかく。食べものにも気をつけようね」
「食べてもいいけれどなんだな」
「そう。痩せたかったら食べる」
「タロはこんなことも言った。」
「その辺り大事だよ」
「痩せる為には食えってか」
「食べるべきだけれど考えてね」
「食べるというのである。タロは。」
「その辺り難しいよ」
「だよなあ。甘いものとかは」
「一番問題だから」
「ちえっ、問題だらけだぜ」
「思わずこつも言ってしまうライゾウだった。」
「こりゃ暫くは計算して食わないとな」
「そうだね。考えて食べないと」
「ダイエットにならないよな」
「そういうこと。御主人ともお話してみる？」
「御主人にもかよ」
「そう、何を食べるべきか」
「その為にもだというのだ。」
「じゃあ行こうか」
「御主人のところにかよ」
「そしてだ。タロとライゾウはだ。また華奈子のところに行くのだ」
「た。そのうえでだ。具体的に何を食べるべきなのかを話し合っ」
「た。」

2
0
1
1
·
8
·
3

第四百十話

第四百十話　ダイエット食

ライゾウはタロと共に華奈子にダイエットの為の食事の話をしに行った。場所は華奈子が美奈子と一緒にいる二人の部屋である。

そこで自分の席に座っている華奈子にだ。こう言うのだった。

「ダイエットにいい食事ないか？」

「お野菜なんかどうかしら」

「おいら猫だぜ」

華奈子の言葉にだ。ライゾウはむっとした顔で返す。

「それで野菜はないだろ」

「そうね。やっぱりね」

「キャットフードもいいけれどあれじゃ太るしな」

「栄養高いからよね」

「そつだよ。カロリーも高いから」

「カロリーね」

華奈子が反応を見せたのはそこだった。

カロリーについての知識は華奈子にもある。それでこう言うのだつた。

「じゃあ。カロリーがなくて栄養の高いの食べればいいのよ」

「そんな都合のいいのあるのかよ」

「あるわ」

華奈子はライゾウの問いにすぐに答えた。

「よかったわね。あるのよ」

「それで具体的に何だよ、それ」

「あれよ。鶏のササミよ」

「まずはこれだった。」

「それとゆで卵の白身に」

「格闘家の食い物だな、何か」

「御飯は玄米で」
白米ではなかった。断じて。
「それでどうかしら」
「凄いヘルシーな感じだな」
ライゾウも華奈子の話を聞いて言う。
「いい感じか？じゃあ」
「あとミルクは脱脂粉乳ね」
「まだあった。」
「それでかなり違うわよ」
「脱脂粉乳って確か滅茶苦茶まずいんじゃないのか？」
「今はかなり品種改良されてるから」
「だといいんだけれどな」
「じゃあそうしたメニユーに切り替えるわよ」
「言っただけにだった。華奈子はライゾウに提案した。」
「それでいいわね」
「とりあえずダイエット優先でな」
ライゾウも華奈子のその提案に頷く。こうしてだった。
方針は決まった。ダイエット食に切り替えとなった。
そこまで横に聞いてだ。タロは相棒に話した。
「後は食生活に飽きないことだね」
「それも問題になるのかよ」
「そうだよ。まあ色々カロリーが少ないもの食べてね」
「それでいらないとか」
「挫折したら何にもならないからね」
タロの言うことは的確だった。その言葉と共にだ。ライゾウのダイエットが本格的にはじまったのである。

2
0
1
1
·
8
·
3

第四百十一話

第四百十一話 豆

腐は

ライゾウはダイエット用の食事を食べ続けていた。その中でだ。ふとだ。タロに言うのだった。

「豆腐あるよな」

「ああ、御主人達がよく食べているあれだね」

「あれってカロリー少ないよな」

ライゾウが豆腐について言うのはまずこのことだった。

「しかも身体にいいんだよな」

「御主人も美奈子さんも美味しいっていうしね」

「あれ食おうかな」

ライゾウは腕ではなく前足を組んで言った。

「ダイエットによさそうだしな」

「あれは駄目だと思うよ」

しかしだ。ここであった。

タロはこう言ってだ。その豆腐を駄目だと言っのだった。

「僕達にはね」

「えっ、何でだよ」

「だってさ。豆腐って大豆から造るんだよ」

「大豆？豆だよな」

「そう、豆からね」

それから造るとだ。ライゾウに話すタロだった。

「僕達大豆は食べないじゃない」

「だよな。犬も猫もな」

肉食だ。それならばだった。

「だからそれはなしか」

「うん。確かに美味そうだけれどね」

「残念だよなあ。いって思ったんだけどな」

「犬と猫だから無理なのがね」

残念だと。タロもそこは同意するのだった。

しかしだ。ライゾウはこんなことも言った。

「御飯なら食べられるんだけどね」

「猫まんま？」

所謂白い御飯に鰹節をふりかけてそこに醤油を垂らす食べ物である。猫によくやるのでこの名前がついた。ライゾウも好物にしている。

その猫まんまなら食べられると。ライゾウは言っているのである。

「旦那も白い御飯食べたりするけれどな」

「御飯はまた特別だから」

「だから比べる意味はないか」

「そう。御飯と大豆はね」

同じ穀物でもだ。違うというのだ。

「とにかく。豆腐は諦めようよ」

「だよな。けれど本当に何かないかな」

ライゾウは豆腐は諦めてもまだ探していた。

「ダイエットにいい食べ物な」

「色々あるだろうけれどね」

「運動続けながら探すか」

「うん、まずは運動だからね」

これは忘れてはいなかった。そうした話をしてだった。

「じゃあまたな」

「走りに行こう」

二匹で町のランニングに出るのだった。何だかんだでライゾウはタロに付き添われながら真面目にダイエットを続けていた。

2
0
1
1
·
8
·
9

第四百十二話

第四百十二話 豆腐の代わりに

華奈子の耳にもだ。ライゾウが豆腐について興味を持っていたことが入った。それで、であった。

美奈子にだ。このことを相談したのである。

「やっぱり猫にお豆腐は駄目よね」

「身体の構造が違うからね」

「食べてもなのね」

「そう。猫は肉食動物だから」

犬もそうである。猫にしる犬にしてもだからなのだ。穀物や野菜を食べても人間の様にはいかなないところがあるのだ。動物によって食べ物は様々なのだ。

そのことを話してだ。美奈子はだ。

少し考える顔になってだ。こう華奈子に話した。

「けれど。御飯と一緒になら」

「いいかしら」

「ほら、よくタロやライゾウにお味噌汁かけた御飯出すじゃない」
ドッグフードやキャットフードの他にもそうしたものを食べている彼等なのだ。

「そこにお豆腐が入ったりするじゃない」

「そついえばそつね。お味噌汁の具のね」

「葱や烏賊は絶対に駄目だけれど」

葱は犬にとって、烏賊は猫にとってはよくないのだ。中毒になりたり腰が抜けてしまったりするのである。

華奈子達もそうしたものは元々食べさせていない。しかし味噌汁の具としての豆腐はというと。

「思えば普通に」

「前から出してるから」

「問題ないわね」

「御飯と一緒にね」

ここで鍵となるのは御飯だった。これがメインになるのだ。

その御飯をメインに考えながら。美奈子はさらに話す。

「リゾットとかおじやみたいにしてね」

「出せばいいわね」

「そう。あれならカロリーも少なくできるし」

下手に肉を食べさせるよりもだ。そうなるというのだ。

「だからいいと思うわ」

「そうね。じゃあそれでね」

「いく?どうするの?」

「いくわ」

華奈子はすぐに決断した。やはり決断力は確かだ。

そのうえでだ。すぐにだった。

タロとライゾウ、両方の晩御飯にだ。

御飯の上に豆腐と若布の味噌汁を出した。そうして二匹に食べさ

せるのだった。

「はい、食べてね」

「ああ、豆腐はこっしらたらか」

「僕達も食べられるんだね」

「話は聞いたわ。だから食べてみて」

こっ言っただった。二匹、とりわけライゾウに豆腐を食べさせる。

そうしてから尋ねた。

「それで味はどう?」

「あれっ、前に何度も食ったような」

「そうした味だけねど」

「だって。お豆腐のお味噌汁なら何度も御飯にかけて出してるから」

だからだ。華奈子は種明かしをする。

「そういうことなのよ」

「ああ、それでか」

「食べ慣れた味なんだ」
こうして食べてみるとだ。実は一匹は既に豆腐を知っていて食べていた。このことがわかったのだった。

第四百十二話 完

2011・8・9

第四百十三話

第四百十三話　ミルクも

豆腐を御飯と一緒に味噌汁で食べることにしたライゾウ、そしてだ。

いつも飲んでいるミルクについてもだ。タロに話した。

「ミルクって結構脂肪あるよな」

「うん、そうだよ」

「だよな。じゃあまずいか？」

「こうだ。ミルクを前にして前足を組んで言うライゾウだった。

「ダイエットには」

「ミルクは飲んだ方がいいよ」

「ああ、カルシウムだよな」

「他の栄養もあるし」

タロはミルクの栄養について話した。

「ミルクは何といても栄養の塊だから」

「飲まないとまずいか」

「ダイエットをしても」

それをしてもだというのだ。

「身体を悪くしたら意味がないよね」

「だよなあ。おいらも痩せたいけれど」

それでもだというのだ。

「身体を壊すつもりはないからな」

「そうだよな。それはないよね」

「身体を壊したら意味ないだろ」

この辺りはよくわかってしているライゾウだった。

「健康なダイエットだよ」

「運動もしながらね」

「運動もなあ。散歩の時間と距離も増やしてるし」

「毎日町中を駆けたり泳いだりね」

「してるからな」

そちらも真面目にしだしたのだ。

「それでちゃんとした栄養を摂らないとな」

「かえってまずいからね」

「じゃあミルクは仕方ないか」

その栄養を考慮しての言葉だった。

「これまで通り飲んでいくか」

「そうする？やっぱり」

「そうしようか。その分身体を動かすか」

「どうだろうね。その辺りは」

「ミルクは絶対に飲まないとな」

ライゾウはとにかくミルクを重要視していた。

それでだ。これは外せないというのだ。明らかに栄養の軸として
いる。

その軸を見てだ。さらにだった。

彼はだ。こう言ったのだった。

「カロリーなあ。それが問題なんだよな」

「栄養があつて低カロリーならね」

「いいんだけどな」

「それは同意するよ」

そしてだ。ライゾウはこんなことも言った。

「今回はいい解決案はないか」

「飲むしかないからな」

そうした話をしてだった。ライゾウはタロと一緒にミルクを飲む
のだった。ただしライゾウは猫用の、タロは犬用のミルクをそれぞ
れ飲んでいた。

2
0
1
1
·
8
·
1
5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6035b/>

対決！！天本博士対クラウン

2011年10月28日02時04分発行